

一般国道
3号

筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第4集

以来尺遺跡 I

上巻

福岡県筑紫野市大字筑紫所在遺跡の調査

1997

福岡県教育委員会

一般国道
3号 筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第4集

以^い来^{らい}尺^{じゃく}遺跡 I

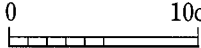

上卷

福岡県筑紫野市大字筑紫所在遺跡の調査

1997

福岡県教育委員会

以来尺遺跡 I 正誤表

ページ	行	誤	正
100	26	大型の方形2本柱床面	大型の方形2本柱住居となる。床面
216	4	1037号竪穴住居跡	1037号竪穴住居跡（遺構に関しては来年度に報告）
216	6	<u>紐擦れ</u>	使用痕
270	20	1019号掘立柱掘立柱建物跡跡	1019号掘立柱建物跡
281	第193図	8 1005号建物	8 1008号建物
321	2	遺物（第225図62～65） <u>67</u>	遺物（第225図62～65）62
324	第229図	0 10cm 	0 5cm 
329	第234図	第234図砥石実測図。2(1/3)	第234図砥石実測図。2(1/3・14は1/4)
図版119		住2— <u>11</u>	住2—10
図版120		住1— <u>37</u>	住10—31
図版122		住 <u>2</u> —11	住10—51
図版127		住 <u>2</u> —11	住24—16
図版128		住31— <u>4</u>	住31—14
図版130		住 <u>4</u> —23	住34—23
図版135 (上巻目次 下巻目次)		53・54・56・ <u>57</u> 号竪穴住居跡出土土器	53・54・56号竪穴住居跡出土土器
図版155		土1002— <u>14</u>	土1002—31



(1) 以来尺遺跡の全景 (南上空から)



(2) 同 (北上空から)



(1) 以来尺遺跡の丘陵北半部（南上空から）



(2) 同（南西上空から）



(1) 以来尺遺跡の丘陵北半部(東上空から)



(2) 同(西上空から)



(1) 以来尺遺跡の丘陵北半部（南上空から）



(2) 同（西隣りの福岡南女子高寮屋上から）



(1) 以来尺遺跡の丘陵北半部南東隅（北上空から）



(2) 同（南上空から）



(1) 以来尺遺跡の丘陵中央部（東上空から）



(2) 同（同）



(1) 以来尺遺跡の丘陵中央部（西隣りの福岡南女子高寮屋上から）
(2) 1027号掘立柱建物跡、住1459号群、住1462号群（南から）



(1) 建2011号、住1046号群 (東から)
(2) 同 (南から)

序

福岡県教育委員会では建設省九州地方建設局の委託を受けて、昭和56(1981)年度から一般国道3号線筑紫野バイパスの建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。調査は平成6年度に終了し、平成9年度に筑紫野バイパスは全線開通する予定です。

この報告書は、平成4(1992)年5月から平成7(1995)年1月まで発掘調査を実施した筑紫野市大字筑紫所在の以来尺遺跡の記録です。二日市地峡と呼ばれるこの地域は古代より筑紫神社が鎮座しており、福岡平野と筑後平野、あるいは筑前・筑後・肥前の三国を結ぶ重要な交通の要所でした。今回の調査では、弥生時代後期の集落跡を中心に、古墳時代後期の古墳と集落跡や、さらには中世の集落跡や近世の山城跡なども確認され、当時の交流の復元にとって大変意義のある成果を得ることができました。

本書が、地域間交流の研究や文化財保護思想の普及と活用の一助となれば幸甚に存じます。

発掘調査および整理作業や報告書の作成にあたって、ご協力いただいた多くの方々に深甚の謝意を表します。

平成9年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安 常喜

例 言

1. この報告書は、平成4（1992）年度から平成6（1994）年度まで福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した一般国道3号筑紫野バイパスの建設に先立つ埋蔵文化財の発掘調査記録で、一般国道3号筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第4集である。
2. 本書に記録した以来尺遺跡は筑紫野バイパス第6地点にあたり、筑紫野市大字筑紫字以来尺927・929・932番地外に所在する。調査面積・検出遺構・出土遺物は膨大なため、報告は平成8・9年度の2カ年に分けて実施する。
3. 本書に掲載した遺跡図は、馬田弘稔・水ノ江和同・齋部麻矢・秦憲二・杉原敏之が作成した。
4. 本書に掲載した遺構写真は馬田・水ノ江・齋部・秦・杉原が、遺物写真については水ノ江・齋部・秦・杉原と北岡伸一が撮影した。なお、空中写真についてはフォト大塚に委託した。
5. 出土遺物は九州歴史資料館において岩瀬正信の指導で整理・復元作業を行ない、鉄器の保存処理は九州歴史資料館横田義章が実施した。
6. 使用した方位はすべて真北である。
7. 出土遺物・写真・図面等については、すべて九州歴史資料館および福岡県文化課太宰府事務所において保管している。
8. 本書の編集は秦が、執筆は馬田・水ノ江・齋部・秦・杉原の各自が行い、担当箇所は文末に明記している。

本文目次. I (平成8年度)

I. はじめに	
1. 調査の経緯と組織	1
2. 位置と環境	3
(1) 地理的・地質的環境	3
(2) 歴史的環境	4
II. 発掘調査の記録	
1. 調査の概要	13
2. 旧石器時代の遺物	16
3. 縄紋時代の遺物	23
4. 弥生時代の遺構と遺物1—平坦面地区の調査—	31
(1) 竪穴住居跡	31
(2) 掘立柱建物跡	233
(3) 土坑	287
(4) 円形周溝状遺構	309
(5) 溝状遺構	310
(6) ピット	321
(7) その他の遺物	335

本文目次. II (平成9年度)

4. 弥生時代の遺構と遺物2—斜面地区の調査—	
5. 古墳時代の遺構と遺物	
6. 歴史時代の遺構と遺物	
III. まとめ	

巻頭図版目次

- 巻頭図版 1 (1) 以来尺遺跡の全景 (南上空から)
(2) 同 (北上空から)
- 巻頭図版 2 (1) 以来尺遺跡の丘陵北半部 (南上空から)
(2) 同 (南西上空から)
- 巻頭図版 3 (1) 以来尺遺跡の丘陵北半部 (東上空から)
(2) 同 (西上空から)
- 巻頭図版 4 (1) 以来尺遺跡の丘陵北半部 (南上空から)
(2) 同 (西隣りの福岡南女子高寮屋上から)
- 巻頭図版 5 (1) 以来尺遺跡の丘陵北半部南東隅 (北上空から)
(2) 同 中央部 (南上空から)
- 巻頭図版 6 (1) 以来尺遺跡の丘陵中央部 (東上空から)
(2) 同 (同)
- 巻頭図版 7 (1) 以来尺遺跡の丘陵中央部 (西隣りの福岡南女子高寮屋上から)
(2) 建1027号・住1459・1462号群 (南から)
- 巻頭図版 8 (1) 建2011号・住1046号群 (東から)
(2) 同 (南から)

図版目次

- 図版 1 (1) 以来尺遺跡の全景 (南上空から) (2) 同 (北上空から)
- 図版 2 (1) 以来尺遺跡の丘陵北半部 (西上空から)
(2) 同 丘陵南半部・南斜面部 (同)
- 図版 3 (1) 以来尺遺跡の丘陵南半部・南斜面部 (東上空から)
(2) 同 丘陵北半部 (同)
- 図版 4 以来尺遺跡南半部の主要遺構群〔3桁は挿図番号、1桁は付図番号〕 (西から)
- 図版 5 (1) 以来尺遺跡基本土層図. 1 (TP 7) (2) 以来尺遺跡基本土層図. 2 (TP 3)
- 図版 6 (1) 旧石器時代の石器. 1 (表) (2) 旧石器時代の石器. 1 (裏)
- 図版 7 (1) 旧石器時代の石器. 2 (表) (2) 旧石器時代の石器. 2 (裏)
- 図版 8 (1) 旧石器時代の石器. 3 (表) (2) 旧石器時代の石器. 3 (裏)

- 図版9 (1) 旧石器時代の石器. 4 (2) 旧石器時代の石器. 5
- 図版10 (1) 縄紋土器 (2) 縄紋時代の石器. 1
- 図版11 縄紋時代の石器. 2
- 図版12 (1) 縄紋時代の石器. 3 (3) 縄紋時代の石器. 4
- 図版13 (1) 市道付替え部分の調査. 1 (南東から) (2) 市道付替え部分の調査. 2 (東から)
- 図版14 (1) 1号竪穴住居跡 (東から) (2) 1号竪穴住居跡 (東から)
- 図版15 (1) 2号竪穴住居跡 (南西から) (2) 2号竪穴住居跡遺物出土状態(南から)
- 図版16 (1) 3・11号竪穴住居跡 (南から) (2) 3・11号竪穴住居跡完掘状態(南から)
- 図版17 (1) 4号竪穴住居跡 (南東から) (2) 4号竪穴住居跡屋内土坑 (南から)
- 図版18 (1) 5～9号竪穴住居跡 (南から) (2) 5号竪穴住居跡 (南西から)
- 図版19 (1) 5号竪穴住居跡遺物出土状態 (西から) (2) 5号竪穴住居跡完掘状態(南西から)
- 図版20 (1) 5号竪穴住居跡炉跡と中央溝の土層断面 (北西から)
(2) 5号竪穴住居跡屋内土坑 (東から)
- 図版21 (1) 6号竪穴住居跡 (南から) (2) 7号竪穴住居跡 (南から)
- 図版22 (1) 10号竪穴住居跡遺物出土状態 (南西から)
(2) 10号竪穴住居跡 (南西から)
- 図版23 (1) 12号竪穴住居跡 (南東から) (2) 12・13号竪穴住居跡 (南東から)
- 図版24 (1) 8～10・12・13・16号竪穴住居跡 (南から)
(2) 15・16号竪穴住居跡 (南東から)
- 図版25 (1) 17号竪穴住居跡 (南東から)
(2) 17号竪穴住居跡遺物出土状態 (北西から)
- 図版26 (1) 17・89号竪穴住居跡完掘状態 (東から)
(2) 17号竪穴住居跡炉跡と中央溝との土層断面 (北西から)
- 図版27 (1) 17号竪穴住居跡北側支柱穴 (北西から) (2) 17号竪穴住居跡南側支柱穴 (南東から)
- 図版28 (1) 18～20号竪穴住居跡 (南から) (2) 18号竪穴住居跡 (西から)
- 図版29 (1) 18号竪穴住居跡遺物出土状態 (北西から)
(2) 19号竪穴住居跡 (西から)
- 図版30 (1) 22号竪穴住居跡 (南から) (2) 24号竪穴住居跡 (南から)
- 図版31 (1) 25・26号竪穴住居跡 (南から) (2) 25・26号竪穴住居跡 (東から)
- 図版32 (1) 25号竪穴住居跡 (南東から) (2) 26号竪穴住居跡 (北西から)
- 図版33 (1) 27号竪穴住居跡 (東から) (2) 28号竪穴住居跡 (東から)
- 図版34 (1) 29号竪穴住居跡 (北から) (2) 30号竪穴住居跡 (東から)
- 図版35 (1) 31号竪穴住居跡 (南東から) (2) 31号竪穴住居跡屋内土坑(北西から)

- 図版36 (1) 32号竪穴住居跡 (東から) (2) 33号竪穴住居跡 (北東から)
- 図版37 (1) 34・35号竪穴住居跡 (東から)
(2) 34号竪穴住居跡床面の状態. 1 (北東から)
- 図版38 (1) 34号竪穴住居跡床面の状態. 2 (南東から)
(2) 34号竪穴住居跡炉跡 (北から)
- 図版39 (1) 34号竪穴住居跡遺物出土状態. 1 (北から)
(2) 34号竪穴住居跡遺物出土状態. 2 (北西から)
- 図版40 (1) 34号竪穴住居跡南側支柱穴遺物出土状態 (北西から)
(2) 34号竪穴住居跡南側支柱穴完掘状態 (北西から)
- 図版41 (1) 44号竪穴住居跡周辺 (南東から) (2) 44号竪穴住居跡 (南から)
- 図版42 (1) 44~46号竪穴住居跡 (北から) (2) 47号竪穴住居跡 (北東から)
- 図版43 (1) 48・50号竪穴住居跡 (北から) (2) 49号竪穴住居跡 (東から)
- 図版44 (1) 51号竪穴住居跡 (北西から) (2) 52号竪穴住居跡 (東から)
- 図版45 (1) 53号竪穴住居跡 (北西から) (2) 54号竪穴住居跡 (北西から)
- 図版46 (1) 56・57号竪穴住居跡 (北東から) (2) 56号竪穴住居跡屋内土坑(南東から)
- 図版47 (1) 59号竪穴住居跡遺物出土状態 (北東から)
(2) 59号竪穴住居跡 (北東から)
- 図版48 (1) 60号竪穴住居跡 (北東から) (2) 60号竪穴住居跡完掘状態(北西から)
- 図版49 (1) 62・63号竪穴住居跡 (西から) (2) 62号竪穴住居跡炉跡 (北から)
- 図版50 (1) 64・89号竪穴住居跡 (北から) (2) 65・68号竪穴住居跡 (南から)
- 図版51 (1) 66号竪穴住居跡 (南から) (2) 67号竪穴住居跡 (北から)
- 図版52 (1) 69・70号竪穴住居跡 (南西から) (2) 71号竪穴住居跡 (南東から)
- 図版53 (1) 72・73号竪穴住居跡遺物出土状態 (北西から)
(2) 72・73号竪穴住居跡 (北西から)
- 図版54 (1) 72号竪穴住居跡遺物出土状態. 1 (南から)
(2) 72号竪穴住居跡遺物出土状態. 2 (南西から)
- 図版55 (1) 74・75号竪穴住居跡 (北東から)
(2) 74号竪穴住居跡遺物出土状態 (北から)
- 図版56 (1) 76~79号竪穴住居跡 (南から)
(2) 76~79号竪穴住居跡完掘状態 (南から)
- 図版57 (1) 80号竪穴住居跡周辺 (南から) (2) 80号竪穴住居跡 (北東から)
- 図版58 (1) 80号竪穴住居跡炉跡 (北から) (2) 81号竪穴住居跡 (南から)
- 図版59 (1) 82号竪穴住居跡 (東から) (2) 82・85号竪穴住居跡 (南西から)

- 図版60 (1) 84号竪穴住居跡 (南から) (2) 86号竪穴住居跡 (北から)
- 図版61 (1) 84号竪穴住居跡遺物出土状態. 1 (南から)
(2) 84号竪穴住居跡遺物出土状態. 2 (南から)
- 図版62 (1) 82~88号竪穴住居跡 (北東から)
(2) 89号竪穴住居跡遺物出土状態 (南東から)
- 図版63 (1) 87号竪穴住居跡 (北から) (2) 88・85号竪穴住居跡 (南から)
- 図版64 (1) 90号竪穴住居跡遺物出土状態. 1 (北東から)
(2) 90号竪穴住居跡遺物出土状態. 2 (北西から)
- 図版65 (1) 90号竪穴住居跡 (北東から) (2) 90号竪穴住居跡完掘状態 (北東から)
- 図版66 (1) 91・93号竪穴住居跡 (南から)
(2) 91号竪穴住居跡遺物出土状態 (西から)
- 図版67 (1) 92号竪穴住居跡 (南西から) (2) 92号竪穴住居跡完掘状態 (西から)
- 図版68 (1) 94号竪穴住居跡 (北から) (2) 94号竪穴住居跡完掘状態 (南東から)
- 図版69 (1) 95号竪穴住居跡 (東から) (2) 99号竪穴住居跡 (南から)
- 図版70 (1) 101・102号竪穴住居跡 (南から) (2) 103・104号竪穴住居跡 (南から)
- 図版71 (1) 126号竪穴住居跡 (北西から) (2) 137号竪穴住居跡 (西から)
- 図版72 (1) 137号竪穴住居跡遺物出土状態. 1 (北から)
(2) 137号竪穴住居跡遺物出土状態. 2 (東から)
- 図版73 (1) 143号竪穴住居跡 (南西から) (2) 145号竪穴住居跡 (北から)
- 図版74 (1) 144号竪穴住居跡、2003・2004号掘立柱建物跡 (北から)
(2) 1001号竪穴住居跡 (東から)
- 図版75 (1) 1024・1025号竪穴住居跡と住1029・1031号群、住1045号・建2011号群、
住1041号群 (西から)
(2) 住1029・1031号群 [1007・1027~1029・1031~1033・1036・1038・1039・1052号竪穴住
居跡] と住1046号・建2011号群 [1026・1030・1034・1035・1042・1044・1046・1047号竪
穴住居跡、2008~2011号掘立柱建物跡] (東から)
- 図版76 (1) 住1029・1031号群 [1007・1027~1029・1031~1033・1036・1038・1039・1052号竪穴住
居跡] と住1046号・建2011号群 [1026・1030・1034・1035・1042・1044・1046・1047号竪
穴住居跡、2008~2011号掘立柱建物跡] (西から)
(2) 住1041号群と住1046号・1048号群 (南から)
- 図版77 (1) 住1041号群 [1040・1041・1048号竪穴住居跡] (北から)
(2) 住1046号・建2011号群 [1026・1030・1034・1035・1042・1044・1046・1047号竪穴住居
跡、2008~2011号掘立柱建物跡]、住1029・1031号群 [1007・1027~1029・

1031～1033・1036・1038・1039・1052号竪穴住居跡]、住1041号群（東から）

- 図版78 (1) 住1046号・建2011号群 [1026・1030・1034・1035・1042・1044・1046・1047号竪穴住居跡、2008～2011号掘立柱建物跡] と住1041号群 [1040・1041・1048号竪穴住居跡]（西から）
(2) 住1046号・建2011号群と住1029号・1031号群 [1007・1027～1029・1031～1033・1036・1038・1039・1052号竪穴住居跡]（東から）
- 図版79 (1) 住1046号・建2011号群 [1026・1030・1034・1035・1042・1044・1046・1047号竪穴住居跡、2008～2011号掘立柱建物跡] と住1029・1031号群 [1007・1027～1029・1031～1033・1036・1038・1039・1052号竪穴住居跡]・1001号竪穴住居跡（南から）
(2) 1026号竪穴住居跡（北から）
- 図版80 (1) 住1459号群 [1458・1459号竪穴住居跡]（西から）
(2) 住1460号群 [1460号A～C・1461号竪穴住居跡]（同）
- 図版81 (1) 1007号竪穴住居跡の鉄器出土状態（南から）
(2) 1048号竪穴住居跡の土器出土状態（同）
(3) 同（同）
- 図版82 (1) 1・2号掘立柱建物跡（北西から） (2) 3号掘立柱建物跡（南西から）
- 図版83 (1) 3号掘立柱建物跡柱2（北西から） (2) 3号掘立柱建物跡柱5（南西から）
- 図版84 (1) 4号掘立柱建物跡（南から） (2) 7号掘立柱建物跡（南東から）
- 図版85 (1) 9号掘立柱建物跡（南東から） (2) 10号掘立柱建物跡周辺. 1（南から）
- 図版86 (1) 10号掘立柱建物跡周辺. 2（南西から） (2) 10号掘立柱建物跡（東から）
- 図版87 (1) 10号掘立柱建物跡柱4（南から） (2) 10号掘立柱建物跡柱6（南から）
- 図版88 (1) 11号掘立柱建物跡（北東から） (2) 13・34号掘立柱建物跡（南西から）
- 図版89 (1) 11号掘立柱建物跡柱3（南から） (2) 11号掘立柱建物跡柱4（北西から）
- 図版90 (1) 14号掘立柱建物跡（南から） (2) 14号掘立柱建物跡柱3（東から）
- 図版91 (1) 15・16号掘立柱建物跡（南から） (2) 15号掘立柱建物跡柱4（南から）
- 図版92 (1) 18号掘立柱建物跡（北から） (2) 18号掘立柱建物跡柱2（南から）
- 図版93 (1) 19号掘立柱建物跡（南東から） (2) 19号掘立柱建物跡柱1（南から）
- 図版94 (1) 21号掘立柱建物跡（東から） (2) 22・24号掘立柱建物跡（南西から）
- 図版95 (1) 23号掘立柱建物跡（南から） (2) 23号掘立柱建物跡（上空から）
- 図版96 (1) 23号掘立柱建物跡柱2（北から）
(2) 23号掘立柱建物跡柱2完掘状態（北から）
- 図版97 (1) 23号掘立柱建物跡柱4（南から）
(2) 23号掘立柱建物跡柱4完掘状態（南から）

- 図版98 (1) 23号掘立柱建物跡柱5 (南から)
(2) 23号掘立柱建物跡柱5完掘状態 (南から)
- 図版99 (1) 23号掘立柱建物跡柱6 (南から)
(2) 23号掘立柱建物跡柱6完掘状態 (南から)
- 図版100 (1) 25号掘立柱建物跡 (北東から) (2) 26号掘立柱建物跡 (東から)
- 図版101 (1) 27号掘立柱建物跡 (東から) (2) 29号掘立柱建物跡 (北から)
- 図版102 (1) 30号掘立柱建物跡 (南西から) (2) 31・32号掘立柱建物跡 (南東から)
- 図版103 (1) 33号掘立柱建物跡 (南東から) (2) 35・36号掘立柱建物跡 (西から)
- 図版104 (1) 1001号掘立柱建物跡と1001号竪穴住居跡 (南から)
(2) 同 (西から)
- 図版105 (1) 建1012号群 [1011～1013号掘立柱建物跡] (南東から)
(2) 1011号掘立柱建物跡 (南東から)
- 図版106 (1) 1012号掘立柱建物跡 (南西から) (2) 1013号掘立柱建物跡 (南東から)
- 図版107 (1) 建1024号・住127号群 [1024号A・B掘立柱建物跡、127・128号竪穴住居跡]
(北東から)
(2) 建1025号・住139号群 [1025号掘立柱建物跡、138号A～C、139号A・B、140号竪穴住居跡] (西から)
- 図版108 (1) 2006号掘立柱建物跡と2号溝 [北半部：1992年度調査] (南から)
(2) 2006号掘立柱建物跡と2号溝 [北半部：1993年度調査] (同)
- 図版109 (1) ピット300 (東から) (2) ピット400 (北から)
- 図版110 (1) ピット1030 (北から) (2) 底面に粘土のあるピット1 (P2)
- 図版111 (1) 底面に粘土のあるピット2 (P180) (2) 底面に粘土のあるピット3 (P700)
- 図版112 (1) 1号土坑 (東から) (2) 1号土坑遺物出土状態 (北西から)
- 図版113 (1) 11号土坑 (北西から) (2) 11号土坑遺物出土状態 (南東から)
- 図版114 (1) 12号土坑 (北から) (2) 13号土坑 (南から)
- 図版115 (1) 1号円形周溝状遺構北半分 (南から) (2) 1号円形周溝状遺構南半分 (南から)
- 図版116 (1) 1号円形周溝状遺構遺物出土状態 (北東から)
(2) 1・2号円形周溝状遺構 (南東から)
- 図版117 2号竪穴住居跡出土土器
- 図版118 2・5号竪穴住居跡出土土器
- 図版119 5・7・10号竪穴住居跡出土土器
- 図版120 10号竪穴住居跡出土土器。1
- 図版121 10号竪穴住居跡出土土器。2

- 图版122 10·11·14·17号竖穴住居迹出土土器
- 图版123 17号竖穴住居迹出土土器. 1
- 图版124 17号竖穴住居迹出土土器. 2
- 图版125 17号竖穴住居迹出土土器. 3
- 图版126 19~21号竖穴住居迹出土土器
- 图版127 23~27·31号竖穴住居迹出土土器
- 图版128 31号竖穴住居迹出土土器
- 图版129 31~34号竖穴住居迹出土土器
- 图版130 34号竖穴住居迹出土土器
- 图版131 35·44号竖穴住居迹出土土器
- 图版132 44·47号竖穴住居迹出土土器
- 图版133 48·49号竖穴住居迹出土土器
- 图版134 50·51号竖穴住居迹出土土器
- 图版135 53·54·56·57号竖穴住居迹出土土器
- 图版136 56号竖穴住居迹出土土器
- 图版137 58·59号竖穴住居迹出土土器
- 图版138 59号竖穴住居迹出土土器
- 图版139 60·62·64·65·72号竖穴住居迹出土土器
- 图版140 72~74号竖穴住居迹出土土器
- 图版141 74~76·80号竖穴住居迹出土土器
- 图版142 80·85·86·89·90号竖穴住居迹出土土器
- 图版143 90号竖穴住居迹出土土器
- 图版144 91·93·94·96号竖穴住居迹出土土器
- 图版145 144·1001号竖穴住居迹出土土器
- 图版146 1029·1046·1048·1433·1434·1458·1461号竖穴住居迹出土土器
- 图版147 1号土坑出土土器
- 图版148 11号土坑出土土器
- 图版149 11·12号土坑出土土器
- 图版150 12号土坑出土土器
- 图版151 12号土坑·1号圆形周沟状遗构出土土器
- 图版152 1号圆形周沟状遗构出土土器
- 图版153 1002号土坑出土土器. 1
- 图版154 1002号土坑出土土器. 2

図版155	1002号土坑出土土器.	3
図版156	1002号土坑出土土器.	4
図版157	1002号土坑出土土器.	5
図版158	1001号溝出土土器.	1
図版159	1001号溝出土土器.	2
図版160	1001号溝出土土器.	3
図版161	1001号溝出土土器.	4
図版162	1001号溝出土土器.	5
図版163	1001・1003号溝出土土器	
図版164	ピット出土土器	
図版165	各種文様と調整	
図版166 (1)	石庖丁.	1
	(2)	石庖丁. 2
図版167 (1)	石庖丁.	3
	(2)	砥石. 1
図版168 (1)	砥石.	2
	(2)	砥石. 3
図版169 (1)	砥石.	4
	(2)	砥石. 5
図版170 (1)	砥石.	6
	(2)	砥石. 7
図版171 (1)	砥石.	8
	(2)	石器
図版172 (1)	石鏃	
	(2)	鉄製品. 1
図版173 (1)	鉄製品.	2
	(2)	鉄製品. 3
図版174 (1)	鉄製品.	4
	(2)	青銅製鋤先・土製品
図版175	玉類	

挿 図 目 次

第 1 図	以来尺遺跡遠景 (南から 1996年11月撮影)	1
第 2 図	国道 3 号筑紫野バイパス用地内の各調査地点 (1/10,000)	折込
第 3 図	以来尺遺跡周辺の遺跡分布—旧石器時代— (1/50,000)	5
第 4 図	以来尺遺跡周辺の遺跡分布—弥生時代前期～中期— (1/50,000)	7
第 5 図	以来尺遺跡周辺の遺跡分布—弥生時代後期— (1/50,000)	11
第 6 図	以来尺遺跡調査地点 (1/5,000)	14
第 7 図	以来尺遺跡遺構配置略図 (1/2,400)	15
第 8 図	旧石器時代調査グリッド配置 (1/1,000) と各層の傾斜状況図・基本土層図 (1/40)	17

第9図	T P 2 内石器出土状況とN-S土層図 (1/40)	18
第10図	旧石器時代石器実測図. 1 (2/3)	19
第11図	旧石器時代石器実測図. 2 (2/3)	21
第12図	旧石器時代石器実測図. 3 (2/3)	22
第13図	旧石器時代石器実測図. 4 (2/3)	23
第14図	縄紋土器実測図 (1/2 1/3)	24
第15図	縄紋時代石器実測図. 1 (2/3)	25
第16図	縄紋時代石器実測図. 2 (2/3)	26
第17図	縄紋時代石器実測図. 3 (2/3)	27
第18図	縄紋時代石器実測図. 4 (2/3)	28
第19図	縄紋時代石器実測図. 5 (2/3)	29
第20図	縄紋時代石器実測図. 6 (2/3)	30
第21図	1・3・11号竪穴住居跡実測図 (1/60)	33
第22図	2・56号竪穴住居跡実測図 (1/60)	35
第23図	4号竪穴住居跡実測図 (1/60)	36
第24図	4号竪穴住居跡屋内土坑・炉跡実測図 (1/30)	37
第25図	1・2号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	38
第26図	2号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	39
第27図	2～4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	40
第28図	5号竪穴住居跡中央溝・炉跡実測図 (1/30)	41
第29図	6号竪穴住居跡実測図 (1/60)	42
第30図	7号竪穴住居跡実測図 (1/60)	43
第31図	5・8・9号竪穴住居跡実測図 (1/60)	45
第32図	5号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	46
第33図	5～8号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	47
第34図	10号竪穴住居跡実測図 (1/60)	48
第35図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 1 (1/4)	50
第36図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 2 (1/4)	51
第37図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 3 (1/4)	52
第38図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 4 (1/4)	53
第39図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 5 (1/4)	54
第40図	12・13号竪穴住居跡実測図 (1/60)	56
第41図	14～16号竪穴住居跡実測図 (1/60)	折込

第42図	11・12・14号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	58
第43図	17号竖穴住居跡実測図 (1/60)	折込
第44図	17号竖穴住居跡北・南側主柱穴実測図 (1/30)	60
第45図	15・17号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	62
第46図	17号竖穴住居跡出土土器実測図. 1 (1/4 13は1/8)	63
第47図	17号竖穴住居跡北側主柱穴出土土器実測図. 1 (1/4)	64
第48図	17号竖穴住居跡北側主柱穴出土土器実測図. 2 (1/4 35は1/8)	65
第49図	17号竖穴住居跡北側・南側主柱穴および18号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	66
第50図	18号竖穴住居跡炉跡実測図 (1/30)	67
第51図	18号竖穴住居跡実測図 (1/60)	67
第52図	19号竖穴住居跡実測図 (1/60)	68
第53図	20・21号竖穴住居跡実測図 (1/60)	70
第54図	19・20号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	71
第55図	21・22号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	73
第56図	22号竖穴住居跡実測図 (1/60)	74
第57図	23・59号竖穴住居跡実測図 (1/60)	75
第58図	24・26号竖穴住居跡実測図 (1/60)	76
第59図	23・24号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	78
第60図	25・32・61号竖穴住居跡実測図 (1/60)	80
第61図	25・26号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	81
第62図	27号竖穴住居跡実測図 (1/60)	82
第63図	28・29号竖穴住居跡実測図 (1/60)	83
第64図	30号竖穴住居跡実測図 (1/60)	85
第65図	27～30号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	86
第66図	31・33号竖穴住居跡実測図 (1/60)	87
第67図	31号竖穴住居跡出土土器実測図. 1 (1/4)	89
第68図	31号竖穴住居跡出土土器実測図. 2 (1/6)	90
第69図	31・32号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	91
第70図	33号竖穴住居跡北側主柱穴出土土器実測図 (1/4)	92
第71図	34号竖穴住居跡南側主柱穴実測図 (1/30)	94
第72図	34号竖穴住居跡実測図 (1/60)	折込
第73図	34号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4 8は1/6)	95
第74図	35号竖穴住居跡実測図 (1/60)	96

第75图	34・35号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	97
第76图	35号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	98
第77图	44号竖穴住居跡実測図 (1/60)	101
第78图	45号竖穴住居跡実測図 (1/60)	102
第79图	46号竖穴住居跡実測図 (1/60)	103
第80图	44号竖穴住居跡出土土器実測図. 1 (1/4)	104
第81图	44号竖穴住居跡出土土器実測図. 2 (1/8)	105
第82图	44・45号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4 17・18は1/6)	106
第83图	46・47号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	107
第84图	47・97・99号竖穴住居跡実測図 (1/60)	折込
第85图	48・49号竖穴住居跡実測図 (1/60)	109
第86图	48・49号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4 4は1/6)	110
第87图	50号竖穴住居跡実測図 (1/60)	111
第88图	51・71号竖穴住居跡実測図 (1/60)	112
第89图	52号竖穴住居跡実測図 (1/60)	114
第90图	50・51号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	115
第91图	51・52号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	116
第92图	54・69号竖穴住居跡実測図 (1/60)	117
第93图	53・55号竖穴住居跡実測図 (1/60)	折込
第94图	53・54号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	119
第95图	56号竖穴住居跡出土土器実測図. 1 (1/4)	120
第96图	56号竖穴住居跡出土土器実測図. 2 (1/4 1/6)	121
第97图	57・58号竖穴住居跡実測図 (1/60)	122
第98图	58号竖穴住居跡南側主柱穴実測図 (1/30)	123
第99图	59号竖穴住居跡南側主柱穴実測図 (1/30)	123
第100图	57~59号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	125
第101图	59号竖穴住居跡出土土器実測図. 1 (1/4)	126
第102图	59号竖穴住居跡出土土器実測図. 2 (1/4 22~26は1/6)	127
第103图	60号竖穴住居跡実測図 (1/60)	128
第104图	59~61号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	130
第105图	62号竖穴住居跡炉跡実測図 (1/60)	131
第106图	62・63号竖穴住居跡実測図 (1/60)	132
第107图	64・87号竖穴住居跡実測図 (1/60)	折込

第108图	64号竖穴住居跡炉跡実測図 (1/30)	133
第109图	62~64号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	134
第110图	65号竖穴住居跡実測図 (1/60)	135
第111图	66・67号竖穴住居跡実測図 (1/60)	136
第112图	66・67号竖穴住居跡炉跡実測図 (1/30)	137
第113图	68号竖穴住居跡実測図 (1/60)	138
第114图	65~67・69号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	139
第115图	72号竖穴住居跡実測図 (1/60)	140
第116图	70・73号竖穴住居跡実測図 (1/60)	142
第117图	72号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	143
第118图	72号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	144
第119图	74・75号竖穴住居跡実測図 (1/60)	146
第120图	76号竖穴住居跡実測図 (1/60)	147
第121图	72~74号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	149
第122图	74号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4 13は1/6)	150
第123图	75・76号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	151
第124图	77・78号竖穴住居跡実測図 (1/60)	152
第125图	79号竖穴住居跡実測図 (1/60)	153
第126图	80号竖穴住居跡実測図 (1/60)	154
第127图	81・84・86号竖穴住居跡実測図 (1/60)	折込
第128图	82号竖穴住居跡実測図 (1/60)	156
第129图	85・88号竖穴住居跡実測図 (1/60)	158
第130图	89・90号竖穴住居跡実測図 (1/60)	159
第131图	76・80号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	162
第132图	81~83・85・86号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	163
第133图	87~89号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	164
第134图	90号竖穴住居跡出土土器実測図. 1 (1/4)	165
第135图	90号竖穴住居跡出土土器実測図. 2 (1/4)	166
第136图	90号竖穴住居跡出土土器実測図. 3 (1/4 31は1/6)	167
第137图	91~93号竖穴住居跡実測図 (1/60)	169
第138图	94号竖穴住居跡実測図 (1/60)	170
第139图	91号竖穴住居跡出土土器実測図. 1 (1/4)	172
第140图	91号竖穴住居跡出土土器実測図. 2 (1/4)	173

第141図	91～94号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	174
第142図	94～98号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	176
第143図	95・100号竖穴住居跡実測図 (1/60)	177
第144図	101～104号竖穴住居跡実測図 (1/60)	178
第145図	126・129号竖穴住居跡実測図 (1/60)	180
第146図	99・101・103・126・129号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	181
第147図	137・139号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	182
第148図	137号竖穴住居跡実測図 (1/60)	183
第149図	138～140号竖穴住居跡実測図 (1/60)	184
第150図	141・142・145号竖穴住居跡実測図 (1/60)	186
第151図	143号竖穴住居跡実測図 (1/60)	187
第152図	140・141・143号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	188
第153図	住居の主柱筋・計測トノボ位置模式図	191
第154図	住居施設の統一番号模式図	196
第155図	1001号A・B住居実測図 (1/60)	折込
第156図	144号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	201
第157図	1001号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	202
第158図	1002・1024・1026・1028・1029・1030・1031・1034・1035・1036号竖穴住居跡出土土器実測図(1/4)	206
第159図	住1041号群 (1040・1041・1048号竖穴住居跡) 実測図 (1/60)	折込
第160図	1046・1047・1048・1051号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	220
第161図	住1434号群 (1432～1434号竖穴住居跡) 実測図 (1/60)	222
第162図	1433・1434・1458号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	225
第163図	住1459号群(1458A～C1459号竖穴住居跡)・住1460号群(1460A～C・1461号竖穴住居跡) 実測図(1/60)	折込
第164図	住1462号群 (1458A・B・1463号竖穴住居跡) 実測図 (1/60)	230
第165図	1460～1462・1464～1466号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	232
第166図	1・2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	234
第167図	3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	235
第168図	4号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	237
第169図	7・8号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	238
第170図	9号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	239
第171図	10号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	折込
第172図	11・12号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	242
第173図	13・34号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	243

第174图	14号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	244
第175图	15・16号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	245
第176图	17~20号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	248
第177图	23号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	折込
第178图	21・25号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	252
第179图	22・24号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	253
第180图	26号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	255
第181图	27・28号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	256
第182图	30・33号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	257
第183图	31・32号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	259
第184图	35・36号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	261
第185图	1~14号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/4)	262
第186图	22~31号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/4)	263
第187图	33・35・36号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/4)	264
第188图	37・38号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	265
第189图	1001号A・B掘立柱建物跡実測図 (1/60)	266
第190图	建1012号群 (1011~1013号掘立柱建物跡) 実測図 (1/60)	折込
第191图	建1014号群 (1014・1020・1021号掘立柱建物跡) 実測図 (1/60)	折込
第192图	1027号A・B掘立柱建物跡実測図 (1/60)	274
第193图	1002~2007号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/4)	281
第194图	1号土坑出土青銅製鋤先実測図 (1/2)	287
第195图	1・11号土坑実測図 (1/30)	288
第196图	12号土坑実測図 (1/30)	290
第197图	1号土坑出土土器実測図 (1/4)	291
第198图	1・11号土坑出土土器実測図 (1/4 20は1/6)	292
第199图	11号土坑出土土器実測図. 1 (1/4)	293
第200图	11号土坑出土土器実測図. 2 (1/4)	294
第201图	11号土坑出土土器実測図. 3 (1/4)	295
第202图	11号土坑出土土器実測図. 4 (1/4)	296
第203图	13号土坑実測図 (1/30)	296
第204图	12号土坑出土土器実測図. 1 (1/4)	297
第205图	12号土坑出土土器実測図. 2 (1/4)	298
第206图	12号土坑出土土器実測図. 3 (1/4 83は1/6)	299

第207図	12号土坑出土土器実測図. 4 (1/4)	300
第208図	13号土坑出土土器実測図 (1/4)	301
第209図	1002号土坑出土土器実測図. 1 (1/4)	302
第210図	1002号土坑出土土器実測図. 2 (1/6)	303
第211図	1002号土坑出土土器実測図. 3 (1/4)	304
第212図	1002号土坑出土土器実測図. 4 (1/4)	305
第213図	1002号土坑出土土器実測図. 5 (1/4 25~27は1/6)	306
第214図	1002号土坑出土土器実測図. 6 (1/4)	307
第215図	1002号土坑出土土器実測図. 7 (1/4)	308
第216図	1・2号円形周溝状遺構実測図 (1/60)	折込
第217図	1号円形周溝状遺構出土土器実測図. 1 (1/4)	311
第218図	1号円形周溝状遺構出土土器実測図. 2 (1/4 15は1/6)	312
第219図	1号円形周溝状遺構出土土器実測図. 3 (1/4)	313
第220図	1・2号円形周溝状遺構出土土器実測図 (1/4)	314
第221図	1001号溝上層出土土器実測図. 1 (1/4)	316
第222図	1001号溝上層出土土器実測図. 2 (1/4)	317
第223図	1001号溝上層出土土器実測図. 3 (1/4、1/6)	318
第224図	1001号溝上・下層出土土器実測図. 4 (1/4)	319
第225図	1001号下層・1003・1004号溝出土土器実測図. 5 (1/4)	320
第226図	ピット実測図 (1/30)	322
第227図	ピット出土土器実測図 (1/4)	323
第228図	包含層出土土器実測図 (1/4)	324
第229図	土製品実測図 (1/2)	324
第230図	石庖丁実測図. 1 (1/2)	325
第231図	石庖丁実測図. 2 (1/2)	326
第232図	石庖丁実測図. 3 (1/2)	327
第233図	砥石実測図. 1 (1/3)	328
第234図	砥石実測図. 2 (1/3)	329
第235図	砥石実測図. 3 (1/3)	330
第236図	砥石実測図. 4 (1/3)	331
第237図	砥石実測図. 5 (1/3)	332
第238図	砥石実測図. 6 (1/3)	333
第239図	砥石実測図. 7 (1/3)	334

第240図	砥石実測図. 8 (1/3)	335
第241図	石鏃実測図 (2/3)	336
第242図	その他の石器実測図 (1/3)	337
第243図	鉄器実測図 (1/2)	338
第244図	鉄器実測図 (1/2)	339
第245図	鉄器実測図 (1/3)	340
第246図	144号竪穴住居跡出土玉類実測図 (1/1)	341
第247図	144号竪穴住居跡およびその他の玉類実測図 (1/1)	342

目 次

表 1	竪穴住居跡の模式観察表	197
表 2	旧石器時代の石器観察表	343
表 3	縄紋時代の石器観察表	344
表 4	144号A竪穴住居跡計測表	345
表 5	144号B竪穴住居跡計測表	345
表 6	144号C竪穴住居跡計測表	346
表 7	1001号B竪穴住居跡計測表	346
表 8	1001号A竪穴住居跡計測表	347
表 9	1007号竪穴住居跡計測表	347
表10	1024号A竪穴住居跡計測表	348
表11	1024号B竪穴住居跡計測表	348
表12	1025号竪穴住居跡計測表	349
表13	1026号A竪穴住居跡計測表	349
表14	1026号B竪穴住居跡計測表	350
表15	1027号竪穴住居跡計測表	350
表16	1028号竪穴住居跡計測表	351
表17	1029(1033)号竪穴住居跡計測表	351
表18	1030(1043)号竪穴住居跡計測表	352
表19	1031号A竪穴住居跡計測表	352
表20	1031号B竪穴住居跡計測表	353
表21	1032(1053)号竪穴住居跡計測表	353

表22	1034号豎穴住居跡計測表	354
表23	1035号A豎穴住居跡計測表	354
表24	1035号B豎穴住居跡計測表	355
表25	1036号豎穴住居跡計測表	355
表26	1038号豎穴住居跡計測表	356
表27	1039号豎穴住居跡計測表	356
表28	1040号豎穴住居跡計測表	357
表29	1041号豎穴住居跡計測表	357
表30	1042号豎穴住居跡計測表	358
表31	1044号豎穴住居跡計測表	358
表32	1046号豎穴住居跡計測表	359
表33	1047号豎穴住居跡計測表	359
表34	1048号豎穴住居跡計測表	360
表35	1052号豎穴住居跡計測表	360
表36	1432号豎穴住居跡計測表	361
表37	1433号豎穴住居跡計測表	361
表38	1434号豎穴住居跡計測表	362
表39	1458 A号豎穴住居跡計測表	362
表40	1458 B号豎穴住居跡計測表	363
表41	1458 C号豎穴住居跡計測表	363
表42	1459号豎穴住居跡計測表	364
表43	1460 A号豎穴住居跡計測表	364
表44	1460 B号豎穴住居跡計測表	365
表45	1460 C号豎穴住居跡計測表	365
表46	1461号豎穴住居跡計測表	366
表47	1462 A号豎穴住居跡計測表	366
表48	1462 B号豎穴住居跡計測表	367
表49	1463号豎穴住居跡計測表	367
表50	1001号A掘立柱建物跡計測表	368
表51	1001号B掘立柱建物跡計測表	368
表52	1011号掘立柱建物跡計測表	369
表53	1012号掘立柱建物跡計測表	369
表54	1013号掘立柱建物跡計測表	370

表55	1014号掘立柱建物跡計測表	370
表56	1015号掘立柱建物跡計測表	371
表57	1016号A掘立柱建物跡計測表	371
表58	1016号B掘立柱建物跡計測表	372
表59	1017号A掘立柱建物跡計測表	372
表60	1017号B掘立柱建物跡計測表	373
表61	1018号掘立柱建物跡計測表	373
表62	1020号掘立柱建物跡計測表	374
表63	1021号掘立柱建物跡計測表	374
表64	1024号A掘立柱建物跡計測表	375
表65	1024号B掘立柱建物跡計測表	375
表66	1025号掘立柱建物跡計測表	376
表67	1027号A掘立柱建物跡計測表	376
表68	1027号B掘立柱建物跡計測表	377
表69	2002号掘立柱建物跡計測表	377
表70	2003号掘立柱建物跡計測表	378
表71	2004号掘立柱建物跡計測表	378
表72	2005号掘立柱建物跡計測表	379
表73	2006号掘立柱建物跡計測表	379
表74	2007号掘立柱建物跡計測表	380
表75	2008号掘立柱建物跡計測表	380
表76	2009号掘立柱建物跡計測表	381
表77	2010号掘立柱建物跡計測表	381
表78	2011号掘立柱建物跡計測表	382
表79	2012号掘立柱建物跡(案)計測表	382
表80	玉類計測表1	383
表81	玉類計測表2	384
表82	玉類計測表3	385
表83	玉類計測表4	386
表84	玉類計測表5	387

付 図 目 次

- 付図 1 以来尺遺跡遺構配置図 (1/200)
- 付図 2 建2002号群・住144号群・1025号竪穴住居跡実測図 (1/60)
(2002～2004号掘立柱建物跡・144号A～C・1024号A・B・1025号竪穴住居跡)
- 付図 3 A 建2011号群・住1046号群実測図① (1/60)
(2008～2011号掘立柱建物跡・1026号A・B・1030・1034・1035・1042・1044・1046・1047号竪穴住居跡)
- 付図 3 B 建2011号群・住1046号群実測図② (1/60)
(2008～2011号掘立柱建物・1026号A・B・1030・1034・1035・1042・1044・1046・1047号竪穴住居跡)
- 付図 3 C 建2011号群・住1046号群実測図③ (1/60)
(2008～2011号掘立柱建物跡・1026号A・B・1030・1034・1035・1042・1044・1046号竪穴住居跡)
- 付図 4 住1029・1031号群実測図 (1/60)
(1007・1027～1029・1031号A・B・1032・1033・1036・1038・1039・1052号竪穴住居跡)
- 付図 5 建2005号群・137号竪穴住居跡実測図 (1/60)
(1015・1016号A・B・1017号A・B・1018・2005～2007・2012号掘立柱建物跡、
2～4・11・21・137号竪穴住居跡・2～4号溝)
- 付図 6 建1025号群・住139号群 (1024・1025号掘立柱建物跡、127・128・138～140号
竪穴住居跡) 実測図 (1/60)

I はじめに

1. 調査の経緯と組織

一般国道3号筑紫野バイパスは同福岡南バイパス(福岡市東区二又瀬～筑紫野市永岡：19.08km)の後を受け、昭和47年度から建設に関わる調査が始まり、翌48年度から事業化した大規模なバイパスである。筑紫野市永岡から佐賀県三養基郡基山町白坂までの総延長4.3kmは福岡市と久留米市のほぼ中間地帯に相当し、九州最大のベッドタウンである「筑紫野小郡ニュータウン」の中心地として、また一般国道200号線冷水有料道路および山家バイパスとの合流地点として、さらには鳥栖筑紫野有料道路の起点として、交通上極めて重要な位置関係にある。工事は昭和59年度に着手され、昭和62年4月には筑紫野市原田～佐賀県基山町白坂間の延長2.04kmを暫定2車線で供用開始しており、残り筑紫野市永岡～原田間も平成9年度には供用開始予定となっている。

さて、この筑紫野バイパスの建設に先立ち、建設省九州地方建設局福岡工事事務所から福岡県教育庁指導第二部文化課に当該地の埋蔵文化財調査に関する依頼があり、文化課は14カ所(地点)の文化財包蔵推定地を昭和51年度までに提示・回答した。そして、建設省福岡工事事務所との協議の結果、供用開始を優先させる筑紫野市原田～佐賀県基山町白坂間(第7～14地点)の調査を先行させることとなった。発掘調査は昭和56年度から59年度までの4ヶ年に亘って実施され、その成果は『一般国道3号筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 合の原遺跡』(佐々木隆彦編 福岡県教育委員会1986)として纏められている。

第1～6地点(筑紫野市永岡～筑紫)の調査については平成2年度に始まり平成6年度をも



第1図 以来尺遺跡遠景(南から 1996年11月撮影)

って終了した。その所在地および調査期間等については下記の通りである。なお、これらの調査に先立ち、バイパス路線内（第4地点）にあった九州電力の鉄塔の移転地区の調査が平成2年度に実施されている（第2図）。

第1地点	^{もろた かんづか} 諸田仮塚遺跡	筑紫野市大字諸田字仮塚および大字永岡字原 平成2年8月～平成3年4月（平成9年度報告）
第2地点	^{かんづかみなみ} 仮塚南遺跡	筑紫野市大字諸田字仮塚 平成3年4月～平成3年11月（平成7年3月報告）
第3地点	^{くらら} 久良々遺跡	筑紫野市大字筑紫字久良々 平成5年6月～平成5年10月（平成7年3月報告）
第4・5地点	^{くらし} 倉良遺跡	筑紫野市大字筑紫字倉良・天神田 平成4年2月～平成4年5月（平成7年3月報告）
鉄塔移転地区	^{てんじんだ} 天神田遺跡	筑紫野市大字筑紫字天神田 平成2年5月～平成2年6月（平成7年3月報告）
第6地点	^{いらいじやく} 以来尺遺跡	筑紫野市大字筑紫字以来尺 平成4年5月～平成7年1月（平成8・9年度報告）

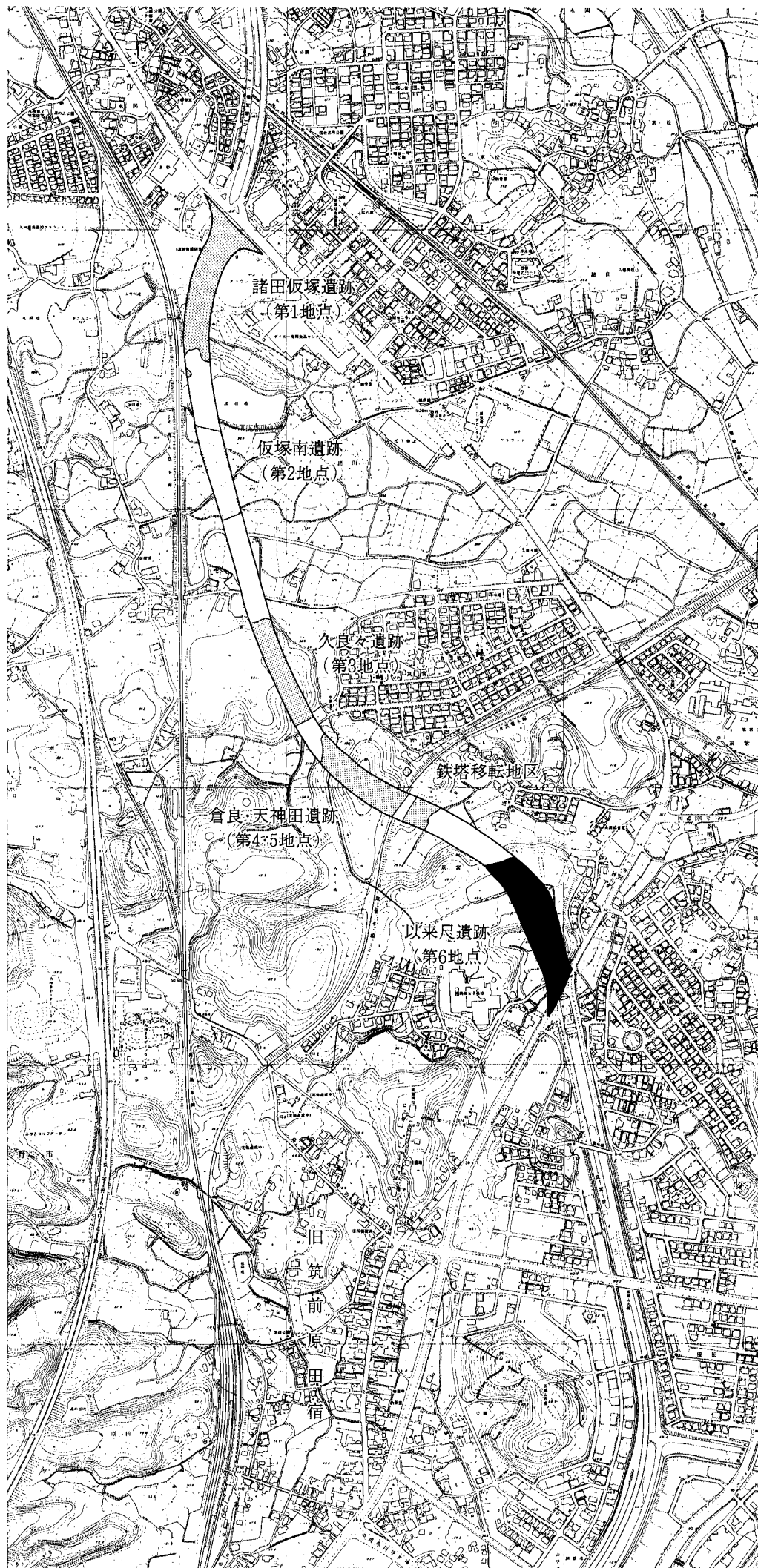
なお、平成4～6年度の発掘調査と平成8年度の報告書作成にあたっての組織と関係者は下記の通りである。

建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所

	平成4年度	平成5年度	平成6年度	平成7年度	平成8年度
事務所長	清水 英治	長谷部正和	長谷部正和	佐竹 芳郎	佐竹 芳郎
副所長	高場 正富	中空 進	中空 進	中空 進	緒方 良一
	宮崎 鴨隆	宮崎 鴨隆	中馬 昌昭	緒方 良一	藤並 之生
建設監督官	池田 勝美	野鶴 博任	野鶴 博任	松尾 義信	松尾 義信
	岡山 一則	平川 澄雄	平川 澄雄	山川 武春	山川 武春
調査第二課長	尾林 一字	西原 廣寿	西原 広寿	西原 広寿	田中 義高
調査係長	島 義博	島 義博	芹口 臣也	芹口 臣也	鶴 敏信
建設技官	松木 厚廣	松木 厚廣	桜井 俊郎	島田 隆一	島田 隆一
工務課長	久原 義宜	久原 義宜	淵 幸一	淵 幸一	淵 幸一
工務第一係長	田中 秀明	田中 秀明	逆瀬川方久	黒木 俊彦	黒木 俊彦
工務第三係長	西島 正男	逆瀬川方久	田口 仁	田口 仁	田口 仁

福岡県教育委員会

	平成4年度	平成5年度	平成6年度	平成7年度	平成8年度
総括					
教育長	光安 常喜	光安 常喜	光安 常喜	光安 常喜	光安 常喜
教育次長	月盛清三郎	樋口 修資	樋口 修資	松枝 功	松枝 功
指導第二部長	松枝 功	丸林 茂夫	丸林 茂夫	丸林 茂夫	竹若 幸二
文化課長	森山 良一	森山 良一	松尾 正俊	松尾 正俊	松尾正俊・石松好雄
参事兼文化財保護室長	柳田 康雄	柳田 康雄	柳田 康雄	柳田 康雄	柳田 康雄
課長補佐	石川 元彬	清水 圭輔	清水 圭輔	元永 浩士	元永 浩士
課長技術補佐					井上 裕弘



第2図 国道3号筑紫野バイパス用地内の各調査地点 (1/10,000)

参事補佐	井上 裕弘 副島 邦弘 佐々木隆彦	井上 裕弘 橋口 達也 高橋 章	井上 裕弘 橋口 達也 馬田 稔弘	井上 裕弘 橋口 達也 木下 修	橋口 達也 木下 修	橋口 達也 木下 修	橋口 達也 木下 修	橋口 達也 木下 修	橋口 達也 木下 修
庶務									
管理係長	毛屋 信	毛屋 信	杉光 誠	柴田 恭郎	黒田 一治				
事務主査	東 勇治	富田 浩一	安丸 重喜	久保 正志	久保 正志				
主任主事	安丸 重喜	安丸 重喜	久保 正志	東 健二	東 健二				
調査									
参事補佐		馬田 弘稔	馬田 弘稔	馬田 弘稔	馬田 弘稔				
主任技師	水ノ江和同		齋部 麻矢	水ノ江和同 齋部 麻矢	水ノ江和同 齋部 麻矢				
技師	秦 憲二	齋部 麻矢 秦 憲二 杉原 敏之	杉原 敏之	秦 憲二 杉原 敏之	秦 憲二 杉原 敏之				

2 位置と環境

(1) 地理的・地質的環境

現在の阿蘇カルデラを生んだ阿蘇の大火砕流の痕跡は、筑紫平野においても広く観察される。約30万年前から起こったこの火砕流は四回の大規模な噴出があったことが確認されており、古いほうから Aso-1、Aso-2、Aso-3、Aso-4 と呼ばれ、火砕流と火砕流堆積物を表わす記号として使われている。これらのうち、Aso-1、Aso-2 がカルデラ周辺にのみ堆積し、Aso-3、Aso-4 が薄くその上を覆う形で広範囲に堆積した。約8万年前に起った Aso-4 火砕流の規模はこのなかでも最大であり、火砕流は九州のほぼ全域に達した。北側では、北九州から山口県の西部地域にまで達している。筑紫平野では、この堆積物によって埋められた盆地が地下に広く認められるほか、山麓では幾つもの火砕流台地を形成している。また、谷部においてはその直後の土石流や河川の浸食により段丘状の地形を残している。

Aso-4 火砕流堆積物は8つのサブユニットからなるとされる。その詳細については省略するが、これらのサブユニットのうち広く認識されてきたものに、白色の八女ローム、赤褐色の鳥栖ロームと呼ばれる粘土質の堆積物がある。どちらも火山灰と軽石を主体とする軽石流堆積物でそれらが粘土化したものであり、地質学的には八女軽石流、鳥栖オレンジ軽石流と呼ばれている。これらは筑紫平野周辺の露頭の多くで観察できる。

一方、Aso-4 以後の北部九州に認められる堆積物には“レス”と呼ばれる黄褐色粘質土の土壤層がある。これは大陸起源の風成塵が堆積したものである(黄砂堆積物:レス)。筑紫平野一帯の丘陵や台地上にはこの種の堆積層が観察され、旧石器時代の石器包含層として知られている。また別の風成堆積物である火山灰も降り積もり、しばしばレスと混合して拡散し土壤層を形成している。代表的な広域火山灰である、始良-Tn 火山灰(AT) やアカホヤ火山灰(K-Ah)

もレス中に包含されている。ただ、アカホヤ火山灰を起源とする土壌は腐食酸を多く含むため黒褐色土であり、程度の差はあるが「クロボク土」と呼ばれるものである。これら火山灰の降灰層準決定は土壌層中からの火山ガラスの検出によって行われているが、まれに筑紫平野でもATが純層で確認できる場所がある。ただ、このような場所は二次的攪乱を受けにくい湿地帯等註5であり、人類活動には適さなかったと考えられる。しかし、その周辺部でATを介在させた石器群検出の可能性は高いであろう。

今回報告の以来尺遺跡は、火砕流台地形成後に黄砂が堆積してできた土層から成る台地上に立地している。

(杉原)

註)

1. 渡辺一徳 1994 「Ⅲ.阿蘇4火砕流」『佐賀平野の阿蘇4火砕流と埋没林』上峰町教育委員会
2. 下山正一 1993 「宗原遺跡土壌層からの火山ガラスの抽出と始良-Tn火山灰(AT)の降灰層準」『宗原遺跡』福岡県文化財調査報告書第116集 福岡県教育委員会
3. 溝田智俊・下山正一他 1992 「北部九州の緩斜面上に発達する風成塵起源の細粒質土層」『第四紀研究』31 第四紀学会
4. 溝田智俊・下山正一・新井房夫 1989 「福岡で確認された第四紀広域テフラについて」『第四紀研究』28 第四紀学会
5. 夜須町内にある。この件については下山正一先生より写真を使って御教示いただいた。このほかにも筑紫平野の地質について全面的に御教示をいただいている。

(2) 歴史的環境

旧石器時代の遺跡

以来尺遺跡が位置している筑紫平野は、北部九州における旧石器時代遺跡が集中分布している地域の一つである。なかでも、福岡平野から筑紫平野へと抜ける最狭部付近とその東の三沢丘陵や宝満川流域に集中している。また、近年では以来尺遺跡南の原田地区で旧石器調査が増加し新たな石器群が検出されている。しかし、土層発達の悪さや後世の土地開発による土層攪乱のため、石器群としての全容がつかめるものはわずかである。

野黒坂遺跡ではナイフ形石器や台形石器、角錐状石器が野岳型細石刃核等と混在して出土している。峠山遺跡も同様の出土状況である。これらの遺跡は「三稜尖頭器」の器種認定が行われた学史的遺跡である。また北の御笠地区E遺跡註1・2では、側縁加工の尖頭器状に仕上げられたナイフ形石器や石刃等が出土している。一方、筑紫野バイパスそばの常松遺跡では、ナイフ形石器や角錐状石器等が出土している。路線内では諸田仮塚遺跡や仮塚南遺跡でも石器が出土している。

三沢丘陵では、九州地方において初めて国府型ナイフ形石器が確認された横隈山遺跡註3がある。その他、三沢遺跡でも確認されている。また、一ノ口遺跡では国府型ナイフ形石器や角錐状石器が出土している。

宝満川流域では、まず宗原遺跡が上げられる。石器組成が角錐状石器のみであり、その中註4



第3図 以来尺遺跡周辺の遺跡分布—旧石器時代— (1/50,000)

「槍先形尖頭器」の様相が認められることから列島における槍先形尖頭器出現に一石を投じている。また、城山周辺では、野岳型や在地系主体の細石刃石器群が採集された金山遺跡がある。^{註5}

このように概観すると、現在までに筑紫平野で確認されている遺跡のほとんどはナイフ形石器文化後半期と細石刃文化期のものである。(杉原)

註)

1. 松岡史・前川威洋他編 1970 『福岡南バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告』第1集 福岡県教育委員会
2. 橘 昌信 1970 「周辺遺跡の調査(その2) 一宝満川流域の先土器時代一」同上収
3. 松藤和人 1983 「筑後平野北部の国府型ナイフ形石器」『旧石器考古学』27号 旧石器文化談話会
4. 水ノ江和同編 1993 『宗原遺跡』福岡県文化財調査報告書第116集 福岡県教育委員会
5. 小畑弘己・杉原敏之 1996 「金山遺跡の細石刃石器群について」『九州考古学』第71号 九州考古学会

弥生時代の周辺遺跡

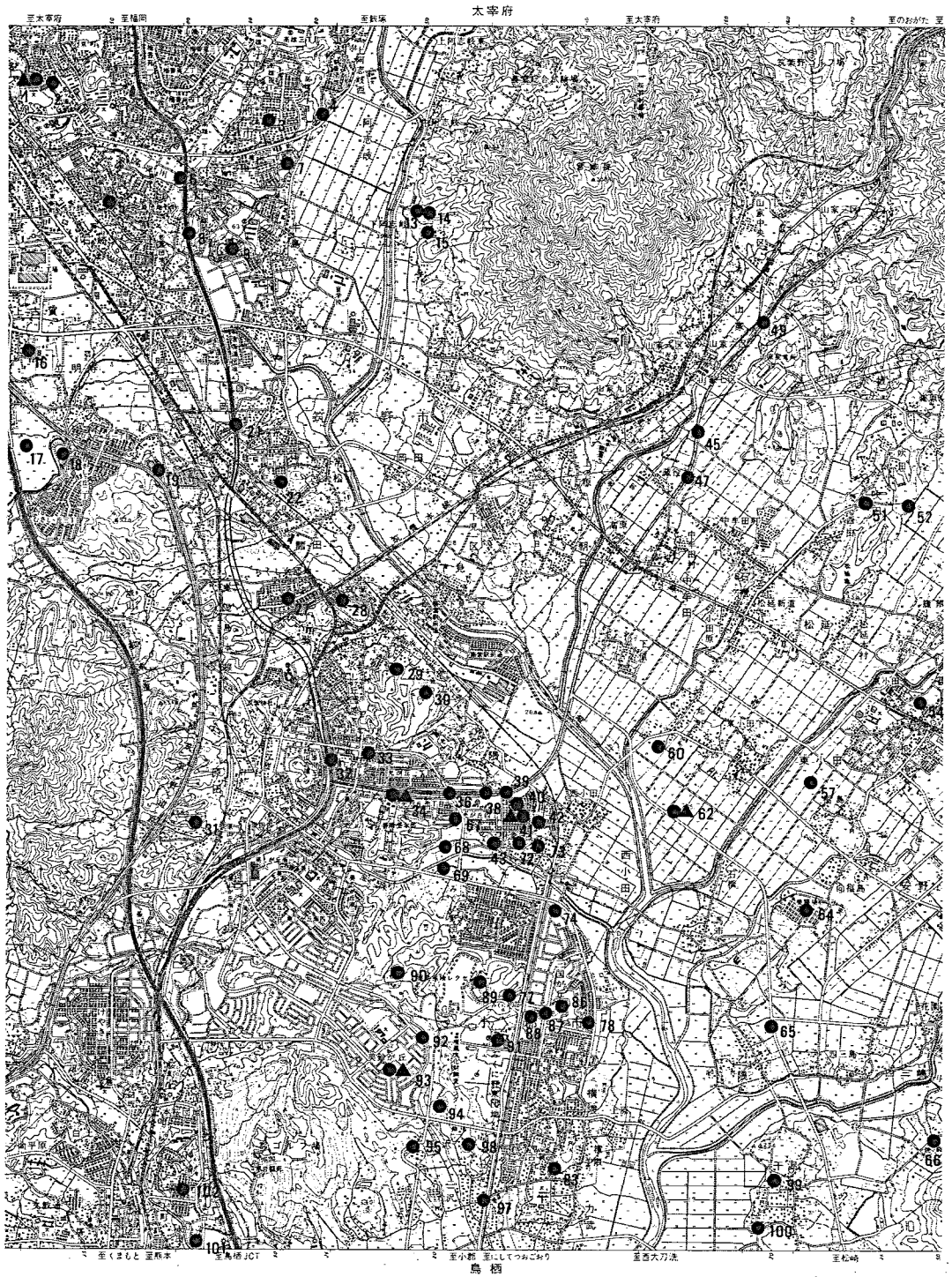
前期から中期の遺跡

本地域の弥生時代の遺跡は、地域史のみでなく、通史を語るうえで欠くべからざるものが多く存在しており、奴国に比呈され弥生銀座と呼ばれる春日丘陵となんら遜色がない。

弥生時代開始期の遺跡はわずかであるが、重要なものが多い。夜須町大木遺跡は夜白期の集落遺跡で、「松菊里型」竪穴住居跡や、複線山形文の彩文を施した小壺を副葬する土壙墓が検出され、開始期の集落と墓地がセットで確認できる。前期初頭にはすでに大規模な集落が出現しており、小郡市一ノ口遺跡では、弥生前期初頭の竪穴住居跡32軒と貯蔵穴131基が確認された。小郡市三国ノ鼻遺跡からは、同時期の集団墓地が発見されている。また、夜須町東小田峯遺跡では溝に区画された墳丘墓が発見されており、すでに一般成員とは別に埋葬される特定集団が出現していたことを示している。この墳丘墓内の墓制や副葬品の内容は、集団墓地のそれと等質的であり、特定集団と一般成員との格差がそれほど開いていなかったことを示している。

弥生時代前期後半から中期前半になると、飛躍的に遺跡数が増加する。代表的な集落としては、一集落のほぼ全域が調査された小郡市一ノ口遺跡・北松尾口遺跡・合の原遺跡が挙げられる。一ノ口遺跡では集落を囲む柵や集落への出入り口の道状遺構が検出され、合の原遺跡では小集落ながら切り通しの道状遺構とその入口に標柱と思われる大きな2つの柱穴が検出されている。北松尾口遺跡では、丘陵の平坦面だけでなく緩斜面にも竪穴住居跡が築かれており、集落内の人口の増加が窺われる。こうした丘陵の集落は、中期前半から中葉にかけて衰退し、中期後半にかけて台地への進出を開始する。台地に立地するこの時期の集落としては、中期を中心とする竪穴住居跡が200軒以上も確認された夜須町東小田峯遺跡や同七板遺跡が挙げられる。

本地域では明確な環濠集落が少なく、横隈山遺跡では、前期後半から末の竪穴住居跡とV字



第4図 以来尺遺跡周辺の遺跡分布-弥生時代前期~中期- (1/50,000)

溝が存在している。津古内畑遺跡では南半が削られた環濠があるが、内部には貯蔵穴群のみで、竪穴住居跡は確認されてない。同様の例は横隈北田遺跡に見ることができるが、これは野獸から食料を守る役割を果たしていたものと考えられている。

青銅器の生産も、中期後半にはすでに開始されていたらしく、小郡市乙隈天道町遺跡では中細形銅戈の鋳型が出土している。また、有力な集落からは青銅器が出土している。小郡市北松尾口遺跡では青銅製鉞が大型円形竪穴住居跡から、筑紫野市隈・西小田遺跡7地点では中細形銅戈23本が丘陵斜面から埋納されて出土しており、有力な集落の存在を示唆している。

中期の埋葬遺跡は、大規模な集団墓地である筑紫野市永岡遺跡・小郡市横隈狐塚遺跡・干潟遺跡・北松尾口遺跡・津古空前遺跡などに代表され、丘陵上に600基以上の甕棺が列状に並んだ筑紫野市隈・西小田遺跡2・3地点はその最たるものである。永岡遺跡ではまた、墓地と同時期の条濠が2本あり、墓地に対峙する環濠集落の存在が予想されている。

集団墓地と距離をおいて、多くの副葬品や装飾品をもつ特定集団墓が築かれており、その中でも傑出した内容をもつものは王墓と見られている。同3地点では、前述した列状埋葬とは別に、方形に区画された墓群があり、その内部から細型銅剣1本とゴホウラ製貝輪8個を装着した人骨の収められた中期前半の甕棺が出土している。同13地点からは、重圈昭明鏡・鉄剣・鉄戈を持ち、右腕に21個、左腕に23個のゴホウラ製貝輪を装着した人骨が出土している。また、本遺跡では1×2間の大型掘立柱建物跡が検出されており、吉野ヶ里遺跡・柚比本村遺跡の例から、特定集団墓との関係が考慮される。夜須町東小田峯遺跡では、中期後半の甕棺内から前漢鏡2面・ガラス璧2個・鉄剣・鉄戈・毛抜き形鉄器が出土し、やや離れたところで前漢鏡1面と棺外から鉄戈が出土している。筑紫野市二日市峯遺跡では、農作業中に中細型銅剣と星雲鏡が副葬された甕棺が発見され、さらに別の地点からは細形銅剣を持つ甕棺が出土している。

こうした王墓の存在から、本地域では、二日市峯遺跡を中心とする「クニ」と、隈・西小田遺跡や東小田峯遺跡を中心とする「クニ」が推定されている。王墓以外にも、夜須町大木遺跡では、コの字形の溝に区画された中に中期前半の甕棺が2基並んで発見され、夜須町東小田七板B地点遺跡では、中期中頃を中心とする54基の甕棺が、L字形の祭祀大溝に区画されており、溝から墓前祭祀に用いられた大量の丹塗土器が出土している。これらの副葬品を伴わない区画墓の存在は、階級分化が進んだことを示している。

この時期の本地域からは朝鮮系無文土器が出土していることが特記される。そのほとんどが三国丘陵上で、小郡市津古土取遺跡・横隈北田遺跡・横隈鍋倉遺跡・三国ノ鼻遺跡から出土しており、三国丘陵以外では筑紫野市筑紫台団地遺跡で出土したらしい。これらの朝鮮系無文土器は朝鮮半島から直接搬入されたものではなく三国ノ鼻遺跡で造られた可能性が高い。また、同市津古土取遺跡では、朝鮮系無文土器の前段階の松菊里型土器が出土している。

以上のような中期の集落や墓地は、中期後葉を境に急激に衰退する。

後期の遺跡

後期に入ると、台地の大規模な集落に環濠が形成されるようになる。大規模集落を営むため

に進出した広い平坦地で、防御を強化するために環濠が掘られたためだろう。丘陵にも集落は営まれるが、中期集落の立地するような入り組んだ狭い尾根の平坦面ではなく、広い平坦面をもつ丘陵先端部などに限られている。

以来尺遺跡もその一つであるが、さらなる平坦地の確保のため、斜面を削平して、階段状に造成している。基山町千塔山遺跡は、後期後半から古墳時代前期の環濠集落として有名だが、立地は以来尺遺跡と同じで、三方に斜面をもつ舌状台地の先端部である。平坦面の防御を強化するために環濠を設けており、斜面のない北辺は濠を二重にしている。竪穴住居跡は環濠の内合わせても40軒程しかなく、同時併存を考えると、拠点集落と呼ぶには少なすぎる。しかしながら、青銅製鋤先が7点出土している。集落西南の最高所には箱式石棺墓・石蓋土墳墓群があり、集落と墓地をセットで捉えられる良好な資料である。小郡市三国ノ鼻遺跡もまた後期中葉の環濠集落だが、緩斜面側に濠を築いており、急斜面側には掘られてない。内部の竪穴住居跡も33軒と少なく、拠点集落とは呼べない。小郡市三沢栗原遺跡は、やや大きな集落で、鏡片が2点出土している。このほか同市三国保育所内遺跡でも鏡片が、同市三沢上棚田遺跡では青銅製鋤先が出土している。このことから、後期の丘陵上に立地する集落は、小規模なものが多いにもかかわらず防御施設を伴い、青銅器を持つことから、台地の拠点集落と緊密に結び付く高地性集落であったのかもしれない。一方、台地の拠点集落は、規模が大きいため全容が明らかになっている遺跡がほとんどない。

本地域の後期集落では、青銅器の生産が活発に行われていたらしく、多くの鋳型が出土している。このことは、拠点集落を考える際の一つの指標になるものと思われる。夜須町ヒルハタ遺跡は、後期中頃から古墳時代初頭の拠点集落で、竪穴住居跡が300軒以上確認されている。六面中五面に銅鏡や十字型銅器・銅鏃・勺玉が彫られた鋳型が出土している。夜須町東小田七板遺跡は、弥生後期中葉から後葉の大規模な環濠集落で、環濠は断面U字形で、長径90mの楕円形で、南半分が調査されている。夜須町迫額遺跡は、濠の内側が10ヘクタール以上ある環濠集落が復元されている。筑紫野市常松遺跡では中期末の条濠が検出されているが、それに伴う竪穴住居跡は後期であるので、後期の条濠の可能性がある。小郡市乙隈天道町遺跡では拠点集落の中央部を調査しているようで、著しい竪穴住居跡の密集度を見せている。このほか、筑紫野市仮塚南遺跡では広形銅戈の鋳型、夜須町中原前遺跡では中広形銅戈の鋳型、夜須町宮の上遺跡では有鉤銅釧の鋳型、小郡市津古東台遺跡では広形銅矛の鋳型、筑紫野市隈・西小田遺跡6地点では中期末から後期初頭の竪穴住居跡から銅矛の鋳型が出土している。このほかに鏡片の出土する集落として、長宜子孫内行花文鏡片や小型仿製鏡片が出土している筑紫野市御笠地区遺跡や、小型仿製鏡が出土した同市日焼遺跡がある。

青銅器の埋納も台地で発見されており、台地へ進出した拠点集落に伴うと思われる。小郡市乙隈東畑遺跡では農作業中に中広形銅戈が2本出土しており、埋納されていた可能性が高い。こうした事例は、浮羽町日永遺跡で見ることができ、同遺跡では後期の台地上の集落に近接し

て、広形銅戈と広形銅矛が2本セットで埋納されている。

後期の墓地は、墓制の主流が甕棺墓から石蓋土壙墓・箱式石棺墓へと移り、小規模な集団墓地が営まれるようになる。例としては、筑紫野市中島遺跡や同市倉吉遺跡が挙げられる。小郡市横隈狐塚遺跡は例外的で、中期から継続して集団墓地として使用され、後期中頃まで存続しており、また、土壙墓からは蕨手状渦文鏡が出土している。倉良遺跡は、以来尺遺跡の立地する丘陵と谷を一つ隔てた狭小な独立丘陵の斜面に立地しており、以来尺遺跡から臨むことができるので、以来尺集落に付随する墓地の可能性もある。また、以来尺集落の占地する台地の西端部（現在の筑紫938番地周辺）では時期不明の石棺墓群が存在していたらしく、集落と墓地の関係が基山町千塔山遺跡に近いものであったと考えると、倉良遺跡に後続する以来尺集落の墓地であった可能性がある。後期後半になると、有力者は個人が区画される方形周溝墓に埋葬されるようになる。小郡市三沢畦道遺跡と一ノ口遺跡では後期後半の方形周溝墓が確認され、同市乙隈天道町遺跡では5基確認されている。さらに、庄内式新段階では、同市津古生掛遺跡で前方後円墳が築かれ、その墳裾をめぐるように、方形周溝墓が配置されており、方形周溝墓を営む階層の中から、前方後円墳に埋葬される人物が出現したことを示している。これを契機にして、弥生時代後期の遺跡は急速に衰退し、新たな枠組みの中で再編成される。（秦）

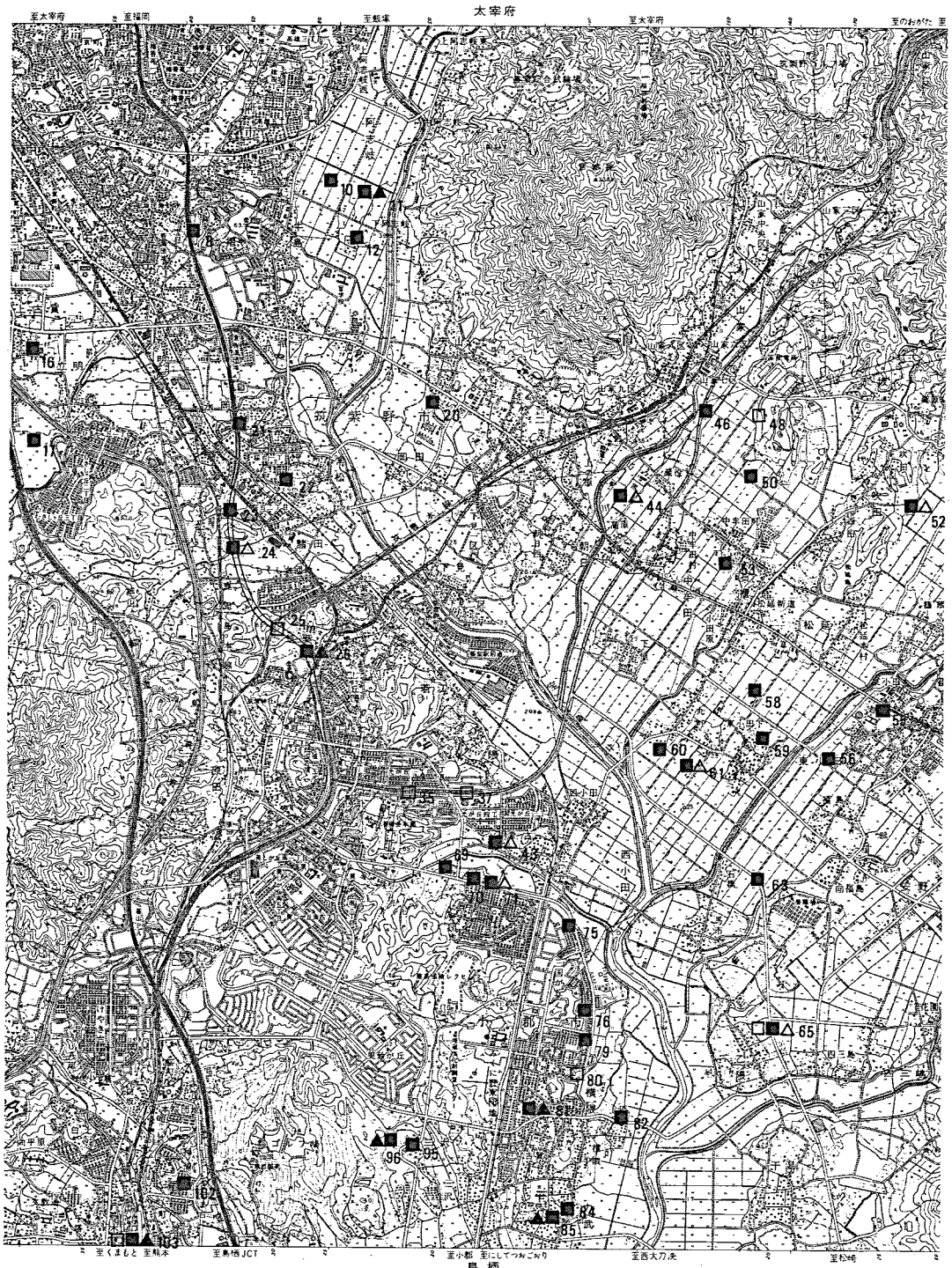
主要な参考文献

小郡市史編集委員会編 1996 『小郡市史』通史編 地理・原始・古代
註)

1. 柳田康雄氏の教授による

旧石器時代周辺遺跡分布図掲載の遺跡一覧

1 野黒坂遺跡	15 原田地区遺跡51地点	29 北牟田遺跡	43 吹田遺跡
2 峠山遺跡	16 原田地区遺跡58地点	30 三沢栗原遺跡	44 松延1遺跡
3 大曲り遺跡	17 原田地区遺跡47地点	31 三国小学校遺跡	45 峰遺跡
4 針摺遺跡	18 原田地区遺跡60地点	32 西島遺跡	46 向福島遺跡
5 御笠地区遺跡E地点	19 天神第1地点	33 上の原遺跡	47 宗原遺跡
6 永岡遺跡	20 隈西小田遺跡	34 丸隈遺跡	48 向畦ヶ浦遺跡
7 常松遺跡	21 津古内畑遺跡	35 池田遺跡	49 向原遺跡
8 諸田仮塚遺跡	22 津古上ノ原遺跡	36 牧の池遺跡	50 干潟遺跡
9 仮塚南遺跡	23 三沢蓬ヶ浦遺跡	37 山家人形原遺跡	51 金茸原遺跡
10 木山遺跡	24 横隈井ノ浦遺跡	38 中島遺跡	52 城山3遺跡
11 城山遺跡	25 横隈山第4地点遺跡	39 中島堤遺跡	53 屋形原遺跡
12 以来尺遺跡	26 横隈山第2地点遺跡	40 上の山遺跡	54 金山(3)遺跡
13 若江遺跡	27 一ノ口遺跡	41 鬼神山遺跡	55 金山2遺跡
14 原田地区遺跡50地点	28 北松尾口遺跡	42 吹田遺跡	56 金山1遺跡



第5図 以来尺遺跡周辺の遺跡分布—弥生時代後期— (1/50,000)

弥生時代周辺遺跡分布図掲載の遺跡一覧

1	二日市峯遺跡	38	橋詰遺跡	75	津古生掛遺跡
2	修理田遺跡	39	天神遺跡	76	三国ノ鼻遺跡
3	吉ヶ浦遺跡	40	隈・西小田遺跡2地点	77	三沢遺跡
4	柚ノ木遺跡	41	隈・西小田遺跡3地点	78	横隈北田遺跡
5	カケ塚遺跡	42	隈・西小田遺跡13地点	79	横隈鍋倉遺跡
6	大曲川遺跡	43	隈・西小田遺跡6地点	80	横隈狐塚遺跡
7	高雄遺跡	44	宮ノ上遺跡	81	横隈山遺跡
8	野黒坂遺跡	45	山家地区遺跡	82	横隈上ノ原上遺跡
9	イカリノ上遺跡	46	大島遺跡	83	三沢古賀遺跡
10	御笠地区遺跡E地点	47	八ヶ坪遺跡	84	三国小学校遺跡
11	御笠地区遺跡F地点	48	中島遺跡	85	みくに保育所内遺跡
12	御笠地区遺跡G地点	49	浮殿D遺跡	86	横隈井ノ浦遺跡
13	宮崎遺跡	50	茶屋原遺跡	87	三沢東古賀遺跡
14	シメノグチ遺跡	51	吹田・小路田遺跡	88	三沢京江ヶ浦遺跡
15	脇道遺跡	52	ヒルハタ遺跡	89	三沢種畜場遺跡
16	立明寺遺跡	53	杉野遺跡	90	ハサコの宮遺跡
17	貝元遺跡	54	大木遺跡B地点	91	三沢蓬ヶ浦遺跡
18	ヨロイ田遺跡	55	夜須中学校遺跡	92	三沢一ノ口遺跡
19	大牟田西遺跡	56	塔ノ本遺跡	93	松尾口遺跡
20	日焼遺跡	57	東小田七板遺跡A地点	94	北牟田遺跡
21	永岡遺跡	58	浦の原遺跡	95	三沢上棚田遺跡
22	常松遺跡	59	慮木藪遺跡	96	三沢栗原遺跡
23	諸田仮塚遺跡	60	迫額遺跡	97	北内畑遺跡
24	仮塚南遺跡	61	中原前遺跡	98	牟田々遺跡
25	倉良遺跡	62	東小田峯遺跡	99	干潟遺跡
26	以来尺遺跡	63	東小田七板遺跡B地点	100	干潟下屋敷遺跡
27	筑紫台団地遺跡	64	向福島遺跡	101	伊勢山遺跡
28	矢倉遺跡	65	乙隈天道町遺跡	102	城ノ上遺跡
29	前畑遺跡	66	松尾遺跡	103	千塔山遺跡
30	天神社裏山遺跡	67	津古牟田遺跡		
31	上原田遺跡	68	津古片曾葉遺跡		
32	合ノ原遺跡	69	津古東宮原遺跡		
33	原田第4地点	70	津古西台遺跡		
34	隈・西小田遺跡7地点	71	津古東台遺跡		
35	池ノ上遺跡	72	津古空前遺跡		
36	橋詰遺跡	73	津古内畑遺跡		
37	平原遺跡	74	津古土取遺跡		

凡例

- 前～中期の遺跡
- 後期の遺跡
- 後期の埋葬遺跡
- △ 青銅器の鋳型出土遺跡
- ▲ 青銅器出土遺跡

II 発掘調査の記録

1. 調査の概要 (第4・5図)

以来尺遺跡の発掘調査は、平成4(1992)年5月6日から平成7年1月20日まで実施されたが、途中の平成5年6月7日から同年10月4日までの4カ月間は筑紫野バイパス3地点「久良々遺跡」の発掘調査に移行したため、実際の調査期間は2年4カ月に及んだ。一般国道3号筑紫野バイパスの建設に伴う事前調査の場合、普通は幅40mほどの細長い調査区になるが、標高48mの丘陵を標高40m程度までに掘削するため多少の法面が必要となり、実際には幅70mの比較的広い調査区になった。当初の調査予定面積は、長さ230m、幅70mの約14,400㎡であったが、土取りや開墾による削平により実際の調査面積は12,250㎡になった。

調査区は標高46～48m付近の丘陵上の平坦部と標高38～46mの丘陵斜面部とに分かれ、また弥生時代・古墳時代・中近世の各遺構も同一面で検出されたことから、土捨てを考慮した調査区東端幅約10mを残して、平坦部→斜面部の順で調査を進めていく予定であった。しかし、実際には周辺住民の要望やバイパス建設工事を優先させる部分から随時調査を行ったために、必ずしも予定どおりにはならなかった。まず、最初に調査した地点は平坦部中央を東西に横断する市道の付替え部分であり、その後調査区北端部から南方向へ随時南下していった。途中、斜面部に構築される橋梁部分や工事用道路部分を優先させることもあった。旧石器時代に関しては、全体の調査がほぼ終了に近づいた時点で実施した。

調査中における主な出来事としては以下のとおりである。

平成4年5月6日 調査開始 調査員：水ノ江

平成4年5月18日 福岡県教育長および福岡県教育庁文化課長による発掘調査現場の安全パトロール

平成4年7月21日 調査員：秦合流 *水ノ江は平成4年度まで、平成5年度より馬田と交替

平成5年4月30日 気球写真撮影

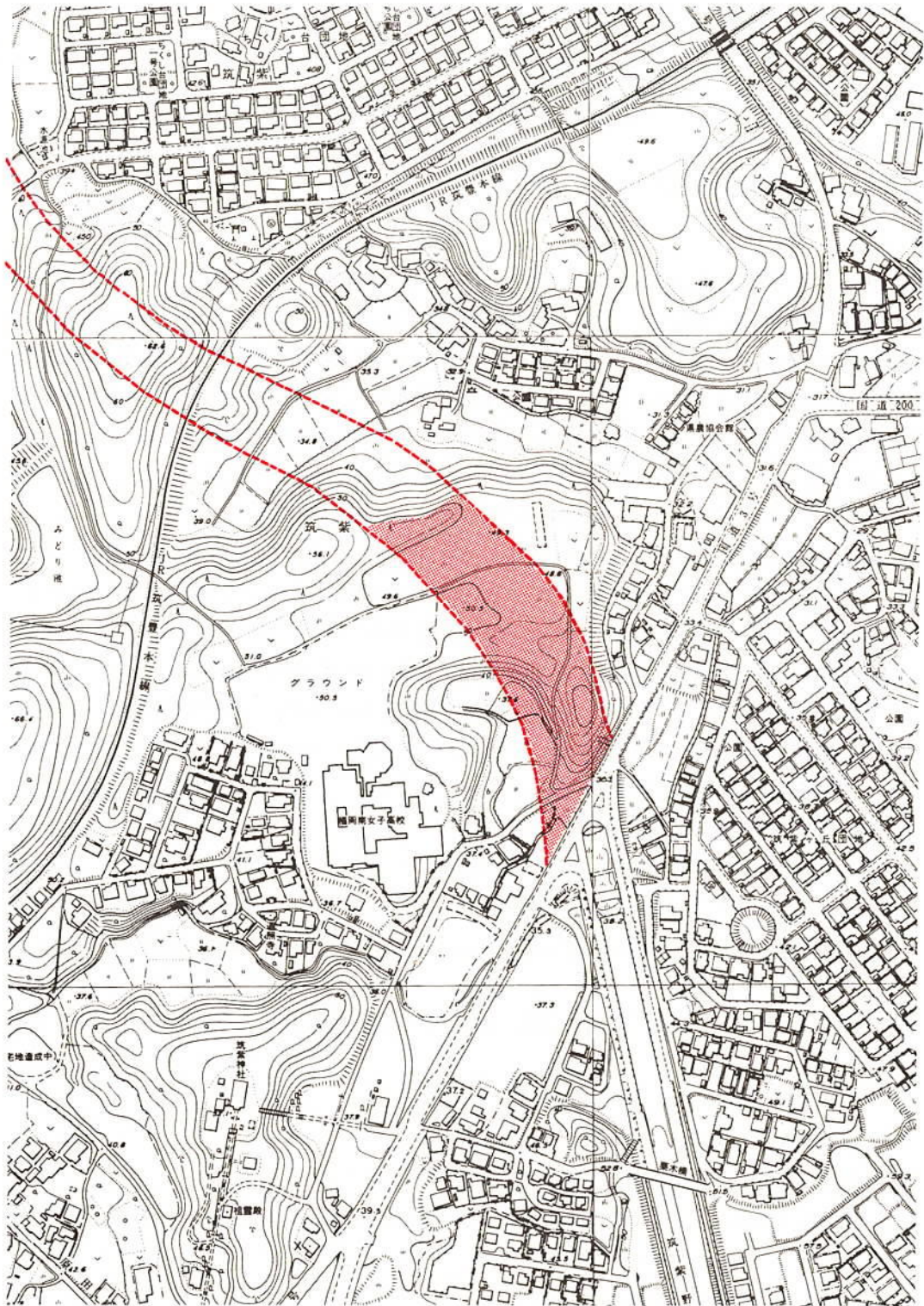
平成5年11月4日 調査員：秦と齋部交替

平成6年2月23日 建設省福岡国道工事事務所長視察

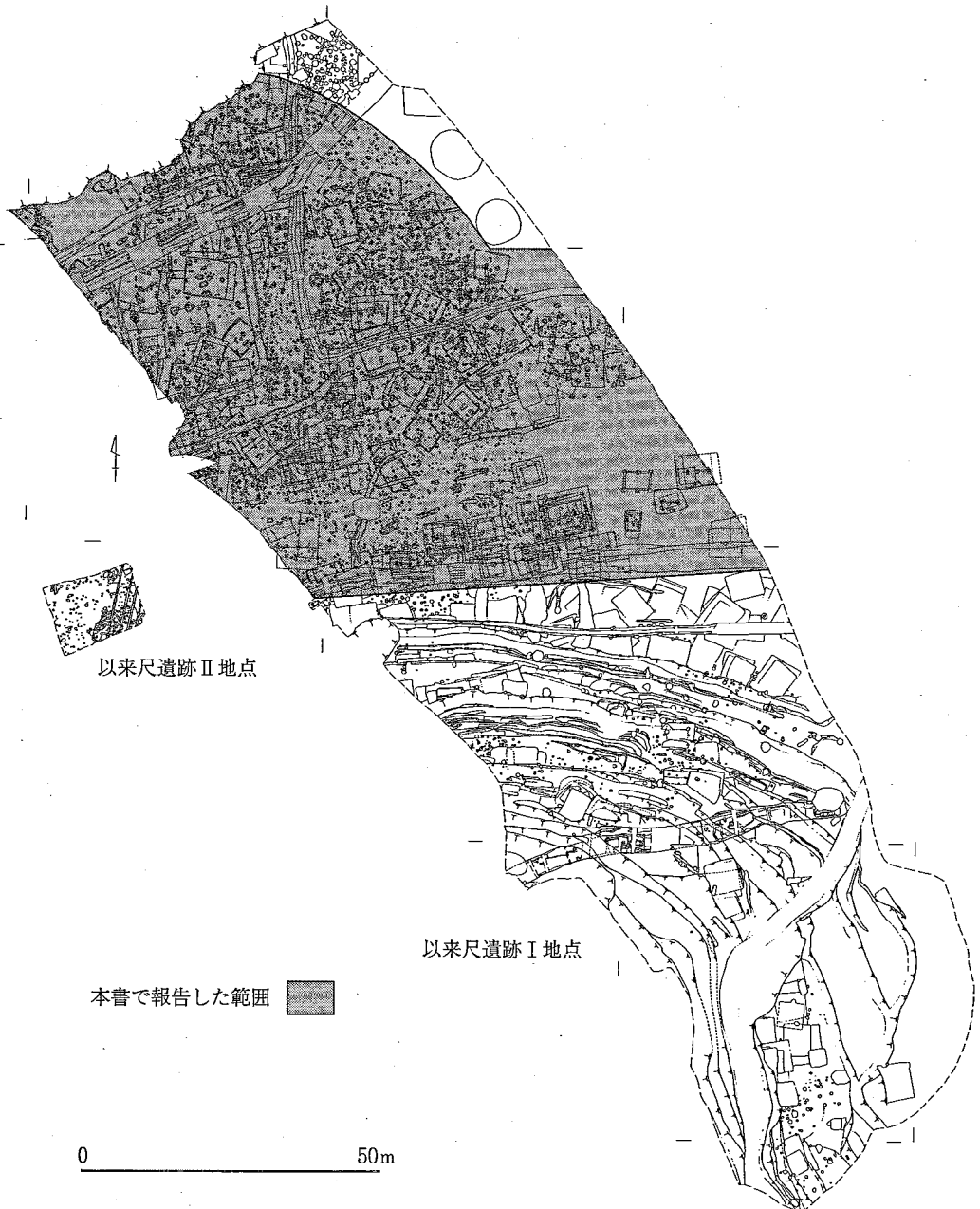
平成6年5月10日 福岡県教育次長および福岡県教育庁指導第二部長による発掘調査現場の安全パトロール

平成6年8月24日 調査員：齋部と杉原交替

平成6年12月12日 気球写真撮影



第6図 以来尺遺跡調査地点 (1/5,000)



第7図 以来尺遺跡遺構配置略図 (1/2,400)

平成7年1月6日 報道機関への発表

平成7年1月8日 現地説明会(400人参加)

平成7年1月20日 調査終了 調査員：馬田・杉原

本遺跡からは、旧石器時代から中世までパンケース540箱に及ぶ年代幅の広い遺物が出土したが、遺構の大半は弥生時代後期に属する集落で、その他に古墳時代後期の集落と墳墓や、中近世(14～16世紀)の集落と山城も若干含まれる。報告は平成8・9年度の2カ年に分け、平成8年度は旧石器・縄文時代の遺物と主に丘陵平坦部の弥生時代の遺構と遺物を、平成9年度には主に丘陵斜面部の弥生時代の遺構と遺物および全体の古墳時代以降の遺構と遺物についての報告をそれぞれに行う(第7図)。

なお、調査においては筑紫野市教育委員会と随時協議を行い、発掘作業員の手配や関係機関との調整にご協力・ご配慮を賜りましたこと、心からお礼申しあげます。

2. 旧石器時代の遺構と遺物

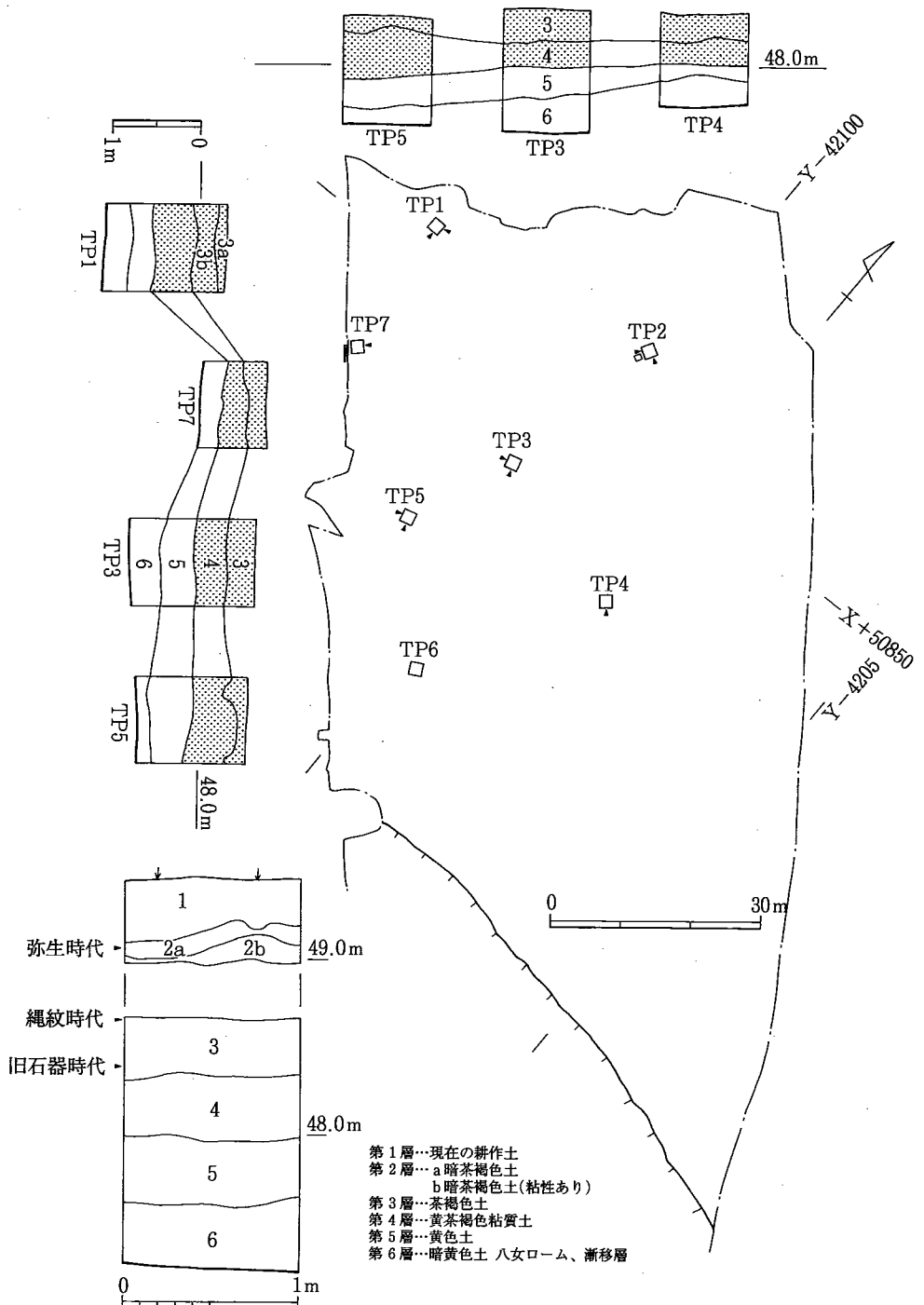
1. 調査の目的と方法

今回の調査では遺跡内が大きく攪乱を受けており、現表土からの掘り下げによる各時期の文化層の層位的確認は現実的に不可能であった。だが、台地上に残された遺跡のため旧石器包含層であるレス層は場所によっては十分に残存していた。このため、調査の目的を旧石器包含層の確認と基本層序図の作成、並びにテスト・ピット(以下TP)の土層柱状図作成による各地点の堆積傾斜とレスの残存状況の把握を行うこととした。また、テスト・ピットの設定については本来ならグリットを考慮し設定すべきであるが広い面積と後世の遺構の攪乱からレスの残りのよい場所と石器が採集される場所を選択した。2×2を基本とし、削平の少ない北側を中心に計7箇所設定した。

2. 基本層序(図版508 第8図)

遺跡内で攪乱を受けていない自然堆積層は残っておらず、表土から土層観察を行える良好な場所はTP7付近しかなかった。また、堆積層の厚さから人力により純粋な八女粘土から成る基盤層まで掘り下げることが現実的には不可能であったため、遺物包含の可能性のある層を少し下げた程度に止めた。以下、第1層より順に説明を行っていく。

第1層は現在の耕作土である。第2層は暗茶褐色土の弥生時代の遺物包含層でa・b層に細分される。b層のほうが明るく粘性がある。このレス直上に堆積する第2層には鬼界-アカホヤ火山灰に由来する黒褐色土のクロボク土がみられないが、これは攪乱によって耕作土と混合したためと考えられる。第3層は、レス堆積層の茶褐色土で石英等の粒子を含んでいる。旧石



第8図 旧石器時代調査グリッド配置 (1/1,000) と各層の傾斜状況図・基本土層図 (1/40)

器包含層である。第4層は黄褐色粘質土で石英粒子や赤色粒子を含んでおり粘性が強い。旧石器包含層。第5層との境は硬化している。第5層は黄色土で白色粒子や雲母粒子、マンガン粒を含んでおり、やや砂質である。第6層は暗黄色土で粘性が強く、白色粒子や雲母粒子、マンガン粒を多量に含む。第6層のような状況から、本遺跡内では赤褐色の鳥栖ロームが無く、第6層が漸移層となって下位の八女ロームの層へ移っていくと考えられる。

各地点における堆積面の傾斜については、北西から南東にかけて緩やかな傾斜をもってレスの層が厚く堆積している。ただ北端においては急激に落ちる。第3層が分層できるのはこのことと関係があるのであろう。一方、南西から北東にかけては緩やかに堆積が薄くなっている。これら二方向からの観察結果から、古い時期の傾斜が、北から南の方向にやや谷状にあった可能性を示していよう。

3. 遺物の出土状況 (TP 2) (第9図)

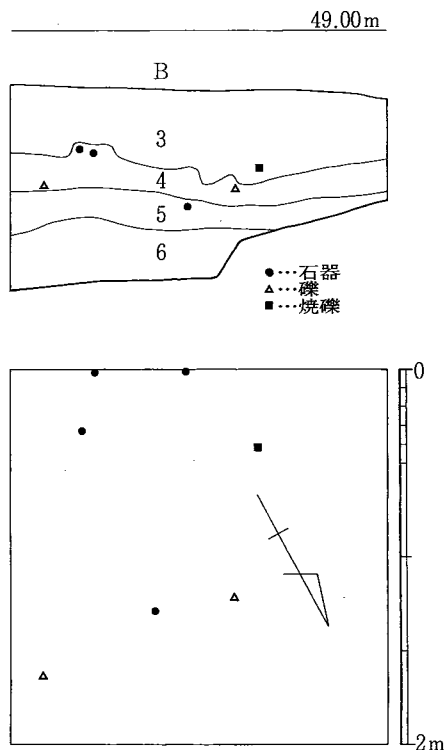
設定した7つのトレンチのうち、遺物の出土はTP 2からのみ確認された。遺物は第3層から第5層にわたって出土している。出土石器は碎片のみで時期を決定できる示準的なものは無い。TP 2の層序は、本来的には他の地点と同様の堆積状況と考えられるが、第3層最上層部付近においては異なる。それは肉眼では同一のレス層と判断したが、縄紋土器片の出土から古い時期に人為的攪乱を受けていると考えられるからである。また、第5層から1点出土しているが、これは第4層からの落ち込みであろう。

以上のことから、旧石器包含層は第3～4層中に求められよう。

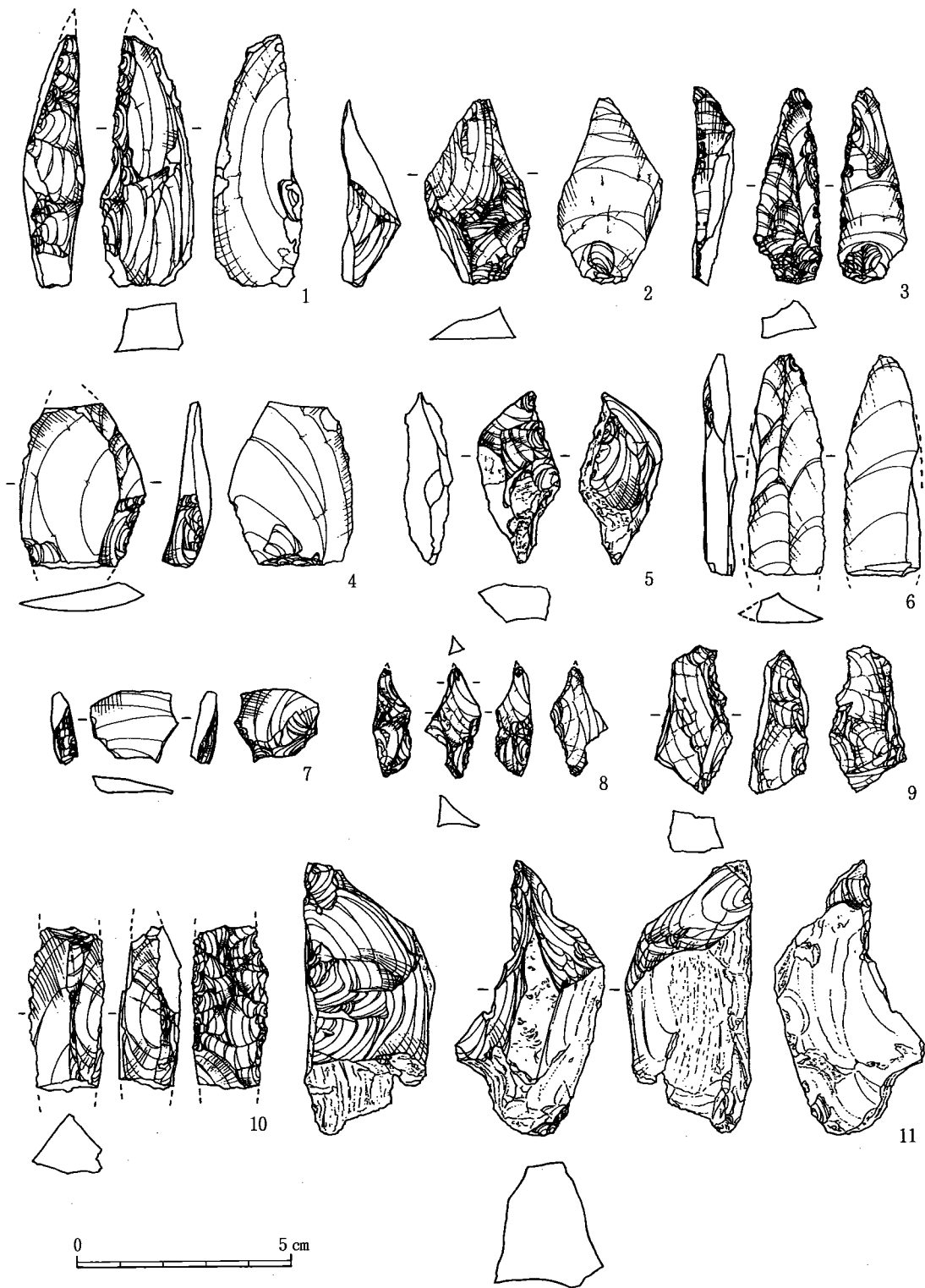
4. 遺物

出土・採集石器 (図版6～9 第10～13図)

本遺跡で出土した旧石器時代の遺物のうち、地点を押えられる遺物は数点だけである。その



第9図 TP 2内石器出土状況とN-S土層図(1/40)



第10图 旧石器时代石器实测图. 1 (2/3)

ため、これらの石器群の厳密な分離分析作業は不可能である。またこのようなことから、石器群の時代的分離は示準的石器や剥片剥離技術という視点以外にも、パティナの状況等報告者の主観的分離作業も含まれており、一部混同している可能性があることをはじめに断わっておく。

ナイフ形石器 (1～6) 1は国府系ナイフ形石器である。厚手の黒曜石製横長剥片を素材とするが、ネガ面が二面ありかつ、主要剥離面と作業面の剥離軸がズレていることから真正の翼状剥片を素材としているわけではない。背部加工は大きく行われており、尖頭器状に仕上げられている。2は基部加工のナイフ形石器である。黒曜石製縦長剥片を素材とするが、背面の剥離方向は多方向に及ぶ。打面を一部除去する形で二次加工が行われている。3は基部加工のナイフ形石器である。厚手の黒曜石製縦長剥片を素材としている。両側縁に微細剥離を有している。4は基部加工のナイフ形石器である。先端部と基部を欠損している。黒曜石製の横長剥片を素材とするが、背面にポジ面を残し、主要剥離面の剥離方向と石器の主軸がズレることから「今峠型」の範疇に含まれる可能性がある。5は黒曜石製の横長剥片の素材縁辺を刃部とし、両面を平坦な剥離によって加工している。6はサヌカイト製の縦長剥片を素材としている。基部から左側縁が欠損しているため二次加工の状況は不明であるが、側縁の一部にわずかに加工痕と考えられる剥離がある。

台形石器 (7) 7の台形石器は寸ぶまりの剥片を素材とし、その一側縁を刃部としている。打点部を加工し、端部を折取り仕上げている。

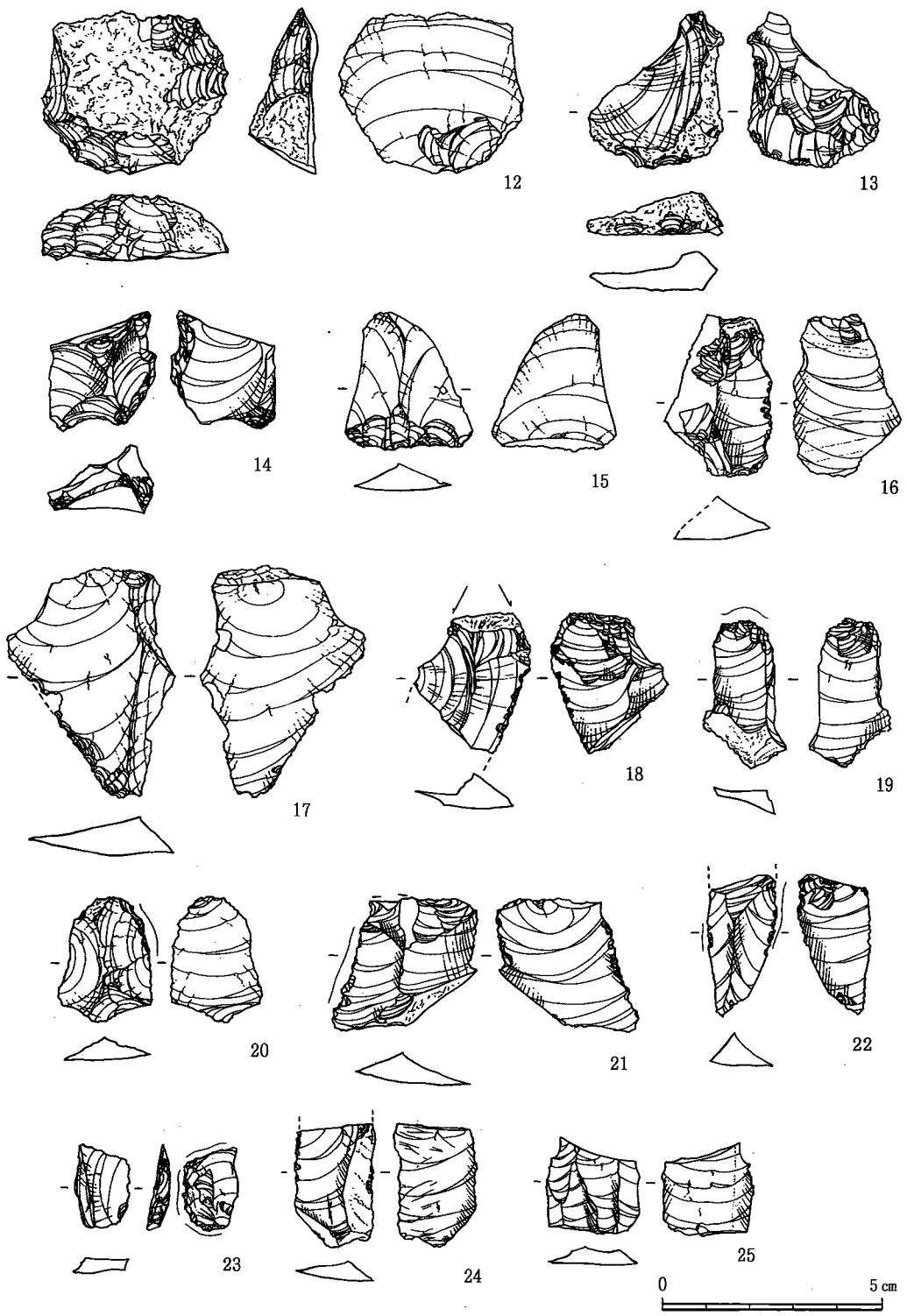
角錐状石器 (8～11) 8は背面に急角度の剥離面を持つ横長剥片に一部加工を施した角錐状石器である。9は黒曜石製の角錐状石器で先端部と基部を大きく欠損する。背面は素材面を利用した二面構成で腹面に平坦剥離による加工が行われている。10の角錐状石器はサヌカイト製の横長剥片を素材とし、急角度の剥離によって二次加工が行われている。端部は欠損している。11は黒曜石の原石に急角度の剥離を行っている。打面調整が無いことや剥離面同志で稜を構成しようと意図していることから角錐状石器の未製品と考えられる。

スクレイパー (12～17) 12は礫面を残すサヌカイト製剥片の打点部付近を中心に刃部加工を行っているエンド・スクレイパーである。13は礫面を残す黒曜石製剥片の厚い部分に刃部加工を行っているエンド・スクレイパーである。14は黒曜石製の残核の端部に刃部加工を行っている。15は打点部側に刃部加工を行っている。16は剥片の側縁から端部に刃部加工がある。17は剥片の左側縁部に刃部がある。

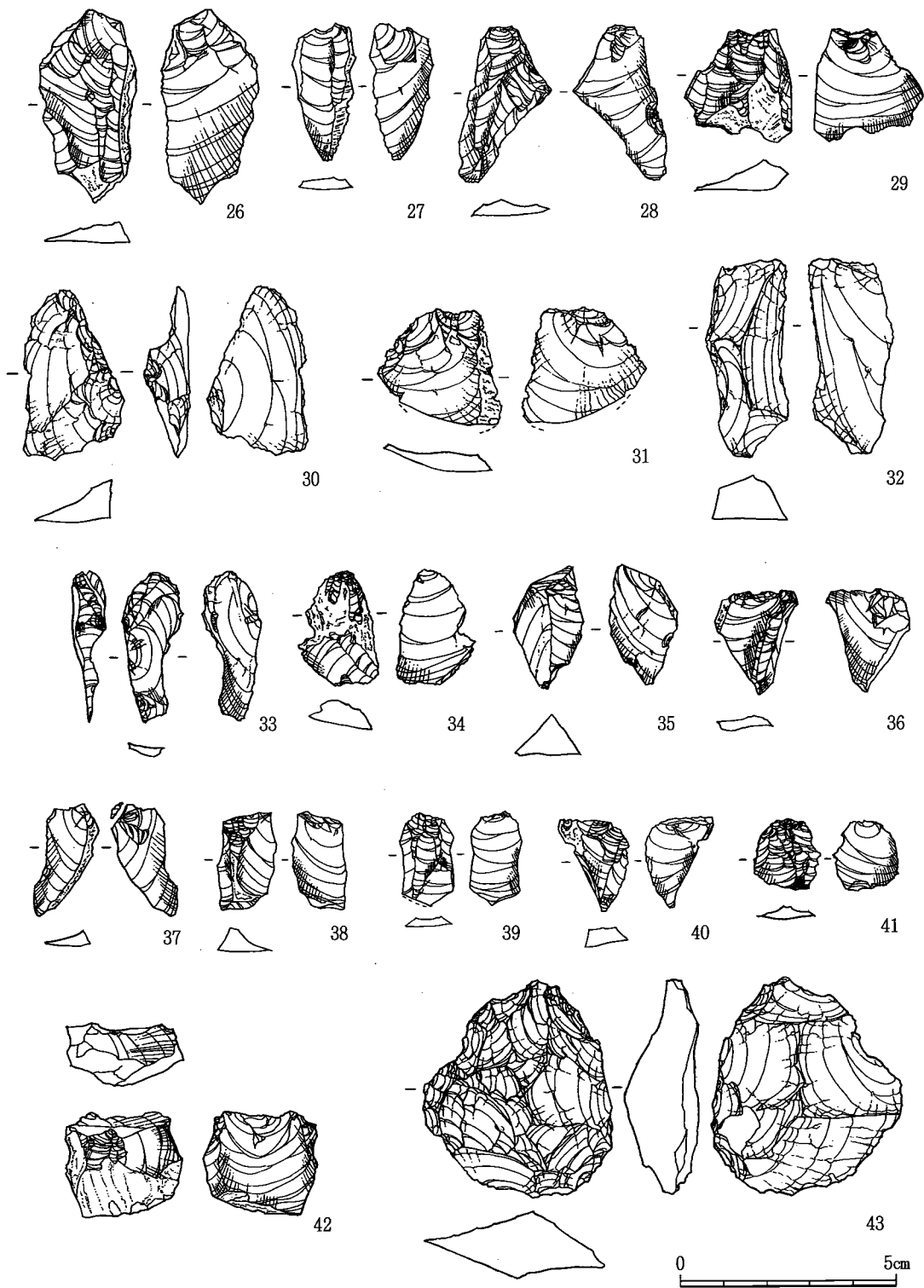
彫器 (18) 18は黒曜石製剥片の礫打面部に2方向からのファシットが入る彫器である。

微細剥離のある剥片 (19～24) 19は剥片の打点部に、20～22は側縁部にそれぞれ連続する微細剥離がある。23は打点部から側縁、端部へと微細剥離が連続する。24は右側縁部に微細剥離がある。腹面には無数の擦痕があり、端部は面が擦れている。

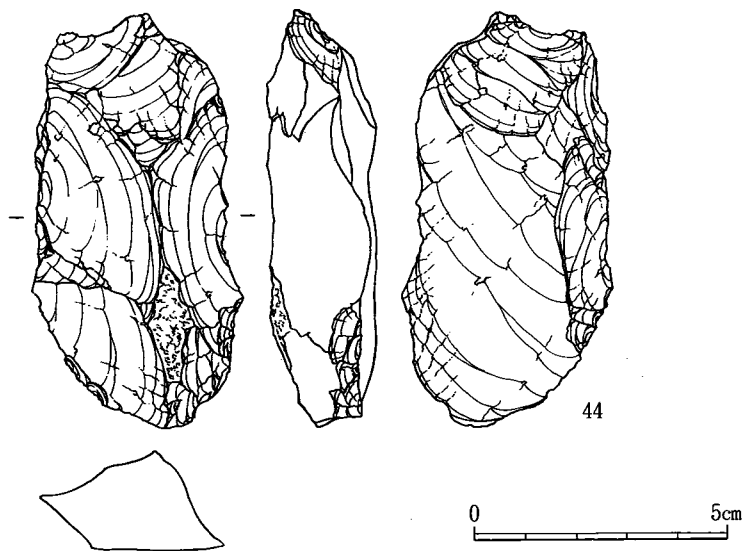
剥片・碎片 (25～41) 25は石刃の打点部と端部が切断された剥片である。26は黒曜石製の縦長剥片で礫面を直接加撃している。パティナが進んでいる。27の石刃は打点部を欠損する。



第11图 旧石器时代石器实测图. 2 (2/3)



第12图 旧石器时代石器实测图. 3 (2/3)



第13図 旧石器時代石器実測図. 4 (2/3)

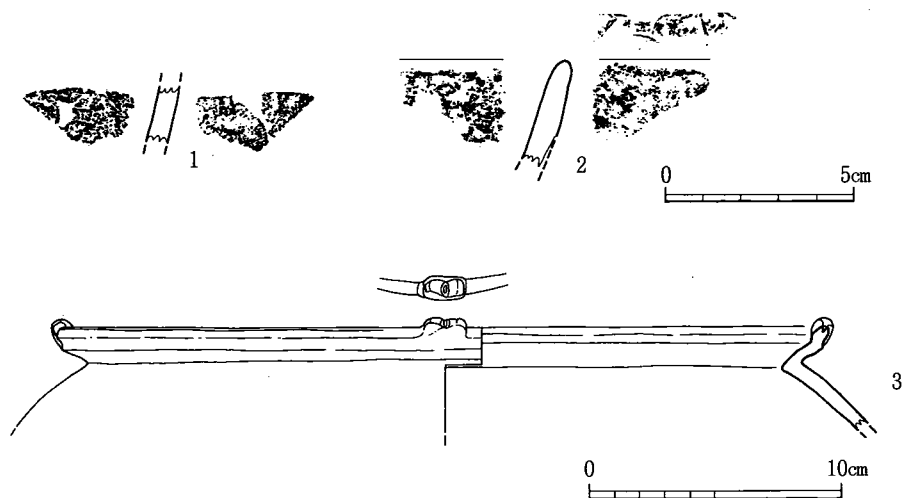
石核(42~44) 42は無調整打面より剥片剥離が行われている。パティナは比較的新しい。43は腹面の一部に剥片素材面を残し、求心状剥離が両面に展開されている。44は腹面を打面として両側縁から剥片剥離が行われている。一部交互剥離を行っている。サヌカイト製。(杉原)

3. 縄紋時代の遺構と遺物

遺物

1. 縄紋土器 (図版10 第14図)

1・2はTP2のローム層中(3層)より出土した。1は胴部片であるが器面調整は不明。石英粒子を多量に含む。2はやや褐色である。外面に器面調整らしきものがある。1・2とも出土状況から早期以前の年代が与えられる可能性が高い。(杉原) 3は1047号竪穴住居跡の1号ピットの掘形より出土した晩期の深鉢である。口縁部にリボン状突起が1個だけ現存する。磨滅が激しく器面調整は不明瞭であるが、全面研磨であろうと思われる。(斎部)



第14図 縄紋土器実測図 (1/2 1/3)

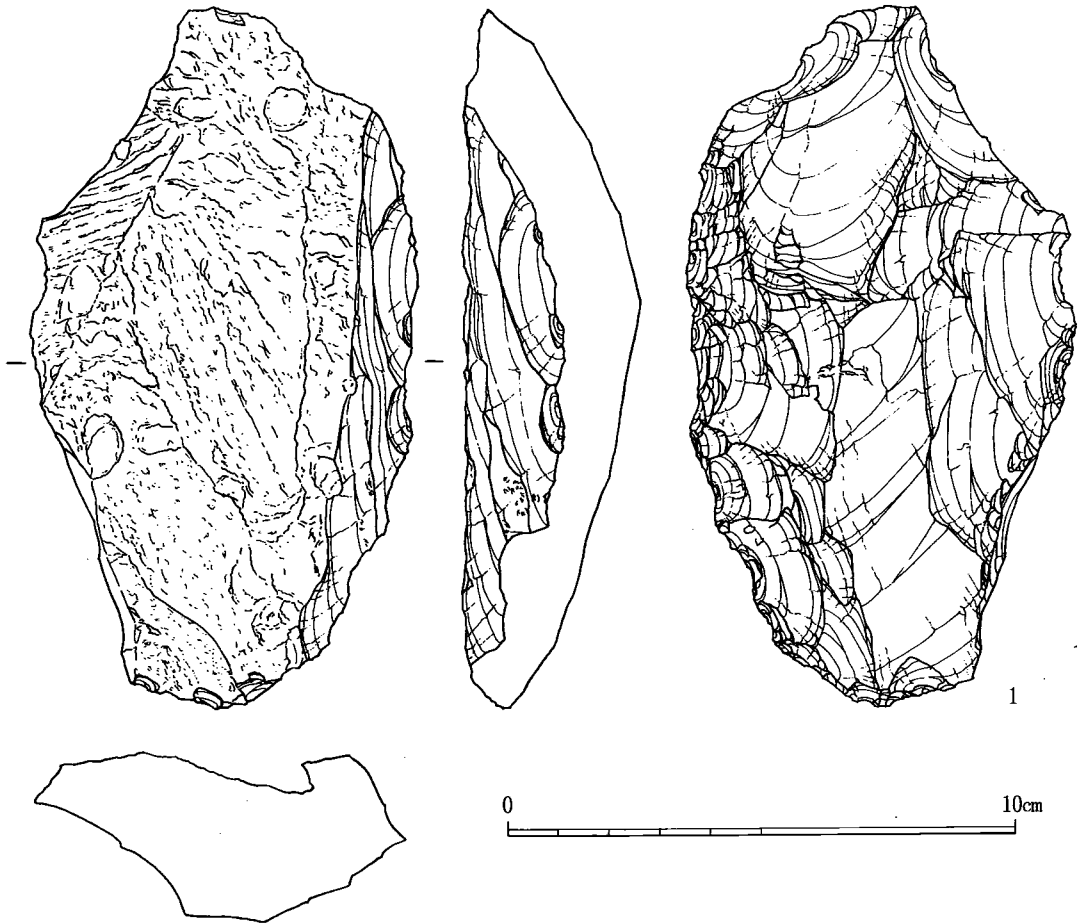
2. 出土・採集石器 (図版10~12 第15~20図)

槍先形尖頭器 (未製品) (1) 1は礫面を残すサヌカイト製の横長剥片に“大きな平坦剥離”を行っている。また、左側面に加撃痕を残している状況は、さらに面的加工を行うことを意図していよう。従って、1はスクレイパーの刃部作出途中というよりも槍先形尖頭器の未製品と考えられる。

石鏃 (2・3) 2はサヌカイト製の石鏃で片面には素材面を残している。尖頭部は作出されていない。3はサヌカイト製の石鏃で先端部を欠損している。両面共に中央あたりの稜が磨滅しておりかつ、側縁がシャープに残っていることから磨いている可能性が高い。

石匙 (4~6) 4の石匙は黒曜石製の縦長剥片を素材としており、端部を欠損している。加工は全周に及ぶが両側縁共に片面からだけの刃部加工である。5はサヌカイト製の石匙で胴部以下を大きく欠損している。素材面を大きく残すがつまみ部の作出は丁寧である。パティナが進んでいる。6はサヌカイト製縦長剥片素材の石匙で一侧縁に刃部加工を行っている。素材面を大きく残している。パティナは新しい。

スクレイパー (7~15) 7は残核であろうか、その端部に刃部加工を施したサヌカイト製スクレイパーである。弥生時代の住居跡より出土している。8は大型剥片の側縁に刃部加工を施している。9は折れている横長剥片の打点部に平坦な刃部加工を施している。10は「両極」剥離によって剥離作業を行っているが刃部は剥片の末端部にある。一部磨滅している。11はサヌカイト製横長剥片の端部に刃部加工を行っている。パティナが進んでいる。12は剥片の側縁部を刃部としている。13は剥片を楔状に使用した「両極」剥離ののちに端部から側縁にかけて刃部加工を行っている。14は石核の打面部を刃部に転用したスクレイパーであろう。15は打点



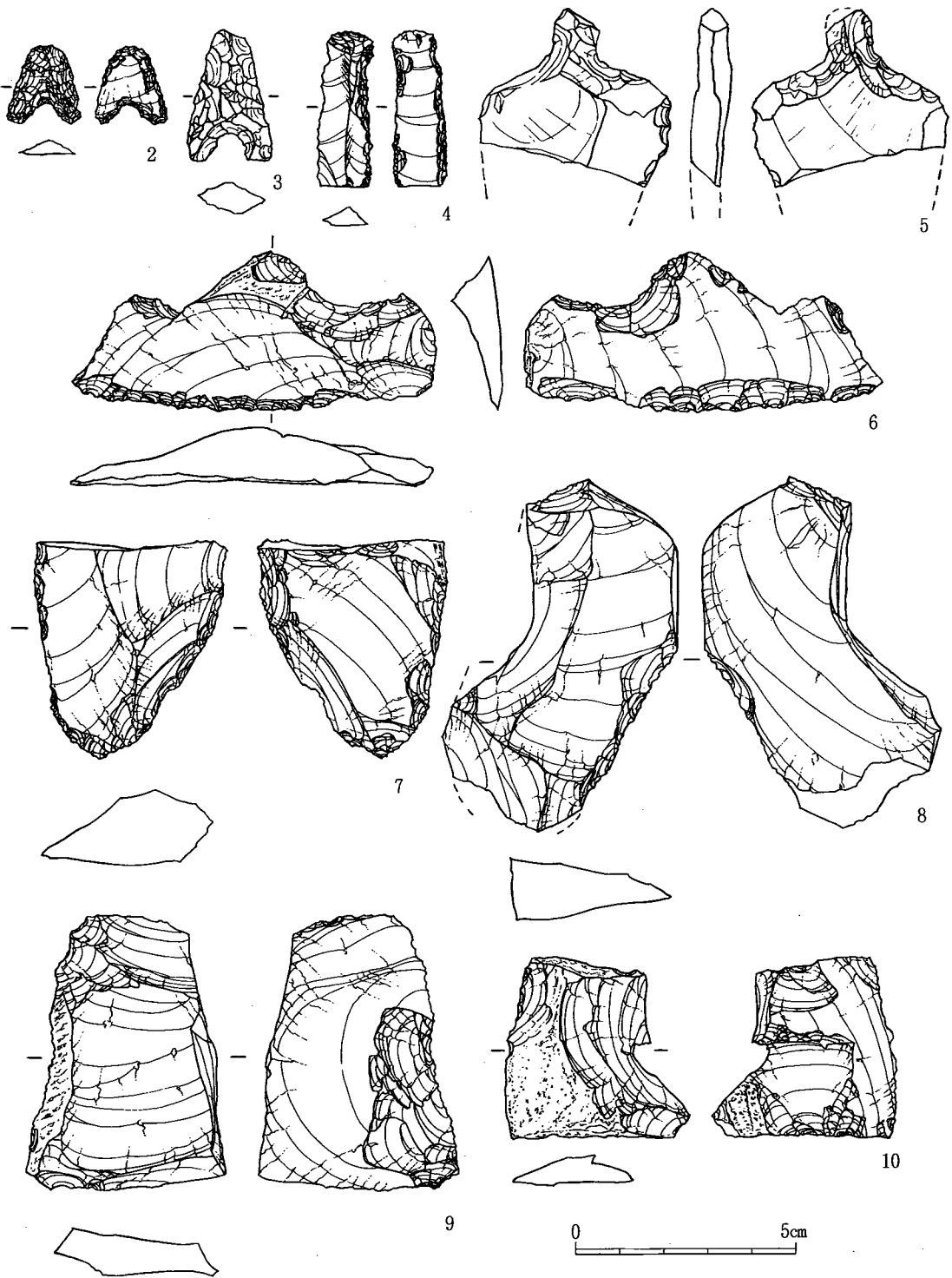
第15図 縄紋時代石器実測図. 1 (2/3)

部付近に刃部加工がある。

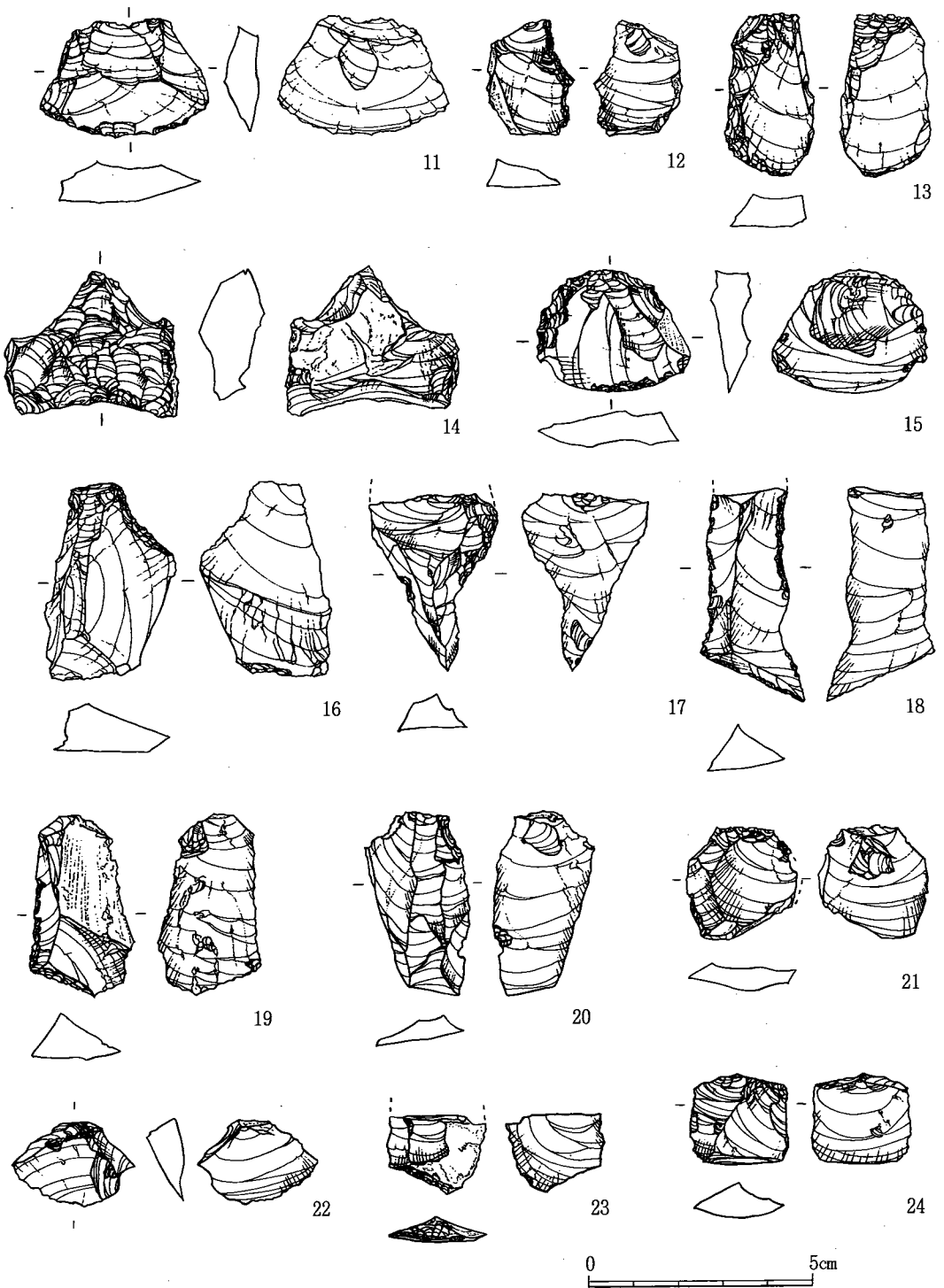
微細剥離のある剥片 (16~24) 16の微細剥離面の一部には磨滅のあとがある。サヌカイト製で全体のパティナは新しい。18は欠損部以外の全周に微細剥離がある。19や23は剥片端部に微細剥離が集中する。20、21、22、24は打点部付近に微細剥離が集中している。

楔形石器 (25~29) 25は剥離面は全面にあるが、楔状に用いられた使用痕は長軸の両極に集中している。26は厚手の縦長剥片を長軸方向に使用したのであろう。27~29も同様に剥片を楔状に使用したものである。

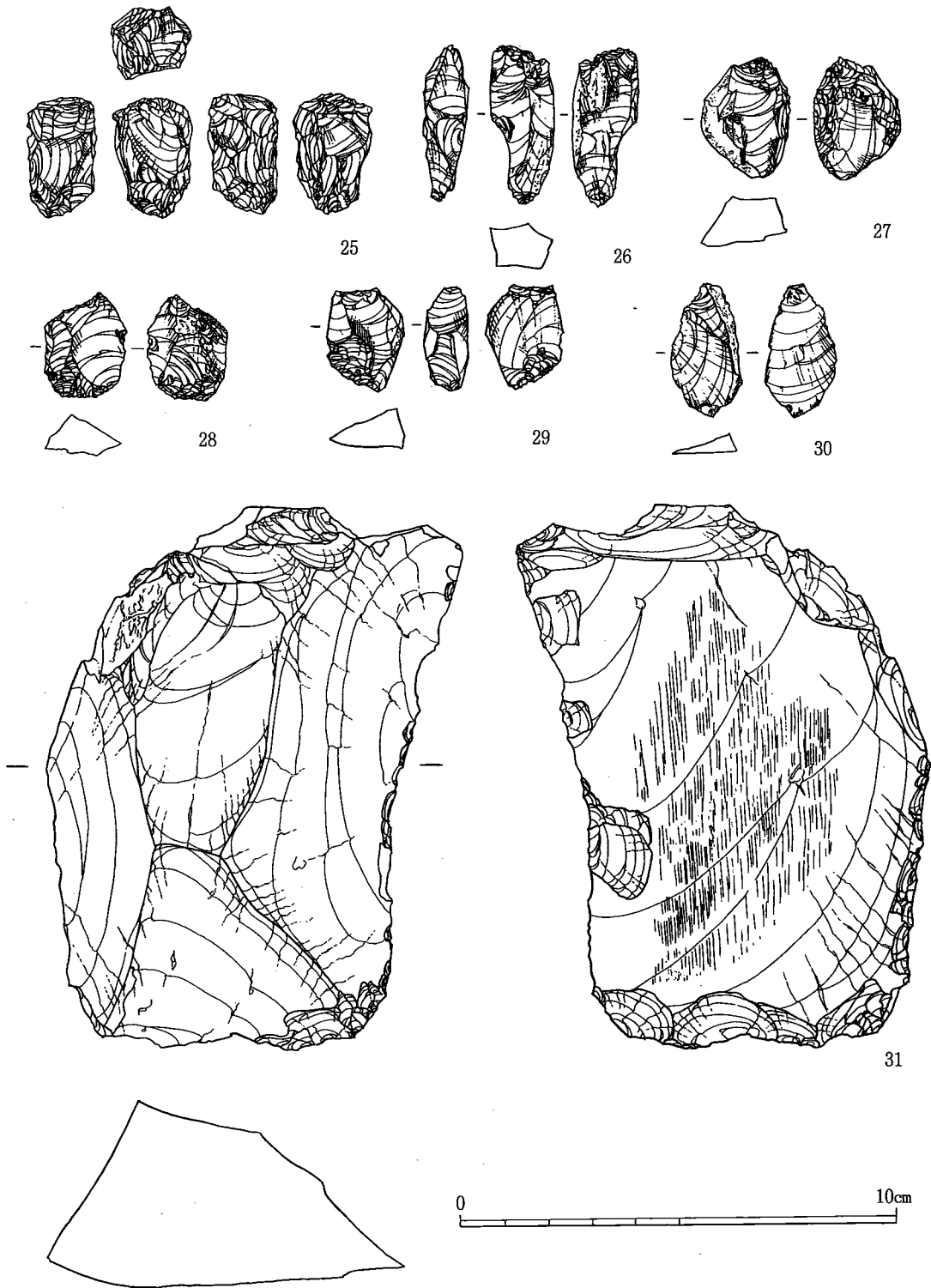
磨面のある剥片 (30・31) 30は剥片の末端部全縁と背面の稜線部や打瘤に擦れたあとがあ



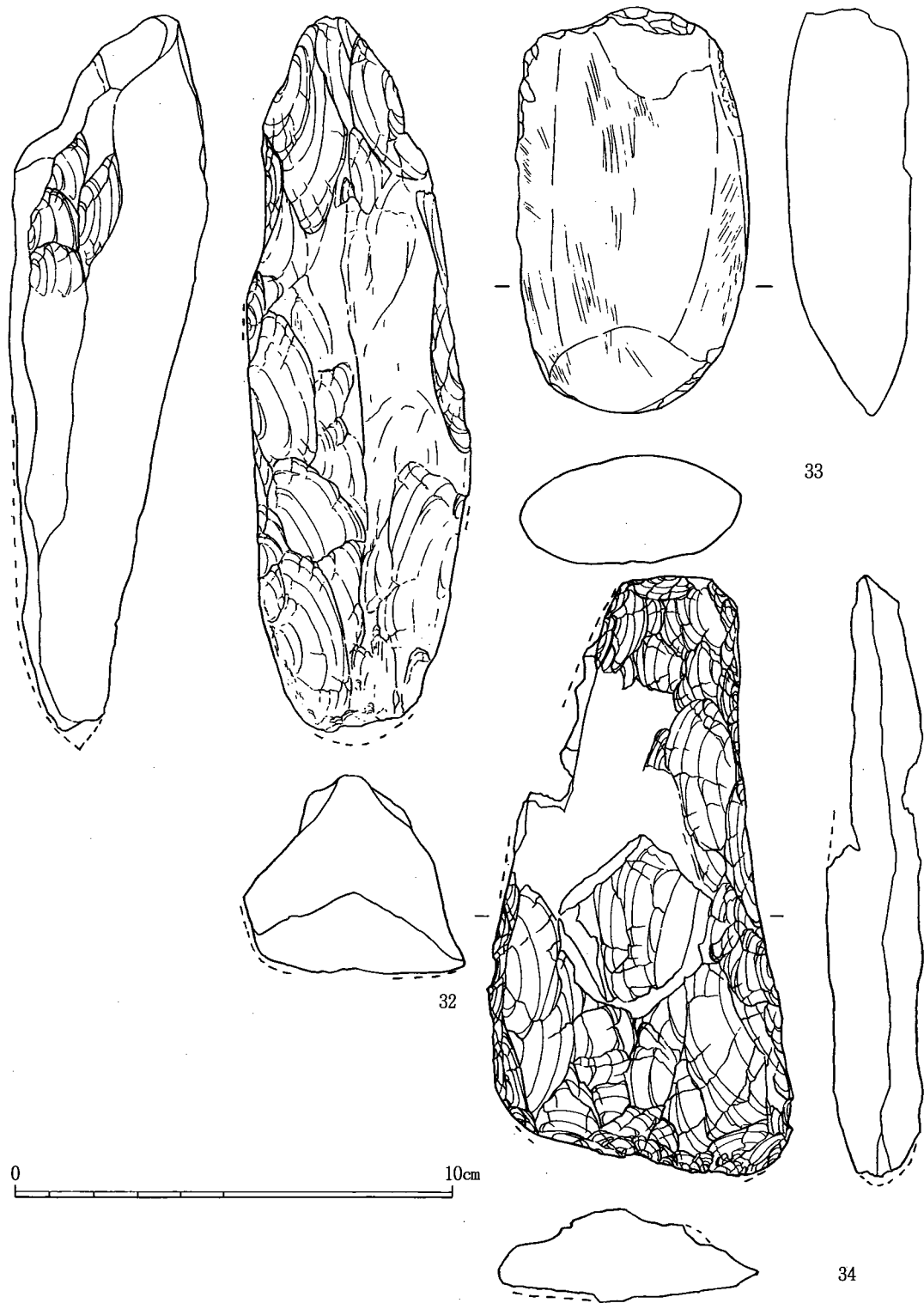
第16图 縄紋時代石器実測図. 2 (2/3)



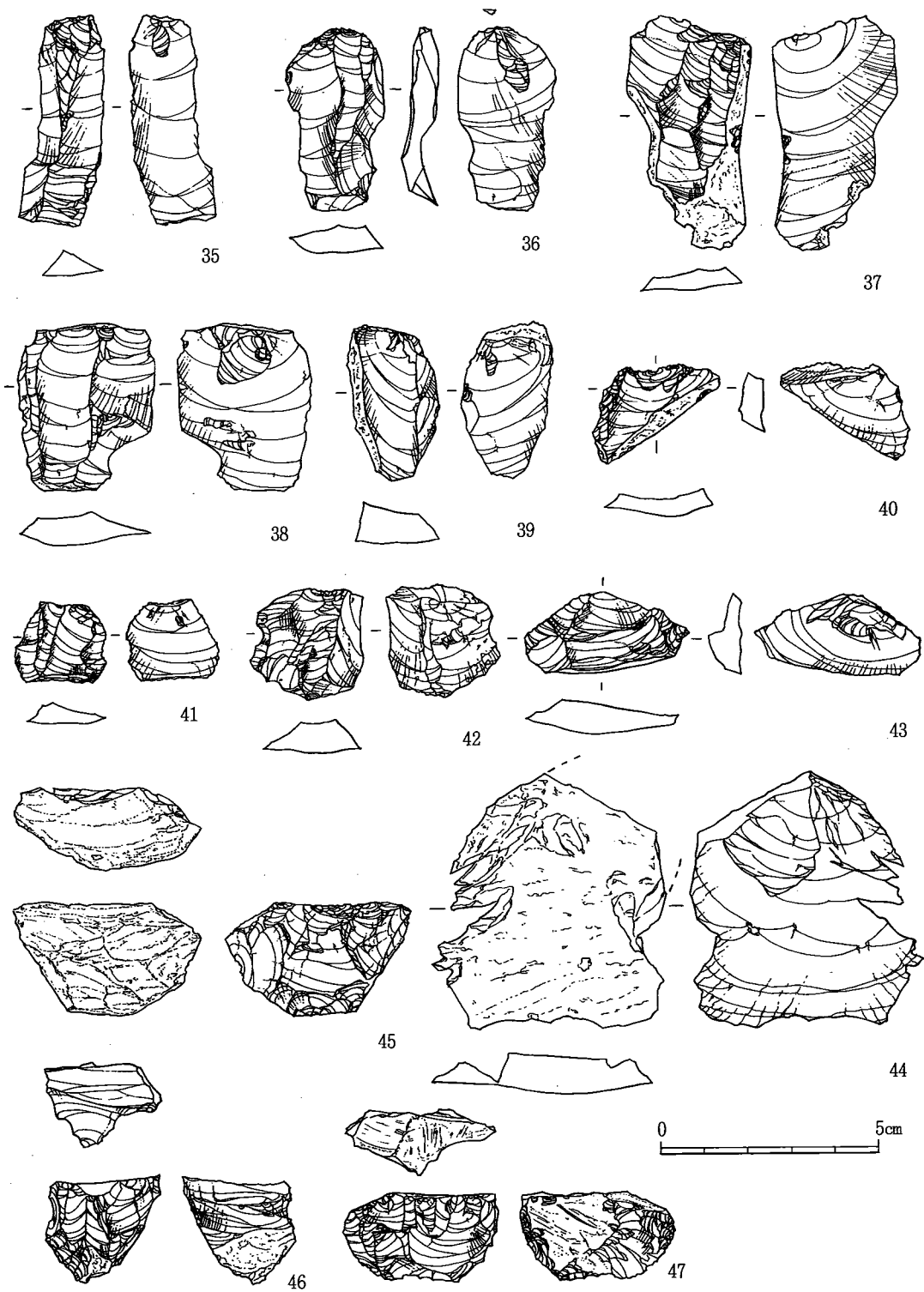
第17图 縄紋時代石器実測図. 3 (2/3)



第18図 縄紋時代石器実測図. 4 (2/3)



第19図 縄紋時代石器実測図. 5 (2/3)



第20图 縄紋時代石器実測図. 6 (2/3)

る。剥離面に及んでいないことから使用の結果残されたのであろう。31の大型剥片は素材剥片を剥離した可能性は背面に一面あるのみである。また端部には二次加工があり、主要剥離面には磨れた面が大きく残されていることから、この大型剥片がそのまま単独で使用された可能性が考えられる。ただ石器全体と二次加工面のパティナとに差があり、製作と使用が一時期のものかは検討を要する。

石斧 (32~34) 32は磨滅著しく研磨や加工状況がはっきりとわからないが、片刃で横断面が三角形を呈する特徴から「神子柴型石斧」と考えられる。玄武岩質であろう重量感がある。33は表裏面ともに研磨されている円鑿刃型の石斧である。ただ表面には大きく面的な研磨があり片刃状に仕上げられている。34の石斧は変岩製の打製石斧である。刃部を欠損している。

剥片・碎片 (35~44) 35は礫面直接加撃によるもので、背面には両極からの剥離作業の痕跡がある。36~38も礫面加撃によって縦長剥片が剥離されている。39はやや厚手の剥片である。40、42は作出の無調整打面の加撃によって剥離されている。43は礫と接する稜を加撃し剥離された横長剥片である。44の剥片は打面部が半損しており打面形状は不明である。

石核 (45~47) 45や47は礫面の直接加撃によってやや寸詰まりの素材剥片を剥離している。46は剥離面を加撃し素材剥片剥離を行っているが意図的な作出打面ではない。(杉原)

4. 弥生時代の遺構と遺物 I — 平坦面地区の調査 —

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡 (図版14 第21図)

1号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央西端に位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。住居跡の大部分は調査区外に広がり、また近接する福岡南女子高等学校のグラウンドフェンスの基礎によって削平されていることから、確認できたのは方形プランの北西隅3.1×2.2mだけである。埋土は暗褐色土で、壁高は最高で25cmを測る。50×46×12cmの炉跡を中心に、炭化物が1mほどの範囲で広がる。2本の支柱穴はいずれも60×45×35cmで、炉跡と壁にかなり近接した位置にある。北壁に接して116×74×66cmの屋内土坑状の遺構を検出したが、支柱穴との位置関係はもちろん、その支柱穴に切られることから、屋内土坑とは異なった性格の遺構と考えられる。出土遺物は少なく、パンケース1箱弱程度。

遺物 (第25図1~4) 図示できる資料は少ない。3は屋内土坑から出土しており、他は埋土中に含まれる。1・2は磨滅により器面調整不明。2・3は加熱により変色しており、甕の底部と考えられる。3・4の器面調整はナデ。4は器台の底部で、加熱変色が窺えることから支

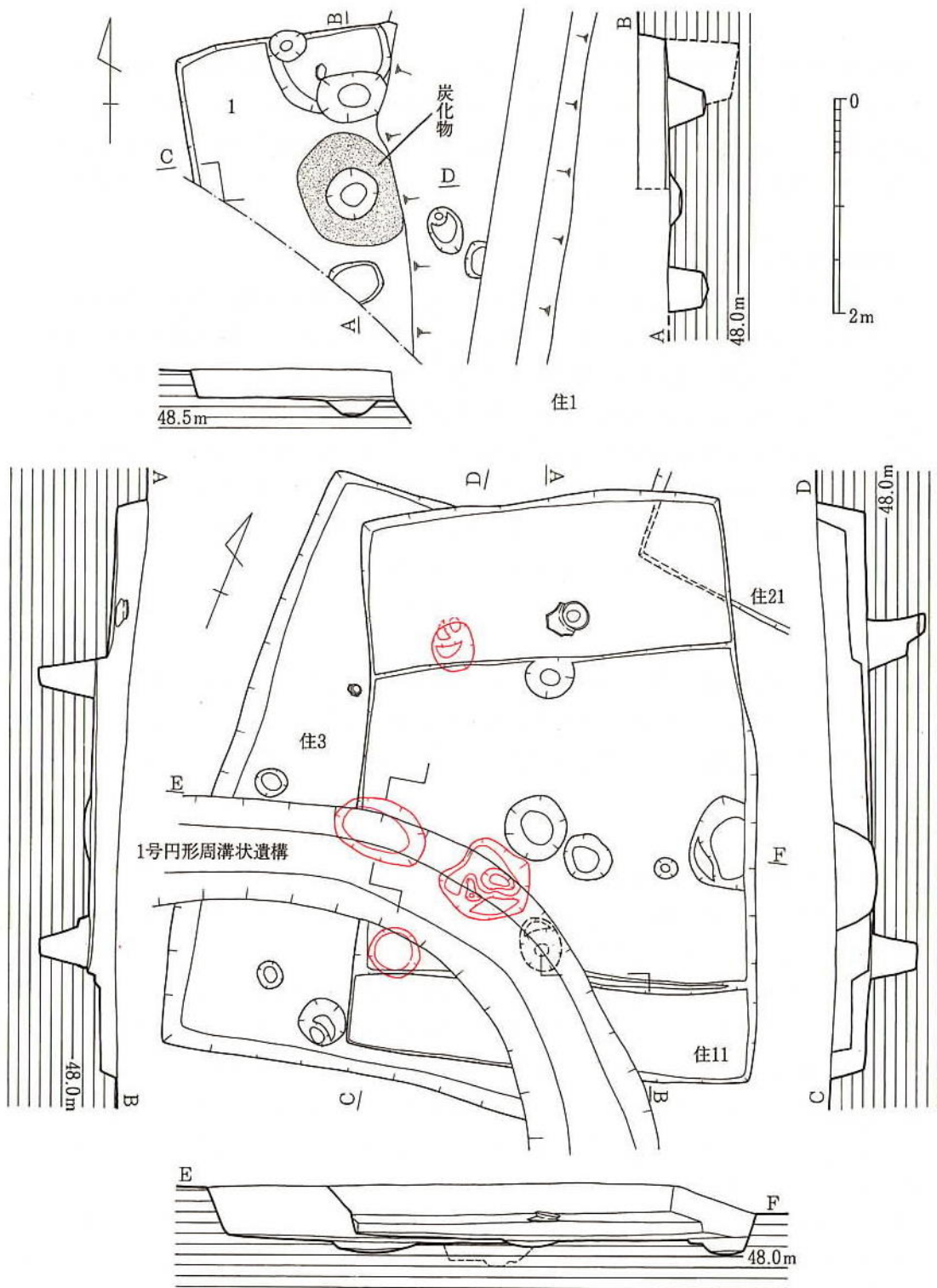
脚的機能を有していたと考えられる。

(水ノ江)

2号竪穴住居跡 (図版15 第22図)

2号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央西端に位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。直接的な切り合い関係としては56号竪穴住居跡を切るだけであるが、周辺の状況から4・27・57～60号住居跡も切っており、この地区に密集する住居跡群の中では最も新しいと考えられる。5.4×4.5cmの長方形プランで、長軸両端部に幅85～110cmの地山削りだしによるベッドが付く。北東壁には122×109×17cmの屋内土坑が、南西壁には幅15cm、深さ4cmの細い溝が掘り込まれる。78×66×12cmの炉跡を中心に、50×45×40cm程度の2段掘りになる2本の支柱穴が、ベッドに接するようにそれぞれ位置する。本住居跡で特筆すべきことは、中央溝の存在である。すなわち、本住居跡を構築する際に、まず床面の長軸線上に長さ3.3m、幅60cm、深さ30cm程度の細長い溝を掘り、それにそれほど締めりの良くない褐色土を意図的に埋め込み、それから炉や支柱穴をその中央溝に取って掘り込む、ということである。この溝の性格については、水抜き(湿気抜き)としての機能が想定されるが、本遺跡においても検出例は数例で、他の遺跡でもそれほど類例が多くないだけに、今後に残された課題としておきたい。また、炉跡西側に近接するピットには、炭化物が意図的に詰め込まれていた。出土遺物は比較的多く遺存状態も良好で、床面・ベッド・屋内土坑からはほぼ完形に復元できる土器4個体分が出土している。鉄鏃1点は床面に貼り付く状態で、砥石1点は埋土からの出土である。

遺物(第25～27図5～29 第233図1 第243図2)9・11・12・15・25は床面からの出土で、他は埋土中に含まれる。5・6は器面調整がナデの壺口縁部。7は壺の胴部で、1本の粘土紐を摘みあげてナデることにより、3本突帯文として表現している。8～10は壺の底部で、器面調整は摩滅が著しく不明。11の広口壺はほぼ完形近くに復元でき、口径は23.0cm、器高は33.6cmを測る。器面調整は内外面ともにハケで、胴部に大きな黒斑を有する。12は短口壺で、復元口径は約15cm。内面に残る接合痕から、1本の粘土紐は4～5cmだったことがわかる。12は復元口径8.5cm、復元器高7.6cmの直口壺で、内面底部にはハケが、外面の底部付近にはヘラナデ、それ以外にはミガキが施される。14～20は甕で、15・16の外面にはタタキが痕跡的に窺え、18・20の頸部と胴部には刻み目のある突帯文が貼り付けられる。器壁厚は4～5mmと薄いものが多く、19・20の底部では丸底になる。20の突帯文上の刻み目は細かく内外面ともにハケ目が施され、外面には煮沸による変色や炭化物の付着が窺える。21は加熱変色していることから、甕の底部に付く脚台と考えられる。22は摩滅により器面調整不明であるが、復元口径約28cmの高坏坏部。23は器形的には甑と考えられるが、加熱の痕跡は観察されない。内外面ともに上半部にハケが、底部付近に工具によるナデが施される。24はボウル状の鉢で、摩滅が著しいが内面のみハケが残る。2はほぼ完形の器台で、口径14.2cm、底径13.9cm、器高17.8cmを測る。口縁



第21図 1・3・11号竖穴住居跡実測図 (1/60)

部の内面にナデが施される以外はすべてハケ。胎土に雲母が含まれるのが特徴的。26は突起のある支脚で、外面にはタタキが痕跡的に残り、加熱による変色が窺える。27～29は小型の鉢で、28・29の器面調整は工具によるナデである。第233図1の砥石は粘板岩製で埋土からの出土。第243図2の鉄鏝は床面からの出土。(水ノ江)

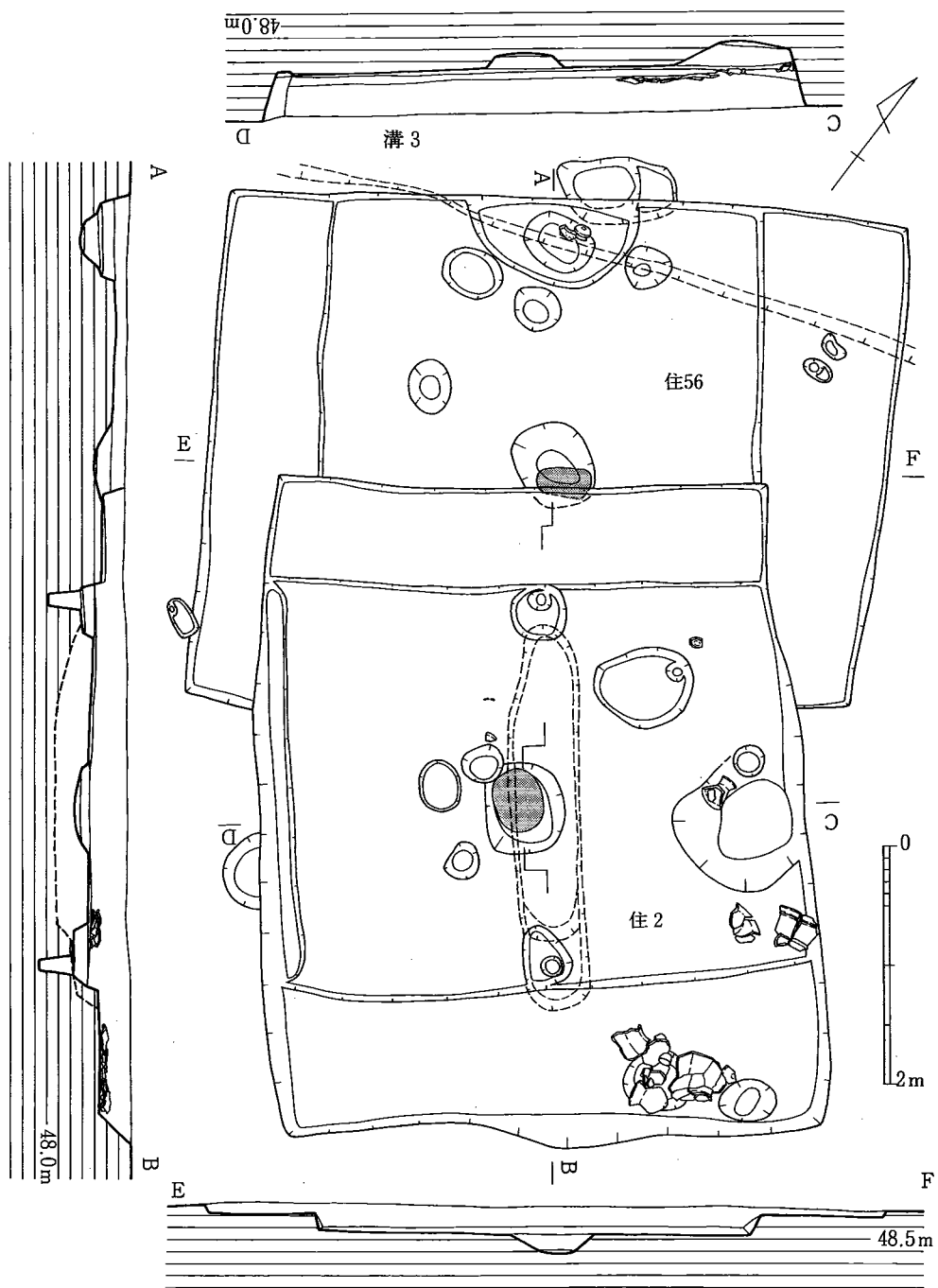
3号竪穴住居跡(図版16 第21図)

3号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央西端に位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。当初は1号円形周溝状遺構に切られる1軒分の竪穴住居跡という認識で掘り進めたが、途中で2軒の竪穴住居跡が切り合っていることが判明し、切られている住居跡を3号、切っている住居跡を11号とした。3号住居跡は南北5.4m、東西については東壁が11号住居跡と1号円形周溝状遺構とに大きく切られているため正確な数値を求めることはできないが、残存部分と屋内土坑との位置関係から、約3.3m程度であったと考えられ、長方形プランを呈していたことが想定される。長軸上には87×55×7cmの炉跡と、径45cm、深さ50cm程度の2本の支柱穴があり、おそらく東壁に沿うように85×75×20cmの不定形な屋内土坑が掘り込まれる。出土土器は少なく、図示できたのは6点だけである。

遺物(第27図30～35)床面から出土したのは32だけで、他は埋土からの出土。31は復元口径約19cmの甕で、外面にはタタキの後のハケが痕跡的に窺える。32は加熱により変色しており、甕の底部と考えられる。33は高坏の坏部と脚部の接合部で、脚部内面にはしぼり痕がわずかに残る。34は口縁部を内側へ強く折り込む器台で、復元口径は約15cm。35は器面調整ナデの鼓形器台の脚部であろうか。(水ノ江)

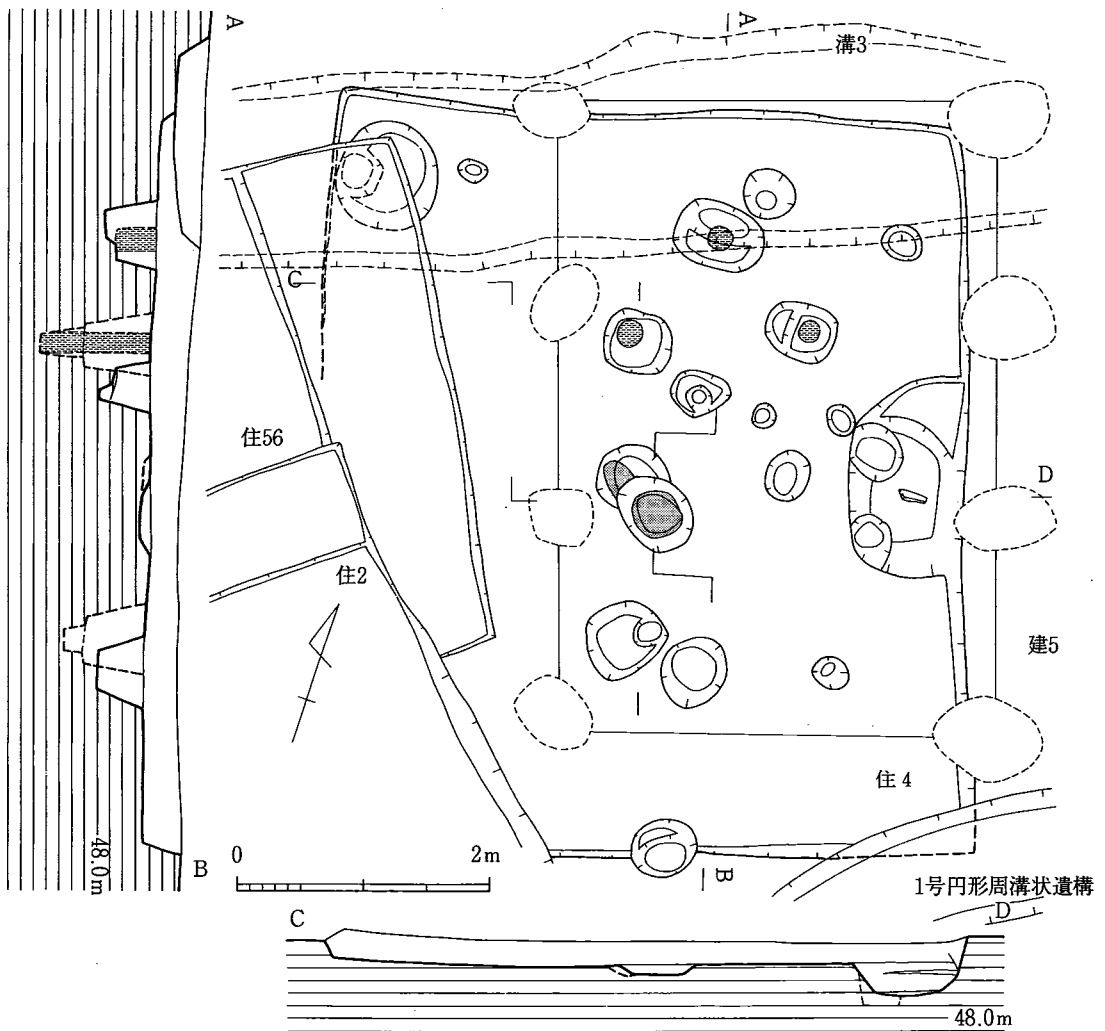
4号竪穴住居跡(図版17 第23図)

4号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央西側に位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。中近世の5号掘立柱建物跡や3号溝、弥生時代の2・56号竪穴住居跡や1号円形周溝状遺構に切られており、多くの部分が削平されているが、5.9×5.1cmの長方形を平面プランとすると考えられる。本住居跡の検出段階から床面に至るまでの調査では1軒の住居跡と認識していたが、炉跡や支柱穴は2軒分が検出された。炉跡(第24図)は70×55×10cm程度のものが2基切り合っており、それに対応するように径40～50cmの支柱穴が長軸上に掘り込まれている。屋内土坑(第24図)は162×92×28cmのものが1基だけ検出され、東壁中央部に沿う。この屋内土坑の両端には深さ30cm程度のピットが2基並んで掘られており、その位置関係から何らかの付属施設の痕跡と考えられる。床面中央部から砥石が1点出土(第233図2)。床面ではいくつかのピットが検出され、柱痕が残るものもある。出土遺物は少なくパンケース1箱程度。

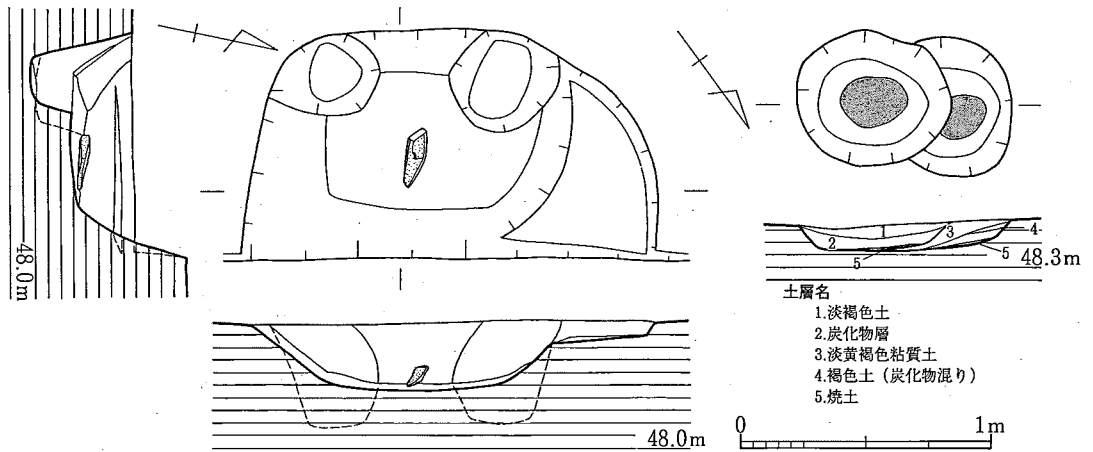


第22図 2・56号竖穴住居跡実測図 (1/60)

遺物（第27図36～46 第233図2・3）床面からの出土は43だけで、他は埋土中に含まれる。36は高坏の坏部になろうか。摩滅により器面調整不明。38～43は甕で、全体的に遺存状態が悪く器面調整の窺えるものは少ない。41は復元口径約4cm、37の突帯文には刻目が施されず、42は加熱により若干変色している。44は高坏の脚部で、45・46は鉢になろうか。第233図2の頁岩製砥石はかなりの大型で床面からの出土。 (水ノ江)



第23図 4号竖穴住居跡実測図 (1/60)



第24図 4号竪穴住居跡屋内土坑・炉跡実測図 (1/30)

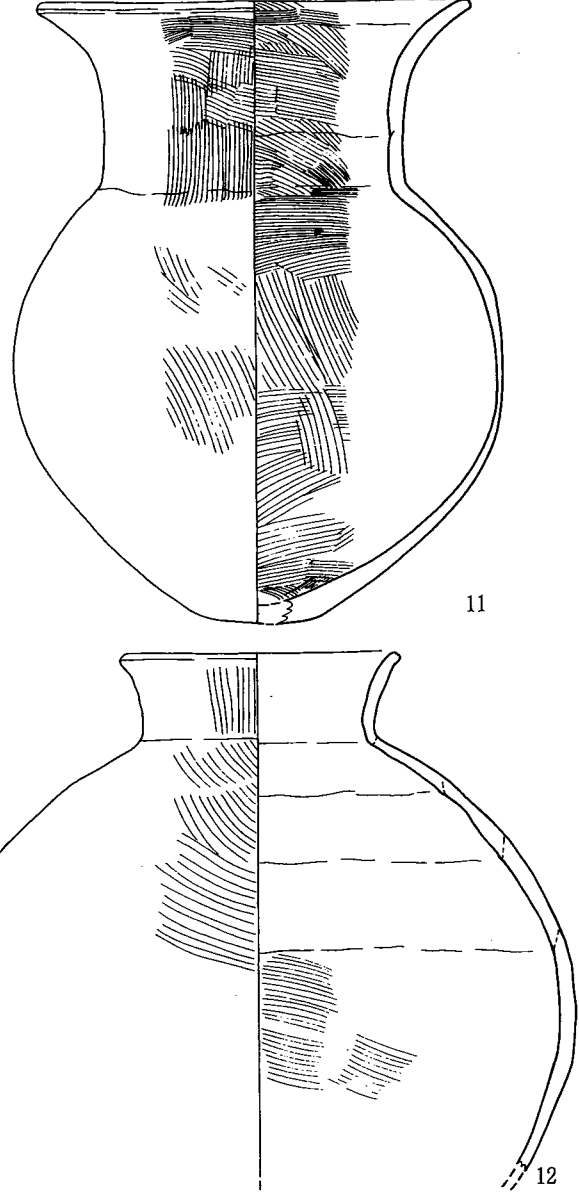
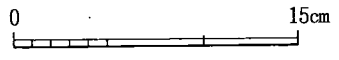
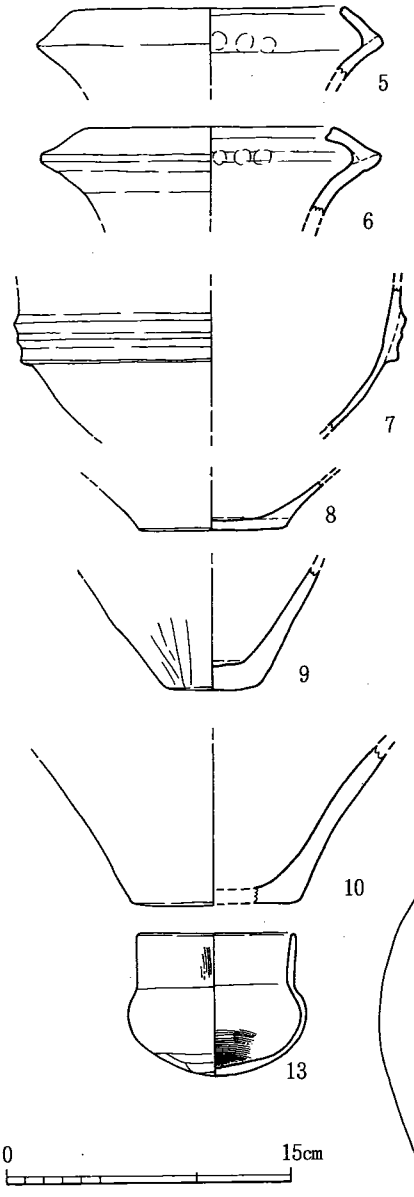
5号竪穴住居跡 (図版18~20 第31図)

5号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央部に位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。6~9号竪穴住居跡をはじめ3号掘立柱建物跡を切るが、この住居跡を切る遺構は確認できなかった。6.3×5.0mの長方形プランで、壁高は最高で31cmを測る。長軸両端部に地山の削りだしによるベッドを有し、東側のベッドは直線的で幅105cmであるのに対し、西側のベッドはL字形を呈して最小幅65cmしかない。炉跡(第28図)は77×58×12cmの楕円形で、この炉跡を中心に1.2×0.8mの範囲で炭化物が広がる。主柱穴は径55cm、深さ40cm程度のもので2本で、長軸線上のベッドに近接したところに位置する。本住居跡で特筆すべきことは、2号竪穴住居跡と同様に中央溝の存在である。すなわち、本住居跡を構築する際に、まず床面の長軸線上に長さ3.8m、幅65cm、深さ35cm程度の細長い溝を掘り、それにさほど締まりの良くない褐色土を意図的に埋め込み、それから炉や主柱穴をその中央溝に敢えて掘り込む、ということである。この溝の性格については、水抜き(湿気抜き)としての機能が想定されるが、本遺跡においても検出例は数例で、他の遺跡でもそれほど類例が多くないだけに、今後に残された課題としておきたい。屋内土坑は南西壁中央部からやや西側にずれた場所で、112×45×29cmの規模で検出された。砥石も1点含まれる(第233図5)。この他にも屋内土坑状の掘り込みが壁に沿っていくつか検出されたが、その深さや砥石の存在から、この南西壁やや西寄りものを屋内土坑とした。遺物は比較的多く、南西側のベッド中央部付近で纏まって出土した。

遺物(第32・33図1~16 第230図1・15 第233図4・5 第241図1 第247図204) 図示した土器のうち、1・2・6・7・9~11・14・16は床面から、その他は埋土からの出土。確実に壺といえるのは1ぐらいで、復元胴径23cm。外面は摩滅が著しく、内面にはハケの痕跡が窺

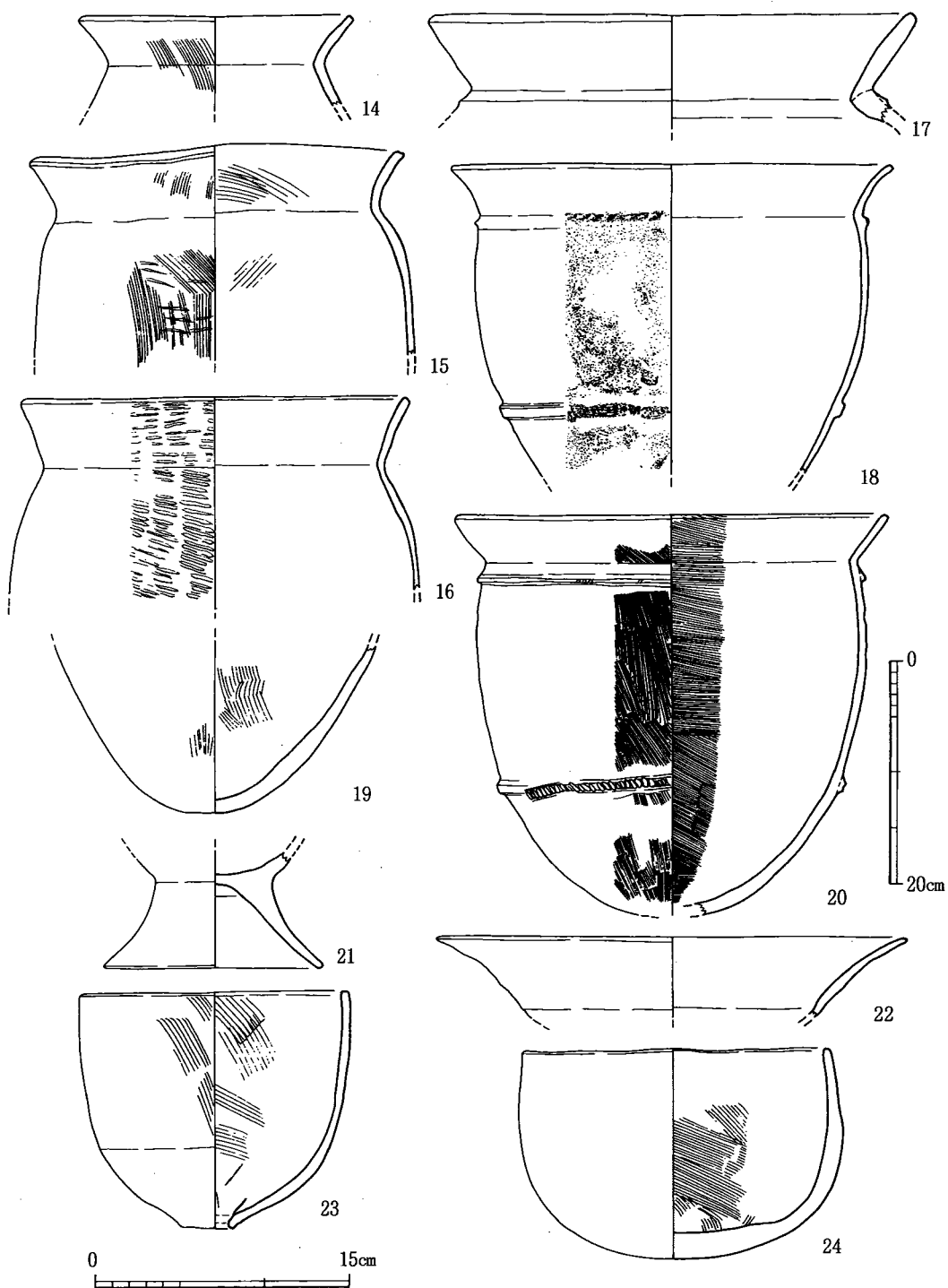


1号竖穴住居跡

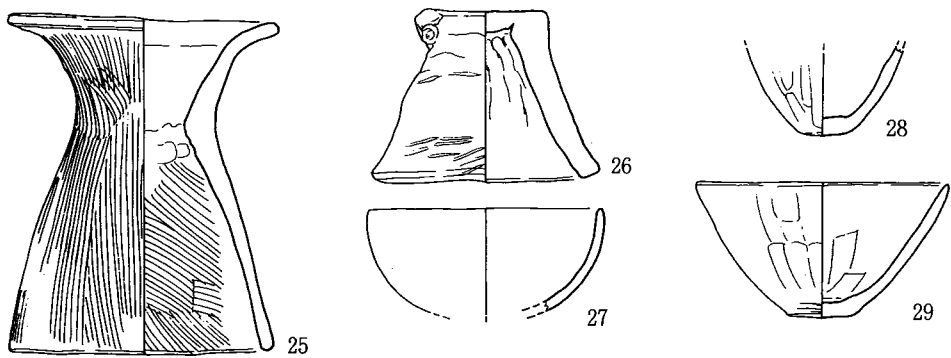


2号竖穴住居跡

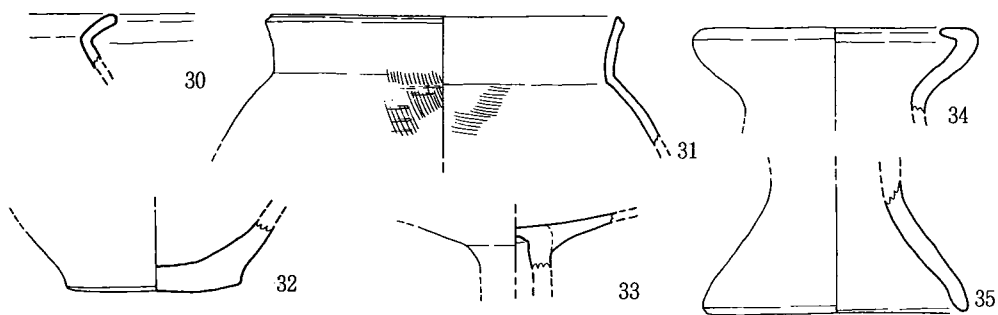
第25图 1・2号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/4)



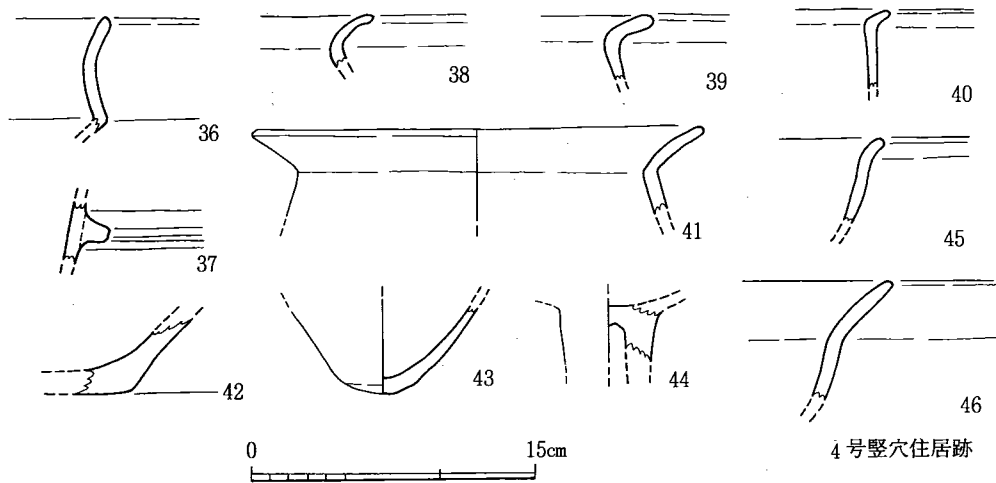
第26图 2号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)



2号竖穴住居跡



3号竖穴住居跡



4号竖穴住居跡

第27图 2~4号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)

える。2～7は甕で、6には焼成後に底部に近い部位で穿孔が行なわれており、7にはタタキ後のナデが見られる。8・9は高坏の坏部、10・11は小型の鉢。12はその器形と焼成前の穿孔から甕と考えられるが、加熱変色は窺えない。13の支脚は突起の部分だけ加熱の痕跡が弱い。16は匙状の土器で、把手部は完全に残る。2点の石庖丁は輝緑凝灰岩で、第230図1は埋土から、15は床面からの出土。2点の砥石はいずれも粘板岩で、第233図4は床面から、5は屋内土坑からの出土。第241図1は床面において検出されたピットから出土した片岩系の磨製石鏃。第247図204は床面から出土したスカイブルーのガラス玉。(水ノ江)

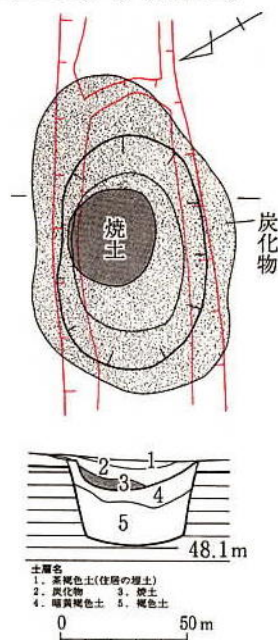
6号竪穴住居跡 (図版21 第29図)

6号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央部に位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。5号竪穴住居跡には切られるが、7号竪穴住居跡は切る。5号住居跡のほうが深く掘り込まれているため、東側1/3は残っていない。したがって、南北方向については5.8m、東西方向については最高で6.3mという数値が測れるが、いずれにせよ東西方向に長い長方形の平面プランであることは間違いない。本住居跡でもっとも問題になるのは、炉跡と支柱穴が確認できなかったことである。屋内土坑については、不定形ながらも南壁中央部に145×85×19cmのそれらしきものが存在している。しかし、支柱穴に関しては、位置関係だけでなく深さにおいても支柱穴として機能を果たしたと考えるのは見当たらない。床面でも明確な貼り床や炭化物の広がりも窺えず、このようなことから本住居跡が本来住居として使用されていたのか疑わしい面もある。遺物の出土も少なくパンケース1箱弱で、全体に摩滅が著しくまた小破片であることから、図示できる資料も少なかった。

遺物 (第33図17～22) いずれも埋土からの出土で、摩滅が著しく器面調整が確認できたのは、ハケが窺える19・22だけである。17～19の器形は壺、20は甕といっても復元口径14cmの小型で、21は加熱変色しており器台の脚部と考えられる。(水ノ江)

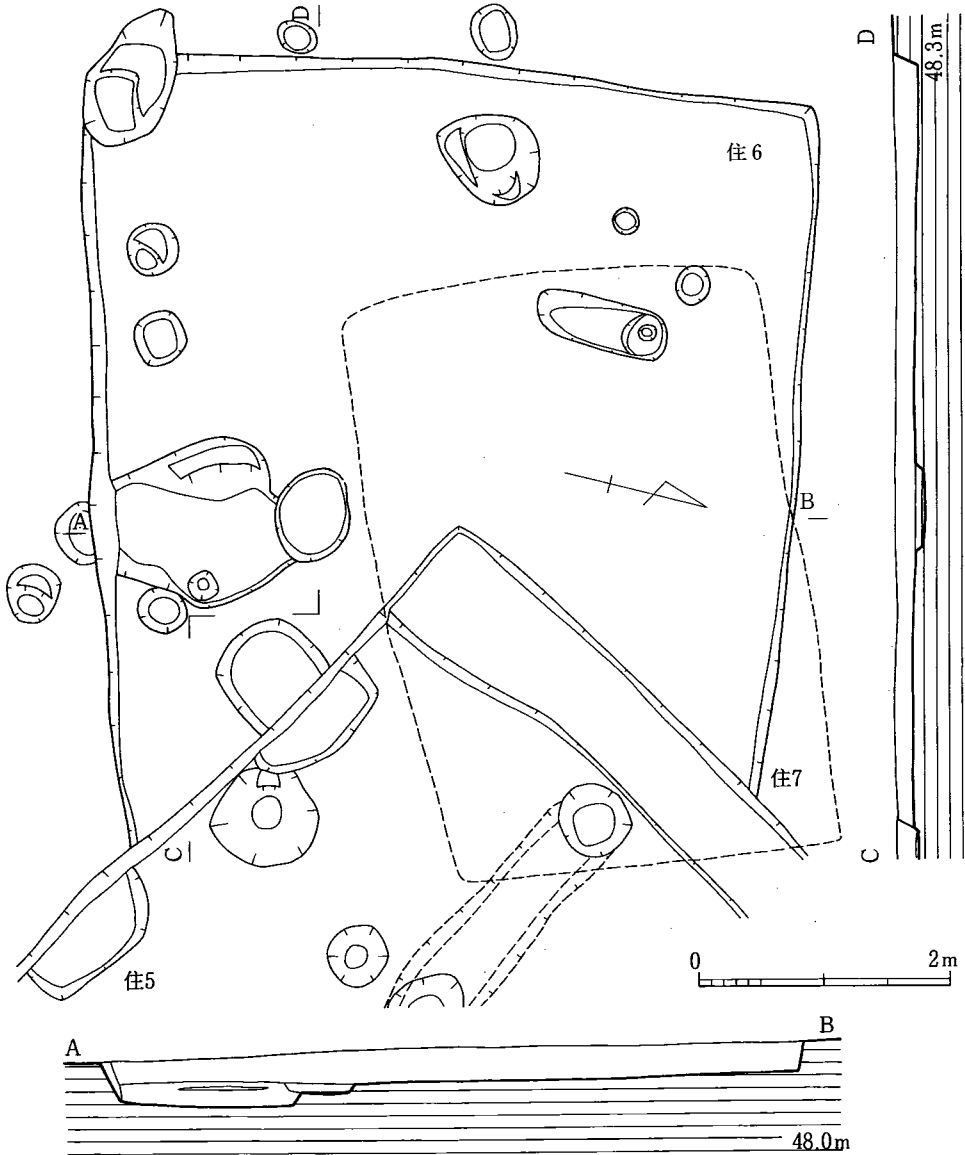
7号竪穴住居跡 (図版21 第30図)

7号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央部に位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。5・6号竪穴住居跡に大きく削平され、遺構の検出作業段階で確認できたのは北西隅の一部分だけであったが、かなり深く掘り込まれており壁高は最高で54cmを測る。平面プランは4.8×3.3cmの小型の長方形で、ベッドは作られない。中心部に75×68×6cmの炉跡があり、長軸線より



第28図 5号竪穴住居跡中央溝・炉跡実測図(1/30)

やや北側に径50cm、深さ55cmの2本柱の主柱穴が掘り込まれる。いずれの主柱穴でも径15cm程度の柱痕が観察された。南壁の中央部に沿って、96×72×26cmの屋内土坑が検出され、比較的多くの遺物が含まれていた。東側の主柱穴の横には、約80~100cmの範囲で厚さが最高で18cmの黄褐色粘質土の塊が見られたが、その性格については不明。壁に沿った幅10cm、深さ8cmの周溝は、西側2/3にだけ見られ、東側には存在しない。床面はかなり堅くなった赤褐色の貼床で、色調やクラックの状態からおそらく焼いて堅くしたものと考えられる。炉跡の周辺には炭化物



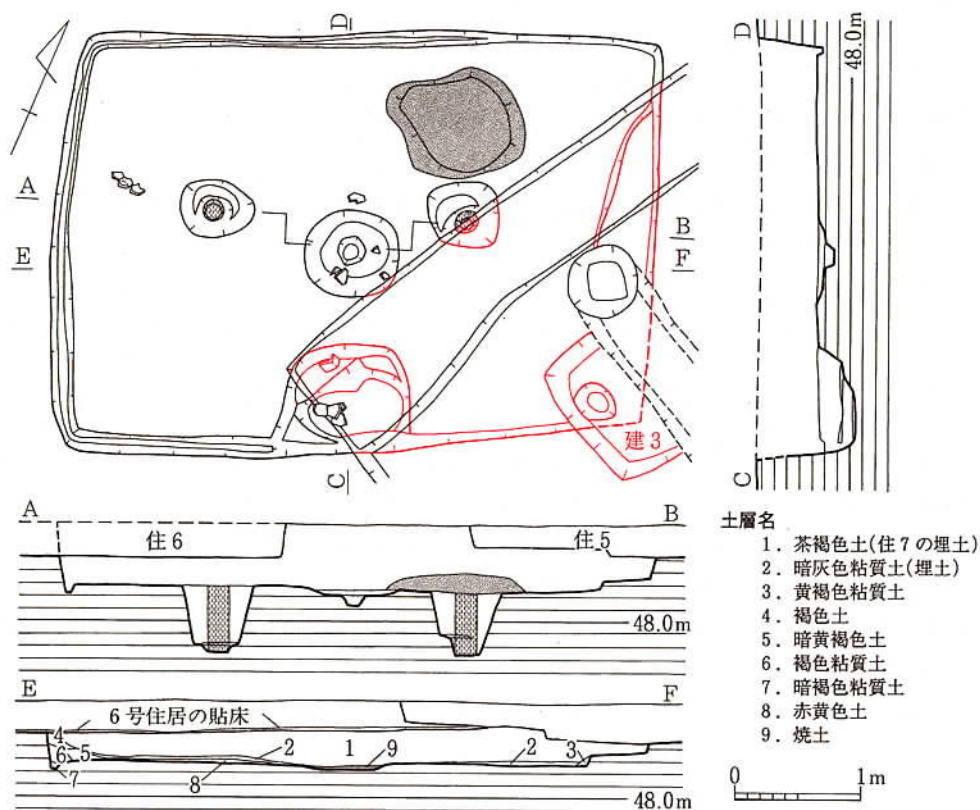
第29図 6号竖穴住居跡実測図 (1/60)

の広がりが見られなかった。遺物は比較的多くパンケース2箱程度であるが、図示できる資料は意外と少ない。

遺物（第33図23～34）床面からの出土は25・28だけである。25の壺の口縁部外面には放射状に沈線文が施されるが、口縁部全体に施されているわけではない。26～31は甕で、底部については加熱変色している。32は器台の脚部で、やはり加熱変色する。34は完形の小型鉢で、内外面にハケ目が窺える。（水ノ江）

8号竖穴住居跡（図版18 第31図）

8号竖穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央部に位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。5号竖穴住居跡と3号掘立柱建物跡に大きく切られ、また壁高も最高で14cmしか残らないことから、規模や構造については不明な部分が多い。平面プランは長方形になるうが、短軸方向の東壁については6.1mが、長軸方向については北壁で最高5.7mまでしか測れない。東壁の北端には幅90cmほどのベッドが見られるが、これも部分的なため本当に



第30図 7号竖穴住居跡実測図 (1/60)

ベッドか疑わしい。炭化物が1 mの範囲で広がる76×68×19cmの炉跡も、本住居跡の中央や長軸線上に位置しておらず、本来本住居跡に伴うものはやはり疑わしい。主柱穴や屋内土坑も確認されておらず、竪穴住居跡としての性格を持った遺構であるのか検討を要する。遺物は少なく、図示できる土器は第33図35の壺底部のみで、復元底径7cmで外面にハケ目が窺える。第230図3の石庖丁は摩滅が著しいが輝緑凝灰岩製であろう。(水ノ江)

9号竪穴住居跡 (図版18 第31図)

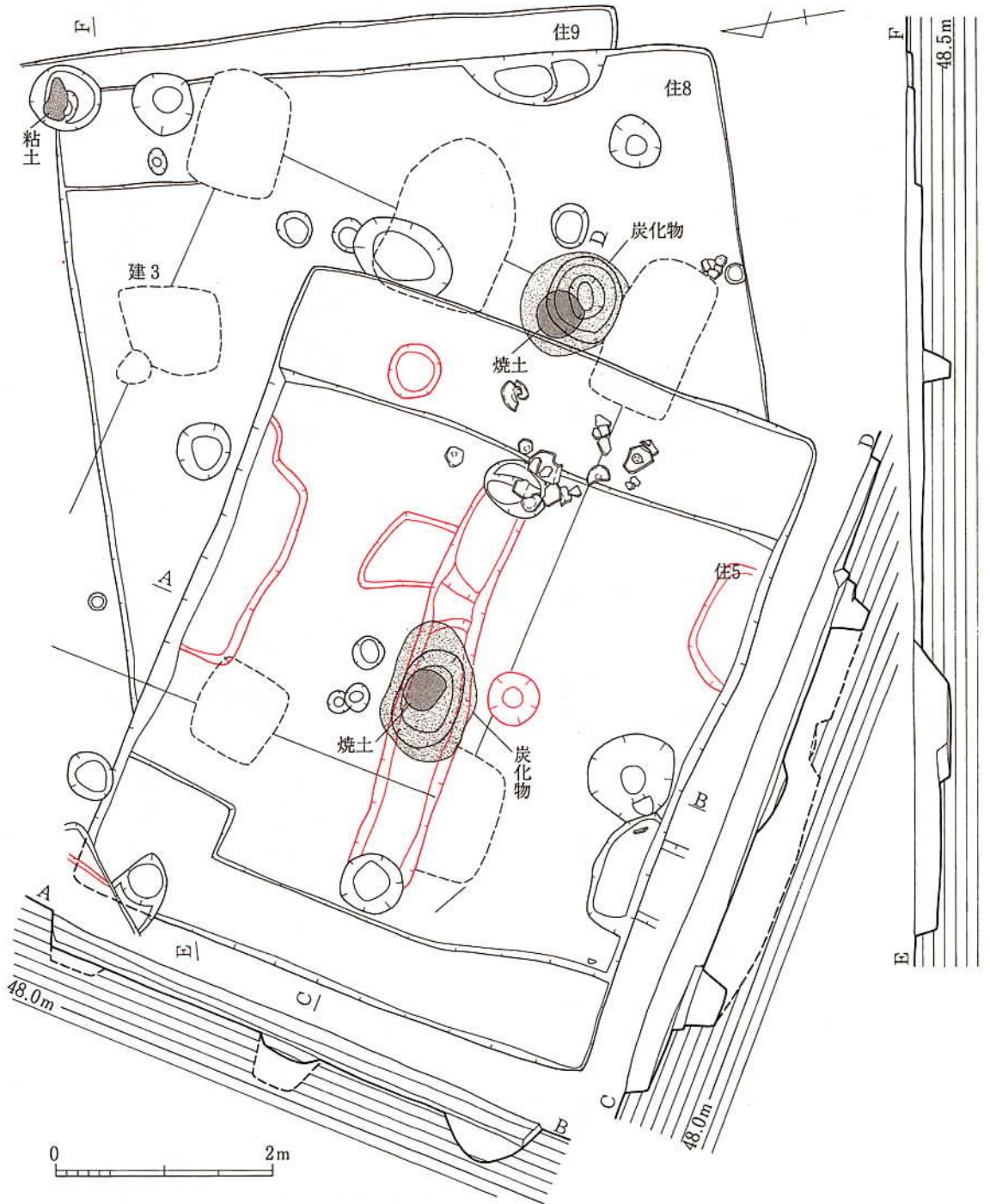
9号竪穴住居跡も丘陵平坦部調査区の中央部に位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。5号竪穴住居跡や3号掘立柱建物跡はもちろん、8号竪穴住居跡にも大きく切られ、残っているのは東壁を中心に5.5×0.4mとごく一部である。平面プランはおそらく長方形になろうが、壁高は最高で4 cm。主柱穴・炉跡・屋内土坑等はまったく検出しておらず、また遺物の出土もないことから、竪穴住居跡とするには問題の多い遺構である。

(水ノ江)

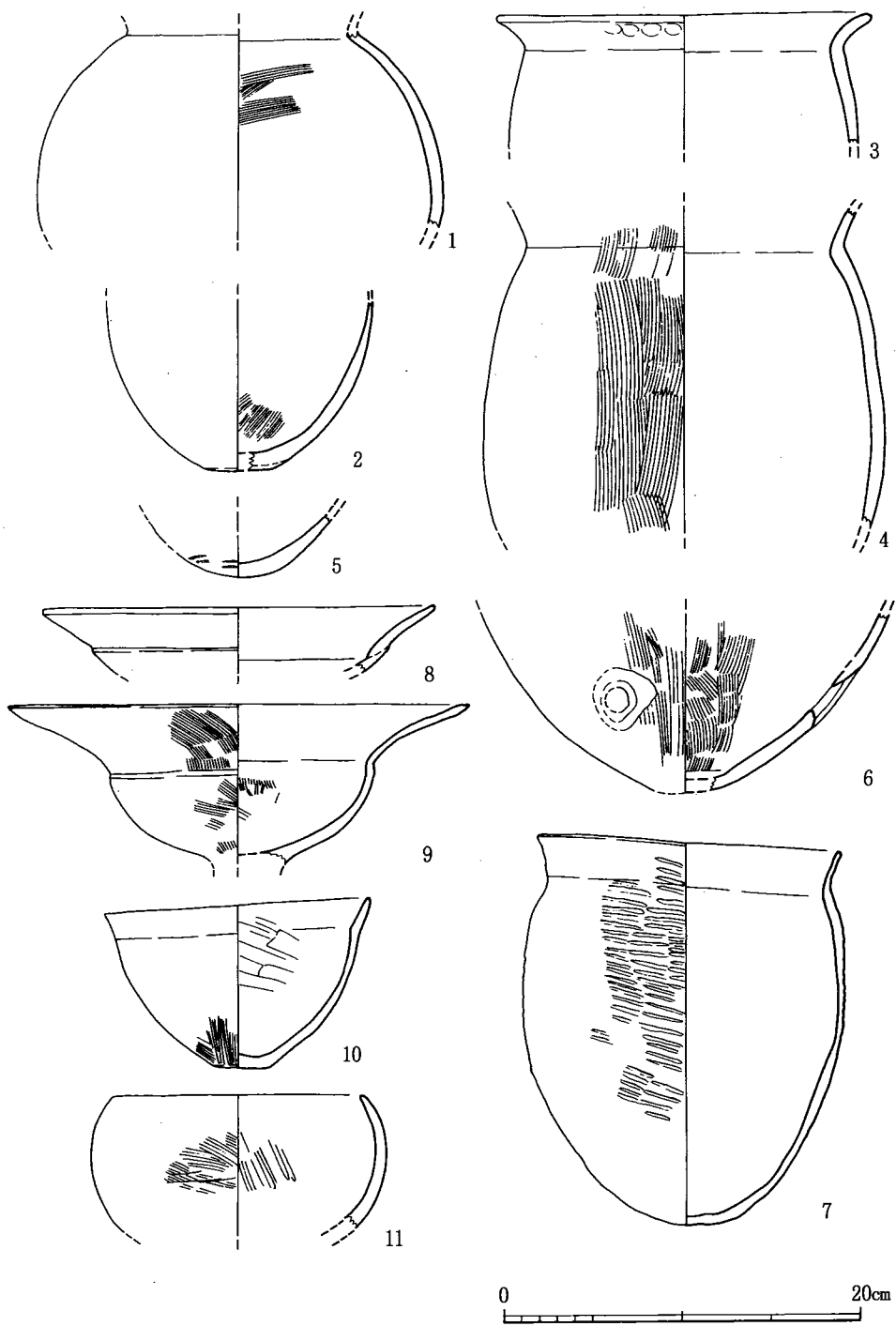
10号竪穴住居跡 (図版22 第34図)

10号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央に位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。16号竪穴住居跡をわずかに切るだけで、他の遺構との切り合い関係は存在しない。6.4×4.7mの長方形プランで、壁高は最高で21cm。南西壁側が「コ」字状に開く幅105～110cmのベッドが、地山の削りだしによって作られる。ベッドのないこの南西壁に沿って幅15cm、深さ3 cmの溝が掘られ、さらにこの溝の中央部に沿うように、すなわち溝と切り合うことなく接するように、78×55×22cmの屋内土坑が作られる。本住居跡でも、2号や5号竪穴住居跡と同様に中央溝が存在する。これは本住居跡を構築する際に、まず床面の長軸線上に長さ3.3m、幅50cm、深さ35cm程度の細長い溝を掘り、それにさほど締まりの良くない褐色土を意図的に埋め込み、それから炉や主柱穴をその中央溝を切り込むように掘る、ということである。この溝の性格については、水抜き(湿気抜き)としての機能が想定されるが、類例が少ないだけに今後の課題としておきたい。2本の主柱穴は、北西側は径20cm、深さ45cm、南東側は径65cm、深さ45cmを測る。これら2本の主柱穴と72×70×6cmの炉跡は、本住居跡の長軸線上に並ぶ。北西壁のベッド中央部でも床面に近い90×30cmの範囲には、焼成により赤褐色に変色して硬化している部分が認められた。床面全体に焼土・炭化物・炭化材が広がるが、その下からの遺物の出土は少なく、大部分はその上、すなわち床面から15cm浮いた状態で多量の遺物が検出された。南東側のベッドに貼り付くように鉄鎌(第244図12)が1点出土している。

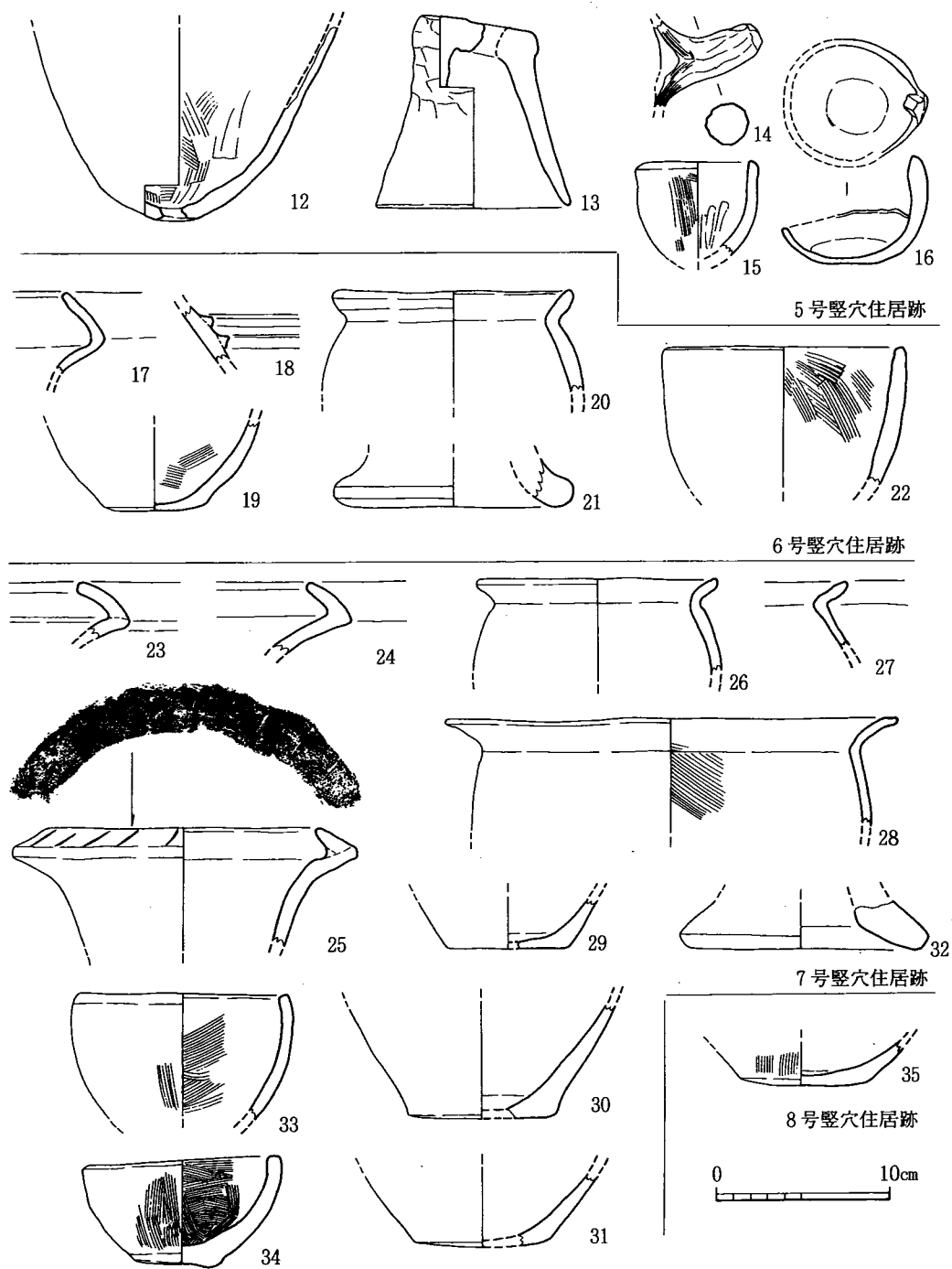
遺物 (第35～39図 第241図2 第244図2・6・12～14 第247図209) 確実に床面から出土した土器は13・48・50の3点だけで、他の大部分は埋土中に一括投棄されたものである。1～10は壺で、2～4は広口、5～8は狭口になろう。多くの場合、器面調整は内外面ともにタタキの後にハケが施されるが、8については外面底部付近にハケ後のケズリが見られる。底部は8



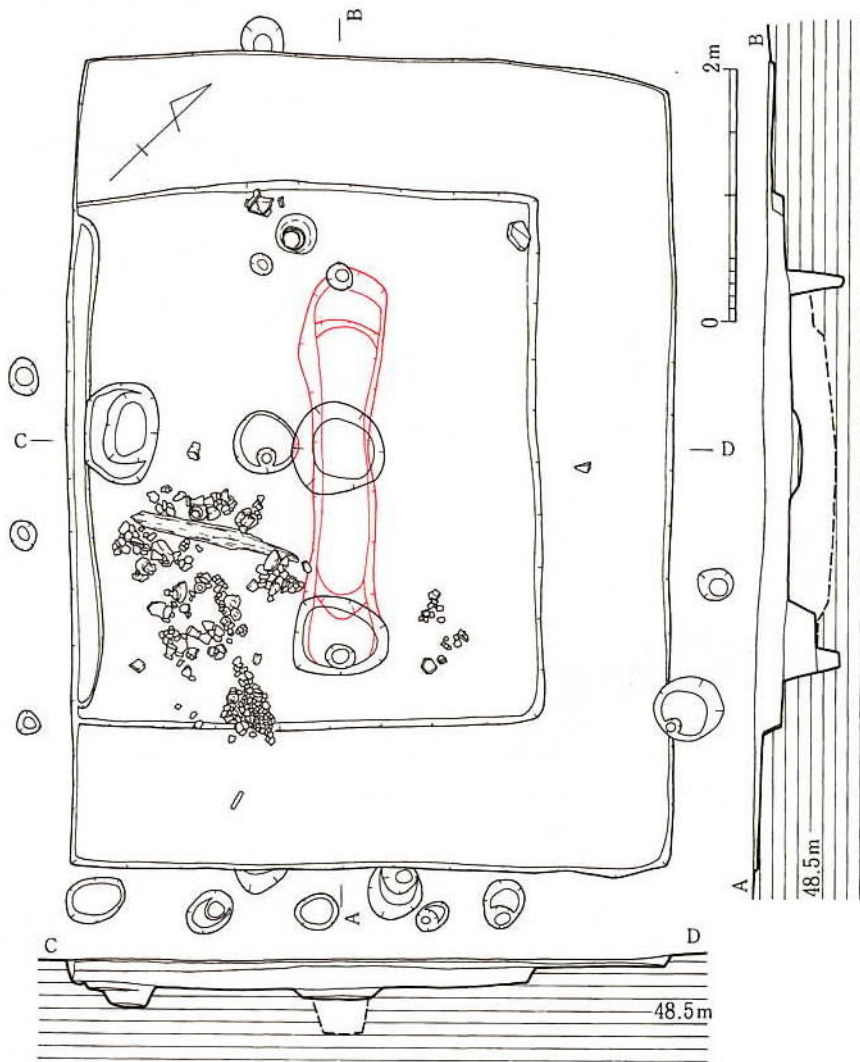
第31图 5·8·9号竖穴住居跡实测图 (1/60)



第32图 5号竖穴住居跡出土土器実測図(1/4)



第33图 5~8号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)



第34图 10号竖穴住居迹实测图 (1/60)

のように辛うじて残るものもあるが、概して丸底化している。3の肩部に見られる刺突文状の短斜線文は文様ではなく、頸部の突帯文に刻目を施した時についた工具痕である。11～20は甕、21～27は甕の底部と考えられる。器面調整についてはハケが多くに見られるが、11や19の外面にはタタキがそのまま残る。底部については加熱による変色が生じており丸底がほとんどであるが、25・26のように丸く突出するものも見られる。28～31の鉢の器面調整はハケであるが、30の外面にはミガキが窺える。32～39の高坏はいずれも摩滅が著しく器面調整の窺えないものが多いが、坏部の口径は約32～34cmに集約され、脚部の透孔の数がわかるものについてはいずれも3方向になる。39は特異な高坏で、直線的に立ち上がる口縁部には2本の浅い沈線文と縦位の暗文状のミガキが施される。40・41は鼓形器台の脚台部であろう。42～47は器台で、外面の器面調整はタタキ後にハケが施されるのが一般的で、43・44の裾部には加熱による変色が窺える。48の支脚にも、加熱による変色が見られる。49は支脚のミニチュアになろうか。50・51はミニチュア、52～54のボウル状の鉢で、53の外面にはタタキが痕跡的に残る。第241図2は床面から出土した安山岩系の石鏃である。先端部は研磨によって作り出されており、石剣の先端部の可能性もある。第244図2は埋土から出土した板状鉄斧で、木質が部分的に残る。6も埋土からの出土で鉄鎌になろうか。12はベッド上から出土した鉄鎌。第247図209は床面から出土したコバルトブルーのガラス玉。(水ノ江)

11号竪穴住居跡 (図版16 第21図)

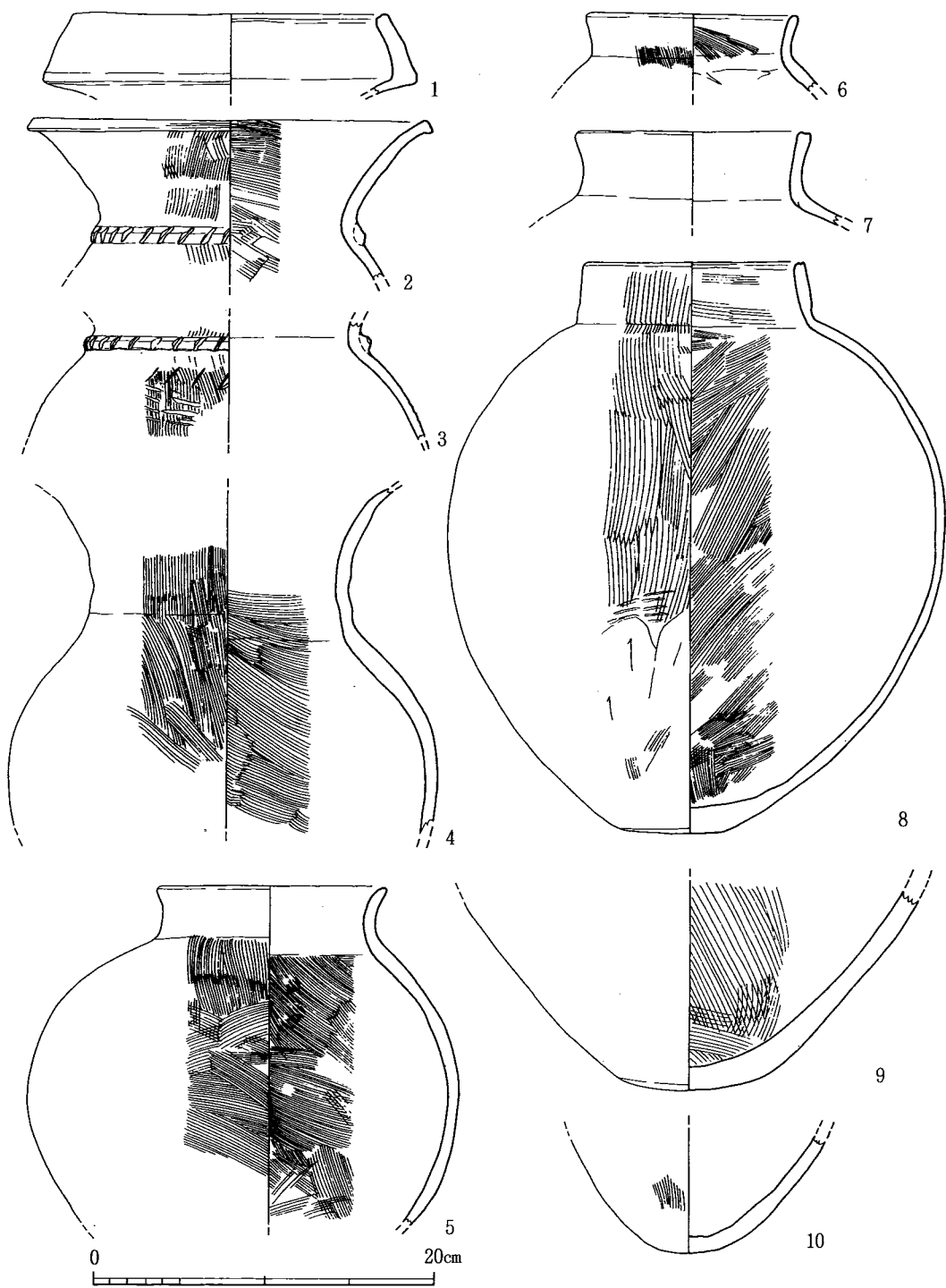
11号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央西端に位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。当初は1号円形周溝状遺構に切られる1軒分の竪穴住居跡という認識で掘り進めたが、途中で2軒の竪穴住居跡が切り合っていることが判明し、切られている住居跡を3号、切っている住居跡を11号とした。11号住居跡の平面プランは長方形で5.6×3.8m、壁高は最高で52cmを測り、遺存状態としては良好。主柱穴は長軸線上に径40cm、深さ50cm程度のもので2本、中央には60×58×6cmの炉跡が、東壁中央部には87×52×16cmの屋内土坑がそれぞれ掘られる。北壁に沿って幅145cmの、南壁に沿って幅65cmの地山削りだしによるベッドが付き、この南側のベッドについては幅5cmの小さなテラスが作られる。埋土は暗褐色土で、明確に貼床といえるものは検出できなかった。

遺物 (第42図1～5) 第42図1・2は床面から、5の高坏脚部は屋内土坑から、3・4は住居埋土からの出土。1の口径は14.8cm、2の底部は丸くてやや突出気味。4の復元口径は約30cm。

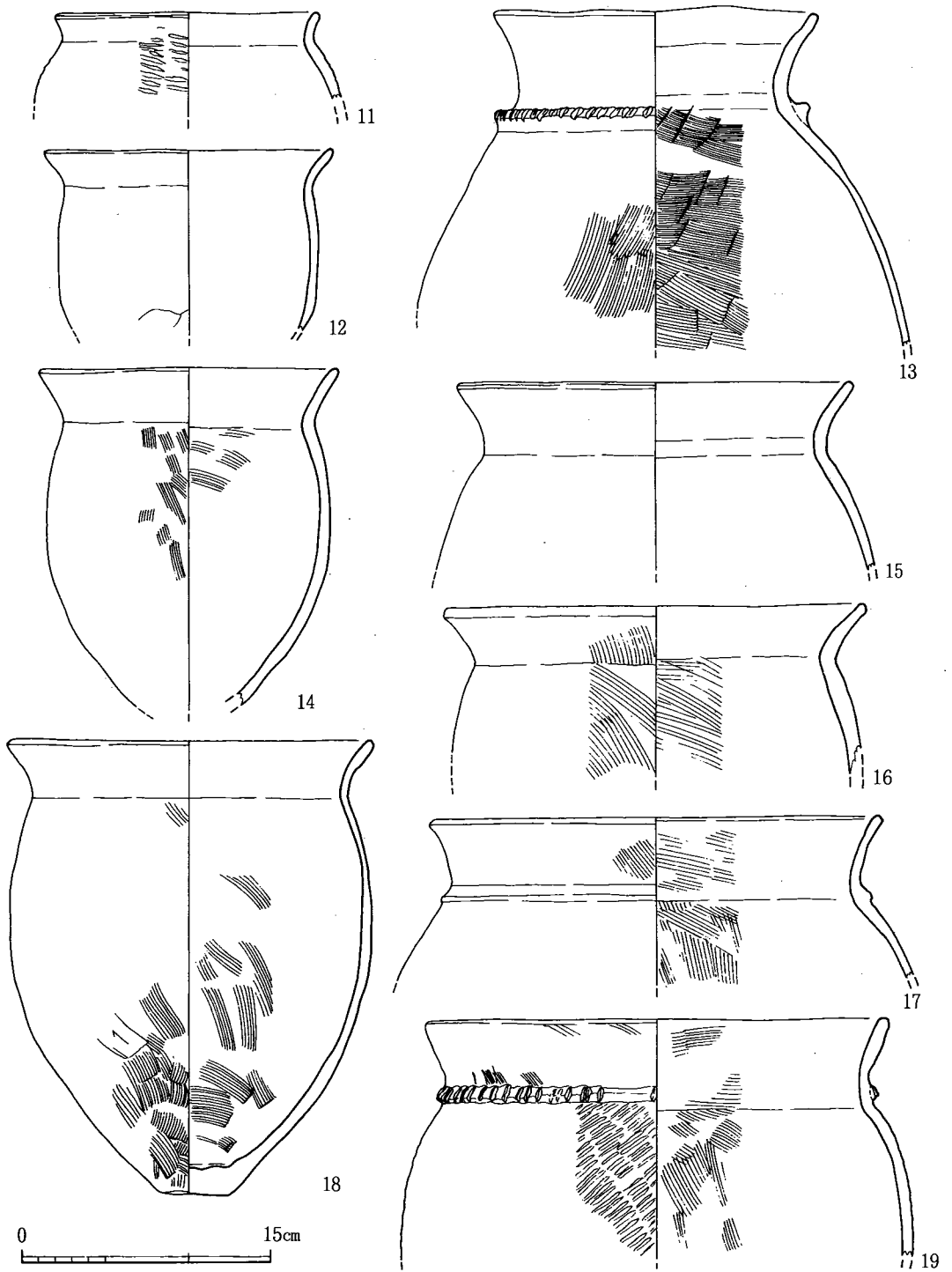
(水ノ江)

12号竪穴住居跡 (図版23 第40図)

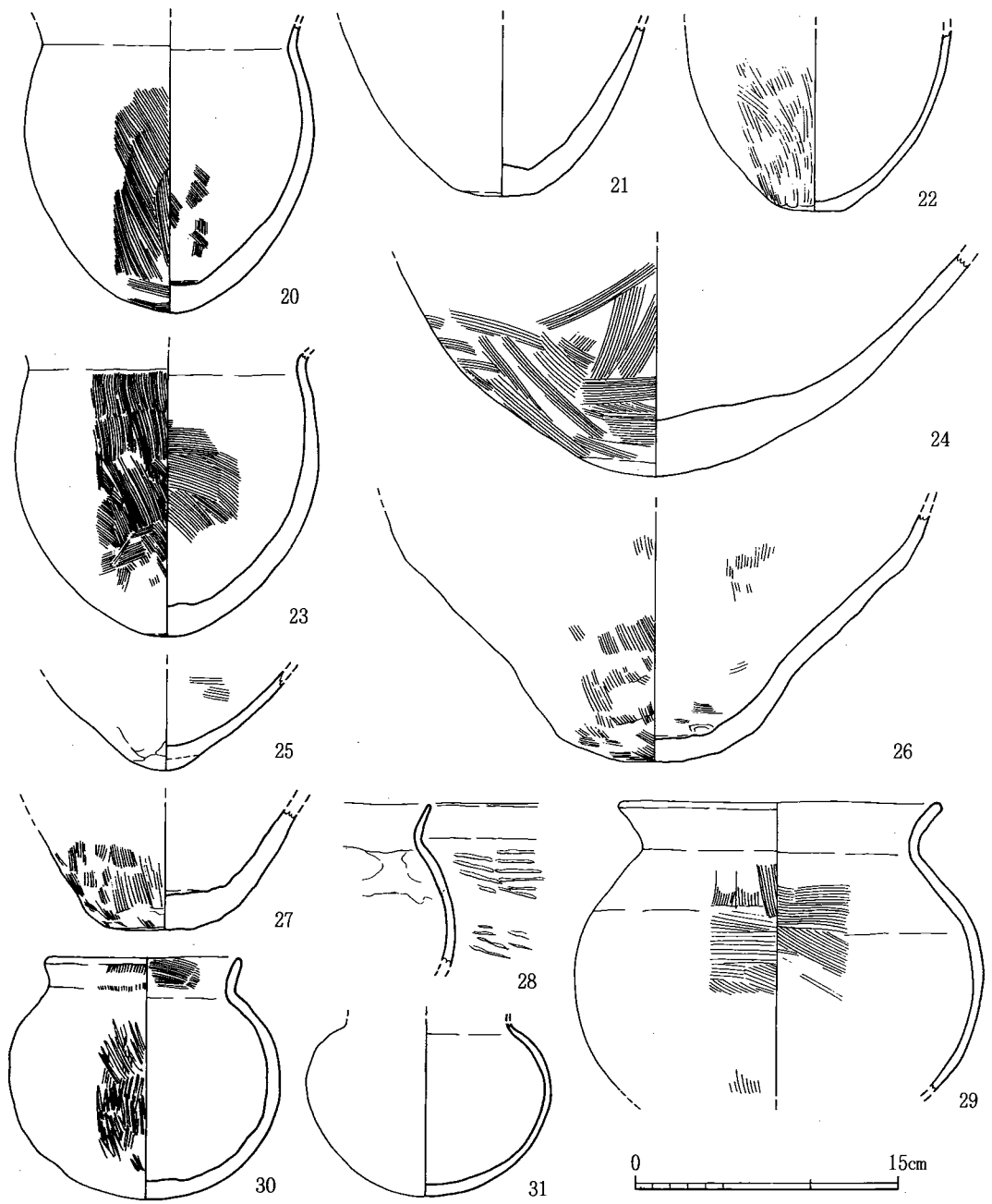
12号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央東寄りに位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。当初は1軒の住居跡という認識で掘り進めたが、貼床を除去した時点でもう1軒分の炉跡・主柱穴・屋内土坑・壁溝が検出され、ほぼ同じ場所で立て替えら



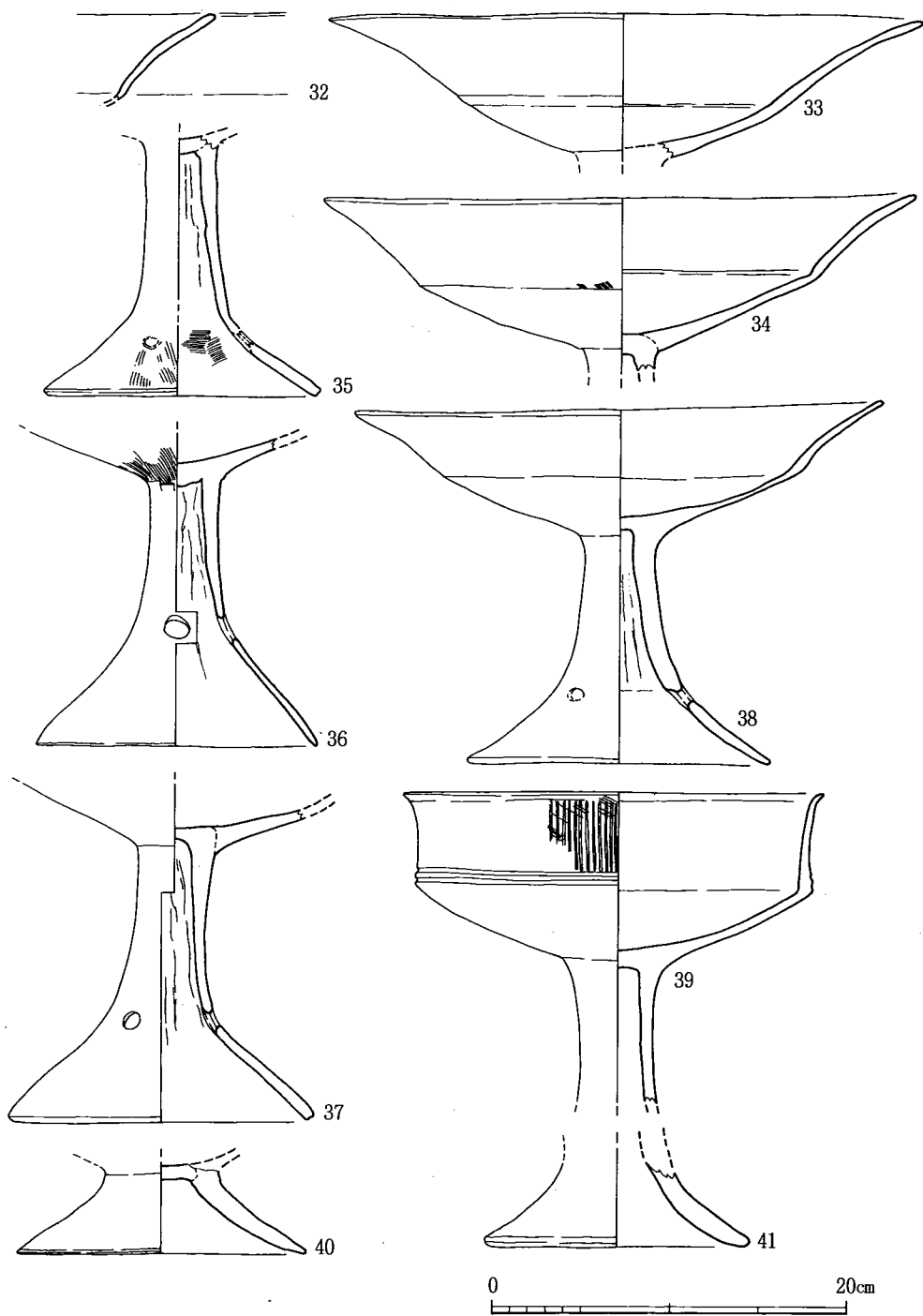
第35图 10号竖穴住居跡出土土器実測図. 1 (1/4)



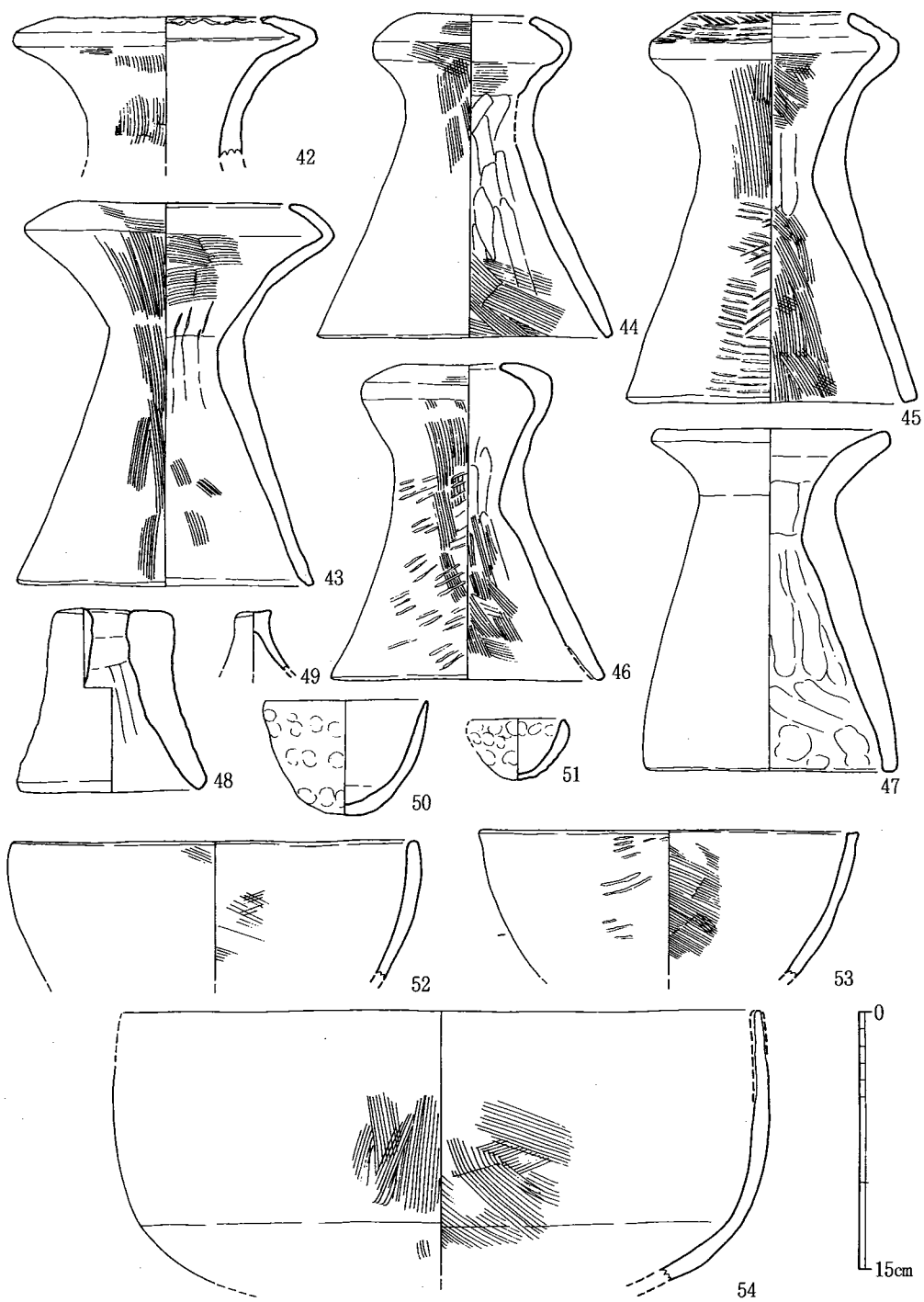
第36图 10号竖穴住居跡出土土器实测图。2 (1/4)



第37图 10号竖穴住居跡出土土器实测图. 3 (1/4)



第38图 10号竖穴住居跡出土土器実測図。4 (1/4)



第39图 10号竖穴住居迹出土土器实测图. 5 (1/4)

れた2軒分の住居跡という結論に至った。そこで切っている住居跡を12号、切られている住居跡を13号としたが、出土した遺物は屋内土坑出土以外すべて12号住居跡として取り上げており、その中には13号住居跡のものも含まれている。12号住居跡は5.6×4.9mの正方形に近い長方形プランで、壁高は最高で15cmを測る。南壁の両側には1.8~1.9×1.1~1.2mの長方形のベッドが暗黄褐色粘土によって作られる。炉跡・支柱穴・屋内土坑のいずれも住居跡の北側に寄るが、これは南壁に作られたベッドによる制約である。炉跡は2段掘りのように見えるが、実際は79×63×11cmのほぼ円形を呈し、2本の支柱穴は径55~65cm程度で、深さは北側が78cm、南側が44cm。西壁には125×75×24cmの屋内土坑が、北壁には幅18cm、深さ3cmの壁溝が掘られる。

遺物 (第42図6~9 第233図6・7) 確実に床面から出土したには第42図6の平底の壺だけで、頸部と胴部に刻み目のない突帯文が施される。第233図6は粘板岩製、7は頁岩製の砥石で、いずれも埋土からの出土。(水ノ江)

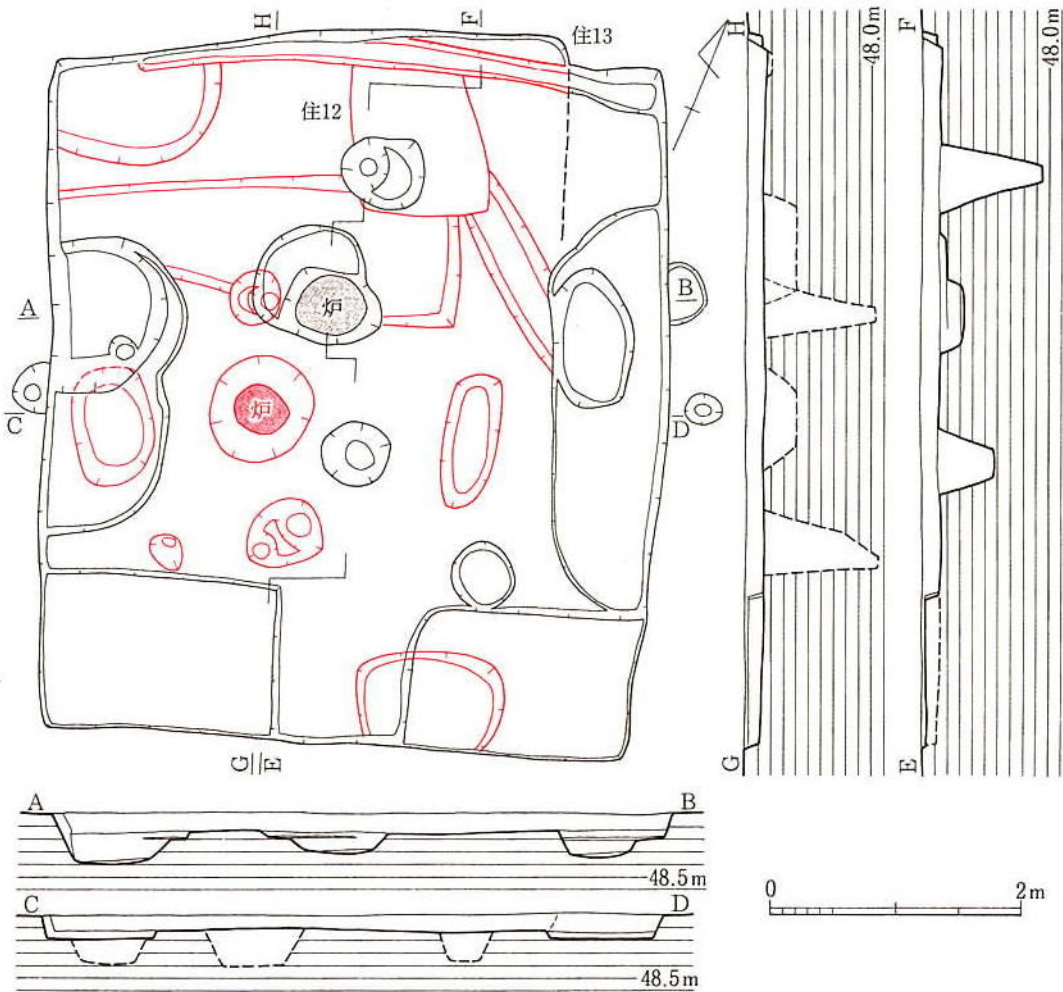
13号竪穴住居跡 (図版23 第40図)

13号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央東寄りに位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。当初は1軒分の竪穴住居跡として掘り進めた12号住居跡の貼床を除去した時点で検出されたもので、遺物はすべて12号住居跡としてすでに取り上げられていた。この住居跡のプランや規模については、唯一北東隅が検出されたことから、最高5.7×4.2m程度の長方形を呈していたと考えられる。炉跡は83×81×27cm、2本の支柱穴は径40~60cmで深さはいずれも90cm、屋内土坑は95×63×18cmをそれぞれ測る。この住居跡の床面からは浅い落ち込みや溝が検出された、いずれも場所に規則性が窺えず性格は不明。(水ノ江)

14号竪穴住居跡 (図版24 第41図)

14号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央東寄りに位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。15・16号竪穴住居跡は切るが、14~16号掘立柱建物跡には切られるという先後関係にあり、平面プランは6.7×5.2mの長方形を呈する。壁高は最高で28cm。西壁方向に開く「コ」字状の幅105~115cmのベッドが地山の削りだしによって作られ、ベッド上には南北壁に沿うように幅6cm、深さ3cmの壁溝が掘られる。支柱穴は2本で、85~100×60~80cmの楕円形のプランに、深さは75~80cmを測る。南側の支柱穴では、径20cm程度の柱痕が確認された。炉跡は90×75×15cmで、西壁中央部に作られる屋内土坑は108×55×19cm。遺物は少なく、図示できるものも限られる。床面から出土した遺物は、第42図14~16だけである。

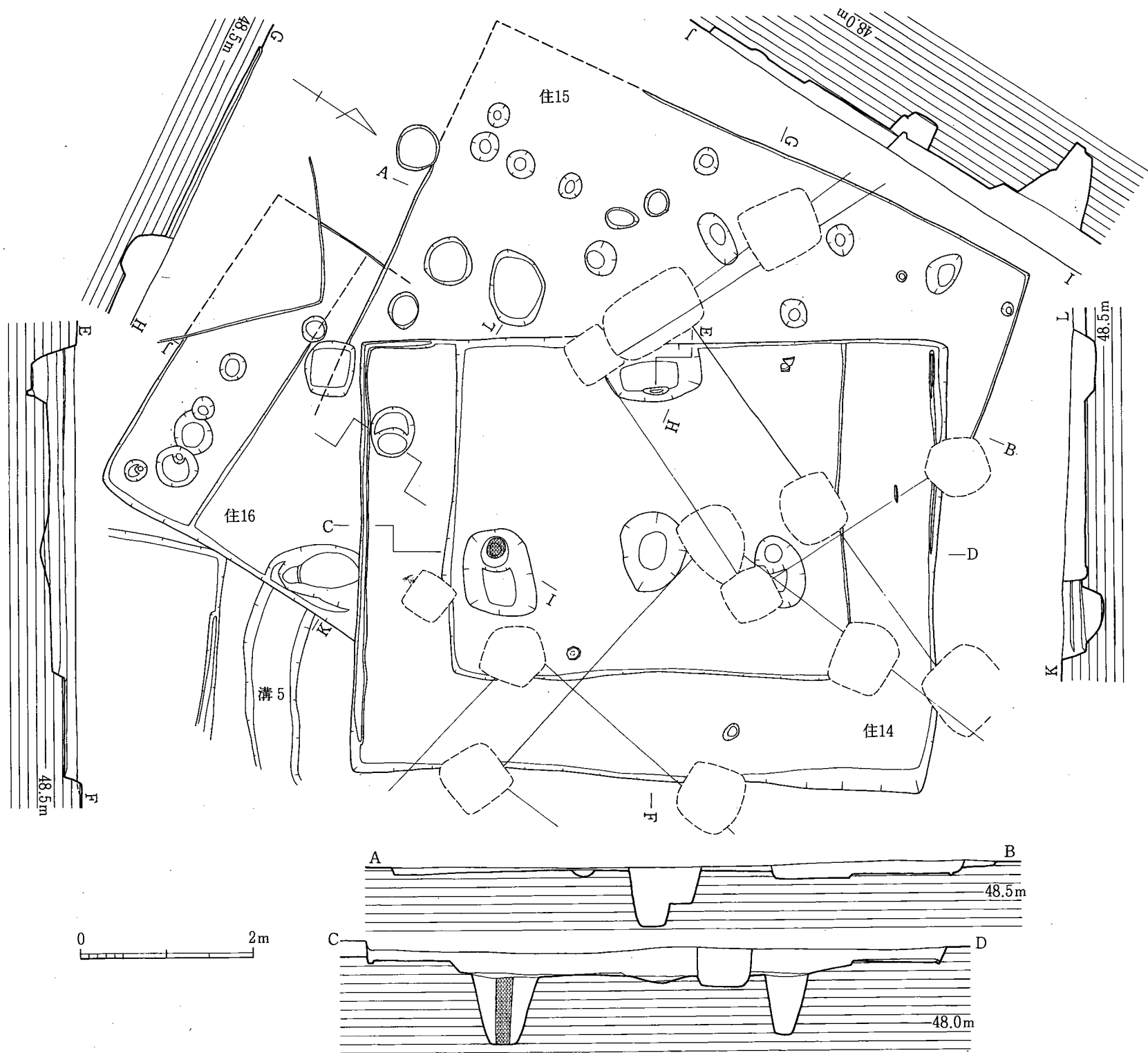
遺物 (第42図10~17 第234図8・9 第244図16) 全体的に遺存状態は悪く、器面調整がわかるものは外面のハケに限られる。12~14のように平底が多いが、15のように丸底も1点見られる。鉢16の復元口径は24cm。高坏17脚部の内面にはしぼり痕が窺える。第234図8・9はいずれも粘板岩製の砥石で埋土からの出土。第244図16の鉄器は埋土からの出土で、刃などは特に作られてなく性格不明。(水ノ江)



第40図 12・13号竖穴住居跡実測図 (1/60)

15号竖穴住居跡 (図版24 第41図)

15号竖穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央東寄りに位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。16号住居跡は切るが、14号住居跡には切られるという先後関係を有し、14号住居跡の状況から14～16号掘立柱建物跡にも切られることになる。本住居跡は14号住居跡に大きく切られることと、住居跡の遺存状況は壁高が最高で6cmしか残っていないほどに悪いことから、南北方向については6.8mという数値が求められるものの、東西方向については4.0mまでしか測れない。また、ベッド・炉跡・支柱穴・屋内土坑等もまったく確認できておらず、本住居跡の規模や構造については不明な部分が多い。遺物は少なく、図示できた土器



第41图 14~16号竖穴住居跡実测图 (1/60)

は2点だけである。

遺物 (第45図1・2 第234図10 第245図1) 第45図1は復元口径14cmの小型の甕。2は復元底径6cmの平底で、加熱変色は見られない。第234図10は粘板岩製の砥石で埋土からの出土。第245図1はかなり欠損しているが、床面から出土した袋状鉄斧である。(水ノ江)

16号竪穴住居跡 (図版24 第41図)

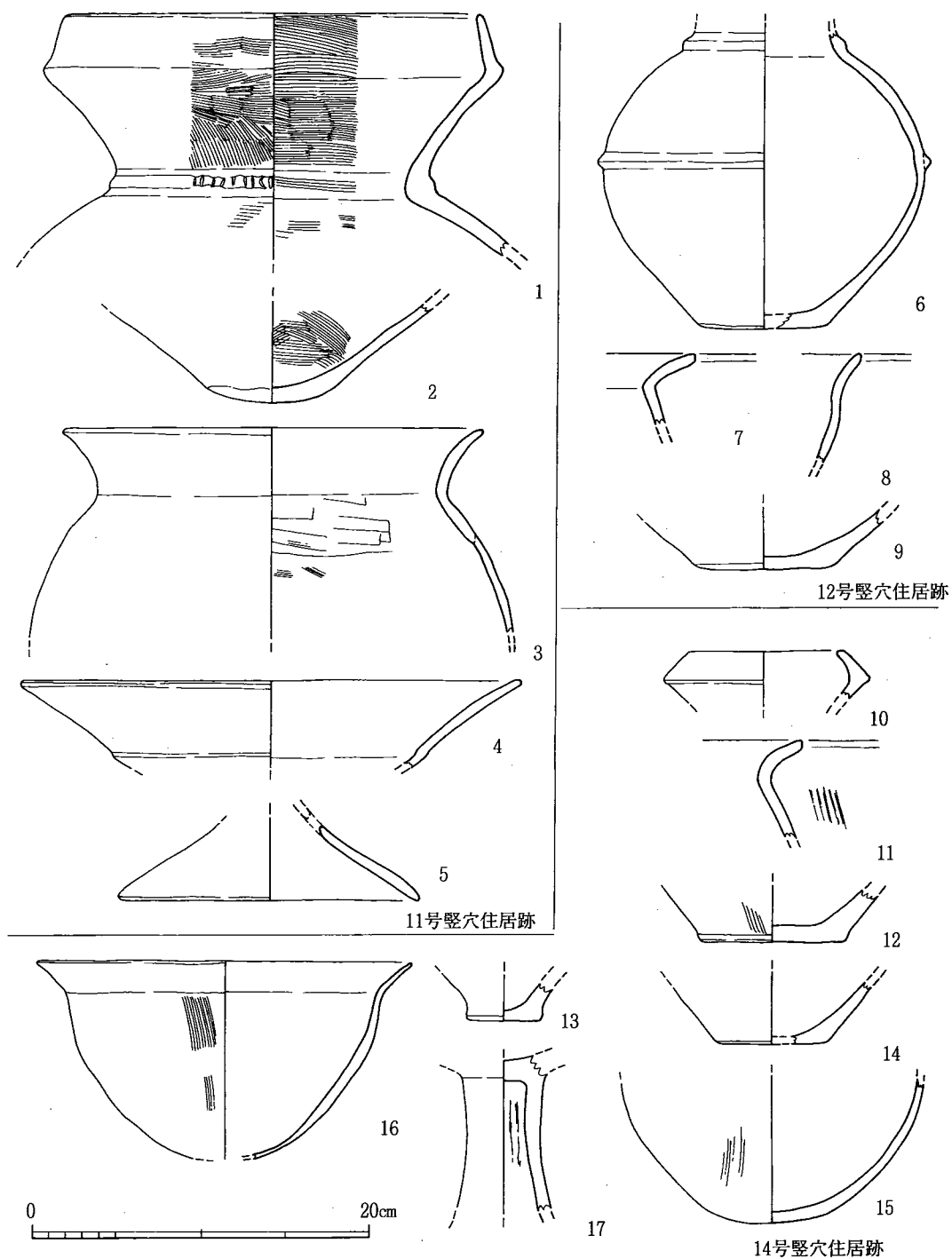
16号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央東寄りに位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。10・14・15号竪穴住居跡や14～16号掘立柱建物跡等にすべて切られ、特に本住居よりも深く掘り込まれる14号住居跡に大きく切られるため規模は不明。東西方向については3.8mが測れるが、南北方向については3.6mまでしか測れない。いずれにせよ平面プランは長方形で、南壁に沿って幅1.2mの削りだしベッドが作られる。支柱穴や炉跡は確認できていないが、東壁に沿って深さ20cmの屋内土坑がある。遺物は極めて少なく小破片ばかりで、図示できるものはなかった。(水ノ江)

17号竪穴住居跡 (図版25～27 第43・44図)

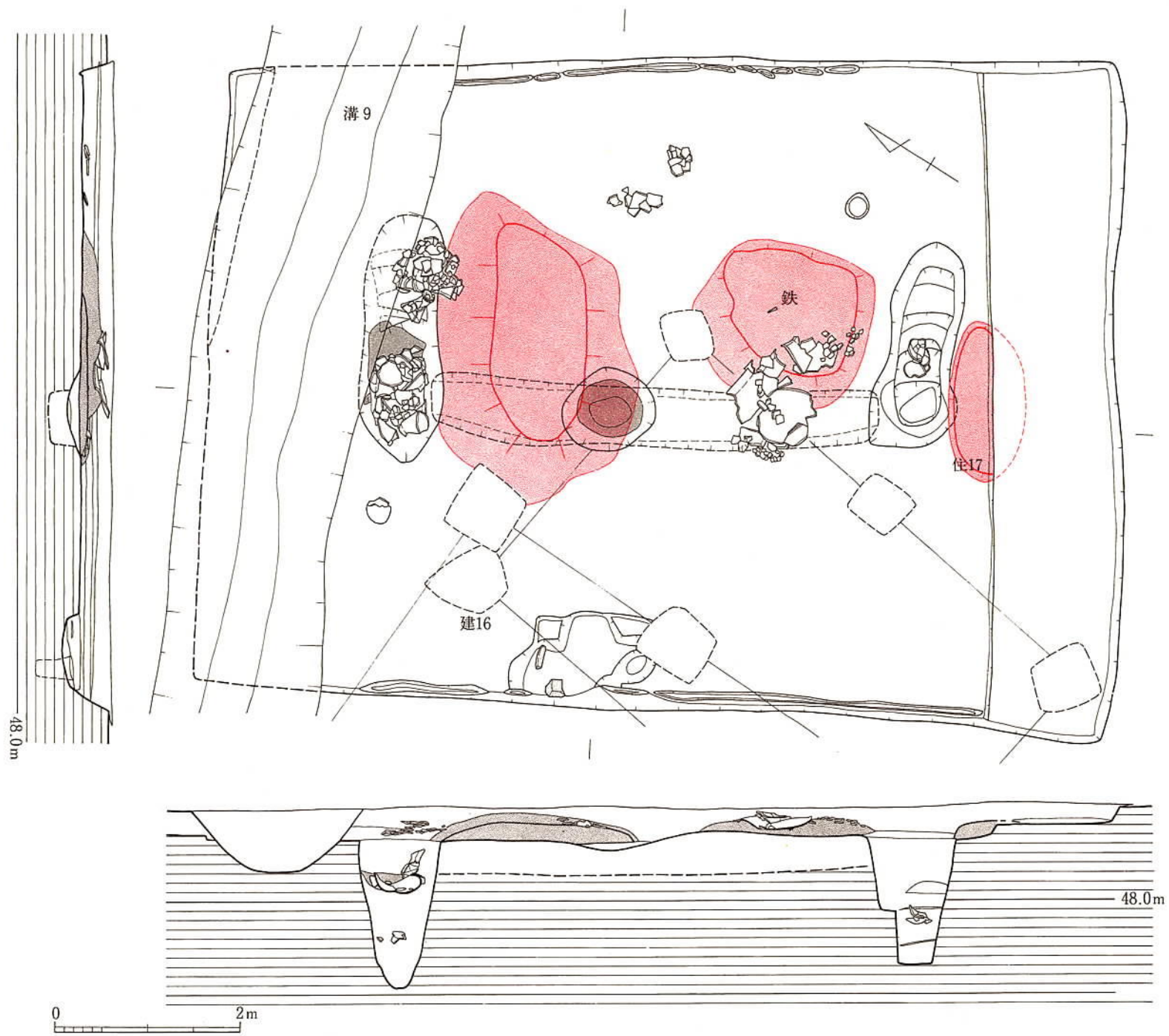
平坦面中央東側に位置し、15・16号掘立柱建物跡に切られ、89号竪穴住居跡を切る。9号溝に北端部を切られているが、対岸から北東隅が検出された。長辺9.62m、短辺7.0mの長方形プランの大型2本柱竪穴住居跡である。

支柱穴は両方とも、東に階段状テラスをもつ長楕円形で、柱痕は南側支柱穴の土層断面からのみ確認され、断面にかかっている部分で幅12cmあるので、径はそれ以上であろう。土層の観察から、階段状テラスの最下段より上位の層が、柱痕の確認された土層を切っていることから、階段状テラスは抜き取り穴であり、柱は根元を残して抜き取られたと考えられる。形状の同じ北側支柱穴では、上位に土器が密集していたので、やはり柱は抜かれていると考えられる。

屋内土坑は西壁中央に位置し、埋土中から置き砥石が出土している。南壁につくベット状遺構は作り付けで、壁と支柱穴の間隔が南側と等しいので、北側にも存在した可能性が高いが、切られているため確認できなかった。周溝は短く、幅の狭いものがめぐっており、壁体保護のために打ち込まれた板材の痕跡と考えられる。床面は硬化した貼床で、その上にAso-4の大きなブロックが、北側支柱穴の南と南側支柱穴の北に乗っていた。炉はこれを外した下に見つかったので、このブロックが竪穴住居跡の使用に伴うものでないことは確実である。このAso-4は、地山を形成する土層の中でも下位に存在するもので、その深さまで達しているのは、支柱穴しかなく、しかも、ブロックの堆積の大きさに当ってはまる容量の遺構も支柱穴で、柱が抜き取られていることも考え合わせると、柱の抜きとり穴の排土と考えられる。貼床を剥がすと、支柱穴間に幅約60cmの溝が検出された。溝の断面は方形で、35cmと深い。溝の上に炉が検出されて



第42图 11·12·14号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)



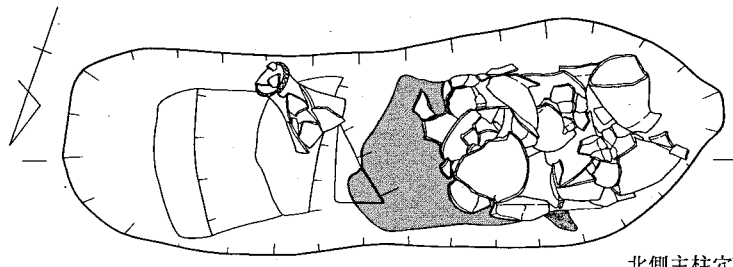
第43图 17号竖穴住居跡实测图 (1/60)

おり、竪穴住居跡の主軸方向と同方向に、支柱穴をつなぐように位置していることから、本竪穴住居跡の下部構造と推定できる。この溝は支柱穴に切られていたが、支柱穴が抜きとり穴に切られていると考えると、本来の支柱穴との関係は不明である。埋土中の遺物量も多かった。Aso-4 ブロックの上にも、甕棺や鉄器が貼り付いて出土した。

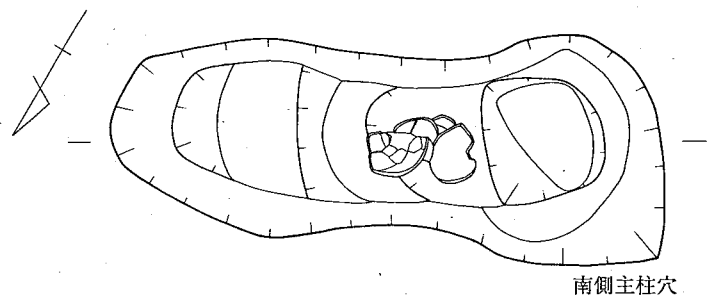
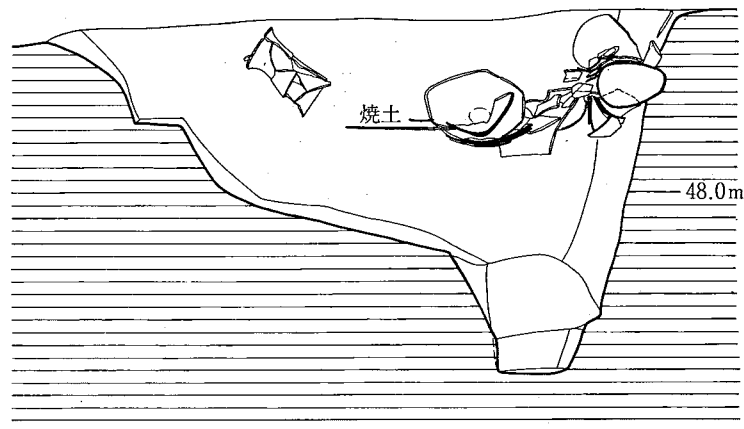
北側の支柱穴では、上位で焼土が面的に広がり、周囲の壁も若干焼けていたので、焼土を廃棄したのではなく、支柱穴を上位まで埋め戻し、平たく均した後に、内部で火を使用したと考えられる。焼土上から完形に復元される土器が大量に出土しているため、廃棄土坑や炉に転用されていたのではなく、柱を抜いた後の祭祀に使用した可能性が高い。出土遺物はさらにそれを示しており、大型の鼓形器台が完形で3点出土しており、内2点は口縁を合わせているので、その在り方は廃棄というよりも埋納に近い。大型の鼓形器台はいずれも口縁部に刻み目文を持っており、日用品とは異なっているものの、精製品ではなく、実際に煮沸に使用されている。したがって、支柱穴内で煮沸行為を伴う祭祀を行った後、廃棄されたものと考えられる。この支柱穴の直上の埋土中に一括投棄された土器群があることから、ゴミ捨て場として使用されるまでに一定の時間が経過しているため、この祭祀は柱の抜き取り行為に伴う可能性が高い。

遺物（第45～49図、第244図4・5・19、第230図4、第234図11～13）3から24は、埋土出土の土器である。3は袋状口縁壺の口縁部で、胎土は比較的精良で赤橙色を呈する。流れ込みの可能性が高い。4は単口縁壺の口縁部と思われるが、口縁の直立する小型の甕の可能性を持つ。頸部に補強粘土がなく屈曲する特異な器形である。6は壺の底部で胎土は比較的精良でつくりも丁寧である。8・9・12は中型甕の口縁部で、8は胎土は比較的精良で煮沸使用した際の煤の付着と赤変が見られる。12は胎土は比較的精良で橙褐色を呈し、煮沸使用の痕跡が不明瞭である。10は甕棺の口縁部であり、糸島地域で見られるもので、混入品だろう。5・7は壺の胴部で、胎土は比較的精良で全体に赤橙色を呈する。11は脚付甕の底部で、13は完形の甕棺、14は高杯の脚部で、胎土は精良で穿孔は3つある。15・16は杵形支脚で、前者は小型品で突起の対面に2次焼成を強く受けており、後者は外面が磨滅しているがタタキの痕跡を残す。17は短頸壺でつくりはあまりよくなく、調整も外面は荒い工具のナデのみである。胴下位の穿孔は焼成後であり、2次焼成を受けているが煮沸によるものではない。18は長頸壺か頸の短い直口壺であろう。19は頸の短い直口壺で、精良な胎土を用いている。20・21は無頸の鉢で、後者は復元口径38cmを測る大型品である。22・23は小型の杯で、前者はつくりが荒いが、後者は比較的丁寧である。24は甗で全体的にくすんでおり、つくりは悪く、調整は外面にケズリ状の工具ナデが見られる。埋土中から鉄鋤先片（第244図4）・鑄造鉄斧片（第244図5）・不明鉄片（第244図19）・凝灰岩製石庖丁残欠（第230図4）・頁岩製砥石（第234図11～13）が出土している。

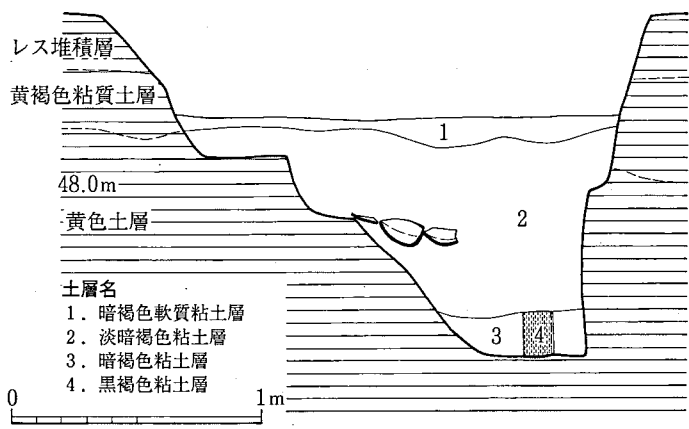
25から42は、北側支柱穴からの出土遺物である。25・26は単口縁壺の口縁部で、外面の調整は丁寧。内面は手が届かなかつたためか、成形時のオサエと粘土積み上げ痕が残る。27・28は



北側主柱穴



南侧主柱穴



第44图 17号竖穴住居跡北侧主柱穴实测图·南侧主柱穴土层断面图(1/30)

壺の底部、29は短頸壺でつくりは荒く、外面は底部はケズリの後、荒くナデている。30・31・34は甕の口縁部である。32・33は身の深い無頸の鉢で、同一個体の可能性もある。35はほぼ完形の甕棺である。36は小型甕の胴部で、後者はつくりが悪く、調整も荒く、胴下半に煤が付着している。37・38は高杯の脚部で、胎土は精良で両者とも穿孔は3つと思われる。2次焼成を受けており、赤変している。39は小型の鼓形器台で、2次焼成を受けた痕跡は不明瞭である。40・41・42は完形の大型鼓形器台で、いずれも重厚で2次焼成をほとんど受けてない。

43・44は南側支柱穴からの出土遺物で、43は単口縁壺、44は甕の口縁部で、2次焼成を受けており、赤変している (秦)

18号竪穴住居跡 (図版28・29 第50・51図)

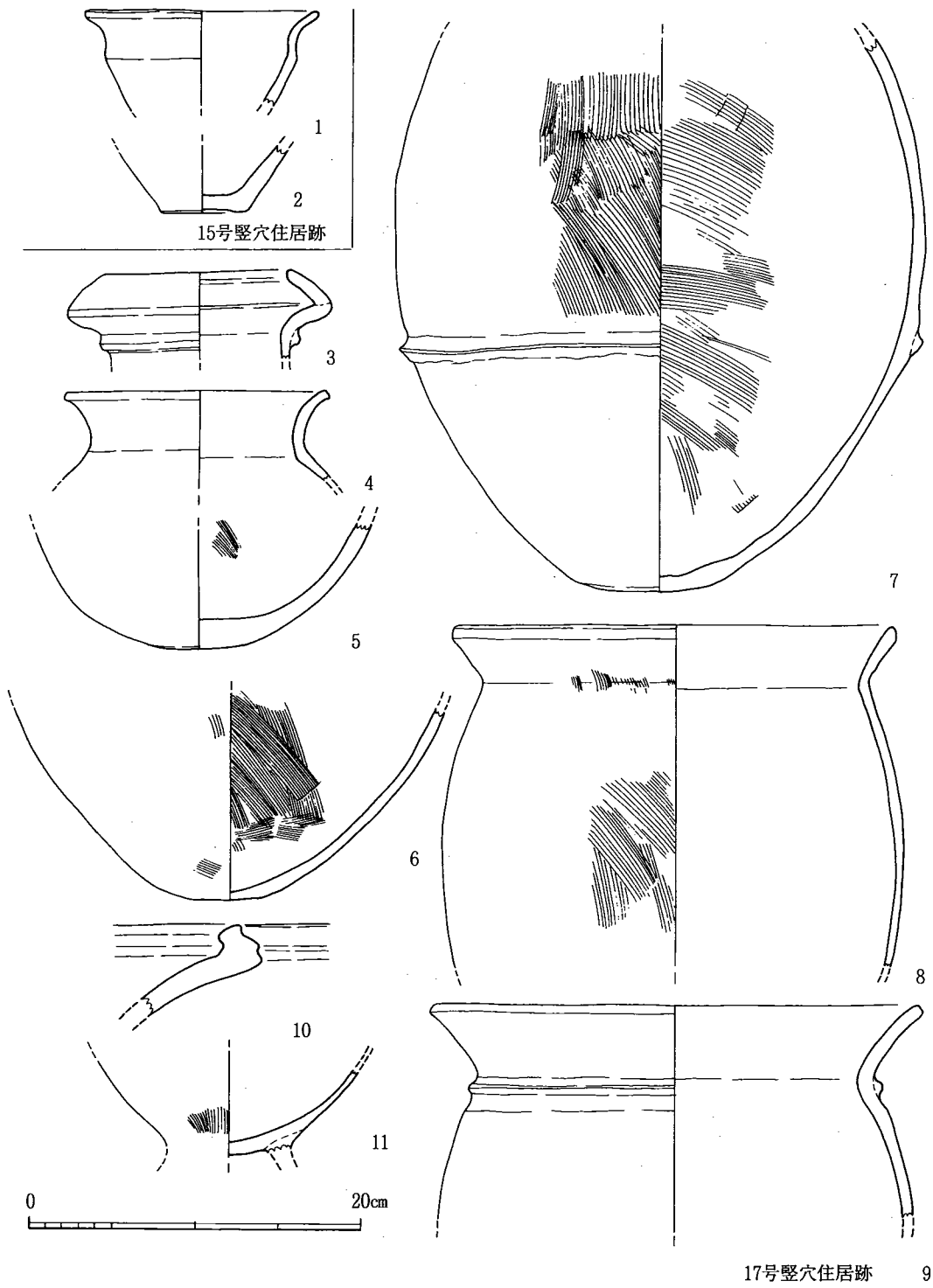
18号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央東端に位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。19号住居跡の北壁を切り、4.6×4.0mの正方形に近い長方形を平面プランとする。壁高は16cmしかないが、埋土中全面に焼土と炭化物が広がる。住居跡中央部へ向けて放射状に炭化材が検出され、焼失家屋であることが当初から予想されていた。このことについては、第50図に示したように炉跡が埋まる過程で炭化材が入り込んできていること、壁に近い所では10cmほど浮いて検出されたこと、また床面からはごくわずかにしか遺物が出土していないこと等から、本住居跡が廃絶して若干埋没した段階で焼失したものと考えられる。支柱穴は2本で、径35～45cm、深さ45cm。1.6mの範囲で床面に炭化物が広がる炉跡は83×83×23cmで、下部には焼土が詰まる。屋内土坑については、住居跡の短軸線上の壁に掘り込まれるのが普通だが、本住居跡では長軸線上の南壁に作られる。また、西壁中央部には、炭化物だけが詰まった小さいピットが検出されたが性格は不明。出土遺物は少量・小破片で、第244図15の鉄器以外に図示できるものはなかった。

遺物 (第244図15) 第244図15は折り曲げられた板状の鉄器で、刃などは作られていない。

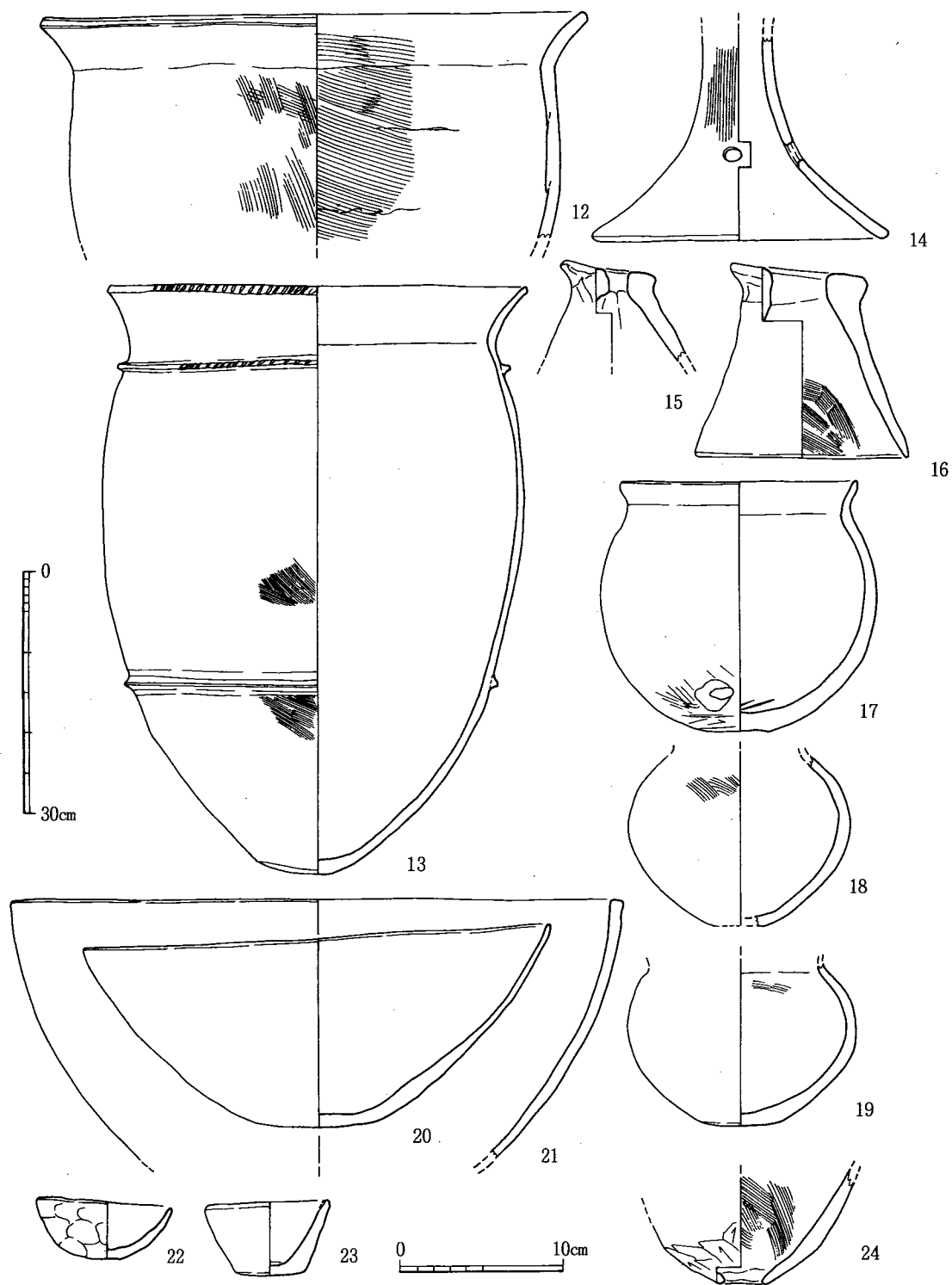
(水ノ江)

19号竪穴住居跡 (図版29 第52図)

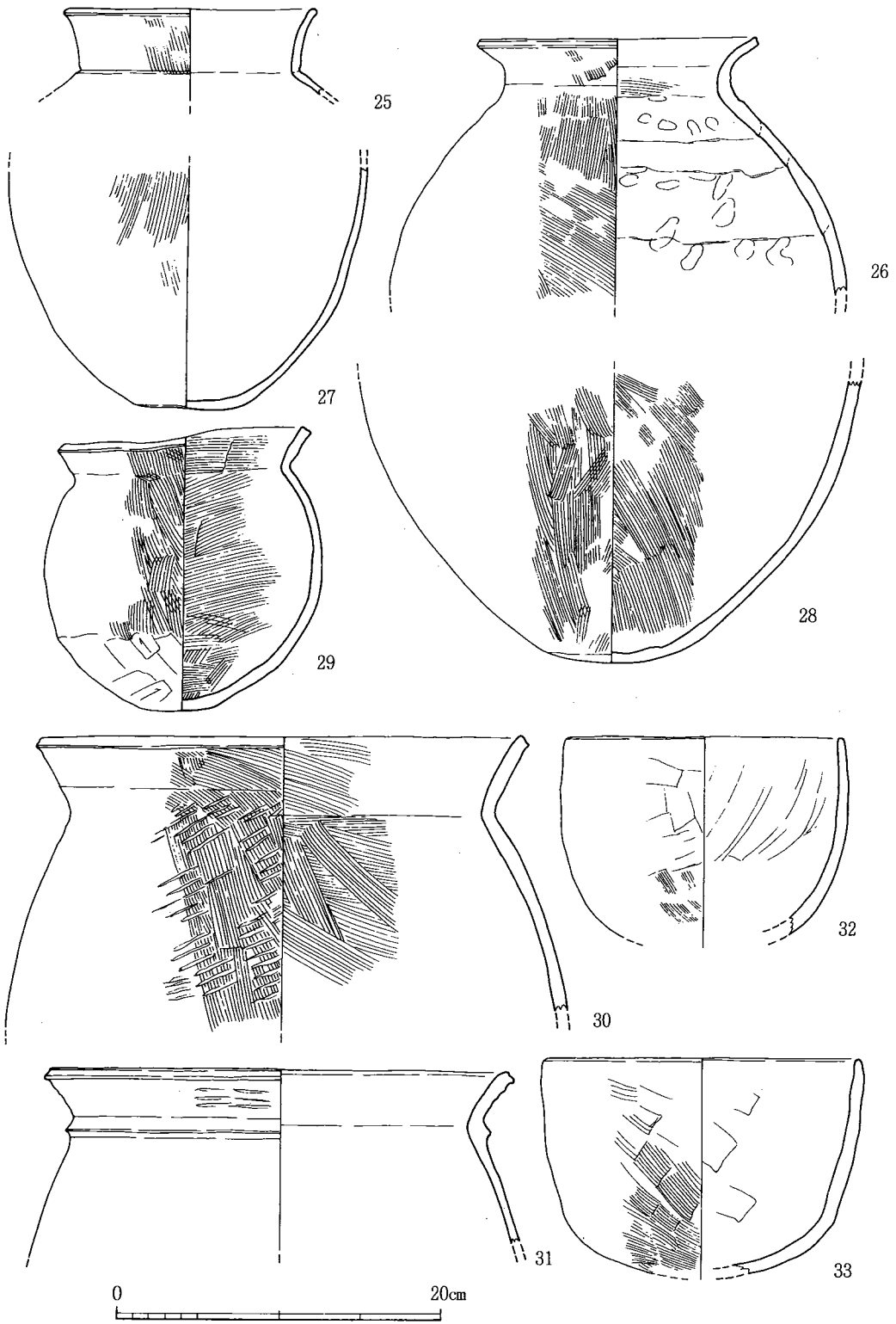
19号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央東端に位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。18号住居跡に北西部を切られるが、6.2×5.6mの正方形に近い長方形プランが確認できた。2点の砥石が出土した屋内土坑は西壁中央部にあるが、壁に接するのではなく約60cmほど離れており、88×75×20cmの楕円形である。本住居跡中央部にある炉跡は95×89×19cmを測り、この炉跡を含めて東方向1.5mの範囲で炭化物が床面に広がる。長軸線上にある2本の支柱穴は深く、北側で70cm、南側で90cmを測る。遺物は少なく、図示できた土器は床面から出土した3点だけである。



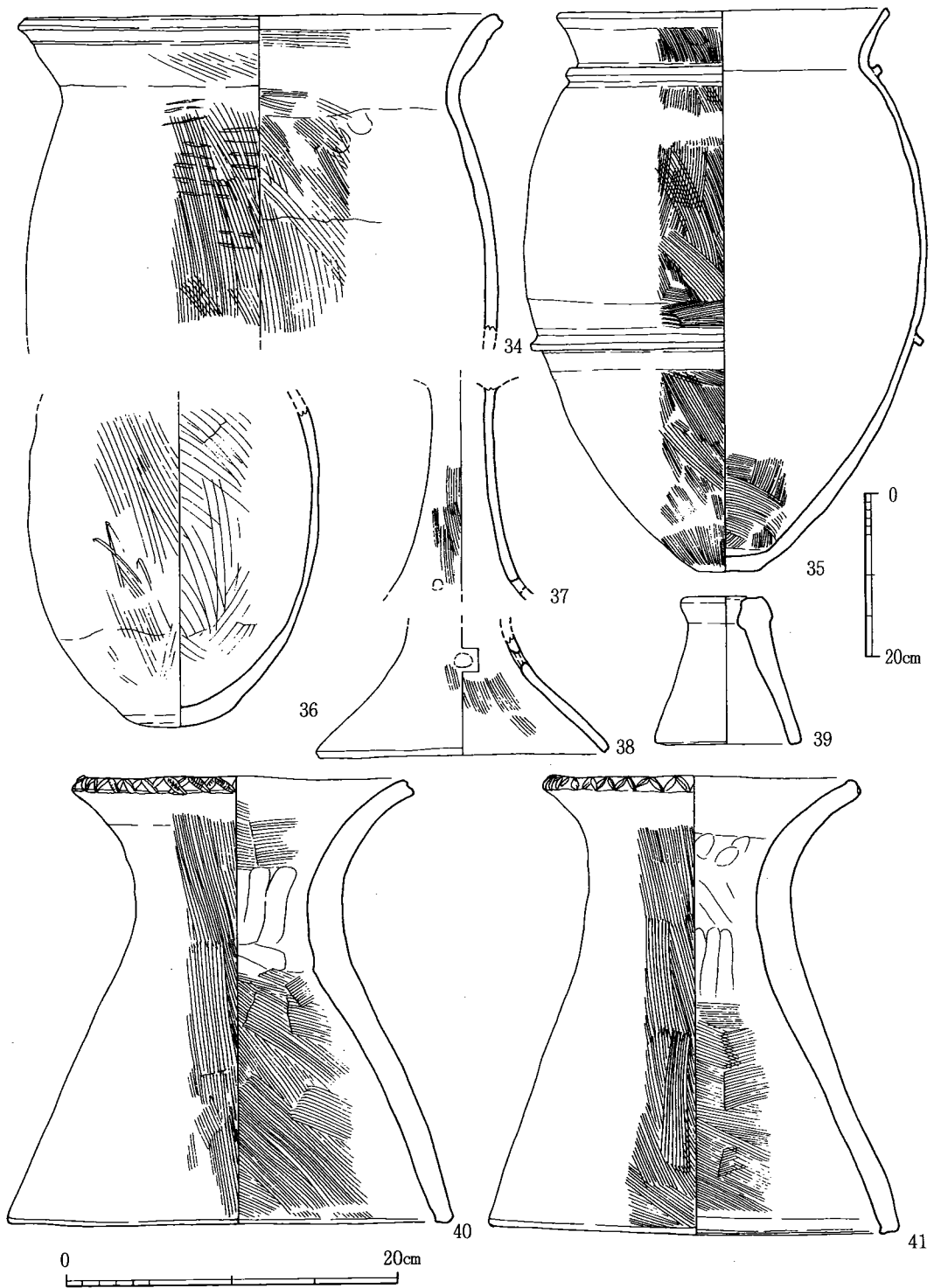
第45图 15·17号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)



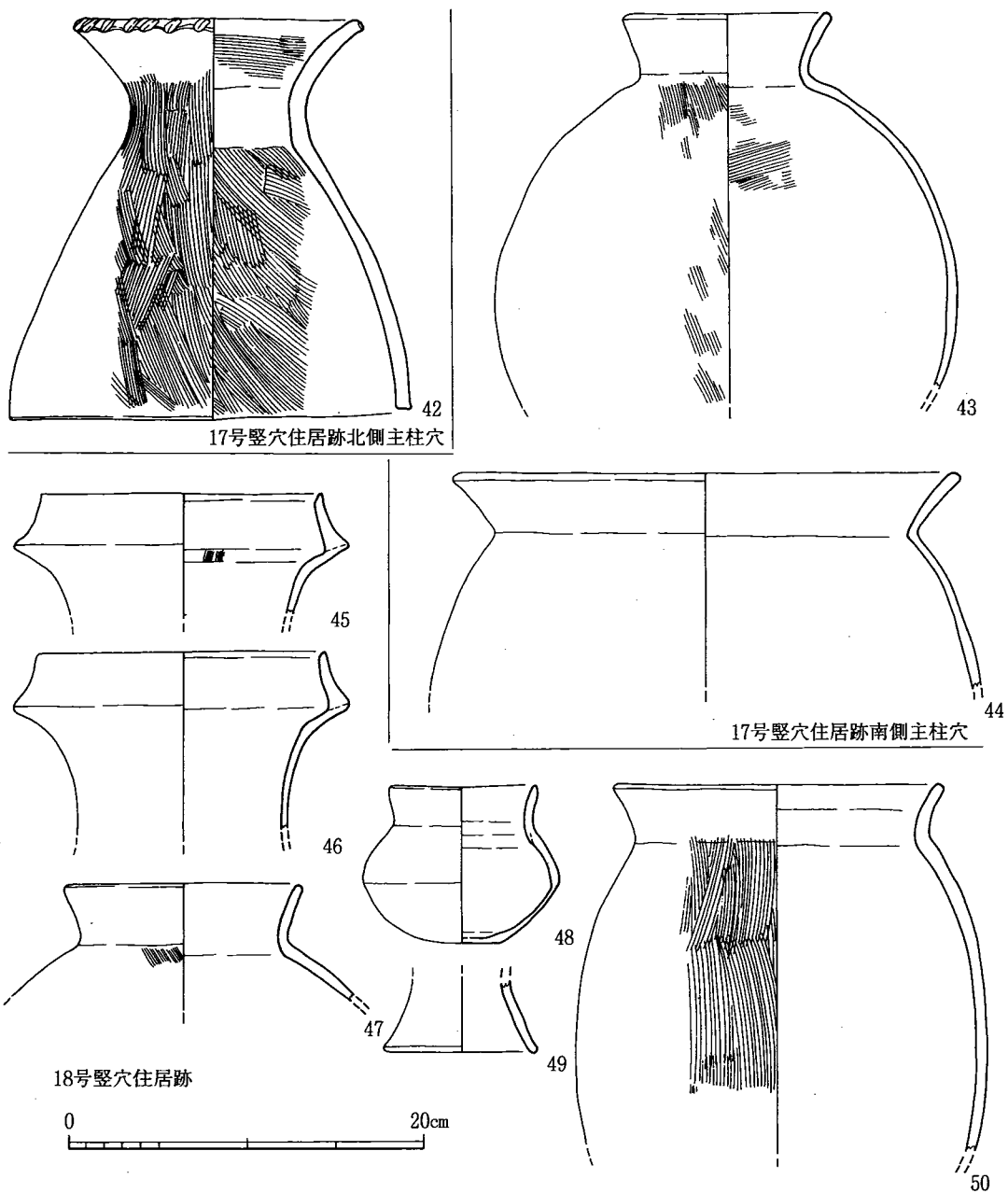
第46图 17号竖穴住居跡出土土器実測図。1 (1/4 13は 1/8)



第47图 17号竖穴住居跡北侧主柱穴出土土器実測図。2 (1/4)



第48图 17号竖穴住居跡北側主柱穴出土土器実測図。3 (1/4 35は 1/8)

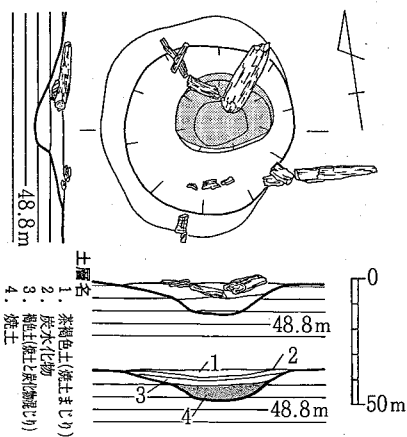


第49図 17号竖穴住居跡北側・南側主柱穴および18号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

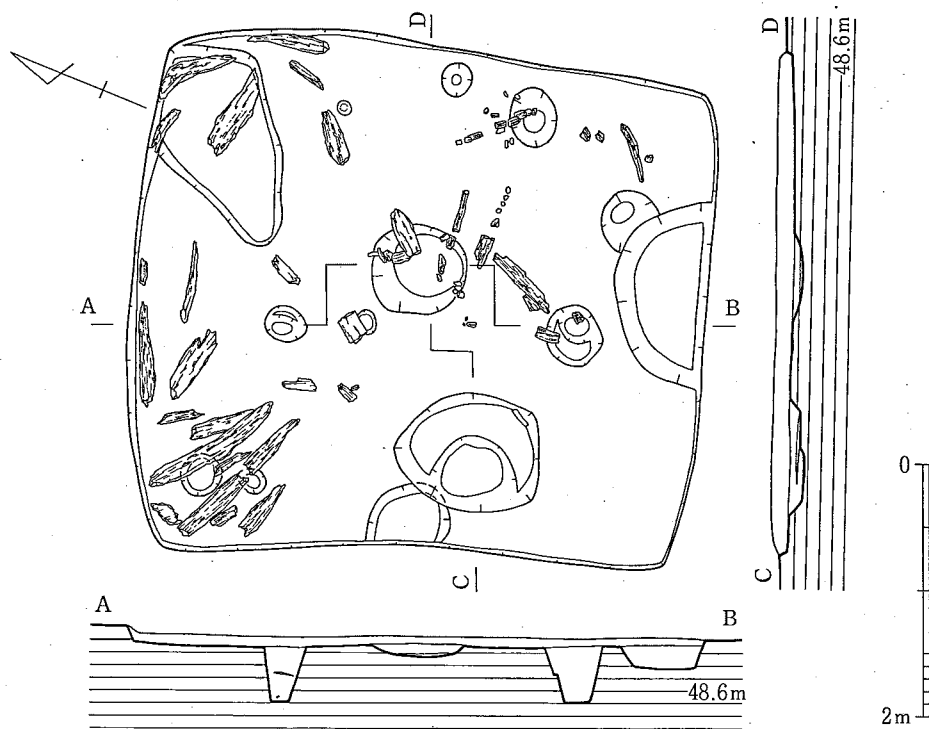
遺物 (第54図1~3 第234図15・16) 1は復元口径8cmの器台口縁部、2・3は平底の底部でいずれも加熱による変色が窺える。第234図15の砥石は頁岩製、16は砂岩製でいずれも屋内土坑から出土。(水ノ江)

20号竪穴住居跡 (図版28 第53図)

20号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央東端に位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。北西隅は19号住居跡に切れ、北東隅は調査区外になるが、5.8×4.6mの長方形を呈する。121×82×



第50図 18号竪穴住居跡炉跡実測図 (1/30)

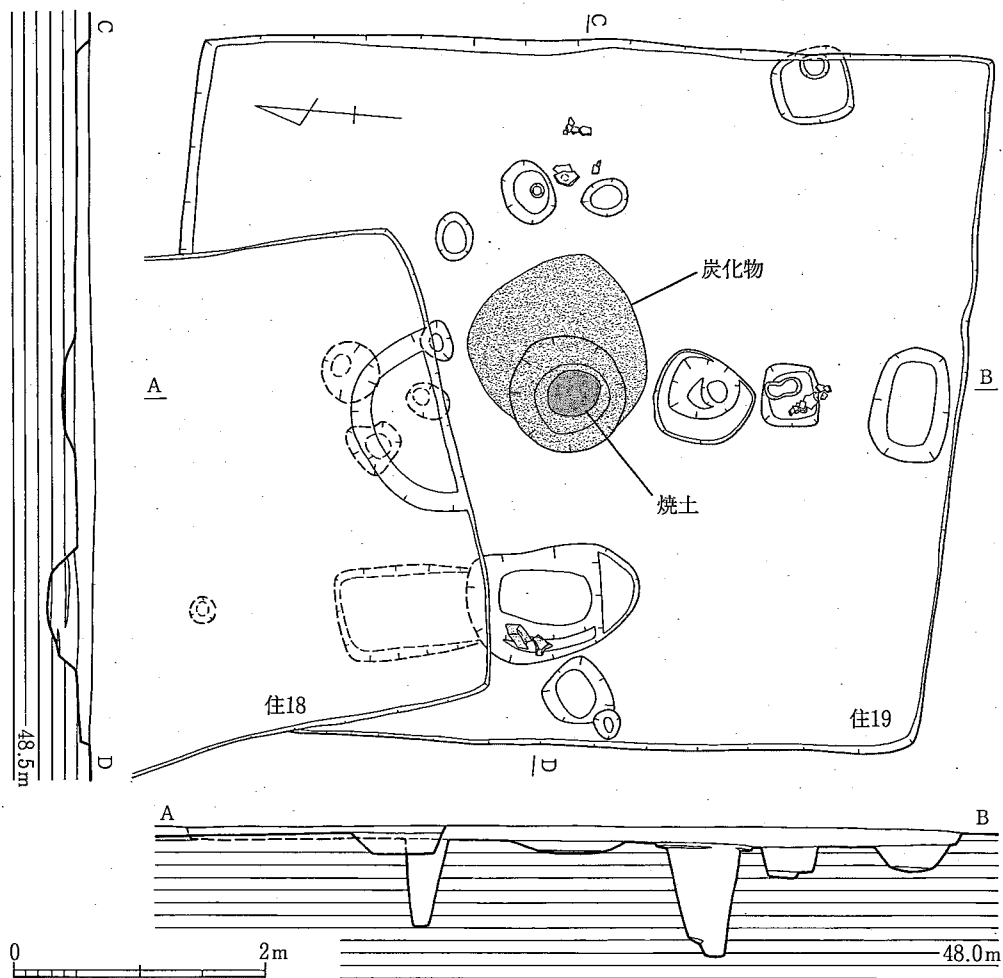


第51図 18号竪穴住居跡実測図 (1/60)

10cmの楕円形の炉跡は中央部やや西寄りに位置するが、これに対応するように135×98×27cmの屋内土坑も南壁中央部からやや西寄りに作られる。炉跡に伴う床面の炭化物の広がりも、炉跡のプランに対応するように1.6×1.1mの楕円形になる。炉跡の焼土は炉の中だけではなく、一

部床面までに広がっていく。長軸線上付近に幾つかのピットが確認されたが、その位置関係や深さ等からどれが支柱穴に相当するのか苦慮したが、おそらく径50~60cm、深さ40cm程度のものと考えられ断面見通図に表現した。なお、貼床を剥がすと、かなり凹凸の著しい地山が検出されたが、本遺跡においては平坦な地山面が検出されることが多く、このような例は珍しい。遺物は比較的纏まっており、第54図5~9・11は床面から、10・15は屋内土坑からの出土。砥石も屋内土坑と床面からそれぞれ1点出土している。

遺物（第54図4~16 第234図16・第235図17）機種的には甕が圧倒的に多く、器面調整はハケ。4は復元口径9cmの比較的小型の壺で、底部はすべて平底。15は口径17.5cm、器高12.1cmのほぼ完形に近い台付きの鉢で、14もほぼ同様の器形になろう。13はミニチュア、16は匙。第



第52図 19号竪穴住居跡実測図 (1/60)

234図16・第235図17の砥石は頁岩製で、16は床面から、17は屋内土坑から出土。(水ノ江)

21号竪穴住居跡 (第53図)

21号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央に位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。3・11・62号竪穴住居跡に切られ、また南東隅は削平により遺存していない。6.7×4.6mの長方形プランで、東側には幅1.6cmの地山削りだしのベッドが作られる。主柱穴は2本でいずれも径50cm、深さ60cmを測り、径15cmの柱痕を検出した。64×62×10cmの炉跡には、炭化物が少量含まれていただけで、焼土は存在しない。南壁中央部に接して145×140×46cmの比較的大きな屋内土坑が掘られるが、遺物はわずかにしか含まれない。第55図1～12の中で4・5・9・10は床面から、8は屋内土坑から、2は炉跡埋土からそれぞれ出土した。

遺物(第55図1～12)1は復元口径16cmの壺、2～4は復元口径28～30cm程度の甕。6～8の底部はいずれもわずかながら上げ底になり、加熱による変色は窺えない。9はほぼ完形の小型鉢。10も小型の鉢になるが、かなり乾いた段階での強いナデが観察される。11は粗いナデが施される鼓形器台で、加熱による変色は観察されない。(水ノ江)

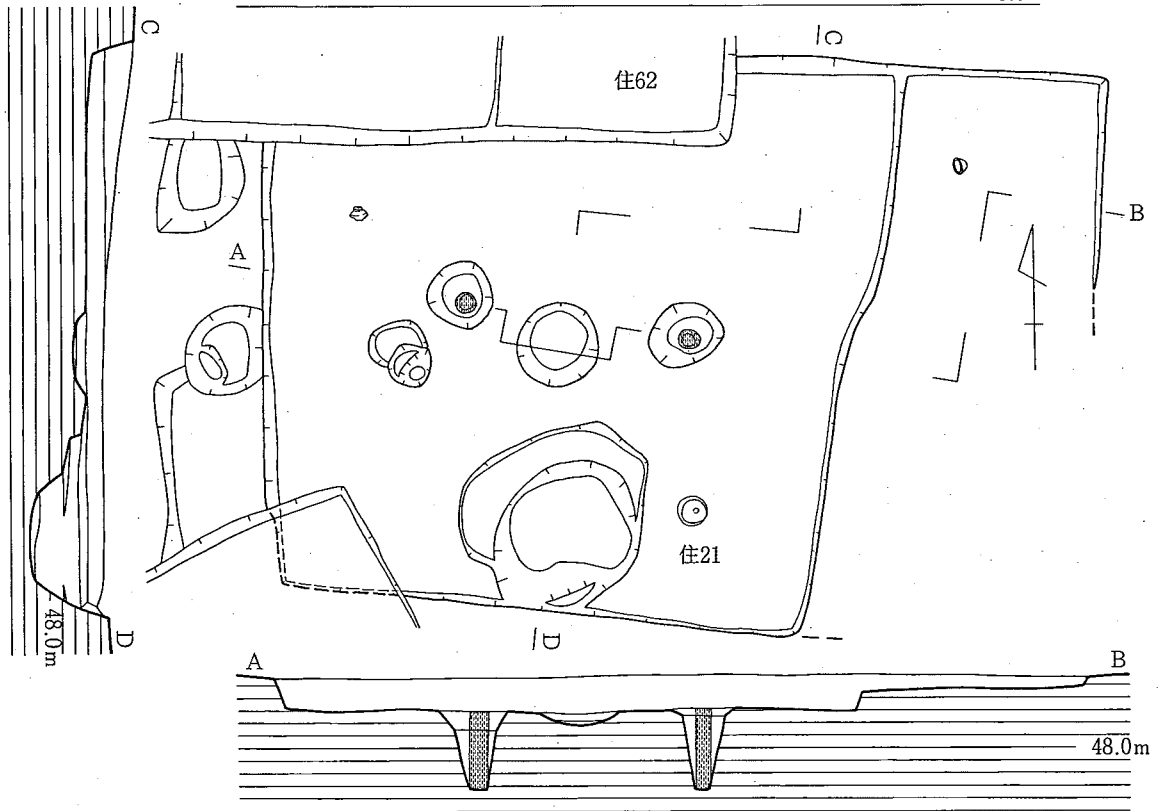
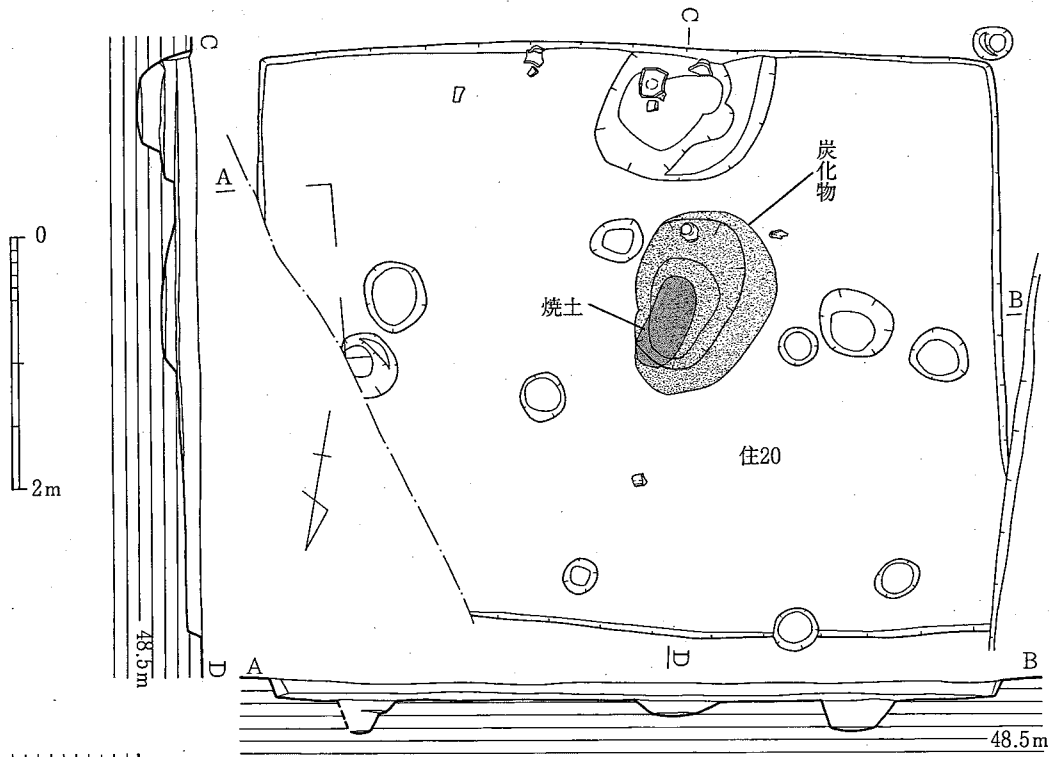
22号竪穴住居跡 (図版30 第56図)

22号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央やや東寄りに位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。本住居跡の存在はかなり早い段階から確認されていたが、1・2号円形周溝状遺構や11号住居跡に大きく切られていたことから、明確な遺構のラインが確認できなかった。もっとも、それ以前の問題として、埋土は締まりのない黒褐色土で、遺構のラインも曲線的でコーナーも丸く、炉跡・主柱穴・屋内土坑・貼床等もまったく検出できていないことから、竪穴住居跡ではなく落ち込み状遺構の可能性が大きい。いずれにせよ性格は不明であるが、取りあえず便宜的に竪穴住居跡として位置づけた。

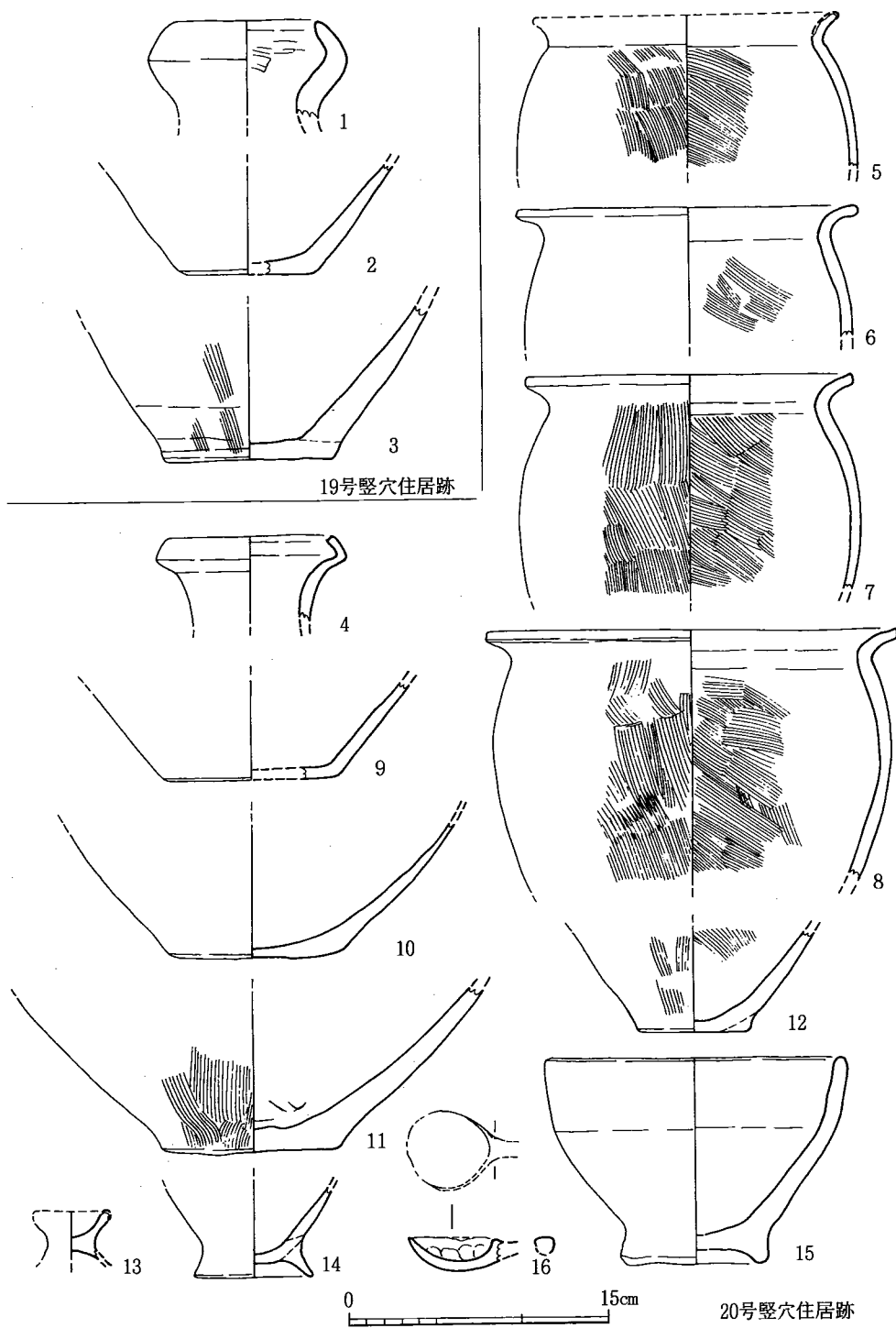
遺物(第55図13～21)全体的に摩滅が著しく、器面調整が観察されるものは少ない。13～16は甕で、唯一床面から出土したのは15であり、復元底径8cmの底部は接合面で剥がれている。18は若干特異な形態の高坏になろうか。12は小型の鉢で外面にはハケが残る。19・20は器台の裾部である。(水ノ江)

23号竪穴住居跡 (第57図)

23号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央東端に位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。しかし、59号竪穴住居跡に大きく切られることや一部調査区外になるため、不明な点が多い。規模は4.8×3.5m以上で、平面プランは炉跡や主柱穴との位置関係からかなり横に長い長方形になると考えられる。炉跡は一部59号住居跡に切られて残らない



第53图 20·21号竖穴住居迹实测图 (1/60)



第54图 19·20号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)

が、径65cm、深さ10cmの円形になり、主柱穴も北側のものは59号住居跡の床面下で深さ32cmのものが検出されたが、南側については調査区外にあると推定される。屋内土坑は東壁から20cmほど離れて115×38×29cmと細長く、砥石が1点出土した。この屋内土坑に近接して、完形の丹塗高坏が床面から出土。本住居跡の埋土は黒褐色に近く、他の住居跡埋土（暗褐色土）とは若干異なる様相を見せた。また、南壁付近では貼床の下に大きな土坑状の落ち込みを確認したが、調査区外を挟んで北側では検出されず性格は不明のままである。

遺物（第59図1～5 第235図18）1・5は床面から、2・3は炉跡から、4は屋内土坑からそれぞれ出土した。1は復元口径16cmの壺で、口縁部屈曲部は摘んで盛り上がりそこに刻み目を施す。5は口径26.6cm、器高19.7cm、脚部系16.6cmを測り、脚部内面以外は赤色顔料が塗布され、また器面調整としてミガキが痕跡的に残る。脚部内面にははしぼり痕と調整としてのハケが窺える。第235図18は砂岩製の砥石で床面から出土。（水ノ江）

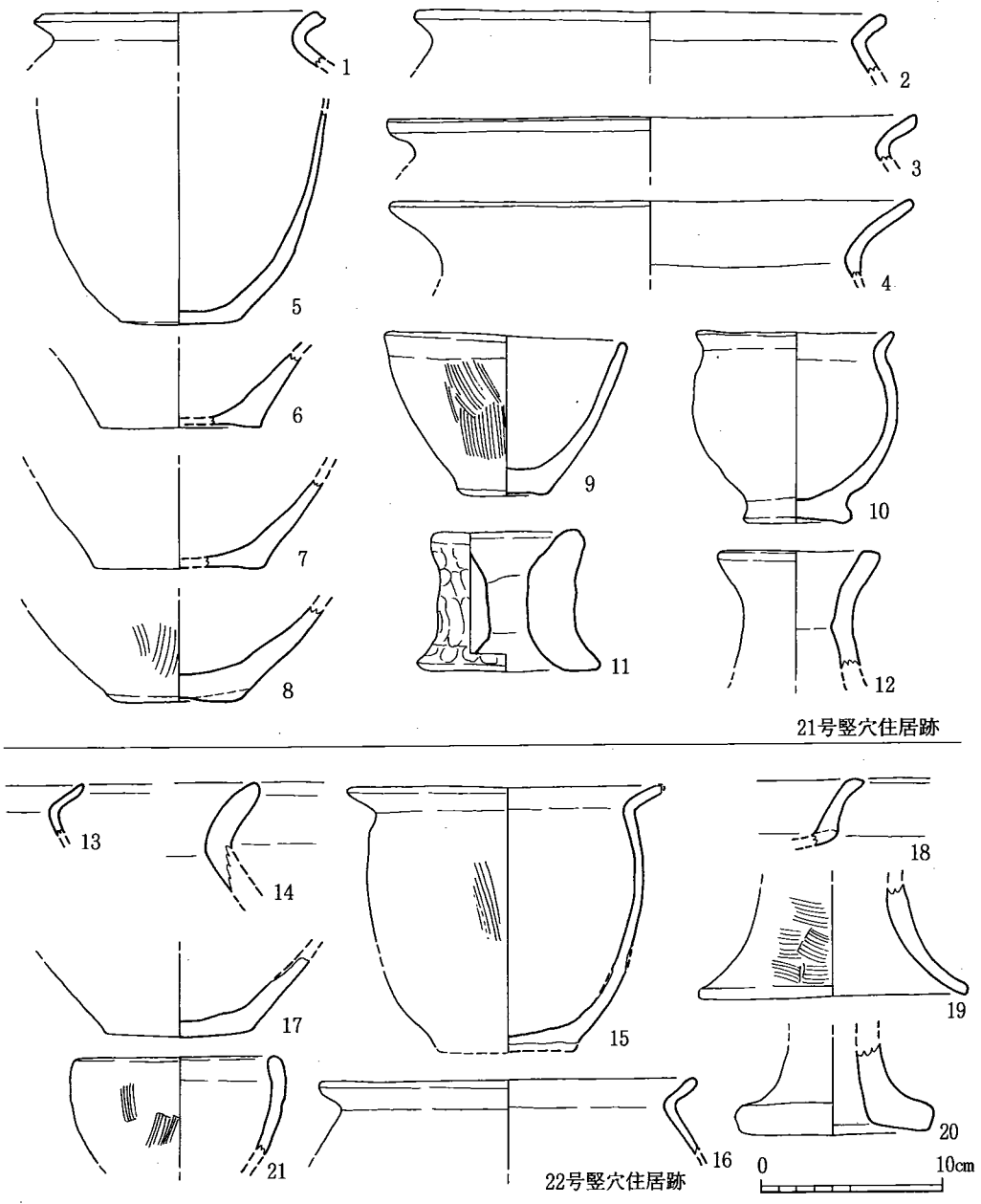
24号竪穴住居跡（図版30 第58図）

24号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央西端に位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。本住居跡の北西側1/2以上は調査区外にあり正確な規模や構造は不明だが、4.3×3.6m以上の長方形プランになると考えられる。炉跡・主柱穴・屋内土坑・貼床等は明確に確認できていないが、プラン的には住居跡としか考えられない。遺物は量的にも質的にも良好であるが、床面から出土するものはごくわずかで、図示したものはすべて埋土からの出土である。

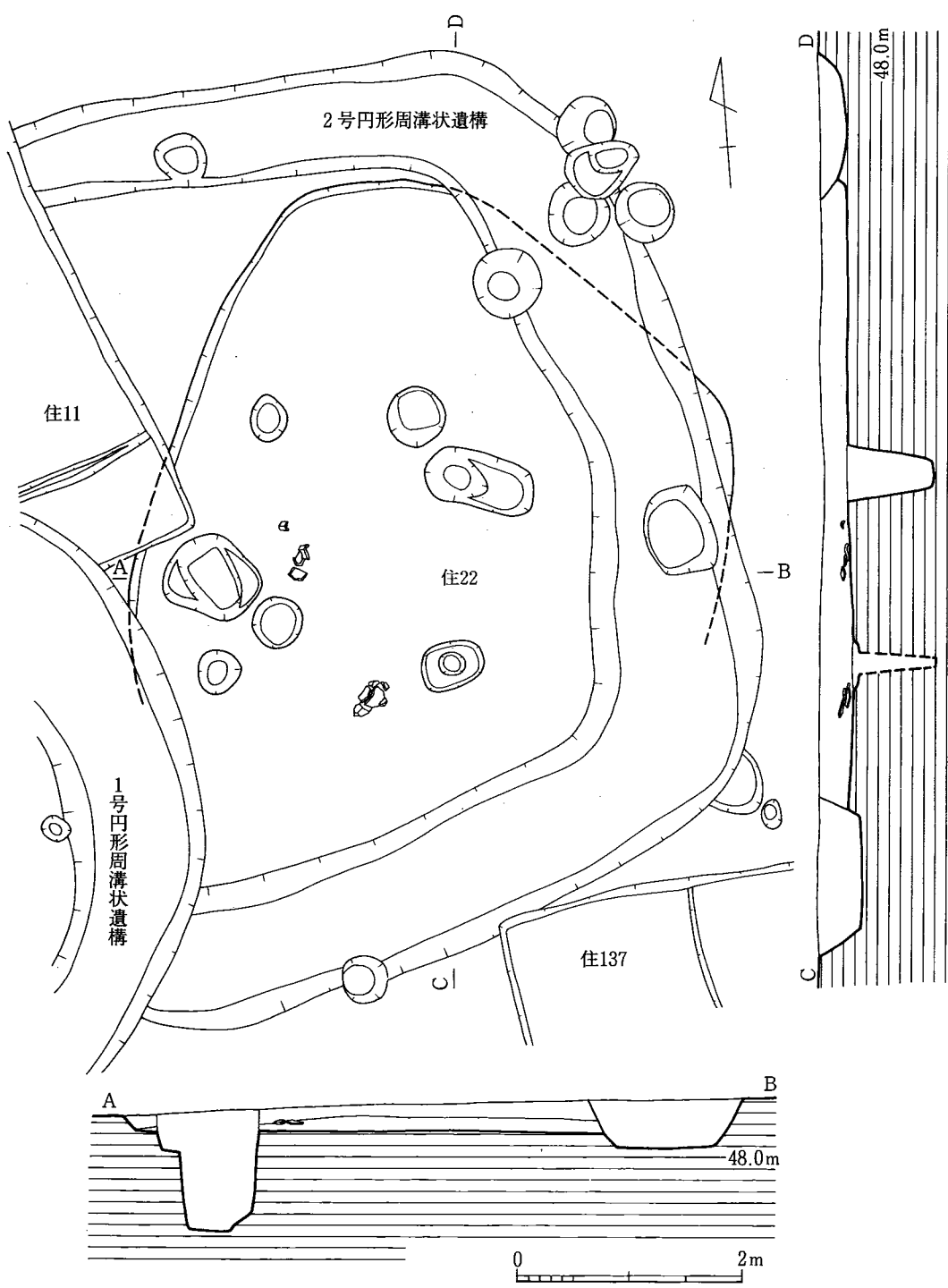
遺物（第59図6～18）壺6・7はいずれも復元口径16cmで外形的にも類似しているが、6は「く」字状に屈曲させるのに対して、7は粘土を足して断面三角形に仕上げている。底部は9・11のように端部をシャープに尖らしているものもあれば、10のように丸く仕上げているものもある。12は口径12.1cm、器高15.1cmの完形の無頸壺で、器面調整はハケ。底部は丸くレンズ状になる。15～17は器台の裾部で、いずれも加熱による変色が窺える。（水ノ江）

25号竪穴住居跡（図版31・32 第60図）

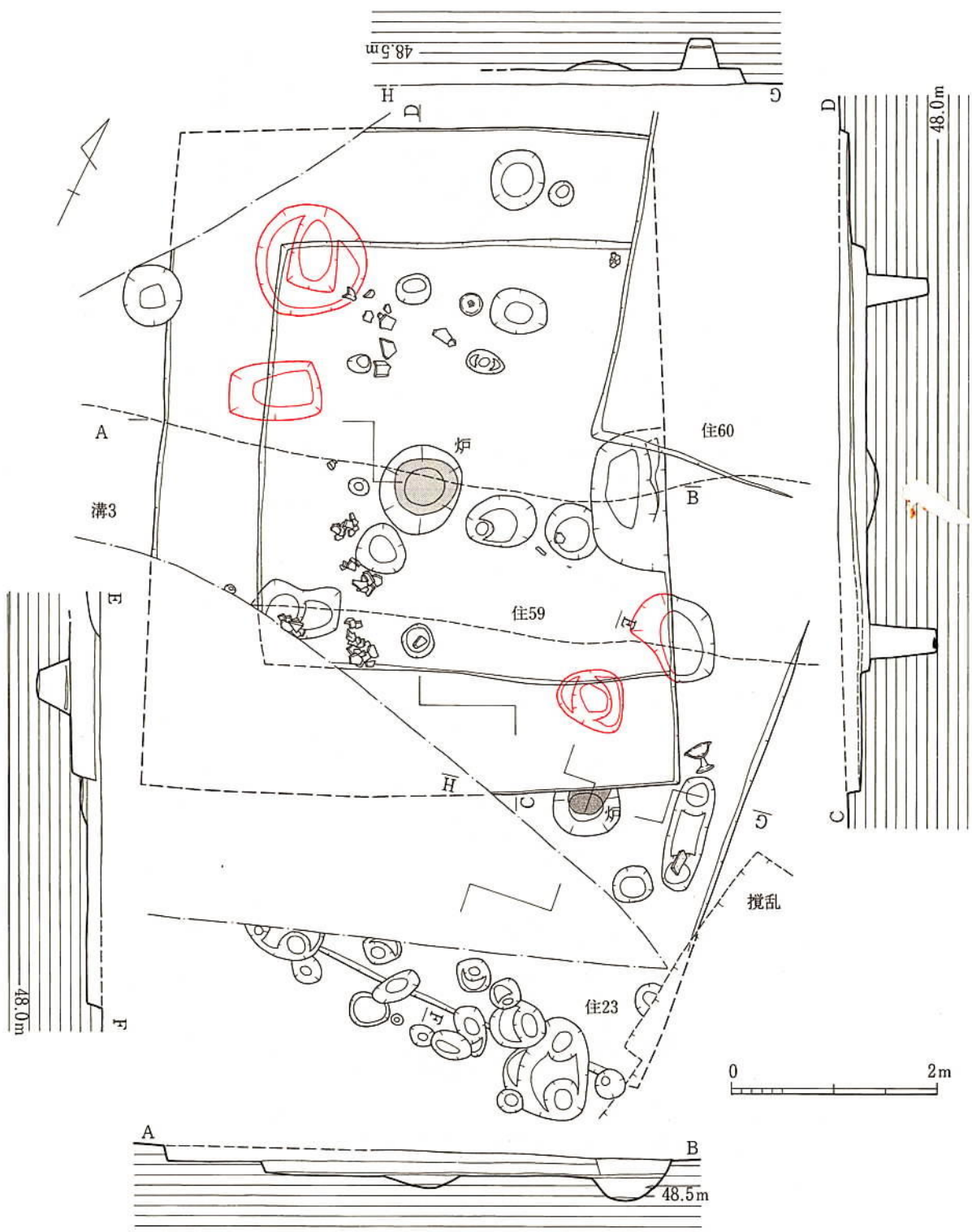
25号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央部やや北西寄りの竪穴住居跡が密集する地区に位置し、26・30・32・61号竪穴住居跡を切るという先後関係を有する。6.4×5.1mの長方形を平面プランとし、壁高は最高で18cm。暗黄褐色の粘質土で作られたベッドは幅80～95cmで、東側に開く「コ」字状になる。長軸線上には深さ60cmの2本の主柱穴と、焼土と炭化物が多量に詰まる95×75×16cmの炉跡が並ぶ。ベッドのない東壁中央部には、104×78×21cmの屋内土坑が作られる。この屋内土坑の北側には壁に沿って幅15cm、深さ4cmの溝が掘られるが、南側には認められない。遺物の出土量は少ないが、鉄器・石庖丁・砥石・土玉等が床面から出土している。



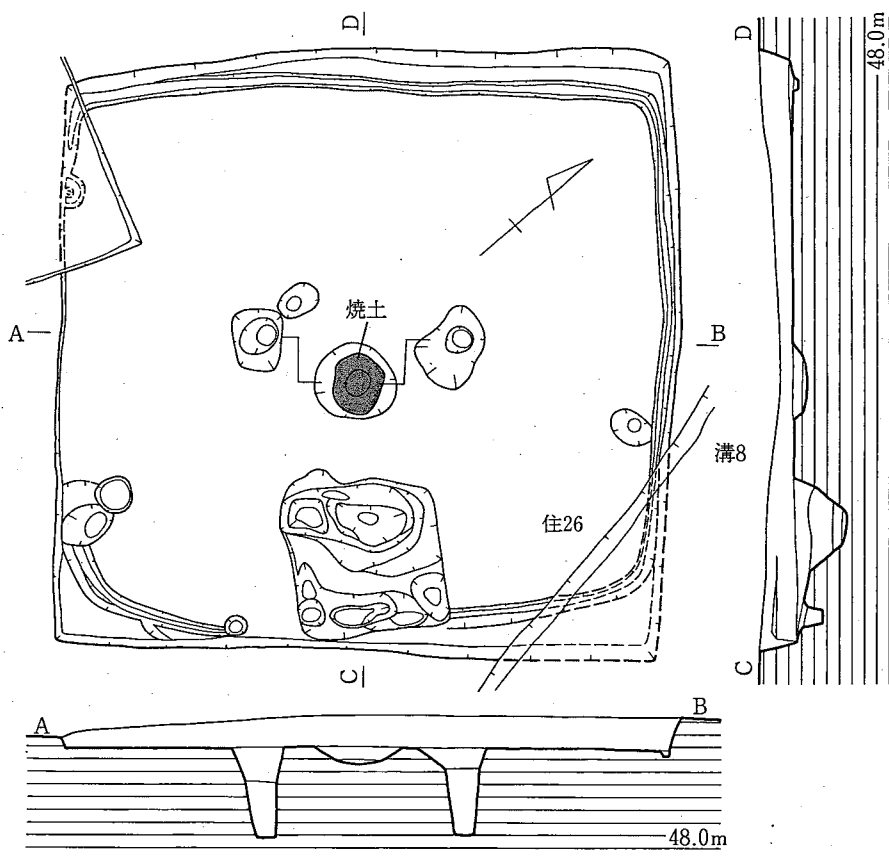
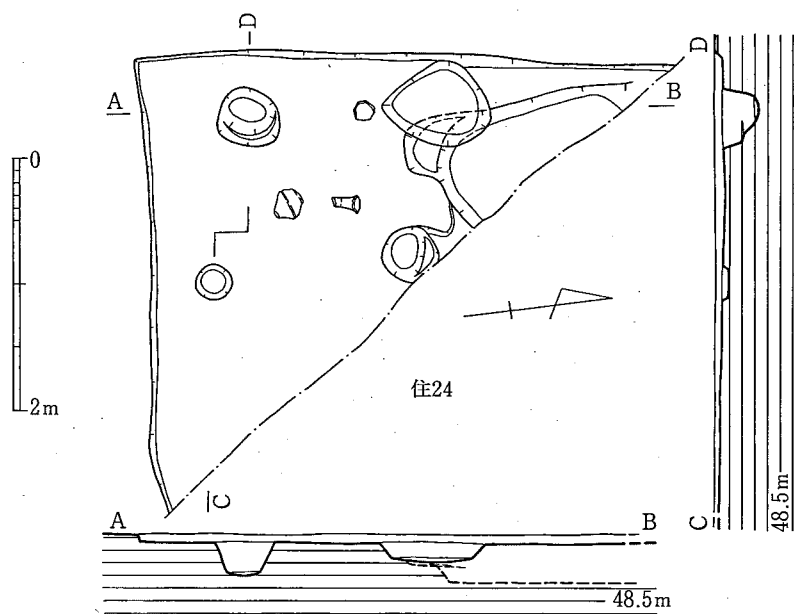
第55图 21·22号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)



第56図 22号竖穴住居跡実測図 (1/60)



第57图 23·59号竖穴住居跡实测图 (1/60)



第58圖 24・26号竖穴住居跡実測図 (1/60)

遺物(第61図1～6 第230図5 第235図19・20 第244図6・8)多くは埋土からの出土であるが、1は床面から、5は屋内土坑からの出土。1の口縁屈曲部の内面には、指頭圧痕が明瞭に残る。3は摩滅が著しく、口縁端部については刻み目が確認できるが、頸部の突帯文については刻み目の存在が不明。6は手捏ね土器。第230図5は輝緑凝灰岩製の石庖丁で埋土からの出土。第235図19は頁岩製の砥石で埋土から、20は粘板岩製の砥石で床面から出土した。第244図6・8の鉄鎌は8については床面から、6については埋土からの出土。(水ノ江)

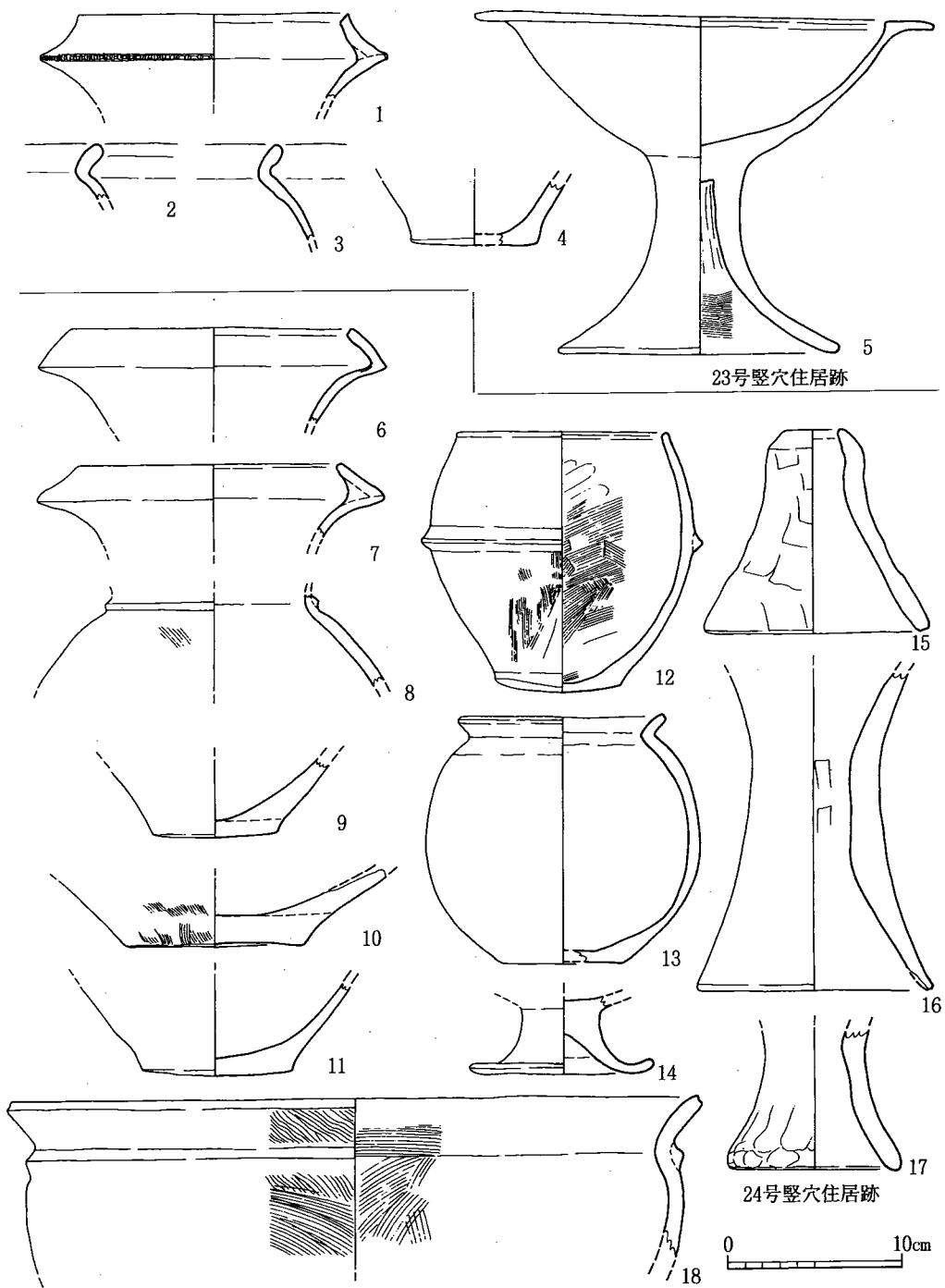
26号竪穴住居跡(図版31・32 第58図)

26号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央部やや北西寄りの竪穴住居跡が密集する地区に位置し、25号竪穴住居跡の他に中世の8号溝にわずかに切られる。平面プランは5.0×4.8mのほぼ正方形で、ベッドは持たない。南西壁以外は幅12～16cm、深さ4cm程度の溝が巡るが、壁に接する部分があれば、壁から10～30cmほど離れている部分もある。まや、この溝の端部には必ず小ピットが掘られており、溝との関連性が想定される。南東壁の中央部に作られる120×115cmの正方形に近い屋内土坑も、壁に接してはいるが壁から離れるとともに深くなり、その底面も凹凸が著しくまた小ピットも掘られる。深さ70cmの2本の支柱穴は1.5mしか離れておらず、そのためか65×60×12cmの炉跡は屋内土坑のある南東壁側に大きくずれている。図示できる遺物こそは比較的多いが、出土量自体は少なくすべて埋土からの出土である。

遺物(第61図7～23 第233図6 第241図3 第242図8 第243図9)遺物の大半は埋土からの出土であるが、10・11・16は屋内土坑から、12は南側の支柱穴からそれぞれ出土した。摩滅が著しく器面調整の窺えるものは少ないが、ハケが主流となるようである。7の口縁部内面や13の頸部外面は強くナダられ、明瞭な稜が窺える。15の頸部の突帯文には刻みが施されない。16の底部にはシャープな稜が付く。12・21・23・32には二次加熱が窺える。第233図6の石庖丁は玄武岩製であろうか。第241図3は埋土から出土した腰岳産黒曜石製の石鎌。第242図8は埋土から出土した凹み石で、砥石としても使用されている。第243図9は埋土から出土した鈍で、先端部がかなり曲がっている。(水ノ江)

27号竪穴住居跡(図版33 第62図)

27号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央部やや北西寄りの竪穴住居跡が密集する地区に位置し、31・32・60号竪穴住居跡に切られる。位置関係からみると、おそらく25号住居跡にも切られているであろう。南北方向については7.9mという数値が得られるが、東西方向については最高で4.4mまでしか測れない。支柱穴や炉跡との位置から、おそらく東西6m程度の長方形プランになるものと考えられる。長軸線上には径75～90cm、深さ70cmの2本の支柱穴と、98×75×5cmの炉跡が並ぶ。中世の8号溝が掘り上がった段階で、165×85×35cmの隅丸方形の屋内土坑



第59图 23·24号竖穴住居跡出土土器実测图 (1/4)

が確認された。ベッドについては、地山削りだしによる幅125cmのものが北壁にのみ検出されたが、支柱穴の位置から判断すると南壁に沿うものがあるはずであるが確認できなかった。なお、屋内土坑の北側にのみ、東壁に沿う幅6cm、深さ3cmの小溝が掘られている。遺物の出土は少なく、埋土中心になる。

遺物 (第65図1～3) 2は屋内土坑出土の器台で、二次加熱を受ける。3は床面から出土した小型の鉢で、内面にはハケによる工具痕が多く残る。(水ノ江)

28号竪穴住居跡 (図版33 第63図)

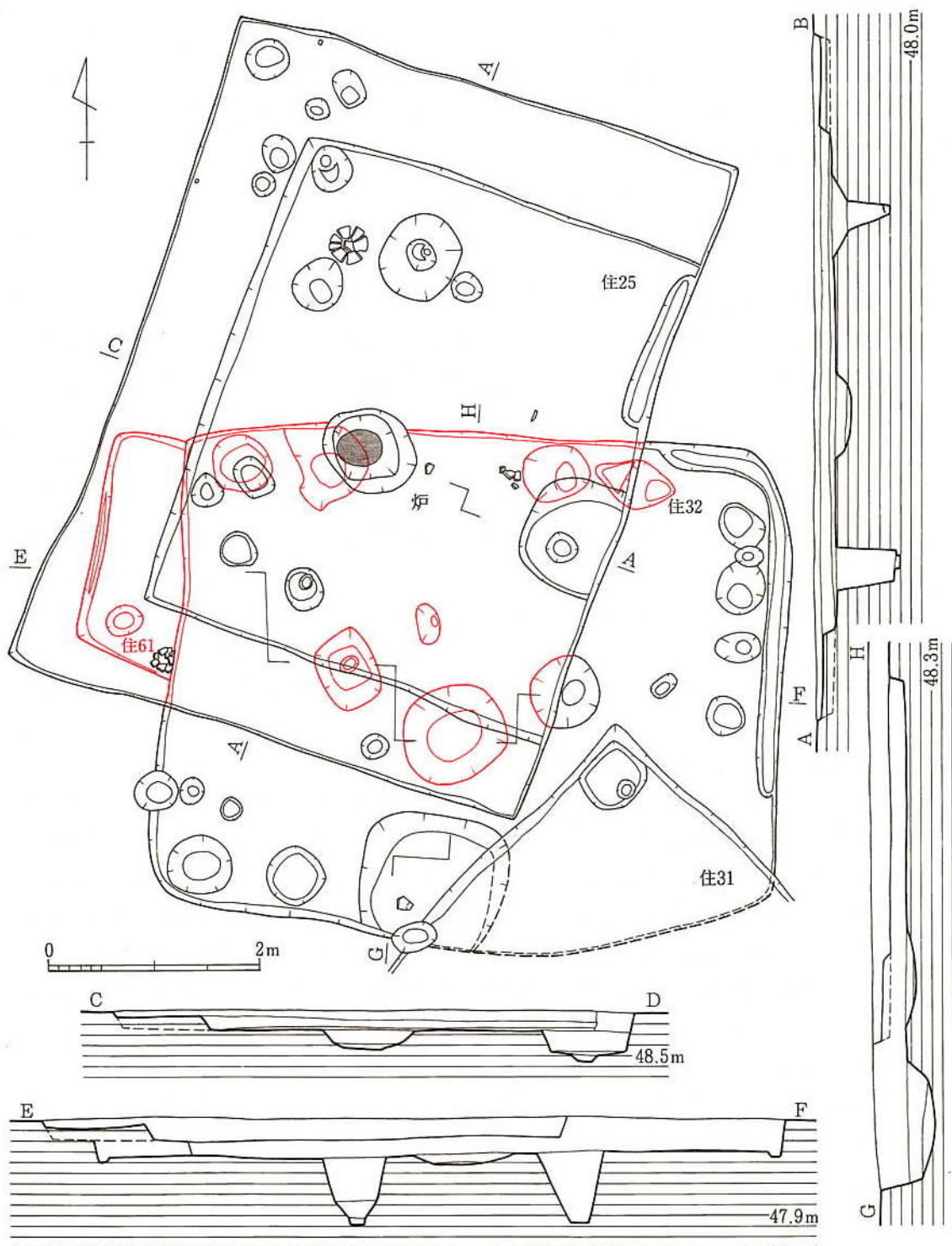
28号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の西端やや北寄りに位置し、29号竪穴住居跡や10号掘立柱建物跡を切る。弥生時代の12号溝に切られたり西側は調査区外に延びることから、南北方向については5.6mという数値が得られるが、東西方向については4.9mまでしか測れない。現時点では短軸線上にある支柱穴の位置からして判断して、おそらく北壁には地山削りだしによるベッドが作られていたと考えられるが、その痕跡は確認できなかった。深さ65cmの支柱穴は、105×84×8cmの卵形になる炉跡とともにおそらく長軸線上に並ぶ。遺物の出土は少なく、大半は埋土からの出土。

遺物 (第65図4～8) 8のみ床面からの出土で他はすべて埋土。復元口径28cmの頸部には突帯文が付く。5は4とは別個体で、外面にはタタキ後のハケ調整が観察される。6～8の底部には稜の有無があるが、形態的にはいずれも平底になり二次加熱も窺えない。(水ノ江)

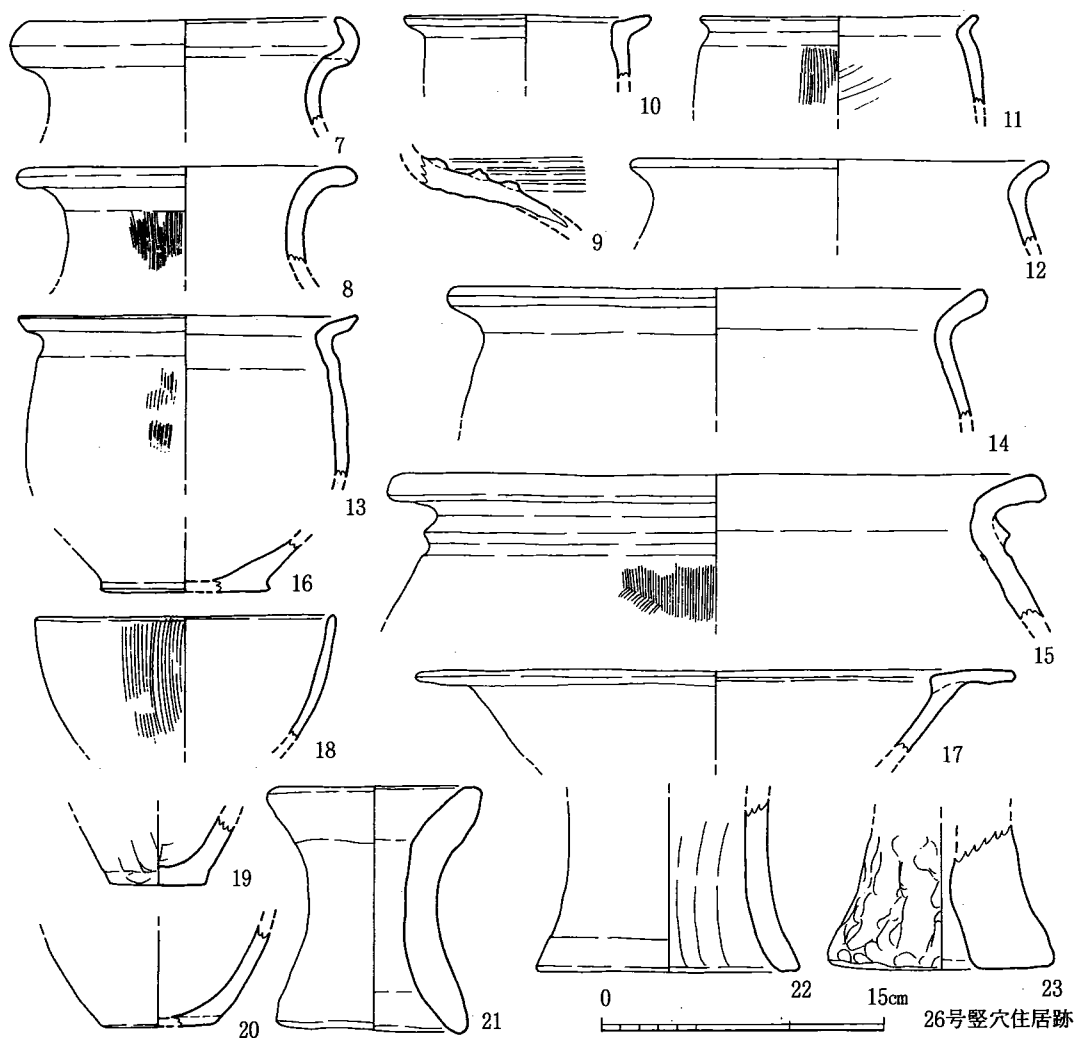
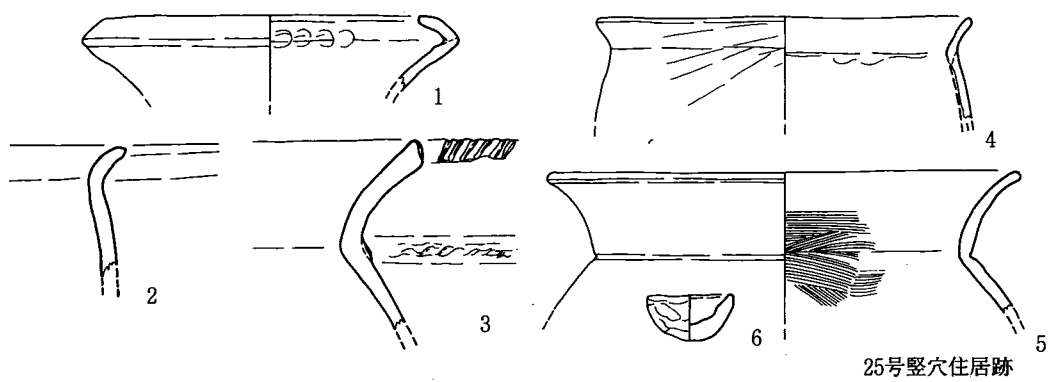
29号竪穴住居跡 (図版34 第63図)

29号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の西端やや北寄りに位置し、28号竪穴住居跡には切られるが10号掘立柱建物跡は切るという先後関係を有する。規模的にはかなり小さい4.7×4.0mの長方形プランであることから、おそらく当初は東西の両壁にベッドが付いていたが、現時点では削平により遺存しないものと考えられる。2本の支柱穴は径70×60cmで、深さは70cm。炉跡は79×71×11cmを測る。92×72cmの楕円形の屋内土坑は南壁中央部から10cmほど離れており、深さは中央の浅い部分で34cm、そこからさらに20cm両側に深くなる。この屋内土坑には他のそれと同様に、両端に何らかの構造物が備わっていたものと考えられる。遺物の出土はそれほど多くないが、住居跡南東隅より比較的纏まって出土した。

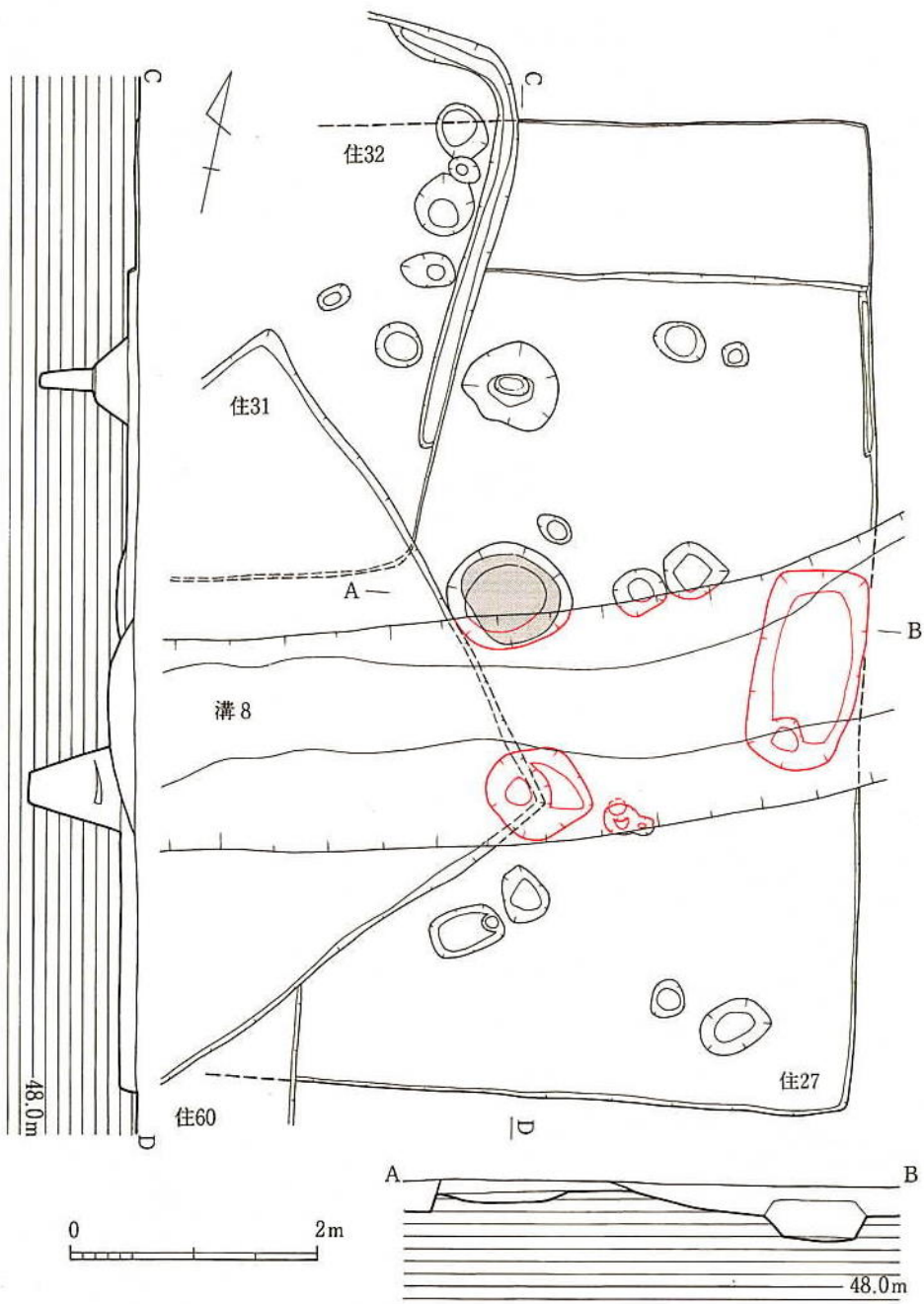
遺物 (第65図9～15) 図示した遺物のうち11・13・15は床面から、9は炉跡から、他は埋土からの出土。9は復元口径20cmの壺口縁部で、内湾した内面には強いナデの痕跡が残る。15は復元口径13cm、復元器高12cmの鉢で、底部は丸くレンズ状になるが、端部にはシャープな稜が作られる。(水ノ江)



第60图 25·32·61号竖穴住居迹实测图 (1/60)



第61图 25·26号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)

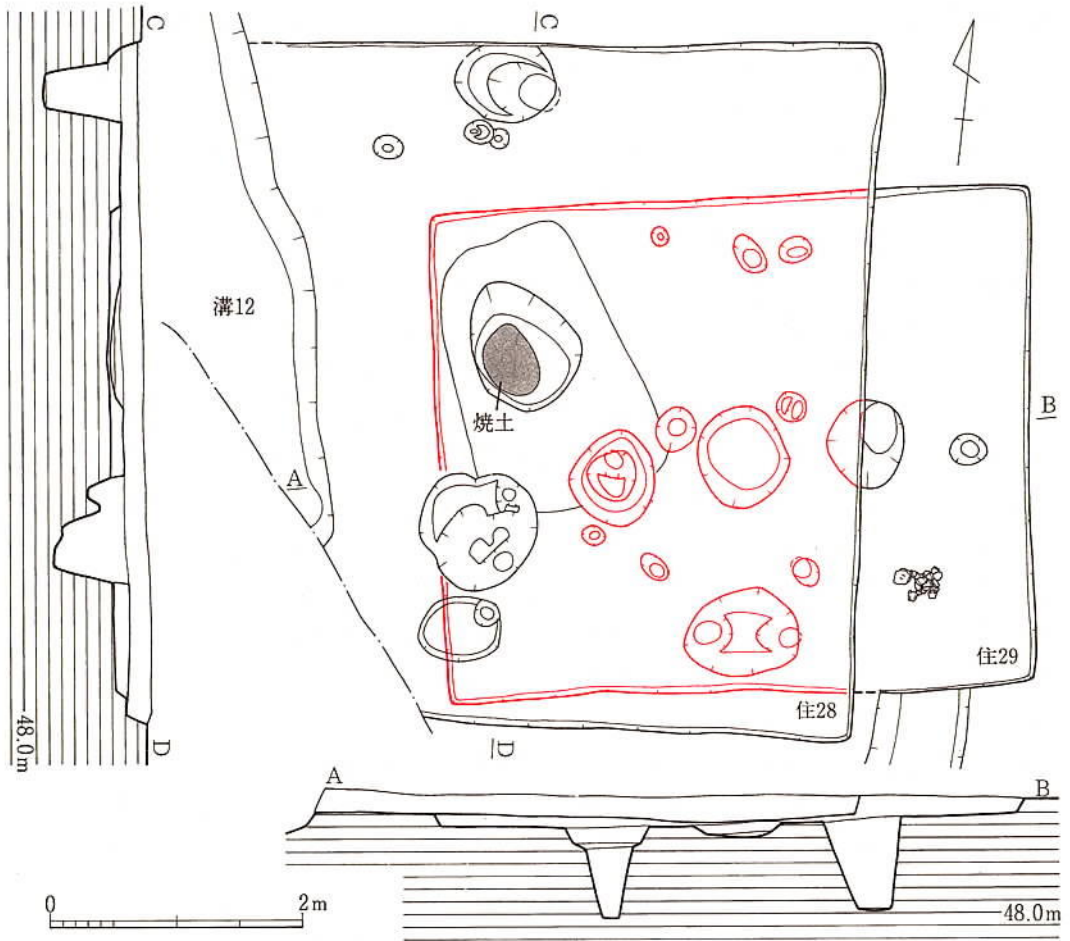


第62图 27号竖穴住居跡実測图 (1/60)

30号竖穴住居跡 (図版34 第64図)

30号竖穴住居跡は丘陵平坦部調査区の西端やや北寄りの竖穴住居跡集中区に位置し、25・32号竖穴住居跡をはじめ1号土坑や中世の8号溝にも切られるが、10号掘立柱建物跡は切る。著しい削平によりすでに部分的に床面下の地山が剥き出しになっており、検出された壁はわずかに北壁中央部の幅1.2m、高さ3cm分だけである。しかし、西壁の壁溝と考える幅15cm、深さ7cmの小さい溝と、東壁に接して作られていたと考えられる屋内土坑的な遺構から、東西方向については5.8m、南北方向については6.0m以上の長方形の平面プランを呈していたと判断した。2本の主柱穴は径60cm、深さ70cmを測り、炉跡は99×89×13cm。遺物は少ないが2点を図示した。

遺物 (第65図16・17) 16は北側の主柱穴からの出土で、内面には指頭圧痕の凹凸が明瞭に残る。17は貼床からの出土で、外面はハケ、内面はナデが施される。(水ノ江)



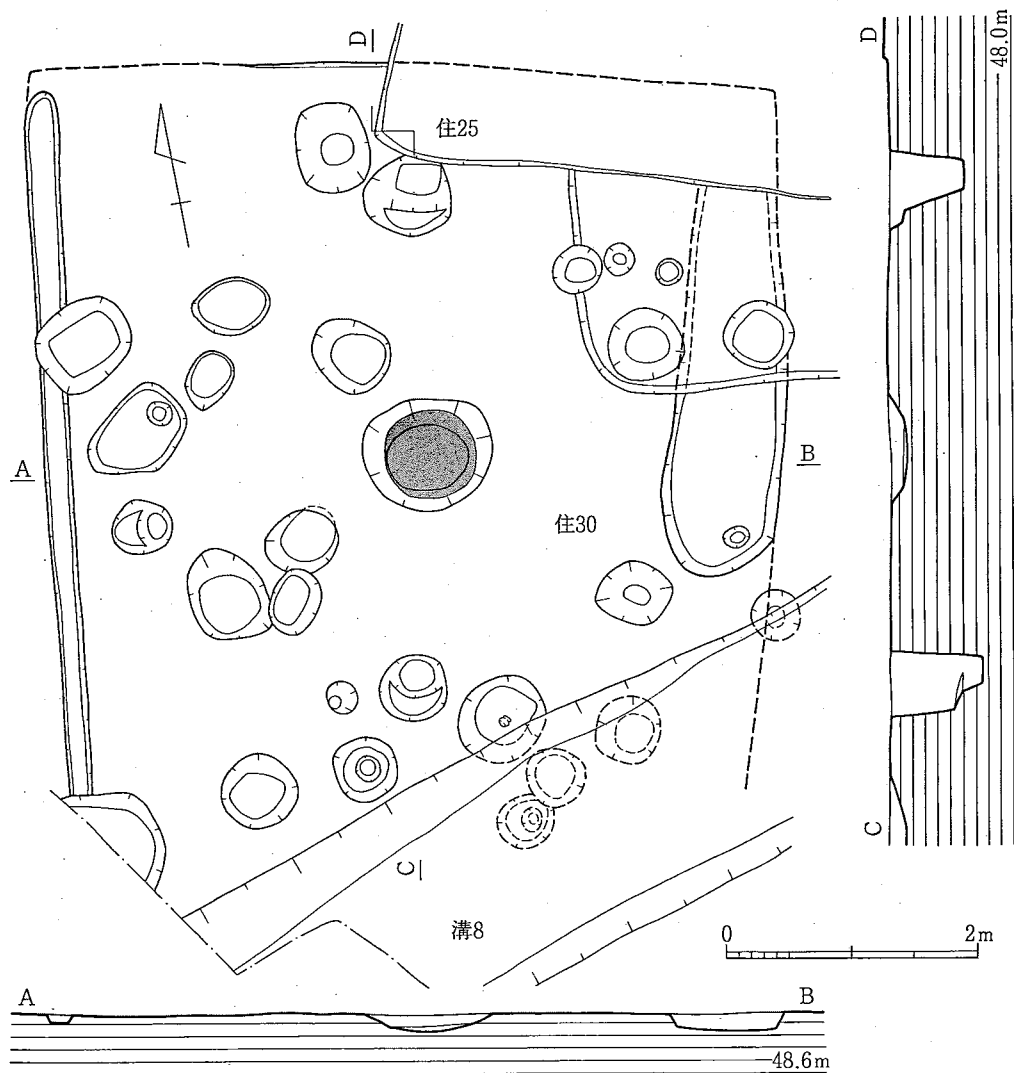
第63図 28・29号竖穴住居跡実測図 (1/60)

31号竪穴住居跡 (図版35 第66図)

31号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の西端やや北寄りの竪穴住居跡集中区に位置し、中世の8号溝にその中央部を大きく切られるが、27・32・60号竪穴住居跡は切る。当初はプランの検出がうまくいかず、また部分的に多量の土器の出土を見たことから、不定形な土坑という認識で掘り進めた。しかし、その途中で竪穴住居跡としての壁の立ち上がりや長方形プランの確認ができたことから、竪穴住居跡という遺構の性格に確信を持った。6.0×4.1mの長方形プランの本住居跡は、南西壁にのみ幅118cmの地山削りだしによるベッドを作る。また、このベッドの北端と北西壁の角に接するように、やはり地山の削りだしによる155×62cmのやや低い高まりを作り、結果的には「L」字状のベッド形態になる。本住居跡の長軸線上に並ぶ2本の支柱穴は深さ50~55cmで、炉跡は55×45×6cmと小さい。この住居跡で特徴的なのは、ベッドに沿って掘られた幅62cm、深さ12cmの溝である。この溝はもちろん本住居内で完結するが、2・5・10号住居跡で検出された中央溝と同じように、まず溝を掘りそこに比較的締まりのない暗褐色土を埋めてからさらに南西側の支柱穴を掘り込む、ということである。性格的には湿気抜きのなものが考えられるが、他に類例がないだけに今後注意を払いたい。砥石2点が出土した屋内土坑は北西壁中央部に152×84×44cmの2段掘りのものが作られ、両端部には径20cm、深さ20cmの小さなピットが2つずつ検出された。遺物は多量でかなり復元できるが、図示できた土器はすべて埋土中に投棄されたものばかりで、床面出土のものはない。

遺物 (第67~69図1~18 第235図21~23 第243図17 第244図12・13 第245図7) 前述したとおり、図示した資料はすべて埋土中のものである。1の内面は横位のハケを施した後に、ハケ工具によって強くナデ上げている。2の胴部の突帯文は著しく摩滅していることにもよるが、刻み目は確認できない。7の胴部突帯文には刻み目が施されない。8の外面には炭化物の付着が見られ、その部分だけタタキの痕跡が窺える。9はわずかに平底の痕跡が残り、二次加熱を受け変色する。10~14は大型の甕で、10の復元口径は47cm、11に35cm、12は42cm、13は50cmを測る。11の口縁端部には「×」字状の刻み目が施されるが、頸部と胴部の突帯文には刻み目は施されず、頸部の突帯文については螺旋状に貼り付けられたため、粘土紐の端と端がずれてつながっていない。器面調整不明。12の胴部外面には細かくて密なタタキが、全面に丁寧に施される。14の外面には細かくて丁寧なタタキが、内面にはハケ目が施され、胴部突帯文の刻み目はハケ状の工具によるものであろう。18はボウル状の鉢であるが、全体的な器形や突帯文の位置から、おそらく当初は甕の器形を意識して製作していたと考えられる。外面の底部はケズリが施される。底部付近には焼成後の穿孔が見られるが、意識的なものか偶然の所産か明確でない。3点の砥石のうち、砂岩製の第235図21と緑色片岩の22は屋内土坑から、粘板岩製の23は埋土からそれぞれ出土した。第243図17は埋土中に一括投棄された土器群に含まれるもので、刀子の一部であろうか。第245図7は床面から出土した袋状鉄斧である。第244図12・13は埋土からの出土。

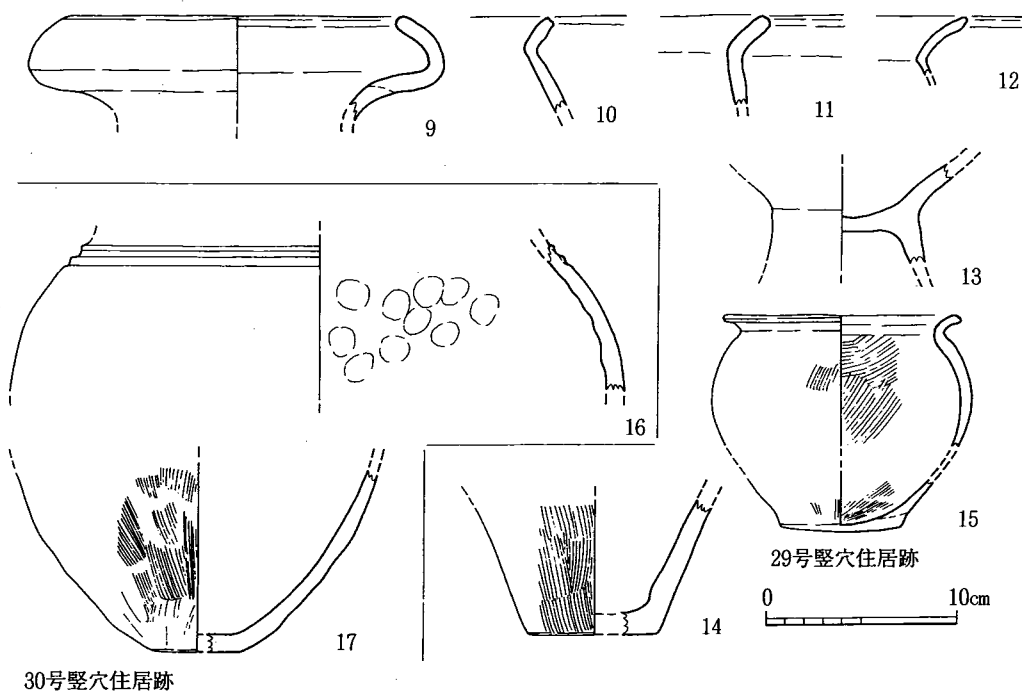
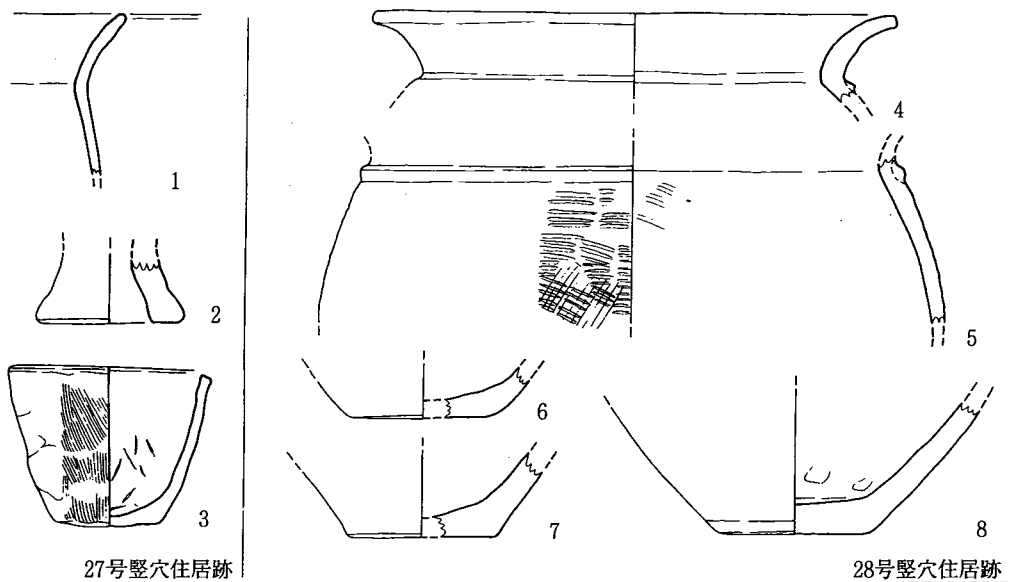
(水ノ江)



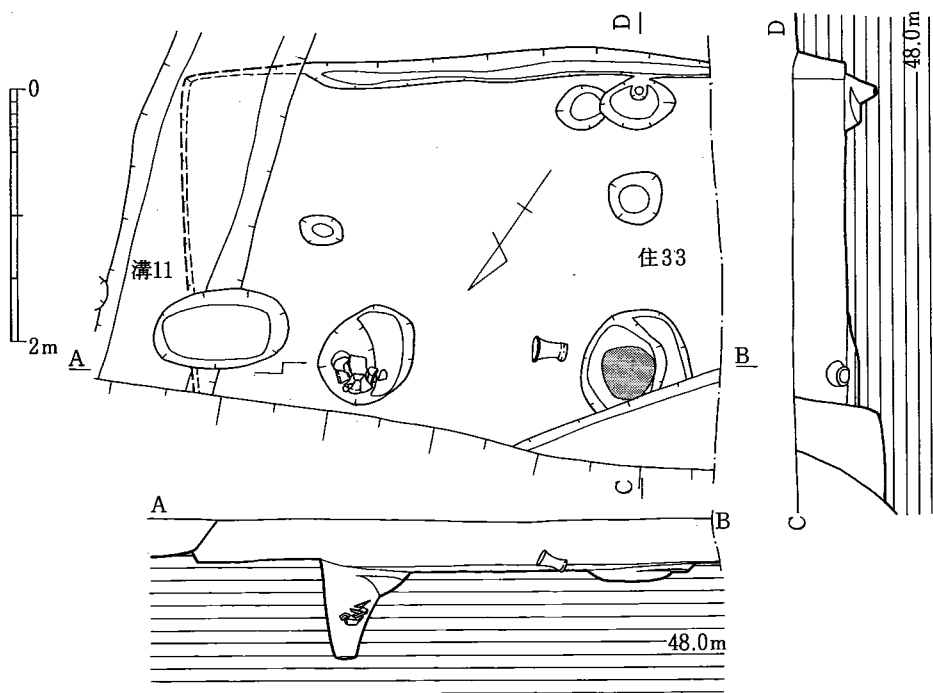
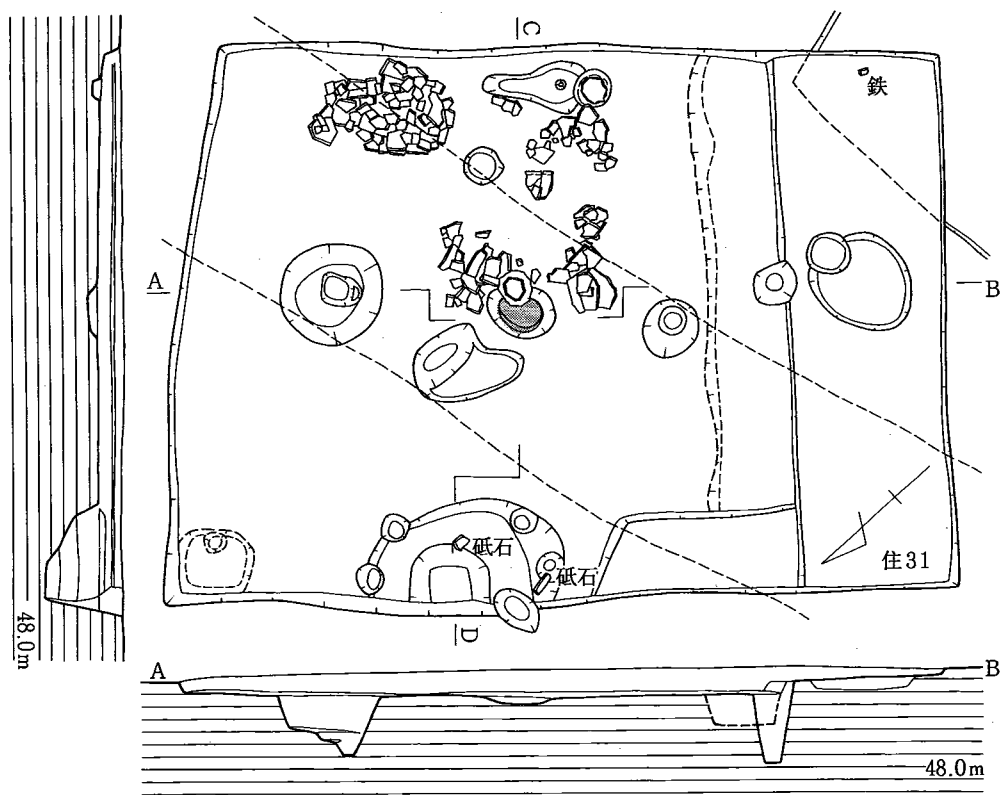
第64図 30号竪穴住居跡実測図 (1/60)

32号竪穴住居跡 (図版36 第60図)

32号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央部やや北西寄りの竪穴住居跡が密集する地区に位置し、27号住居跡は切るが、25・31号住居跡には大きく切られるという先後関係を有する。5.8×4.9mの南北の壁がやや膨らむ隅丸長方形プランで、ベッド状遺構は確認されていない。長軸線上の2本の支柱穴は径60cm、深さ65cmで、南壁側に寄る炉跡は97×91×12cm。南壁中央部の屋内土坑は138×125×26cmを測る。北東隅には幅17cm、深さ4cmの壁溝が「L」字状に作られる。本住居跡北西隅には61号住居跡との切り合いが見られたが、北壁のラインが本住居跡と61号住



第65图 27~30号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/4)



第66图 31·33号竖穴住居迹实测图 (1/60)

居跡とて直線的に揃うことと、床面のレベルが同じことから、61号住居跡は本住居跡に付設された遺構である可能性が高い。遺物の出土は少ない。

遺物 (第69図19～25 第243図7 第244図12・13) 図示した遺物のうち、19は床面から、21は西側の支柱穴から、22は屋内土坑からの出土で、他は埋土中に含まれる。全体的に遺存状態が悪く、器面調整を窺えるものは少ない。19の内面や24の外面には工具によるナデが窺える。第243図7は埋土から出土した鉄鎌の茎で、部分的に木質が残る。 (水ノ江)

33号竪穴住居跡 (図版36 第66図)

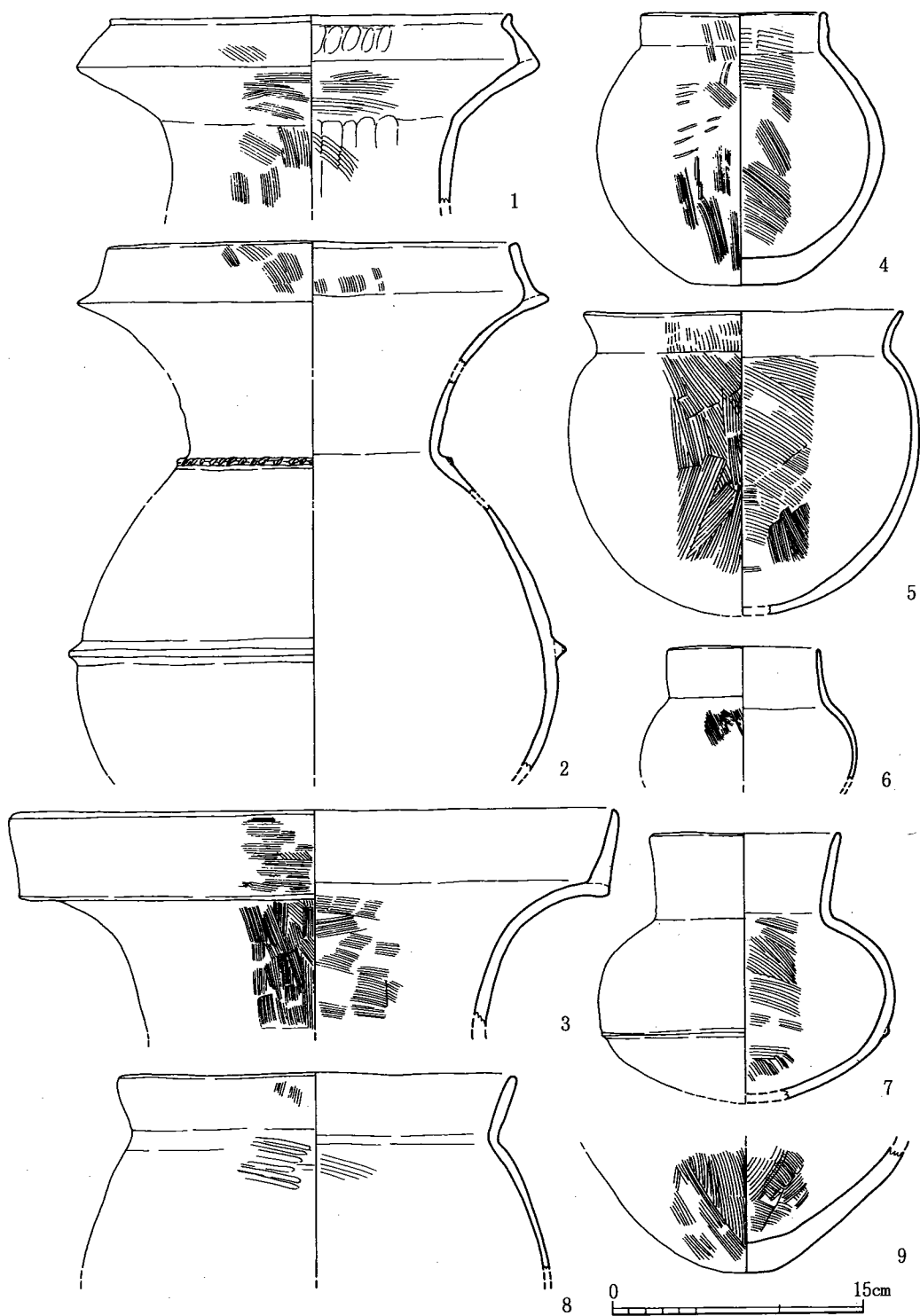
33号竪穴住居跡は平坦部調査区の北東隅に位置し、近世の6・7号溝や弥生時代の50号竪穴住居跡のほかに11号溝にも大きく切られ、また大部分が調査区外に延びることから、南東部1/4程度が検出できただけで全体的な規模や構造については不明な点が多い。南北方向3.1m、東西方向4.2mまでしか測れないが、壁高は最高で41cmと住居自体の遺存状態は良好。支柱穴については東側のものが1本だけ確認されており、83×67×72cmを測り、その中位付近から第70図1の土器が出土したが、これは支柱穴内に広がっており、柱を抜き取った後に入れられたものと考えられる。炉跡は95×82×12cmで、その東横20cmの油仮面上には第70図4の完形になる器台が出土した。

遺物 (第70図1～5) 遺物は少なく、1が支柱穴から、4が床面から、それ以外が埋土からの出土である。1の復元口径は26cm、4は外面裾部が摩滅しているだけで、器面調整は内外面ともにハケ。強く折り曲げられた口縁部の口径は18.2cm、器高21.8cm、裾径18.3cmを測る。

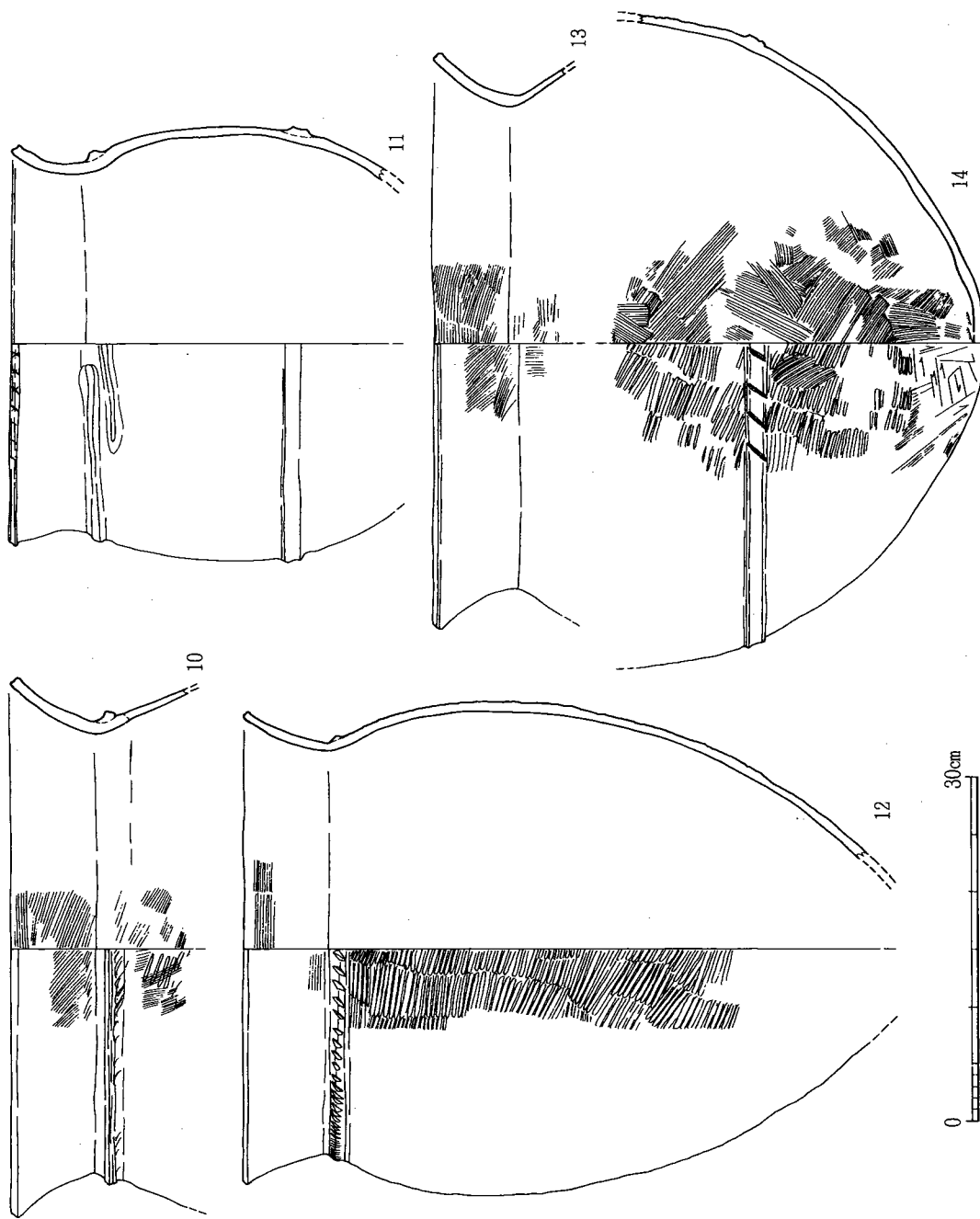
(水ノ江)

34号竪穴住居跡 (図版37～40 第71～73図)

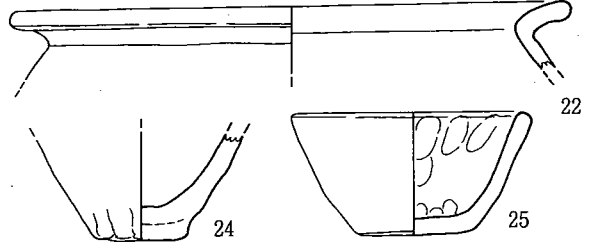
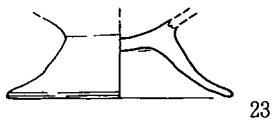
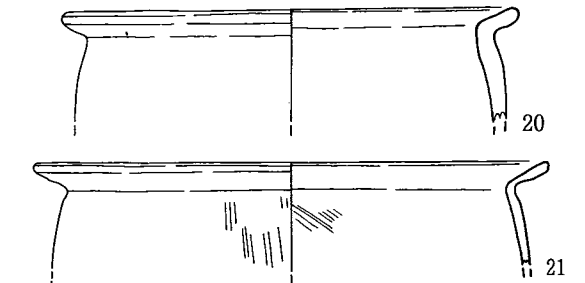
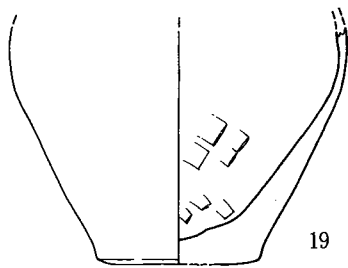
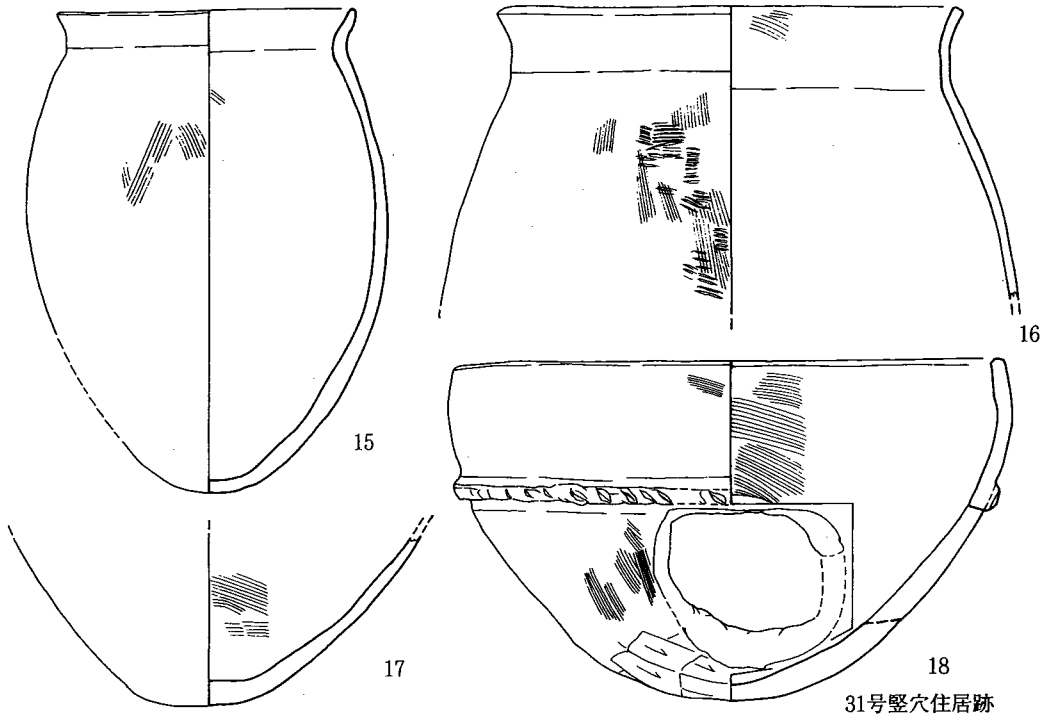
34号竪穴住居跡は平坦部調査区の北東隅に位置し、近世の6・7号溝に本住居跡の北側を切られるが、33・35号住居跡は切る。9.1×6.7mという長方形プランは本遺跡において17号住居跡とともに最大規模の竪穴住居跡で、長軸はほぼ真北を指す。平面プランは長方形としたが、厳密には東西の壁は平行して西側にわずかに膨らむように弧を描いており、その意味が目される。壁高は最高で60cmと遺存状態は良好。南西隅にだけ暗黄褐色粘土による2.7×1.4mの長方形のベッドが付き、西壁にはこのベッドから幅15cm、深さ5cmの壁溝が沿う。本遺跡の竪穴住居跡のパターンからみて、本住居跡の西壁か東壁のどちらかの中央部に屋内土坑が作られるはずであるが検出できなかった。貼床はほぼ全面に亘って、厚さ2～4cmの黄褐色土交じりの褐色土が確認された。本住居跡で特筆すべきことは、17号住居跡でも確認された、床面4カ所を確認された地山とほぼ同質の黄褐色土による高まりである。この中でも南壁中央部のものはやや粘質性が強く、180×130×45cmの長方形に作られ、かなり強く搗き固められているようで、



第67图 31号竖穴住居跡出土土器実測図。1 (1/4)



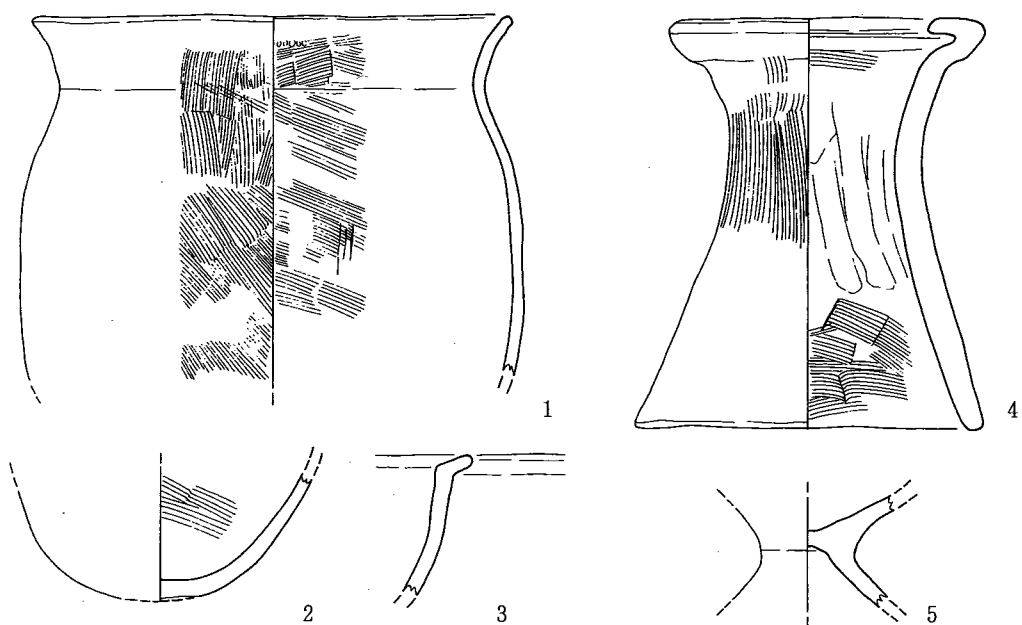
第68图 31号竖穴住居跡出土土器実測図. 2 (1/6)



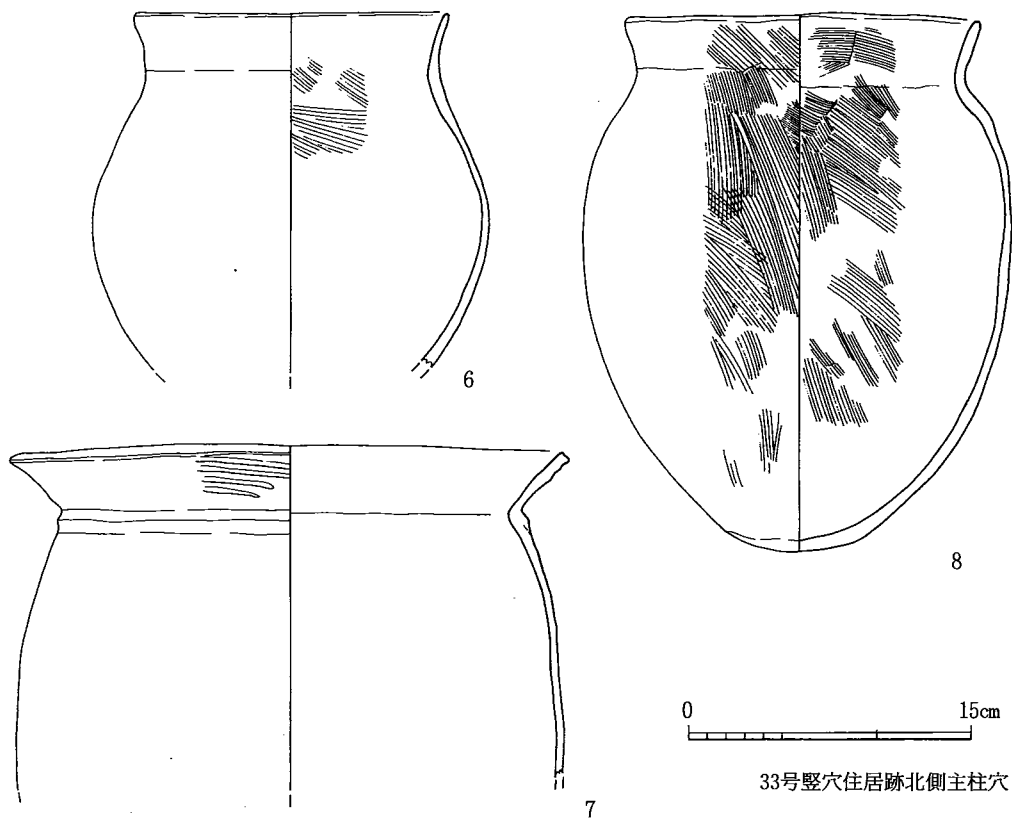
32号竖穴住居跡



第69图 31·32号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)



33号竖穴住居跡埋土



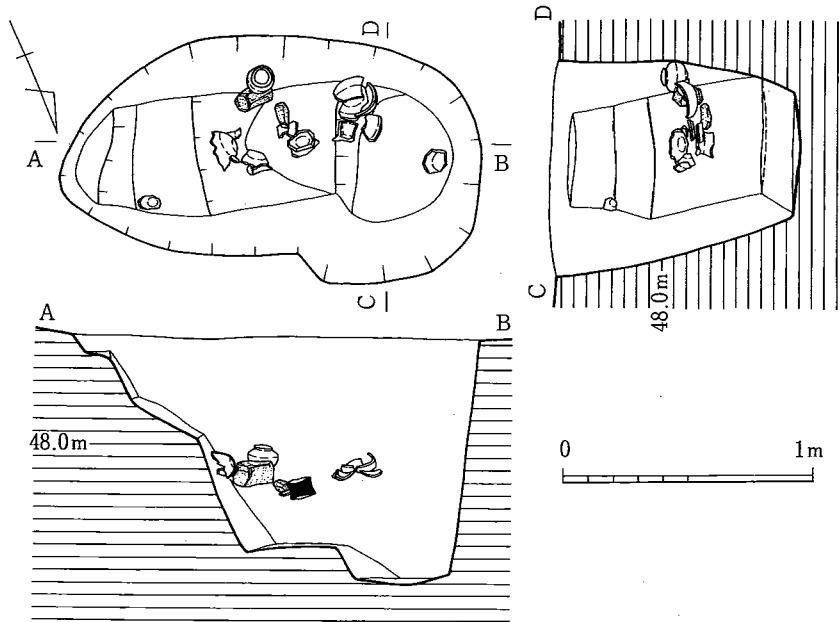
33号竖穴住居跡北側主柱穴出土土器実測図

第70图 33号竖穴住居跡北側主柱穴出土土器実測図 (1/4)

位置から判断しても、またこの粘土を除去するとその中央部に完形で焼成後に穿孔された黒塗りの小壺（第73図7）が正置されていたことから、本住居跡への入口の階段に相当するものと考えられる。また、北壁に沿うものは不定形に厚さ20cmで広がり、締まりがなく暗褐色土と混ざっており性格は判然としない。問題は中央付近で検出された、2つの土饅頭状の高まりである。北側のものは205×150cmの瓢箪状に厚さ最高18cmで、北側の支柱穴の掘形にわずかに被るように広がり、南側のものは185×140cmの楕円形状に厚さ最高10cmで、炉跡の掘形にやはりわずかに被るように広がる。このことから、まずこれら2つの土饅頭が少なくとも本住居跡廃絶後に生じたものと考えることができよう。次にこれら土饅頭の土質であるが、いずれも混ざりのない地山の黄褐色土そのものであり、地山を掘削して生じた排土と何ら変わりがない。そこで注目されるのが、支柱穴の状態である。北側の支柱穴は210×85×97cmで東側へ階段状に浅くなっていき、南側の支柱穴も170×95×100cmでやはり東側に階段状で浅くなっていく。特に、この南側の支柱穴中央部付近には第71図に示したように、小壺等が面的に広がるように置かれており、何らかの祭祀的行為が行われたものと考えられる。さらには、かなり精緻に柱痕の検出を試みたが、本支柱穴からは確認できなかった。以上のような各種の状況証拠より、本支柱穴は住居廃絶後に柱を抜き取るために東側方向から階段状に掘り下げていき、柱を抜き取った時点で祭祀を行い、この階段状に掘り下げた結果として生じた排土が、すでに廃絶していた炉跡に被るように土饅頭状になったと考えることができよう。北側にある土饅頭も、支柱穴の柱を抜き取るために東方向より掘り込まれた際に生じた排土と考えられる。従来、大きな横長の平面プランで一方から階段状に掘り込まれる柱穴は、大きな柱を建てるために作られたものと考えられていたが、本遺跡から確認された幾つかの事例により、これらは柱を立てるためではなく柱を抜くための痕跡と考えるのが妥当であろう。遺物の出土は意外と少ないが、床面からは比較的大きく復元できる資料が得られた。

遺物（第73・75図1～25 第230図7・8 第235図24 第243図18）1～7・9・11・12は床面から、8・10・13～17は埋土から、18～25は南側の支柱穴からの出土である。1は復元口径15cmの小型甕で、胴部外面にはタタキが、口縁部内外面にはハケが施される。3はほぼ完形に復元できる甕で、外面に遺存状態は悪く胴部付近にタタキが、底部にはケズリが痕跡的に窺える。底部はレンズ状に丸くなり、二次加熱による変色は見られない。7は入口の階段の下に埋められていた完形の小壺で、丁寧なハケが施される。外面胴部には黒く塗られ、胴下半部には焼成後による径6cm程度の円形の穿孔が施される。8は内湾した口縁部下に突帯文が貼り付けられるボウル状の鉢、9は底部がわずかに平底になるやはりボウル状の鉢である。14～17は手捏ね土器であるが、いずれも埋土からの出土。南側の支柱穴には小型の土器ばかりで、まったくの完形品は存在しないが、21～25はほぼ完形に近い遺存状態である。21・22は外面にミガキが痕跡的に残り、同じような状態で口縁部が欠損しており、意図的な破損が想像される。第230

図7・8はいずれも輝緑凝灰岩製の石庖丁で埋土からの出土。第235図24の砥石は粘板岩製で床面からの出土。第243図18は床面からの出土で素環頭大刀か。(水ノ江)

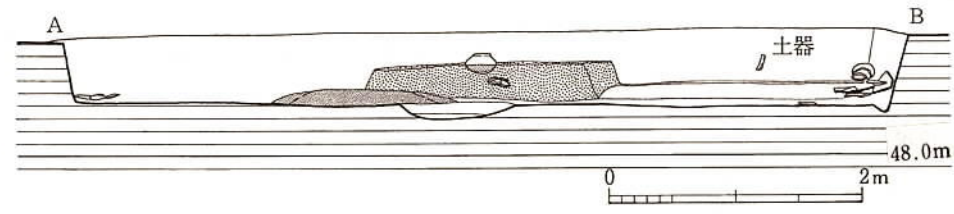
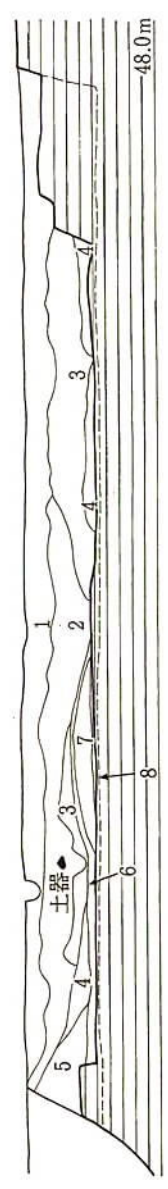
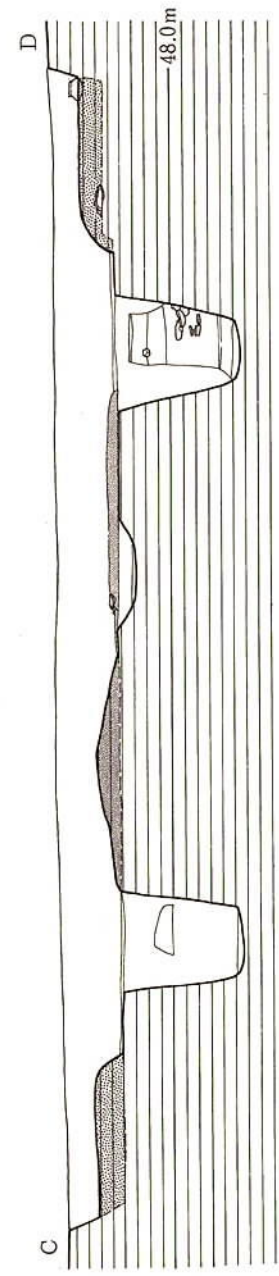
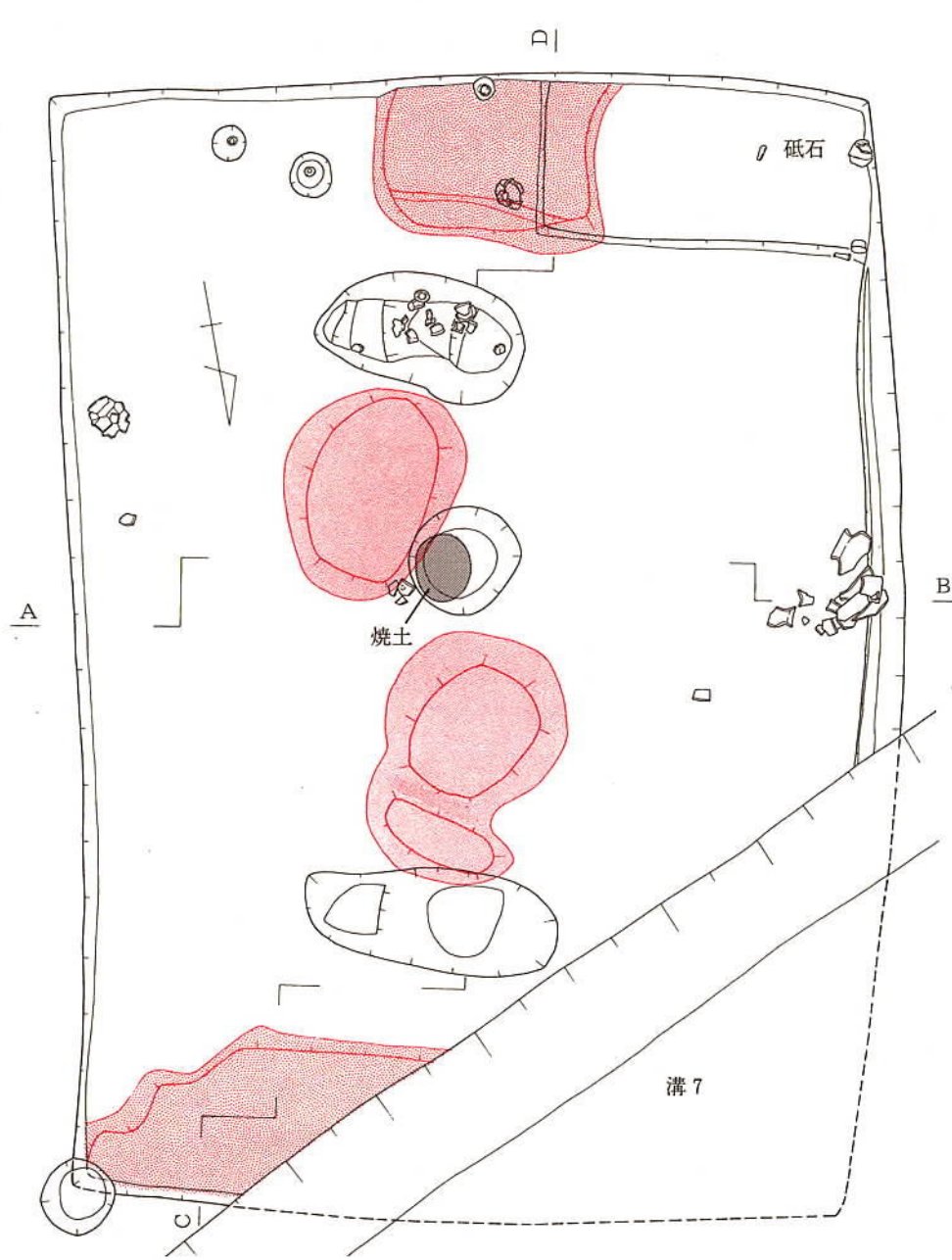


第71図 34号竪穴住居跡南側支柱穴実測図 (1/30)

35号竪穴住居跡 (図版37 第74図)

35号竪穴住居跡は平坦部調査区の北東隅に位置し、34号住居跡に全体の約3/4を削平されて残っていないが、10号掘立柱建物跡だけは確実に切る。南北方向については5.5mという数値が得られるが、東西方向については南壁において2.4mまでしか測ることができない。しかし、他の住居跡の状況から平面プランが長方形であることは間違いないであろう。床面の状況についても不明な点が多いが、34号住居跡の床面下より径約40cm、深さ約70cmの支柱穴が2本検出された。東壁の中央部には145×48×15cmで楕円形で両端の深くなる土坑が検出されたが、形態や位置から判断して屋内土坑と考えられる。また、南壁に沿うように黄褐色の粘質土が約20cmの厚さで残っているが、入口の階段的機能を有していたと考えられるほど強く踏み締められていない。本住居跡は大きく削平されている割には、遺物の出土量は豊富であった。

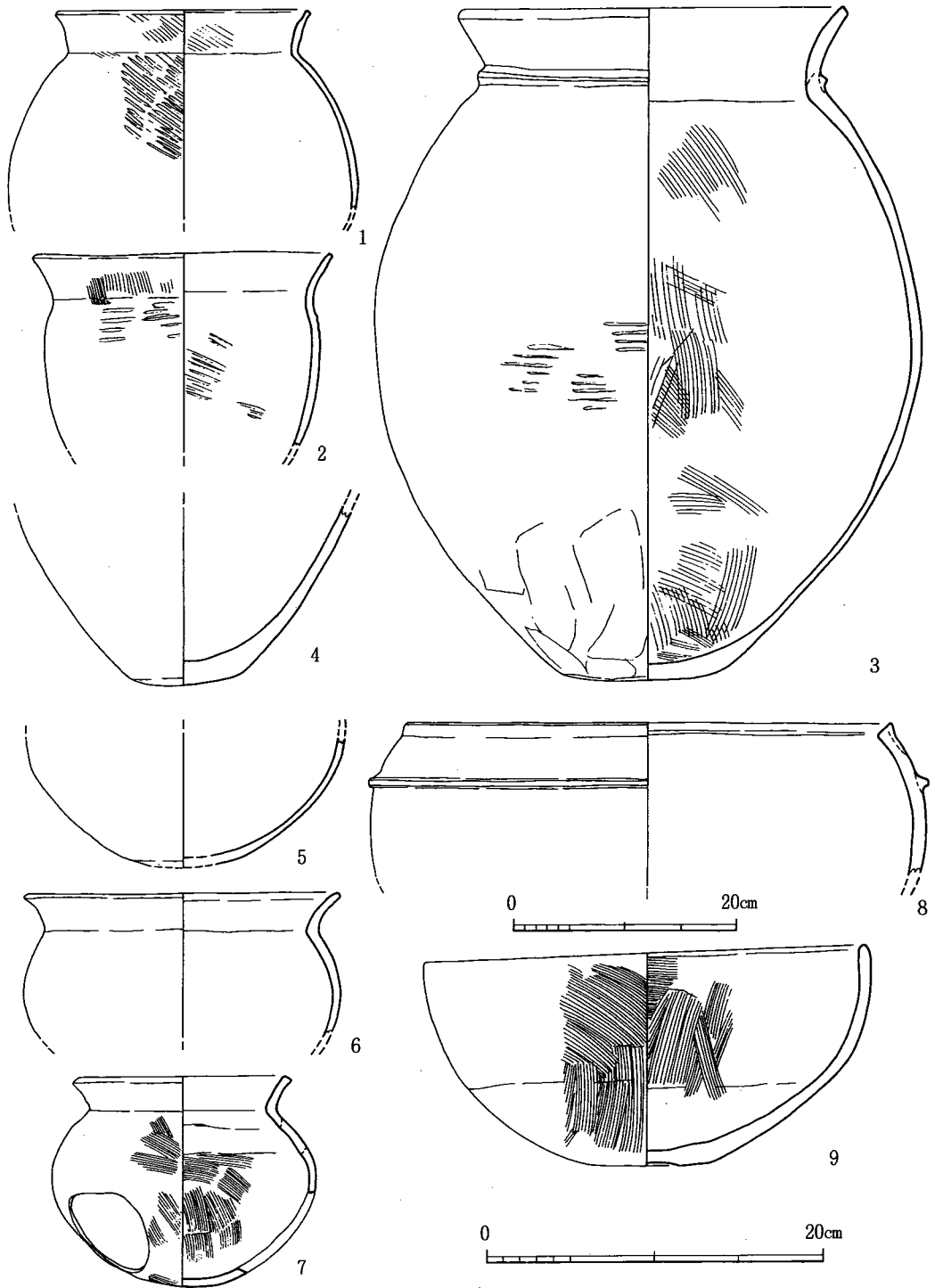
遺物 (第75・76図26~44 第235図24) 40は床面からの出土であるが、他はすべて埋土からの出土である。器面調整が観察されるものについてはすべてハケがナデが施されており、タタキが窺えるものはない。26の口縁部内面には強く横位のナデが施される。29~31の底部には二次



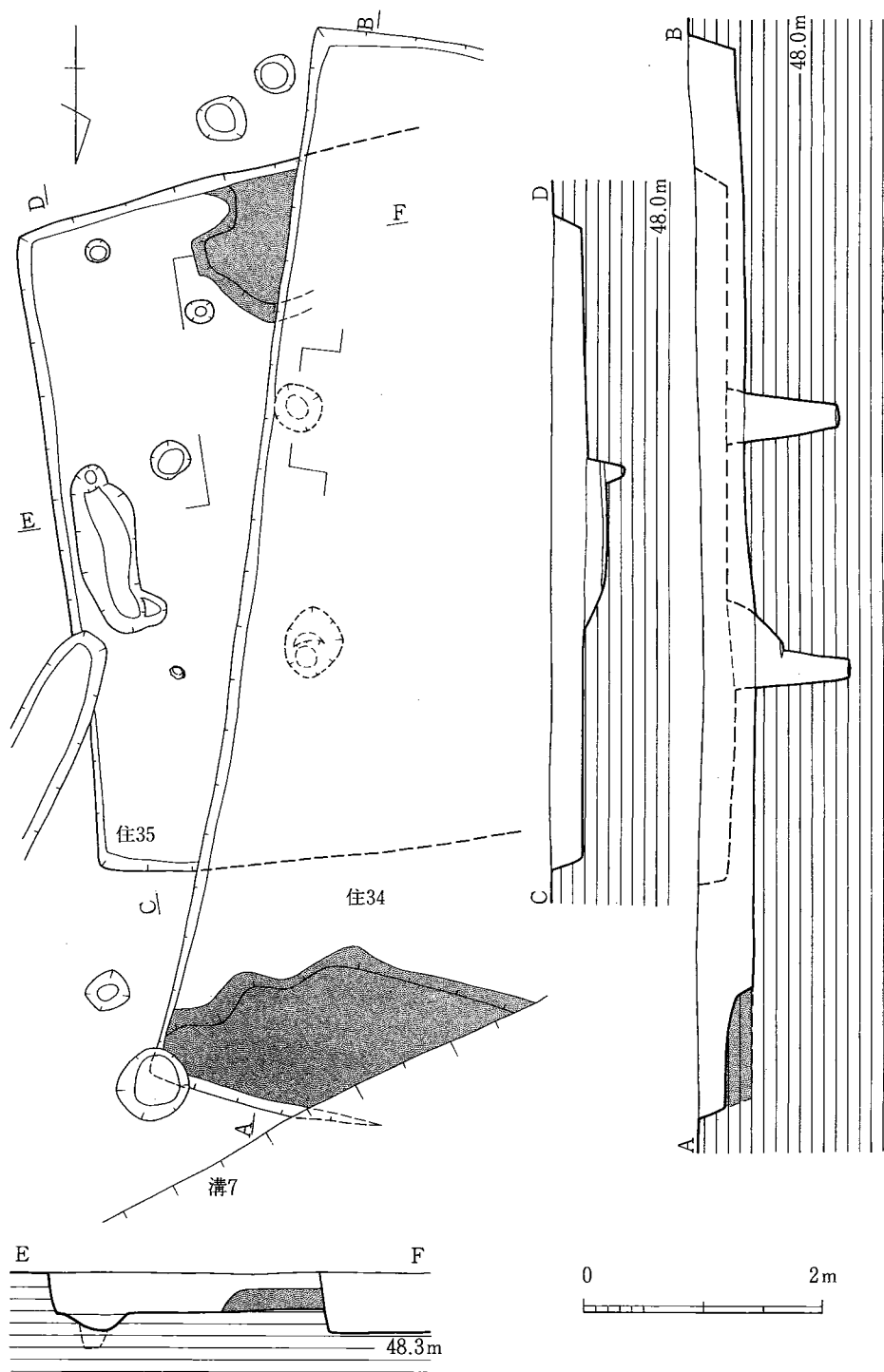
土層名

1. 暗褐色土 (土器片多数含む、硬い土質)
2. 暗褐色土 (黄色ブロック少量含む、やや硬い土質)
3. 暗褐色粘質土 (2より多く含む、やや粘質)
4. 暗褐色粘質土 (やわらかい)
5. 暗褐色粘質土 (やわらかい)
6. 灰褐色粘質土 (やわらかい)
7. 暗黄褐色粘質土 (軟質で粘質弱い)
8. 暗褐色粘質土 (やわらか粘質土でⅦ層中に混ざる)

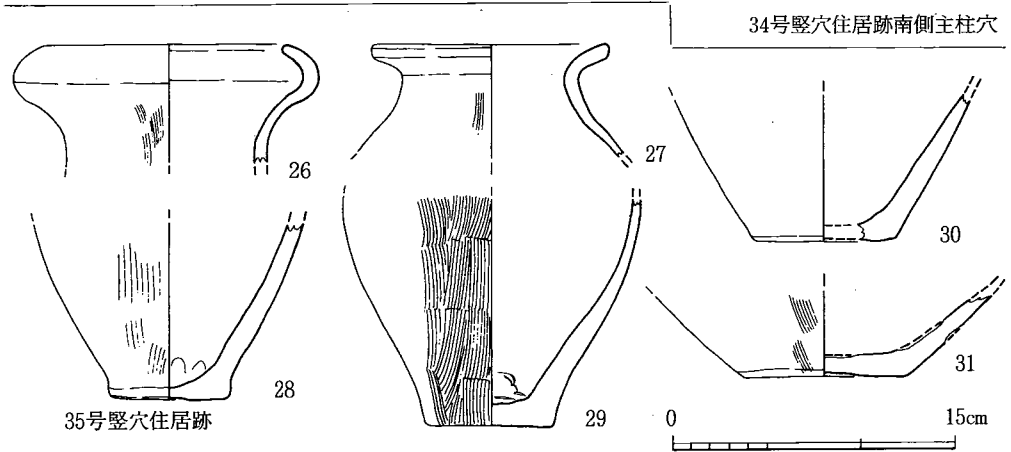
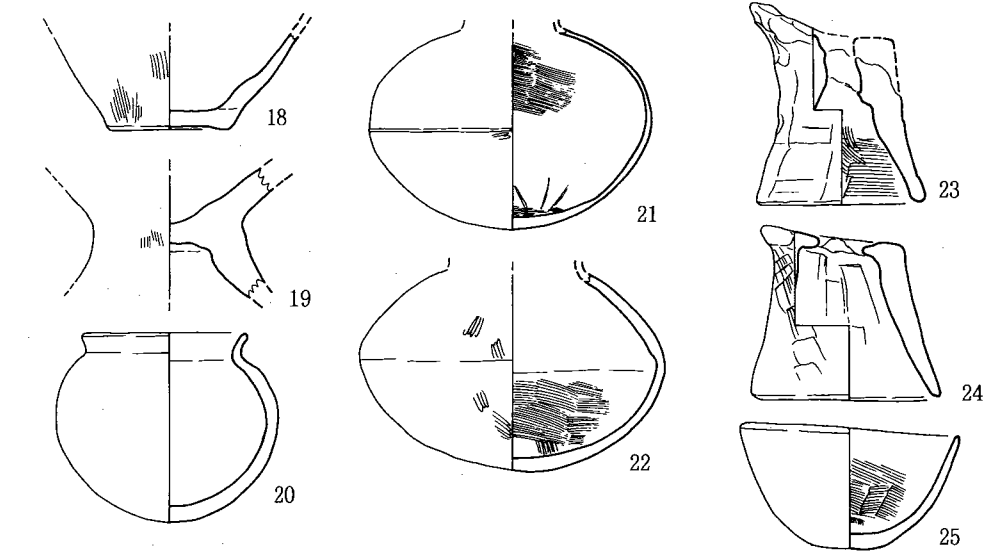
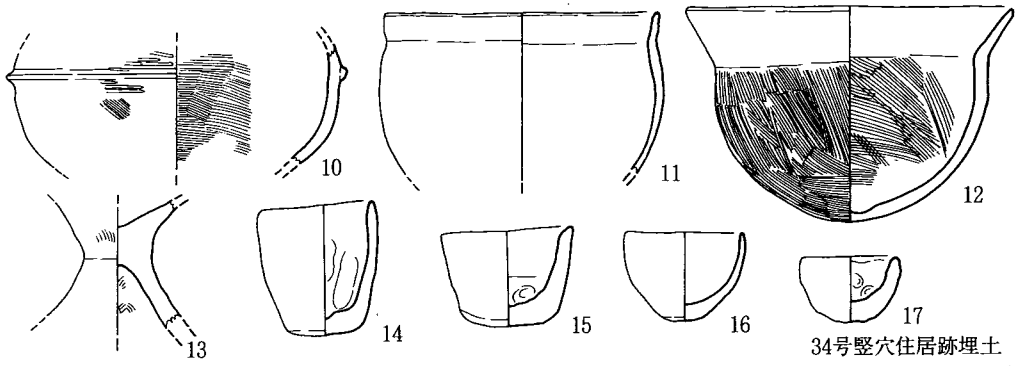
第72図 34号竖穴住居跡実測図 (1/60)



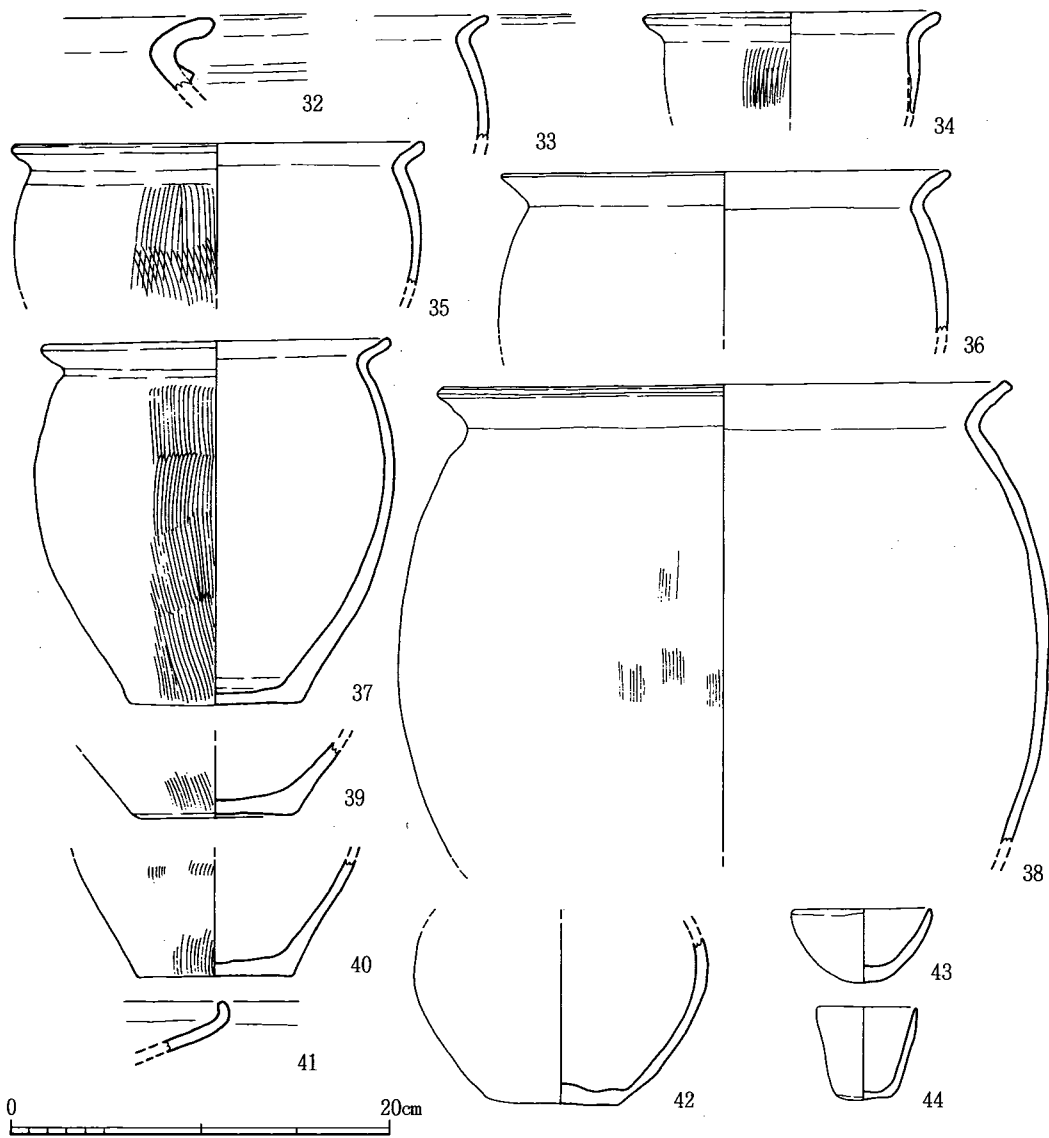
第73图 34号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4 8は1/6)



第74图 35号竖穴住居迹实测图 (1/60)



第75图 34·35号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)



第76图 35号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

加熱の痕跡はなく、いずれも大きな黒斑が見られる。32～38の甕のサイズは様々で復元口径ではあるが、34は16cm、35は28cm、36は24cm、37は19cm、38は31cmを測り、32にだけ突帯文が貼り付けられる。39・40の底部にはいずれも二次加熱の痕跡が窺える。41は高杯の口縁部になるうか。43・44は手捏ね土器である。第235図24は二次加熱を受けた砂岩製の砥石で床面から出土。
(水ノ江)

44号竪穴住居跡 (図版41・42 第77図)

調査区中央北部に位置し、46・47号竪穴住居跡を切る。遺構は深いため残りがよい。長辺8.6m、短辺6.4mの長方形大型竪穴住居跡で隣接する34号住居とは規模がほぼ等しい。主軸方向が方向がほぼ直角に振れており、配置になんらかの意識が働いたと思われる。東側支柱穴は西壁が緩やかに立ち上がり、西側支柱穴は西壁にテラスをもち、柱痕が検出されなかったため、柱は抜き取られていると考えられる。作り付けのベット状遺構が東壁につき、屋内土坑は南壁中央に位置する。床面は硬化した貼床で明瞭に検出された。埋土からの遺物量は多く、パンケース10箱にのぼる。

遺物 (第80～82図 第243図4 第236図25～27 第230図9・10・13 第247図217 第242図7) 1～6は複合口縁壺で、口縁端部にバリエーションがあるので、若干の時期差があるだろう。端部が外反したり、跳ね上げる1・4や、直立する6は新しい要素である。また、頸の広がり方も、直線的に立ち上がるものが新相であろう。5は肩部に「ノ」の字形の浮文があるが、この浮文は本来勾玉を意図していたものが形骸化したものと思われる。6は胴の膨らむ大型の壺で、胴の最大径は36.3cmを測る。口縁形態とともに胴部にも新しい要素が見える。7・8は壺の底部と思われ、煮沸による変色がない。9～16は甕棺で、多くの破片が出土しているが、完形になるものはなく、大きく復元できたものだけを図示した。いずれも大きな破片であるが、異なる個体らしい。10・12・16は同一個体の可能性を残す。14は大型の甕の胴部片であるが、方形に割って再利用された可能性がある。17は中型甕の口縁部で煮沸使用の痕跡が著しい。18は甕の底部で、外底に煤が付着し、胴下位に赤変が見られるので、接地して支脚を使用して煮沸したと考えられる。19は高杯の脚部で、胎土は精良である。20は2次焼成を受けていないことから脚付鉢の脚部と思われる。20は台付器種の脚、21・22・27は鼓形器台で、前2者は使用による2次焼成を受ける。24・25は口縁が袋状を呈する鼓形器台で、口縁の袋部外面に使用による変色が見られる。26は鼓型器台の脚部と思われるが、大きさの割に器壁が薄いので、異なる器種かもしれない。28は小型の壺の底部と思われる。小さな台状の平底をもつことから、畿内など外来系の土器の影響を受けた在産土器の可能性もある。29は無頸壺の胴部である。30は口がすばまり、胴下位に最大径をもつタイプか、あるいは短頸壺・直口壺のいずれかである。

柳葉形鉄鏃 (第243図4) が床面直上から出土している。基部を欠損しており、残存長で6.9

cmを測る。莖部へ向けての幅の狭まり方が緩やかで、やや大型であることから、関部をもつ可能性もある。錆び膨れが激しく、図の厚みは復元である。輝緑凝灰岩製石庖丁片（第230図9）と頁岩製砥石（第236図25・26）が埋土中から出土している。第236図25の砥石は、小型の手持ち砥石で、半欠してから廃棄されている。4面使用しており、上端面は整形している。第230図9の石庖丁は表面が剥落しているため薄くなっており、また風化が激しい。東側支柱穴からは、輝緑凝灰岩製石庖丁片（第230図10）・頁岩製砥石（第236図27）・千枚岩系石材の石庖丁未製品（第230図13）とガラス玉片（第247図217）が出土し、さらにベット状遺構の貼土内から磨石片（第242図7）が出土している。（秦）

45号竪穴住居跡（図版42 第78図）

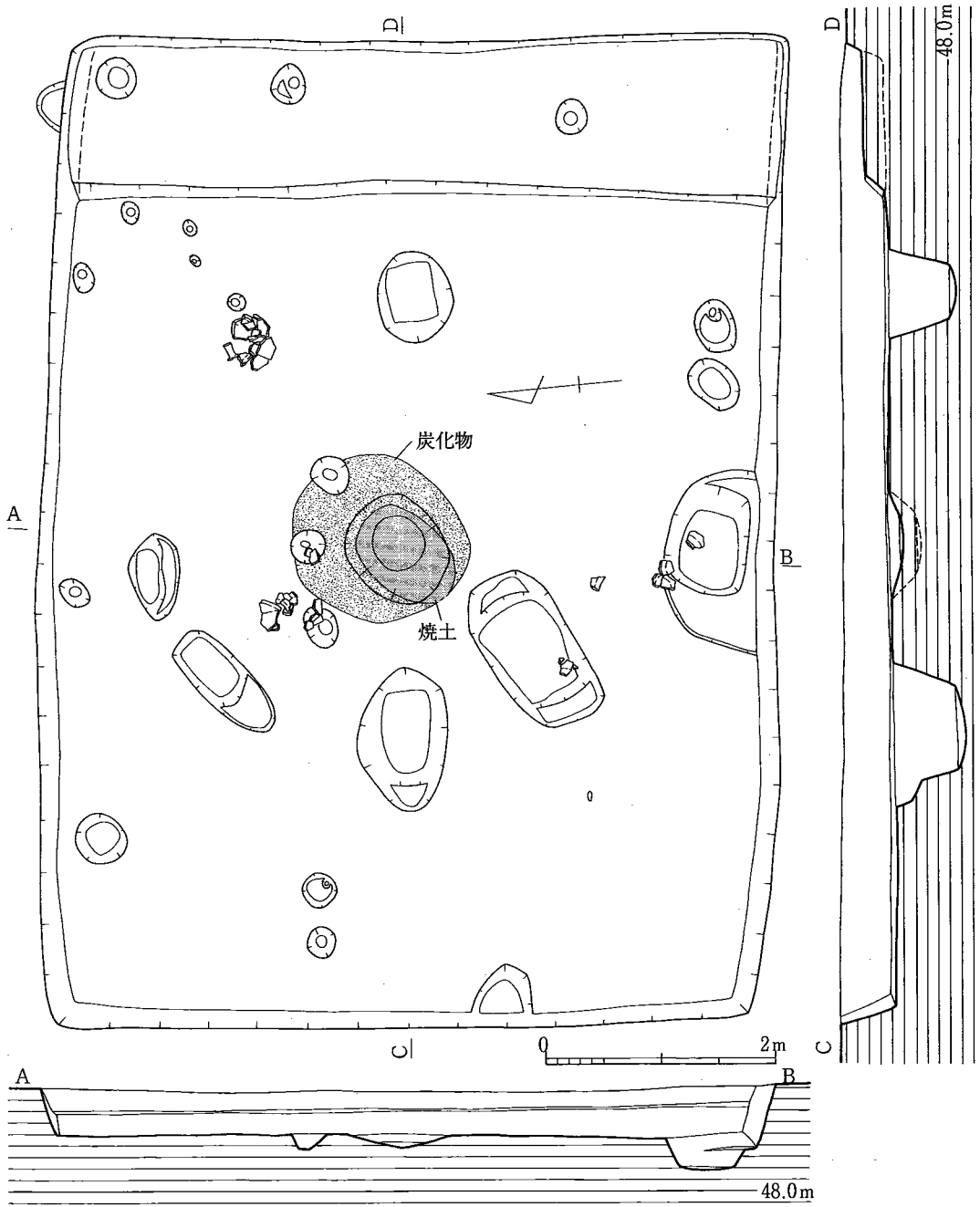
調査区北側中央に位置し、6・7号溝に中央部分を切られるため、ほとんど残っていない。北側支柱穴・炉・屋内土坑は溝に切られており、ベット状遺構も確認されなかった。長辺6.5m、短辺5.25mの長方形2本柱竪穴住居跡である。南側支柱穴は平面プランが北側に広がる楕円形であり、北壁が傾斜をもって立ち上がることから、柱は抜き取られたの可能性がある。貼床を剥がすと、46号竪穴住居跡の炉や、47号竪穴住居跡のプランが確認されたので切り合いは確実である。

遺物（第82図 第236図28）31は複合口縁壺の口縁部で、32・33は甕の口縁部。34・35は底部、36は高杯の脚部で内面には絞りが見られる。石斧が床面よりやや浮いて出土しており、形態から縄紋時代の遺物と考えられるので前述している。また、頁岩製砥石（第236図28）は東壁傍で床面直上から出土している。扁平な板状の手持ち砥石で4面使用されているが、側面には整形時の荒割りの痕跡が残る。（秦）

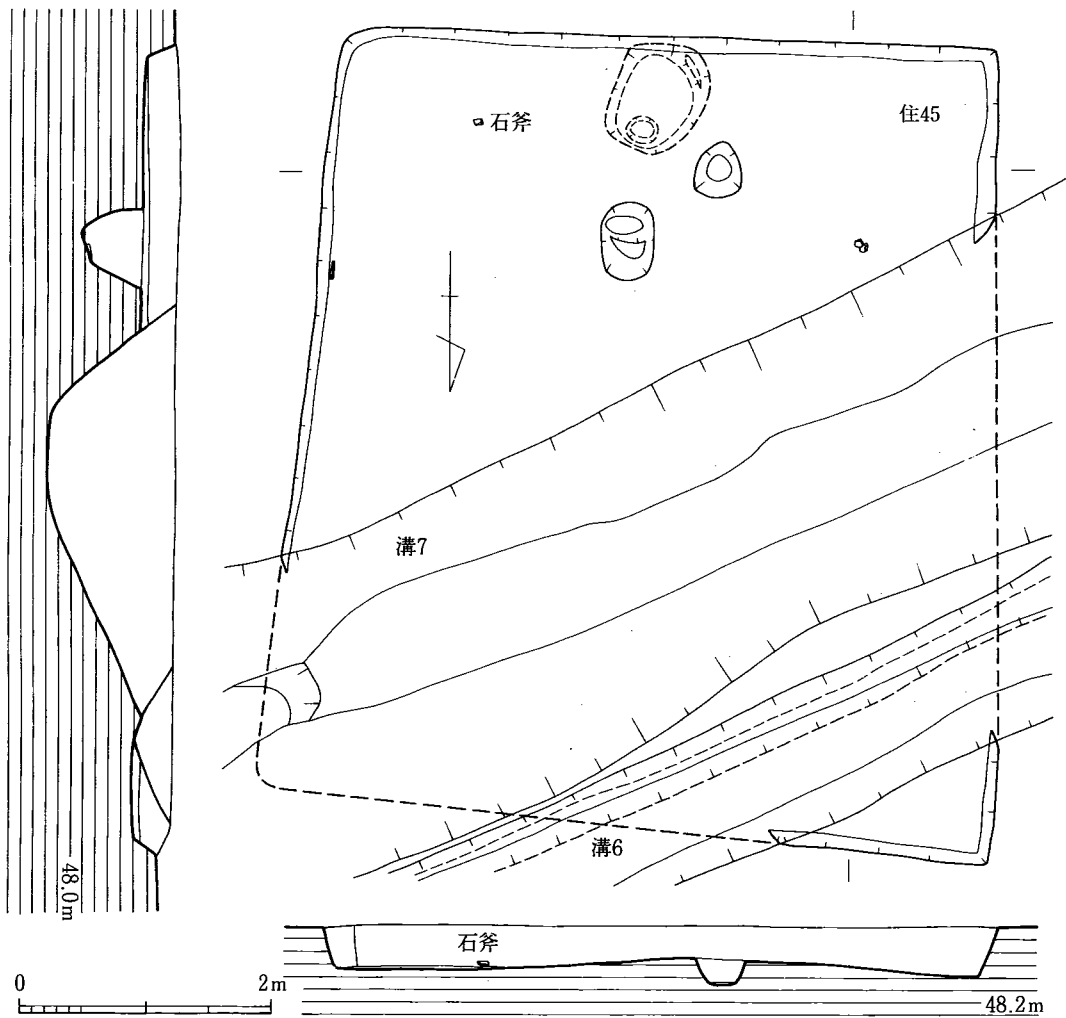
46号竪穴住居跡（図版42 第79図）

調査区北側中央に位置し、53号竪穴住居跡・6・7号溝に北半分を切られ、東部を44・45号竪穴住居跡に切られるが、深いため残りはよい。長辺は、炉を中点とした場合、北壁にベット状遺構がつけば9.0m、つかなければ7.7mを測る。短辺は6.7mなので、大型の方形2本柱床面は硬化した貼床であった。

遺物（第83図 第245図3 第247図200）1は甕の口縁部で、2は甕の底部で2次焼成を受けて赤変している。3は高杯の口縁部で、胎土は精良である。4は高杯の杯部と思われ、つくりは丁寧、胎土はあまり精良でない。埋土中から鉄斧（第245図3）、ガラス玉（第247図200）が出土している。鉄斧は、刃部欠損で基部も失われている。（秦）



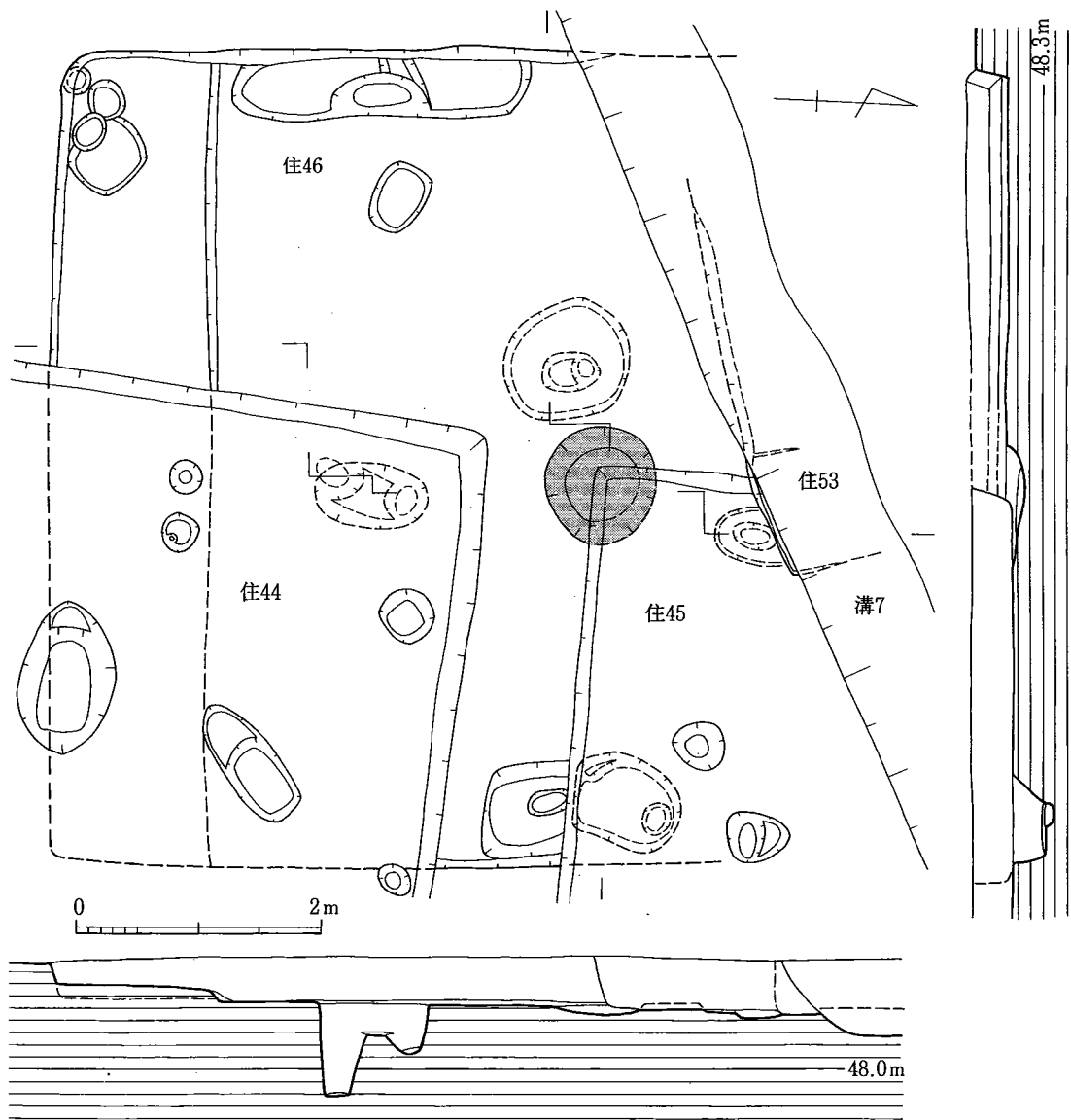
第77图 44号竖穴住居跡实测图 (1/60)



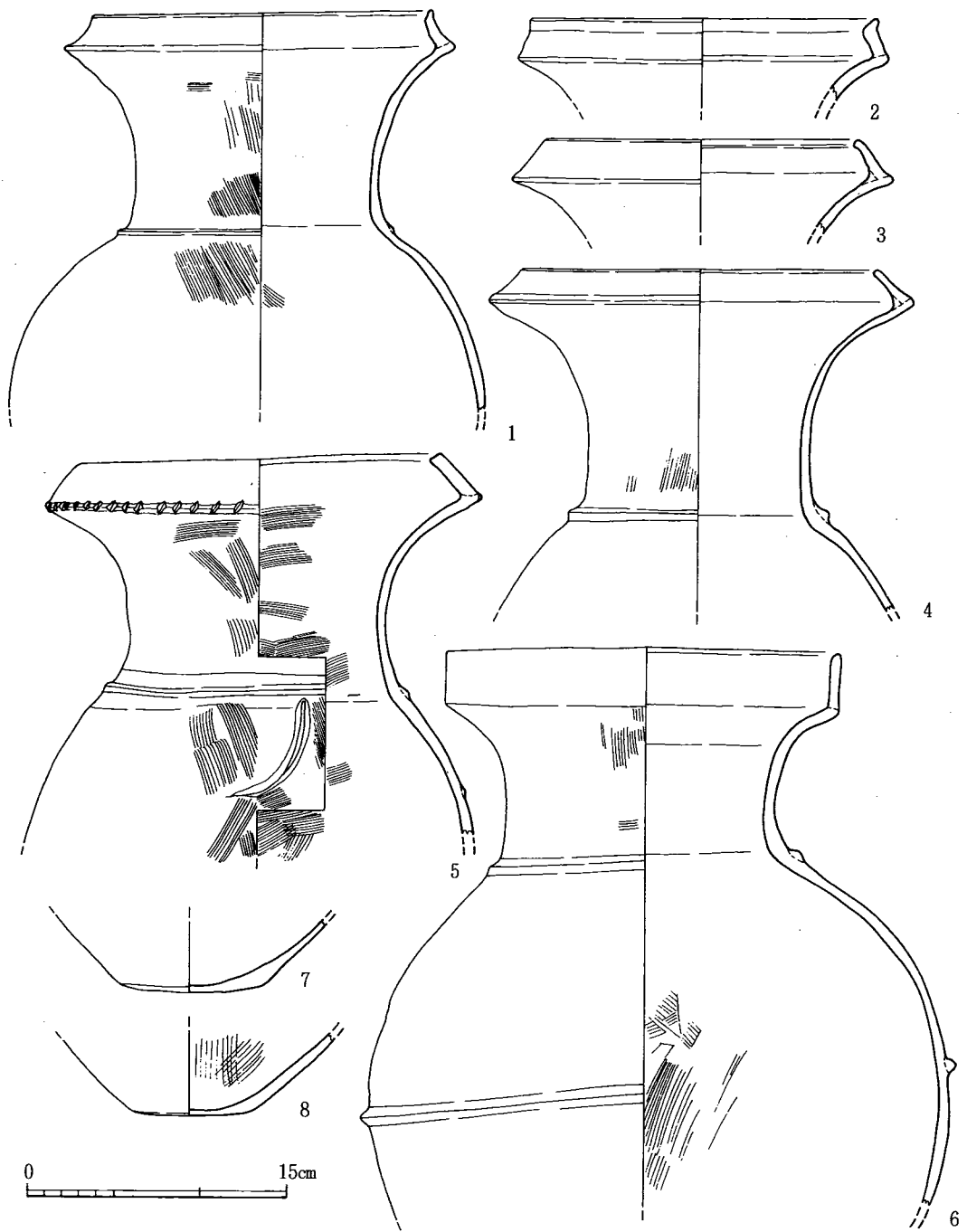
第78図 45号竖穴住居跡実測図 (1/60)

47号竖穴住居跡 (図版42 第84図)

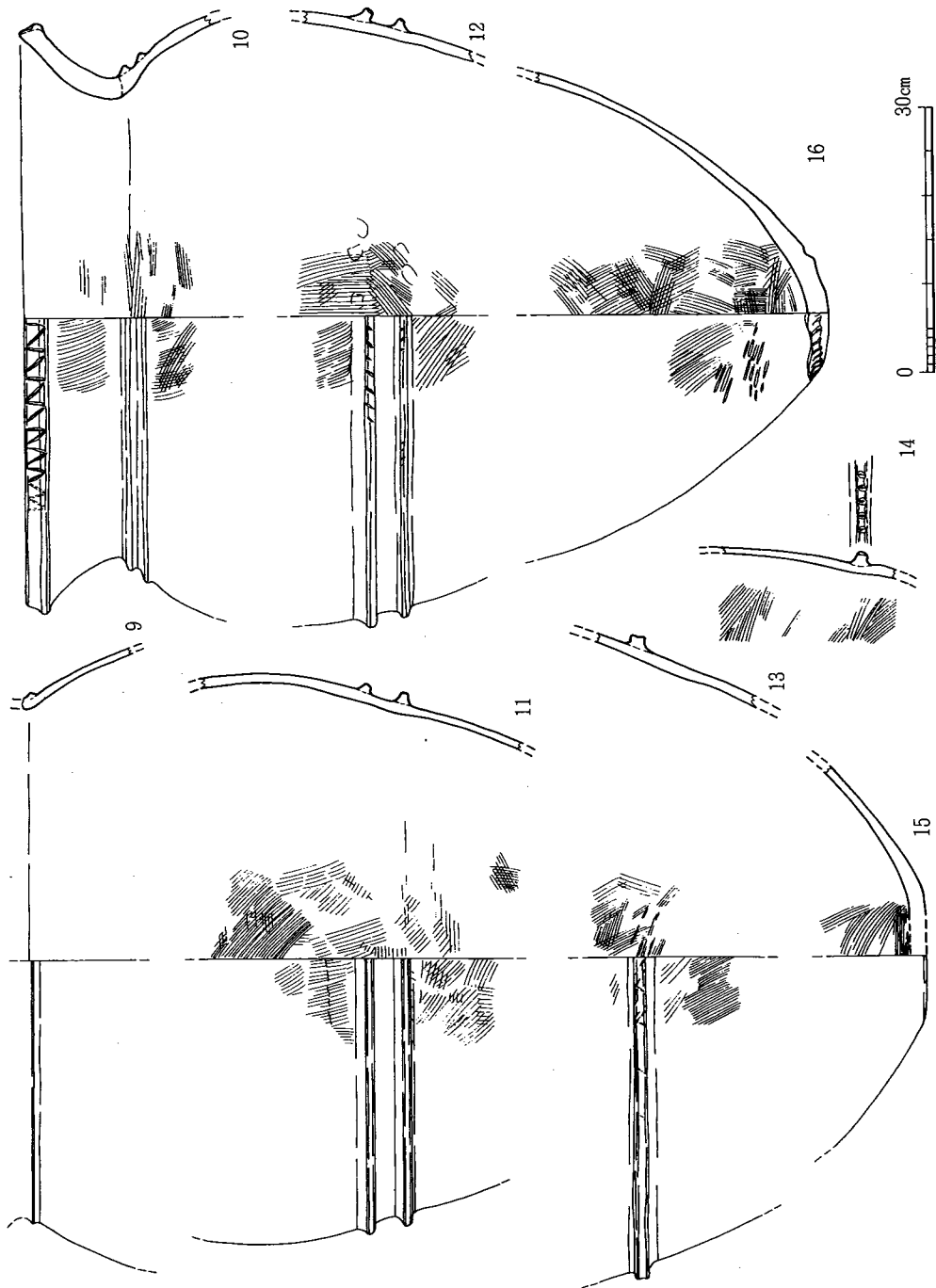
調査区北側中央に位置し、7号溝に北端を切られ、西端を45号竖穴住居跡に切られるが、深いため残りはよい。79号竖穴住居跡を切り、97号竖穴住居跡に切られる。長辺は6.2m、炉を中点とすると、短辺は6.1mを測るので、正方形2本柱竖穴住居跡を復元できる。東側主柱穴は上位が広がっており、柱痕が検出されていないので、柱は抜かれているであろう。屋内土坑は南壁中央に位置している。東壁につくベット状遺構は、99号竖穴住居跡と切り合う部分が作り付けで、南側につくものは地山削り出しである。床面は硬化した貼床であった。99号竖穴住居跡は、本竖穴住居跡の炉の下から検出されているので、前後関係は確実である。79・97号竖穴住



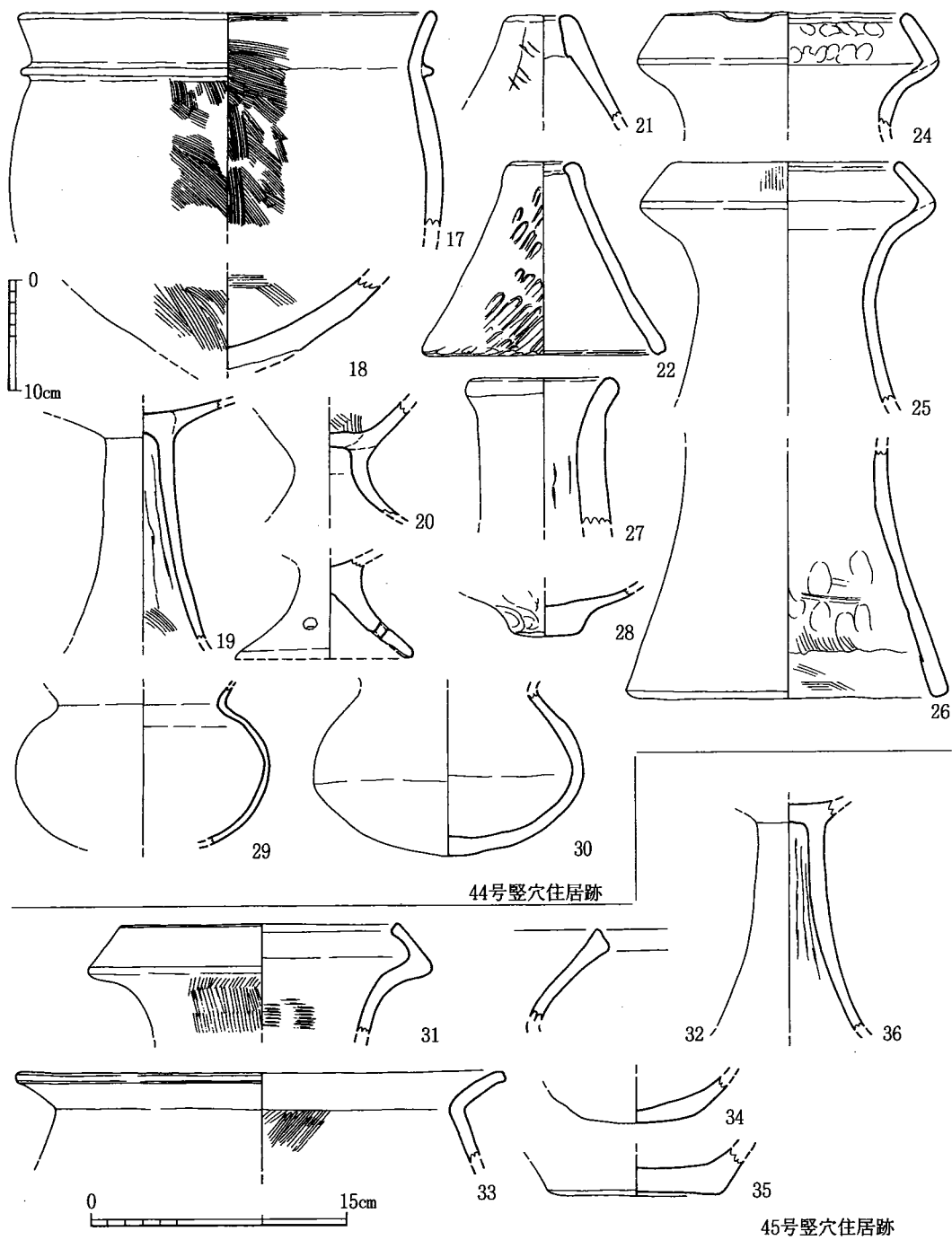
第79图 46号竖穴住居跡实测图 (1/60)



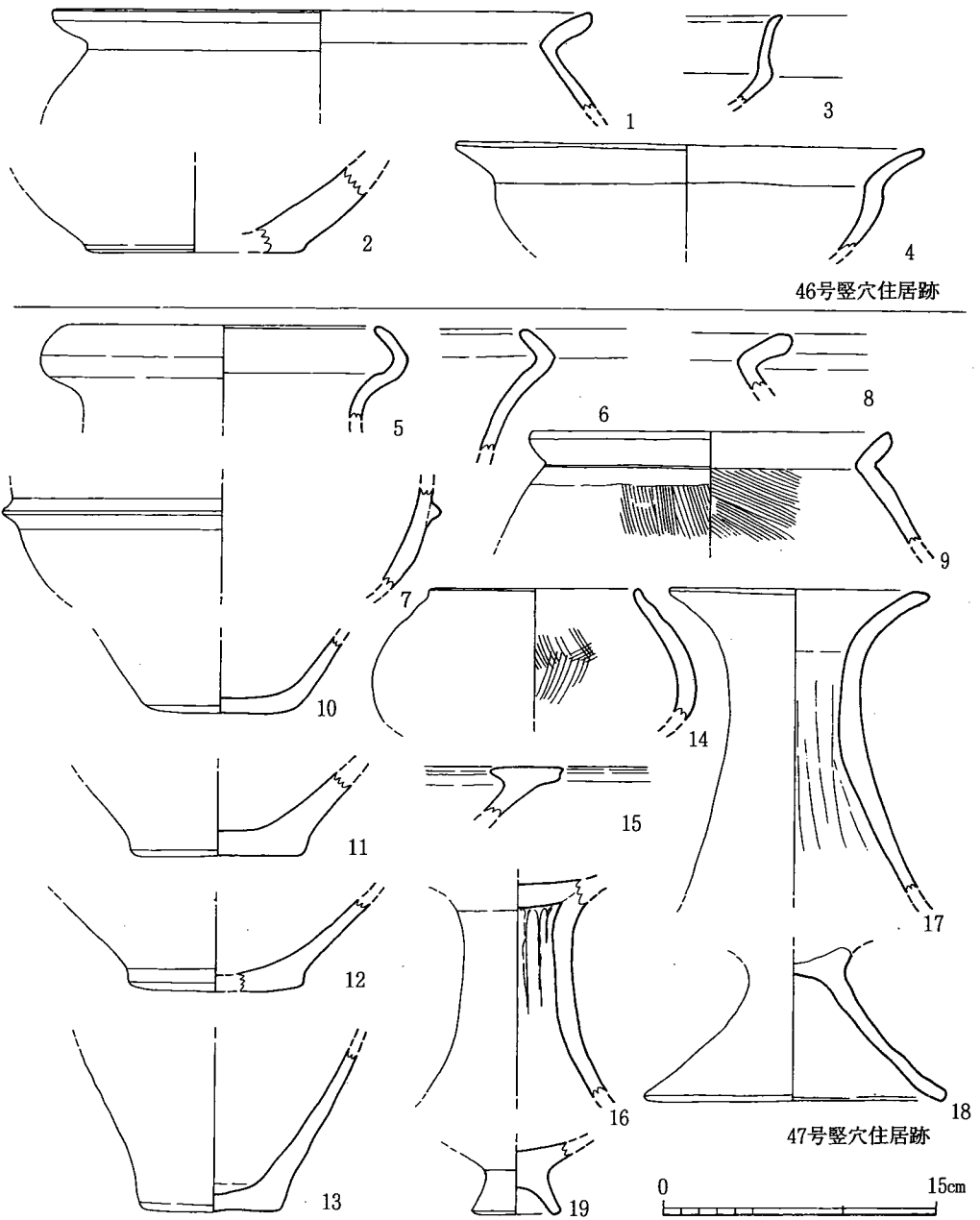
第80图 44号竖穴住居跡出土土器实测图. 1 (1/4)



第81图 44号竖穴居跡出土土器测图. 2 (1/8)



第82图 44·45号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4 17·18は1/6)



第83图 46·47号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)

居跡を切る。

遺物 (第83図 第243図3・16 第230図11 第241図4) 5・6は袋状口縁壺の口縁部、7は壺の胴部、8・9は甕の口縁部で、後者はハケが内外に丁寧に入っている。10・11・12は底部、13は甕の底部で、使用のため外底まで赤変している。14は口のすぼまり、最大径を胴部にもつタイプで朝鮮系無文土器と繋がる可能性のあるものである。15は鋤先口縁の高杯、16は高杯の脚部で、内外に2次焼成を受けた赤化が見られる。柱状部が太く短いことから、鋤先口縁の高杯と考えられる。17は鼓形器台で、裾部に使用による赤変が見られる。18は脚付鉢の脚部と思われる、橙褐色を呈する。19は小型の台付器種で、床面から出土している。床面直上から柳葉形鉄鏃(第243図3)と鑿状鉄器(第243図16)が出土している。前者は茎部を欠損しており、残存長で6.7cmを測る。錆び膨れが激しく、図の厚みは復元である。後者は完形品と思われる。長さ14.6cmの方柱状で、断面は整った方形を呈す。刃部は両刃と思われる、基部に平坦面を持つので、あるいは鑿かもしれない。また、埋土中からは輝緑凝灰岩製石庖丁片(第230図11)・完形のサヌカイト製打製石鏃(第241図4)が出土している。(秦)

48号竪穴住居跡 (図版43 第109図)

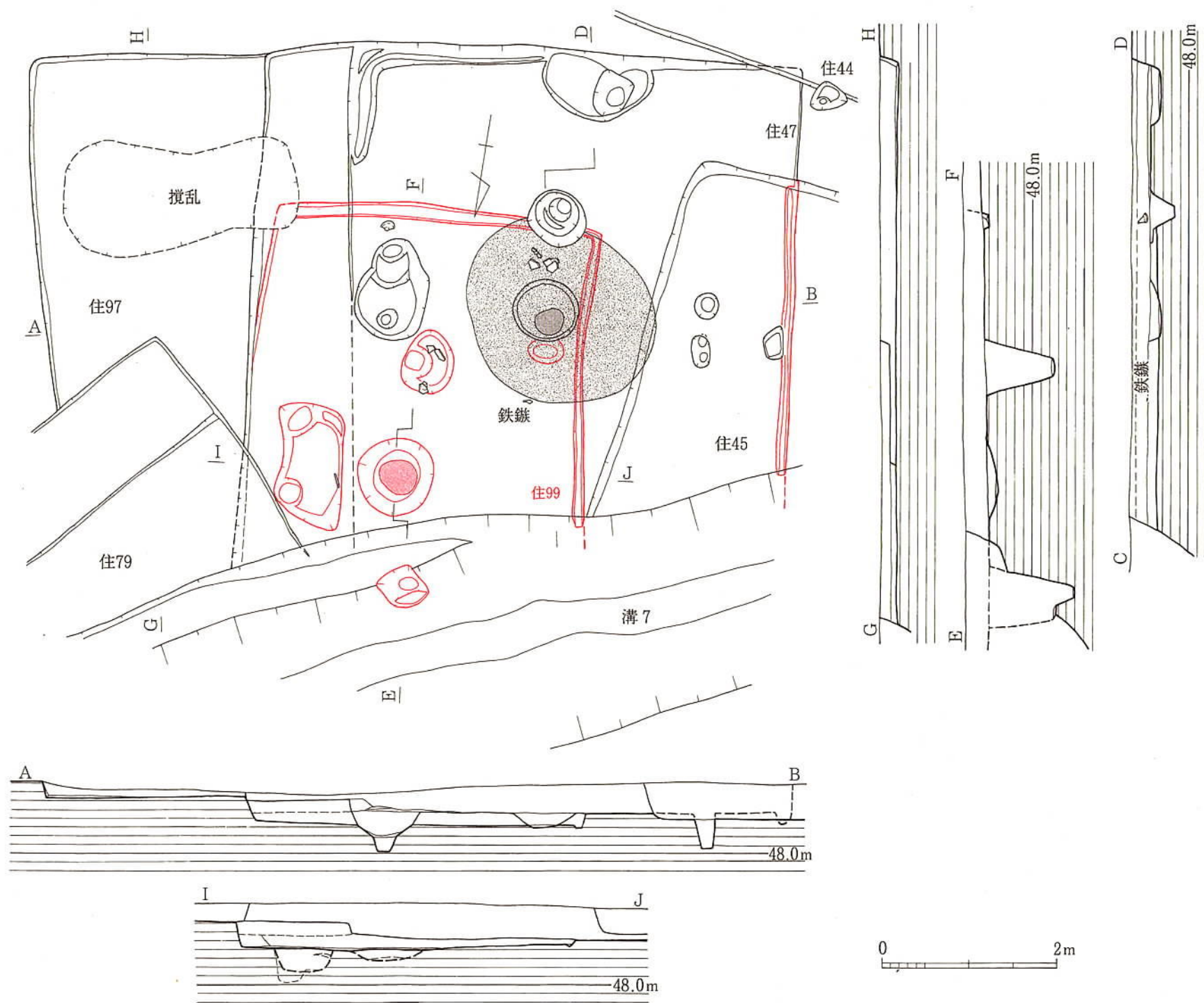
調査区北西側に位置し、50号竪穴住居跡と6・7・11号溝に切られて、ほとんど残っていない。本竪穴住居跡の規模は、6号溝の斜面から検出された主柱穴や屋内土坑と思われるものの配置から、長辺5m、短辺3mの小型の方形2本柱竪穴住居跡が想定される。ベットは確認できなかった。

遺物 (第86図 第236図29) 1は複合口縁壺の口縁部、2は鼓形器台の裾部である。頁岩製砥石(第236図29)が床面からやや浮いて出土している。ほぼ完形の形の整ったもので、断面はほぼ正方形である。4面使用で、研磨によって両端部は丸く整えている。(秦)

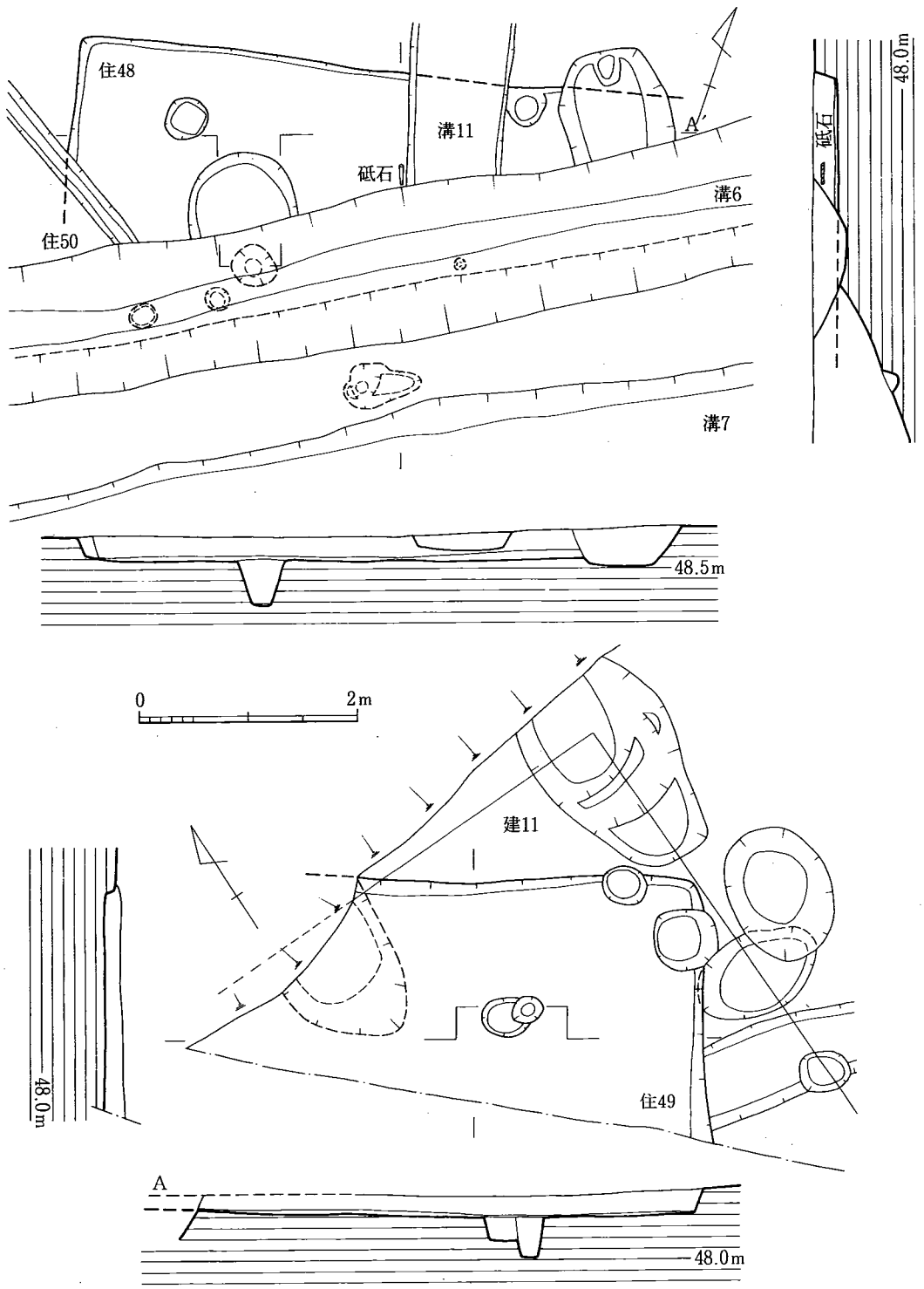
49号竪穴住居跡 (図版43 第85図)

調査区北西隅に位置し、7号掘立柱建物跡と14号溝を切る。北側斜面と調査区外にプランの大部分が入るため、南東隅が検出されたのみで規模は不明だが、主柱穴など屋内施設が検出されてないことから、比較的大型の竪穴住居跡と推定される。残りの悪さにもかかわらず、埋土から多くの遺物が出土したが、床面出土の遺物はなかった。

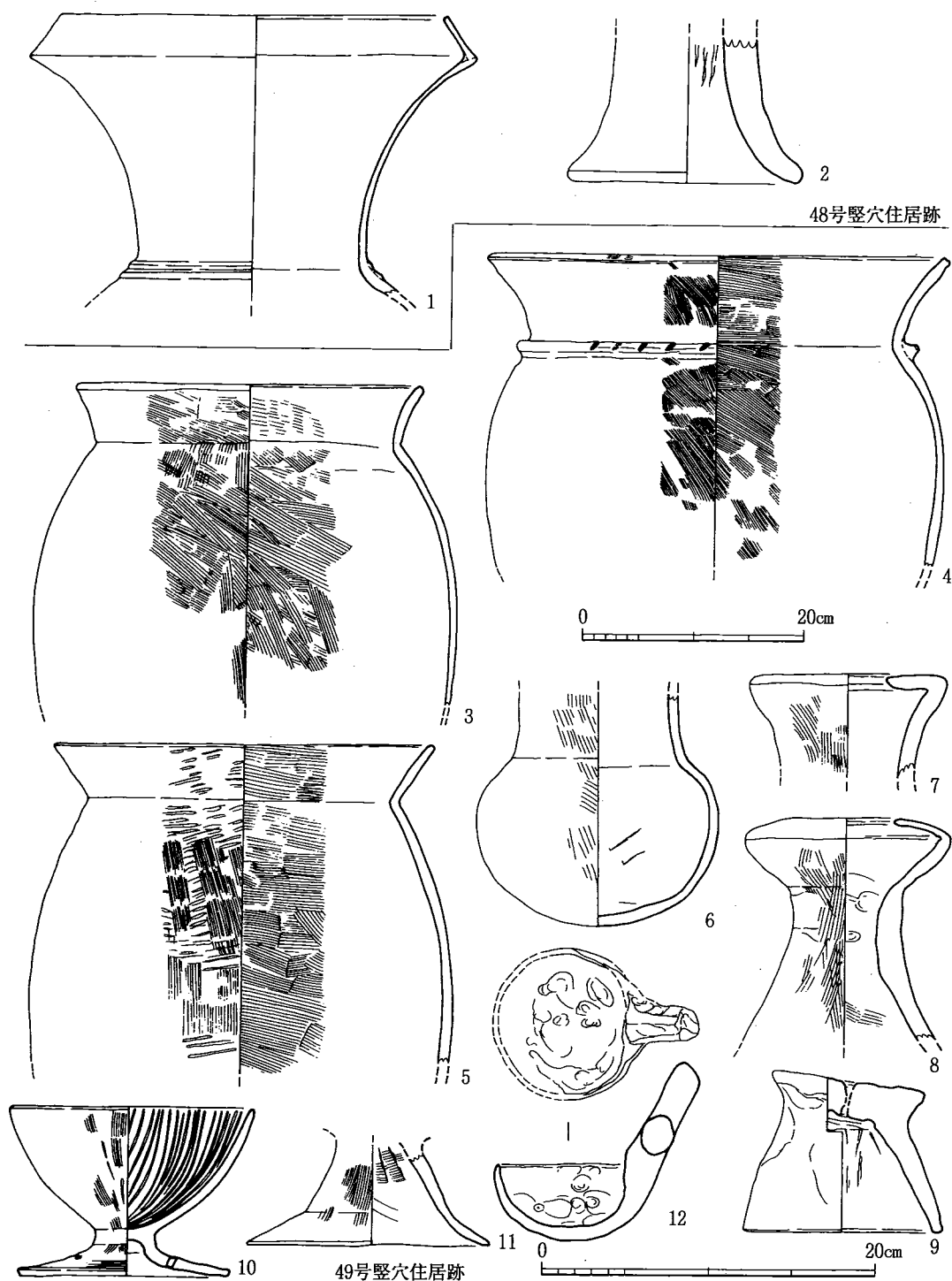
遺物 (第86図) 3・5は中型甕の口縁部で、つくりも調整も丁寧で、使用による煤が付着しており、6は直口壺と思われるが、つくりはあまり良くない。7・8は鼓形器台の口縁部で、上面の屈曲部が変色し、上端は2次焼成を受けて赤変している。9は杵形支脚で、突起の対面が赤変している。10は台付椀の完形品で、杯部内面には暗文が入る。つくりは丁寧で、胎土は精良。11は低脚高杯の脚部と思われる。12は柄杓形土製品である。(秦)



第84图 47・97・99号竖穴住居跡実測图 (1/60)



第85图 48·49号竖穴住居跡实测图 (1/60)

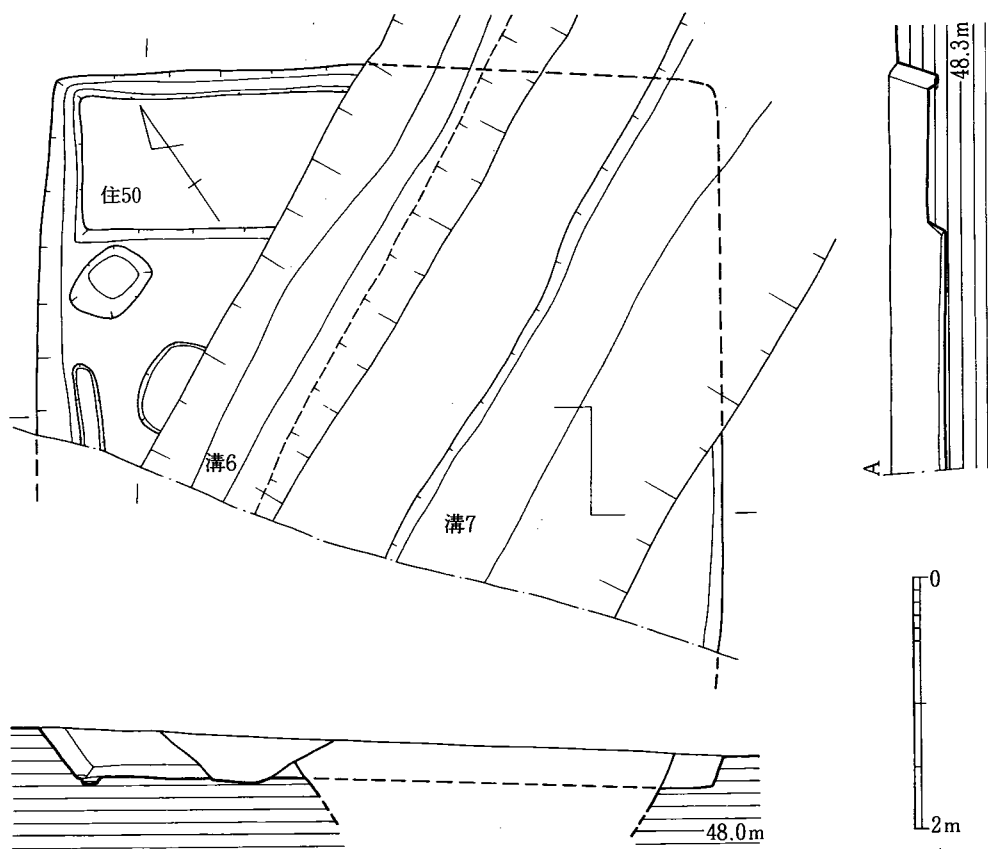


第86图 48・49号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4 4は1/6)

50号竖穴住居跡 (図版43 第87図)

調査区北西隅に位置し、大部分を6・7号溝に切られているため残りが悪い。溝の南側に南壁がわずかに残っており、これから短辺5.2mの長方形竖穴住居跡を推定できる。主柱穴・屋内土坑は切られているらしく検出されなかった。東壁に地山削り出しベットのつき、北壁沿いに周溝がみられる。33号竖穴住居跡を切る

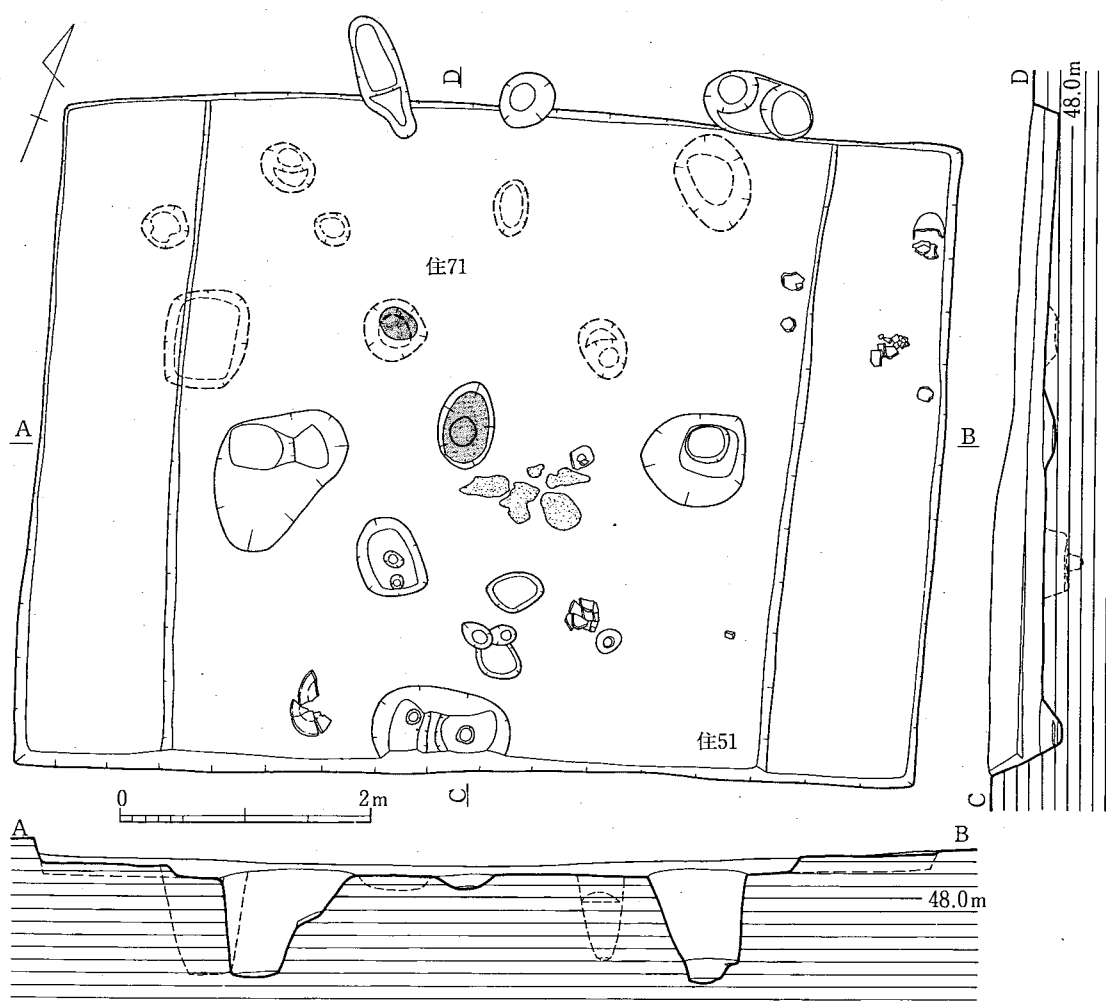
遺物 (第90図) 1・2は袋状口縁壺の口縁部で、3・5は中型甕の口縁部で内面に逆U字型の浮文が貼付けている。4は杯で、強く火を受けたためか赤褐色を呈する。このうち、1～3は流れ込みであろう。(秦)



第87図 50号竖穴住居跡実測図 (1/60)

51号竪穴住居跡 (図版44 第88図)

調査区中央北端に位置し、8号溝に中央部分を切られるが、深いため残りがよい。54・80号竪穴住居跡・9号掘立柱建物跡を切り、31・32号掘立柱建物跡に切られる。長辺7.2m、短辺5.3mの長方形2本柱竪穴住居跡である。主柱穴は南壁が緩やかに立ち上がり、西側主柱穴は東壁にテラスをもち、柱痕が検出されなかつたので、柱は抜き取られていると考えられる。図化していないが、西側主柱穴の南側に Aso-4 の大きなブロックがあったが、これは、17号竪穴住居跡



第88図 51・71号竪穴住居跡実測図 (1/60)

の例から、抜き取り時の排土と考えられる。作り付けベット状遺構が東西壁につき、ベット上やベット直下の床面直上で土器がまとまって出土している。屋内土坑は南壁中央に位置し、短辺側に小ピットがつく。炉のそばで炭化物の広がりが見られたが、これは部分的なもので、竪穴住居跡焼失時のものではないようだ。貼床下から71号竪穴住居跡の主柱穴と炉が検出され、竪穴住居跡の主軸がほぼ同で、71号竪穴住居跡のプランが51号竪穴住居跡の北西隅を共有していると思われることから、51号竪穴住居跡は71号竪穴住居跡の拡張であると考えられる。

遺物 (第90・91図 第242図2 第236図30・31) 6は肥前系の広口壺で、胎土が異質なので搬入品の可能性がある。東側ベット直上で完形で出土した。7は壺の底部で、東側ベット直上より出土した。8は小型の甕の口縁で、9は小型甕で、ハケは丁寧だが、底部は工具によるナデ。10は小型甕の底部で、煮沸のため胴下位が赤変する。12は高杯の杯部で、胎土は精良、13は脚付甕の脚部で裾部に煤が付着し、内面は黒くくすんでいる。床面に正置して出土した、14・15は杓形支脚で、全体がくすんでいる。16は無頸壺の底部と思われる。17は小型の甕の底部か、18は直口壺の肩部と思われ、胴中位で稜を持って屈曲する。胎土は精良である。19・20・22は杯、21は大型の杯あるいは小型の鉢で、床面に貼りついて出土した。12は高杯で、13・14は鼓形器台の口縁部で、使用による煤が付着する。6・7は東側のベット上、10はベット下の床面直上、11・12・13は床直出土である。床面直上からは蛤刃石斧の基部(第242図2)・頁岩製砥石(第236図31)が出土している。また、頁岩製砥石(第236図30)は埋土からも出土している。

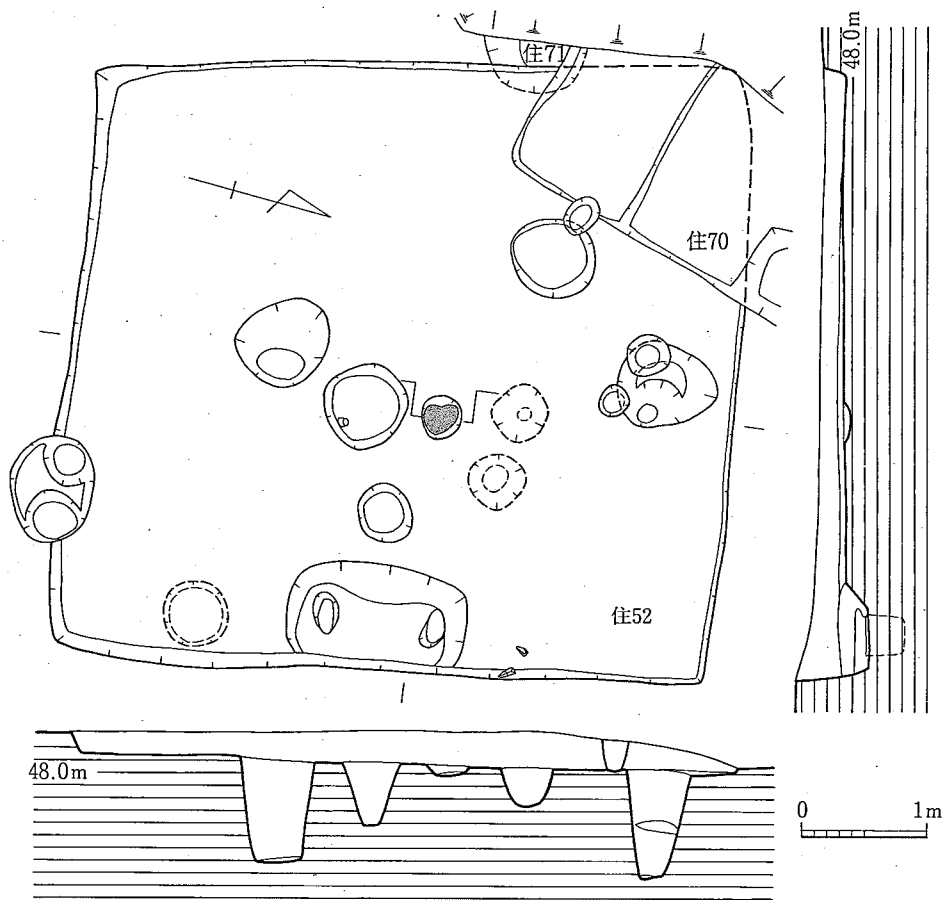
(秦)

52号竪穴住居跡 (図版44 第89図)

調査区中央北端に位置する。70号竪穴住居跡に切られるため遺構の西北隅が失われている。長辺5.3m、短辺4.85mの方形竪穴住居跡である。主柱穴は西側に延びる楕円形で、同方向にテラスがつき、柱痕も検出されなかったため、柱は抜きとられたと考えられる。ベット状遺構は検出されなかったが、貼床はあまり明確でなく、炉も小さく浅かった。東壁に屋内土坑が検出され、短辺の底面に20cm程の深さの略方形のピットが検出された。切り合いは明確でないが、30号掘立柱建物跡に切られていると思われる。

遺物 (第91図 第236図32・33) 23は複合口縁壺の口縁部で、24は甕棺の口縁、25は小型甕の口縁、26は壺の底部、27は脚付甕、28は高杯の杯部で、胎土は精良である。屈曲部まで残っておらず、流れ込みと思われる。29は高杯の脚部、30は鼓形器台の裾部で、床面出土である。31は杯でつくりがよい。頁岩製砥石(第236図32・33)が東壁沿いに床面からやや浮いて出土している。

(秦)

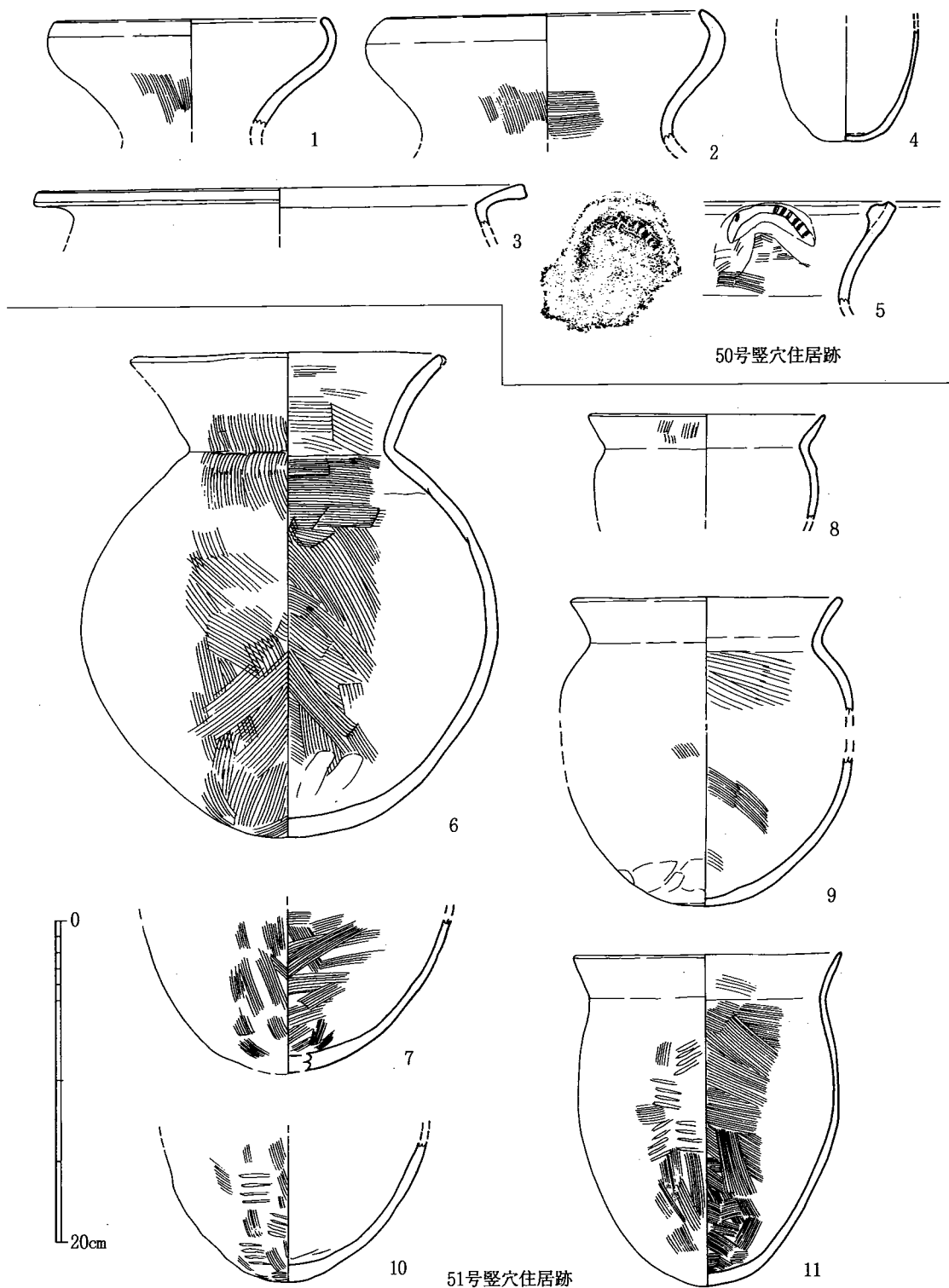


第89図 52号竪穴住居跡実測図 (1/60)

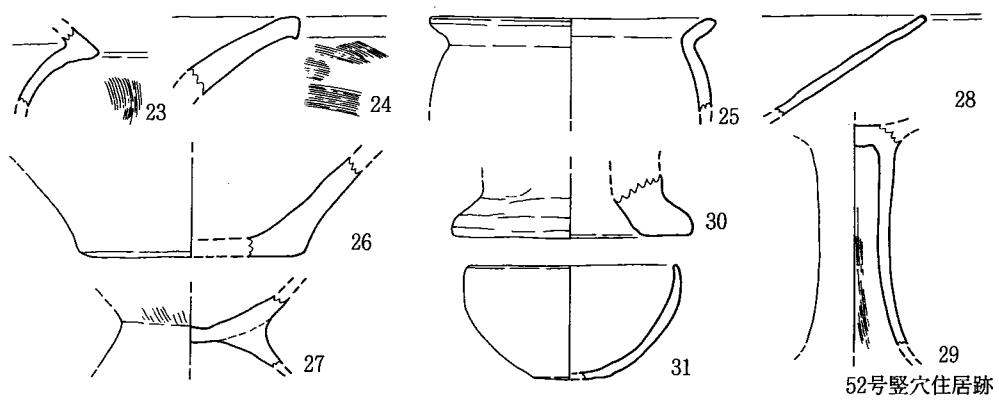
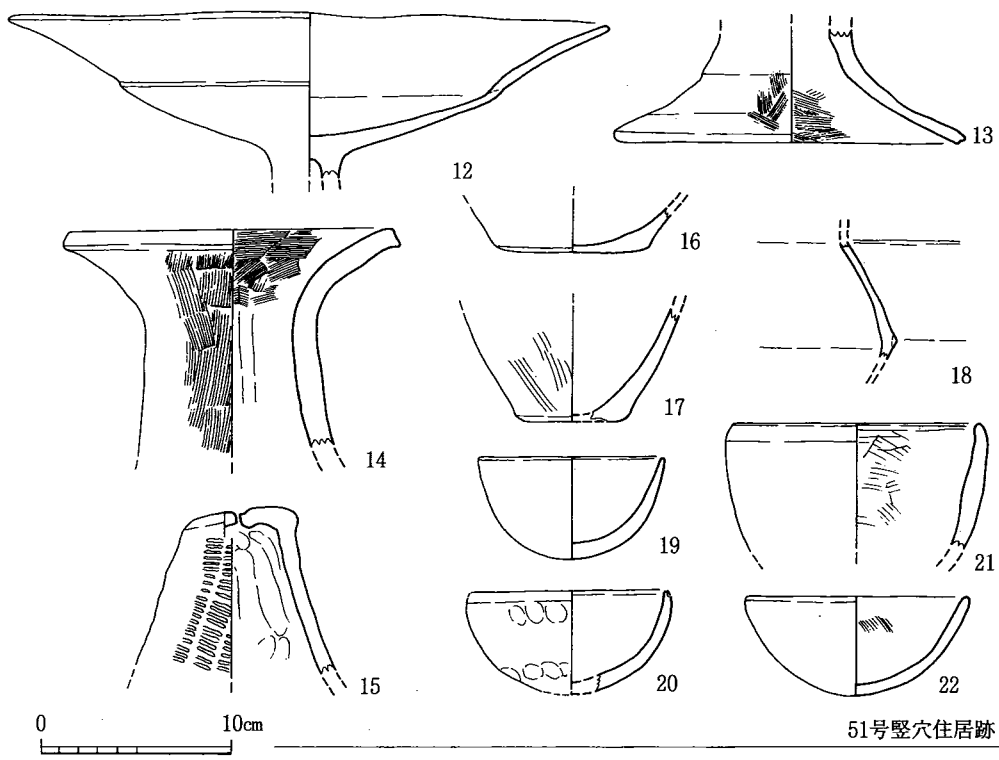
53号竪穴住居跡 (図版45 第93図)

調査区中央北部に位置する。南半分を6・7号溝に切られ、北西隅を8号溝に切られるため遺構の大半が失われているが、溝の壁に南東隅が検出された。長辺9.5m、短辺6.0mの長方形2本柱竪穴住居跡である。東側支柱穴は溝に切られ、西側支柱穴は確認されなかった。屋内土坑も南壁中央に位置していたらしく検出されなかった。ベット状遺構は東西ともに地山削り出しで、西側ベット上にもう一段小さな作り付けのテラスがついている。

遺物(第94図) 1は中型甕の口縁部で、2は完形の甕で床面に貼り付いて出土した。3は台状の小さな平底を呈するので外来系と考えられる。4・5・6は壺の底部であろう。7は鼓形器台で、2次焼成を受けている。8は短頸壺、9は杯か台付鉢の杯部で、胎土は精良である。10は杯、11は鉢、12はミニチュアの器台である。(秦)



第90图 50·51号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)



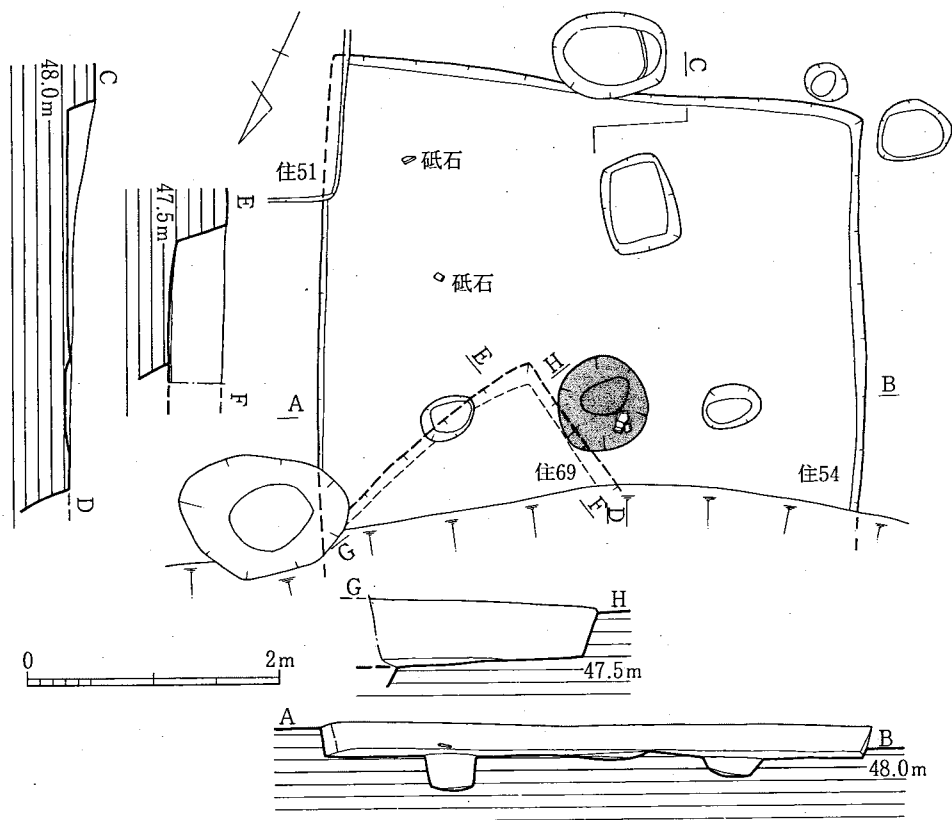
第91图 51·52号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)

54号竪穴住居跡 (図版45、第92図)

調査区中央北端に位置し、北側斜面のため北半分が失われている。壁もわずかしか残ってなく、検出時にすでに貼床の一部や炉が露出していた。プランは正方形に近いが、これは貼床の広がりから検出したものであり、東に削り出しベットがつく可能性があったが、壁が残っていないので確認されなかった。支柱穴は浅いため不確実で、屋内土坑も検出されなかった。貼床は薄いが硬化しており、9号掘立柱建物跡の柱3や69号竪穴住居跡は、貼床下から検出されている。

遺物 (第94図 第236図34・35) 13は甕の口縁、14は短頸壺でミガキが入る。15は杯、16は柄杓の土製品で、13・14・16はの東側支柱穴から出土した。床面直上より砥石が出土している。頁岩製のもの (第236図34) と砂岩製のもの (第236図35) で、後者は半球状の凹みがある。

(秦)



第92図 54・69号竪穴住居跡実測図 (1/60)

55号竪穴住居跡（第93図）

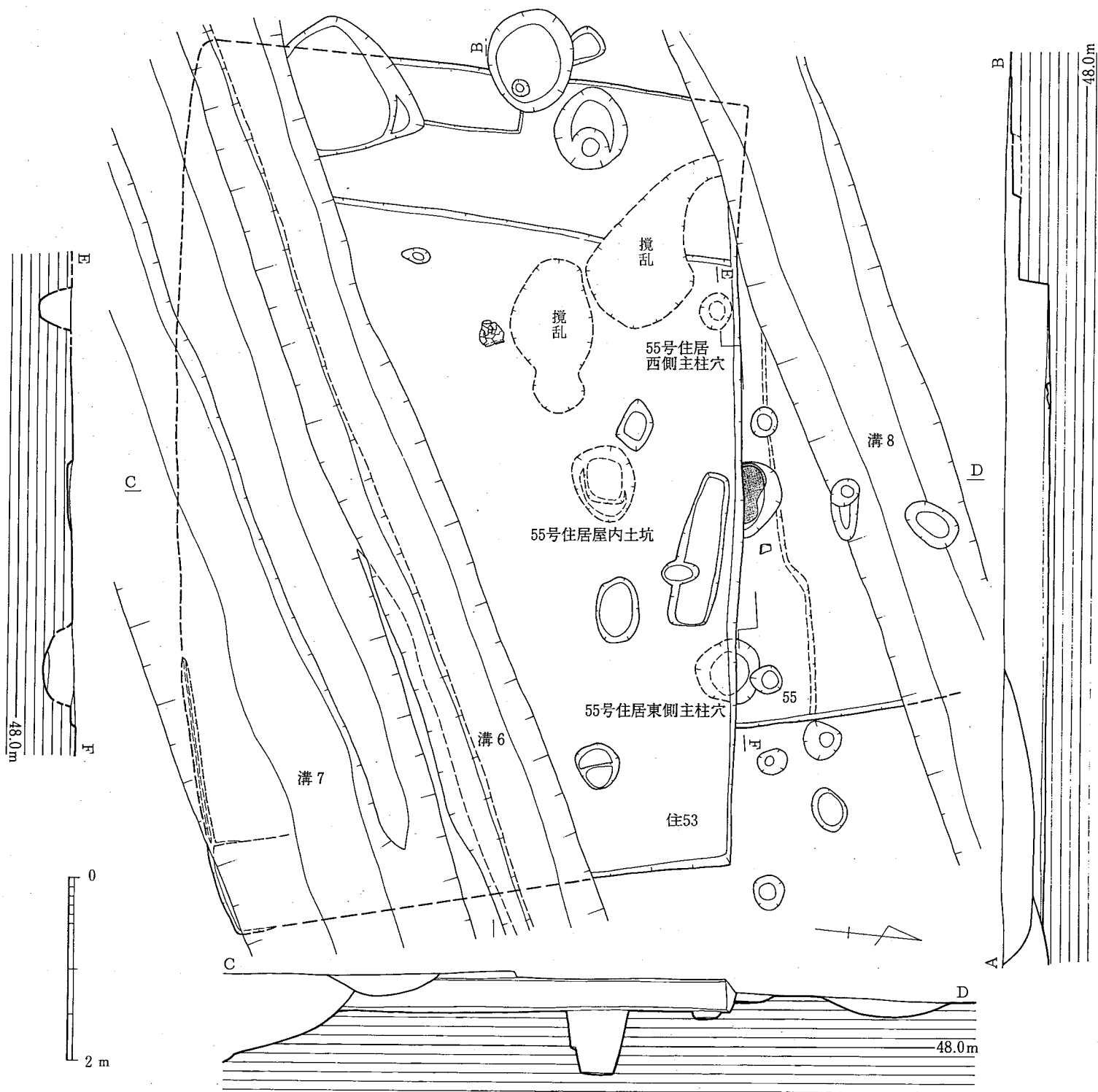
調査区中央北端に位置する。8号溝と53号竪穴住居跡に切られるため大部分が失われている。遺構の残りも悪く、検出段階ですでに炉が露出していた。炉を中点とすると長辺5.0mを測り、短辺は屋内土坑の位置から、4.0mの方形竪穴住居跡が復元できる。支柱穴・屋内土坑は53号竪穴住居跡の床下から検出されている。支柱穴は上位が広がっており、柱痕が検出されなかったことから、柱は抜かれたと考えられる。貼床はあまり明確でない。

遺物（第236図36・37）竪穴住居跡の残りが悪いため、土器は実測できるものがなかった。床面からやや浮いて頁岩製砥石（第236図36・37）が出土している。（秦）

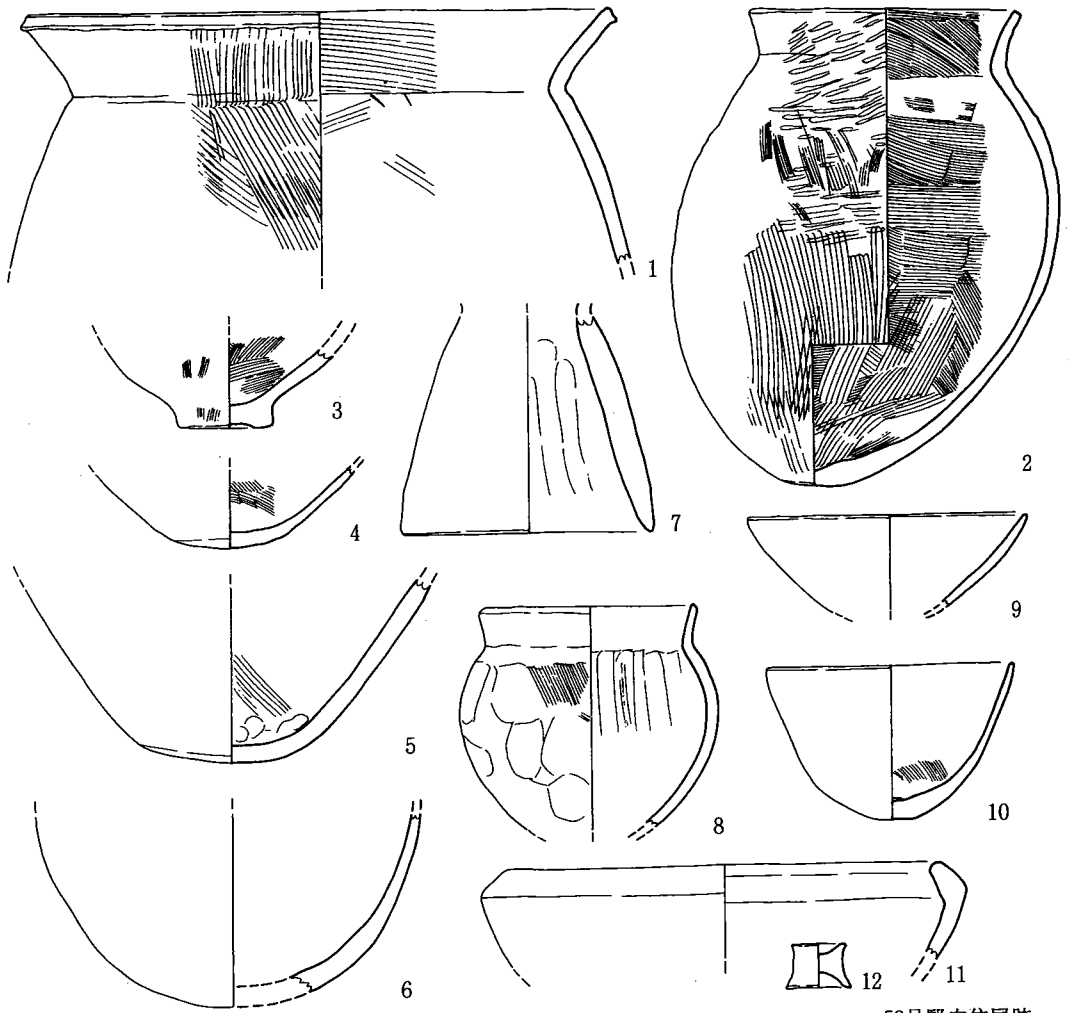
56号竪穴住居跡（図版46 第22図）

56号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央西端に位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。10号溝・2号住居跡には切られるが、4・57・58号住居跡は切る。5.7×4.3mの長方形プランで、東壁には幅約100～120cmの細長い台形に、西壁には幅約90cmの長方形の地山削りだしによるベッドが作られる。北壁中央部では144×74×29cmの半円形の屋内土坑が作られ、そこからは完形の小壺と砥石が出土。炉跡は本住居跡の中央部で74×61×15cmのものが検出されたが、支柱穴についてはまったく検出できなかった。貼床の除去に際していくつかのピットは確認できたが、その深さや位置関係から支柱穴と認定できるものはなかった。遺物の出土は豊富であるが、床面から出土したものはほとんどなく、大部分は埋土からの出土である。

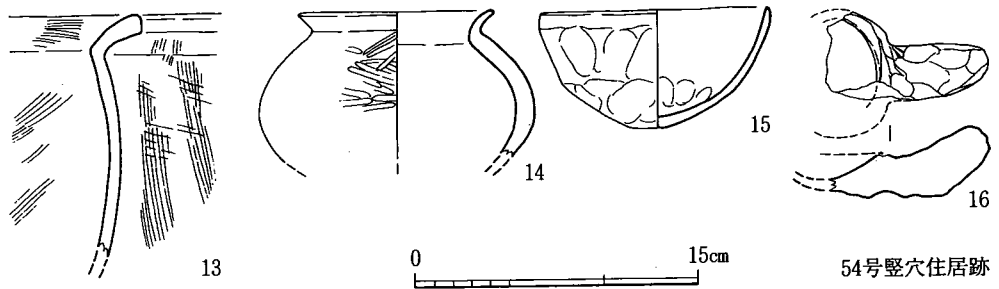
遺物（第95・96図1～22 第237図38）19は屋内土坑からの出土であるが、その他はいずれも埋土中に投棄されたものである。1～4はかなり特徴が似ているが4点とも別個体の土器で、口縁部の屈曲部と頸部の突帯文上を刻む。復元口径は22～24cmで、摩滅が著しく調整も判別しにくいのが主にハケ調整が窺える。5は復元口径14cm、器高23cmで、外面の摩滅は著しいが内面にはハケと指頭圧痕が残る。6の外面にはタタキが、内面にはハケが比較的明瞭に残る。9・10は同一個体で、復元口径は39cm。内外面ともに細かいハケが施されるが、外面についてはハケの下に部分的にタタキが窺え、頸部と胴下半部には突帯文が付く。底部は径8cmでレンズ状に厚くなる。12は甕の脚部、13・14は鉢の脚部になろうが、17は何の脚部になるのか不明。15は口径30.2cmの高坏で、脚部外面にはミガキが施される。おそらく坏部にもミガキが施されたと考えられるが、摩滅して詳細不明。16は高坏の脚部であるが、内外面とも細かいハケが施される。19は完形の小壺で、口径10.1cm、器高13.4cm、胴部最大径14.8cmを測る。内面の胴下半部には炭化物が付着し、外面にも口縁部と胴下半部には煤が薄く付着しており、煮炊きとして使用された痕跡が窺える。第237図38は屋内土坑から出土した砂岩製の砥石で、二次加熱を受けたようである。（水ノ江）



第93图 53·55号竖穴住居跡实测图 (1/60)

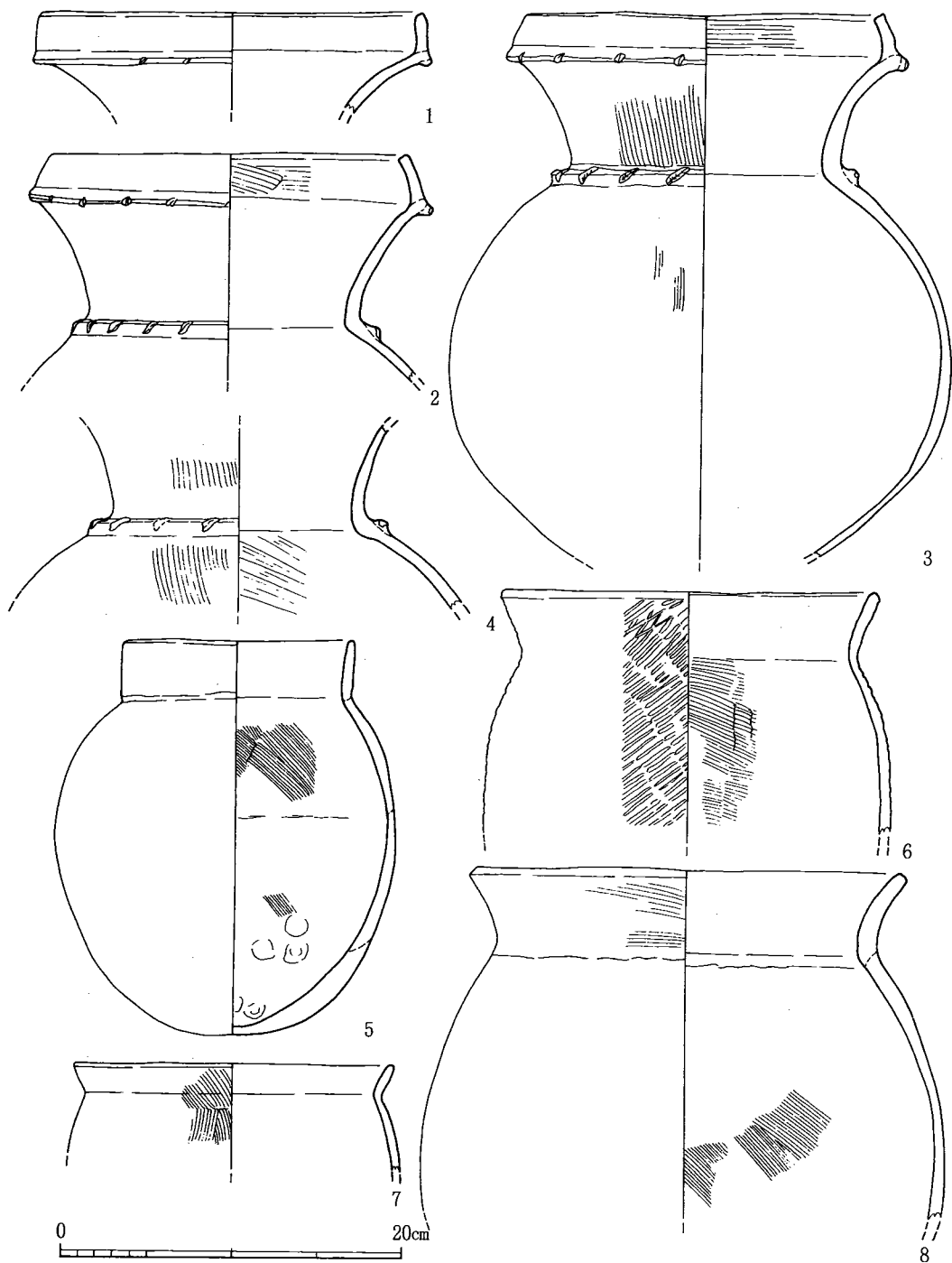


53号竖穴住居跡

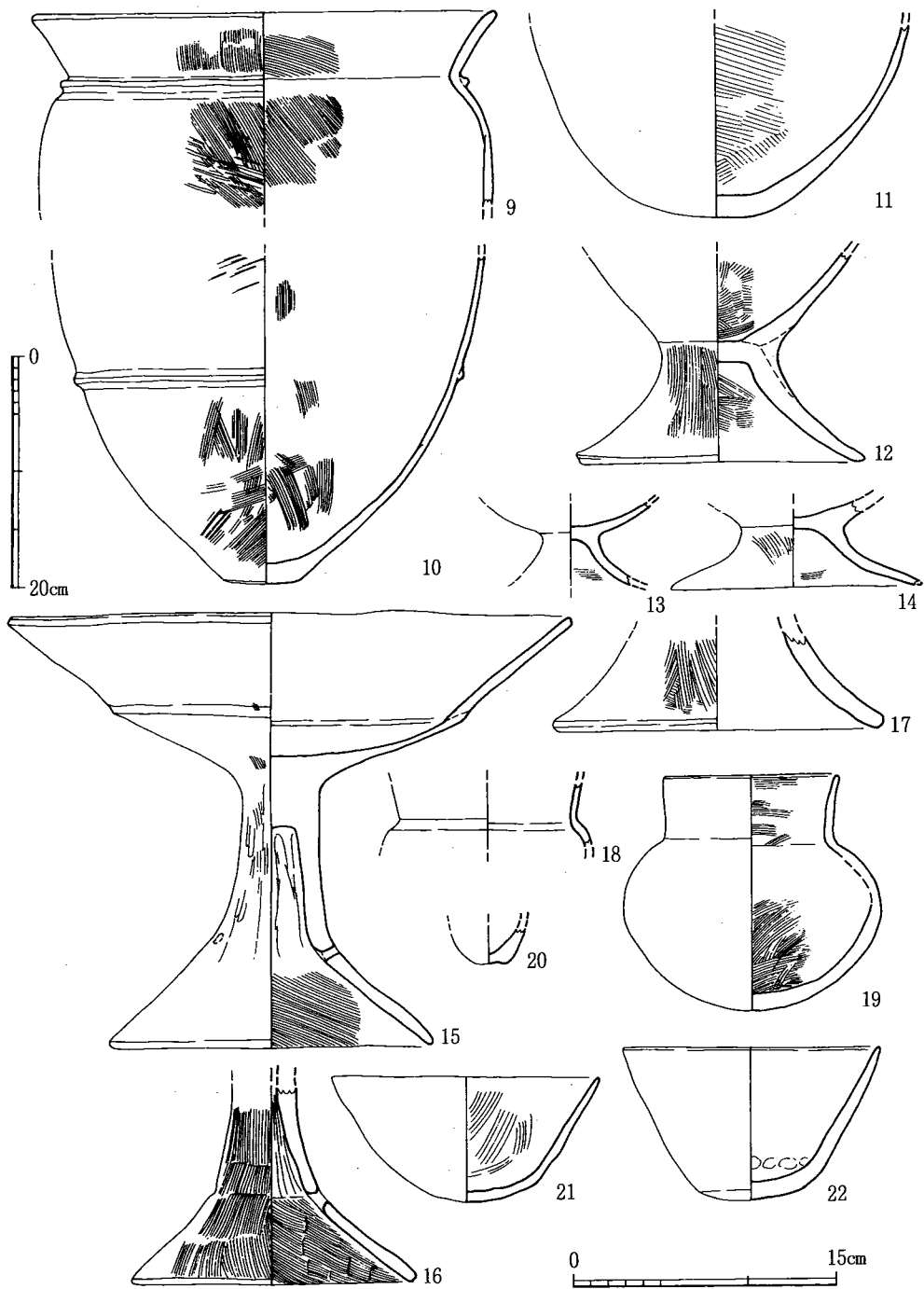


54号竖穴住居跡

第94图 53·54号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)



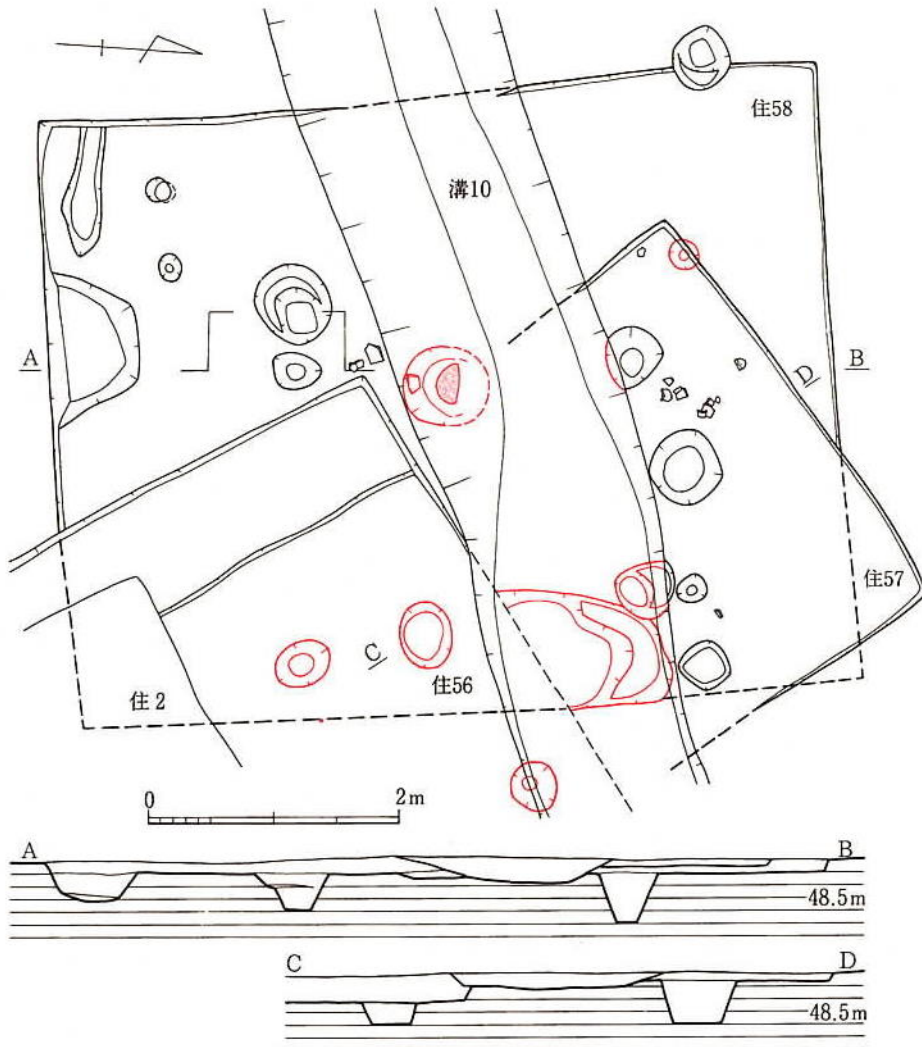
第95图 56号竖穴住居跡出土土器実測図。1 (1/4)



第96图 56号竖穴住居跡出土土器实测图。2 (1/4 9·10は1/6)

57号竪穴住居跡（図版46 第97図）

57号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央西端に位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。近世の10号溝や弥生時代の2・56号住居跡には切られるが、58号住居跡は切る。壁高は5cmと遺存状態は悪く、削平により東西方向については3.7mという数値が確認できるが、南北方向については1.7mまでしか測れない。いずれにせよ長方形プランであったことは間違いないが、ベッド・屋内土坑・炉跡については検出できていない。主柱穴については径55cm、深さ35cmのものが2本確認されたが、南側のものについては56号住居跡の床面を除去した時点で検出された。出土遺物は少ないが、砥石や鉄器も見られる。

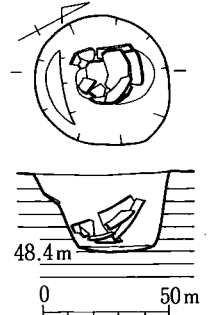


第97図 57・58号竪穴住居跡実測図 (1/60)

遺物 (第100図1・2 第237図39・40 第244図18) いずれも包含層からの出土で、1は外面にハケが施され、2は摩滅が著しいが内面にナデが窺える。第237図39は床面から出土した砂岩製の砥石で、二次加熱を受けており若干変色している。40は埋土から出土した片岩系統の砥石。第244図18は床面から出土した鉄器で、木質は残るが性格不明。(水ノ江)

58号竪穴住居跡 (第97図)

58号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央西端に位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分の北側で検出された。近世の10号溝をはじめ、2・56・57号住居跡にも大きく削平されるが、屋内土坑等の位置関係から6.2×4.8mの長方形プランであったと考えられる。炉跡は10号溝によって削平されるが、おそらくは径60cm程度になろう。2本の支柱穴は長軸線上から若干西側に寄るが、北側の支柱穴は径45cm、深さ45cmであるのに対し、南側は径65cm、深さ35cmとなりサイズや形態が異なる。この南側の支柱穴からは第98図のような状態で第100図3のように復元できる甕が出土したが、底面から浮いた状態で支柱穴全体に広がっていることから、この土器は柱を抜き取った後にこの場所に置かれたあるいは遺棄されたものと考えられる。屋内土坑は56・57号住居跡の切り合いの隙間にわずかに残り、削平されていない部分の床面からは約30cmほど掘り込まれたことになる。遺物は床面から量的には纏まって出土したが、いずれも小破片で摩滅も著しく、図示できるものは少なかった。

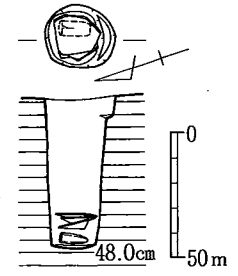


第98図 58号竪穴住居跡南側支柱穴実測図(1/30)

遺物 (第100図3・4) 3は復元口径26cmの甕で、外面には大きな黒斑とハケが明瞭に残るが、内面は摩滅により調整不明。(水ノ江)

59号竪穴住居跡 (図版47 第57図)

59号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央西端に位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分で検出された。60号住居跡には切られるが、23号住居跡は切る。調査区外に広がる部分もあるが、6.5×5.0mの長方形プランであることは確認できた。東壁側に開く幅105~110cmの「コ」字状ベッドが地山の削りだしによって作られる。炉跡と2本の支柱穴は長軸線上に並び、前者については88×78×12cmで焼土がよく残る。支柱穴はいずれも径30cm、深さ70cmを測り、南側の支柱穴からは第99図の状態第245図6の鉄斧が、第102図23の土器片で覆われるように底面から出土した。柱抜き取り後に置かれたものであろう。また、北側の支柱穴底面からも第102図25の壺胴部片が出土しており、これについてはあるいは礎板的な役割を果たしていたものであるかもしれない。本住



第99図 59号竪穴住居跡南側支柱穴実測図(1/30)

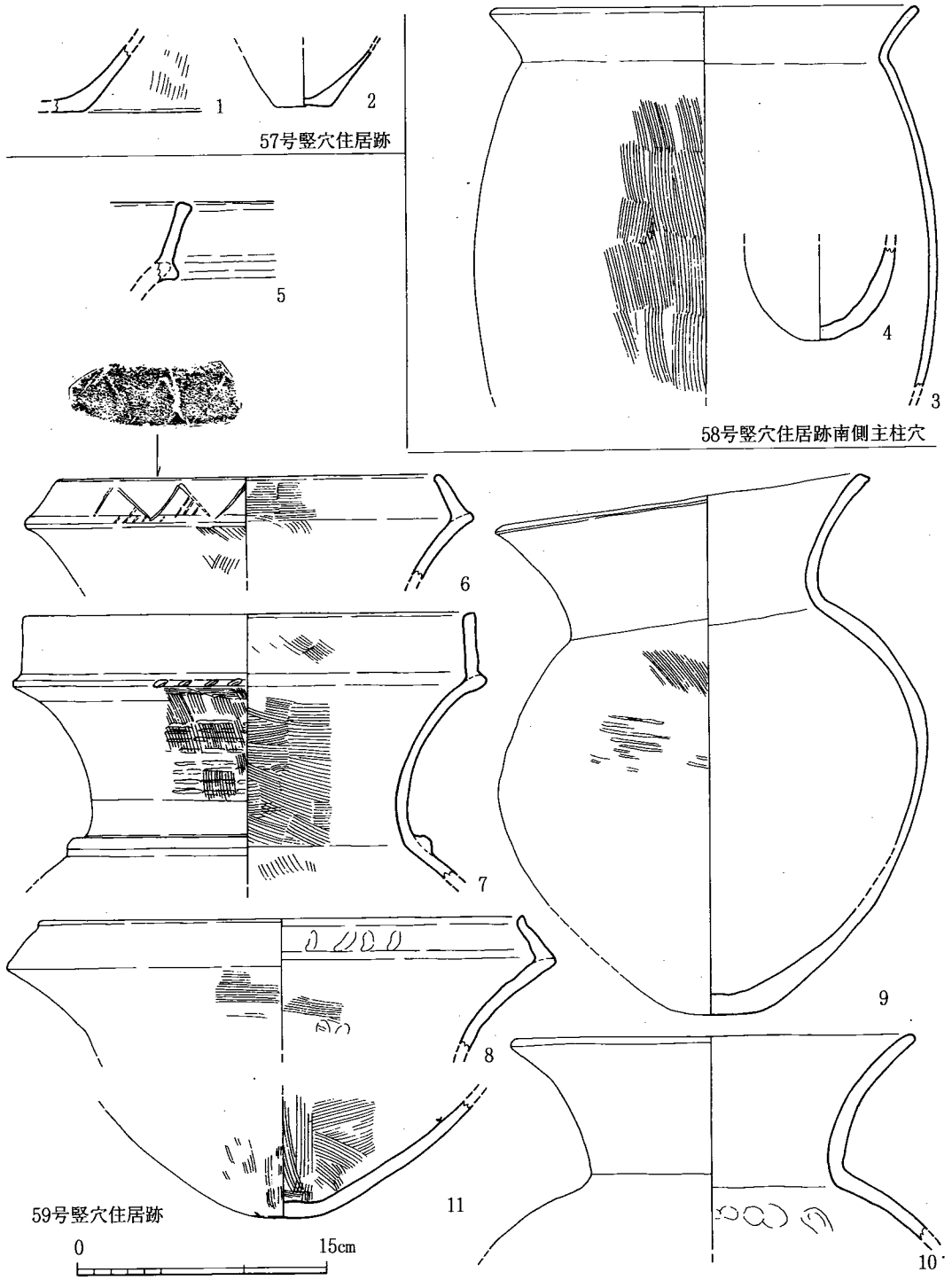
居跡の埋土中からは多量の土器が出土しており、埋没過程で遺棄されたものと考えられる。ただし、床面からも本住居跡に伴うと考えられる遺物が比較的纏まって出土している。ベッドのない東壁中央部には、145×73×23cmの屋内土坑が掘られる。

遺物（第100～102図5～41 第245図6 第244図9・17）比較的多くの土器を図示したが、このうち床面からの出土は6～11・13～16・19・20・22・24・28・29・32・34～37・40、北側の支柱穴からは25が、南側の支柱穴からは23がそれぞれ出土しており、その他は埋土中に含まれる。6は口縁部の外面に鋸歯文を線刻するもので珍しい。7の壺の口縁部の屈曲部は刻まれるが、頸部と胴部の境の突帯文は刻まれない。外面の器面調整はタタキ➡ハケである。9はほぼ完形近くまで復元できる広口壺で、口径22.4cm、器高31.8cm、胴部最大径26.1cmを測り、外面にはタタキ後に施したハケの痕跡が窺える。12～26までの甕の器面調整は大部分が内外面ともにハケであるが、16のようにタタキだけが施されるもの、26のようにタタキ後にハケが施されるもの、17・24のように底部に板ナデを施すもの等ヴァリエーションは多彩である。9・11・17～20・24～26の底部に見られるように、いずれも丸底化が進んでおり、レンズ状に厚く丸くなる。22～26はいずれも大型品で、例えば26の口径は33.6cm、器高42.7cm、胴部最大径36.2cmを測る。23・25・26の突帯文には刻み目が施されないが、22の突帯文は刻まれる。27の高坏脚部の透孔は3方向で、外面はハケ➡ナデの調整でミガキは見られない。28の底部にはタタキが施される。33～35は支脚で、加熱による変色が窺える。36は甑で、口径23.4cm、器高16.3cm。第245図6は南側の支柱穴の底面から出土した完形の袋状鉄斧。第244図9は床面から出土した鉄鎌で、17は南側支柱穴の中位より出土した性格不明の鉄器。18については鉄鎌の可能性もある。

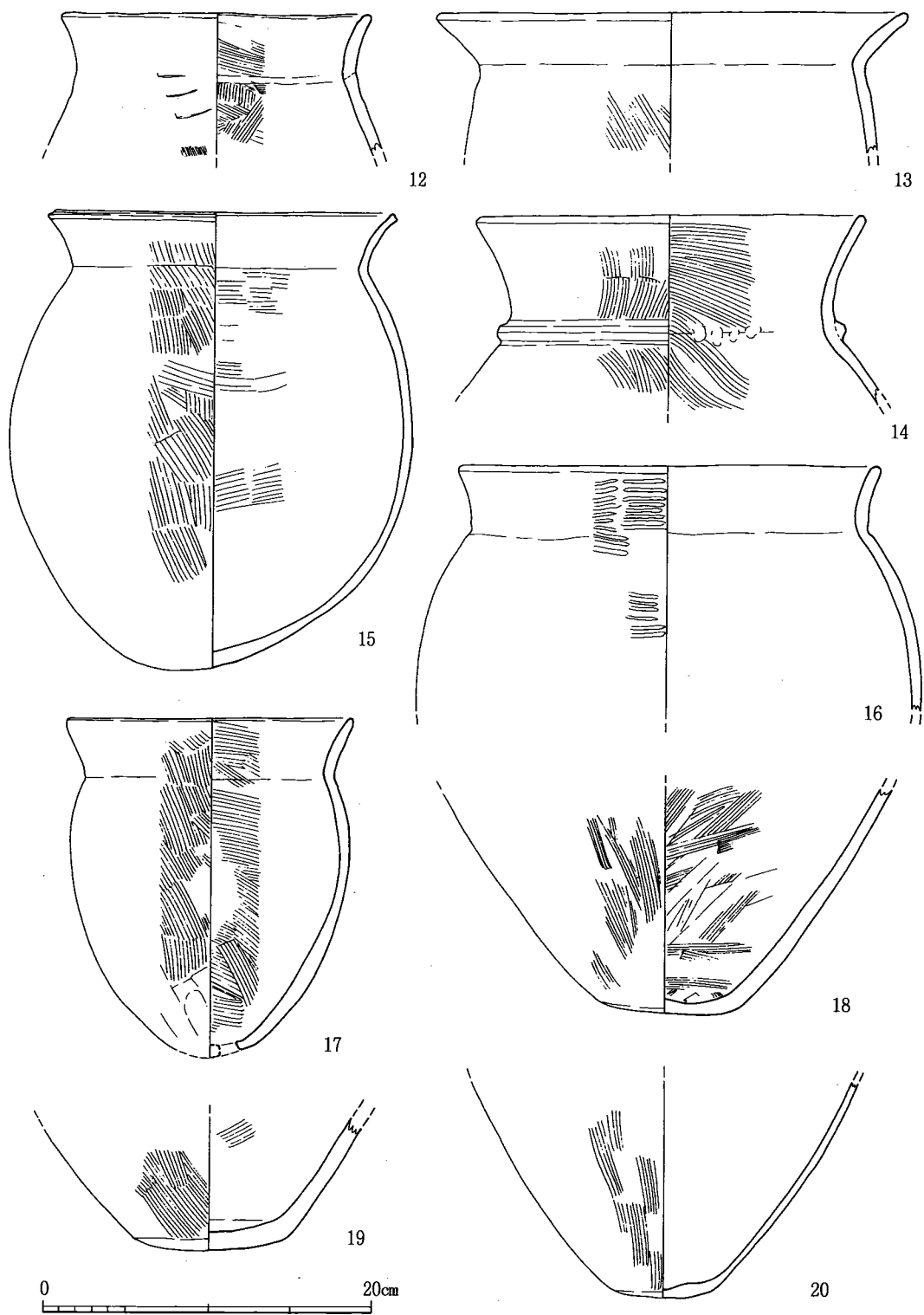
（水ノ江）

60号竪穴住居跡（図版48 第103図）

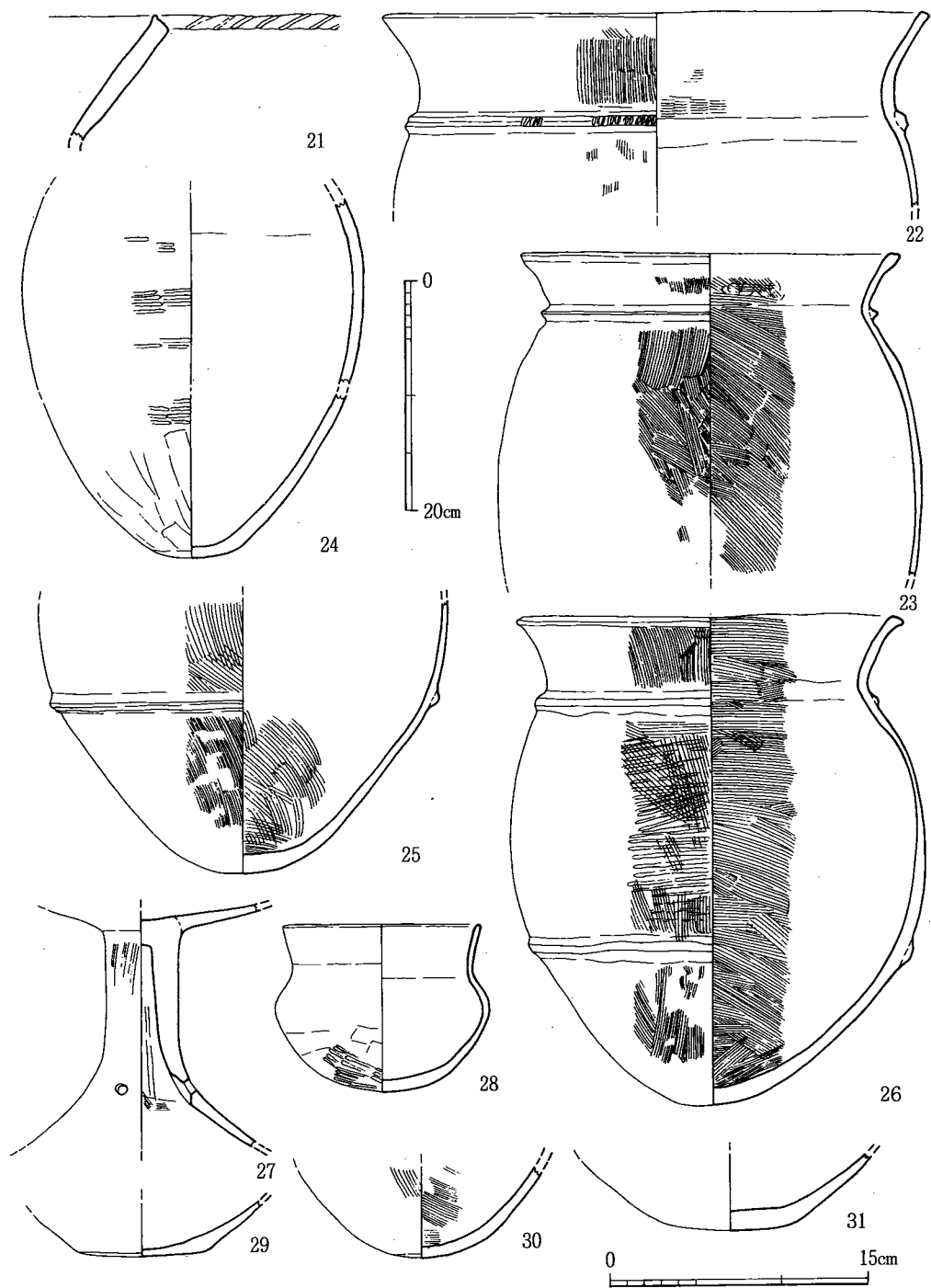
60号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央西端に位置し、この調査区を東西に横断する市道の付替え部分の竪穴住居跡密集地区で検出された。中世の10号溝や弥生時代の31・57・58号住居跡には切られるが、27・59号住居跡は切るといふ先後関係を有する。東西方向には5.7mという数値が得られるが、南北方向には5.3m以上になり、全体的なバランスから正方形に近い平面プランを呈していたと考えられる。地山の削りだしによるベッドは西壁側に開く「コ」字状で、幅は南側が0.9～1.1m、東側が1.4～1.6mとサイズが大きく異なる。2本の支柱穴は南北の軸線上にあり、北側の支柱穴は径60×55×40cm、南側は60×45×60cmで、いずれも径20cmほどの柱痕が確認された。両者の距離は1.8mで近接しているが、特に南側の支柱穴と55×45×5cmの炉跡の近接状況は著しい。本住居跡で特徴的なのは屋内土坑の位置である。弥生時代後期の「コ」字状ベッドを有する竪穴住居跡の場合、普通はベッドの切れる壁の中央部に作られるが、本住居跡ではその対面のベッドに接して作られている。108×82×42cmとかなり大きく位置的にも生



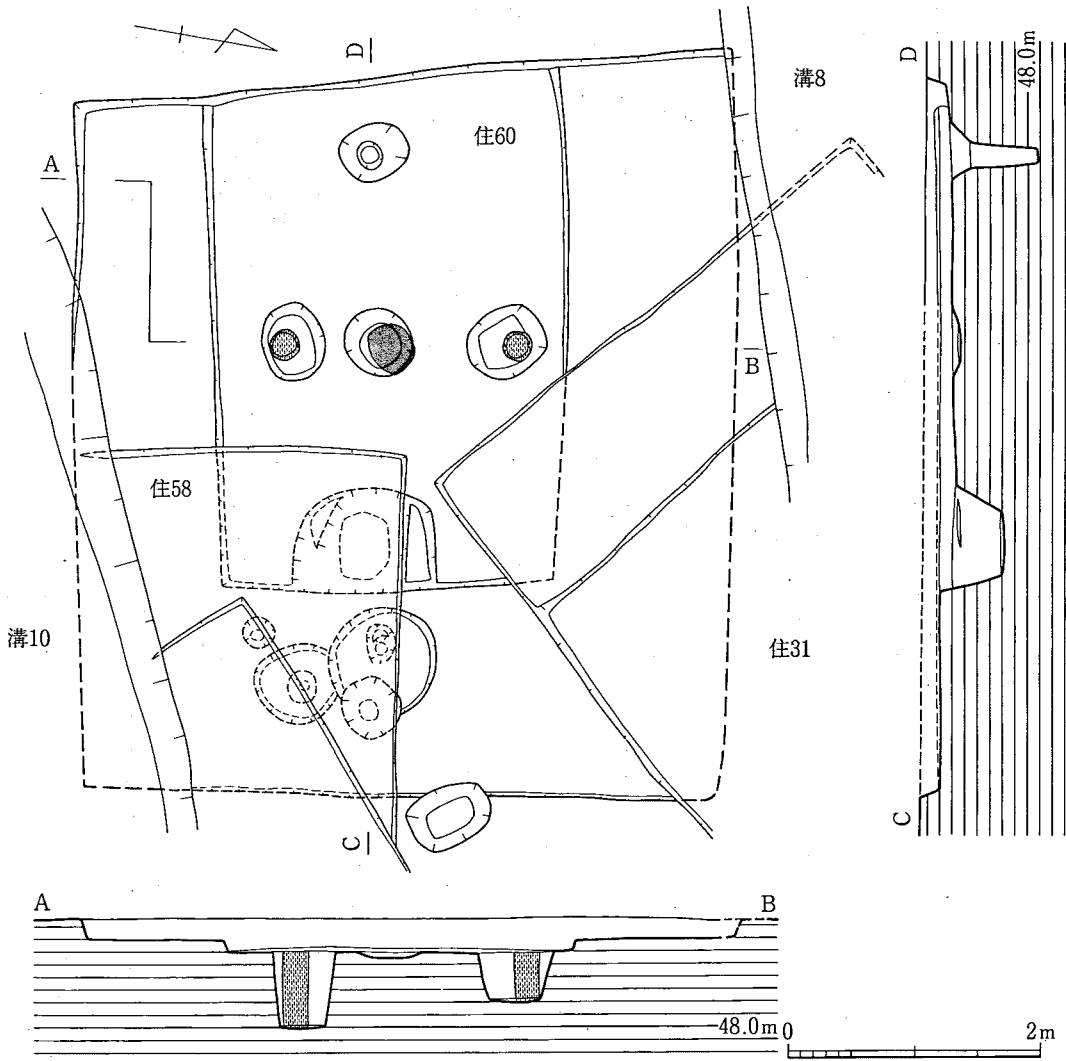
第100图 57~59号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/4)



第101图 59号竖穴住居跡出土土器実測図. 1 (1/4)



第102図 59号竖穴住居跡出土土器実測図。2 (1/4 22~26は1/6)



第103図 60号竖穴住居跡実測図 (1/60)

活に支障をきたすものと考えられるだけに、その意義が問題になる。類例も見当たらないだけに、今後の課題としたい。遺物の出土は少ない。

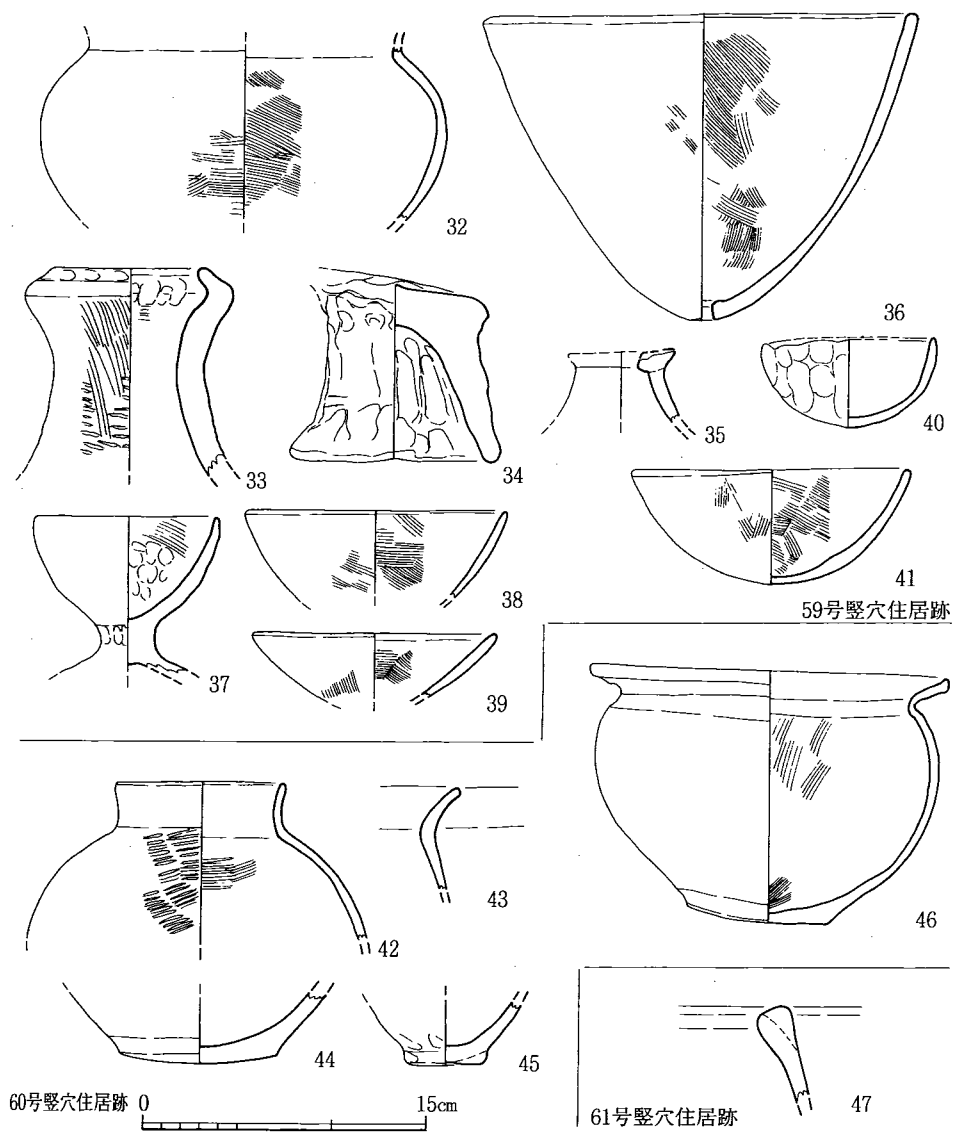
遺物 (第104図42～46 第237図41) 床面からの遺物の出土はほとんどなく、45が屋内土坑から出土した以外はすべて埋土に包含される。42の復元口径は9.5cmで、外面にはタタキが、内面にはハケが施される。4の鉢の口縁部はわずかにはね上げられており、復元口径は19.5cm。底部はいずれもレンズ状に丸くなるが、46については丸くなりながらも比較的シャープな稜が付く。第237図41は埋土から出土した頁岩製の砥石で、欠損後もかなり使用されている。(水ノ江)

61号竪穴住居跡 (第60図)

61号竪穴住居跡は丘陵平坦部調査区の中央部やや北西寄りの竪穴住居跡が密集する地区に位置し、25・32号住居跡に切られるが、その存在が確認されたのは25号住居跡の黄褐色粘土の作り付けベッドを除去した時点であった。当初は西壁に沿って幅8cm、深さ4cmの小溝が付くこと等から、「コ」字状ベッドが遺存しない竪穴住居跡の一部と考えていた。しかし、32号住居跡の貼床を除去して床面下を清掃しても61号住居跡の主柱穴・炉跡・屋内土坑等は確認されなかったため、また61号と32号住居跡の床面のレベルや北壁のラインが揃うことから、61号住居跡とした遺構は32号住居跡に関連した遺構であることが想定されるようになった。しかし、遺物の取り上げは別個に行っており、混乱を避けるため61号住居跡として便宜的に分けて報告する。遺物は少なく、図示できたのは第104図47の口縁部だけである。(水ノ江)

62号竪穴住居跡 (図版49 第105・106図)

平坦面中央に位置し、9号溝に北東隅を切られる。遺構が深いため残りがよい。21・63号竪穴住居跡・26・27号掘立柱建物跡を切る。長辺7.8m、短辺6.0mの大型長方形2本柱竪穴住居跡である。南側主柱穴は上端で広く、径が30cmに狭まったところで径15cmの柱痕が検出されたことから、柱は途中で切らたと考えられる。北側主柱穴は、東側にテラスがつく不整形で、柱痕が検出されなかったので、柱は抜かれたと思われる。図化していないが、北側主柱穴の南側と南側主柱穴の北側に、Aso-4の大きなブロックがあり、17号竪穴住居跡の例から、これは抜き取り時の排土と考えられる。炉の周りには小ピットがめぐり、さらに、炉の焼土を切り込んで、一辺20.0cm前後の正方形に組まれた炭化材が検出された。炭化材の幅は5cm前後で、掘り形に埋め込まれており、角の部分の埋土には黄白色の粘土が使用されている。また、角の部分は、炭化材の切り合いが認められことから、単に材を並べたものではなく、組み合わせていたらしい。床面からしか確認できなかったため、上部構造をもつかは不明であるが、平面方形の構造物であったと考えられる。焼土を切っていることから囲炉裏状のものでもなく、現段階では機能を想定できない。作り付けベッドが南北壁につき、北側のベッド状遺構は9号溝の壁か



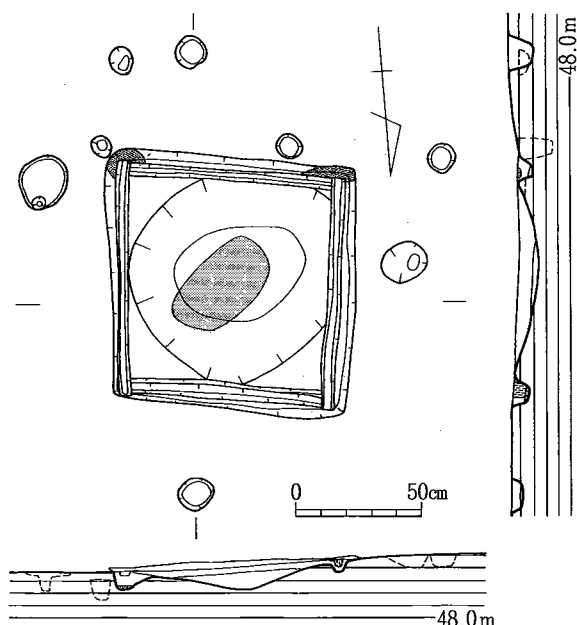
第104图 59~61号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)

ら検出されている。屋内土坑は東壁中央に位置し、床面は硬化した貼床である。

遺物(第109図) 1は複合口縁壺の口縁部、2は壺の頸部で、3は短頸壺の完形品で丁寧なつくり。4は小型甕で、完形に近い。外底は焼けておらず、胴下位は2次焼成による赤化して降り、中位と口縁上端には煤が付着するので、接地して煮沸使用したものと考えられる。5は甕の底部で、内面が黒灰色に変色している。6は杯か鉢の底部だろう。7は無頸壺で、突帯が間延びしており、鋭さに欠け、橙褐色を呈する。

埋土より鉄剣の切先(第243図6)・ガラス玉(第247図202)が出土している。

鉄剣の切先は、断面が扁平なので剣以外の利器の可能性もある。南東隅のベット上からは輝緑凝灰岩製の石庖丁(第230図13)が完形で出土している。(秦)



第105図 62号竪穴住居跡炉跡実測図(1/30)

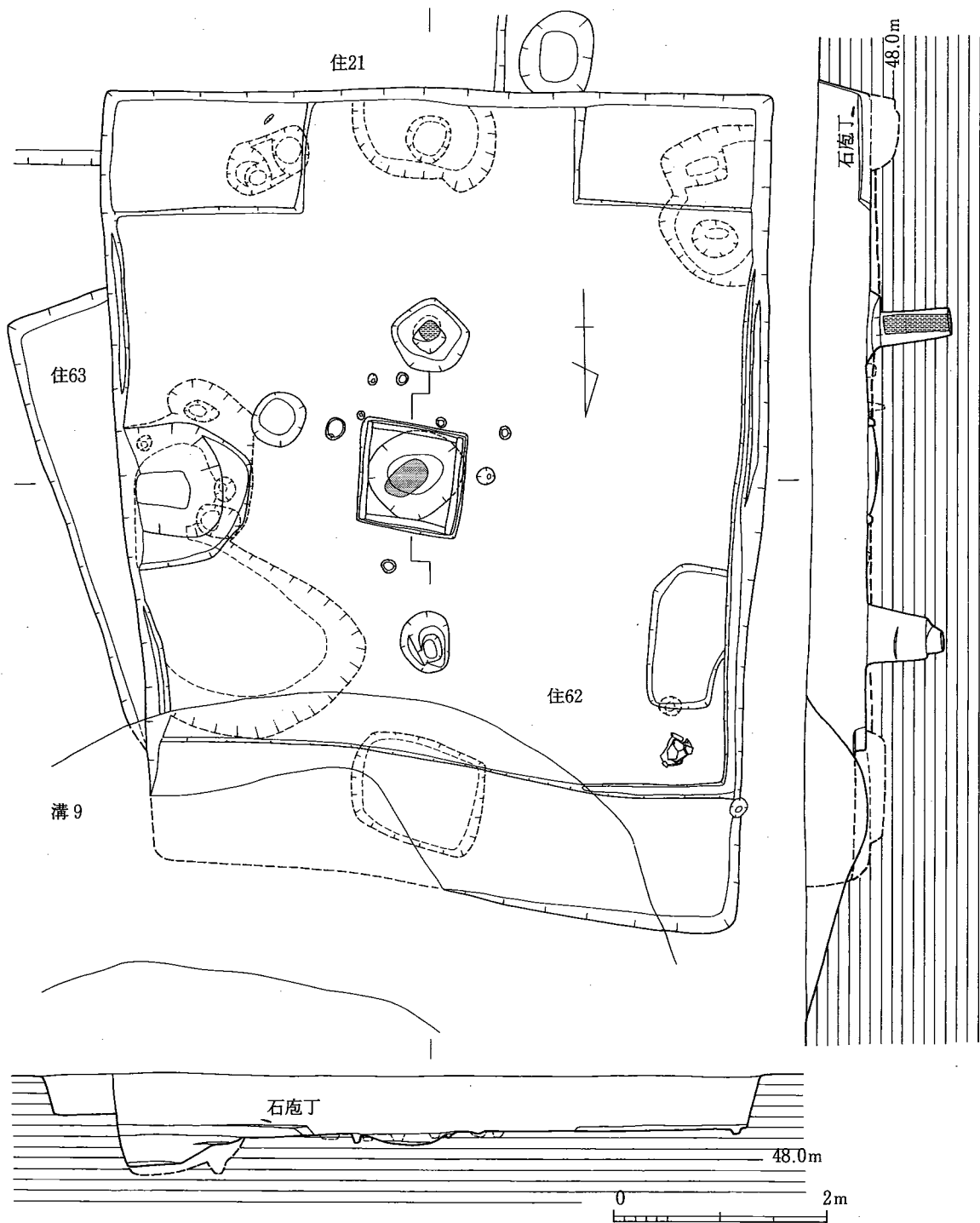
63号竪穴住居跡(図版49 第106図)

調査区中央に位置し、9号溝と62号竪穴住居跡に切られ、ほとんど残っておらず、南西隅しか検出されなかった。壁の残りも悪いため、屋内施設も62号竪穴住居跡の床から検出されず、規模を推定できない。

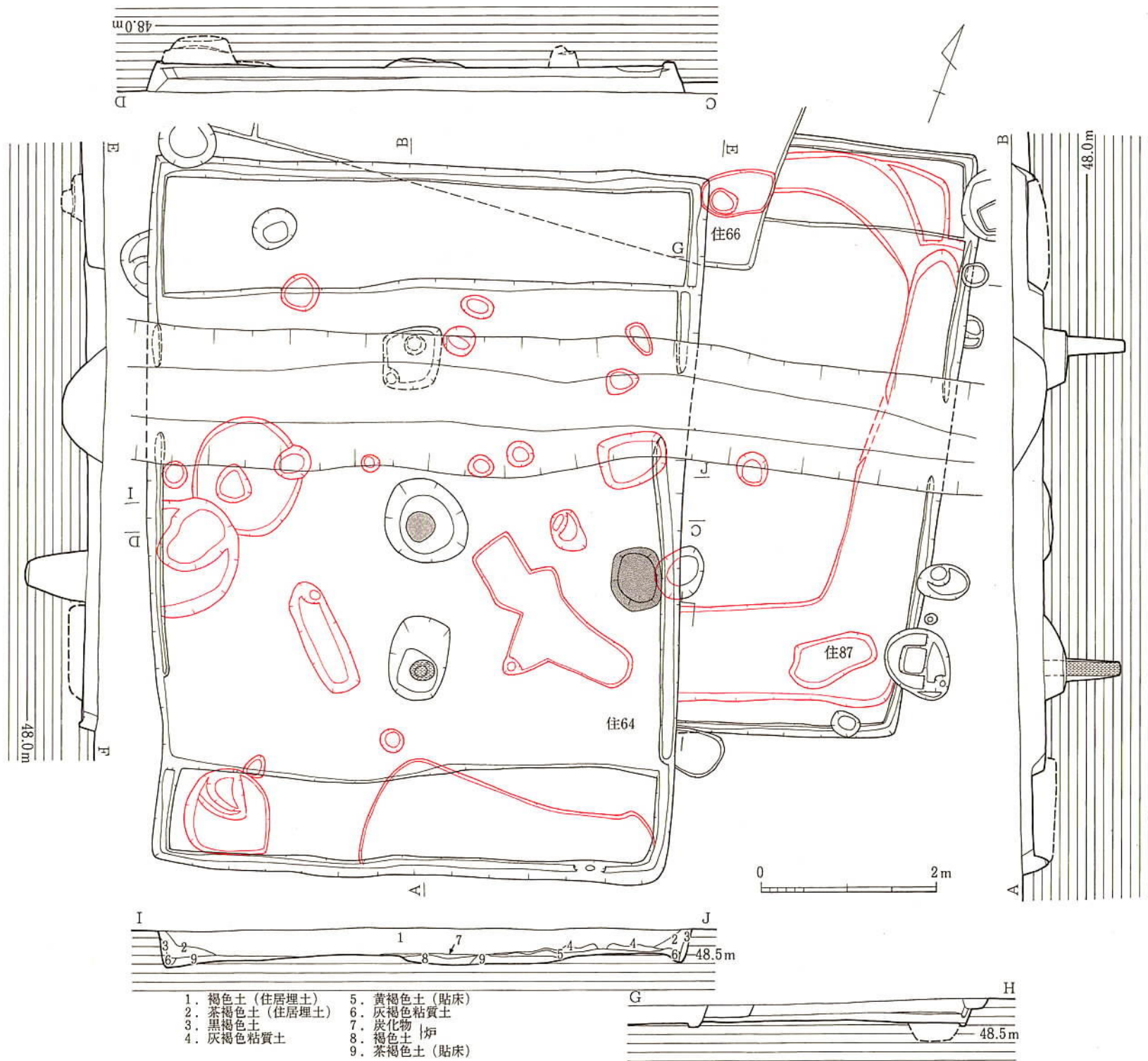
遺物(第109図) 8は壺の底部で、外底は平底だがわずかながら膨らみを持つ。埋土中から輝緑凝灰岩製石庖丁片(第230図12)が出土している。(秦)

64号竪穴住居跡(図版150 第107・108図)

平坦面中央に位置し、9号溝に中央部を切られるが、遺構が深いため残りがよい。67・87号竪穴住居跡を切る。長辺8.0m、短辺6.1mの大型長方形2本柱竪穴住居跡である。主柱穴は略方形で、上位が広がっており、南側主柱穴では、狭まる場所で柱痕が検出されたので、柱は抜き取る途中で切りとられたと考えられる。東壁沿いの床面上にAso-4の大きなブロックがあり、17号竪穴住居跡の例から、抜き取り時の排土と考えられる。また、埋土と主柱穴内から出土している土器片が接合したことから抜き取りと考えられる。作り付けベットが南北壁に



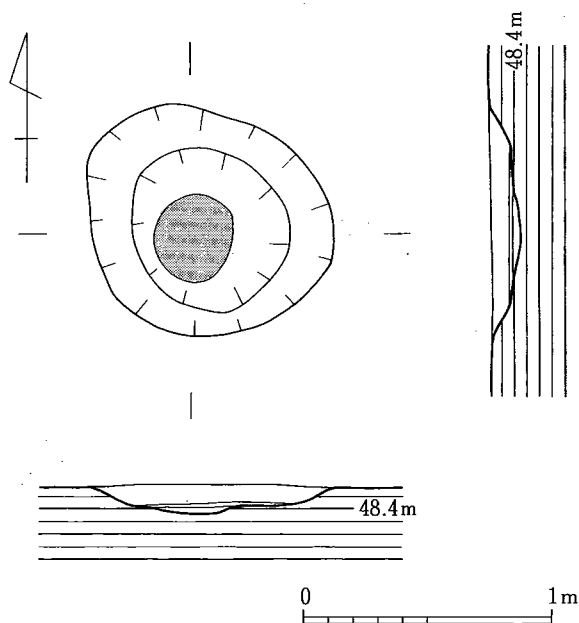
第106图 62·63号竖穴住居跡実測图 (1/60)



第107图 64・87号竖穴住居跡実測图 (1/60)

つき、南西隅に貯蔵穴状のピットがみられる。屋内土坑は確認されなかった。11号掘立柱建物跡を切る。

遺物 (第109図) 大型住居の割に遺物が少なく、9は複合口縁壺の口縁部、12は口縁が直立気味に屈曲するタイプの複合口縁壺の口縁部である。10は直口壺の口縁部で、胎土はあまり良くないが、つくりの良い精品で、屋内土坑から出土している。11は鋤先口縁で高杯と思われる。13は口縁が直立気味に立ち上がる低脚高杯で、台裾に穿口が4つある。精良な胎土でつくりは丁寧なので、搬入品の可能性もある。



第108図 64号竪穴住居跡炉跡実測図 (1/30)

(秦)

65号竪穴住居跡 (図版50 第110図)

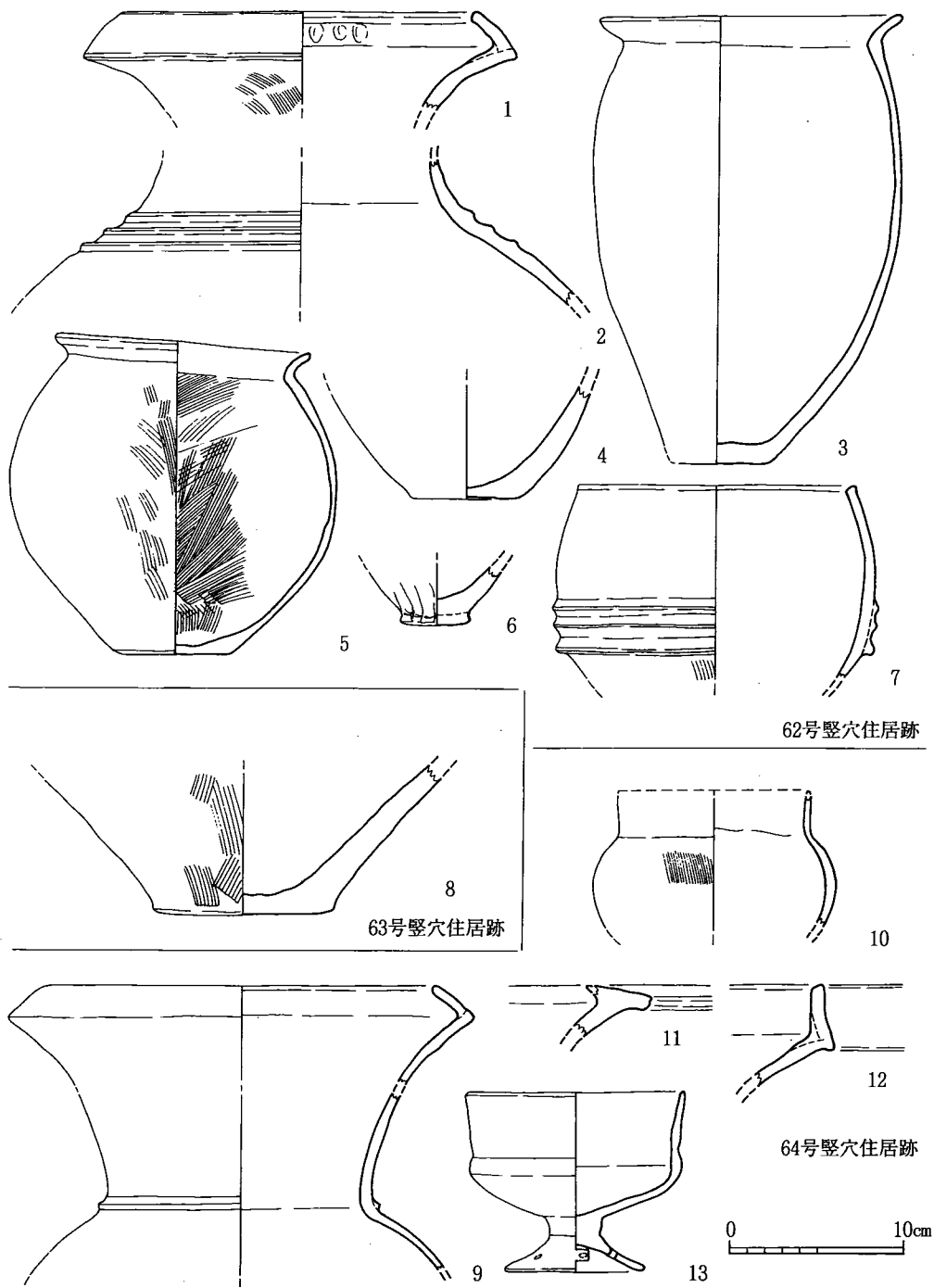
平坦面中央に位置し、大部分を9号溝に切られているため残りが悪い。主柱穴と炉の配置から、長辺は西壁にベット状遺構がつけば6.0m、つかなければ5.5m、短辺は炉を中点とすると5.0mの方形プランが復元できる。東側主柱穴は、南壁にテラスがつくので、柱は抜き取られており、西側主柱穴は上位がひろがっていることから、柱は途中で切り取られたものと考えられる。屋内土坑は南壁についていたらしく、切られている。東壁に貼りベットがあり、これを外すと26号掘立柱建物跡の柱が検出されたので、切り合い関係は確実である。北側に一括投棄された土器群が出土した。

遺物 (第114図) 1は甕棺の口縁部で、口唇部に刻み目が、頸部に鋸歯文が入った貼付方形突帯を巡らす。2は中型甕の口縁である。床面から出土している。

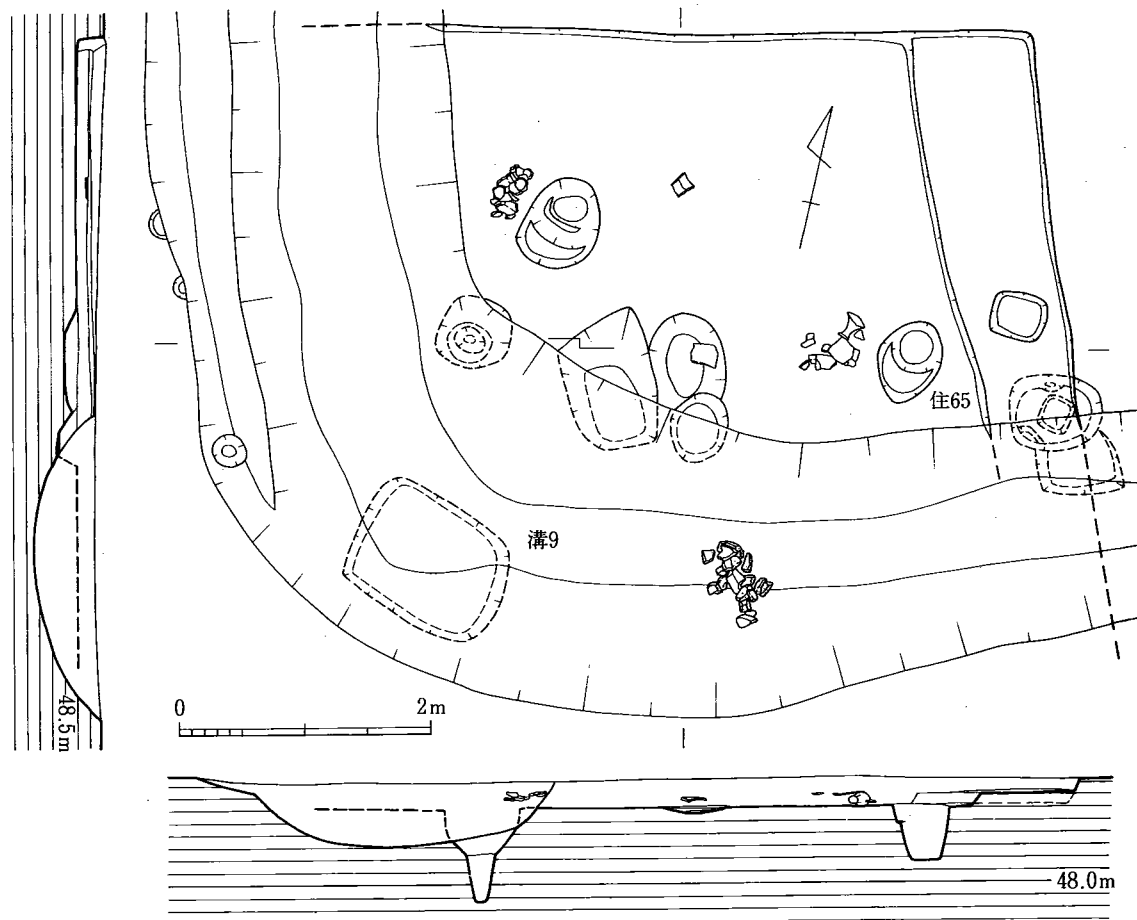
(秦)

66号竪穴住居跡 (図版51 第111・112図)

平坦面中央に位置し、23号掘立柱建物跡を切り、64号竪穴住居跡に切られる。長辺7.2m、短辺5.65mの長方形竪穴住居跡である。主柱穴は両方とも南側にテラスをもつ楕円形なので、南

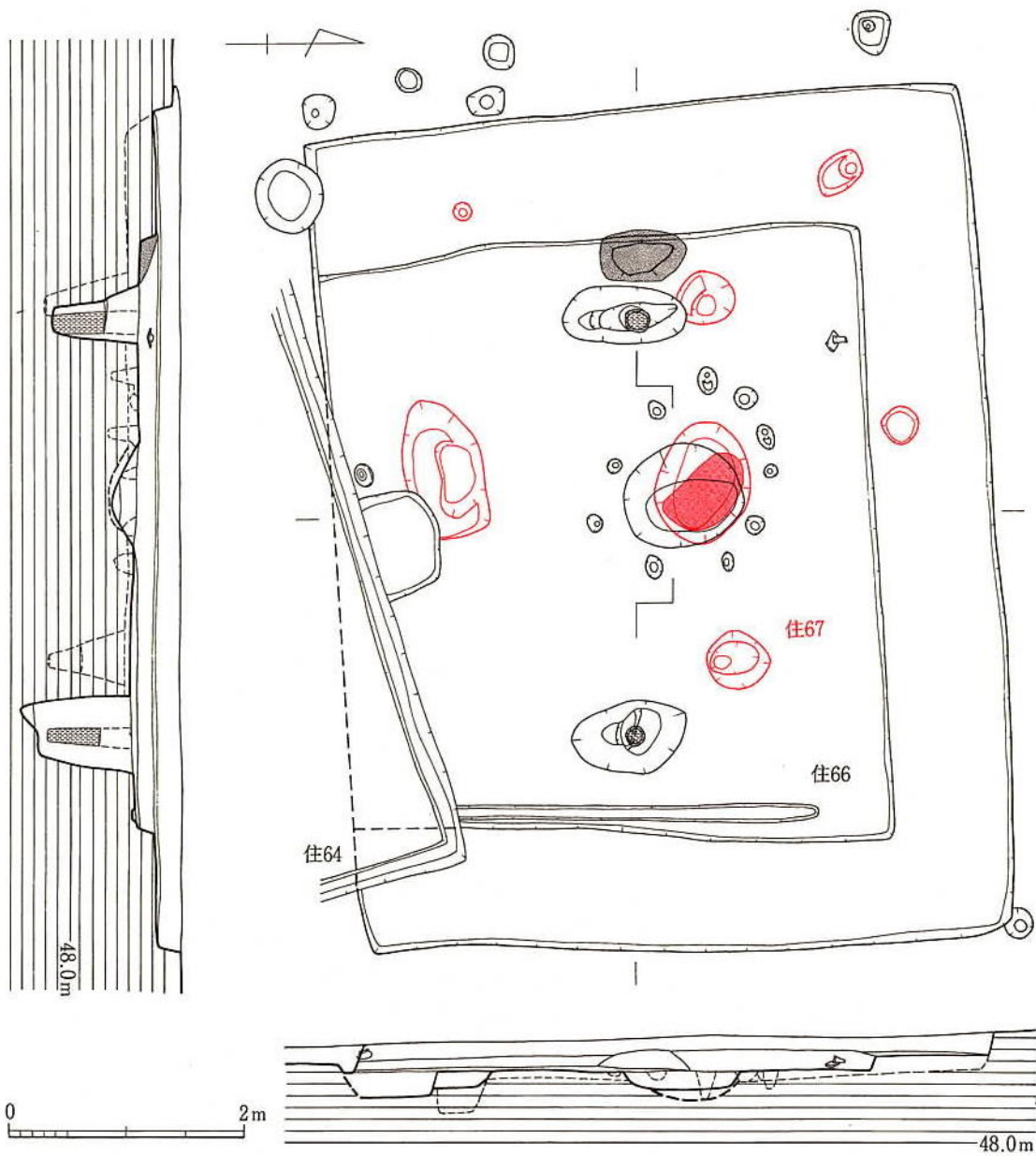


第109图 62~64号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)



第110図 65号竖穴住居跡実測図 (1/60)

からの抜きとり穴が入っていると思われる。また、西側支柱穴の南側に Aso-4 の大きなブロックがあり、これは柱抜き取り時の排土と考えられる。同様のものが東側支柱穴のそばにもあったはずだが確認できなかった。しかし、径16cmの柱痕が中位から検出されているので、柱は抜く途中で切りとられたと考えられる。東側柱穴底面からは礎板の沈み込んだ痕跡と思われるものがある。長さ35cm、幅12cmのものが、竖穴住居跡主軸方向とほぼ平行に並んで検出された。柱痕がその中央に位置するので、柱の下にかませた横木の痕跡だろう。炉の周りには小ピットがめぐっている。南壁中央に屋内土坑が位置している。ベット状遺構はコの字形で、東側は地山削り出しで、北・西側は作り付けであった。これは、貼床下から検出される67号竖穴住居跡のプランと関連しており、支柱穴・炉・屋内土坑の配置から、67号竖穴住居跡のプランは本竖穴住居跡の北西隅を共有すると考えられる。そのため、67号竖穴住居跡内に作られる北・西側

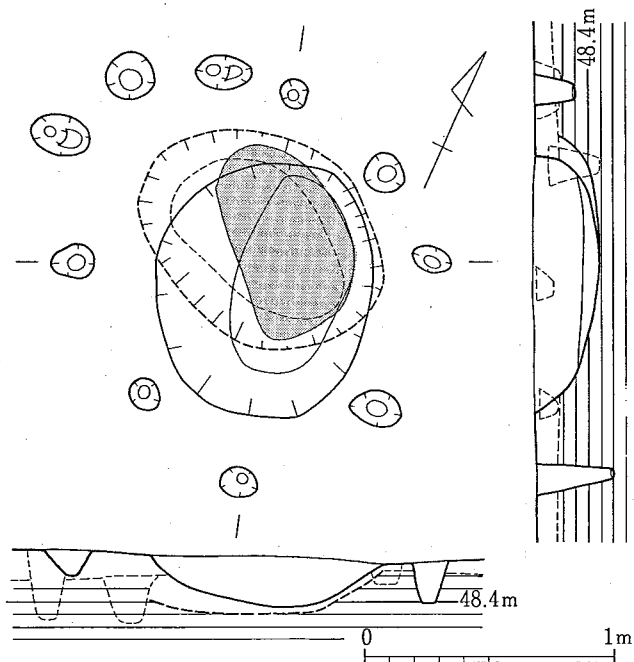


第111图 66·67号竖穴住居跡实测图 (1/60)

ベット状遺構は作り付けで、67号竪穴住居跡のプラン外か、あるいは、東壁にあたる東側ベット状遺構は地山削り出しなのであろう。竪穴住居跡の主軸がほぼ同じで、壁を共有していると思われることから、66号竪穴住居跡は67号竪穴住居跡の拡張と考えられる。

遺物(第114図)3は中型甕の口縁部で、口縁上端の内面に使用による変色が見られるので、内蓋で煮沸したと考えられる。東側支柱穴から出土、4は底部でピット1から出土。5は小型甕の底部で、底部が使用のため

赤変する。6は鉢で、胎土が精良でつくりも丁寧な精品であり、屋内土坑の西側の床面から出土した。7は北側ベットに近い床面から出土した。(秦)



第112図 66・67号竪穴住居跡炉跡実測図(1/30)

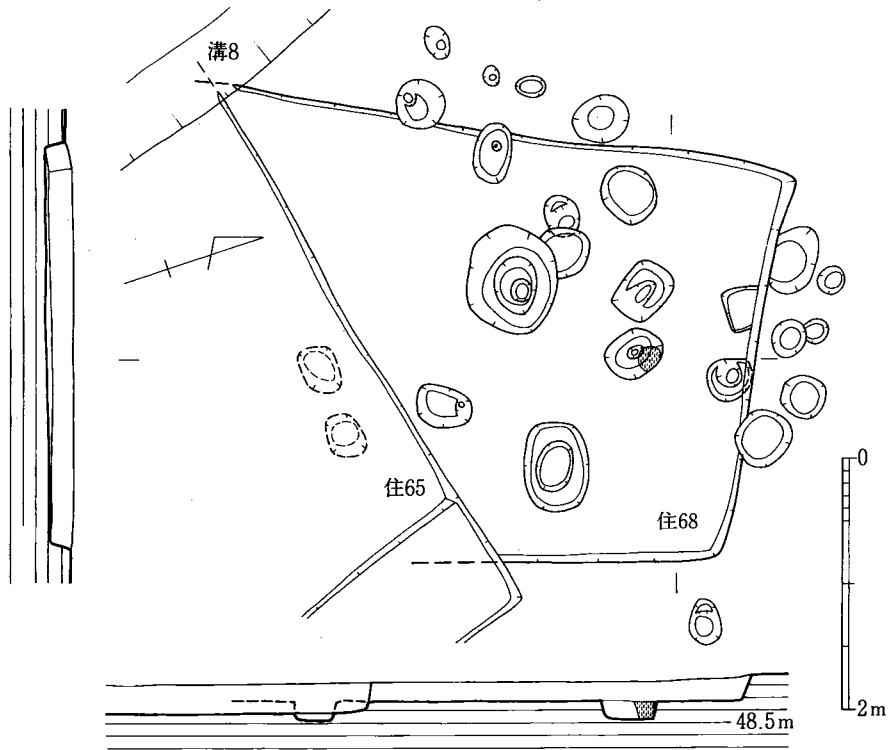
67号竪穴住居跡(図版51 第111図)

平坦面中央に位置し、66号竪穴住居跡の床面下から検出されている。66号竪穴住居跡で詳述したとおり、66号竪穴住居跡と西北隅を共有し、東側ベット遺構を東壁と考え、長辺は6.0mを測り、短辺は屋内土坑の位置から、5.0mとなるので、長形2本柱竪穴住居跡を想定できる。ベット状遺構の有無は不明である。67号竪穴住居跡のプランは66号竪穴住居跡のプランの北西隅を共有していると考えられる。また、主軸方向も一致しているので、66号竪穴住居跡の拡張ではないだろうか。本住居の炉の下と貼床を剥がすと、23号掘立柱建物跡の柱穴が検出されたことから、両者の切り合い関係は確実である。

本住居に確実に伴う出土遺物はわずかで、実測可能な土器は刻み目の貼付方形突帯を2条巡らす甕棺の胴部片(第114図8)1点のみだった。(秦)

68号竪穴住居跡(図版50 第113図)

調査区中央に位置し、65号竪穴住居跡に切られ、半分が失われているため、短辺3.25mの長方形竪穴住居跡を推定するにとどまる。屋内施設も検出されず、想定した支柱穴も浅いので、



第113図 68号竖穴住居跡実測図 (1/60)

竖穴住居跡としては確実でない。実測できる遺物がないため、時期は不明。 (秦)

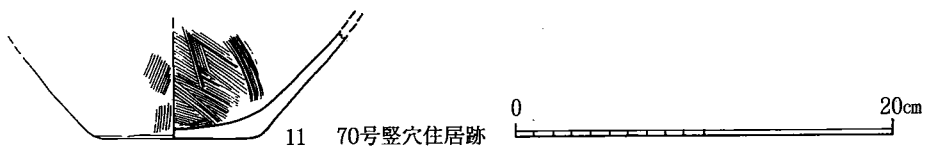
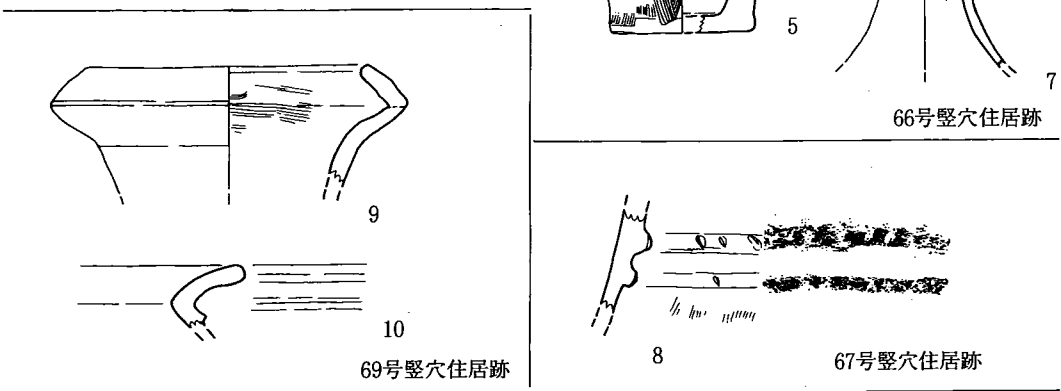
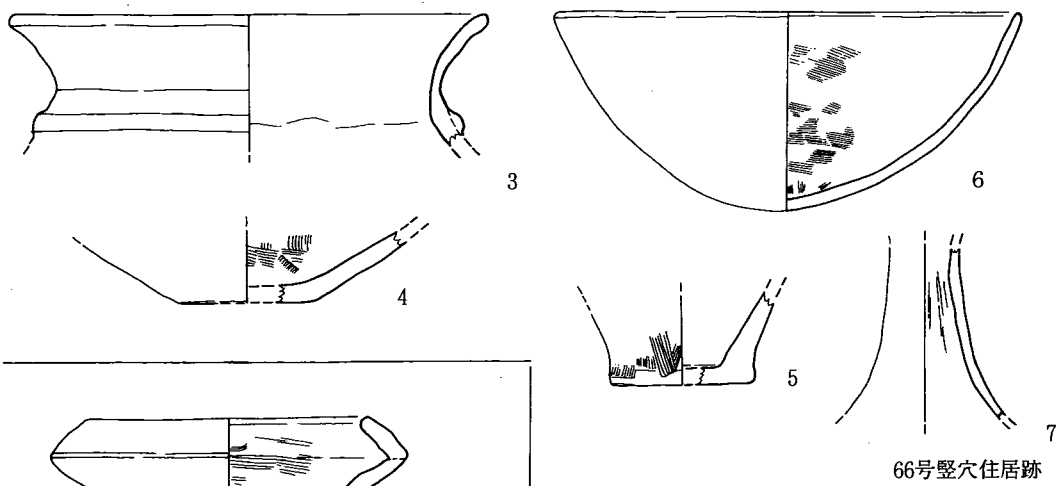
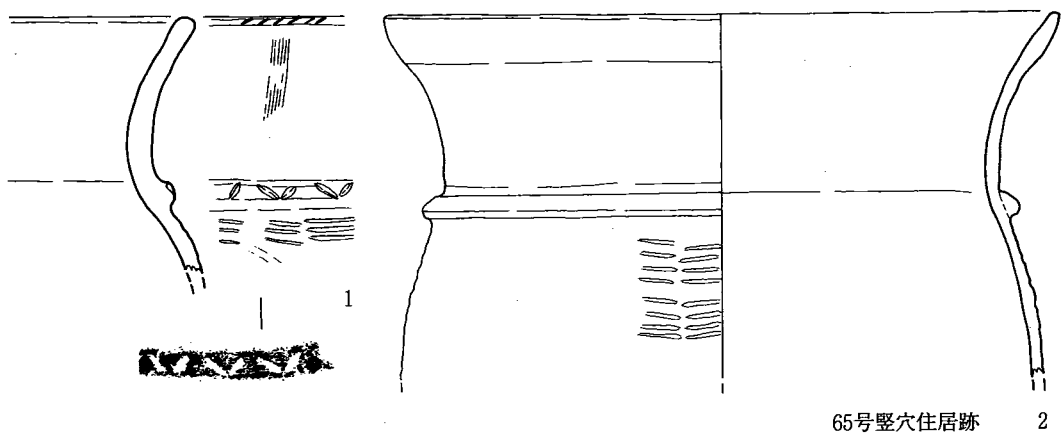
69号竖穴住居跡 (図版52 第92図)

調査区中央北端に位置し、北側斜面のためほとんどが失われており、南西隅しか検出されなかった。本竖穴住居跡のプランは54号竖穴住居跡の炉の下から検出されているので、前後関係は間違いない。

遺物(第114図) 9は複合口縁壺で、屈曲部内面に補強粘土がないことから、袋状口縁からの過渡的な形態と考えられる。10は甕の口縁部である。埋土中から輝緑凝灰岩製石庖丁片(第230図14)が出土している。 (秦)

70号竖穴住居跡 (図版52 第116図)

調査区中央北端に位置し、北側斜面のため大部分が失われている。南隅が検出されたのみだが、屋内土坑を中点とすると、長辺6mの長方形竖穴住居跡を推定できる。炉・支柱穴は失われているが、屋内土坑と南辺に地山削り出しのベット状遺構が検出された。52号竖穴住居跡を



第114图 65~67·69·70号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)

切る。

出土遺物は南側ベット状遺構上のピット1から出土している小甕の底部(第117図11)で、つくりも調整も丁寧で器壁も薄いことから、短頸壺の可能性もある。底部に2次焼成を受けた赤変が見られるので、沓形支脚を使用して煮沸した可能性がある。(秦)

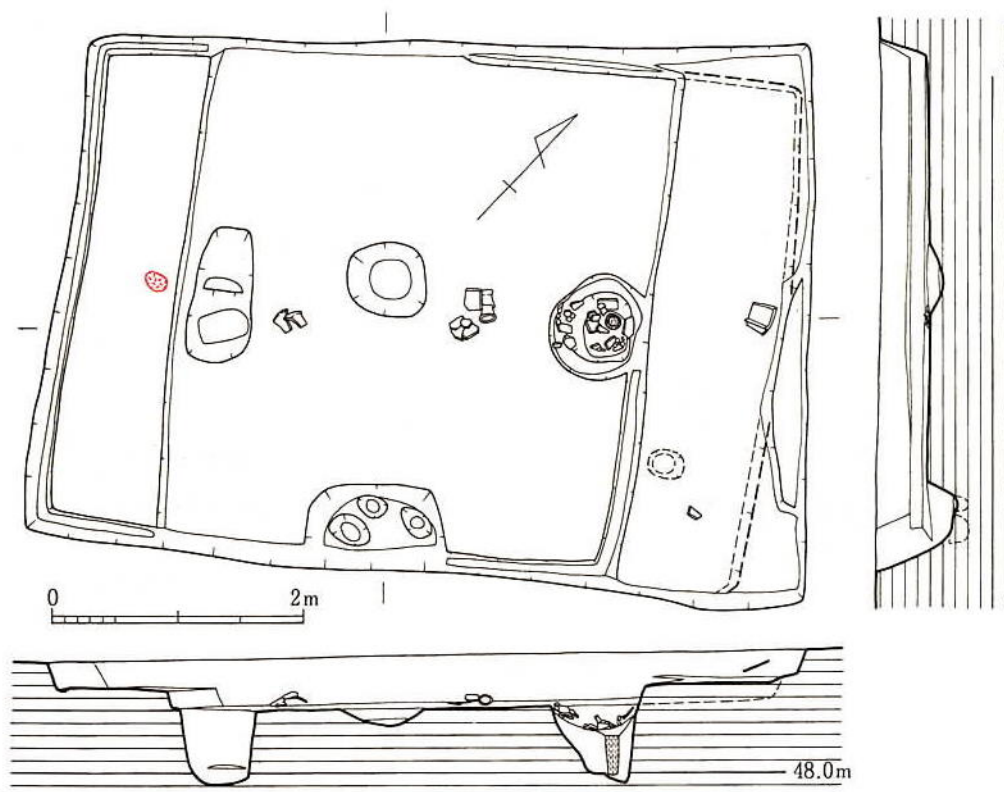
71号竪穴住居跡(図版52 第88図)

本竪穴住居跡の主柱穴と炉は51号竪穴住居跡の貼床下から検出されており、その配置から、71号竪穴住居跡のプランは51号竪穴住居跡の北西隅を共有していたと思われる。そのことから、長辺5.6m、短辺3.8mの方形2本柱住居を復元できる。また、竪穴住居跡の主軸方向がほぼ同じであることから、51号竪穴住居跡の拡張であると考えられる。

遺物は実測できるものが出土しておらず、時期は不明である。(秦)

72号竪穴住居跡(図版53・54 第115図)

調査区中央北側に位置し、73号竪穴住居跡を切る。炉や主柱穴を中点とすると、長辺6.0m、



第115図 72号竪穴住居跡実測図(1/60)

短辺4.2mの長方形2本柱竪穴住居跡である。北側主柱穴は上位から土器片が多量に出土し、土器片を取り除いた下層から径12cmの柱痕が検出された。したがって、柱は抜く途中で切り取られたと考えられる。南側主柱穴は、北西にテラスをもつ平面長楕円形で、柱痕が検出されなかったことから、柱は抜かれたと思われる。南北壁に作り付けベット状遺構が検出された。屋内土坑は南壁中央に位置し、底面の短片側と長片側に小ピットをもつ。北側隅に一括廃棄の土器片が大量に入っており、上位から床面直上までまとまっているため、竪穴住居跡がほとんど埋らない段階に廃棄されたものと考えられる。床面からいずれも大きさの等しくほぼ完形で出土した鼓形器台が3点出土しており、17号竪穴住居跡と同じパターンの祭祀が行なわれた可能性がある。また、南側ベット状遺構上の中央に朱が出土している。床面は硬化した貼床で、これを剥がすと、23号掘立柱建物跡の柱穴が検出されたので、切り合い関係は明白である。

遺物 (第117・118図) 1・2は複合口縁壺の口縁部で、3は壺の底部で外面は荒いケズリである。4は中型の壺の胴部で、5は小型の甕で煮沸使用による煤が付着する。6は短頸壺の頸部、7は壺の底部、8は甕棺の胴部、9は肩部で方形に打ち割られて転用された可能性をもつ。12は中型甕の口縁部で、頸部に屈曲をもたない。使用のため赤変している。10は中型甕の口縁部で、11は口径23cmの小型高杯の杯部で低脚になるものと思われ、胎土は精良である。12・19は杵形支脚で突起の対面が赤変している。13は鼓形器台で、袋部が使用のため変色している。14から18は鼓形器台であるが、14以外は大きさが等しくほぼ完形で出土した。20は杯で、21は台付鉢で胎土は精良でつくりも丁寧である。22は脚付器種で胎土が精良なので低脚高杯か脚付鉢と思われる。24は柄杓である。23はミニチュアの脚付器種である。

25から28は北側主柱穴から出土している。25は複合口縁壺の口縁部、26は小型甕の口縁部、27は小型甕の底部、28は高杯の脚部で胎土は精良である。(秦)

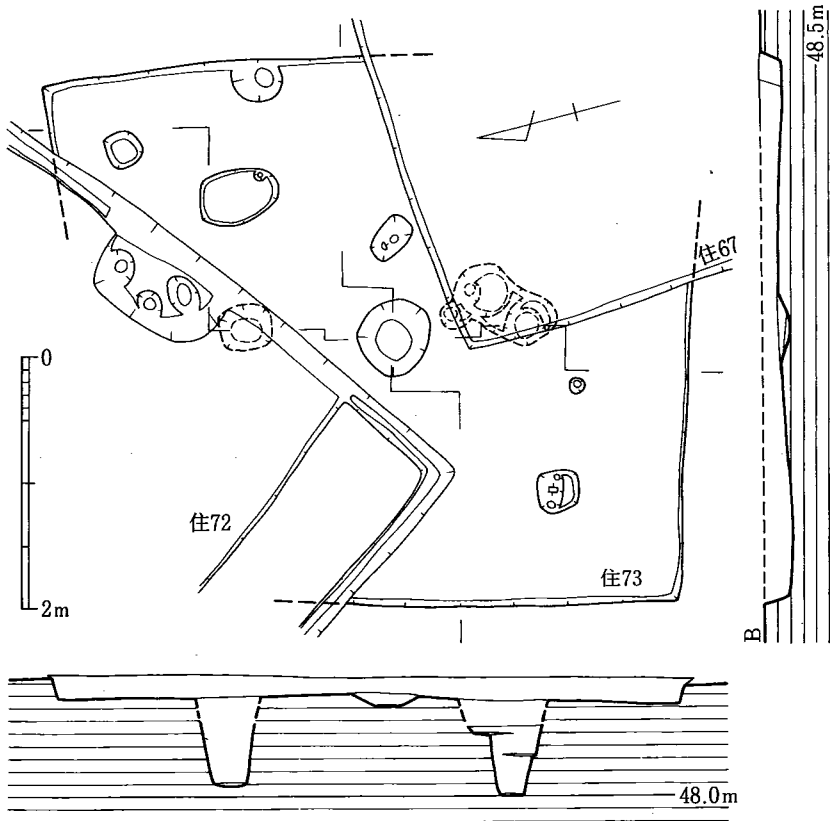
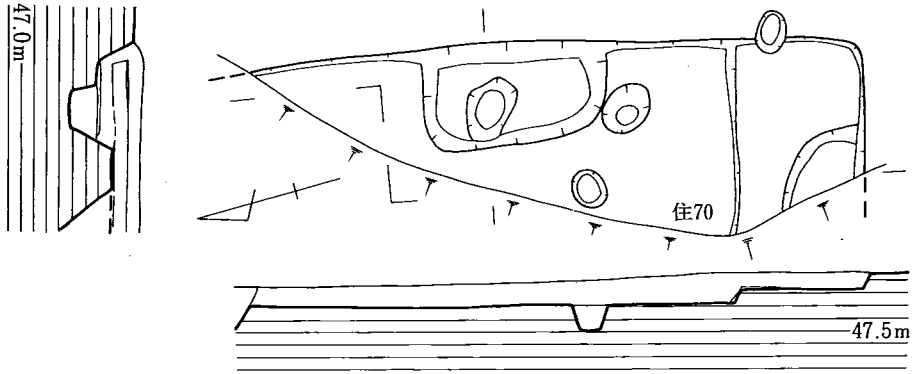
73号竪穴住居跡 (図版53 第116図)

調査区中央に位置し、66・67・72号竪穴住居跡に切られ半分が失われている。検出された北東・南西隅から、長辺5.2m、短辺4.35mの方形2本柱竪穴住居跡が推定できる。炉と主柱穴の2本とも、本遺構を切る竪穴住居跡の貼床下から検出された。屋内土坑・ベットは検出されず。23号掘立柱建物跡の柱は、本竪穴住居跡の硬化した貼床と炉の下から検出されているので、前後関係は確実である。

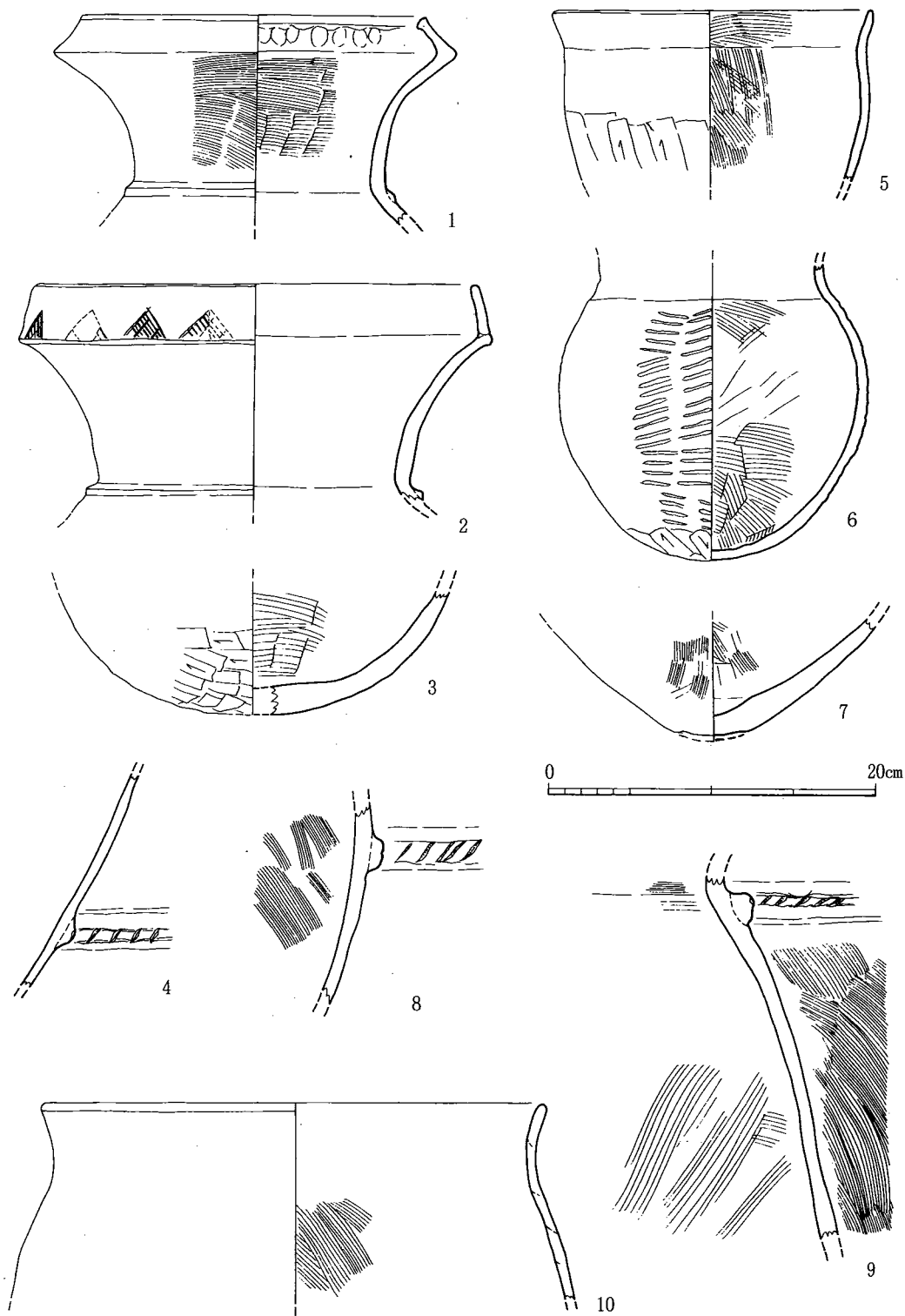
出土遺物で実測できるのは小型甕の胴部(第121図29)のみで、口縁が直立するタイプと思われる。2次焼成や煤の付着のないので壺として使用されていたものだろう。(秦)

74号竪穴住居跡 (図版55 第119図)

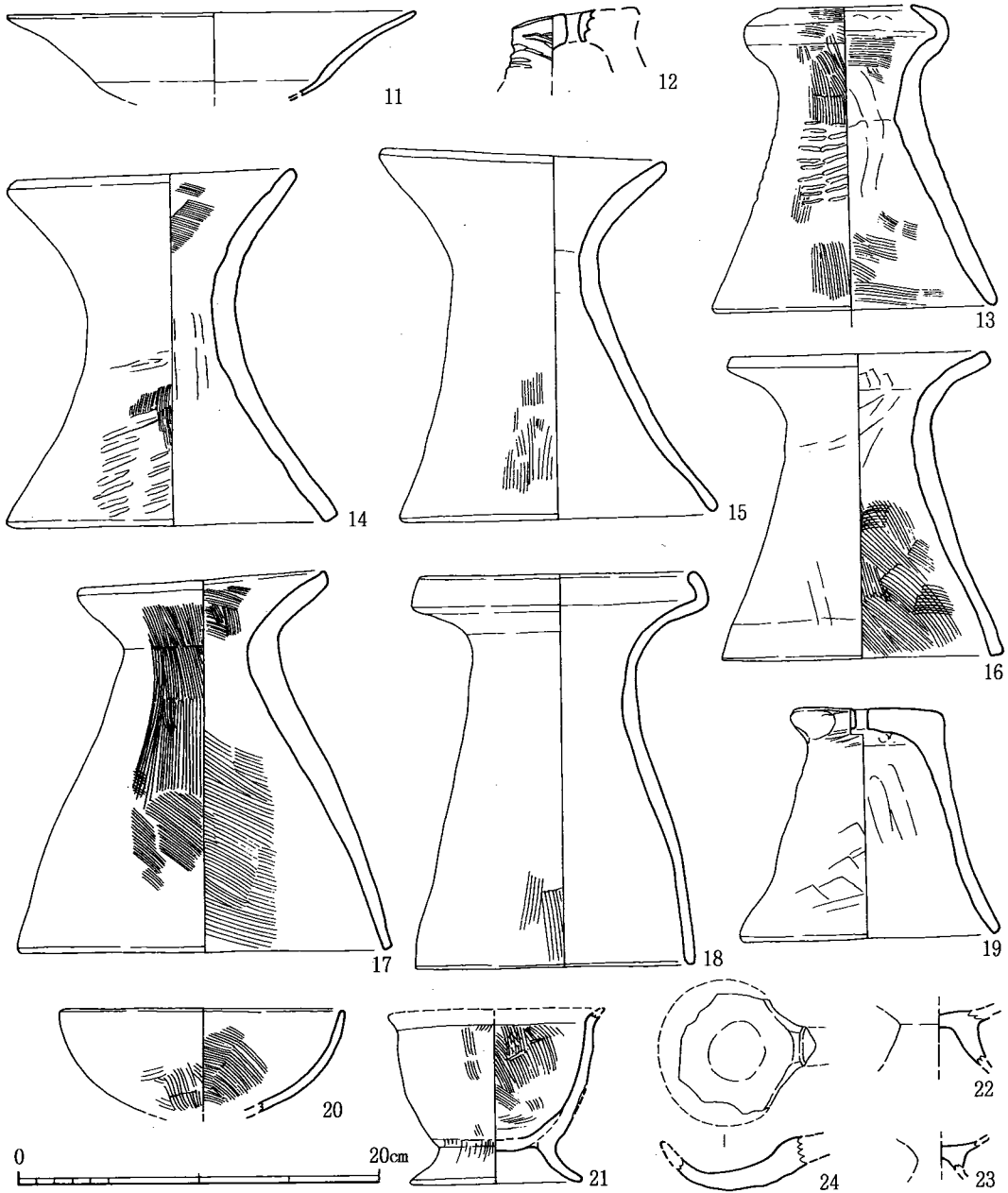
調査区中央北部に位置し、75号竪穴住居跡を切る。遺構は残りがよく、壁が高い。長辺6.9



第116图 70·73号竖穴住居迹实测图 (1/60)



第117图 72号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)



第118图 72号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/4)

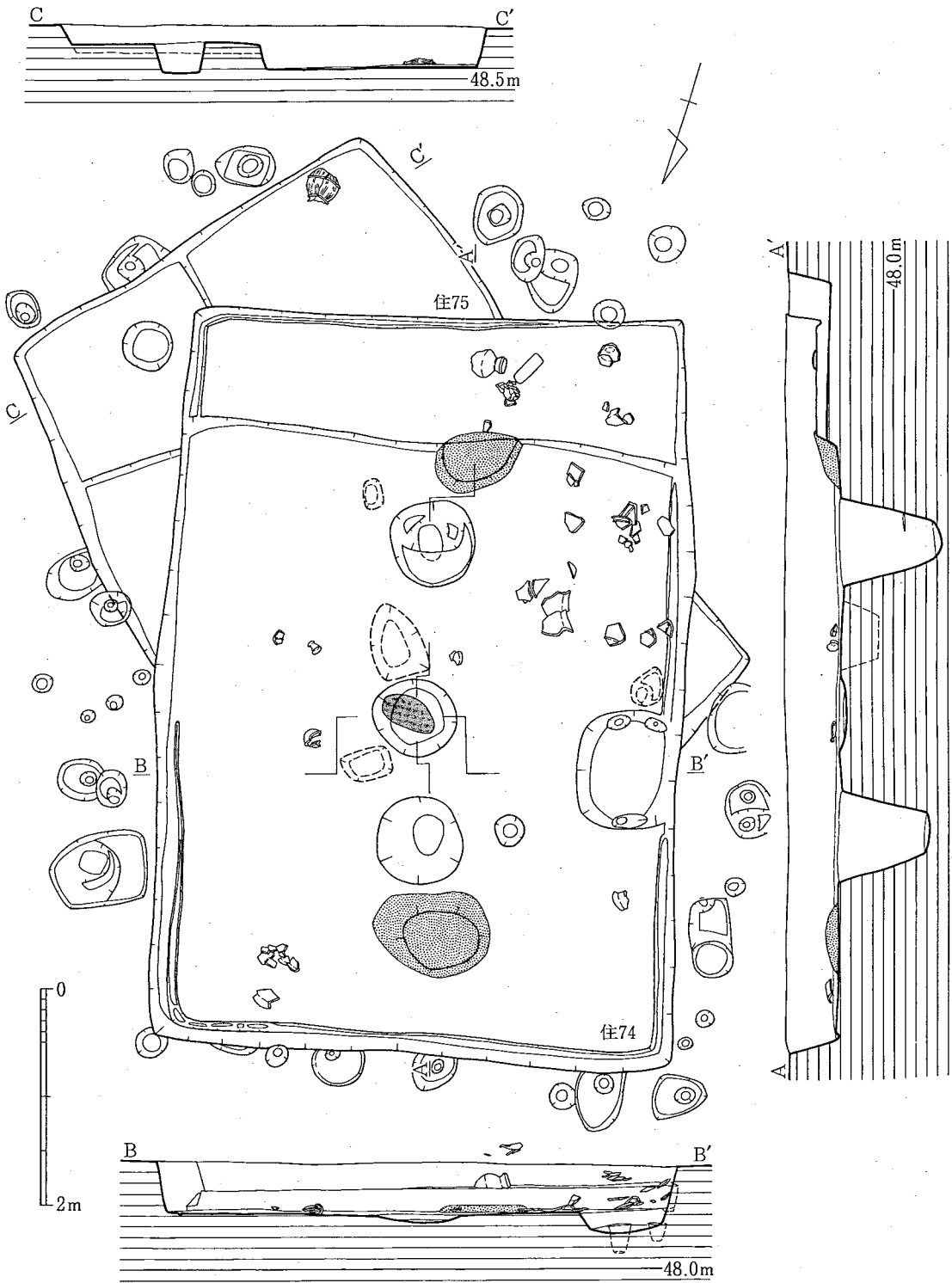
m、短辺4.8mの長方形2本柱竪穴住居跡である。北側主柱穴は東壁が緩やかに立ち上がり、南側主柱穴は北壁にテラスをもち、柱痕は検出されなかったので、柱は抜き取られたと考えられる。北側主柱穴の北側と南側主柱穴の北側の床面上に、Aso-4の大きなブロックがあったが、17号竪穴住居跡の例から、これは柱抜き取り時の排土と考えられる。削り出しベットが南壁につくが、75号竪穴住居跡と切り合う部分は貼土であった。屋内土坑は南壁中央につき、短辺側に長方形の小ピットがつく。貼床は硬化しており、周溝も検出された。14・28号掘立柱建物跡に切られる。遺物は多く出土しているが、床面から若干浮いているものがほとんどで、甕棺は西壁の上端から床面直上まで同一個体の破片が壁に沿って続いており、これは、本竪穴住居跡がほとんど埋らない段階に一括廃棄が行われたことを示している。

遺物 (第121・122図 第241図5 第242図10 第237図42・43) 30・31・32は複合口縁壺の口縁部で、30は胎土の良い精製品である。33は甕の底部で、外底に煤が付着し、胴下位に赤変が見られるので、接地して支脚を使用して煮沸したと考えられる。34・35・36・37は甕の口縁部で煮沸使用の痕跡が著しい。39は甕棺、28は甕の底部で、外面が広域に赤変しているので、支脚を使用して煮沸している。41・44は鉢で、前者は調整が荒く、胎土が異質なので搬入品の可能性がある。42・43は短頸壺で、40は肥前系の高杯の杯部で、胎土も異質なので搬入品の可能性がある。45は鉢でつくりがよく、搬入品の可能性がある。46は無頸壺で、胎土は比較的精良で赤褐色を呈する。48はミニチュア品の底部で、器種は特定できない。47は器形は鼓形器台だが穿孔がないので杵形支脚と考えたい。埋土中から千枚岩系の石材の磨製石鏃(第241図5)と、先端に赤色顔料の付着した礫(第242図10)が出土している。磨製石鏃はかなり風化しており研磨痕などは観察できなかった。また、貼床から頁岩製の砥石(第237図42)が、埋土中からは砂岩製の砥石(第237図43)が出土している。(秦)

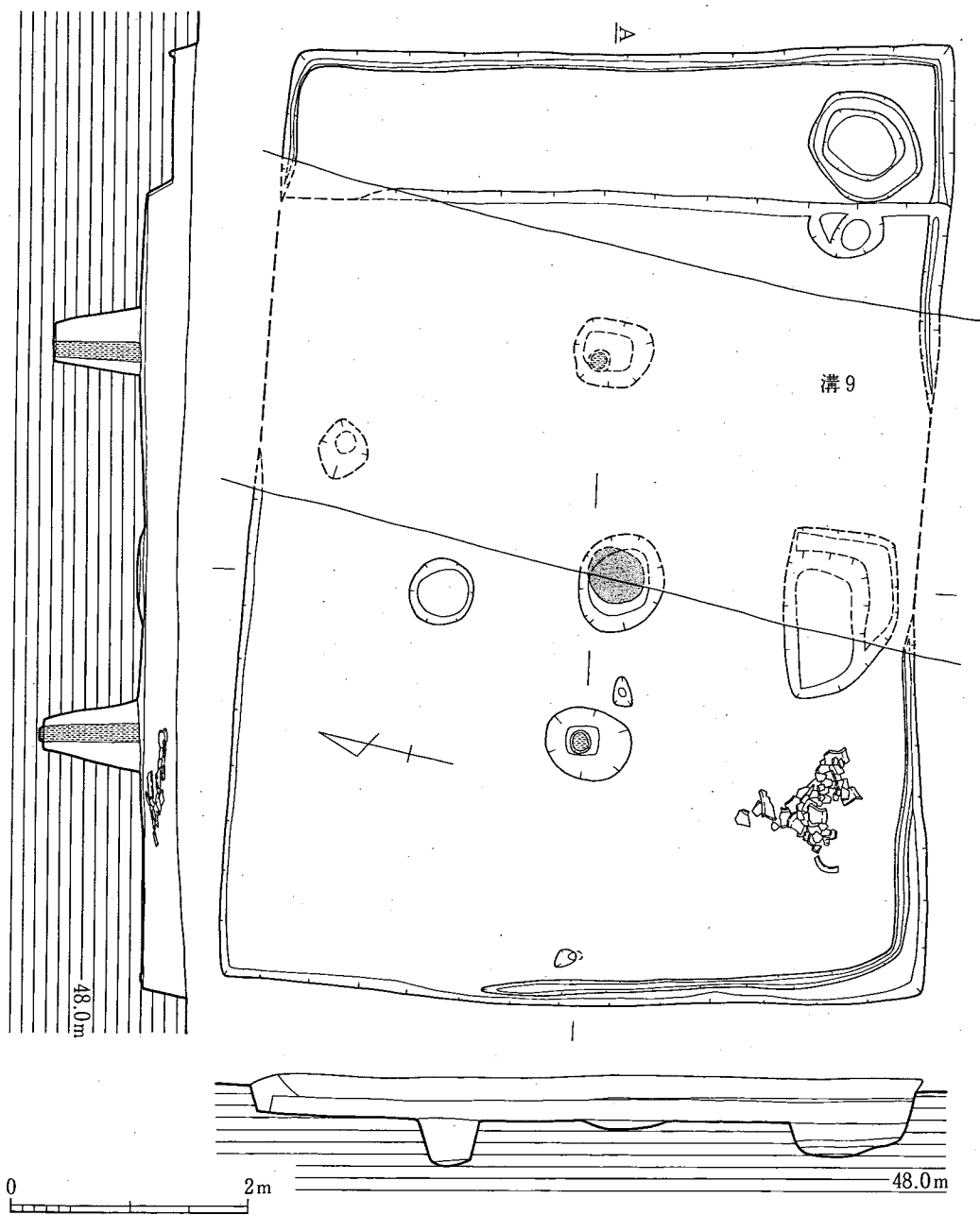
75号竪穴住居跡 (図版55 第119図)

調査区中央北部に位置し、74号竪穴住居跡に大部分を切られるため残りが悪い。長辺6.5m、短辺4.45mの長方形2本柱竪穴住居跡である。炉・屋内土坑は切られているが、北側主柱穴の底面と思われるものが、74号竪穴住居跡の貼床下から検出された。そのプランが楕円形で、柱痕も検出されなかったので、柱は抜かれていると思われる。地山削り出しのベット状遺構が南東隅につく。貼床は硬化しており、南隅の床面上から底部と口縁部の欠損した壺が出土している。14号掘立柱建物跡との切り合い関係は、検出段階で確認できたので確実で、柱6に切られる。

遺物 (第123図、第237図44) 1は床面直上から出土した壺の胴部で、ハケは縦位のみだが丁寧なつくりである。胴中位に最大径を持つ。胎土が異質なので搬入品の可能性がある。3は小型の甕でつくりが悪く、焼成後の底部穿孔が見られる。4は中期の系統を引く小型の鉢である。5は貼床上から出土した小型の鉢で、つくりが悪い。埋土中から頁岩製砥石(第237図44)が出



第119图 74·75号竖穴住居跡实测图 (1/60)



第120図 76号竖穴住居跡実測図 (1/60)

土している。

(秦)

76号竪穴住居跡 (図版56 第120図)

調査区中央北部に位置し、9号溝に中央部を切られる。長辺8.0m、短辺5.65mの大型方形2本柱竪穴住居跡である。主柱穴は略方形で、抜き取り穴がなく、径18cmの柱痕が明確に検出された。東壁のベット状遺構は地山削り出しだが、その上に貼床が見られた。東南隅に貯蔵穴状のピットがある。屋内土坑は南壁中央に位置している。貼床は硬化しており、周溝も検出された。北西隅に土器の一括投棄が見られる。77・78号竪穴住居跡のプランは、貼床下から検出されたので切り合い関係は明白である。

遺物 (第123・131図 第230図15 第241図6) 6は複合口縁壺の口縁部、7・8・9は甕の口縁部で、10・11は壺の底部と思われる。12は瀬戸内系高杯の口縁部で、胎土は精良ではない。13は低脚の高杯の脚部と思われるが、胎土は精良ではない。14は小型の短頸壺で、つくりがよく調整は丁寧であるが煮沸されており、外面に煤が付着している。また、内蓋をしたらしく口縁内面上半にも変色が見られる。祭祀など特殊な目的で使用されていたのかもしれない。また、胎土が異質なので搬入品の可能性がある。15は鉢でつくりがよい。16は小型の鉢で、77号竪穴住居跡の上位出土のものと同接合する。17は鼓形器台の口縁部で、白黄褐色の異質な胎土なので搬入品の可能性がある。18は長頸壺の口縁部で、器形が異質で、肥前系の土器に見られる胎土であることから搬入品の可能性がある。77・78号竪穴住居跡上位出土のものと同接合する。19はミニチュアの杯で、2次焼成を受けている。7～9・14・15・17は一括投棄された土器である。また、埋土中から輝緑凝灰岩製石庖丁片 (第230図15)、床面下から黒曜石製打製石鏃 (第241図6) が出土している。

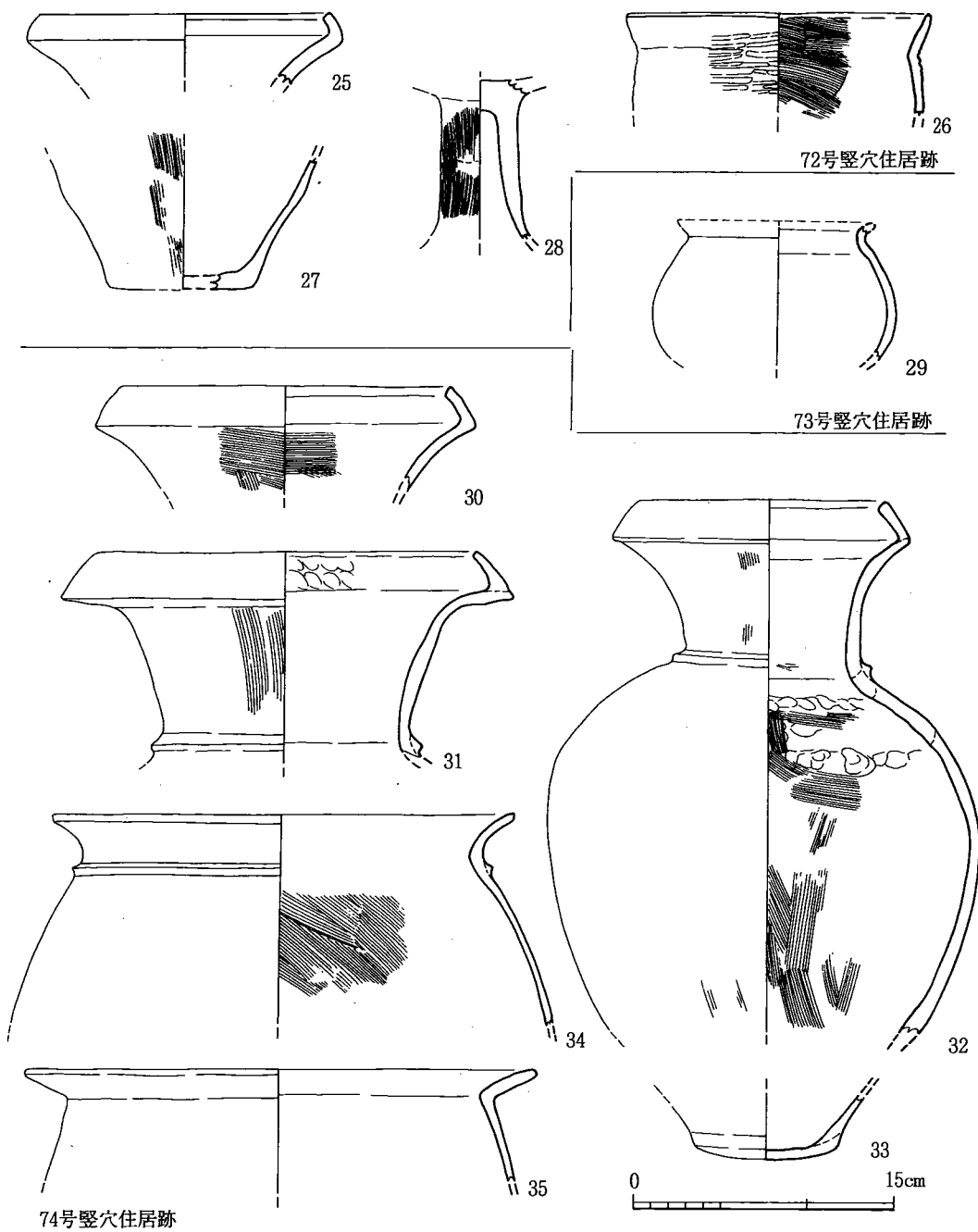
(秦)

77号竪穴住居跡 (図版56 第124図)

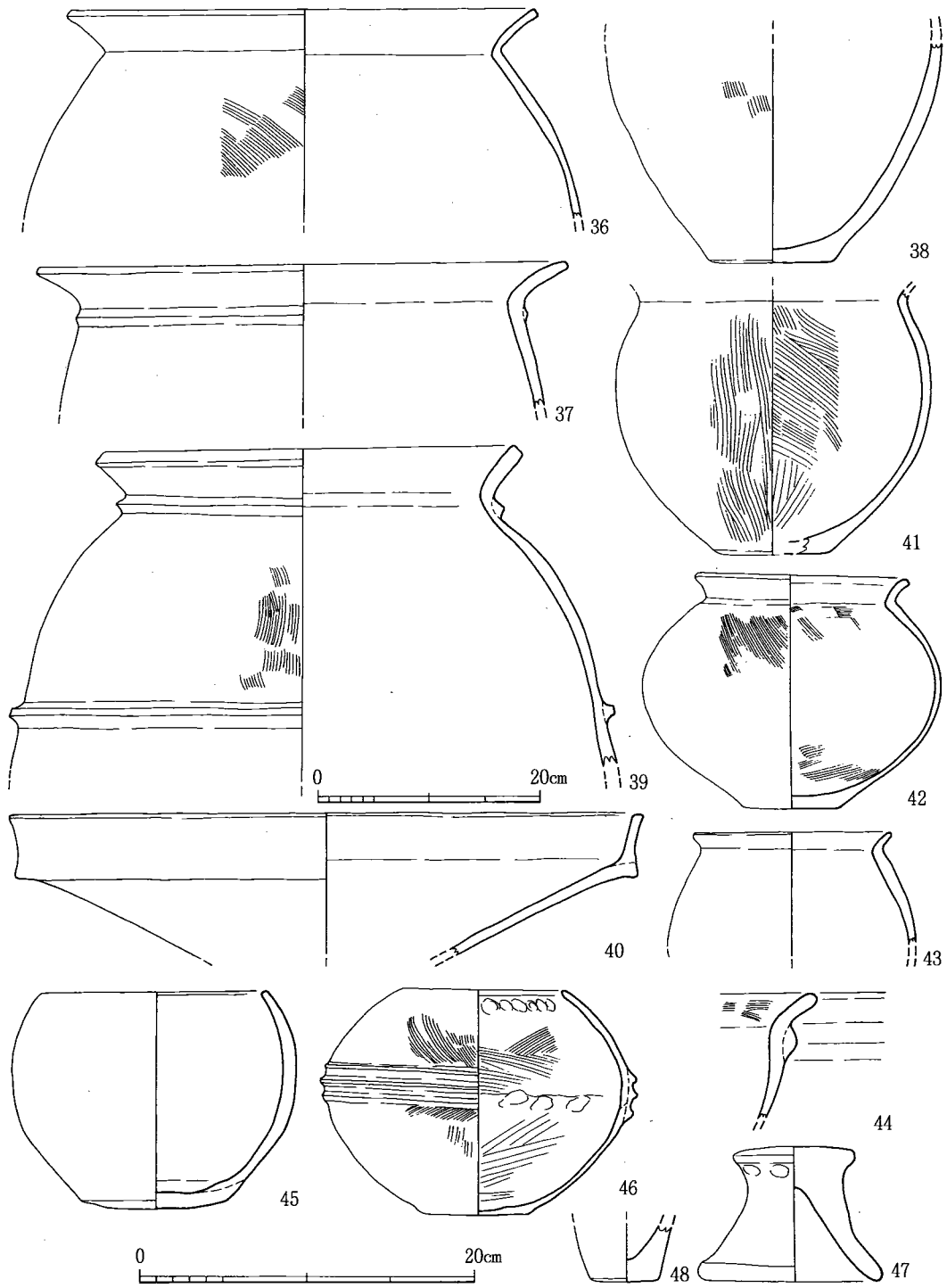
調査区中央北部に位置し、9号溝と76・78号竪穴住居跡に大部分を切られ、残りが悪い。長辺は、主柱穴間に中点をとると4.4mを測り、短辺の5.45mより短いので、北壁にベット状遺構のつく正方形プランが推察される。主柱穴は北側が不整形、南側が楕円形で、柱痕が検出されていないことから、柱は抜かれていると思われる。地山削り出しのベット状遺構が南壁につく。屋内土坑は溝に切られて検出されなかった。78号竪穴住居跡との切り合い関係は、9号溝の壁に明瞭に観察された。21号掘立柱建物跡を切っている。遺物は実測可能なものがない。(秦)

78号竪穴住居跡 (図版56 第124図)

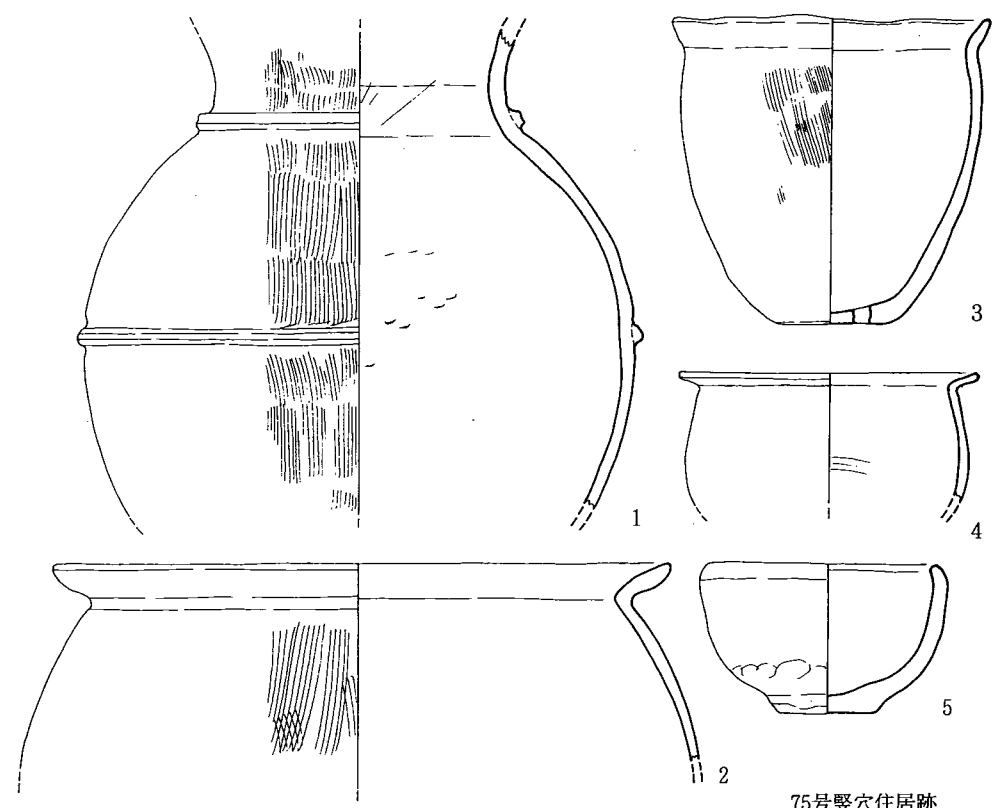
調査区中央北部に位置し、9号溝と76号竪穴住居跡に大部分を切られるため残りが悪い。76号竪穴住居跡床下から北壁が検出されたので、長辺は5.6mを測る。短辺は、主柱穴・炉を中点



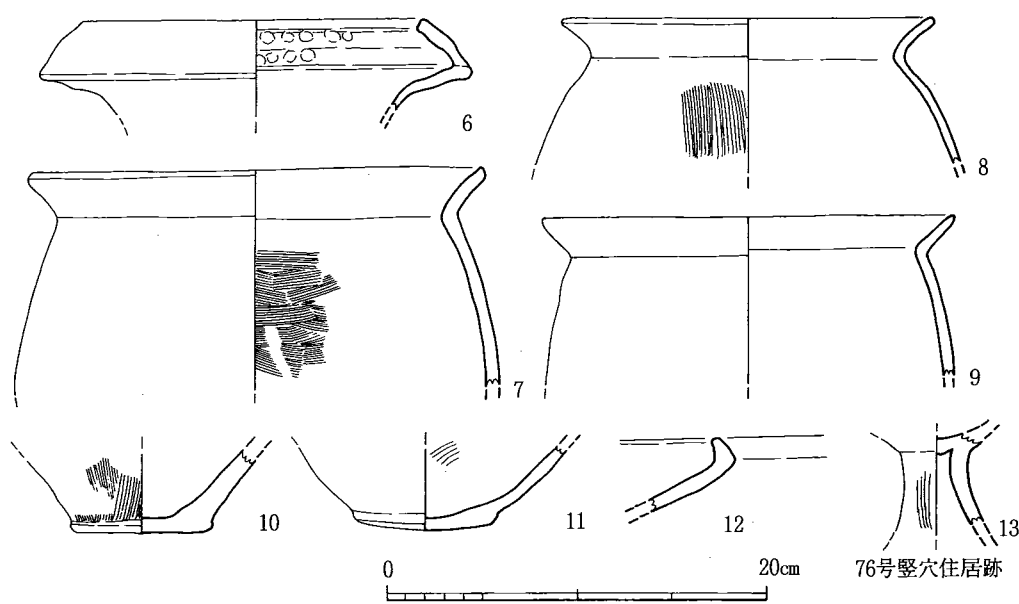
第121图 72~74号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)



第122図 74号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4、39は1/6)

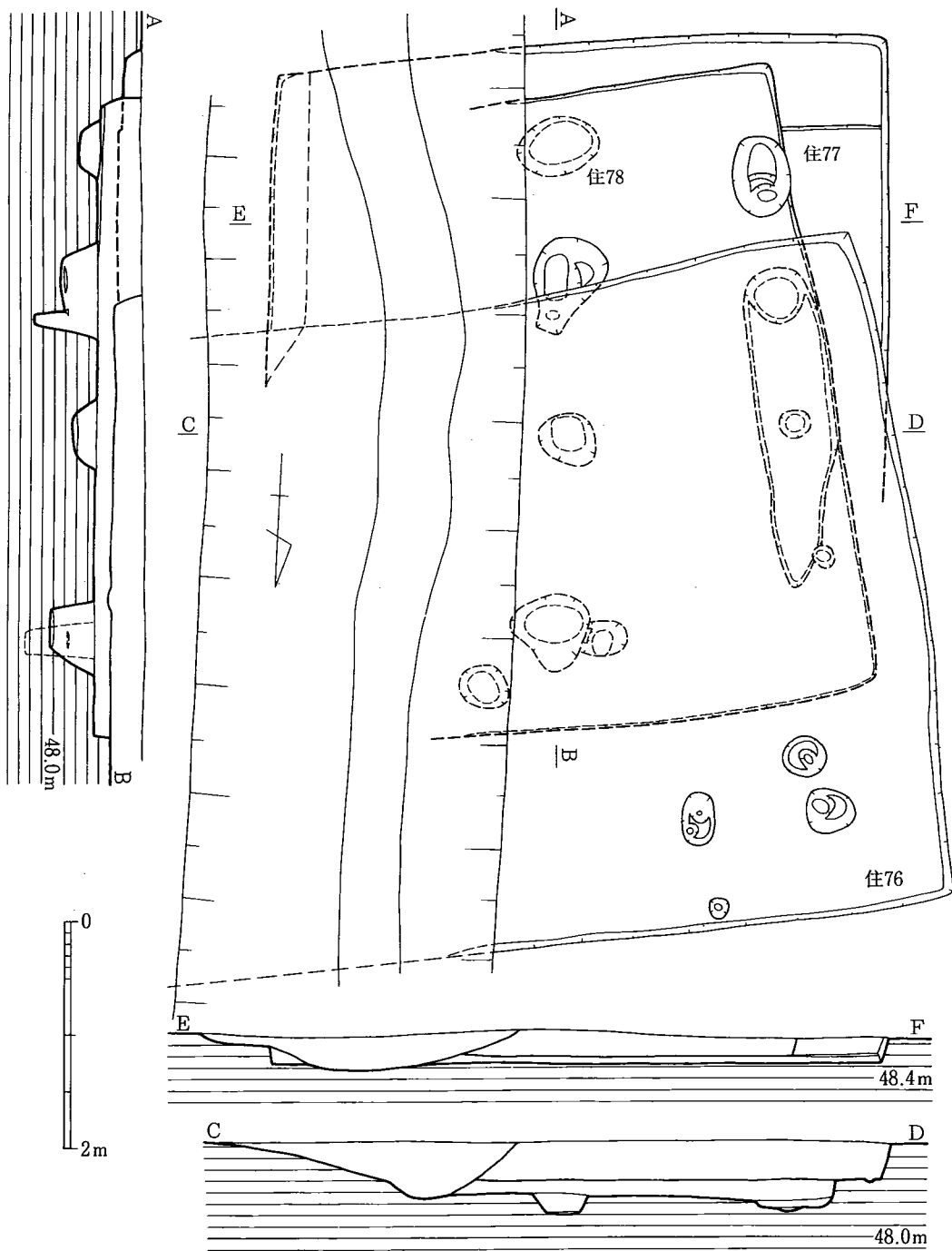


75号竖穴住居跡



76号竖穴住居跡

第123图 75・76号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)

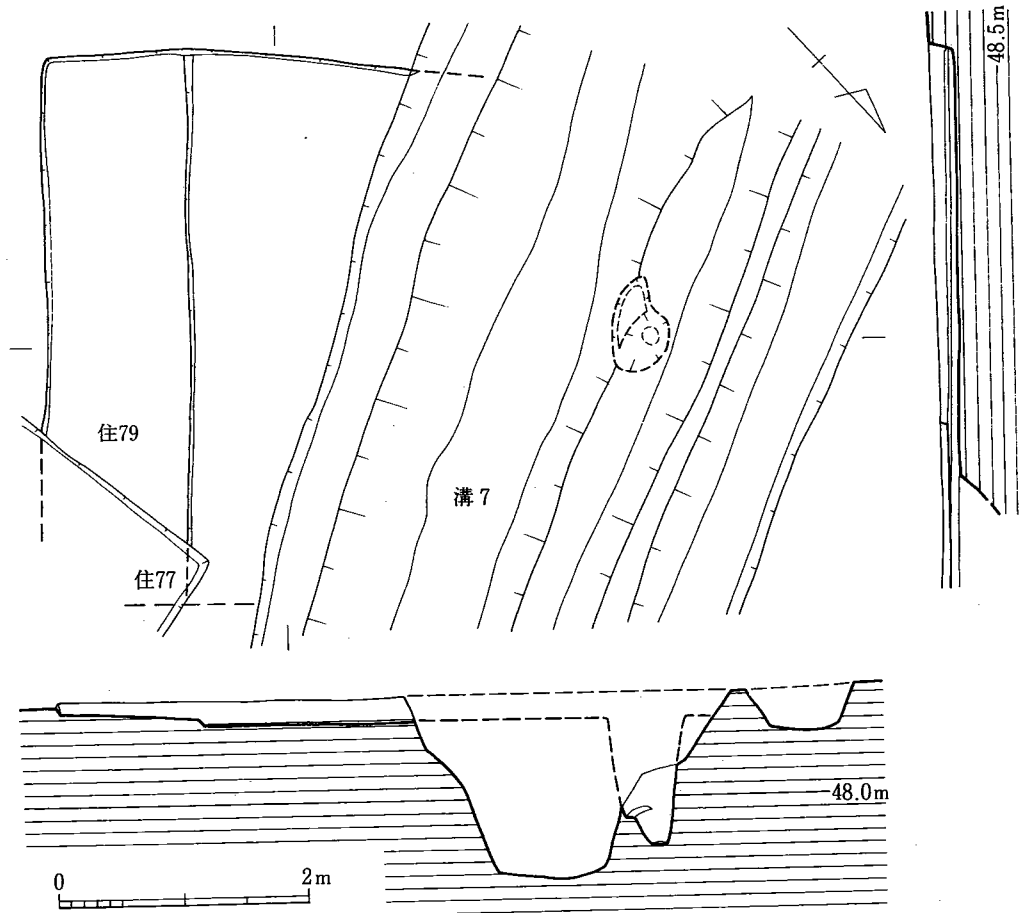


第124图 77·78号竖穴住居迹实测图 (1/60)

とすると、4.8mを測るので、方形2本柱竪穴住居跡を復元できる。主柱穴は平面プランが2方向に突出をもつ不整形である。南側主柱穴は西壁にテラスがついて広がっており、柱痕も検出されなかったので、柱は抜き取られていると考えられる。屋内土坑・炉は切られている。西壁沿いに溝状の遺構があったが、76号竪穴住居跡に切られる部分は、貼床まで失われていることから、床下構造と思われる。77号竪穴住居跡との切り合い関係は、9号溝の壁に明瞭に観察された。遺物は実測可能なものがない。 (秦)

79号竪穴住居跡 (図版56 第125図)

調査区中央北側に位置し、6・7号溝に切られているため大半が失われている。溝の北側に北壁が出ると思われたが、検出されなかった。そのため、南隅が確認されたのみで、北側主柱

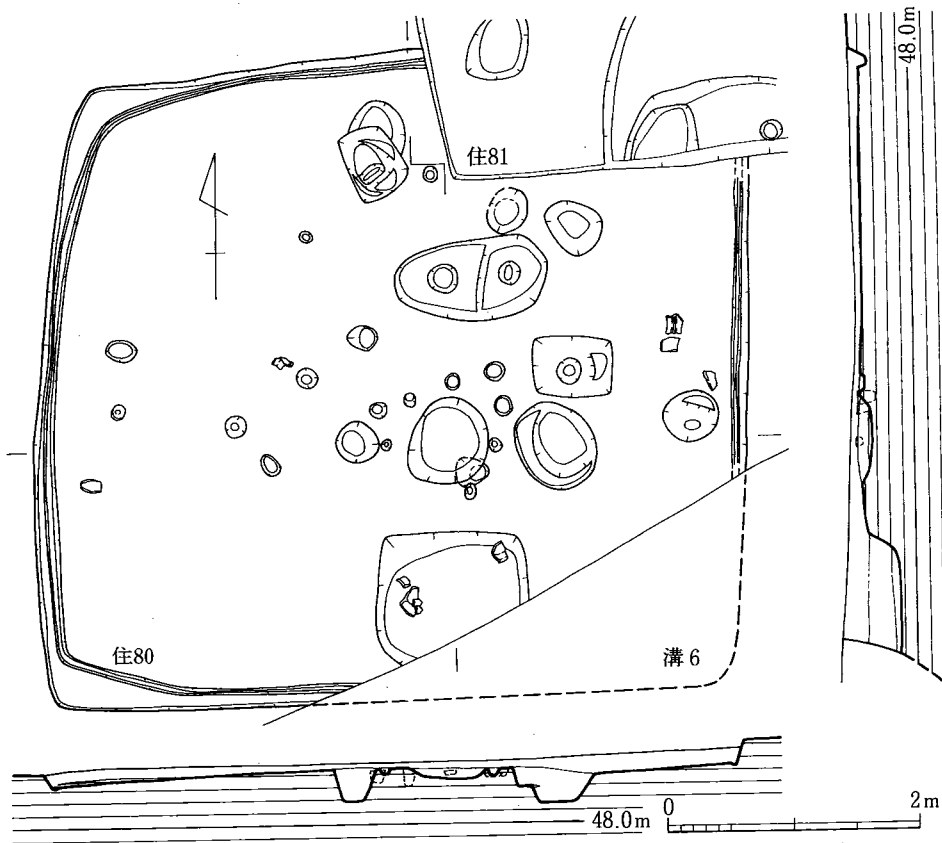


第125図 79号竪穴住居跡実測図 (1/60)

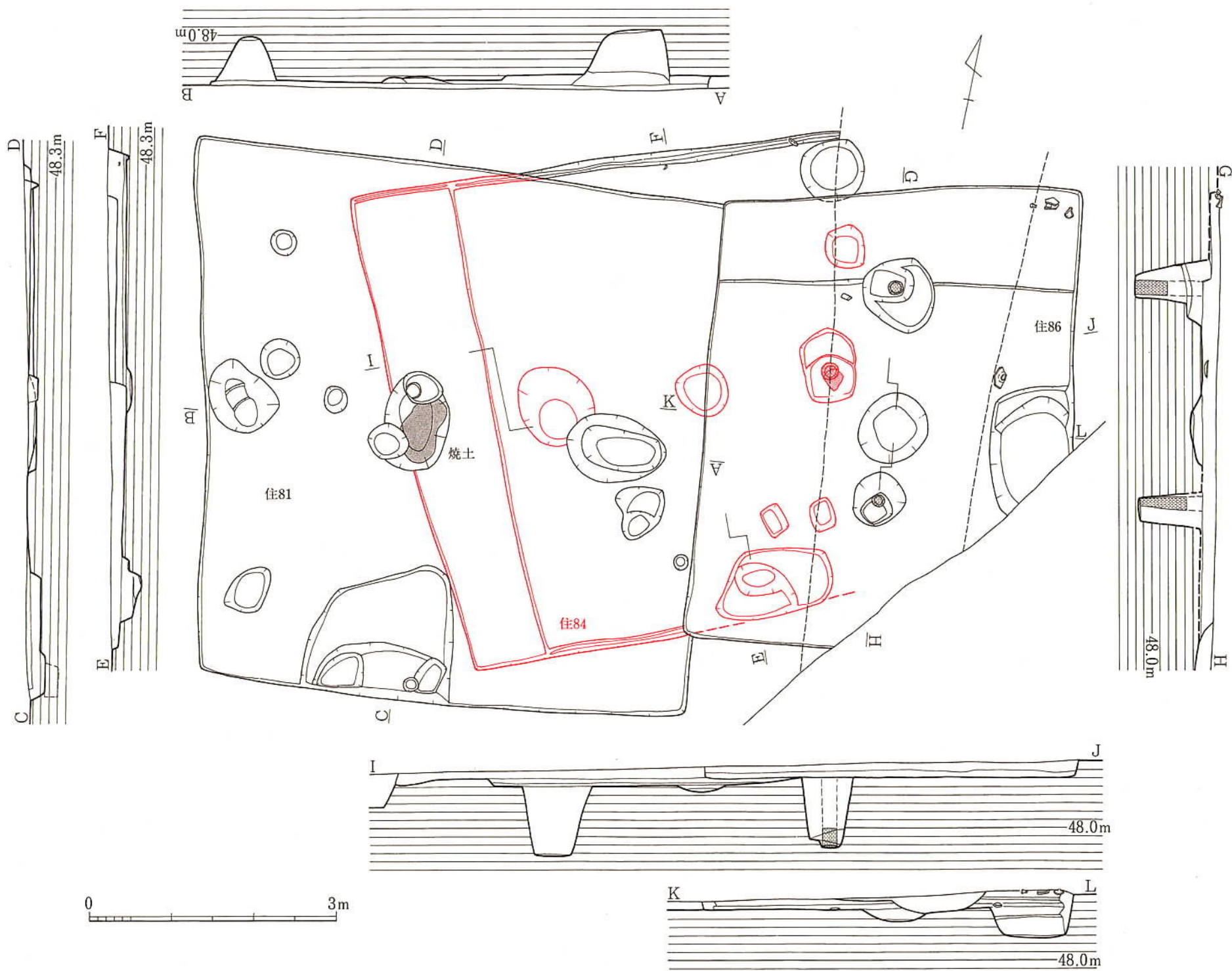
穴と思われるものが7号溝の北壁に検出されたことから、これを中点とする短辺4.7 mの長方形2本柱竪穴住居跡を推定できる。主柱穴が平面不整形で、西側に大きなテラスがつき、柱痕が検出されなかったことから、柱は抜かれている可能性が高い。東壁にベット状遺構が見つが、46・97号竪穴住居跡との切り合い部分のみ貼土で、他は地山削り出しであった。その他の屋内施設は、溝に切られているために検出されなかった。非常に浅いため遺物もわずかである。実測可能な遺物がなかったが、76号竪穴住居跡に切られ、46・97号竪穴住居跡を切るのも、その間の時期である。 (秦)

80号竪穴住居跡 (図版57・58 第126図)

調査区北側中央に位置し、6号溝に南東隅を、8号溝に西部を切られる。長辺5.6m、短辺5.1mを測る。平面プランは正方形だが、周溝は隅が湾曲しているのも、隅丸方形プランとした方が妥当であろう。主柱穴は明確には検出されなかったのも、炉と屋内土坑の配置から推定した。東側主柱穴は平面プランが西側にテラスをもって広がり、柱痕が検出されなかったのも、柱は



第126図 80号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第127图 81·84·86号竖穴住居跡实测图 (1/60)

抜き取られた可能性が高い。埋土にも Aso-4 のブロックが多く混入しており、抜き取り穴の排土を含めて埋め戻したことが推定される。屋内土坑は南壁中央に位置する。炉の周りには小ピットがめぐる。貼床は硬化しており。壁の残りが悪いが、遺物は床面近くから多く出土している。貼床を剥がすと西側が溝状に掘り下げられた。51・81号竪穴住居跡に切られている。

遺物（第131図 第237図45）20は小型の袋状口縁壺で赤褐色を呈する。21は小型の甕の口縁部でつくりは丁寧、22は小型の甕で煮沸使用されており、23は中型甕の口縁部、24は鉢で、25は大型甕の口縁部で、26はミニチュアの甕であろう。27は精良な胎土をもつ小型器種の底部である。屋内土坑中から頁岩製砥石（第237図45）が出土している。（秦）

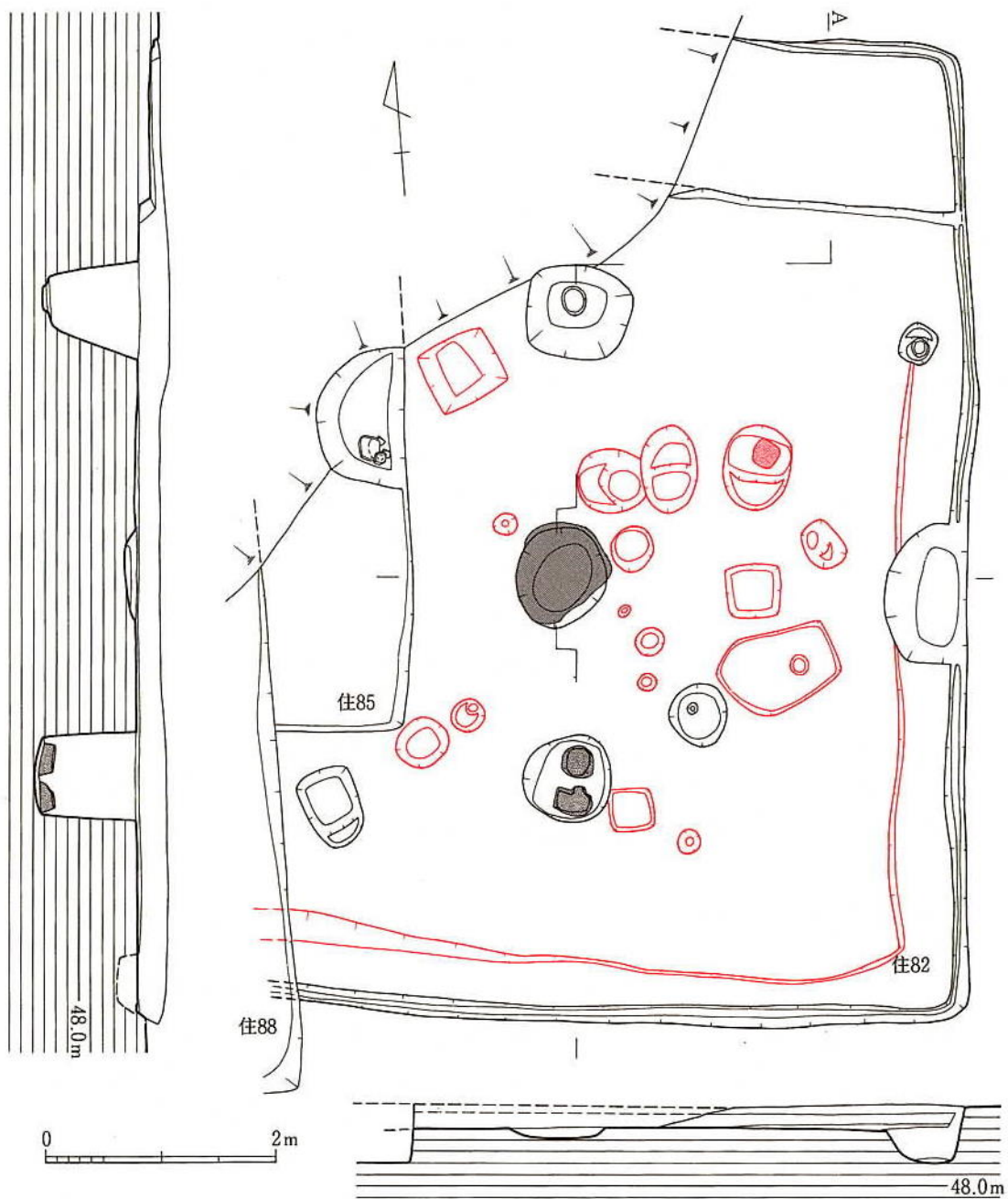
81号竪穴住居跡（図版58、第127図）

調査区中央北端に位置し、近世の道路状遺構に切られている。壁はわずかしか残ってなく、検出時にすでに貼床の一部や炉が露出していた。長辺6.5m、短辺6.2mを測るが、プランが正方形に近く、かつ、支柱穴・炉を通る主軸のほうが短いので、東西壁にベット状遺構のつく可能性が高い。しかしながら、削り出しベットらしく、壁が残っていないため確認されなかった。支柱穴は平面楕円形で、東側支柱穴は西壁が緩やかに立ち上がりながら広がっており、西側支柱穴は北西側に階段状テラスをもっている。柱痕も検出されなかったので、柱は抜かれているであろう。支柱穴埋土にも Aso-4 のブロックが多く混入しており、排土を含めて埋め戻したことが推定される。屋内土坑は南壁中央に検出され、短辺底面に略方形のピットが見られる。貼床は硬化している。80・84号竪穴住居跡を切り、8号掘立柱建物跡・86号竪穴住居跡に切られている。

遺物（第132図、第237図46）1は壺の頸部、2は小型壺の底部で、西側支柱穴から出土した。3は甕の底部で、外面の広範囲に煮沸使用による赤変が見られ、4は大型鼓形器台の口縁部で、屋内土坑から出土した。埋土中から頁岩製砥石（第237図46）が出土している。（秦）

82号竪穴住居跡（図版59・62、第128図）

調査区中央北端に位置し、北側斜面の崩落と削平のため遺構の東端が失われている。炉や支柱穴を中点とすると、長辺8.7m、短辺6.8mの大型長方形2本柱竪穴住居跡が推定できる。北壁側にベット状遺構が検出されたが、西壁側は削平されているため不明である。支柱穴は一辺75～90cmの略方形である。柱痕は検出されなかったが、抜かれた痕跡はなく、柱の沈み込みの径で18cmを測る。南側支柱穴の底面には一辺20～30cmの平面方形で、厚さ15cm前後の粘土が2個、間を10～15cmあけて、竪穴住居跡の長軸と同方向に敷いてあった。これは、掘立柱建物跡と同様に、その上に礎板か柱を乗せたものと考えられる。東壁沿いに屋内土坑と思われるものが検出された。貼床はあまり明確でなかったが、壁に沿って周溝が検出されたので、床面の高



第128图 82号竖穴住居跡实测图 (1/60)

さが把握できた。また、周溝の下から幅50～70cm程の溝が検出されたが、これは、排水を意図した床下構造と思われる。西壁が残っていないため切り合い関係は確認できなかったが、85・88号竪穴住居跡を切ると思われる。

遺物（第132図 第237図47 第241図7 第242図6）5は壺の胴部で、東側支柱穴から出土している。7は小壺の底部でつくりが悪い。6・9はピット5から出土しており、同一個体の可能性がある。高杯の杯部と脚部で、胎土は精良だが異質なので搬入品の可能性がある。貼床下のピットからの出土なので、本竪穴住居跡に伴わないかもしれない。8は鋤先口縁の高杯の杯部で、口縁は接合位置で剥落しているため、擬口縁になっている。10は小型の鼓形器台である。埋土中から頁岩製砥石（第237図47）・黒曜石製打製石鏃（第241図7）が、貼床内から磨石片（第242図6）が出土している。（秦）

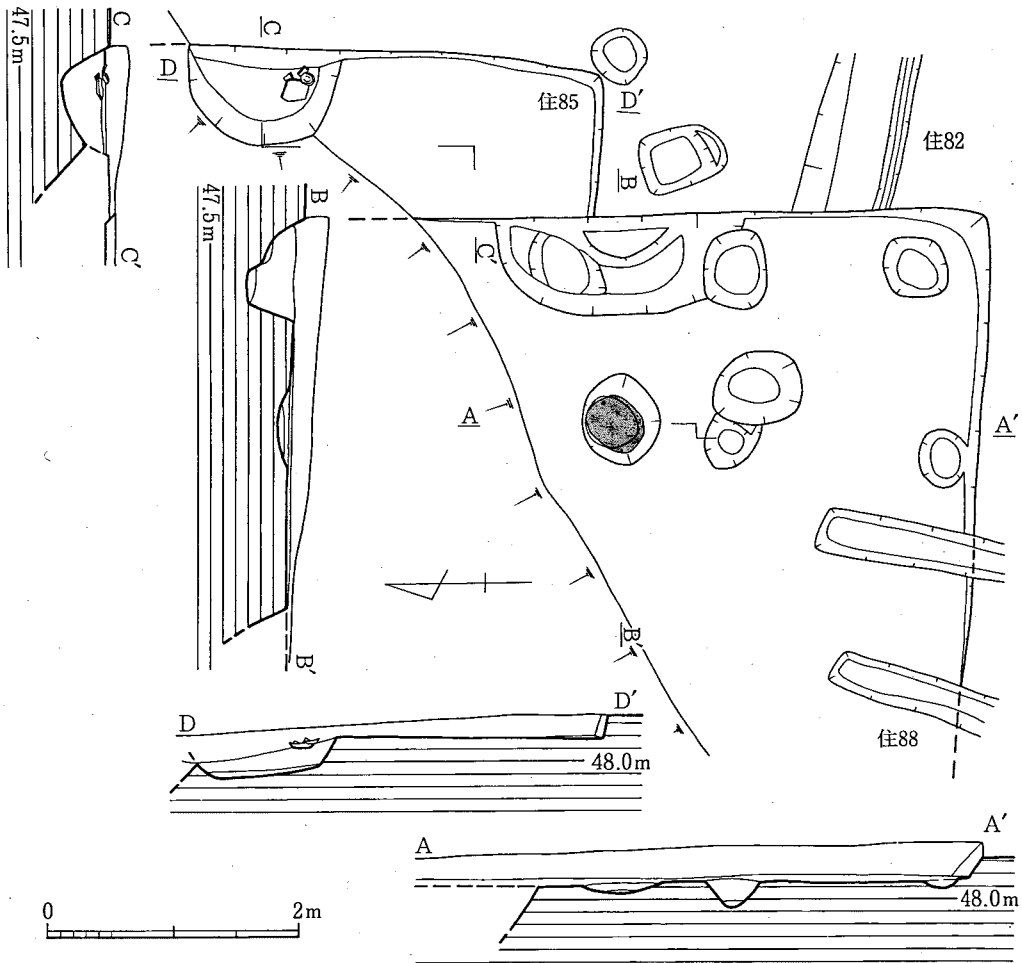
84号竪穴住居跡（図版66～62 第127図）

調査区中央北端に位置し、9号溝と86号竪穴住居跡に切られているため、東壁が検出されていない。そのため長辺の長さは、屋内施設の配置から、東側にベット状遺構がつけば7.4m、つかなければ6.0mを測り、短辺は5.9mなので、前者なら長方形、後者なら正方形プランの2本柱竪穴住居跡を復元できる。支柱穴は北西が緩やかに立ち上がりながら広がっており、柱痕が検出されなかったので、柱は抜かれていると思われる。東側支柱穴は下位で径19cmの柱痕が検出されているので、柱は途中で切り取られたと考えられる。また、底面には径22cmの略方形の薄い粘土が見られたが、柱痕径とほぼ等しいことから、柱根の底面の水分のため、地山が粘土化したものであろう。屋内土坑は南壁に検出され、底面北側に長軸方向の略方形ピットが見られる。かなり削平されているが、西壁に地山削り出しのベット状遺構がつく。

遺物は床面直上から出土した刀子（第243図18）と凝灰岩系石材の石庖丁（第230図16）、蛇文岩製勺玉（第247図222）、ガラス玉（第247図203）以外は実測可能なものがなく、時期は不明だが、本遺構を切る81・86号竪穴住居跡以前である。（秦）

85号竪穴住居跡（図版59・62・63 第129図）

調査区中央北端に位置し、北側斜面のため大部分が失われている。82号竪穴住居跡の床面精査時に検出されており、切り合い関係は不確定だが、82号竪穴住居跡に切られると思われる。遺構の南東隅が検出されたのみだが、屋内土坑を中点とすると、長辺5.2mの長方形プランが推定できる。貼床の硬化は南側には広がっていなかったため、ベット状遺構が南壁についていた可能性があるが、明確には検出できなかった。また、本竪穴住居跡の炉と思われるものが北側斜面にかかっていたが、崩落の危険があるため図化できなかった。東壁に屋内土坑が検出された。88号竪穴住居跡に切られる。

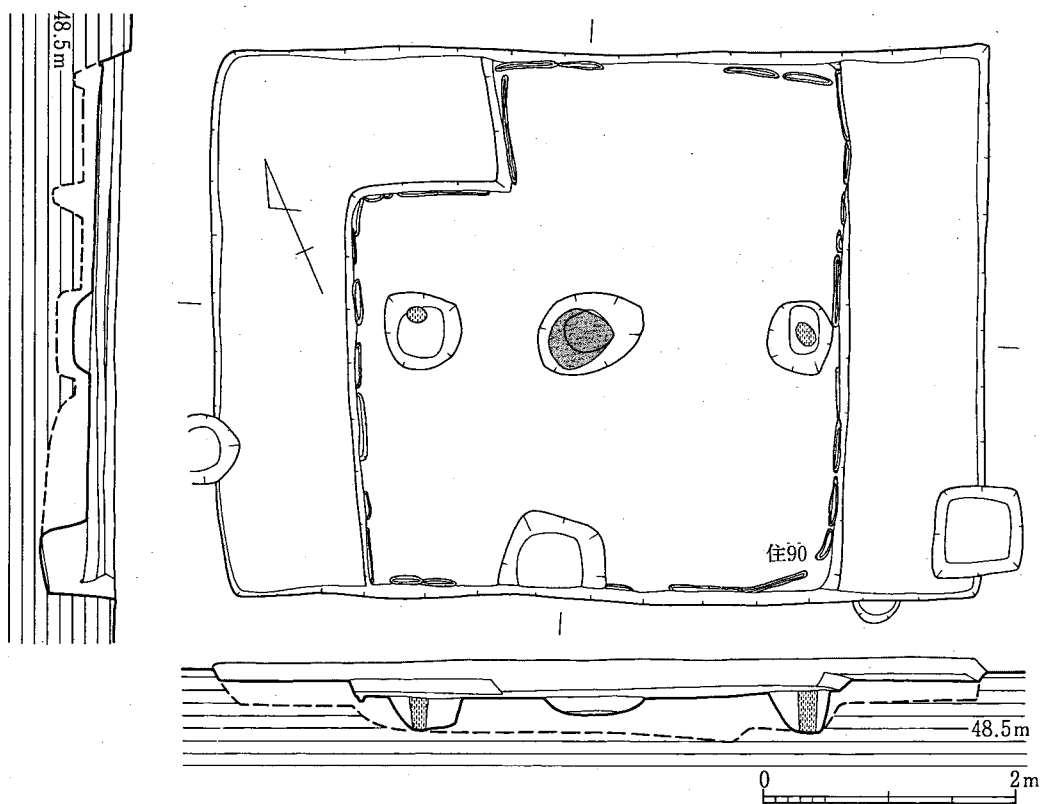
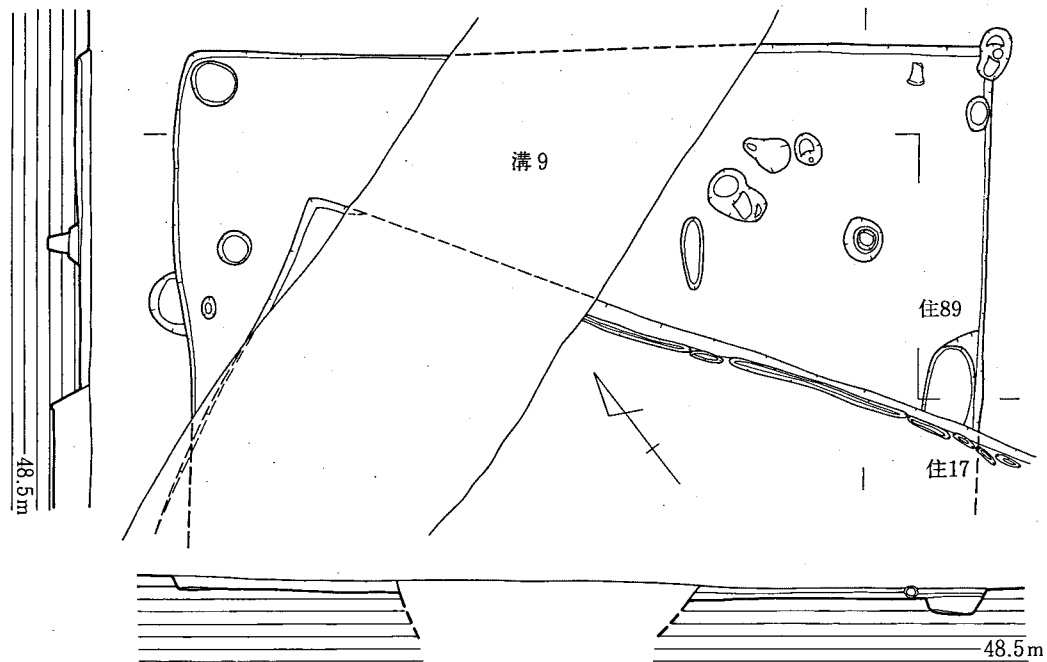


第129図 85・88号竪穴住居跡実測図 (1/60)

遺物(第132図)13は小型甕で屋内土坑から出土している。2次焼成を受けているが、煮沸使用によるものではない。(秦)

86号竪穴住居跡 (図版60~62 第127図)

調査区中央北端に位置し、6号溝に切られているため、東南隅が失われている。長辺5.5m、短辺は4.4mの方形2本柱竪穴住居跡である。北側主柱穴は東壁に大きなテラスをもち、南側主柱穴は北壁上端が緩やかに立ち上がる。テラスの高さより下から径16~19cmの柱痕が検出されているので、柱は根元を残して抜かれていると思われる。底面には略方形の薄い粘土が見られ



第130図 89・90号竖穴住居跡実測図 (1/60)

たが、柱痕径とほぼ等しいことから、柱根の底面の水分のため、地山が粘土化したものである。屋内土坑は東壁中央に検出され、北壁にベット状遺構がつくが、84号竪穴住居跡と切り合う西側は作り付けで、東側は削り出しである。81・84・95号竪穴住居跡を切っている。

遺物（第132図、第231図17）14は広口壺の口縁部で、胎土から肥前系の搬入品の可能性がある。15は甕棺の頸部、16は壺の胴部、17は高杯の杯部、18は鼓形器台で、器形が特異で胎土が異質なので搬入品の可能性がある。19は杵形器台で突起の対面が使用のため赤変している。北側支柱穴よりほぼ完形の輝緑凝灰岩製石庖丁（第231図17）が出土している。（秦）

87号竪穴住居跡（図版62・63 第107図）

平坦面中央部に位置し、64号竪穴住居跡に西半分を切られているため、西壁が検出されていない。長辺は6.7mで、短辺は支柱穴を中点とすると、5.4mを測ることから、方形2本柱竪穴住居跡が推定できる。9号溝が中央を切っているので、炉や屋内土坑が失われている。南側支柱穴は径が大きく、柱痕が検出されていないことから、柱は抜かれていると思われる。北側支柱穴は確認できなかった。北壁につくベット状遺構は作り付けで、これと貼床を外すと、壁沿いに幅50～110cmの溝が現われた。これは排水のための床下施設であろう。11号掘立柱建物跡に切られる。

遺物（第133図 第241図8）1は小型甕の口縁部、2は中型甕の口縁で、3・4は甕の底部、5は鋤先口縁の高杯の杯部で、口縁は接合位置で剥落しており、擬口縁になっている。南側支柱穴埋土中からサヌカイト製打製石鏃（第241図8）が出土している。（秦）

88号竪穴住居跡（図版62 第129図）

調査区北端に位置し、北側斜面の崩落と削平のため北から西半分が失われている。遺構の南東隅が検出されたのみだが、屋内施設の配置から、長辺6m、短辺3.6mの長方形2本柱竪穴住居跡が推定できる。貼床の硬化が全面に広がっていたので、ベット状遺構は検出された範囲にはつかないといえる。南側支柱穴は南東にテラスがつき、柱痕が検出されなかったので、柱は抜かれているだろう。東壁に屋内土坑が検出された。85号竪穴住居跡との切り合いは明確で、これを切る。82号竪穴住居跡は、西壁が削平されていたため、本竪穴住居跡との切り合い関係は不確かだが、切られると思われる。

遺物（第133図 第247図220）6は甕の口縁部、7・8はの短頸壺で同一個体と思われる。9は小壺か鉢の底部、10は壺の底部である。6・7・8は屋内土坑から出土している。ガラス製勾玉（第247図220）が床面から出土している。（秦）

89号竪穴住居跡（図版26・62 第130図）

平坦面中央東部に位置し、9号溝と17号竪穴住居跡に切られているため、南壁が検出されていない。また、壁の残りも悪いため、本竪穴住居跡を切る遺構の底面からも屋内施設が確認されなかった。一辺6.5mの方形プランの竪穴住居跡を推定するのみである。遺物は床面から出土している。

遺物 (第133図) 11は甕の口縁部、12は鼓形器台で裾部が使用のため赤変している。(秦)

90号竪穴住居跡 (図版64・65 第130図)

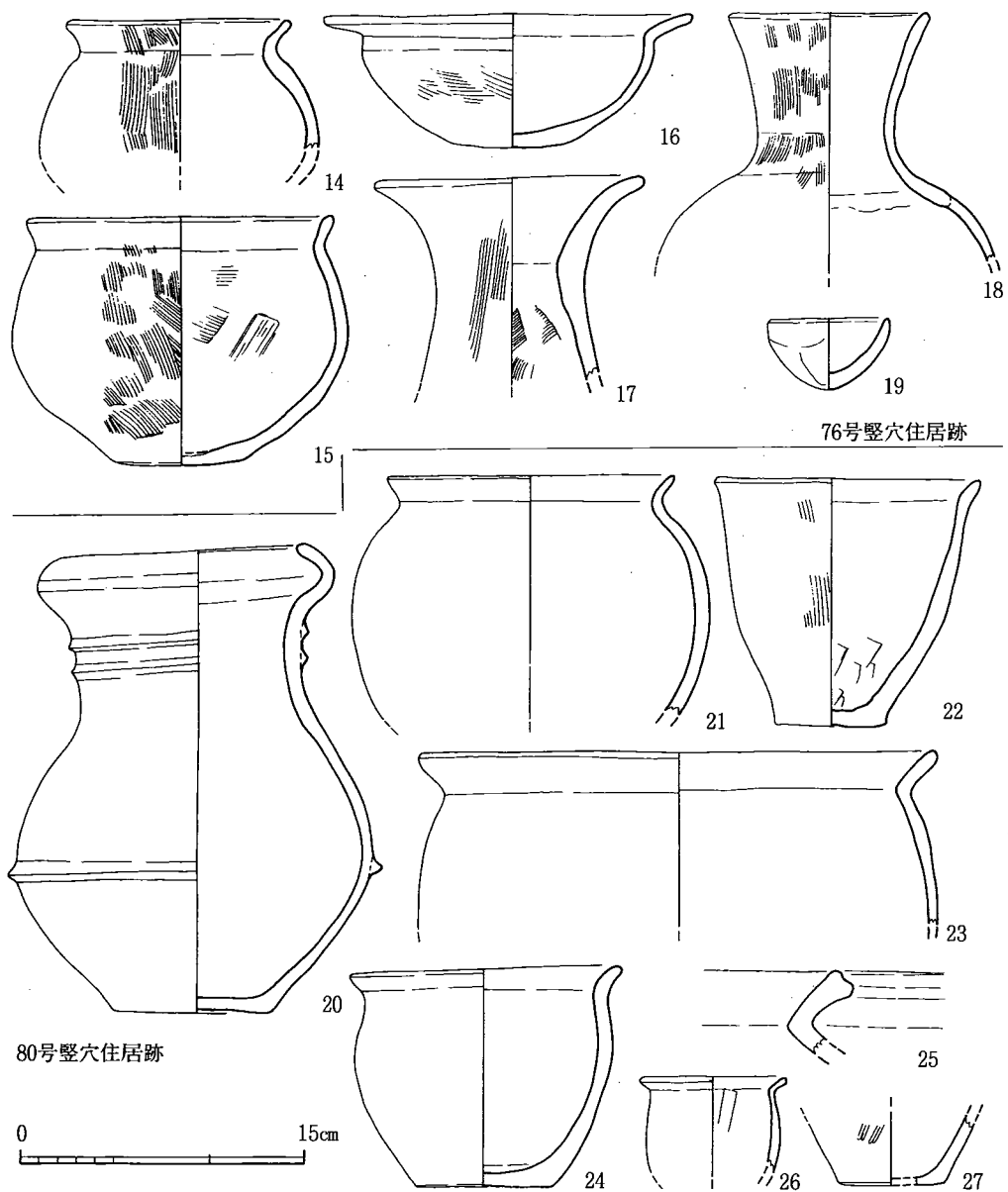
平坦面中央東部に位置し、24号掘立柱建物跡・9号溝に切れ、25・38号掘立柱建物跡を切る。長辺6.1m、短辺4.4mの長方形2本柱竪穴住居跡である。東・西壁に作り付けのベット状遺構がつく。主柱穴は、不明確だが平面略方形で、径12~20cmの柱痕が検出されており、柱は抜かれていない。屋内土坑は南壁中央に位置している。床面は硬化した貼床である。周溝は南北壁とベット状遺構沿いに検出されたが、短く、幅の狭いものがめぐっており、壁体保護のために打ち込まれた板材の痕跡と考えられる。

貼床下からは、主柱穴間を通る溝が検出されたが、17号竪穴住居跡の例のとおりで、床下構造であろう。本竪穴住居跡では、溝と主柱穴の切り合い関係が明確でなく、かつ、主柱穴の底面と溝の底面がほぼ一致しているので、床下に貫構造をもたせるための布掘りの可能性もある。北東からの一括廃棄が見られた。

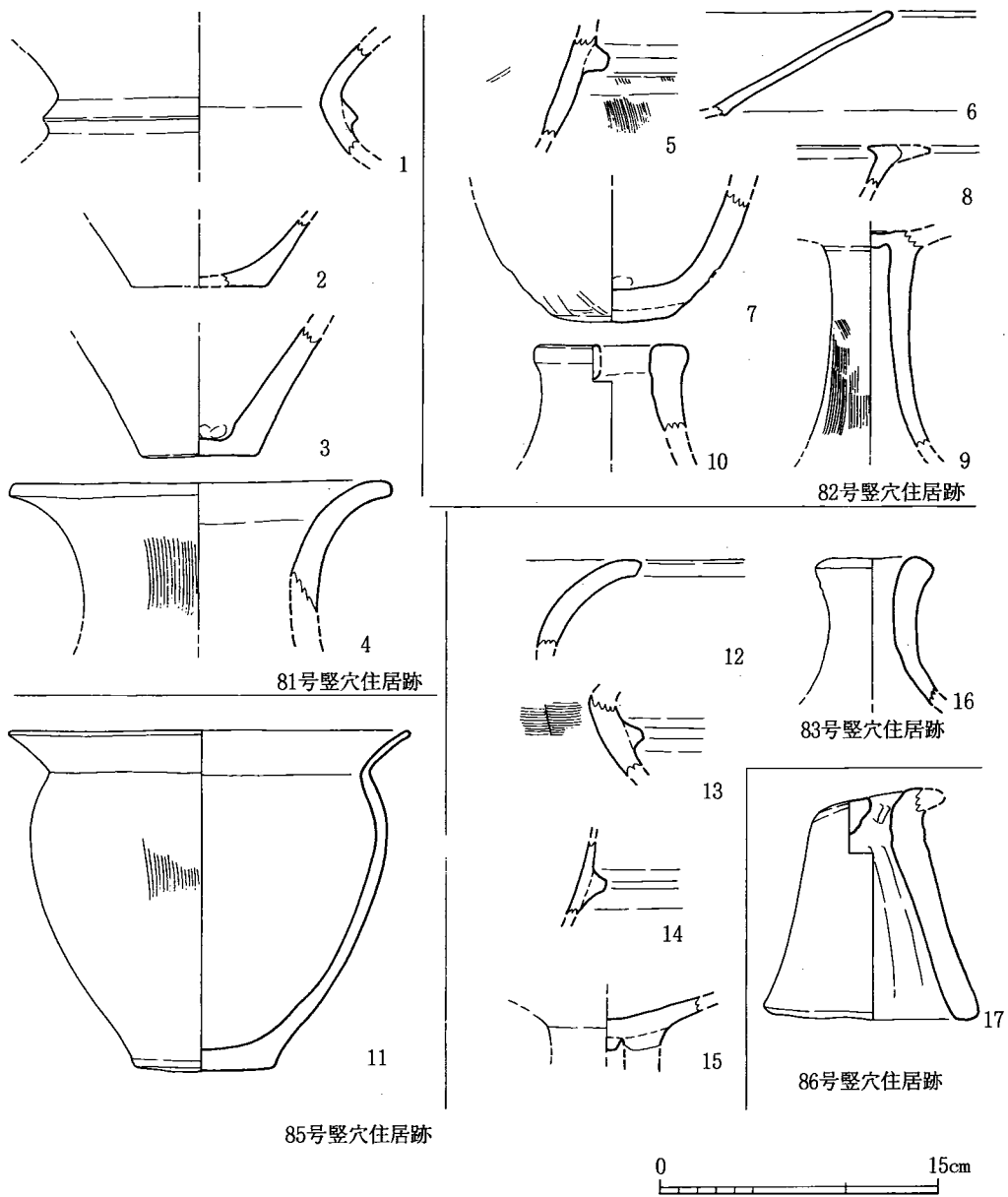
遺物 (第134~136図 第231図18) 1は完形の複合口縁壺で、2~5は単口縁壺の口縁部で、3については口縁の直立する甕の可能性もある。7・9は小壺の底部で、8・10・11は中型壺の底部で、12~14は中型甕の口縁部、15は肥前系の短頸壺で、つくりは丁寧。胎土も精良な精成品で、赤褐色を呈する。16は小型の壺の胴部で粗製品である。17は小型甕の口縁部で、頸部に沈線状の屈曲があり、煤が付着する。18は小型甕の底部で、つくりは悪いが内面の調整は丁寧である。19は中型甕の底部で、外底部のみ煤が付着していないので、鼓形器台の上に置いて煮沸したと思われる。20は中型甕の口縁部、21・22は同一個体の高杯で、脚部には3つの穿孔がある。23は台付鉢である。丁寧なつくりと精良な胎土の精成品で、赤褐色を呈す。24・25は鼓形器台で、後者は裾部に2次焼成の赤変が見られる。26は沓型支脚で、突起の対面が赤変している。27・28は身の深い杯で、後者はつくりが悪い。29・30は身の深い鉢で、前者には丁寧なハケが入る。31は大型の鉢で、口縁部は長径30.7cm、短径25.7cmの楕円形を呈する。器形から柶物の木製の鉢を模したものと想定される。ピット2より輝緑凝灰岩製石庖丁片(第231図18)が出土している。(秦)

91号竪穴住居跡 (図版66 第137図)

調査区中央東部に位置し、35・36号掘立柱建物跡に切られる。長辺5.8m、短辺4.7mの方形

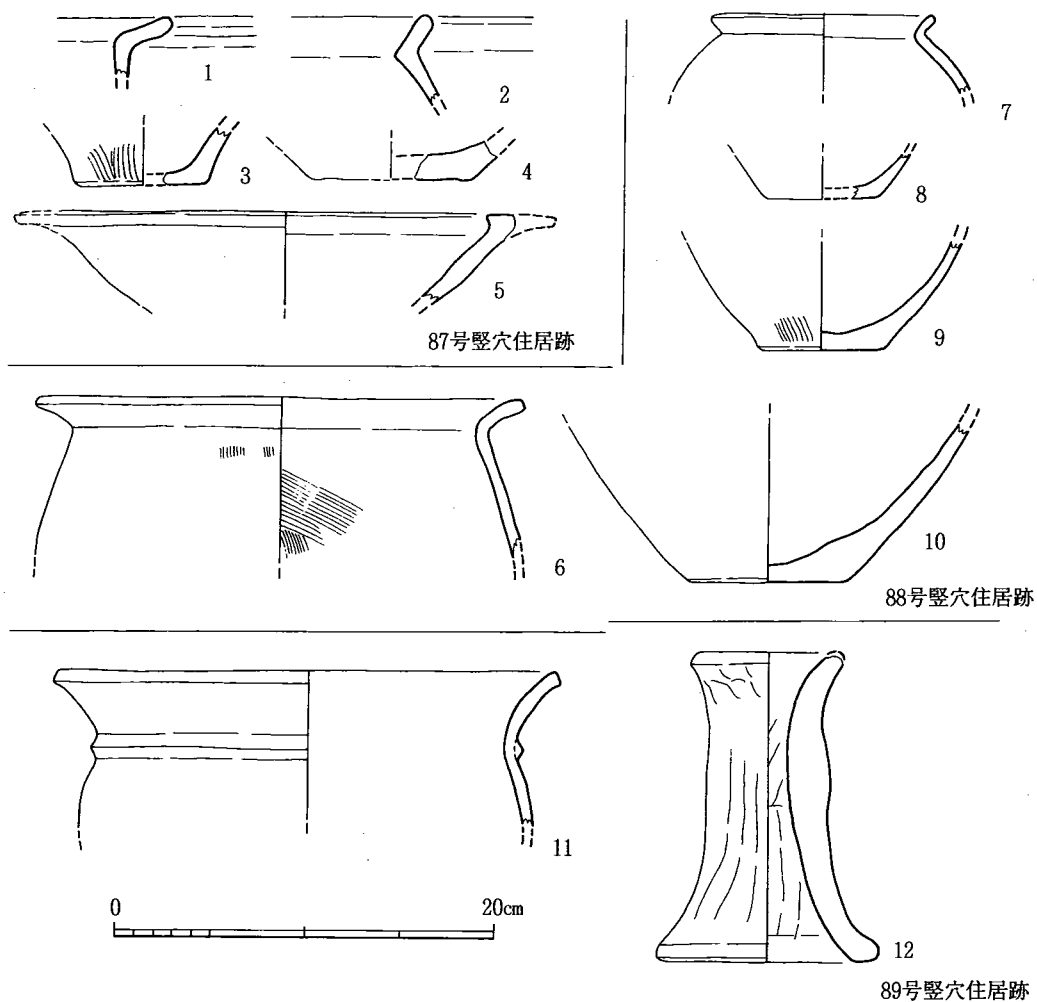


第131图 76·80号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)

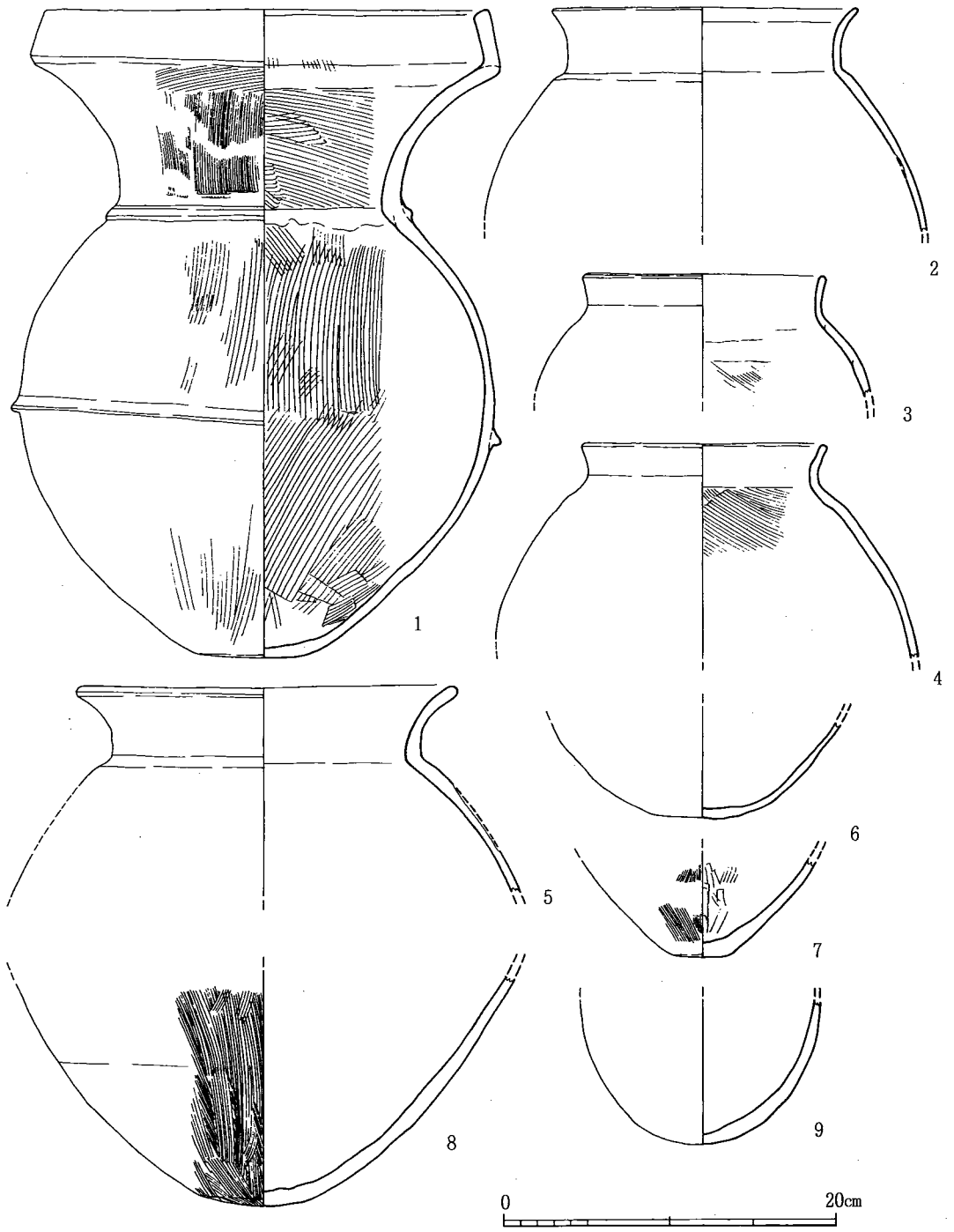


第132图 81~83·85·86号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/4)

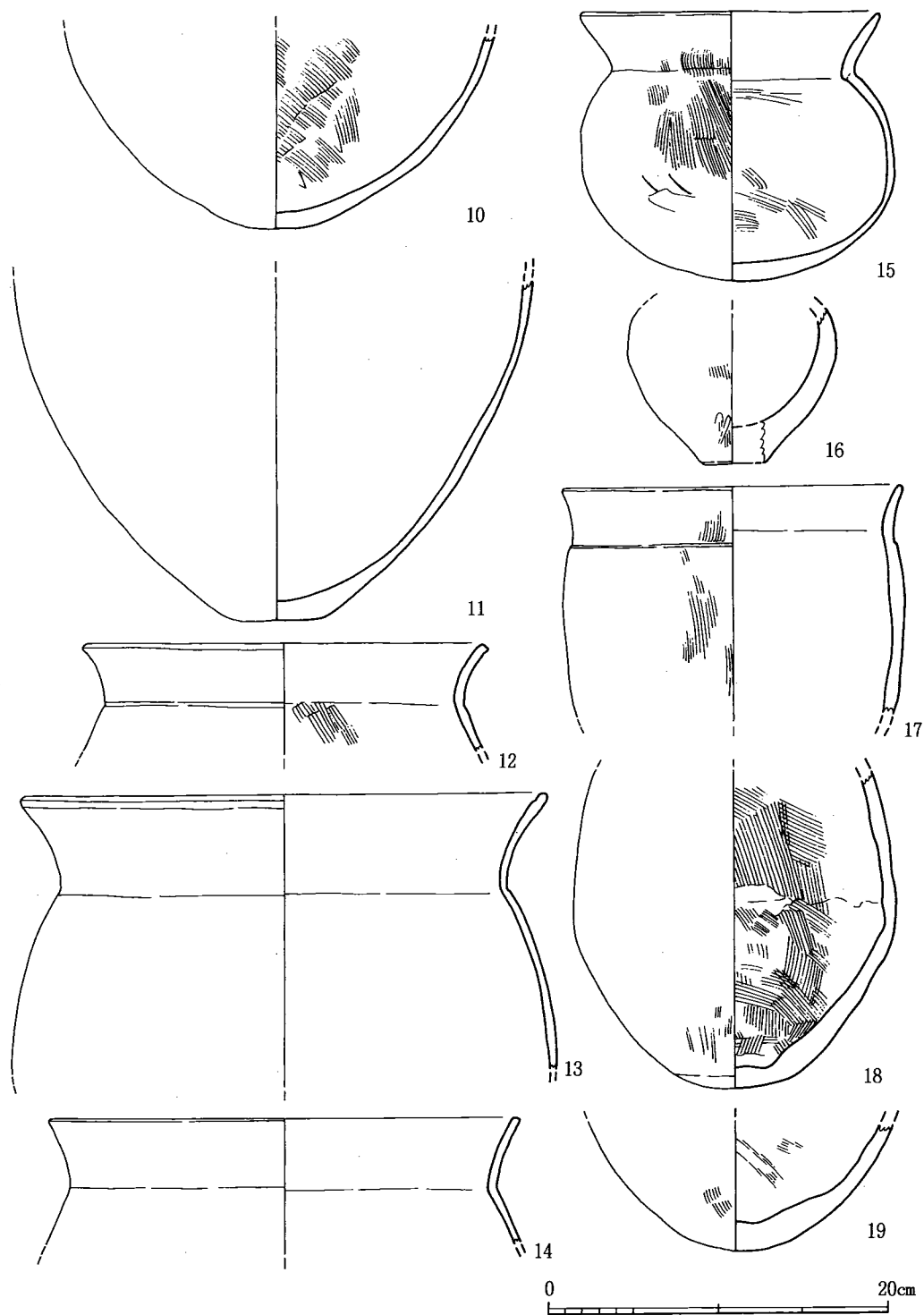
2本柱竪穴住居跡で、北西隅は93号竪穴住居跡との切り合いを誤ったが、ほぼ直角であっただろう。東壁に地山削り出しのベット状遺構がつくが、93号竪穴住居跡との切り合い部分は粘土である。東側支柱穴は、上端のみ平面不整形で、それ以下は径35cm程にすばまり、その位置で柱痕も検出されたので、柱は床面近くで切り取られたと考えられる。西側支柱穴は平面方形で、径20cmの柱痕が検出されているが、東側支柱穴の上面を掘り下げってしまったもので本来は同様の状況であったと考えたい。貼床は部分的に硬化しており、屋内土坑は南壁中央に検出され、底面の北側に長方形のピット、東側に方形の小ピットが検出されている。北側の上位に一括廃棄の土器群がある。



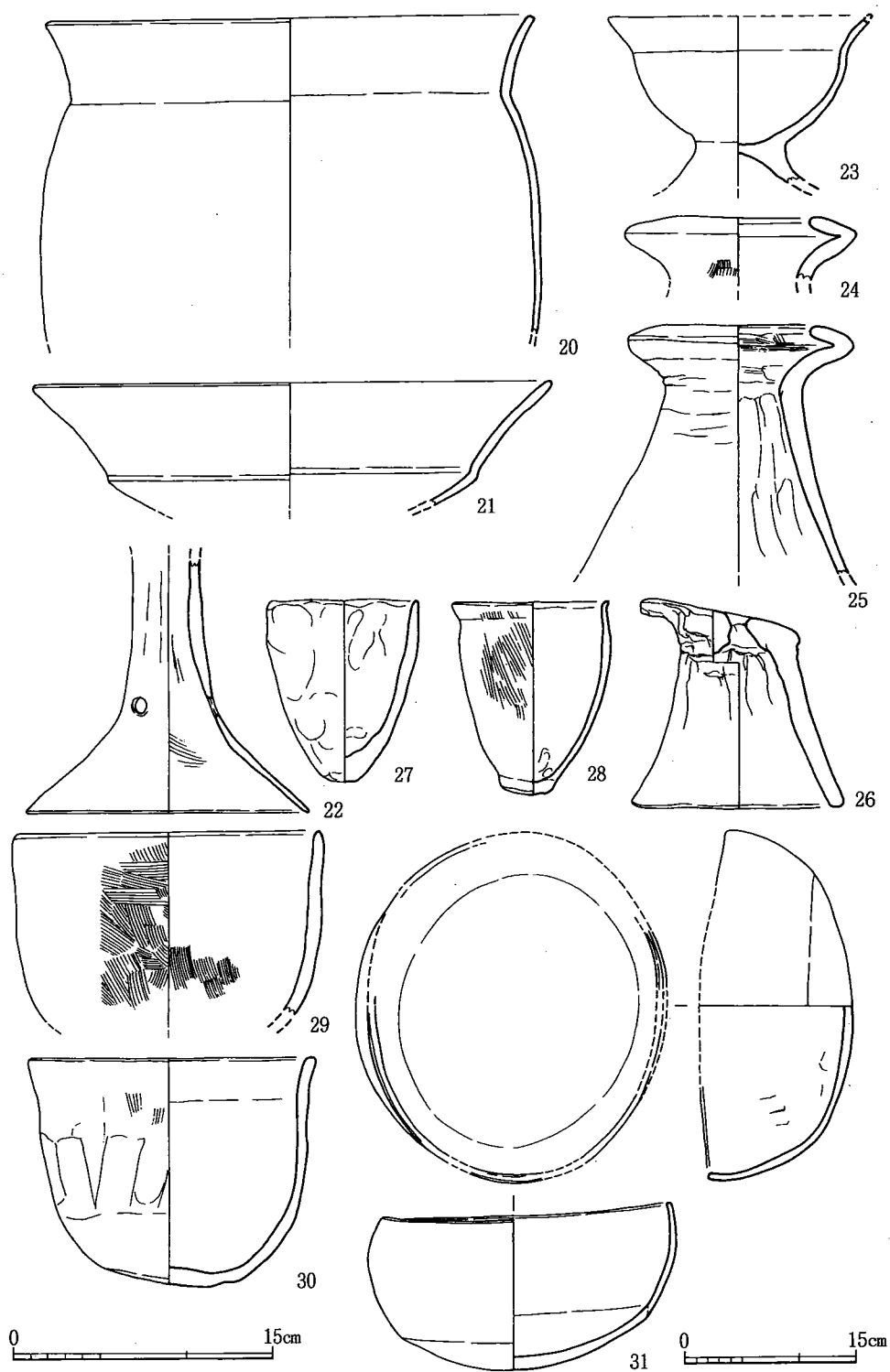
第133図 87～89号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)



第134图 90号竖穴住居跡出土土器実測図。1 (1/4)



第135图 90号竖穴住居迹出土土器实测图。2 (1/4)



第136图 90号竖穴住居跡出土土器実測図. 3 (1/4 31は1/6)

遺物(第139~141図 第231図19) 1~4は複合口縁壺の口縁部で、5は口縁がすばまり、最大径を胴下位にもつタイプで、朝鮮系無文土器と繋がる可能性がある。6は小型の単口縁壺の口縁部で器形が特異であるが、在地産である。7は小型壺の底部で焼成後の穿孔が見られる。8は大型壺の底部で、つくりは丁寧。9・10は壺の底部で、後者は焼成後の穿孔がある。11~14は中型甕の口縁部で、11は煤が口縁内面上端にまで及んでいるので、内蓋で使用していたと考えられる。15は大型甕の口縁部だろう。16は小型の甕で底部は変色がなく、胴下位に赤変が見られるので高杯であろう。21は低脚高杯の杯部であろう。胎土は精良でつくりはよい。22は小型の鉢で橙褐色を呈する。23は器高の低い小型の甕で、つくりが悪く、外面も工具によるケズリのような荒いナデが入る。口縁端部は肥厚している。また、底部に2次焼成が見られるので、支脚を使用して煮沸していると思われる。24は鼓形器台である。19はミニチュアの壺だろうか。床面よりやや浮いて鉢(第243図12)・粘板岩製石庖丁片(第231図19)が出土している。(秦)

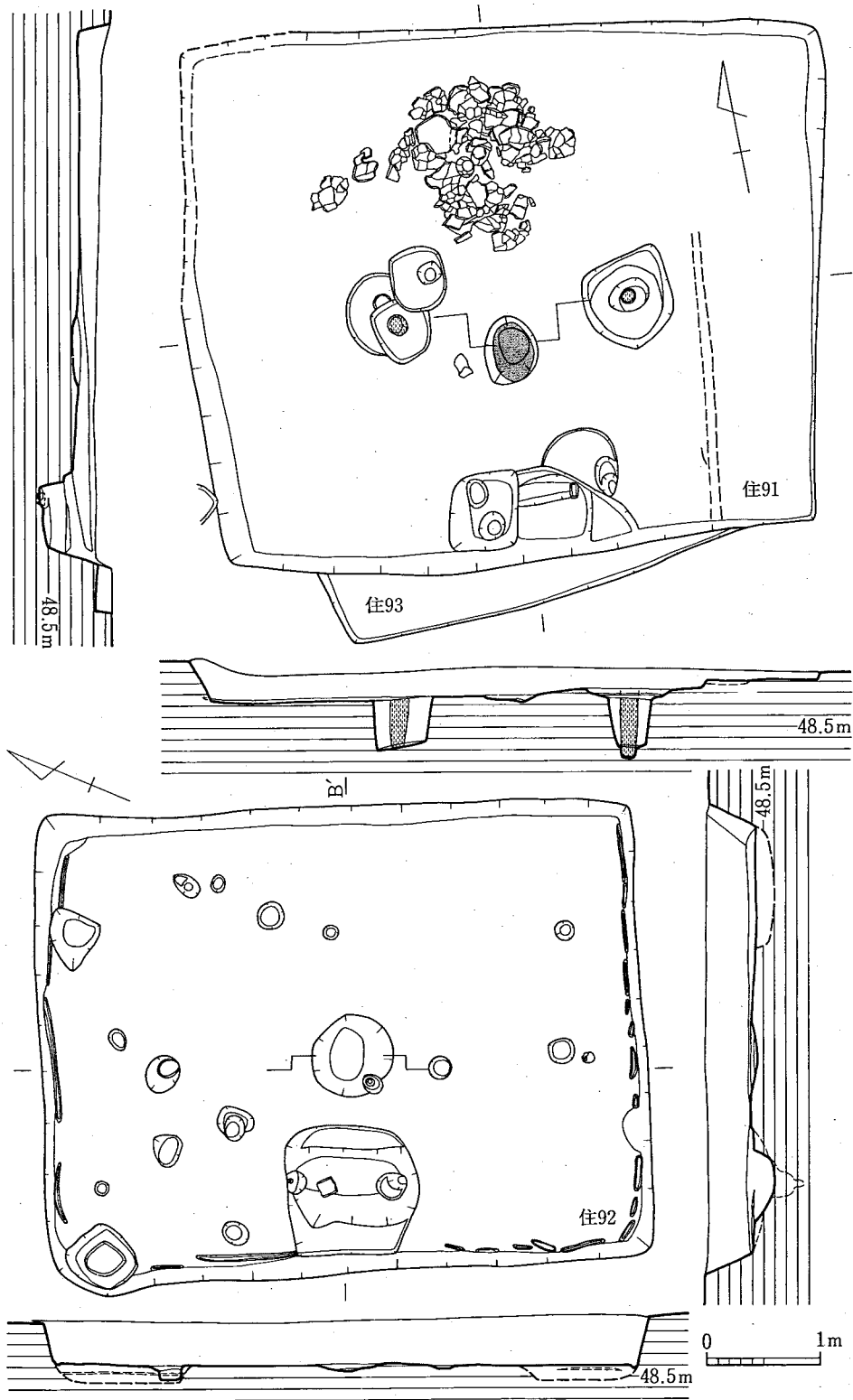
92号竪穴住居跡(図版67 第137図)

調査区中央北東部に位置し、18・20号掘立柱建物跡に切られる。長辺5.8m、短辺4.1mの方形2本柱竪穴住居跡で、周溝も隅に角をもって検出されている。西側主柱穴は平面略方形で、上位では埋土にAso-4を使用して径17cmの柱痕の周りを硬く締めていた。貼床は硬化しており、炬も検出されたにもかかわらず、主柱穴が明確でなく、貼床を外しても発見できなかった。床面上に柱を据える施設を設けるなど何らかの特殊な方法を採用していたものと思われる。屋内土坑は南壁中央に検出され、短辺側に小ピットがつく。また、置き砥石が底面に貼り付いて出土した。貼床下から、排水のための床下構造と思われる浅い溝状の落ち込みが壁沿いに検出された。一括廃棄がないので遺構の残りがよいにもかかわらず、出土遺物は少ない。

遺物(第141図 第244図10 第237図48) 27は複合口縁壺の口縁部で、28は肩部、29は甕の底部で、胴下位のみ赤変しており、杓形支脚を使用して煮沸していると思われる。30は鋤先口縁の高杯と思われる。31は小型器種の底部である。32は鼓形器台の裾部、33は小型の鉢でつくりは良い。34は高杯の脚部である。35は小型の短頸壺で、東側主柱穴から完形で出土している。床面からやや浮いて鉄鎌(第244図10)が、屋内土坑底面より粘板岩製砥石(第237図48)が出土した。(秦)

93号竪穴住居跡(図版66 第137図)

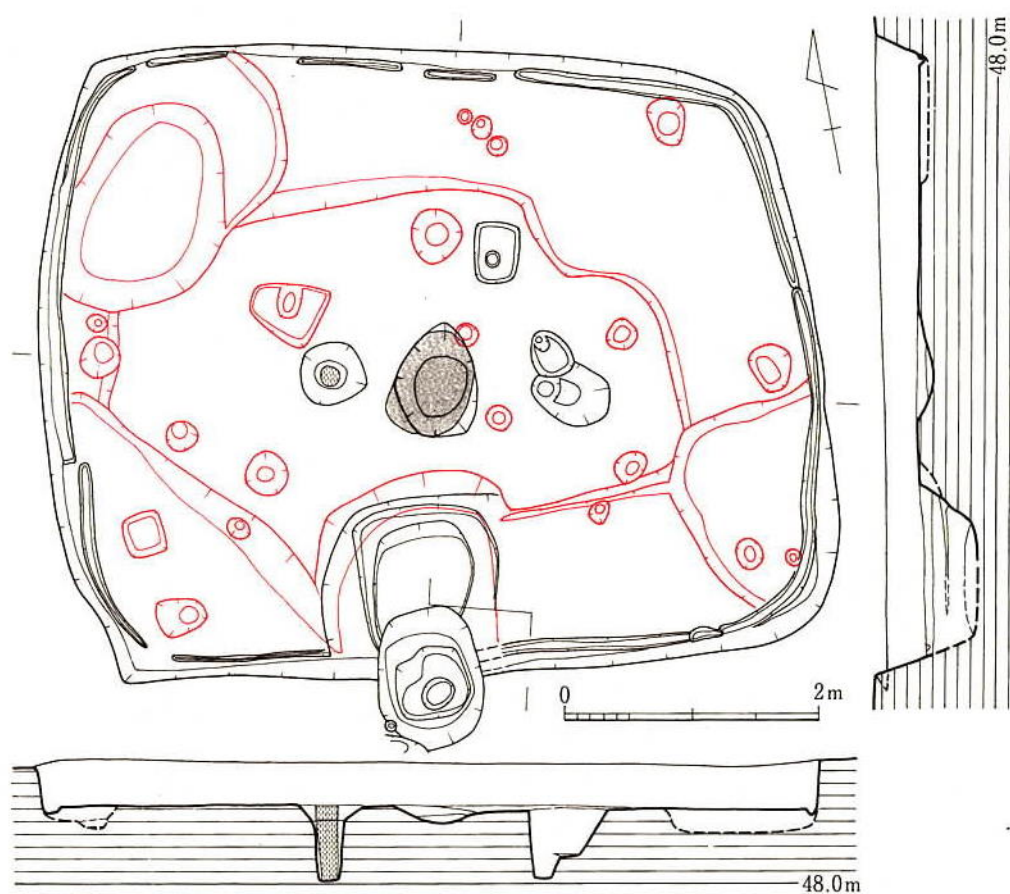
調査区中央東部に位置し、92号竪穴住居跡にほとんどを切られており、北壁は明瞭には検出できなかったが、長辺5.8m、短辺4.95mの方形プランと推定される。遺構が浅いため、屋内施設は92号竪穴住居跡の床面からも検出されなかった。遺物は実測できるものがない。(秦)



第137图 91~93号竖穴住居跡実測图 (1/60)

94号竪穴住居跡 (図版68 第128図)

調査区中央北東部に位置し、14号掘立柱建物跡に切られる。長辺6.2m、短辺5.0mの隅円方形2本柱穴住居跡で、周溝も隅が湾曲して検出されている。西側主柱穴は平面略方形で、上位では Aso-4 を使用して径17cmの柱痕の周りを硬く締めていた。東側主柱穴は、東壁にテラスがついて広がっているのですが、柱は抜き取られていると思われ、柱痕も検出されなかった。屋内土坑は南壁中央に検出された。貼床は硬化しており、これを外すと、壁沿いに浅い溝状の落ち込みが見られた。これは、排水のための床下構造と思われる。一括廃棄がないので遺構の残



第138図 94号竪穴住居跡実測図 (1/60)

りがよいにもかかわらず、出土遺物は少ない。

遺物 (第141・142図、第231図20・21) 36は複合口縁壺で、丁寧な作りである。37は壺の頸

部、38は底部で、後者は接合痕から底部を肥厚させているのがよく観察できる。39は中型甕の口縁で、口縁内面の上端に煤が付着するので、内蓋で煮沸したと思われる。40・41は小型の甕の口縁部で器高が低いタイプか鉢と思われる。42は中型の甕の口縁部で、口縁内面の上端まで火を受けており、内面の変色も著しいので内蓋で大きな火を受けたと考えられる。埋土中より石庖丁片（第231図20・21）が出土している。（秦）

95号竪穴住居跡（図版69 第143図）

調査区中央北側に位置し、82・84・86号竪穴住居跡と9号溝に切られ、さらに倒木痕のような攪乱を受けているので残りが悪いが、86号竪穴住居跡のベット状遺構の下から南東隅が検出されている。長辺6.0m、短辺4.3mの長方形2本柱竪穴住居跡が推定できる。南側支柱穴は南東にテラスがついており、柱痕が検出されなかったため、柱は抜かれている可能性がある。北側支柱穴では柱痕が検出されており、その径は15cmを測る。屋内土坑は東壁中央に位置している。また、南側支柱穴の上面で焼土が検出されているので、本竪穴住居跡は焼失した可能性もある。貼床は硬化が弱いものの検出されている。ベット状遺構は検出されなかった。

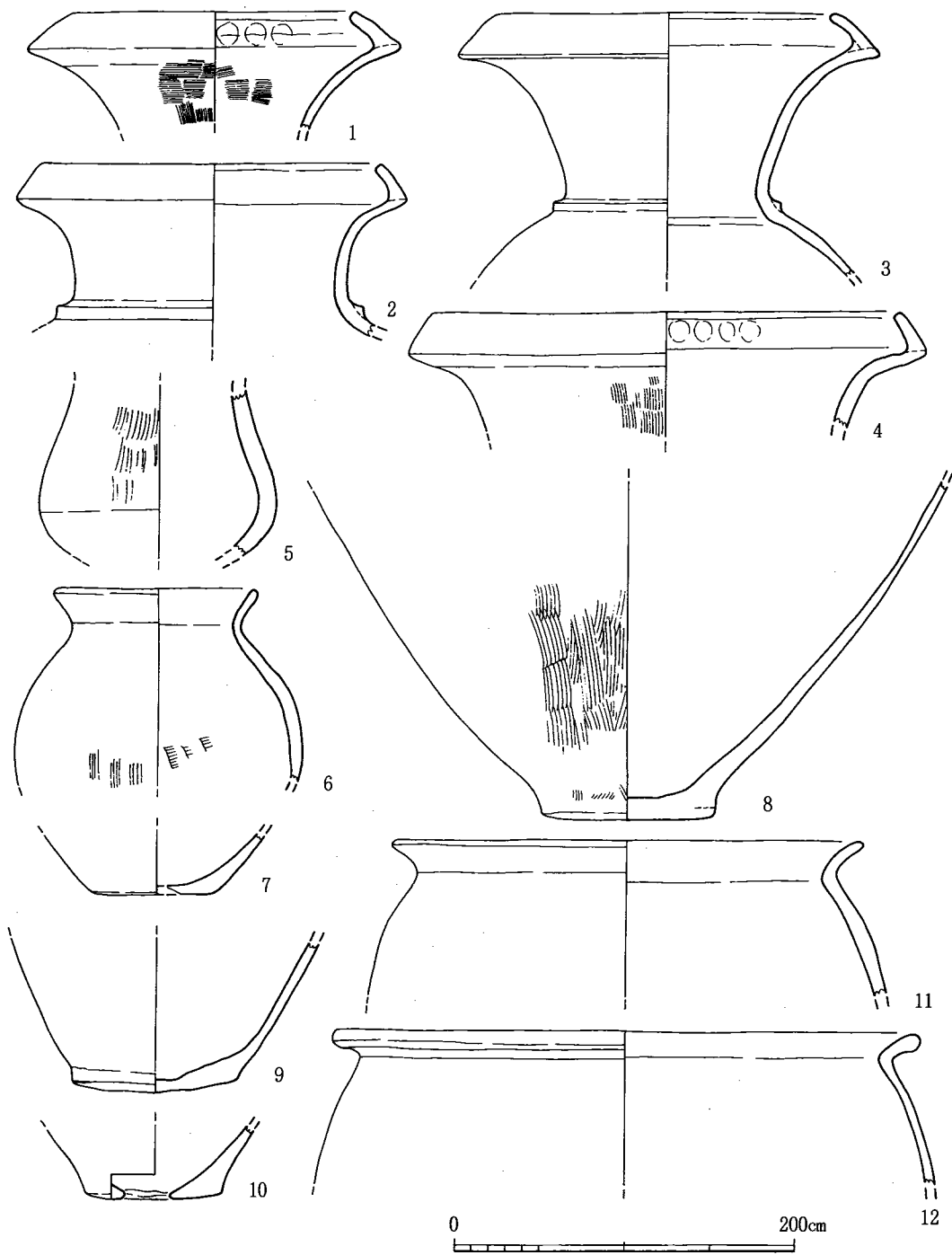
遺物（第142図 第238図49・50）43・44・45は中型甕の口縁部で、46・47は甕の底部で外面の胴下位が煮沸使用のため赤変しているため、鼓形器台を使用したものと思われる。48は甕の底部で、50は鋤先口縁の高杯の口縁部である。51は瀬戸内系高杯の口縁部で、52・53は甕の底部で胴下位が赤変しているため、鼓形器台に乗せて煮沸したと考えられる。54は小型の鼓形器台で、裾部は2次焼成を受けて赤変している。55はミニチュアの杯である。56は小型甕の底部と思われる。埋土中より頁岩製砥石（第238図49・50）が出土した。（秦）

96号竪穴住居跡

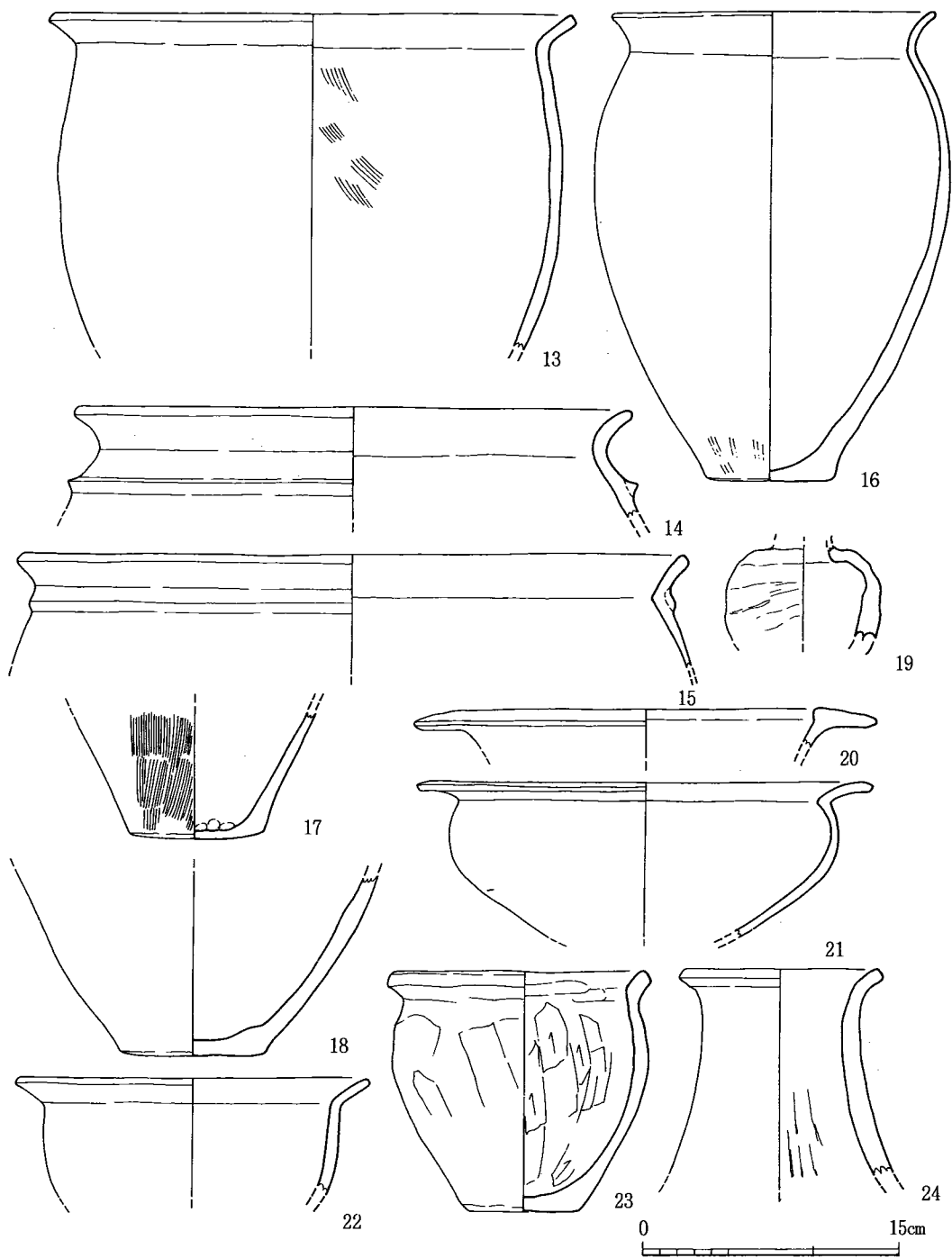
調査区北西隅に位置し、10号掘立柱建物跡の梁が西に延びるかを確認するため拡張した部分から、東壁の一部が検出されたのみである。調査区外に大部分が入るため、掘り下げなかったが、調査区の断面の土層に、本竪穴住居跡の埋土が確認され、その中から大型の鼓形器台（第142図57）1点だけ土器を採集した。重厚だがつくりは良い。裾部が赤変しているため、実際に煮沸使用されている。（秦）

97号竪穴住居跡（第84図）

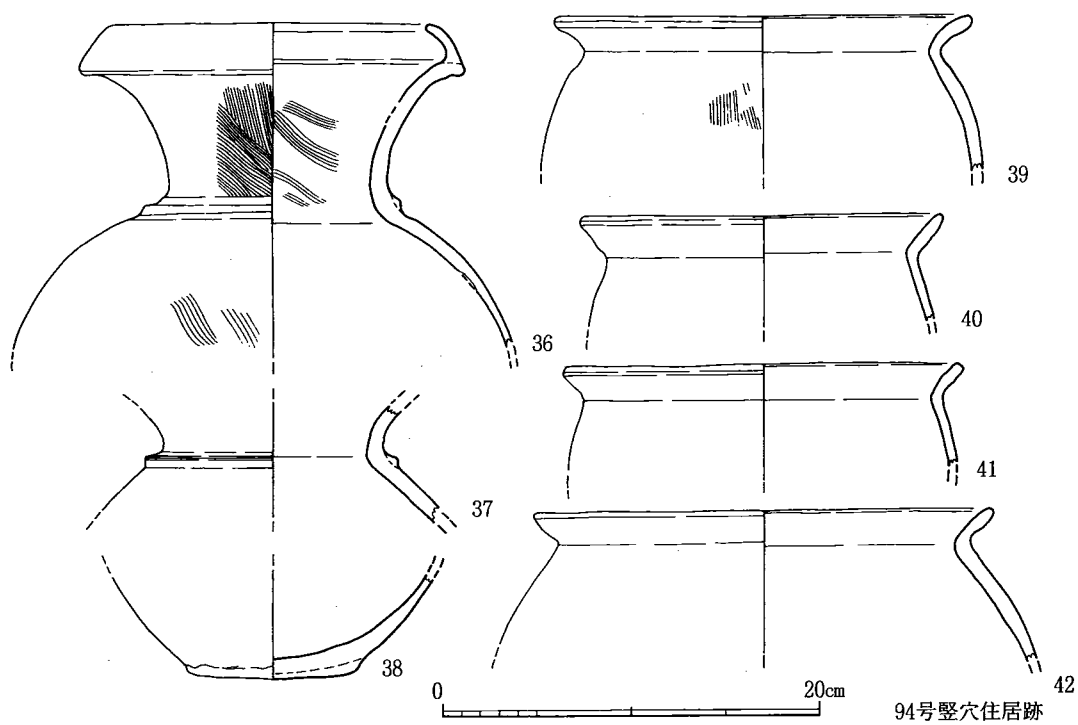
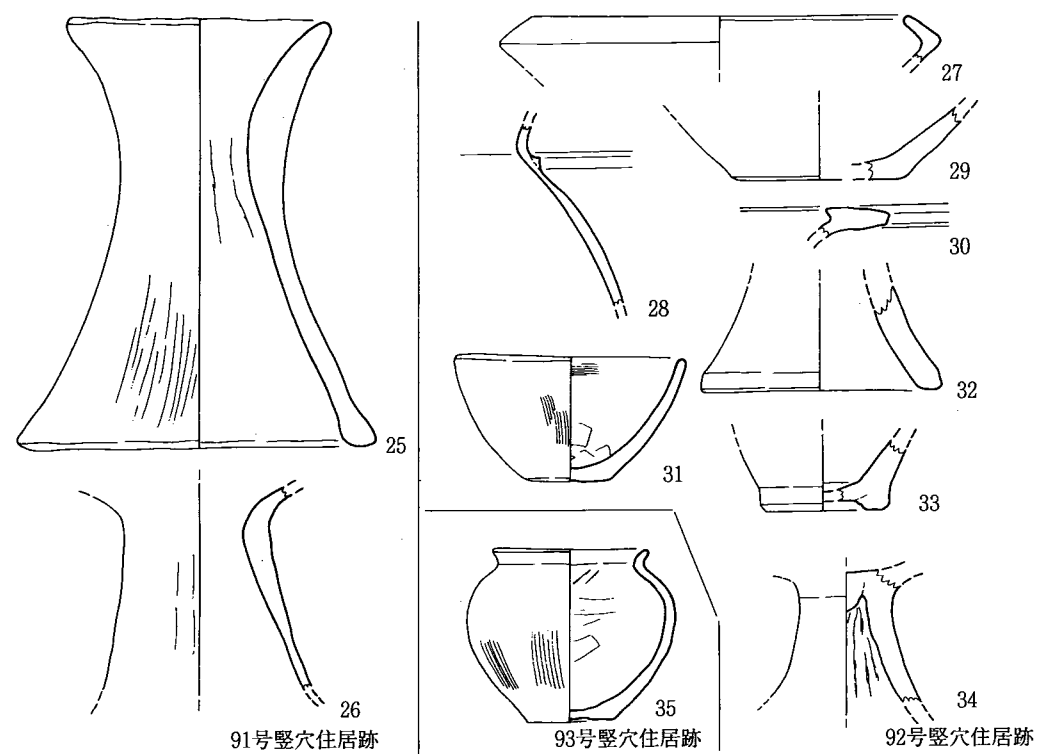
調査区中央北側に位置し、47・79号竪穴住居跡に切られ、大半が失われている。南東隅が確認されたのみで、長方形プランを推定するにとどまる。屋内施設も切られているためか、検出されなかった。貼床があるので竪穴住居跡であることは確実である。非常に浅いため遺物もわずかである。出土遺物で、実測可能なのは第142図58のみである。（秦）



第139图 91号竖穴住居迹出土土器实测图. 1 (1/4)



第140图 91号竖穴住居迹出土土器实测图。2 (1/4)



第141图 91~94号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)

98号竪穴住居跡（第143図）

平坦面中央東部に位置し、プランの南東隅が101・103号竪穴住居跡を切って明瞭に確認できた。平成6年度調査区に大部分が入るため掘り下げなかったが、続きが検出されてないので詳細は不明である。（秦）

99号竪穴住居跡（図版69 第84図）

調査区中央北部に位置し、47号竪穴住居跡の床下から検出されており、7号溝に北半分を切られている。炉を中点とすると長辺6.1mを測り、短辺3.9mなので、長方形2本柱竪穴住居跡が推定できる。主柱穴は平面不整形で、南側主柱穴は西側に、北側主柱穴は北側にテラスをもち、柱痕も検出されなかったので、柱は抜かれていると思われる。東壁中央に屋内土坑が検出され、短辺側に小ピットが確認された。床面は硬化した貼床で、周溝が検出されている

遺物（第146図）1は甕の口縁部、2は小型甕の底部で3は壺の底部で、丁寧なつくり。4は杯、5は脚付甕か鉢の脚であろう。2・4・5は主柱穴から出土し、3は屋内土坑から出土している。（秦）

100号竪穴住居跡（第143図）

調査区北西隅に位置し、6・7号溝に切られ、西側調査区外に大部分が入るため残りが悪く、方形プランの東端が検出されたのみである。他の竪穴住居跡の規模から、東壁は短辺と考えられ、短辺4.5～4.8mの方形竪穴住居跡が想定される。屋内施設はまったく検出されてない。14号溝を切る。

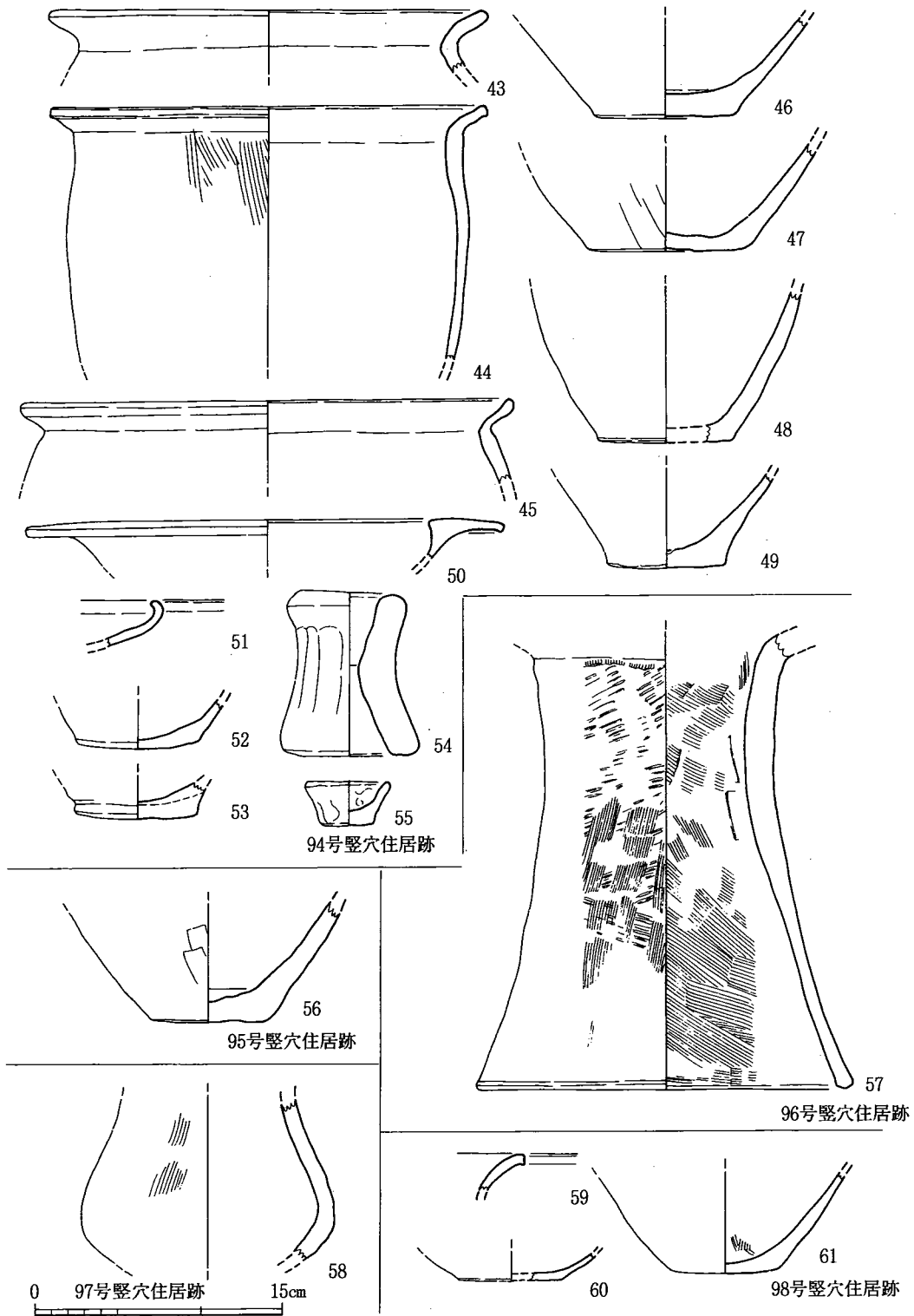
遺物（第146図 第238図51）59は小型器種の口縁部、60は小型の短頸壺の底部と思われる。61は床面出土の甕の底部で外底まで赤変しているので沓形器台に乗せて煮沸したと思われる。また、埋土中より頁岩製砥石（第238図51）が出土した。（秦）

101号竪穴住居跡（図版70 第144図）

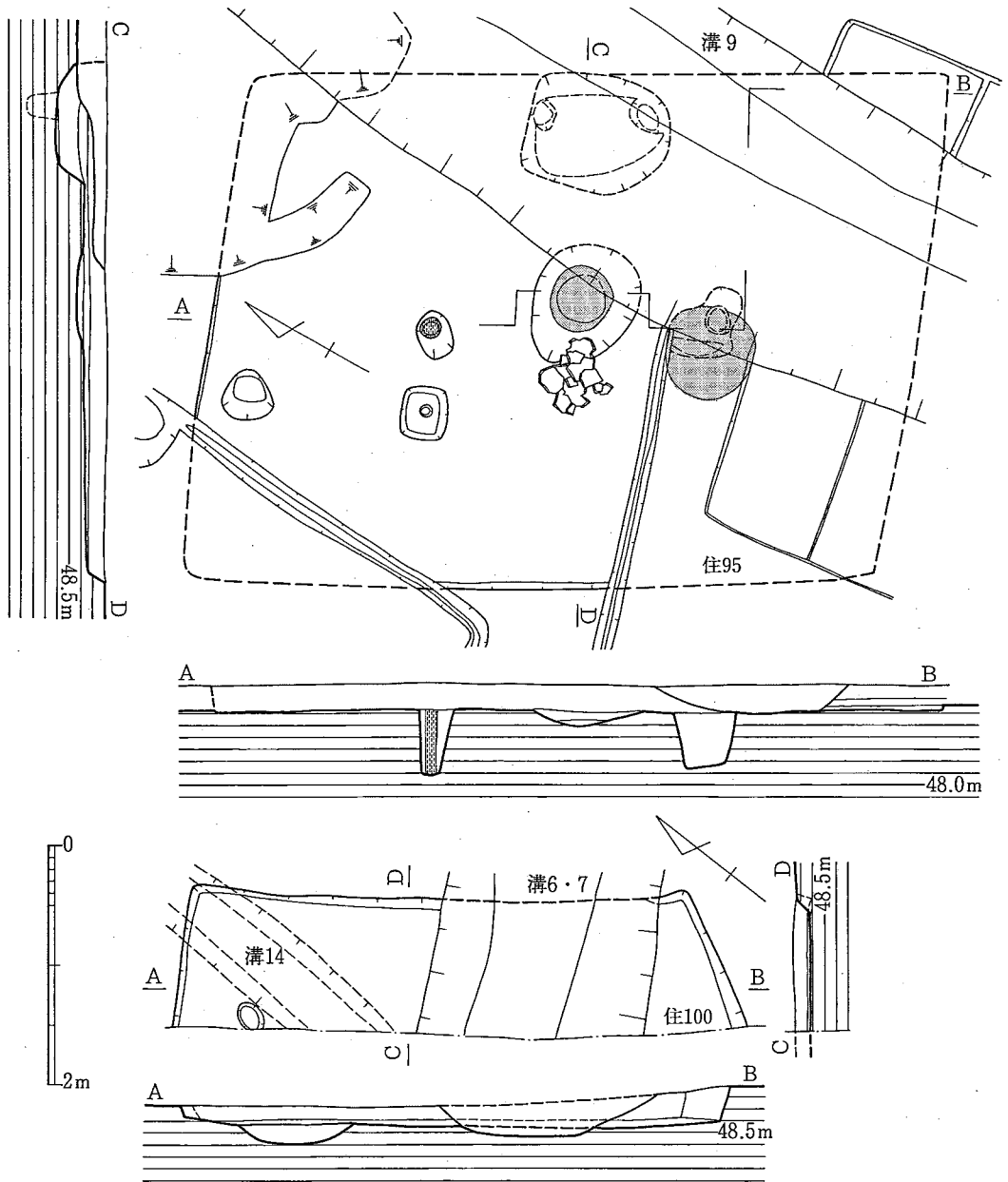
平坦面中央東部に位置する。100号竪穴住居跡に切られ、102号竪穴住居跡を切るのは確実だが、重複が激しく、残りも悪いため、103号竪穴住居跡との切り合いは不明確である。短辺3.0mの小型方形竪穴住居跡を推定するにとどまる。屋内施設も炉以外は明瞭には確認できなかった。

遺物（第146図）6は小型甕の口縁部、7は小型壺の肩部、8は壺の頸部、9は小型の低脚高杯の杯部と思われる。胎土は精良である。10は壺の底部であろう。（秦）

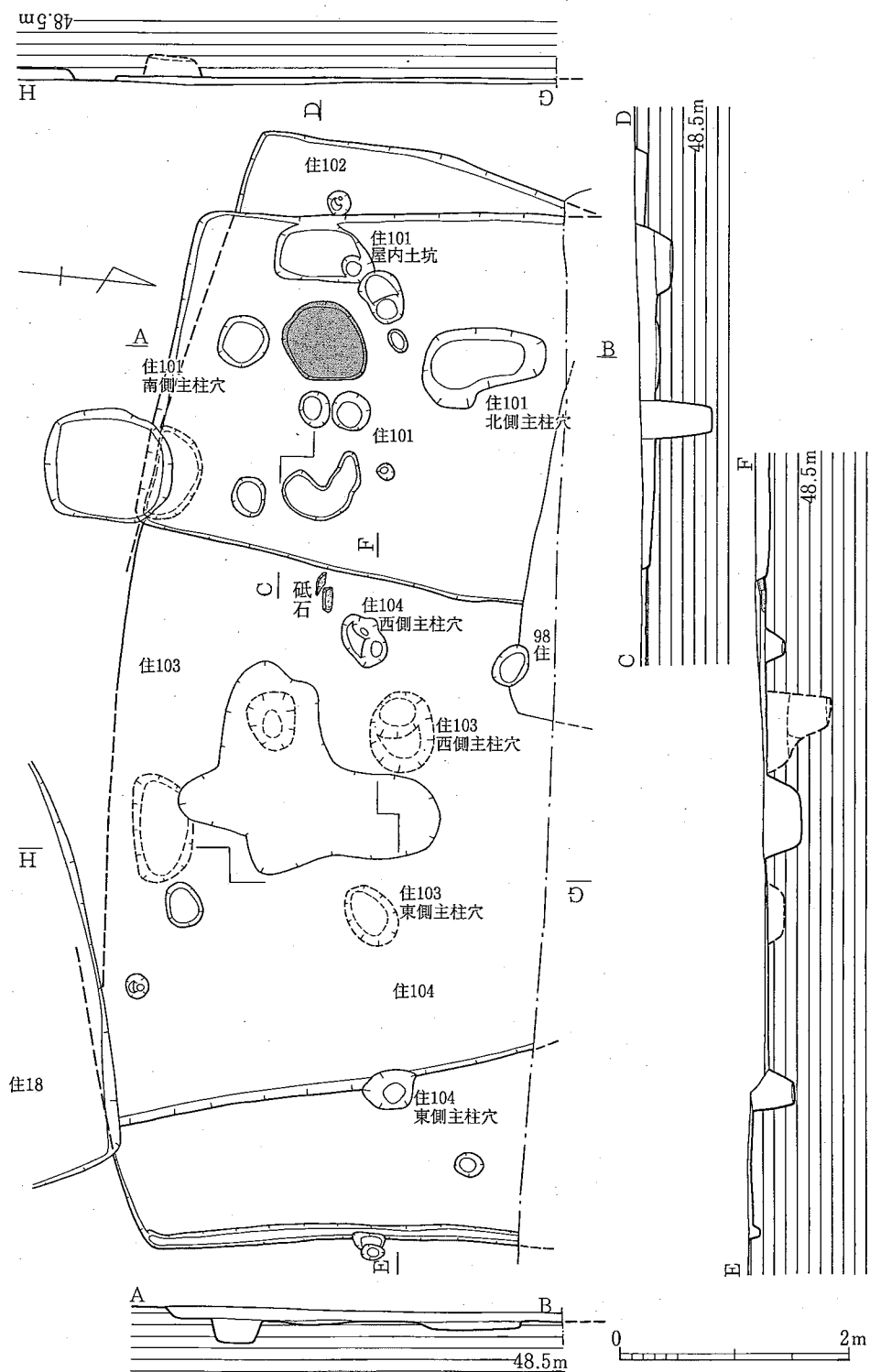
102号竪穴住居跡（図版70 第144図）



第142图 94~98号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)



第143图 95·100号竖穴住居跡実測图 (1/60)



第144図 101~104号竪穴住居跡実測図 (1/60)

平坦面中央東部に位置し、101号竪穴住居跡に大部分を切られる。壁の残りも悪かったので、プランが確認されず、規模は不明である。竪穴住居跡の重複が激しく、屋内施設に確実なものはない。実測できる遺物はなかった。(秦)

103号竪穴住居跡 (図版70 第144図)

平坦面中央東部に位置し、101号竪穴住居跡に切られる。プランの南東隅が確認されたのみで、本竪穴住居跡に確実に伴うのは、東壁につく地山削り出しのベット状遺構と周溝で、それ以外の屋内施設は推定である。確実なものがないため、規模を推定できない。103号竪穴住居跡との切り合い関係は確実でない。

遺物 (第146図 第238図52 第247図218) 11は甕の口縁、12は底部である。埋土中よりガラス製管玉 (第247図218)、頁岩製砥石 (第238図52) が出土した。(秦)

104号竪穴住居跡 (図版70 第144図)

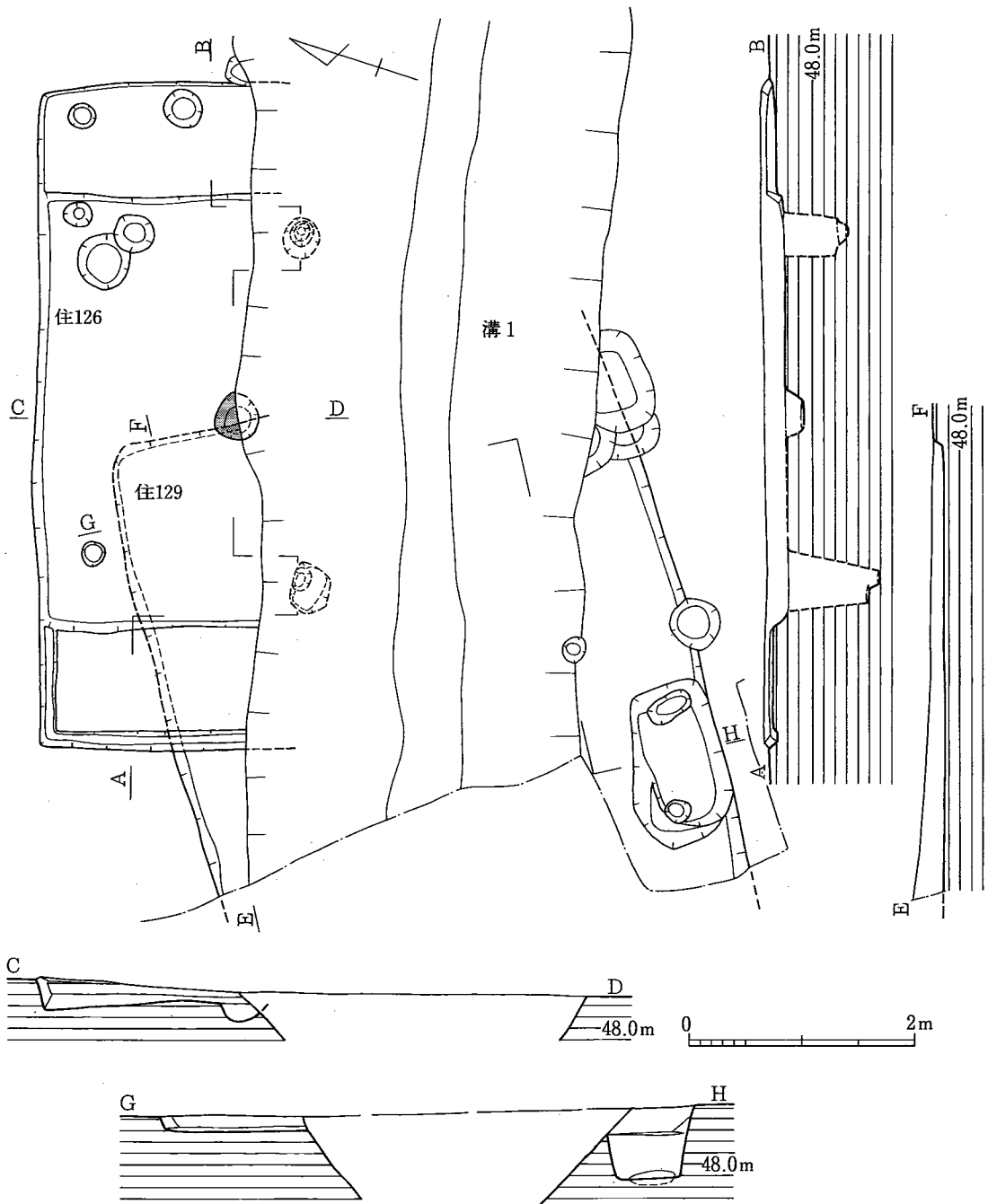
平坦面中央東部に位置し、101号竪穴住居跡に切られる。平成6年度調査区に大部分が入るが、続きが検出されてない。南東隅が確認されたのみで、方形プランの竪穴住居跡を推定するにとどまる。本竪穴住居跡に確実に伴うのは、東壁につく地山削り出しのベット状遺構と周溝で、それ以外の屋内施設は推定である。103号竪穴住居跡との切り合い関係は確実でない。壁の残りが悪く、実測できる遺物はなかった。(秦)

126号竪穴住居跡 (図版71 第145図)

平坦面南西隅に位置し、1号溝に南半分を切られ、残りが悪い。長辺は5.95mで、短辺は主柱穴を中点とし、南壁が溝の対岸に検出されないことから4.5mを測るので、長方形2本柱竪穴住居跡を復元できる。主柱穴は1号溝北壁にわずかに下端のみ検出されている。地山削り出しのベット状遺構が東西壁につき、西側のベット状遺構は129号竪穴住居跡と切り合う部分のみ貼土であった。屋内土坑は南壁につくらしく、検出されなかった。129号竪穴住居跡のプランは炉の下から検出されているので、切り合い関係は間違いない。遺物で実測できたのは甕の底部 (第146図13・14) のみで、使用による2次焼成を受けている。14は小型品の底部であろう。(秦)

129号竪穴住居跡 (第145図)

平坦面南西隅に位置し、1号溝に中央部分を切られるため残りが悪い。西壁は調査区外にあるため、確認できないが、屋内土坑を中点とすると長辺は8.0mを測り、短辺は4.6mなので長方形2本柱竪穴住居跡を復元できる。主柱穴・炉は溝に切られており、検出されない。屋内土坑は南壁中央に位置し、底面の短辺側に小ピットがつく。遺構が浅いため出土遺物はわずかで



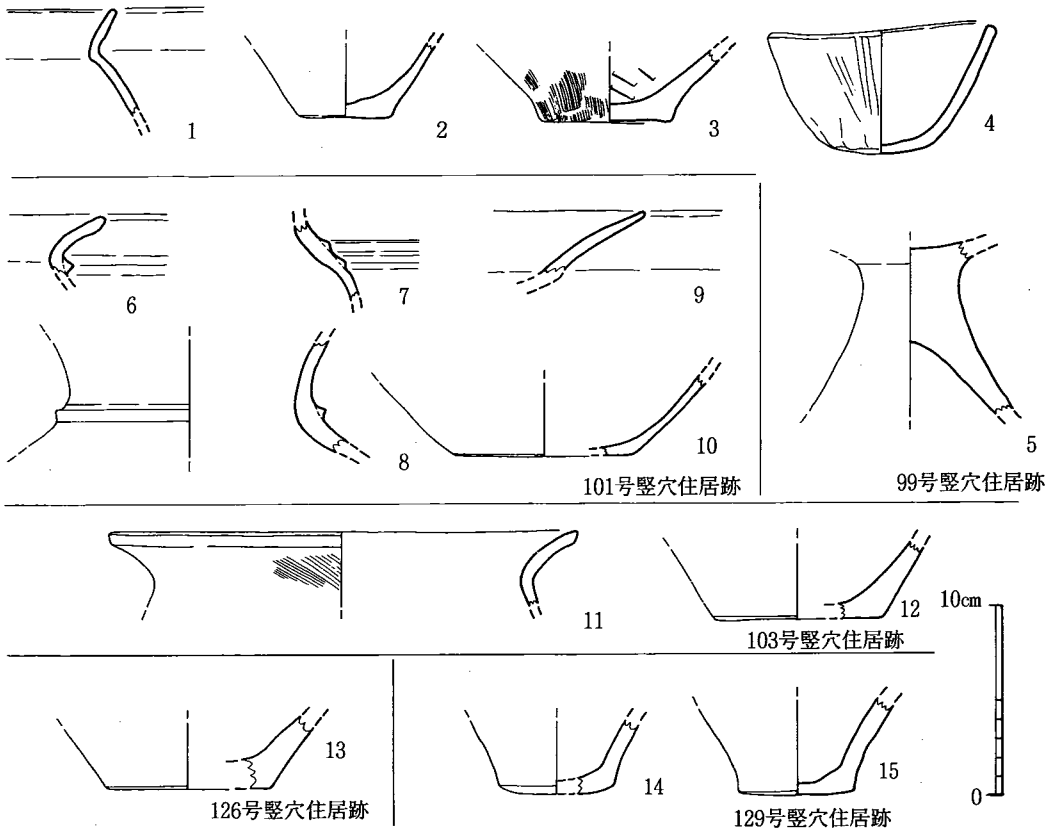
第145图 126·129号竖穴住居跡実测图 (1/60)

ある。出土遺物で実測できたのは、小型器種の底部（第146図15）のみである。（秦）

137号竪穴住居跡（図版72 第148図）

平坦面中央の西南に位置し、2号周溝状遺構・16号溝に切られる。長辺5.1m、短辺3.65mの小型長方形2本柱竪穴住居跡が推定できる。北西隅に作り付けベット状遺構が検出されたが、硬化した貼床が南北壁まで及ばないので、両ベットであった可能性もある。支柱穴は径20~33cmで、柱痕は径15cm前後である。東壁中央に屋内土坑が検出され、短辺側に小ピットが確認された。貼床の下から、幅50~100cm程の溝が検出されたが、これは排水のための床下構造と思われる。屋内土坑の北側に砥石が2点出土している。

遺物（第147図 第238図53・54 第247図205）1は単口縁壺の口縁部、2は壺の肩部、6・7は底部、8は高杯で脚部とは接合しないが、炉の焼土上から出土している。3・4は小型甕の口縁部で、5は中型甕の口縁部である。埋土中より砥石（第238図53・54）、ガラス玉（第247図205）も出土している。（秦）



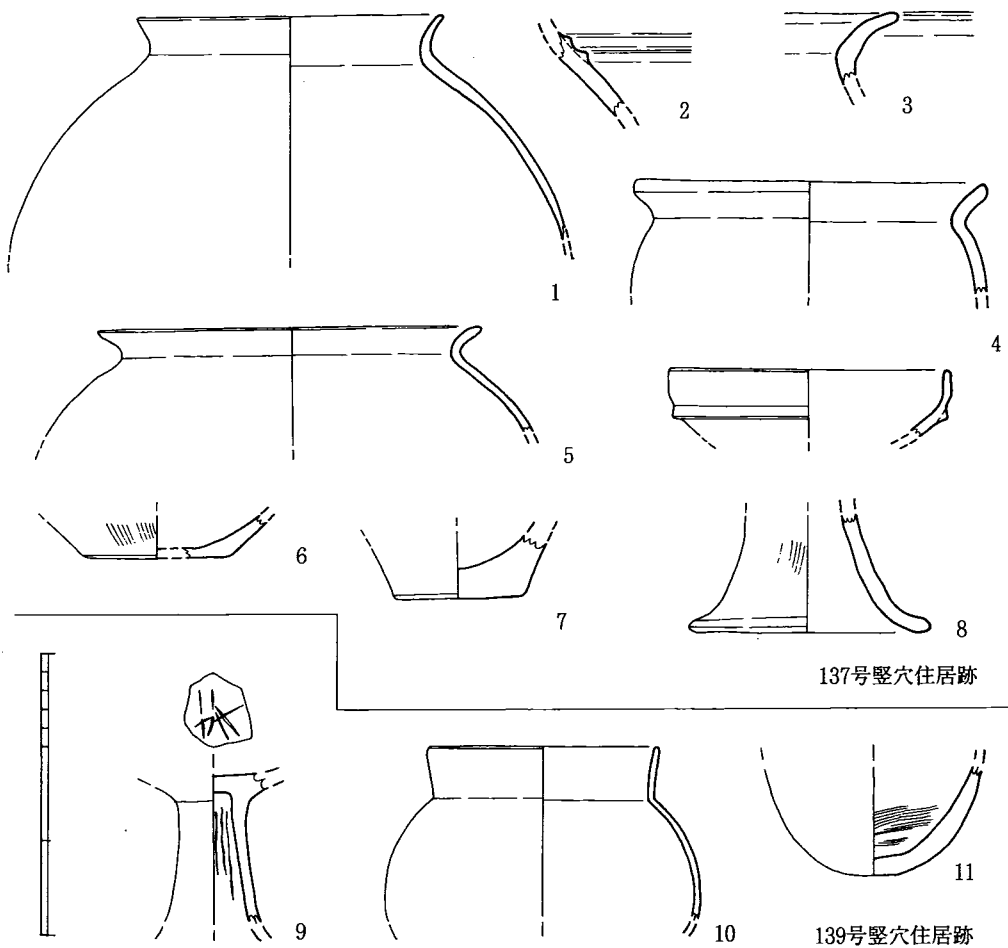
第146図 99・101・103・126・129号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

138号竖穴住居跡 (第149図)

平坦面南西に位置し、1号溝に南半分を切られるため残りが悪く、139号竖穴住居跡との切り合いを誤ったため、ほとんど確認されていない。確実なのは炉だけで、支柱穴は推定である。北壁は4.2mあるが、長辺か短辺かも確定できない。実測できる遺物はない。 (秦)

139号竖穴住居跡 (第149図)

平坦面南西に位置し、1号溝に南半分を切られるため残りが悪い。長辺は6.9mで、短辺は支柱穴を中点とすると5.0mを測るので、長方形2本柱竖穴住居跡を復元できる。支柱穴は不整円形で、壁の立ち上がりが緩やかで柱痕も検出されなかったことから、柱は抜かれていると思わ



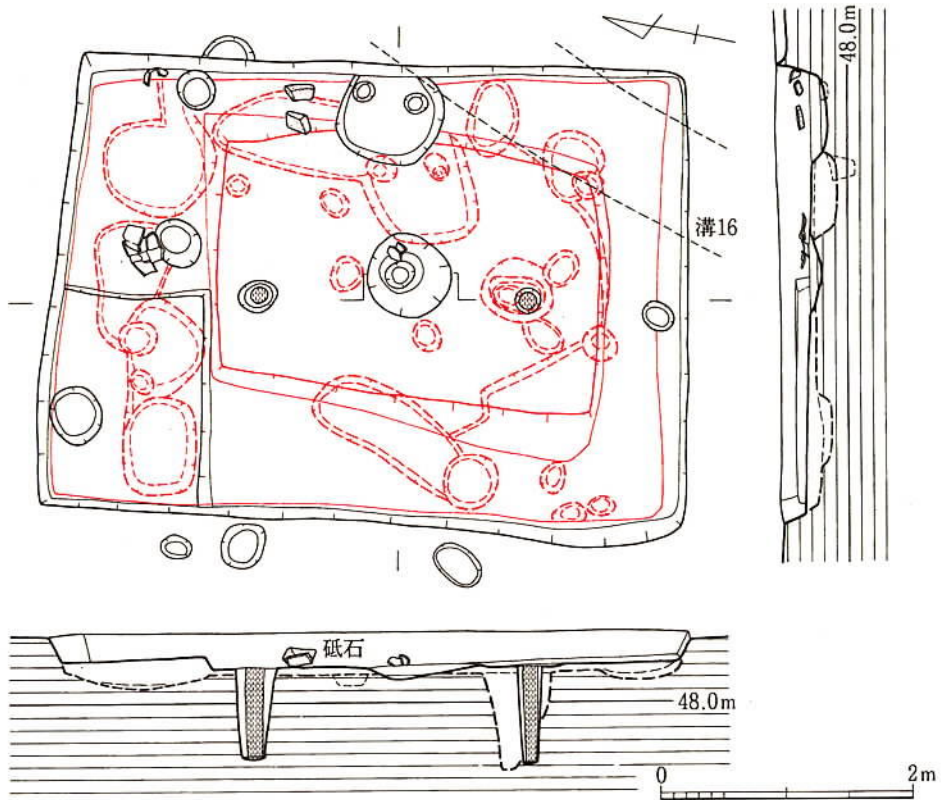
第147図 137・139号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

れる。地山削り出しのベット状遺構が東西壁につき、西側のベット状遺構は142号竪穴住居跡と切り合う部分のみ粘土であった。床面は硬化した貼床で、ベット状遺構上にも見られる。屋内土坑は南壁につくらしく、検出されなかった。

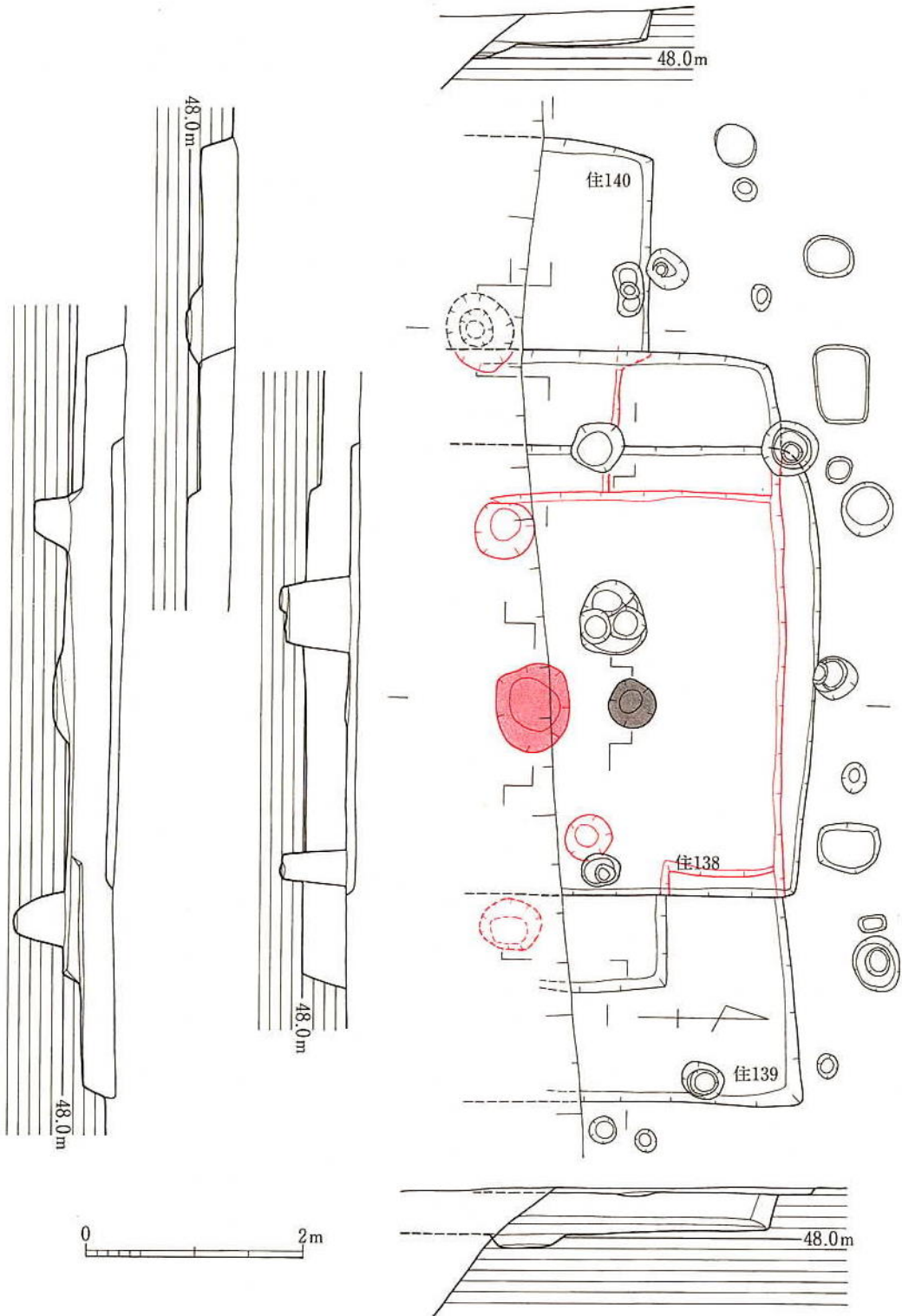
遺物（第147図 第247図211・212）9は高杯の脚部で胎土は精良、10は直口壺で胎土は精良、11は杯の底部だろう。床面よりガラス玉（第247図211・212）が出土している。（秦）

140号竪穴住居跡（第149図）

平坦面南西に位置し、1号溝と139号竪穴住居跡に大部分を切られるため残りが悪い。プランの東北隅が検出されたのみで、屋内施設が溝に切られて確認されないため、規模を推定できない。ただ、溝の対岸に南壁が検出されていないことから、139号竪穴住居跡と主軸を同じくする方形竪穴住居跡と推定されるのみである。139号竪穴住居跡との切り合い関係は、同竪穴住居跡の西側ベット状遺構上にプランが検出されたので確実である。床面近くで、廃棄された土器群が出土している。実測できたのは2点のみである。（152図1・2）（秦）



第148図 137号竪穴住居跡実測図（1/60）



第149图 138~140号竖穴住居跡実測图 (1/60)

141A号竪穴住居跡（第150図）

平坦面中央の南側に位置する、長辺5.4m、短辺4.2mの小型の長方形2本柱竪穴住居跡で、壁の残りが悪く、検出時にすでに床面が露出していた。主柱穴は径35～45cmの平面略方形で、柱痕は径16～18cm前後である。南東隅に作り付けベット状遺構が確認され、周溝がこれに沿って検出されたので確実である。西壁中央に屋内土坑が検出され、底面短辺側に平面長方形の小ピットが確認された。このピットは屋内土坑の検出段階で確認されており、形状から板状のものが打ち込まれた痕跡と思われる。貼床は硬化しているため明瞭であり、これを外すと141B号竪穴住居跡の屋内施設が検出される。

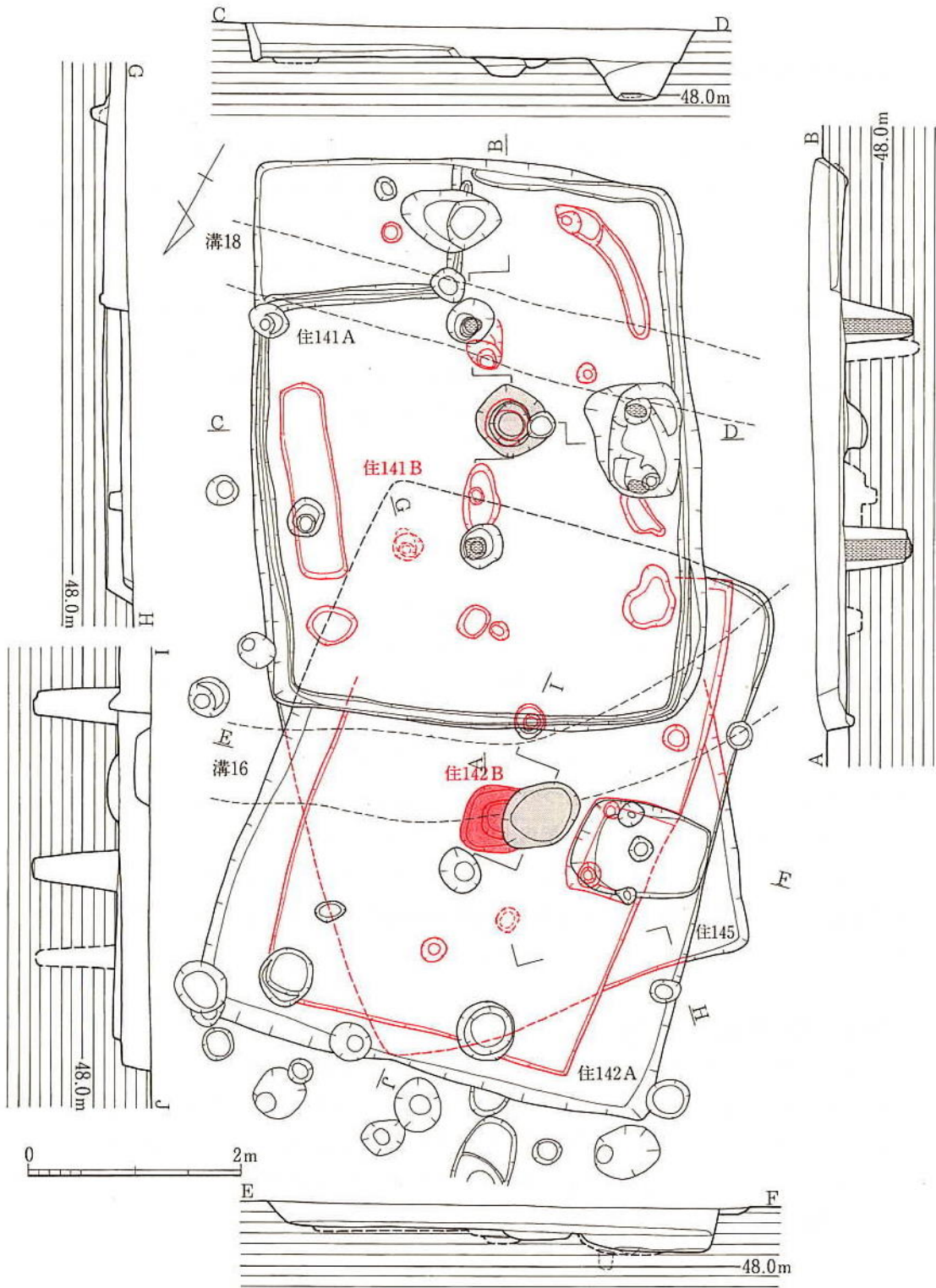
遺物（第152図 第243図11 第238図55・56 第239図57～59 第247図213）3・4・5は中型甕の口縁部、6は底部、7は小型の鼓形器台の裾部で、8・9は杯の底部、10はミニチュアの台付器種である。埋土中より鈍片（第243図11）・頁岩製砥石（第238図55・56 第239図57～59）とガラス玉（第247図213）が出土している。（秦）

141B号竪穴住居跡（第150図）

平坦面中央の南側に位置する、141A号竪穴住居跡の貼床を下げて検出された。壁は残っており、屋内施設も141A号竪穴住居跡のそれとほぼ同じ位置にあるため、明確には確認できなかった。貼床下から、141A号竪穴住居跡の主柱穴を結ぶ主軸線上に、主柱穴と思われるピットが見られ、床下構造と思われる南隅に湾曲する溝状遺構や、北側には北壁に平行に並ぶピットが並ぶことから、長辺4.0m、短辺3.5mの隅円方形の小型竪穴住居跡を想定できる主柱穴は楕円形で、南側主柱穴は南壁にテラスをもつので、両方とも柱は抜かれている。141A号竪穴住居跡の炉の下にやや小さい炉が検出され、屋内土坑も、141A号竪穴住居跡のそれに切られており、同竪穴住居跡の側面ピットの下に、同様のピットが重なっている。主軸方向が一致し、多くの壁を共有することから、本竪穴住居跡は141A号竪穴住居跡の建て替えと思われる。本竪穴住居跡に確実に伴う遺物はない。（秦）

142A号竪穴住居跡（第150図）

平坦面中央の南側に位置し、141A号竪穴住居跡に南部を切られている。長辺5.3m、短辺4.4mの小型長方形竪穴住居跡である。主柱穴は径22～30cmで、柱痕は検出されなかったが、抜き取られた痕跡はない。西壁中央に屋内土坑が検出され、底面の東隅に小ピットが確認された。貼床は硬化しているため明瞭であり、これを外すと142B号竪穴住居跡のプランが検出された。遺物は実測できるものが出土していない。（秦）



第150图 141·142·145号竖穴住居迹实测图 (1/60)

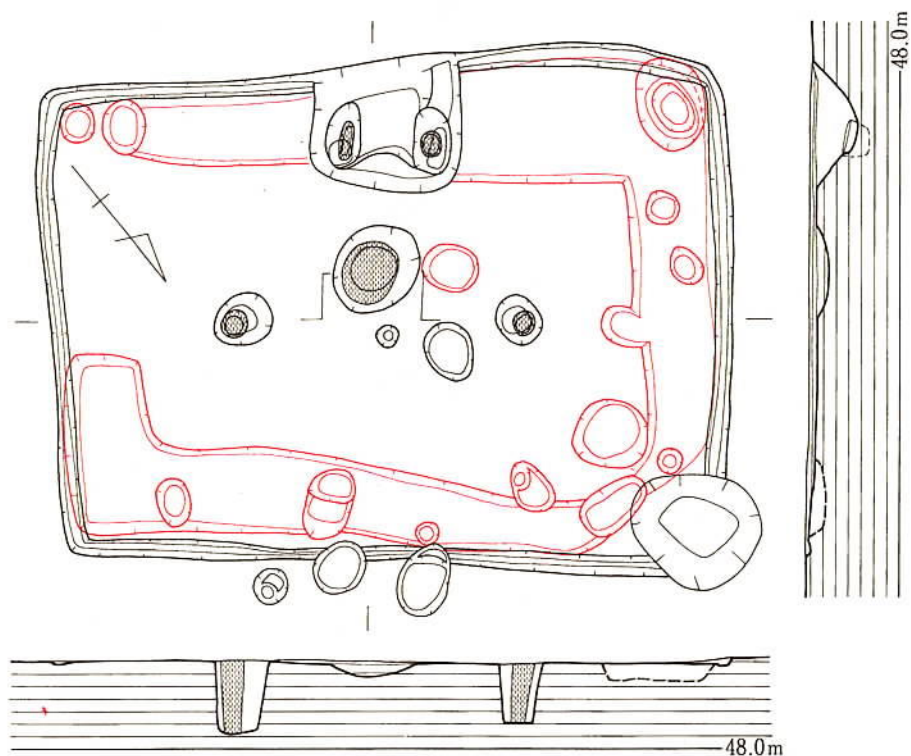
142B号竪穴住居跡（第150図）

平坦面中央の南側に位置し、142A号竪穴住居跡の貼床を下げた検出された。壁はほとんど残っておらず、屋内施設も142A号竪穴住居跡のそれとほぼ同じ位置にあるため、明確には確認できなかった。長辺4.85m、短辺3.2mの小型長方形竪穴住居跡を想定できる。炉は検出されたが、支柱穴は不明である。（秦）

143号竪穴住居跡（図版73 第151図）

平坦面中央の南側に位置する、長辺5.45m、短辺4.0mの小型の長方形竪穴住居跡で、壁の残りが悪く、検出時にすでに床面が露出していた。支柱穴は径35～50cmで、柱痕は径15～22cm前後であり、抜き取りの痕跡はない。南壁中央に屋内土坑が検出され、底面短辺側に平面長方形の小ピットが確認された。このピットは屋内土坑の検出段階で確認されており、形状から板状のものが打ち込まれた痕跡と思われる。硬化した貼床は壁沿いには広がらず、その部分に貼床下から、幅50～100cm程の溝状遺構が検出されたが、これは排水のための床下構造と推定できる。

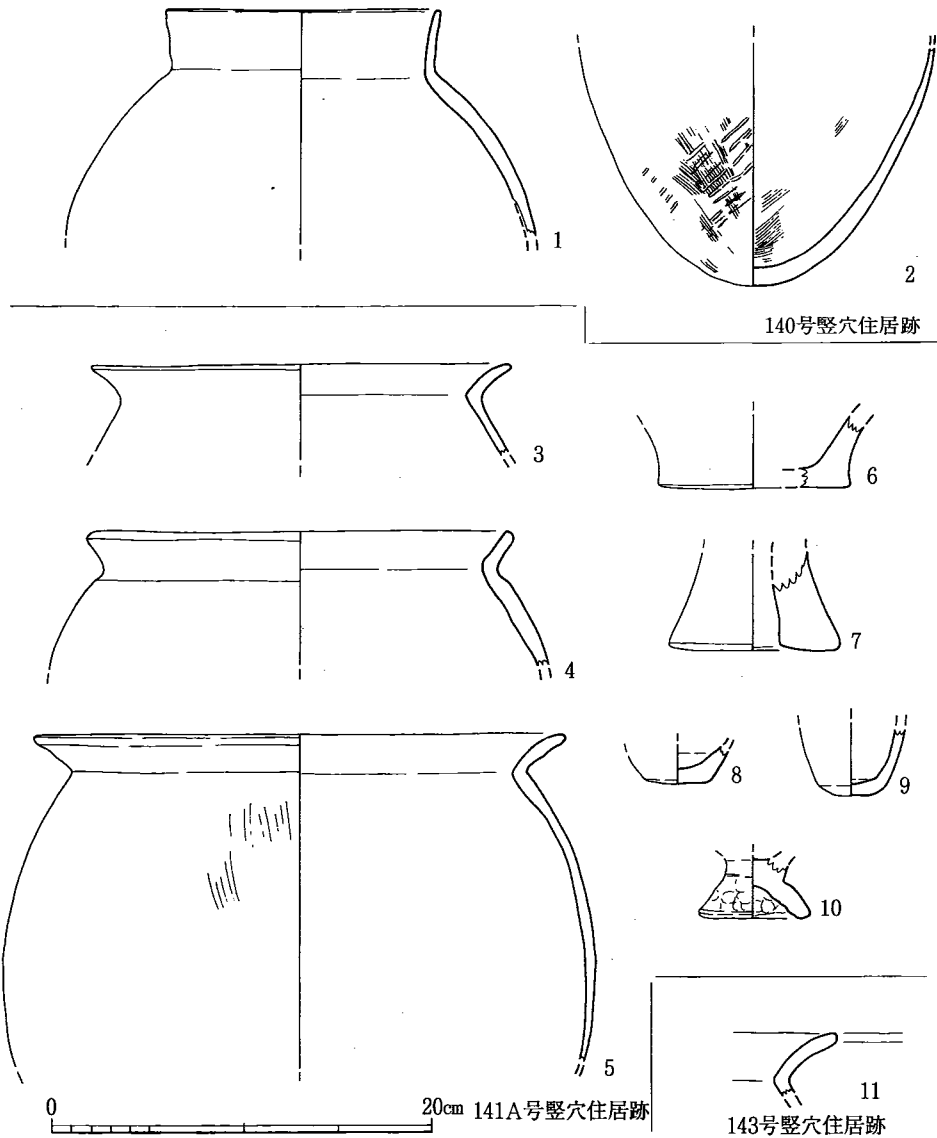
遺物（第152図、第242図3）11は甕の口縁部で屋内土坑から出土している。埋土から蛤刃石斧の表面の剝離した残欠（第242図3）が出土している。（秦）



第151図 143号竪穴住居跡実測図（1/60）

145号竖穴住居跡 (図版73 第150図)

平坦面南西に位置し、141A・142A号竖穴住居跡に大部分を切られるため残りが悪い。プランの北西隅と、東壁の一部が検出されたことから、短辺3.6mの小型の長方形竖穴住居跡を想定できる。遺構が浅いため、屋内施設が切られて確認されず、支柱穴も推定である。本竖穴住居跡に確実に伴うもので、実測できる遺物はない。 (秦)



第152図 140・141・143号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

144号竪穴住居跡（図版74 付図2 表4～6）

以下、各住居の説明をする前に、住居群の特徴の大略を示すと、以下のとおりである。

壁沿（壁隅）土壌、壁中央部土壌（区画）、床中央部土壌の埋設・再配置の回帰性と住居の建て替え・移動

以来尺遺跡出土の住居は、付図2に示すように、平成5・6年度の丘陵中央平坦部（現況）・南急斜面部に何故か、限れば、異様なほどの整然とした重複状況を示す。

しかし、このことも、後述するように付図3A～Cの住1030・1034・1035号、付図2の住144・1024号、第164図の住1462号を例示すれば、旧来の壁沿・隅高床（所謂、ベッド状遺構）や壁（床）中央部土壌を新出の張床下に埋没し、旧来の高床部壁側や土壌部壁側を、原則的にはその高床幅や土壌幅を限度としてその幅分だけ拡大して、建て替えを繰り返していることが容易に看取できよう。

しかし、上記の図に示すように、このことは調査時点でのこのことを念頭に入れた調査手順と慎重な観察が前提として欠くことができず、また、報告に際しての整理手順と検討が必要であろう。

また、上記のような蛇足を言するためには、報告の掲図にあっては、住居内外ピットなどについても、少なくとも「検出」したものである以上、調査者の任意で取捨選択して掲示すべきではなく、記録保存である以上、事後の検討資料として残すべきで、あくまでも掲示することを前提とし、説明のなかで、当該住居への内外のピットなどの「関係」の是・非の根拠を明示すべきであろうと考える。

以上のようにしないと、掲図されないピットなどは、「出土」しなかったことになり、事後の検討の余地は消失し、遺跡・遺構を巨視的にみることも、また不可能となろう。

したがって、以後の説明では、通例の報告以上に、逆に煩雑な文章（掲図）となろうが、以下のような住居施設の統一名称・番号を使用させていただくので、**留意されたい**（第153（註1）図）。

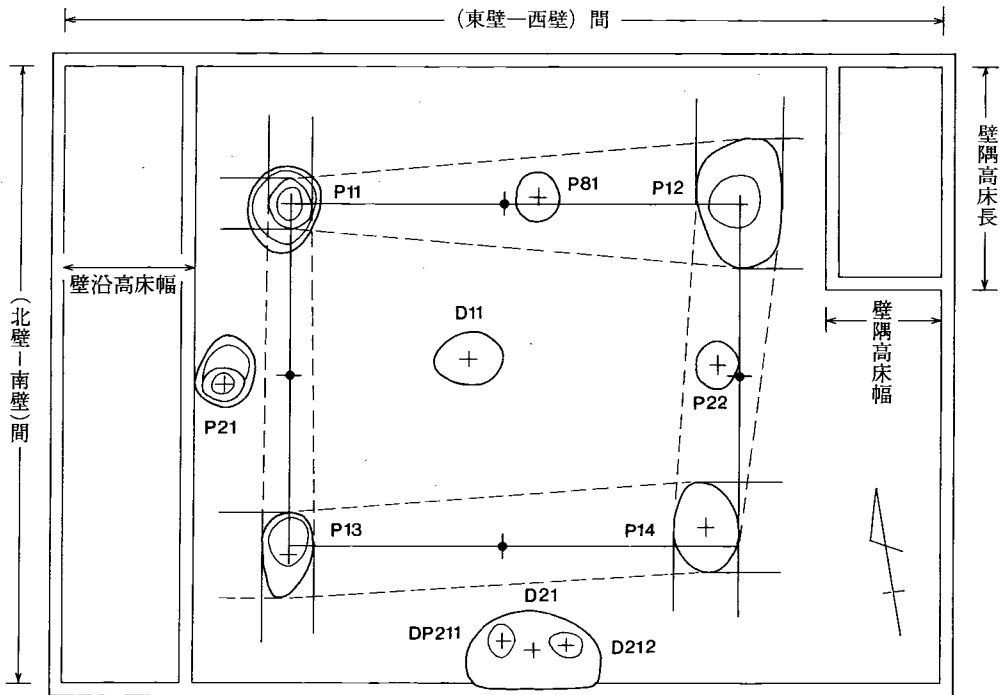
床中央部土壌（中央土壌） D11から付す。床中央部付近に配された土壌で、所謂、炉・焼土壌と通称される例。

なお、D11内に配された柱穴様小ピットは、DP111から付し、他の柱穴・柱穴様小ピットとは識別する。

壁中央部土壌（壁土壌） D21から付す。壁中央部付近に配された土壌。

また、D21内に配された柱穴様小ピットは、DP211から付し、他の柱穴・柱穴様小ピットとは識別する。

壁沿高床・壁隅高床 所謂、**ベッ・ド・状・遺・構・ベッ・ド**と通称されるもので、壁沿いに長く配される例を壁沿高床、壁隅に短く配される例を壁隅高床とする。



第153図 住居の支柱筋・計測トンボ位置模式図

壁溝・高床沿溝・床溝・区画溝 M11・M21から付す。方・円形住居壁沿いに配された壁溝、高床沿いに配された高床沿溝、高床を配さないが高床平面プラン同様に配された区画溝、その他床面に配された溝。

なお、壁中央部土壇と同様の位置で、床面を中央部と壁沿中央部とに区画する溝は、方形(円形)区画溝として、他の溝と識別する。古墳前・中期に例が多い。

方形(円形)区画 H21から付す。上記の溝で区画されたり、中央部床の張床材土とは別途の(意図的に識別した)張床材土で、壁中央部を張床した区画。

また、同一壁の片側にのみ壁隅高床を配した例では、この高床部を除く同一壁沿の床部や、同一壁部両端に配した壁隅高床間の間隙部床面。

なお、この区画内に配された柱穴様小ピットは、HP211から付し、他の柱穴・柱穴用小ピットとは識別する。

張床 住居構築に必要な規模のほぼ平坦な床面を、地山掘削部のみで確保し得た後で、その削平地山平坦面上に、除湿や化粧などのために張る床。

また、上記の床掘削時、あるいは事後に掘削した壁溝を、ほぼ同時に埋設するために張る床。なお、旧来の住居の土壇・高床・柱掘形などを、新出の住居に建て替える際に埋設するため

表1 住居の模式計測表

主軸方向	欠番	桁行A	梁行B	桁行柱間 a_2	梁間 b_2	測点A	測点B	番号	標高 註3
東 - 西	P12・41	P ₁₁ -P ₁₂ (335)	P ₁₁ -P ₁₂ 297	334 註1	296	東主柱筋-高床	東壁沿高床長	P ₁₁ P ₁₂	47.80 47.83
N-80°-E	DP212	P ₁₃ -P ₁₄ 333	P ₁₃ -P ₁₄ (295)	測点 a_3	測点 b_3	東壁沿高床幅	高床-南壁	P ₁₃ P ₁₄	47.81 47.75
検出面標高		平均	296	西壁沿高床幅	北壁-P ₈₁				
P ₁₁	48.02	棟持柱間 a_1	単位: cm	高床東縁-P ₂₁	P ₈₁ -北主柱筋	西主柱筋-DP ₂₁₁		P ₂₁ P ₂₂	47.60 47.63
P ₁₂	未検出	334							
P ₁₃	48.05	P ₂₁ -P ₂₂ 392		高床東縁-P ₂₁	P ₈₁ -北主柱筋	D P ₂₁₁ -D ₂₁		D ₁₁ D ₂₁	47.90 47.72
P ₁₄	48.00			P ₂₁ -西主柱筋	北主柱筋-D ₁₁	D ₂₁ -D P ₂₁₂		D P ₂₁₁ D P ₂₁₂	47.65 未確認
P ₂₁	48.01	1間×1間		西主柱筋-D ₁₁	D ₁₁ -南主柱筋				
P ₂₂	48.03	主柱 4		D ₁₁ -東主柱筋	南主柱筋-D P ₂₁₁	D P ₂₁₂ -東柱筋			
壁	48.50	棟持柱 2							
高床	48.20	補柱 1		D ₁₁ -東主柱筋	南主柱筋-D P ₂₁₁				
中床	48.05	壁沿・壁間高床各1		東主柱筋-P ₂₂	D P ₂₁₁ -D ₂₁	D P ₂₁₁ -D P ₂₁₂			
		床面積 m ² 註2		P ₂₁ -東壁	D ₂₁ -南壁	測点 a_2			
				西壁-東壁	北壁-南壁	P ₁₁ -P ₈₁			
						P ₈₁ -P ₁₂			

単位: m

註3 底面の標高
 註4 $A \div B$
 註5 $a_2 \div b_2$
 註6 $A - B$
 註7 $a_2 - b_2$
 註8 $a_1 - A$
 註9 $a_2 - (西壁 - 東壁)$ 間

註1 仮に、1間×2間の規模例では1/2の117

註2 住居主軸・主軸直交軸下での(西壁-東壁)間×(北壁-南壁)間

桁行比	桁行柱比	桁行差	棟持柱差	棟持柱差	棟持壁差
1.13 註4	1.13 註5	38 註6	38 註7	58 註8	註9

に張る床も、埋設そのものに特別な配慮（祭祀的配慮）がなされたと考えられるが、明確な祭祀遺物の出土・祭祀行為の検証が示されない例については、単に張床と呼称する。

祭祀張床 上記の祭祀行為として、土器・石製品・祭器などを、意図的に柱抜去掘形・土壌内に埋設・埋納するために床を張ったことが検証される張床。

また、主柱・棟持柱の掘形や、建て替え前の旧来の土壌などを、^(註2) 特別な配慮を以って、他の床面部張床材土とは識別された張床材土で張られた床。

盛床 丘陵傾斜面部での住居構築で、斜面堆積土や地山部のみの掘削面だけでは、必要規模のほぼ平坦な床面全体の確保が困難なため、傾斜したままの削平面上に客土・整地し、ほぼ平坦に盛る床。

なお、上記の盛床での住居は、丘陵傾斜面の標高上位側では竪穴壁は所在するが、標高下位側での竪穴としての壁は所在しないことになり、住居構造そのものを検討すべきことになる。^(註3)

また、以上の統一名称・番号を使用しての住居説明を補完するものとして、表1の住居模式計測表を、各住居別に作成・報告するが、その検討成果の一部を示すと、以下のとおりである。

住居各施設の計測値と算出値について

桁行A 構築者〔群〕の住居規模の決定〔規制〕と、住居主軸（桁行柱筋・棟持柱筋）方向の決定〔規制〕は、住居構築に際し、集落内での特別に配慮すべき事項〔規制〕であった可能性が強く、この計測値は、集落内で統一〔規制〕された可能性が強い構築基準単位の整数倍として算出される例（各住居計測表の算出値参照）がほとんどである。

梁行B この計測値は、上述基準単位の整数倍として同様に算出される例（同参照）もあるが、むしろ、整数倍から0.5を加・減して算出される例（同参照）が多い。

このことは、主柱間の軸組み構造上から、特に弥生期の梁間1間型では、計画規模から0.5の幅広げ・幅寄せが住居構築に際しての原則であったことを強く示唆する。

棟持柱間a₁ 主柱を別途に配さない棟持柱のみの配置や、梁行柱筋から大きく離れた独立棟持柱配置では、既述の桁行A同様に、屋根構造上の問題以上に、集落内で統一〔規制〕された可能性が強く、この計測値は、既述基準単位の整数倍として算出される例（同参照）がほとんどである。

しかし、梁行柱筋に内・外接する棟持柱配置では、既述の梁行B同様に軸組み構造上、計画規模（桁行Aの算出値の整数倍）から0.5の拡大・縮小が、住居構築に際しての原則であったことを強く示唆する。

床中央部土壌D11・柱穴様小ピットDP111の配置 D11（DP111）の中心が、住居中心0に一致した計測値を示し、既述単位の整数倍として算出される例もあるが、むしろ、住居主軸・主軸直交軸下、あるいはこれら軸に外・近接、あるいは桁行柱筋下や桁行柱筋に外・近接する位置に配されているにもかかわらず、D11（DP111）の中心の計測値が、既述基準単位の整数倍と

して算出（本年度では計測表での算出を略）される例が多く、既述同様の〔規制〕を強く示唆する。

なお、この土壌壁が強く熱変焼土化していない状態で、時には土壌を遺棄時に浄化したり、播火を施した状況で検出される例がほとんどで、土壌掘削・配置に限らず、使用～遺棄に至るまでも同様の祭祀的規制が所在したことも看取される。

また、土壌内で柱穴様小ピットを検出し得る例でのD P111の位置も、土壌同様に留意事項となるべきことで、所謂、松菊里型の円形・松菊里型残影の方形住居に伴う中央土壌と、土壌内外で検出される柱穴様小ピット（所謂、柱穴）との関係を検討する際の留意事項ともなる^(註4)。
壁中央部土壌D21と柱穴様小ピットD P211・212の配置 住居主軸方向と同じ方向の壁で、住居出入り口施設配置側の壁を除く（カマド付設期では、カマド配置側の壁を除く）壁側に、前述D11同様に、主軸直交軸下や同軸に外・近接する位置で、中心の計測値が既述単位のほぼ整数倍として算出（同略）される例が多い。

なお、整数倍として算出される例が若干少ないのは、当時の形状のまま遺存・検出されにくい性格上の問題以上に、土壌内で2個対の柱穴様小ピットや部材アタリ痕のD P211・212配置にこそ、D21を止揚した特別の配置と既述の規制がなされていたことを強く示唆するもので、このD P211—D P212間の計測値が、既述単位そのものとして算出（同略）される例も多く、また、整数倍として算出される例も多い。

加えて、D P211・212の両者、あるいは片方の位置が、桁行柱筋や梁行柱筋から既述単位の整数倍として算出される例がほとんどである。

なお、現況は遺物であるが、使用時には特別の配慮をすべき遺物が、意図的に埋納・遺棄した状況下で検出される例（第23図・付図5、住4号D21内砥石）も多いことも、この土壌の構築・配置に限らぬ使用～遺棄～遺棄後における祭祀的規制が所在したことも看取できる^(註5)。

また、建て替えに際し、旧来のD21を埋設し、新たにD22を掘削した例では旧来のD P211・212に重複させることなく新出のD P221・222を別途に配することを原則とし、旧来のD21を再使用する際にも、別途のD P221・222を配することを原則とすることからも、既述構築者（群）にとって、この土壌や柱穴様小ピットの配置は、祭祀的回帰性として重要な事項であったことを強く示唆するものであろう^(註6)。

壁中央部方形（円形）区画H21と柱穴様小ピットH P211・212の配置 前述のD21・D P211・212同様の配置で、同質の計測値・算出値（同略）を示す。

上記のことからも、住居説明の統一名称・番号の項で既述したように、住居の重要な施設（空間域）として把握すべき（慎重に検出すべき）区画と言えよう。

壁沿・壁隅高床、区画溝の配置 既述のD21（D P211・212）・H21（H P211・212）と同質。幅（加えて壁隅高床・区画溝では長さ）の決定〔規制〕は、住居構築に際しての祭祀的回帰性とし

て重要な事項であったと考えられ、この計測値も、既述単位の整数倍として算出される（同略）例がほとんどである。^(註7) (馬田)

註)

1. 本年度の住居報告は、弥生期に限っているため、模式図からカマドや区画溝などの施設の掲示を省いたので、弥生期以外例については、下報の報文を参照されたい。

馬田弘稔編 「塚堂遺跡IV」(『一般国道210号線 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集、福岡県教育委員会、1985)

馬田弘稔・小川泰樹編 「栗崎遺跡」(『福岡県文化財調査報告書』第120集、福岡県教育委員会、1995)

2. 北九州市所在の重留遺跡の第2地点1号住居銅鉢「埋納土坑」出土の広形銅鉢の検出状態も、「埋納坑」を、近接する2基の埋設された「貯蔵用竪穴」(壁中央部土壌)との回帰的に同質の施設として把握し、「埋納土坑」上面の特別な材土についても、この祭祀張床を考慮に入れた検討が必要かと考えられる。

谷口俊治・山手誠治 「北九州市重留遺跡第二地点の発掘調査」(『平成8年度 九州史学会大会公開講演・研究発表会要旨』、九州考古学会、1996)

3. 次年度に報告する、丘陵の南急傾斜面部に構築された住居群に例がある。
4. 次年度に報告する、丘陵平坦部(現況)で、以来尺遺跡で松菊里型残影の円形住居が2例のみ出土している。
5. 註2参照
6. 註2参照
7. 註1の塚堂遺跡D地区9号住居は、5世紀前半代のカマド付設の初期例であるが、中央部床面レベルより約27cmも高い壁沿高床と区画溝を配し、加えて、壁中央部土壌内から倒立の甕が検出されており、好例と言えよう。

また、このような強い規制と回帰性が看取されるが故に、所謂、ベッド状遺構(ベッド)と通称されるこの施設を、本報告では、一段低い中央部床面に対峙する一段と高い壁沿い(壁隅)部の床として識別し、「高床」と呼称するものである。

なお、高床建物と呼称する際の「高床」との無用の混乱を生じるとの叱責については、高床建物なる呼称を単なる建築構造上の識別としてではなく、構築者(群)の建物施設としての機能・用途上の属性(例えば高殿)として把握しようとするとき、住居施設としての「高床」を、低い中央部から識別する(認識する)ことが必要と考えられる。

住居説明の統一名称・番号(第153図)

主柱穴(主柱) P11から付す。4主柱配置と考えられるが、P13の位置で出土しなかった例でもP11~14を使用し、住居計測表(以下、表と略)に、P13を欠番と明記する。

また、欠番の事由について、表中に、検出作業を充分に実施しなかった例については、「未確認」、実施したが検出されず、その事由が新出住居構築に因るとの検討成果を得た例については「欠失」、作者員の皆さんへの指示不徹底の担当者ミスが主因や、新出住居施設として再使用、重複に因るとの検討成果を得た例については「未検出」・「重複」と明記する。

棟持・主軸柱穴（棟持柱・主軸柱） P21から付す。

なお、住居主軸下のP21と対峙する側で出土しなかった例も、前述同様にP22も使用し、表中に欠番の事由を明記する。

また、弥生期以前～弥生期前期頃では、当初から1棟持柱配置をとる例があるので、このときはP21のみ使用する。

加えて、古墳期以降などでは、梁間2間型で、その梁行中央の柱穴が、棟持柱（通し柱）と異なる例もあるので、この例では主軸柱（穴）の名称も使用することがある。

主軸間柱穴（主軸間柱） P31から付す。主柱や棟持柱からやや離れ、P31—P32間の距離がP11—P12間・P13—P14間よりも小さい例。

なお、棟木支柱法として、当初から、棟持柱P21と対峙する側のみに主軸間柱P31・32を配す例が弥生前期頃に、円形住居を主として認められる。

対角柱穴（対角柱） P41から付す。主柱から離れ、主柱や壁隅の対角線上に位置する例。

なお、P41—P43間の主軸下にも柱穴が配され、P41—P43柱筋が主柱筋との軸組みで配されている例では、これらを後述する補柱P81～とし、P41～の番号を付さない。

壁柱・壁堤柱様穴（壁・壁堤部材） P51やP511から付す。

住居壁に配された例や、壁に近い住居内・外の柱穴様ピットを、P51から付す。

また、壁から離れ、壁堤に配された柱穴様ピットを、P511から付すが、この柱穴様小ピットについては壁施設や垂木尻固定などの部材用の掘形・杭痕と考える。

なお、この壁・壁堤部材用の柱穴様柱穴も、説明文中では、柱穴の通称で記す。

施設柱穴（施設柱） P61から付す。住居内・外に位置し、住居への出入り口やカマドなどの施設に伴うものとして配された例。

環状柱穴（環状柱） P71から付す。円形住居や、一部の隅丸方形住居などで、環状に配された例。

なお、環状柱穴のなかで、主柱・棟持柱（主軸柱）・主軸間柱は、各該当番号を付し、区別する。

補柱穴（補柱） P81から付す。

弥生期にあっては、梁行×桁行が1間×1間型が原則的な軸組みの構造上、主軸間中央部に配された柱を、主柱を補完する柱と考え、主柱と区別する。

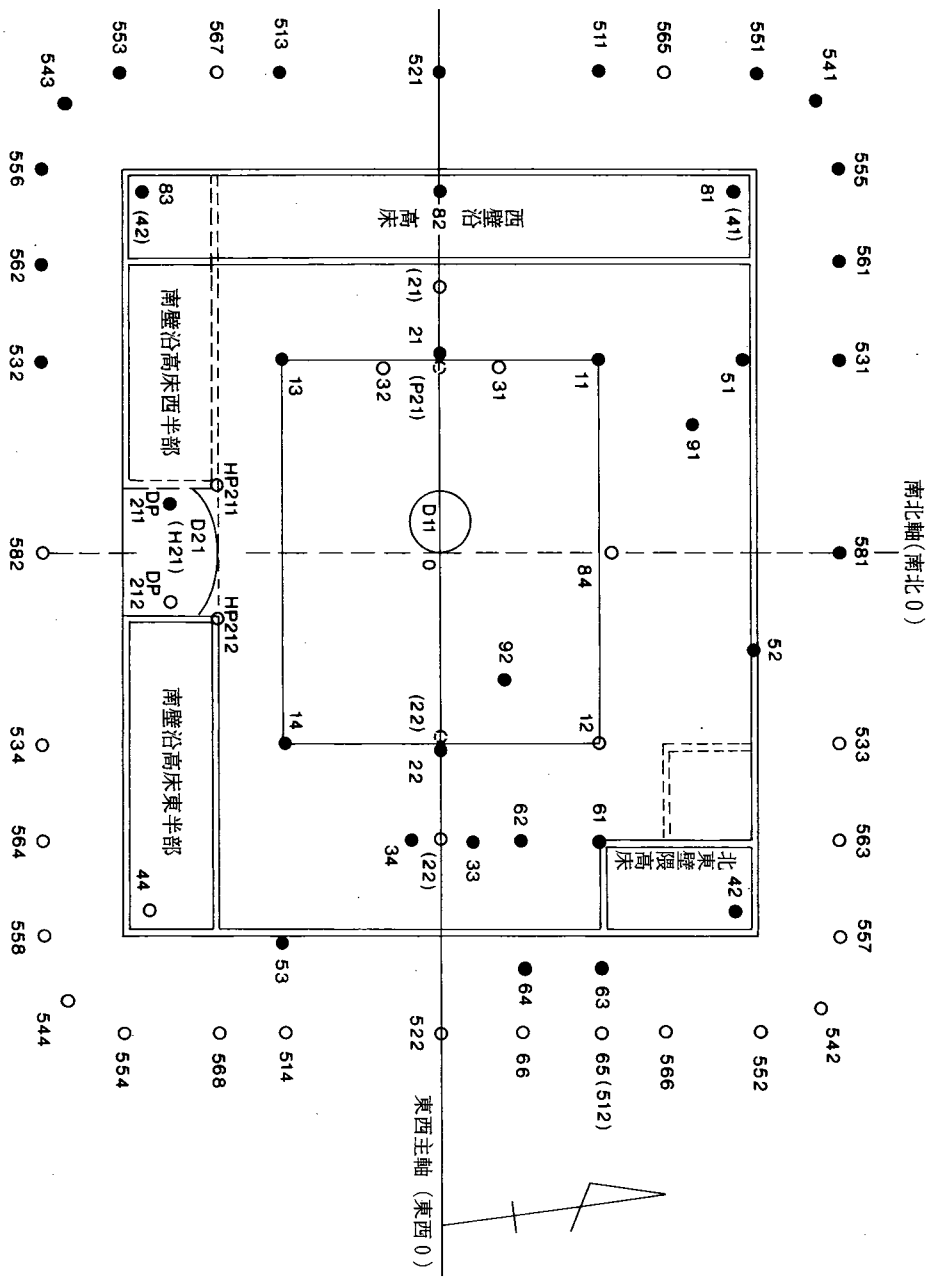
その他の柱穴・柱穴様ピット P91から付す。上記以外の柱穴や柱穴様ピット例。

住居主軸 P11—13間とP12—P14間の中軸。

なお、棟持柱のみの配置例では、P21—P21柱筋。

住居主軸直交軸 P11—P12間とP13—P14間の中軸。

なお、棟持柱のみの配置例では、P21—P21間の中心を通り、住居主軸と直交する中軸。



第154図 住居施設の統一番号模式図

住居中心 0 住居主軸と住居主軸直交軸との交点 0。

住144号A～C号

建2002号群(建2002～2004号)。住144号群(住144・1024号)・住1025号の重複関係

住144号は、建て替えが2回行われており、切り合いによる新・旧関係を旧→新で示すと、住144号C→住144号B→住144号Aの順になる。

なお、上記のことは、床中央土壌・壁中央土壌の各重複関係や、南西壁隅下での埋設された壁沿溝などの検出で、調査中の段階で看取できた。

また、住144・1024・1025・1031・1052号と建2002～2004号と溝1などの遺構間の切り合いによる新・古関係を古→新で列記すると、以下のとおりである。

①建2002～2004号は、平面プランでは重複関係にあるが、柱穴間での切り合いは建2002号の柱穴P5が建2003号の柱穴P5掘形を切るだけである(建2003号→建2002号)。

②住144号Cが、建2003・2004号を切るが、住144号Aは建2002号に切られる(建2003・2004号→住144号→建2002号)。

③住1024号は、住1024号B→住1024号Aの順に建て替えられ、住144号Aと建2003号を切るが、建2002号に切られる(建2003・2004号→住144号→住1024号→建2002号)。

④カマドを配した住1025号は、住1024号と建2002号を切るが、中世の溝1に切られる(建2003・2004号→住144号→住1024号→建2002号→住1025号→溝1)。

⑤住1052号は、住1052号→住1031号B→住1031号Aの順に建て替えられ、住1052号が建2002号を切る。

また、住1031号Aは、住1027号→住1021号の順に建て替えられた住1032号と建2004号を切るが、住1025号に切られる(建2003・2004号→住144号→住1024号→建2002号→住1052号→住1031号→住1025号→溝1。住1027号→住1032号→住1052号→住1031号→住1025号→溝1)。

以上の①～⑤を、旧住居から新住居へと建て替えたことによる切り合い関係を旧→新で、その他による切り合い関係を古→新で明示すると、遺構間の切り合い関係は下記⑦・⑧のとおりである。

⑦建2003・2004号→住144号C→住144号B→住144号A→住1024号B→住1024号A→建2002号→住1052号→住1031号B→住1031号A→住1025号→溝1(計13遺構間)

⑧住1027号→住1032号→住1052号→住1031号B→住1031号A→住1025号→溝1(計7遺構間)。

なお、⑧には住1029・1033号(住1007・1031・1029号群)で説明の10遺構間・建2011号(建2011号群・住1041号群・住1046号群)で説明の18遺構群間との切り合い関係が加わる。)。

遺構群の新旧・新古関係と居住空間・生活空間の占有域・容認域

ところで、建物では、前述のように、柱穴間の切り合いは建2002号P5と建2003号P5とに

認められるだけで、他の柱穴間にはないが、3棟は平面プランですべて重複する。

また、住居では、旧住居→新住居間の切り合いに因る重複は、住144・住1024号・住1031号(住1052号)の三者共に、旧住居の一部(高床部を除く)を埋めもどす(埋設する)ことなく、旧住居壁の一部を破壊して(拡大して)建て替えたことによるものである。

上記の「高床幅」を限度とした重複は、居住空間の占有域下での重複(移動)が原則的であったことを示唆するものと考えられる。

また、建2003号(主軸N-80°-E)→住144号C(同N-84°-E)間での各住居・建物主軸はほぼ一致し、建2004号の平面プランも、住144号A～Cの平面プラン内で重複し、特に、建2003号の東柱筋は、建2003→住144号C→住144号B→住144号Aであるにもかかわらず、住144号Aの東壁に近接すると共に、その東柱筋と東壁方向は一致するに等しい。

上記のことから、出土遺物未検討下での言及ではあるが、建2004号→住144号A・B・C間には、生活空間の占有域に対する規制が継続していると指摘することができよう。

また、この規制は、隣接する住144号A(主軸N-78°-E)→住1024号B(同N-75°-E)間でも指摘でき、出土遺物未検討下での言及ではあるが、住144号の西側・住1024号の東側には住居・建物が構築されていない空間域が所在するにもかかわらず(付図2)、両住居壁間は遺存平面プランの現況でも約50cmと近接し、壁方向も一致する。

上記に加えて、〔建2004号→住144号→住1024号〕という古→新関係の建2004号平面プランが両住居間に及び、住144～1024号北壁と住144号南壁～住1024号南壁間内でほとんど構築されていることから、建2003・2004号～住144号～住1024号間には、居住空間の占有域と生活空間の容認域に対する強い規制が継承されていることが看取されよう。

なお、上記の占有域・容認域やその拡大などの事項については、出土遺物の検討を経て、次年度で言及することとしたい。

144号A住居

主柱P11～14は、P11～P13の西柱筋・P12～P14の東柱筋をそれぞれ南西壁隅高床・東壁沿高床近くの低い中央床面部に配し、P13～P14の南柱筋も含めて、いずれも各壁から大きく離す。

しかし、P11～P12の南柱筋のみは北壁に接した配置をとることから、標高が南壁側よりも高い北壁側には、北側斜面上位からの降雨時の流水を防ぐ屋外周堤に加えて、漏水・浸透水を防ぐため、盛土を加えて壁高とした屋内壁堤を配したと思われる。

なお、棟持柱は、東側のP22がP12～P14の東柱筋に外接するが、西側のP21はP11～P13の西柱筋から50cm以上も住居中央部寄りの独立棟持柱配置をとることや、西側北半部のみが高床・壁土壇D21などの施設を配していないことに加えて、前述の屋内北壁堤などから、この西

壁北半部に住居の出入り口施設を配したことが考えられる。

144号B住居

4個の支柱穴は、144号A（新）同様にP11-P12の北柱筋のみ北壁に近接して配し、北側に周堤・壁堤を配したものと考えられる（144号Cも同）。

壁沿・壁隅高床は配されず、144号A（新）で配された南西壁隅高床下で壁溝を検出した。

144号C住居

主柱4・棟持柱2以外に、東壁寄りで、主軸間柱穴P31・32を配す。

なお、西壁側には主軸間柱を配されていないことから、144号A・B同様に西壁北半部に出入り口施設を配したものと考えられる。（馬田）

遺物（第156図 第231図22~27 第239図61 第243図13・15 第229図4 第246・247図1~198 第81~84表）1は袋状口縁壺の口縁部破片で、復元口径は21.6cm。摩滅のため器面調整は不明。2・3は壺の肩部破片で2は刻み目の貼付け突帯が、3は断面三角形の突帯がつく。4は壺の下半部片で、復元底径8.0cm。底部はレンズ状で内面は丁寧なナデを施し、外面には一部ハケ目が残る。5~8は甕の口縁部から胴部上半部の破片である。5は復元口径13.6cmの小型甕で、頸部外面にヨコナデを施すがその他は摩滅のため調整不明。6は口縁部の小片で、内面にナデを施す。7は壁中央部土壌出土。中型甕の口縁部片で、復元口径41.0cm。全体に摩滅気味であるが、頸部外面はナデ調整を施している。8・9は甕の底部片で、復元底径8.0・7.6cm。双方とも摩滅が激しく器面調整は不明である。10は口縁が外反する小型の鉢で、復元口径13.0cm・復元底径5.4cm。口縁部外面にナデを施すが、その他は摩滅のため調整不明。11は丸みを持つミニチュアの底部片である。復元底径2.3cmで、内部は丁寧にナデを施す。

第231図22~27は石庖丁で、22・24・25・27は埋土から、23・26はピットからの出土である。22は両端部を欠損する。丁寧な作りで刃部は幅広く作り出し、研磨痕が僅かに残る。両面から穿孔し、紐擦れが認められる。23はほぼ完形に接合されたもので、全面に粗い研磨痕が窺える。刃部は端部まで及ぶが使用痕は一方に偏る。図面右側は、使用による再三の研磨で変形している。穿孔は両面から行っており、両面の孔周辺に穿孔時の工具痕が明瞭に円形に残る。24は刃部を広く作り出すもので、端部まで及ぶと思われる。研磨は丁寧であるが、敲打痕が僅かに残る。両面から穿孔しており、孔周囲に工具痕が残る。25は刃部を端部まで広く作り出し、使用痕も端部まで窺える。研磨はやや粗く、両面からの穿孔である。26は刃部を端部まで作り出し、使用痕も端部まで及ぶ。研磨は丁寧で、両面から穿孔する。27は両端部を欠損する。刃部は端部まで作り出し、使用痕も湾曲部のみである。研磨は粗く、全面に研磨痕が残る。両面からの穿孔で、紐擦れが窺える。第239図61は砥石で、表面が剥離し上面しか残らない。表面僅かに窪

むが、使用痕ははっきりしない。

第243図13は鉈で、先端部と柄尻部を欠く。現存長10.5cm・幅1.3cm・厚さ0.2cmで、断面は弧を描き明確な稜は持たない。先端部は先細りになるので端部に近いと思われるが、刃を立てた部分がない。15は棒状鉄器で、一方の端部を欠く。現存長9.8cm・幅1.3cm・厚さ1.2cmで断面がほぼ方形となる。形状から先端部を欠いた鑿になる可能性がある。

第239図4は土製の玉で、穿孔はない。丁寧に整形され、外面は黒灰色、断面は淡黄灰色を呈する。直径1.95cm。

第246・247図1～195・197・198は住居の埋土を篩って出土したもの、196は土坑1から出土したガラス製の玉である。1～188・196は小玉で、1～73はスカイブルー、74～82はややくすんだスカイブルー、83～95はコバルトブルー、96～103は紺、104～188・196はブルーを呈する。径は2.5～6.0mm、厚さ1.0～5.5mm、重さは150mgから計測不可能な軽いものまでで、色調による技法の違い、サイズの違いは特に見られない。189～195は栗球で、ブルー・紺・スカイブルーを呈する。径は2.0mm前後、厚さは1.0mm前後である。197・198の管玉で、197は透明感のない赤色、198はブルーを呈する。玉類については、第81～84表に個々の計測値を示す。(齋部)

1001号竪穴住居跡 (図版104 第155図 表7・8)

重複関係

住1001号は、建て替えが1回行われており、切り合いによる新・旧関係を旧→新で示すと、住1001号B→住1001号Aの順になる。

上記のことは、住1001号AのP13が住1001号BのP13を切ることから確認できた。

1001号A住居

支柱穴P11～14を配す。

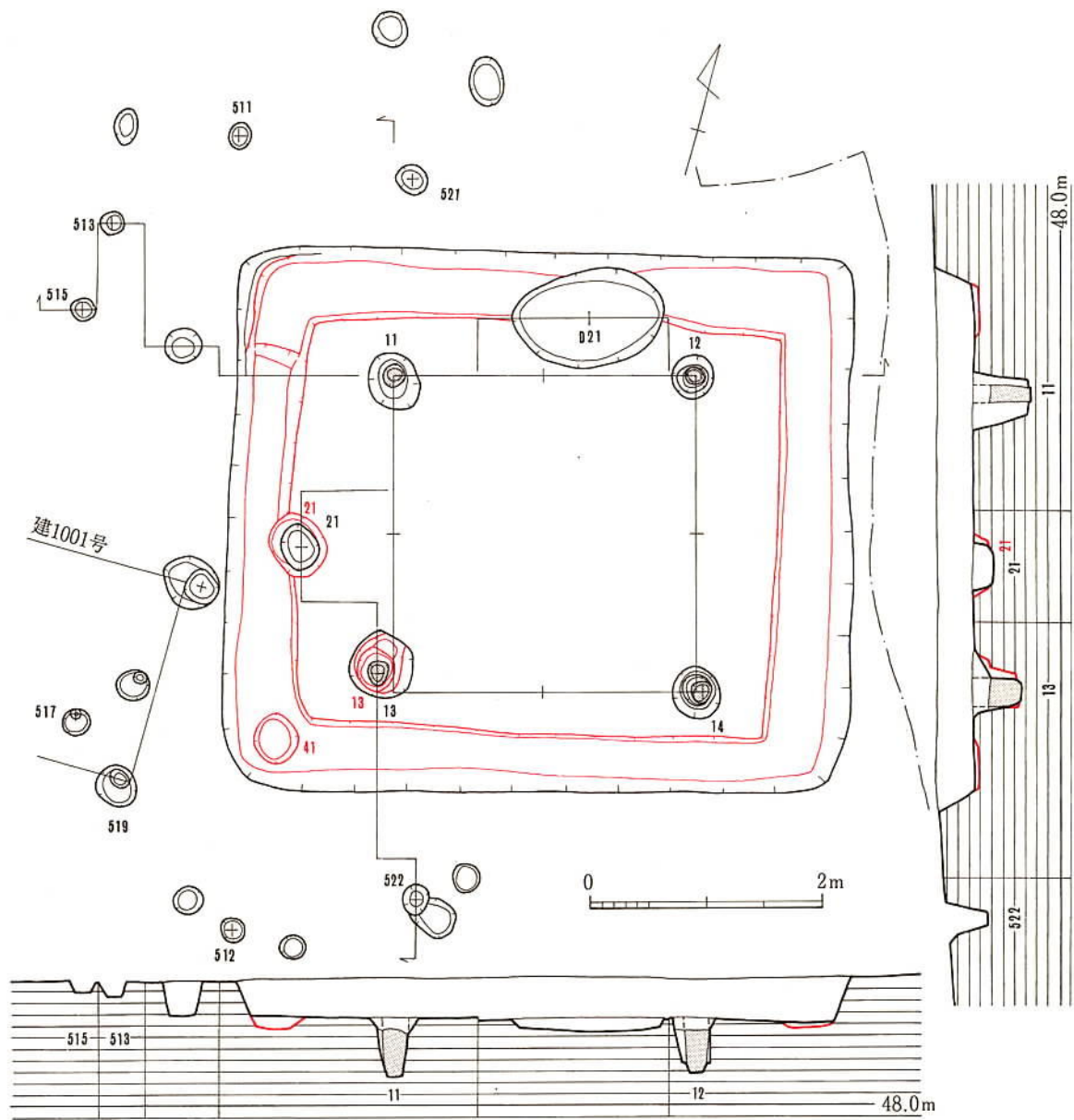
各壁沿溝は、幅30～40cm・深6～12cmを測り、掘削後に、床中央から壁部へと若干低くなるように埋めもどしており、床中央部の除湿効果を配慮したものか。

棟持柱穴P21は、西壁沿溝を埋設後に掘られていることを確認し、P22も東壁沿溝埋設土中での検出に努めたが、確認できなかった。

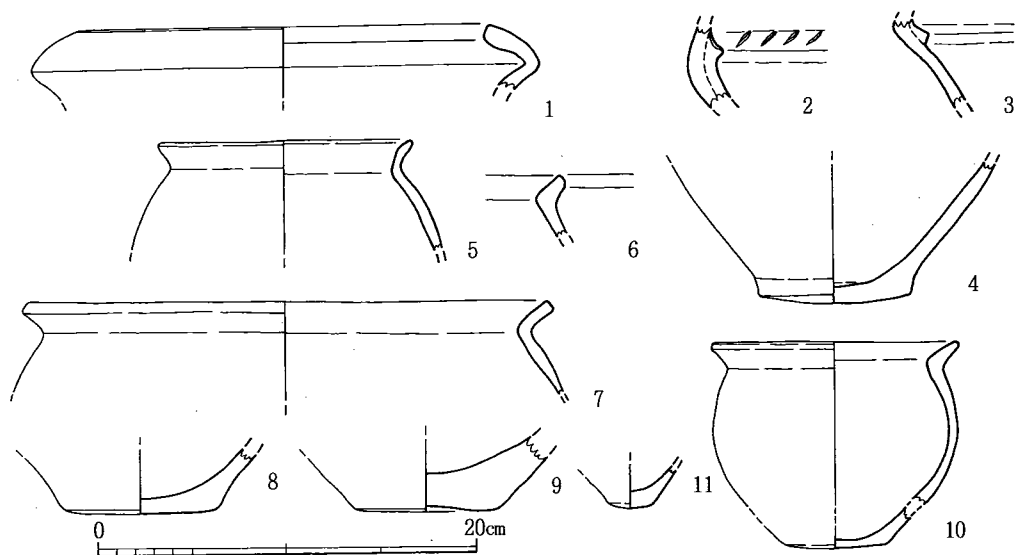
壁隅柱穴も、P43を除き確認できなかったが、P21と共に地山に至るほどの深さには掘り込まれなかったものか。

ところで、中央土壇D11は、若干、床地山面を下げてもの検出作業に努めたが確認できず、当初から、意図的に配さなかったものとして留意すべきことで、建1001号で後述するように、住1001号が集落内部で特別の属性を有することを強く示唆するものである。

また、住居の外周部で検出したP511などの柱穴様ピット群は、建2011号、住1046号群で後述



第155图 1001号A·B竖穴住居跡实测图 (1/60)



第156図 144号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

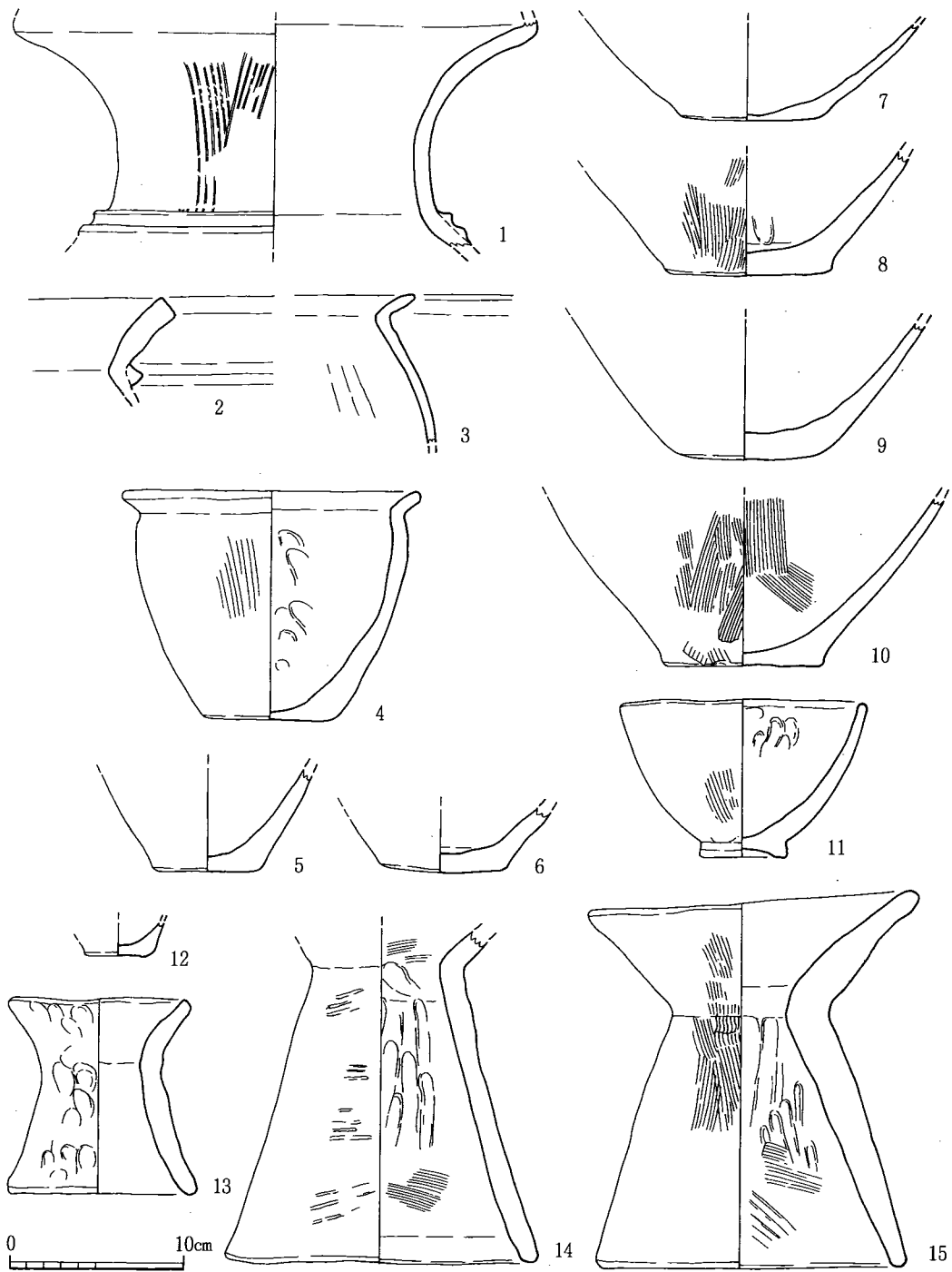
のように住居東側に図示した境界外での柱穴様ピット群確認作業を実施していないが、住1001号の柵列痕、あるいは、垂木尻を固定する杭痕とも考えられる。

住1001号B住居

主柱・棟持柱・壁隅柱などの柱穴や壁土壇配置は、ほとんど建て替え後の住1001号Aのものに重複すると考えられる。

また、中央土壇D11は、住1001号Bに配されたD11痕を残さないまでに床面を地下げして、住1041号Aの床面を構えたと考えより、住1001号A同様に、当初から設けなかったものとした。(馬田)

遺物 (第157図・第231図28・第243図1) 第157図1は袋状口縁壺の頸部で、二条以上の突帯を持つ。外面には暗文を施し、突帯部分はヨコナデを施す。2・3は甕の口縁で、小片のため復元は不可能。2は内面にナデを、3は内外面工具によるナデを施す。4は小型の甕で、復元口径15.4cm・底径7.8cm・器高13.4cm。摩滅が激しいが内面僅かにナデの痕跡が見られ、底部には二次加熱を受けた痕跡が見られる。5～10は甕の底部片。10はやや古い様相を残すが、9のように底部がレンズ状になるものもある。いずれも摩滅が激しく器面調整は不明瞭であるが、一部内外面のハケ目と底部内面のナデが窺える。11は低い高台付の鉢で、復元口径14.0cm・復元底径5.2cm・器高9.2cm。内外面とも摩滅が激しいが、外面にハケ目が内面にナデが僅かに残り、高台付近は丁寧にナデする。12はミニチュアの底部で、内部に指圧痕とナデが残る。手捏ねか。13～15は器台である。13は小型の完形品で、口径10.7cm・器高11.5cm・裾径11.1cm。外面



第157图 1001号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

は粗いタテナデを、内面は丁寧なヨコナデを施す。二次加熱による変色はない。14は復元裾径18.2cm。外面はタタキ痕を残し、内面上位・裾部はヨコハケ、中位はタテナデを施す。二次加熱を受け、一部赤変する。15は復元口径19.2cm・復元底径8.0cm・器高20.4cm。内外面にハケを施し、内面はその後中位をナデる。二次加熱を受けた痕跡がある。

第231図28は石庖丁。器面をほとんど残さないが、刃部を端部まで作り出し、使用痕も端部まで窺える。

第243図1は現存長4.4cm・幅3.0cm・厚さ0.3cmの鉄鎌で、基部を丸く抉った無茎鎌である。中央に2箇所穿孔しており、擦れたような使用痕が見られる。(齋部)

1002号竪穴住居跡 (遺構に関しては来年度に報告)

遺物(第158図1～3)甕の小片が出土。1はくの字に屈曲する口縁片で、復元口径22.0cm。内外面をナデ調整する。2の底部片は平底で復元底径8.0cm。摩滅のため器面調整は不明。3は復元底径5.4cm。外面一部粗いハケ様の擦痕が残り、その他はナデ調整。(齋部)

1007号竪穴住居跡 (図版75～79 付図4 表9) (遺物に関しては来年度に報告)

重複関係は、住1029号で詳述。

住1007号は、以来尺1号墳や住1029号群などで切られ、北壁の一部の残すのみであるが、刀子が出土した。

1024号竪穴住居跡 (図版75 付図2 表10・11)

重複関係

144号住居で詳述。

住1024号は、B(古)→A(新)の順に建て替えられている。

住1024号Bは、建2004号のP3を切る。

住1024号Aは、住1024号Bで配された南西壁隅高床を継続して使用するが、この高床の一部を建2002号のP1で切られ、南壁部も住1025号で切られる。

また、住1024号Aの北壁側の壁柱穴P511・521は、住144号Aを切る。

1024号A住居

4個の主柱穴のなかで、P13は新出の住1025号に因り欠失する。

住居壁柱穴は、西壁側で北主柱筋P11—P12下でP52・南主柱筋P13—P14下でP53・棟持柱筋下でP53・東主柱筋P12—P14下でP54を配すが、東壁側は後述する施設柱P61・62で兼用したものと考えられる。

入口施設としては、東壁北半部に幅89cm・長さ172cm・中央部床面からの高さ11cmの張り出し部を設け、住居内外に**入口施設柱** P61～66を配す。^(註1)

また、**壁堤柱穴**を各主柱筋延長下と壁隅外に配すが、P511と対峙する東側の壁堤柱は、入口施設柱P62で兼用したもので、P65も壁堤柱兼用と考えられる。

補柱は、P11—P12柱筋下中央部にP81を・P13—P14柱筋下の南壁中央土壌内にP82を配す。^(註2)

高床は、南西壁隅に建て替え前の住1024号Bで配したものを再使用した幅広の壁隅高床と、北壁沿い高床を配す。

なお、後者の東部は段差を設ける。^(註3)

住居遺棄後祭祀

ところで、南西壁隅高床のコーナー部から東縁部にかけて、強い熱変をうけ、赤褐色に硬く焼土化していた。

この焼土化は、建2002号P1の柱穴壁全体と主軸柱穴P21壁の一部に及んでいた。

なお、建2002号P1の柱穴内埋土は焼土化が認められず、焼土の細ブロック塊を含む暗褐色土で、P21の埋土は焼土粒を含まぬ暗褐色土であった。

また、壁隅高床～中央床上面の住居埋土や、壁隅高床上面・近接中央部床面上からの炭化物の塊や明瞭な灰の出土はなかった。

以上のことから、この熱変焼土化は、住居遺棄後も、強い熱変で硬く・深く焼土化していることから、回帰継続して、住居を別地に新築後も祭祀行為をしたものとして看取できるものか。

なお、炭化物・炭の出土がなかったことから、祭祀には播火後の清浄化の行為を含むものであったこととしても看取できるものか。

また、上記の祭祀行為の場所が、I—①主軸柱P21で、I—②東側のP22ではなく西側である点、II—①高床部で、II—②東側の入口部や北西壁隅部の中位高床部ではなく、南西隅部である点から、祭祀空間（場所）への強い規制がなされたとも看取できよう。^(註4)^(註5)^(註6)^(註7)

1024号B住居

4個の主柱穴・中央土壌D11は、住1024号Aと重複する。

主軸間柱穴も、1025号Aに切られるが一部遺存した。

壁隅高床は、南西壁隅と、これに対峙した北東壁隅部の2箇所に配していることから、出入口施設は、東壁南半部か。(馬田)

遺物 (第158図4～10 第241図9 第247図206・207 第84表) 第158図4はやや小型の袋状口縁壺で復元口径9.6cm。器壁が厚く緩やかに内側へ屈曲し、内面をヨコナデする。5・6は甕の口縁小片で、摩滅が激しいため器面調整は不明。7・8の底部片は、平底に近いが全面接地

はしない。復原底径は順に6.4cm・9.0cm。9・10は平底の底部片で、復元底径は9.0cm・9.2cm。10の内底にハケ目が僅かに確認できるが、いずれも摩滅が激しく器面調整は不明瞭である。9は外面に二次加熱による赤変が見られる。

第241図9は姫島産黒耀石製の剥片鏃で、基部をやや抉り、周縁に細かな調整を加え五角形に整える。使用剥離面に擦痕が認められる。長さ2.8cm・幅1.7cm・厚さ0.4cm。

第247図206・207はガラス製の小玉で、206は埋土から、207は床面からの出土である。

(齋部)

註)

- 1・2. 佐々木隆彦編 「塚堂遺跡Ⅲ」(『一般国道210号線 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第3冊、福岡県教育委員会、1984)

佐々木氏は、塚堂遺跡E地区出土の6号住居(庄内期、2本主柱(棟持柱2本)、長方形住居)の南壁中央部不整楕円形ピット(上面から握拳大の河原礫がピットのプランに沿って出土)を、入口部で昇降梯用ピットと言及され、氏以外にも壁中央土壙を入口施設として説明・言及する例も多い。

しかし、1024号A住居例のように、壁中央部土壙D21内(近接を含む)からは2対のDP211・DP212の小ピット検出例が精査すれば検出される例が多く、また、補柱穴P82が検出され、別途に入口部施設とその施設柱穴が検出されていることから、壁中央土壙を入口施設とすべきではないと考える。

3. 1024号A住居の北壁沿い高床例のように、高床に段差を設けた住居で、一段低い高床部による変色・凹凸が認められ、あるいは、この床面に張床が施され、これら床面が後世の削平で痕跡状に検出される時、北壁全体に段差なく、あるいは、若干の緩傾斜を呈して北壁沿い高床が配された住居と誤認される恐れがある。
4. 次年度報告の以来尺遺跡調査区南東端部出土の39号掘立柱建物(南北主軸)でも、北梁行中央部柱穴内からのみ、土器埋納祭祀が行われている。1024号Aと同様の棟持柱を意識した「棟持柱祭祀」であり、構築時での同様の祭祀をも示唆しよう。
5. P22の東壁北半部は、出入り口部である。

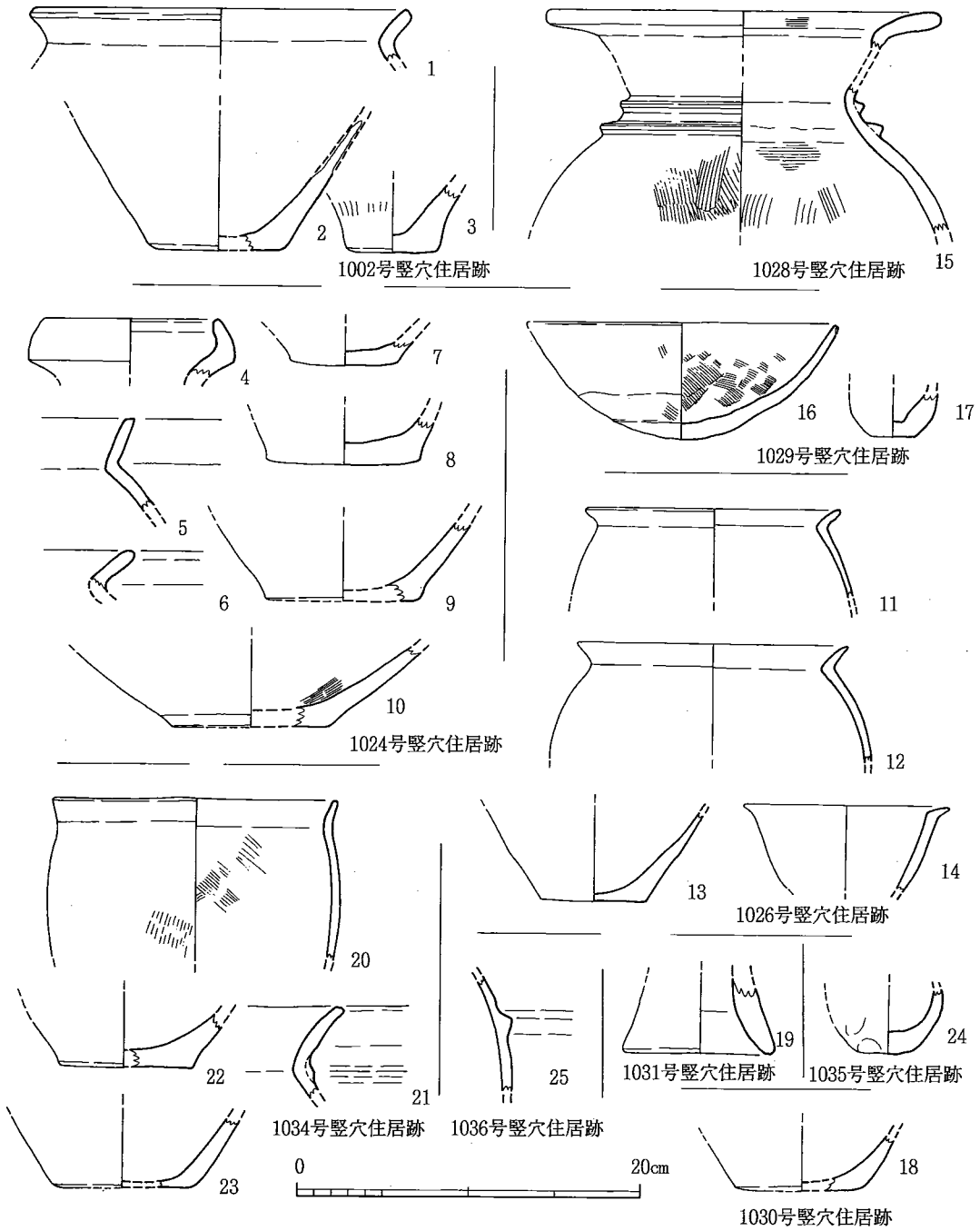
住居として使用時の出入り口部を否定することで、日常の居住空間を非日常の祭祀空間へと止揚するため、東側の日常・居住出入り口部と対峙していた西側のP21以北を非日常・祭祀出入り口部としたことを示唆しよう。

1025号住居での、西壁中央部付設カマドの焚口室天井石を、東壁北半部出入り口部に再配置したことは、日常・居住空間への出入り口部の封印、そして、西壁北半部に石群を配置したことは、非日常・祭祀空間への出入り口部の好例である。

6. 壁沿高床・壁隅高床を、所謂、ベッド状遺構などと呼称し、単なるベッドや日常使用器具・燃料材などの物を置く用途に考えることが適切でないことを示す証左である。

高床部は、単に中央部よりも床面が断面図的に高い床面であることではなく、日常・居住空間としての一段低い中央部床、非日常・祭祀空間としての一段高い壁沿・壁隅高床であることが看取され、非日常・祭祀土壙としての中央部床面よりも一段低い壁中央土壙D21と同様の祭祀機能を考えるべきである。

なお、壁中央土壙が、上記の機能を含めての、特別に意識して配されたものであることの一



第158图 1002·1024·1026·1028·1029·1030·1031·1034·1035·1036号
竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)

部については、下記報告書などで言及しているので参照されたい。

副島邦弘編「塚堂遺跡Ⅱ」（『一般国道210号線 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集、福岡県教育委員会、1984）のA地区10号C住居などの報文。

馬田弘稔編「塚堂遺跡Ⅳ」（『一般国道210号線 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集、福岡県教育委員会、1984・1985）のD地区7号A住居などの報文。

7. 建1027号A（新）（東西主軸、1間×2間）でも、同様に南西隅のP6内で手捏ね小型甕の完形品の土器埋納祭祀が行われている。

1025号竪穴住居跡（図版75 付図2 表12）

重複関係

144号住居で詳述。

住144号が、住1024号の南壁部、住1031号の北壁～東壁部、住1032号の西壁部、建2002号のP2・3、建2004のP6をいずれも切り、溝1に南壁部などを切られる。

4個の主柱穴を整然と配し、西壁カマド付設を考慮し、梁行柱筋は東側より西側を約30cm大きく壁より離して配置する。

各主柱穴筋方向と各壁方向は、東・西壁方向が一致し、北壁方向は対角柱穴P41とP42を結ぶ方向と一致する。

上記のことは、東西の棟持柱筋方向N-86°-Eの棟材から北へ垂木材を垂下させる際地形が、西側から東側に向けて標高が若干傾斜していたことを看取させ、垂木材が西側から東側へと順次長くなる上部構造の強化のため、P42をP12から離れたP41-P42柱筋配置と言えよう。

また、上記の地形・棟行方向に加え、後述するカマド焚口室天井石の再配置に看取する祭祀行為から、出入り口施設は東壁側に配され、P61は**入口施設柱穴**と考えられ、P62は住1031号住居の埋土部に配されたため検出できなかったものか。

カマド

西壁中央部に配し、石製支脚が付図2の縦断方向に上面よりも着地面が幅広の状態、換言すれば、逆位倒立ではなく使用時の立脚状態で出土した。

しかし、支脚以西の炎口室～煙口室や南側袖・袖石は意識的に除去（破棄）・抜去され、北側袖・袖石も同様に、遺存しなかった。

また、焚口室の天井石は、カマド付設壁とは逆の東壁北半部で壁・床面に接して出土し、意識的に再配置されていた。

ところで、住居の北西部から約8～20cm大の河原石が多量に出土した。

河原石群は、断面図に示すように、北壁から約60cm・西壁から約30cm間は石群最下面は傾斜し、これ以上壁から離れた石群下面は張床1層上面に接した状態であった。

また、石群の上面は、両断面図に示すように、壁部から直線的に傾斜後、ほぼ平坦となる。

石群の平面分布は、幅140cm前後でまとまりを呈しつつ住居中央部に向けて伸び、カマド北袖

部以南には及ばない。

以上のことから、カマドの袖石などの除去を含む破棄行為と共に、天井石をカマド付設壁とは逆の東壁に再配置する行為（カマド機能停止・再配置祭祀行為）をやり、以後、埋土が住居中央部にまでは流入せず、換言すれば、壁際に2層が流入した段階で、石群を竪穴住居内に至る祭祀通路として配し、住居遺棄後も継起的に旧住居への祭祀⇒カマド祭祀を実施した証左と言えよう。

1026号竪穴住居跡（図版77～81 付図3A～C 表13・14）

重複関係

建2011号で詳述。住1026号は、建て替えが1回行われており、切り合いによる新・旧関係を旧→新で示すと、住1026号B→住1026号Aの順になる。

1026号A住居

主柱穴のなかで、P12・13は、周辺部を含めて床面全体を入念に検出作業を実施したが、検出できなかった。

なお、主柱穴配置はP11～14を建て替え前の住1026号Bの主柱穴に重複させたものと考えられ、北・南主柱筋を各北・南壁に近接させ、桁行よりも梁間の方が62cmも大きい。

上記のことを補完すべく、P11—P13間には主軸間柱P31・32（P32は未検出）を配し、同様にP12—P14間にも配したものと考えられる。

したがって、棟持柱P21・22は配さない。

なお、北・南壁に近接して主柱を配することから、竪穴壁沿いに近接して垂木尻を配する通常の竪穴住居ではなく、北・南・西側外をも屋内とする地上壁立ちの住居構造をとる、集落内でも**特別の属性を有す住居**と考えられる。

1026号B住居

前述のとおり、主柱穴、主軸間柱穴、中央土壇は、建て替えた住1026号Aの各配置と重複するものと考えられる。

また、竪穴内の床面積は11.2㎡と狭いことなどからも、住1026号Aで既述のような住居構造をとすものか。（馬田）

遺物（第158図11～14）11・12は口縁がくの字に屈曲する甕の上半部で、復原口径15.0cm・16.0cm。摩滅が激しく器面調整は不明。13の平底の底部片は復元底径6.2cm。摩滅が激しく器面調整は不明で、底部内面は茶色に変色する。14は口縁部が外反する小型の鉢で、平底になると思われる。復原口径12.0cm。摩滅が激しく器面調整は不明。（齋部）

1027号住居 (図版75~79 付図4 表15)

重複関係は、1029号住居で詳述。

住1029号は、建て替えが1回行われており、切り合いによる新・旧関係を旧→新で示すと、住1027号→住1032号の順になる。

主柱穴はP11~14の4本配置であるが、P13・P14は溝1に切られて欠失する。

中央土壙D11は、北側柱筋P11—P12下の中心に西接して配すため、補柱は南側柱筋下のみにP81を配す。

1028号住居 (図版75~79 付図4 表16)

重複関係は、1029号住居で詳述。

住1028号は、建て替えが2回行われており、切り合いによる新・旧関係を旧→新で示すと、住1028号→住1038号→住1039号の順になる。

主柱穴はP11~14の4本配置であるが、P13・14を溝1に切られて欠失する。

カマドは、新出の住1038・1039号のように北東壁隅に設けず、東壁の北壁近くに配す。

ところで、遺存する東—西壁間距離は325cmで、遺存する北壁—復原南壁間を296cmとすると、床面積は約9.6㎡と10㎡にも満たない。

付図4に破線で示すように、東—西壁間を404cm・南—北壁間を296cmと復原すると、床面積は約12.0㎡となり、現況でのカマド燃焼室奥壁までを東壁とし、この復原東壁—遺存東壁間を東壁沿高床として、北壁沿高床と共に配していたと復原できよう。

なお、新しく住1038号に建て替えるに際し、カマドは意図的に破壊、埋設する。(馬田)

遺物(第158図15) 壺の上半部で復元口径23.0cm、頸部に二条の断面台形に近い突帯を持つ。内外面はハケを施し、その後部分的にナデる。(齋部)

1029・1033号住居 (図版75~79 付図4 表17)

住1007号・1031号・住1029号群(住1007・1027・1029・1031~1033・1036・1038・1039・1052号)の重複関係

住1029号は、建て替えが1回行われており、切り合いによる新・旧関係を旧→新で示すと、住1029号→住1036号の順になる。

なお、上記のことは、住1036号の北半部床面が住1029号の北東壁隅高床・北壁中央方形区画を埋設した(張床した)状態で検出され、住1036号のHP211・212も住1029号北壁中央方形区画内壁溝M21を切ることなどから、調査中の段階で看取できた。

なお、住1033号は調査時、一応別の住居の可能性も残して、住1029号の西壁沿高床部に付していた番号であるが、後述するように、住1029号と同一住居であるとの検討成果を得たため、

以下、住1029号として報告する。

また、住1007・1025・1027～1032・1034・1036・1038・1039号と溝などの遺構間の切り合いによる新・古関係を古→新、建て替えによる新・旧関係を旧→新で列記すると、以下のとおりである。

①住1036号は、住1034号→住1030号の順に建て替えられた両住居の南壁部を切る（住1034号→住1030号→住1029号→住1036号）。

②住1027号は、住1027号→住1032号の順に建て替えられ、住1027号の北壁が住1029号の西壁などを切り、住1032号の北壁が住1036号の北壁・北壁中央部方形区画内HP211・212などを切る（住1034号→住1030号→住1029号→住1036号→住1027号→住1032号）。

③住1052号は、住1052号→住1031号B→住1031号Aの順に建て替えられ、住1052号は住1027・住1032号の西壁を切る（住1034号→住1030号→住1029号→住1036号→住1027号→住1032号→住1052号→住1031号B→住1031号A）。

④住1028号は、住1028号→住1038号→住1039号の順に建て替えられ、いずれもカマドを配し、住1032号などを切るが、中世の溝1に切られる（住1032号→住1028号→住1038号→住1039号）。

⑤なお、住1031・1052号と住144・1024・1025号や建2002～2004号との切り合い関係は、住144号で詳述したので省略する。

⑥住1007号は、以来尺1号墳と溝1に切られる（住1007号→以来尺1号墳→溝1）が、残存壁高が2～6cmと浅く、住1032号の南壁沿溝M23との切り合い部が溝1とも切り合うため、住1027・1032群との新・古関係は不明である。

⑦なお、住1007号は、住1036号の南壁沿高床部とも重複関係にあるが、住1007号の残存壁高（註1）よりも住1036号の高床部が高く構築されていたため、後世の削平を受け、高床部が消滅し、住1029・住1036号群との新・古関係も不明である。

遺構群間の新旧・新古関係と居住空間・生活空間の占有・容認関係

ところで、既述のように、明かな建て替えによる新・旧関係を旧→新、切り合い関係のみによる新・古関係を古→新で示し、それぞれの主軸方向（いずれも東—西主軸であるから、例えばN—77°—Eを77°とのみ記す）と床面積〔各支柱列間中心部での（東～西壁間）×（南～北壁間）算出値〕を提示すると、以下のとおりである。

住1029号（77°、32.4㎡）→住1036号（74°、34.9㎡）→住1027号（72°、25.1㎡）→住1032号（76°、32.5㎡）→住1052号（76°、25.3㎡）→住1031号B（76°、33.2㎡）→住1031号A（84°、46.2㎡）→住1028号（88°、12.0㎡）→住1038号（73°）→住1039号（78°）。

上記の住居群のなかで、カマド付設の住1028・1038・1039号を省いて検討する。

⑦建て替え例では、着実に旧→新へと床面積が増加し、換言すれば、建て替えに際し、床面積の拡大が配慮されていることが指摘できよう。

④主軸方向では、各建て替え群を②群77°住1029号→74°住1036号→⑥群72°住1027号→76°住1032号→③群76°住1052→76°住1031号B→84°住1031号Aとすれば、各建て替え群内での主軸方向の一致・近似値は然りとも言えようが、最後の84°住1031号Aを除いて、②群→⑥群→③群の3群全体内でも主軸方向の一致・近似値が認められる。

上記のことから、②→⑥→③の3群間にも、住144・1024号群（住144号で既述）に類する居住空間の占有域と生活空間の容認域に対する強い規制が指摘できるものか。

なお、上記の占有域・容認域やその拡大などについては、出土遺物の検討を経て、次年度で言及することとしたい。

住1029・1033号住居

主柱穴はP11～14の4本配置であるが、P12は住1036号のP12と重複し、P13・14は溝1に切られて欠失する。

なお、梁行は366cmと長く、補柱P81・82を配したものか。

棟持柱穴P21・22は、住1036号のP21・22と重複する。

高床は、西壁沿いと北東壁隅部に配し、この間の北壁中央部を、中央部床面レベルと同じではあるが、方形区画H21として意識し、北壁沿溝M21とHP211・212を配す。（馬田）

1029号竪穴住居跡

遺物（第158図16・17）16はボウル型の鉢で、外面はハケ目とヨコナデが僅かに観察でき、内面は斜のハケ目が残る。内底はその後ナデる。口径18.2cm、器高6.8cm、外面部分的に煤が付着する。17はミニチュアの底部で、復元底径2.6cm。（齋部）

註)

1. 住1007号は、周辺の住144・1024号群、住1052・1031号群、住1027・1032号群、住1029・1036号群、住1048号群などと、主軸方向・壁方向が著しく異なるので、住居構築に伴う丘陵傾斜面「造成」の時期も、これら住居群の立地部の「造成」時期とは異なるものと考えられる。

1030（1043）号竪穴住居跡（図版75～79 付図3A～C 表18）

重複関係

建2011号で詳述。住1030号は、建て替えが1回行われており、切り合いによる新・旧関係を旧→新で示すと、住1034号→住1030号の順となる。

なお、住1030号の南東壁隅高床部を、調査中は別途住居の床面であることの可能性を一部考慮し、この部分を住1043号としていたものである。

主柱P11～14を各壁隅部に配し、桁行493cm・梁間407cmを測り、共に柱間を大きくとる。

なお、P11—P13の中央部に補柱P81を配すことから、P12—P14柱筋中央部東側のP51も

補柱穴P82とし、桁行をこのP51までの広い配置とすべきと考えるが、一応、P14中軸線を図示した。

また、P11・13では、後述する住1035号Aの棟持柱P21・22同様に、掘形周辺部のみを、径90～110cmの範囲で、黄白色粘質土を使用して化粧張りを施していた。

なお、この化粧張りは、棟持柱P21部でも施しており、前述の主柱間規模の大きさ、壁隅部配置での壁立ち構造など、住1026号などと同様に、当住居も集落内で特別の属性を有するものと考えられる。

(馬田)

遺物(第158図18) 底部小片で復元底径7.8cm。摩滅のため器面調整は不明。

(齋部)

1031号住居(図版75～79 付図4 表19・20)

重複関係は、1029号住居で詳述。

住1031号は、建て替えが2回行われており、切り合いによる新・旧関係を旧→新で示すと、住1052号→住1031号B→住1031号Aの順になる。

1031号A住居

主柱穴はP11～14の4本配置であるが、P13・14は溝1で切られて欠失する。

なお、調査段階では補柱P81・82の配置を配慮に入れていなかったため、P81の検出作業は実施していない。

また、P13も同様で、後述住1052号の北壁沿溝M21を、P13の検出作業を実施せずに掘り下げている。

ところで、床面積の拡大を柱穴配置から検討すると、4本主柱配置のみの住1052号(床面積25.3㎡)から、床面積約8㎡増の住1031号B(同33.2㎡)に建て替える際には4本主柱配置にP81～83の補柱を加えている。

しかし、住1031号Bから、更に床面積を北・西側に拡大した住1031号A(同46.2㎡)では、4本主柱配置に補柱を加え、一見すれば1間×3間型如くに桁行方向規模を大きくすることで、床面積を13㎡増としている。

(註1)

高床は、西壁沿いだけでなく、D P211以東の北東壁隅にも配したことも一部考えられ、住1025号で削平したもののか。

(馬田)

註)

1. 以来尺遺跡は、第6・7図や付図2に示すように、北西方向から南東方向にのびる丘陵平坦部を中心に所在する。

当遺跡での、床面積が最大規模の住居は、第72図の住34号(面積約59㎡)と第43図の住17号(面積約69㎡)の2例があり、両者は共に平坦部に所在し、住34号は平坦部でも北西部の丘陵縁

部近くに立地し、住17号は同南東部の丘陵縁部近くに立地する。

また、当遺跡では、両住居のみが棟持柱の掘形の規模・柱径が大きい。

しかし、床面積46.9㎡の住1031号A（新）は、丘陵平坦部ではなく、平坦部に近い斜面に立地し、遺跡全体の床面積規模では、上述の住17・34号の最大規模に次ぐ大規模クラスでしかなく、遺跡空間における居住空間占地での強い規制が看取される。

上記の規制は、住居構造でも看取され、住1031号A（新）が、住17・34号例のような棟持柱を構えず、単に桁行を加えるだけで、床面積を大規模化したことにも示唆されていよう。

1031号B住居

主柱穴はP11～14の4本配置であるが、P13・14を溝1に切られて欠失する。

西柱筋P11—P13と西壁間(183cm)は、西壁沿高床の配置を考慮し、東柱筋P12—P14と東壁間(92cm)の整数2倍とする。

また、P11—P12の北柱筋とP13—P14の南柱筋には、西壁沿高床西端部に補柱P81・82を配すが、それぞれ対峙する東壁寄りでの補柱は当初から配さない。

ところで、前述ように、西柱列P11—P13と西壁間との距離を2倍とし、補柱P81・82を配さないままでは、東側よりも西側が、垂木長が長く・垂木勾配が緩傾斜となるだけでなく、西側の屋根荷重が増す。

したがって、補柱P81・82を西壁高よりは高めに掘り立て、P81—P82柱筋で垂木を受けるための軸組みを施し、西側の傾斜屋根を主柱の梁と共に支えたものと考えられる。（馬田）

1031号竪穴住居跡

遺物（第158図19）小型器台の底部片で復元裾径9.4cm。内外面にナデを施す。（齋部）

1032号竪穴住居跡（図版75～79 付図4 表21）

重複関係は、1029号住居で詳述。

住1032号は、建て替えが1回行われており、切り合いによる新・旧関係を旧→新で示すと、住1027号→住1032号の順になる。

主柱穴はP11～14の4本配置であるが、P13・14は溝1に切られて欠失する。

補柱穴は、P11—P12の北柱筋の西壁寄りにもP81を配したものと考えられ、未検出か。

なお、南・北柱筋の東壁寄りには補柱穴は配さなかったものか。

北壁中央部は、既述した住1027号同様に、西壁沿高床東縁～北東壁隅高床西縁間が、中央部床面レベルと一致はするが、方形区画H21として意識されたものと考えられ、柱穴様小ピットHP211・212を検出した。（馬田）

遺物（第231図29）石庖丁で、欠損のため刃部の使用痕は定かではないが、端部まで及ぶようである。研磨は丁寧で、両面からの穿孔である。（齋部）

1034号竪穴住居跡 (図版75～79 付図3A～C 表22)

重複関係

建2011号で詳述。住1034号は、建て替えが1回行われており、切り合いによる新・旧関係を旧→新で示すと、住1034号→住1030号の順になる。

主柱穴は、P13・14が張床を除去しても検出作業を実施したが検出できなかったが、P11・12が浅いことから、当初からP13・14も浅いものであったか、張床土で周囲を固める程度の柱立てとも考えられる。

上記のことから、棟持柱は深く掘り立てたものと考えられ、実際に、P22掘形内では深い柱痕を検出したが、P21掘形中央部での柱痕は検出されなかったことから、建て替え後の住1030号のP21と重複するものか。 (馬田)

遺物 (第158図20～23・第231図30) 20は甕上半部で、口縁は僅かに外反しながら直線的に立ち上がる。復元口径は16.0cm。口縁部付近は摩滅しているが、胴部内外面に斜のハケを施す。21は甕の口縁部で頸部に貼付け突帯を有する。摩滅が激しく突帯も原形を留めない。22・23は共に平底の底部片で、復元底径7.8cm・8.2cm。摩滅が激しく器面調整は不明である。

第231図30は石庖丁で、研磨がやや粗く全面に擦痕が残る。刃部は端部まで作り出さず、使用痕は平坦部のみである。穿孔は両面から行っており、孔の周囲の紐擦れは認められない。

(齋部)

1035号A・B竪穴住居跡 (図版75～79 付図3A～C 表23・24)

重複関係

建2011号で詳述。住1035号は、建て替えが2回行われており、切り合いによる新・旧関係を旧→新で示すと、住1035号B→住1035号A→住1046号の順になる。

1035号A住居

建て替えるに際し、中央部床面の高さを旧出の住1035号南東壁隅高床面まで張床後、旧出の棟持柱P21・22を共に西側から掘り起こして抜去し、その抜去穴部をP22を例にとれば、新たに立てる為により深く掘削すると共に、上半部を径89cm×90cmのほぼ円形に拡幅・整形後、棟持柱を立てて、掘形下半部を黄褐色粘質土と暗褐色土のブロック土で、上半部を張床上面まで黄白色粘質土のみで埋めもどしている。P21も同様に上半部を埋めもどしたと考えられるが、後出の建2010・2011号の棟持柱P21で掘形西半部が掘削され、若干径が小さくなっている。

なお、周辺の中央部床面への張床土は、主柱穴P12・14埋土も含めて、P21・22下半部埋土と同様のブロック土を用いる。

上述のことは、掘形P21・22の最下部の深さを越えてまで掘り進んで黄白色粘質排出土を、

黄褐色・暗褐色土を混入させることなく一時的に保管するだけでは不足することから、住居外から別途に調達してまでも、意図的に黄白色粘質土を掘形上半部の埋土として厳選したことが看取でき、単なる化粧土以上の埋土用材と考えられ、重複する前出の住1034号P13の掘形上部や後述の住1048号北壁中央土壌部の方形区画張床土用材もこの黄白色粘質土を使用している。

以上のように、住1035号Aなどへの黄白色粘質土の意図的使用は、建て替え後の住1046号の棟持柱の項で後述することなども含めて、住1046号群の集落内での特別な属性を強く示唆するものである。

主柱穴は、P11～14の4個のなかで、P12・14を東壁近くにまで寄せた配置をとり、切妻屋根構造で、竪穴地表上部からは壁立ちとなるものか。

1035号B住居

棟持柱P21～P22は、床面東寄りに配し、特にP22は東壁への片寄せが著しい。

また、主柱穴は検出されなかったが、建て替え後の住1035号Bの4主柱穴と重複するものと考えられる。

南東壁隅高床は、中央土壌D11を床中央部ではなく東寄りに配すことから、高床北半部の幅をP21に接するように同南半部よりも幅狭とする。

南壁土壌D21も、D11同様に東寄りの配置をとる。

以上のように、各柱穴・土壌・高床を東壁側に配することなどから、建て替え後の住1046号同様に、西壁南半部に出入り口施設を配したものと考えられる。 (馬田)

1035号竪穴住居跡

遺物 (第158図24) 手捏ねの底部で復元底径3.1cm。指圧痕が部分的に残るが、全体にナデを施している。 (齋部)

1036号竪穴住居跡 (図版75～79 付図4 表25)

重複関係は、1029号住居で詳述。

住1036号は、建て替えが1回行われており、切り合いによる新・旧関係を旧→新で示すと、住1029号→住1036号の順になる。

主柱穴はP11～14の4本配置であるが、P14を溝1に切られて欠失する。

棟持柱穴はP21・22を、西・東方向主柱筋から内側に120・87cmと大きく離し、床中央部での独立した棟持柱として配す。

また、桁行は442cmと大きく、中央部には補柱P81・82を配したものと考えられ、一応補柱としたが、主柱とすべきか。

西壁沿高床と北東壁隅高床間の方形区画H21内には、北壁に接して柱穴様小ピットHP211・

212を配す。

(馬田)

遺物 (第158図25) おそらくは壺の胴部で一条の突帯を有する。突帯付近のナデは確認できるが、その他の器面調整は摩滅のため不明。

(齋部)

1037号竪穴住居跡

遺物 (第232図31) 両端部を欠損する石庖丁。刃部を広く作り出し、端部まで及ぶと思われる。紐擦れは直線部にのみ認められ、研磨は丁寧である。両側から穿孔し、孔の周辺に使用による割れがある。

(齋部)

1038号住居 (図版75～79 付図4 表26)

重複関係は、1029号住居で詳述。

住1038号は、建て替えが2回行われており、切り合いにより新・旧関係を旧→新で示すと住1028号→住1038号→住1039号の順になる。

主柱穴はP11～14の4本配置であるが、P13・14を溝1に切られて欠失する。

カマドは、北東壁隅部に配し、新しく住1039号に建て替える際し、意図的に破壊・埋設する。

(馬田)

1039号竪穴住居跡 (図版75～79 付図4 表27)

重複関係は、1029号住居で詳述。

住1039号は、建て替えが2回行われており、切り合いによる新・旧関係を旧→新で示すと、住1028号→住1038号→住1039号の順になる。

主柱穴はP11～14の4本配置であるが、P13・14を溝1で切られて欠失する。

また、P11の掘形東半部は、住1028号の西壁を掘形が切ることを確認後、実測する時間を省いて西壁を掘り下げたものである。

なお、北壁中央土壇D21は欠番としたが、住1038号のD21北半部を住1039号のD21とすべきものと考えるが、切り合い部を検出し得なかった。

カマドは、北東壁隅部に配す。

なお、住1039号は、建て替え前の住1028・1038号と共に、丘陵南斜面部を段地に造成して構築したもので、特に降雨の流下は北壁部で著しいものと考えられる。

カマドの位置からして、遺存する北壁部には壁堤、あるいは遺存する北壁部以北を高床として、その高床部北壁堤、そして周堤をも構築したものと考えられよう。

同様に、遺存する東壁以東にも高床を配したものか。

(馬田)

遺物 (第247図214 表84) ガラス製の小玉で、スカイブルーを呈する。

(齋部)

1040号竪穴住居跡 (図版77・78 第159図 表28)

重複関係は、建2011号と住1041号で詳述。

主柱穴P11～14のなかではP11・13・14、棟持柱穴P21・22ではP21と中央土壇D11がいずれも溝1に切られて欠失するが、桁行P11—P12とP13—P14間を、住1041号の桁行290cmで図示すると、壁柱穴P51・52が共に西・東壁に接し、壁柱穴P53がP13—P14間のほぼ中央部に位置する。

壁中央土壇D21は、北・南側で出土せず、北壁中央部の西寄りで柱穴様小ピット2個を検出した。

なお、北壁中央土壇D21内の柱穴様小ピットはD P211・212とせず、住1048号例のように、北壁側に配された方形区画内のH P211・212とし、H21は削平されたものと考えた。(馬田)

1041号竪穴住居跡 (図版77・78 第159図 表29)

住1041号群(住1040・1041・1048号)の重複関係は、建2011号・住1046号群でも詳述。

住1041号は、建て替えが1回行われており、切り合いによる新・旧関係を旧→新で示すと、住1040号→住1041号の順になる。

上記のことは、住1041号の張床が住1040号の張床上に施されていることから確認できた。

また、住1041号は、建2011号で詳述するように、住1048号の西壁沿高床を切ることから、切り合いによる新・古関係を古→新で示すと、住1042号→住1030号→住1044号→住1048号→住1040号→住1041号→溝1(中世)の順になる。

なお、住1048号の北壁東端と東壁中央部に切られる遺構が、図示したように連続する小溝状遺構となればは、住1048号に切られた古い住居の東壁か。

主柱穴P11～14のなかではP12・棟持柱穴P21・22のなかではP21と、中央土壇D11がいずれも溝1に切られて欠失する。

壁土坑は、北壁遺存部でも、溝1005・1006号の南壁側でも検出されていないことから、住1040・1048号同様に、北壁中央部に方形区画H21が配されたと考えられ、削平されたものか。

各壁—各主柱筋間のなかで、西壁—西主柱筋間のみが232cmと大きいことから、幅約113cm前後の西壁沿高床を配したことが考えられる。(馬田)

1042号竪穴住居跡 (図版75～79 付図3A～C 表30)

重複関係

建2011号で詳述。

主柱穴P11～14のなかで、P11・12は住1030・1034号で切られ、P14も住1039号に切られるが、いずれも柱痕・掘形の全様を知ることができ、P13のみ欠失する。

棟持柱P 21・22はP 21を欠失する。

なお、床面は東主柱筋～東壁間が使用痕として確認できたことから、旧出住居を建て替え後に張床を施して高床部としたものでない限り、住1041号東壁側での高床付設の可能性はないものと考えられる。

(馬田)

1044号竪穴住居跡 (図版75～79 付図3 A～C 表31)

重複関係

建2011号で詳述。住1044号は、建て替えが1回行われており、切り合いによる新・旧関係を旧→新で示すと、住1044号→住1047号となる。

棟持柱P 21・22は、P 21が西主柱筋から55cm離れて後出の住1035号Aの南壁土壇D21底面で当たり痕として検出され、P 22は、建て替え後の住1047号P 21・P 22同様の配置をとって、東主柱筋に28cmと近接する住1047号P 14に重複するものか。

中央土壇D11は、後述の住1046号のD21に切られ、北端の一部が遺存するだけであるが、そのD21底面下にD P 111が遺存した。

また、壁土壇D21は南壁部で検出されなかったことから、建て替え後の住1047号同様に北壁中央部に配したものと考えられるが、付図3 A～Cに示すように、建2008～2011号や住1035・1047号の各棟持柱P 22に切られて遺存しない。

なお、壁沿高床は、検出した東壁側のみで、西壁側には当初から配さなかったものと考えられる。

(馬田)

1045号竪穴住居跡 (遺構に関しては来年度に報告)

遺物 (第247図219 表84) ガラス製の管玉で、透明感のない赤色を呈する。

(齋部)

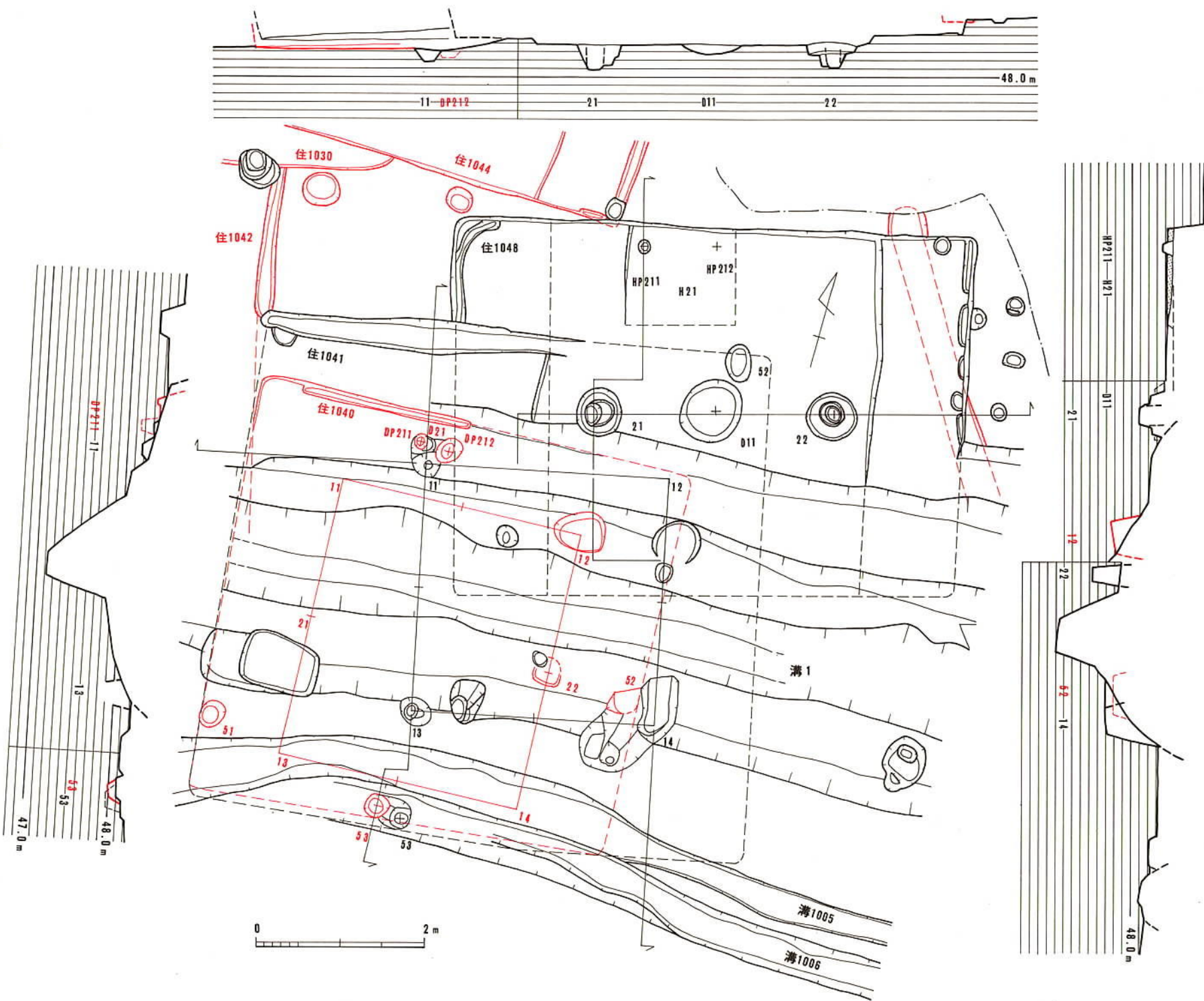
1046号竪穴住居跡 (図版75～79 付図3 A～C 表32)

重複関係

建2011号で詳述。住1046号は、建て替えが2回行われており、切り合いによる新・旧関係を旧→新で示すと、住1035号B→住1035号A→住1046号の順になる。

主柱穴は、中央部床面の高さを旧出の住1035号A北東壁隅高床面まで張床し、ほぼこの旧出住居平面プランの中央部に4個を配す。

棟持柱は、主柱穴筋近くでは認められないが、住1034号の構築以来、住1046号を経て、以後、中～大型の建2008～2011号群が重複してほとんど同一範囲に構築されていることや、旧出の住1035号Aに棟持柱が配されていることなどから、西・東壁中央部の柱穴を独立棟持柱P 21・22とし、当住居を建2008～2011号群に類する集落内での特別な属性を有するものと考えた。



第159图 住1041号群 (1040·1041·1048号竖穴住居跡) 实测图 (1/60)

なお、中央土壇D11は、住1035号B以来、建て替える度に、南側へと若干移動させているが、旧出のD21を張床で埋設し、新期に南支柱筋の南壁東寄りに壁土壇D21を配す。

ところで、住1035号B→住1035号A→住1046号への建て替えに際して、各住居の支柱穴・高床と住1035号A・Bの棟持柱は、いずれも住居平面プランの中央より東寄りに配することが継承され、住1046号での壁土壇の移設に際しても、既述のように、東側に片寄せしている。

上記のことに加え、住1046号の棟持柱P21が西壁中央から約90cmも大きく北寄せして配されていることなどから、出入口施設も西壁南半部に配することが住1035号B以来、継承されたものと考えられ、換言すれば、住1024号Aの註1・2でも言及したように、壁土壇は入口施設に係るものではなく、また、壁沿・壁隅高床部と壁土壇の両施設に対して特別の配慮をして、出入口施設を両施設付設外の壁部に設けることを原則としたことの証左ともなろう。

(馬田)

遺物(第160図1～3・第247図211 表84) 1は胴の大きく張る甕の口縁部で、復元口径25.0cm。屈曲部内面に稜がつく。器面は剥離が激しく、調整は不明。2は壺の底部片で復元底径7.0cm。外面にタテハケが見え、底部内面と外面端部は強いナデを施す。3の底部片は復元底径11.6cm。外面にハケを施すが内面は摩滅が激しく調整不明。

第84図221はガラス製の勾玉で、全体に稜をなさず丸みを帯びる。穿孔は縦横二方向からで、くすんだエメラルドグリーンを呈する。

(齋部)

1047号竪穴住居跡(図版75～79 付図3A～C 表33)

重複関係

建2011号で詳述。住1047号は、建て替えが1回行われており、切り合いによる新・旧関係を旧→新で示すと、住1044号→住1047号となる。

住居の規模は、面積41.1㎡を測り、西・東壁沿いに幅153cmの高床を配すなど、中型でも大きい規模を有す。

支柱穴P11～14の距離も338cm～345cmと大きい。

棟持柱は、P21を西支柱筋から70cm離し、P22は東支柱筋から24cmの近接とする。

なお、中央土壇D11を南壁側のP13～P14中央部に配すことから、壁土壇も南壁部に配したものかと検出を試みたが、付図3A～Cに示すように、住1042号東壁沿高床―住1048号西壁間は、数少ない地山面であったが、壁土壇D21やD21内のD P211・212は検出されなかった。

上記のことから、北壁中央部で、後出の住1046号P51・52号に切られる掘形を、住1047号の北壁中央土壇D21と考えたものである。

なお、D11・D21の配置は、既述の住1035号Aのように、D11を床中央部よりも若干D21を付設する壁寄りに配すか、住1030号のようにD11を支柱穴筋の中央部に配することを通例とす

ることから、上述のD11・D21配置は、支柱穴筋内を広い空間域として意図的に確保するためにとったものか、その類例を待ちたいが、むしろ、住1035号A・住1046号の各棟持柱の項で既述したことなどから、当住居も、建2008～2011号群や住1046号群同様の、集落内での特別な属性を有するものと考えられる。(馬田)

遺物(第160図4) 小型の甕の底部片で、復元底径8.2cm。摩滅のため調整は不明。(齋部)

1048号竪穴住居跡(図版76～78 第159図 表34)

重複関係は、建2011号と住1041号で詳述。

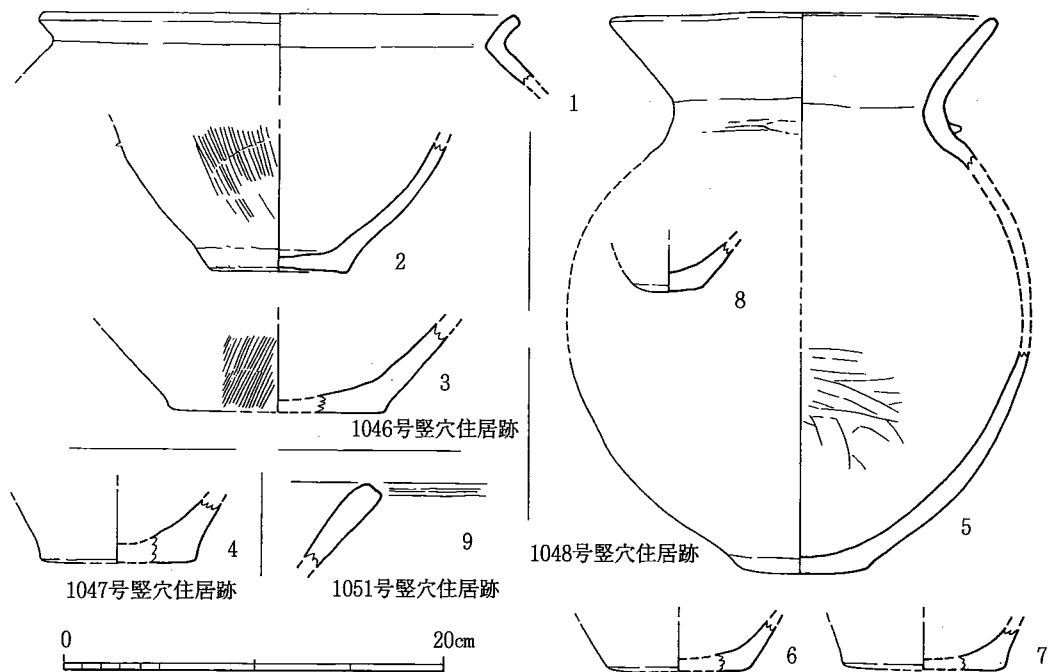
支柱穴は出土せず、主軸柱穴(棟持柱穴) P21・22のみを検出した。

中央土壇D11を、棟持柱P21—P22下の中央に配す。

南壁部を欠失するが、黄褐色・暗褐色の張床材土のなかで、北壁中央部で黄白色粘質土を張床土とする方形区画H21の一部を検出したことから、壁土壇は当初から配さず、北壁中央部西寄りに方形区画H21を配したものと考えられ、HP211も検出した。

また、西・東壁に、各壁沿高床を配す。(馬田)

遺物(第160図5～7) 5は甕に近い形の広口壺で、胴部中位を欠く。復元口径20.5cm・復元



第160図 1046・1047・1048・1051号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

底径7.3cm。底部はややレンズ状を呈する。頸部の一部が突帯状に盛り上がるが一周はしないように、工具等による歪みの可能性もある。外面は口縁部と底部をナデるが、胴部は摩滅のため調整不明、底部内面は木製工具等によるナデが認められる。6・7は平底の底部小片で復元口径は7.7cm・8.6cm。摩滅の為調整は不明。8はミニチュアの底部で、調整は不明。（齋部）

1051号竪穴住居跡（遺構に関しては来年度に報告）

遺物（第160図9）口縁小片で、口径復元不可能。端部に二条の沈線を施す。（齋部）

1052号竪穴住居跡（図版75～79 付図4 表35）

重複関係は、1029号住居で詳述。

住1052号は、建て替えが2回行われており、切り合いによる新・旧関係を旧→新で示すと、住1052号→住1031号B→住1031号Aの順になる。

主柱穴はP11～14の4本配置で、P12・13が遺存する。

西壁沿高床は、P11—P13の西柱筋～住1031号B西壁沿高床東縁間として復原できよう。

中央土壌D11は、北柱筋P11—P12中央下に整然と配し、南半部を溝1が切り、欠失する。

北壁沿溝M21は、約70cmと幅広で、掘削後に埋設して中央部床面と同レベルまで張り床しており、標高が高い北壁方向からの除湿を考慮する。

なお、住1052号は溝1に大きく切られ、調査中は、南壁沿いの床面標高が、溝1北側の床面標高よりも約20cm高いことから、溝1の南・北側床面を別の住居であるとも一部考えたが、住1031号の西壁沿高床・柱穴配置などを検討した結果、第1次調査の平坦部でも平行四辺形状の壁平面プランを呈する住居例があることなどから、住1052号での南壁沿・西壁沿高床配置の型を踏襲し、住1031号B→住1031号Aへと順次建て替えられたものと判断した。（馬田）

1432号竪穴住居跡（図版4 第161図 表36）

重複関係

住1433号で詳述。遺構間の切り合いによる新・古関係を古→新で示すと、住1432号→住1433号→住1434号→溝1（中世）の順になる。

主柱穴などの柱穴や土壌などは住1433・1434号との重複部の内・外でも出土しなかったことから、主柱穴を配さない主軸柱2個のみの住1433号同様の配置となるものか。（馬田）

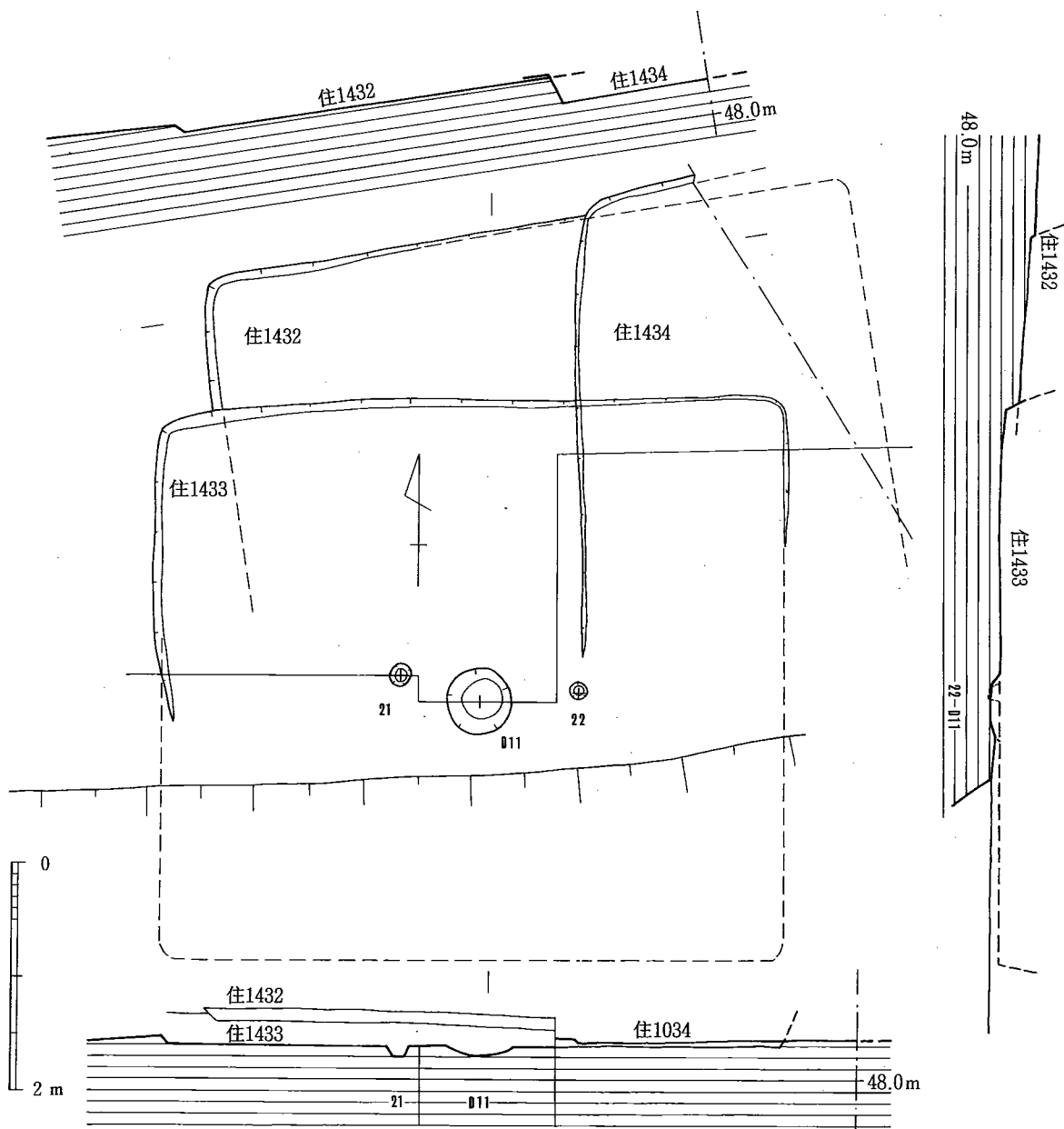
1433号竪穴住居跡（図版4 第161図 表37）

住1034号群（住1032～1034号）の重複関係

住1433号は、住1432・1434号と切り合い関係にあり、旧→新で示すと、住1432号→住1433号

→住1434号の順になる。

上記のことは、住1433号が住1432号の張床部を切り、住1432号の張床と流入埋土が共に住1434号に切られることから確認できた。



第161図 住1434号群 (1432~1434号竖穴住居跡) 実測図 (1/60)

なお、住1432号は住居壁が削平され、張床部での検出であるが、①住1432・1433号の各北壁方向が大きく異なること、②住1433号西壁は住1432号西壁よりも約50cm以上西側に位置すること、③住1432号は覆土が削平され、覆土を人為的に埋めもどして住1433号を構築したかどうかの確認はできないが、④以来尺遺跡での住居建て替えは通例、床面標高が低い住居から同高い住居へとなされ（換言すれば、逆では旧住居を埋めもどしても、新住居内への雨水の浸入があるため）ることなどから、住1433号は住1432号を埋めもどしての連続した建て替えではないものと考えられる。

主柱穴は、張床部を除去して検出作業を試みたが出土せず、主軸柱 P21・22を使用した屋根構造と考えられる。

また、南壁中央部土壌D21は、溝1号（中世）に切られる。 (馬田)

遺物（第162図1～6）1は壺の頸から胴部片で鋭い稜の貼付突帯を二条もつ。2は長頸壺の頸部である。外面は磨滅しており調整は不明だが、内面にはしぼり痕が観察される。3は甕の口縁部片で復元口径26.0cmを測る。端部は厚く口縁は大きく外反している。4の甕の底部は凸レンズぎみで底径5.6cmを測る。外面はハケのちナデ調整で内面には指圧痕がある。底部外面もナデ調整。5は甕の口縁部片である。頸部は鋭く外反する。6は壺の胴部片で二条の貼突帯もつ。 (杉原)

1434号竪穴住居跡（図版4 第161図 表38）

重複関係

住1433号で詳述。遺構間の切り合いによる新・古関係を古→新で示すと、住1432号→住1433号→住1434号の順になる。

主柱穴P11～14を配したり、主軸柱穴P21・22を東西方向に配したものであるなら、住居東半部が調査区外ではあるが、調査区内での主柱穴・主軸柱穴・中央土壌などの出土がないので、主軸柱穴P21・22を南方向方に配すものと考えられる。 (馬田)

遺物（第162図7～10）7は壺の底部で底はやや張り出し気味である。復元底径5.8cmを測る。8の復元底部は7.2cmを測る。9の甕は底部から胴部、頸部にかけてほぼ一定の厚さで端部で急に細くなる。内外面共にナデ調整によって仕上げられている。口径8.4cm、底径4.0cm、器高10.0cmを測る。10の椀は復元口径12.8cmを測る。口縁は直線的に立ち上がり端部ではやや厚い。 (杉原)

1458号A住居（図版80 第163図 表39）

重複関係などは、住1459号で詳述したので、説明を省く。

1058号B住居 (図版80 第163図 表40)

重複関係などは、住1459号で詳述。

住1458号Bから住1458号Aに建て替える際に、住1458号Bの壁沿高床部や中央床部の壁沿溝を埋設する。

1458号C住居 (図版80 第163図 表41)

重複関係などは、住1459号で詳述。

主柱穴P11~14のなかで、P13は中央土壙D11・壁土壙D21と共に検出されなかったことから、住1458号Bに建て替える際に、住1458号床面を地下げしたものか。 (馬田)

1458号竪穴住居跡

遺物 (図版146 第162図11~16) 11は壺の底部で胴部へは大きく張り出している。内外面共にナデ調整。底径4.3cmを測る。黒褐色に焼成される。12は甕の口縁で復元口径21.1cmを測る。内外面共に磨滅しており調整は不明だが頸部下に粘土紐の痕がある。燈茶褐色に焼成されているが内面は煤が付着し黒色である。13の甕は復元口径23.0cmを測る。頸部はくの字に外反し、厚さはほぼ一定である。外面口縁部は横ナデ、胴部はハケ目のちナデ調整で内面については磨滅し不明。14は甕の口縁部で復元口径28.2cmを測る。頸部以下の器厚は薄い。頸部から口縁部にかけては厚い。外面口縁部はハケ目調整、頸部以下はナデ調整。内面については磨滅し不明。15は高杯の脚部と裾部である。脚部外面はタテ方向のミガキ調整で内面についてはしぼり痕がある。裾部は磨滅が著しく、外面には黒斑が、内面にはハケ目が観察される。脚部はベット付近より出土。裾部径は18.0cmを測る。燈褐色か赤褐色に焼成されている。16は脚付椀で脚部を欠損している。復元口径10.4cmを測る。内外面共に磨滅し調整不明。 (杉原)

1459号竪穴住居跡 (巻頭図版7・図版80 第163図 表42)

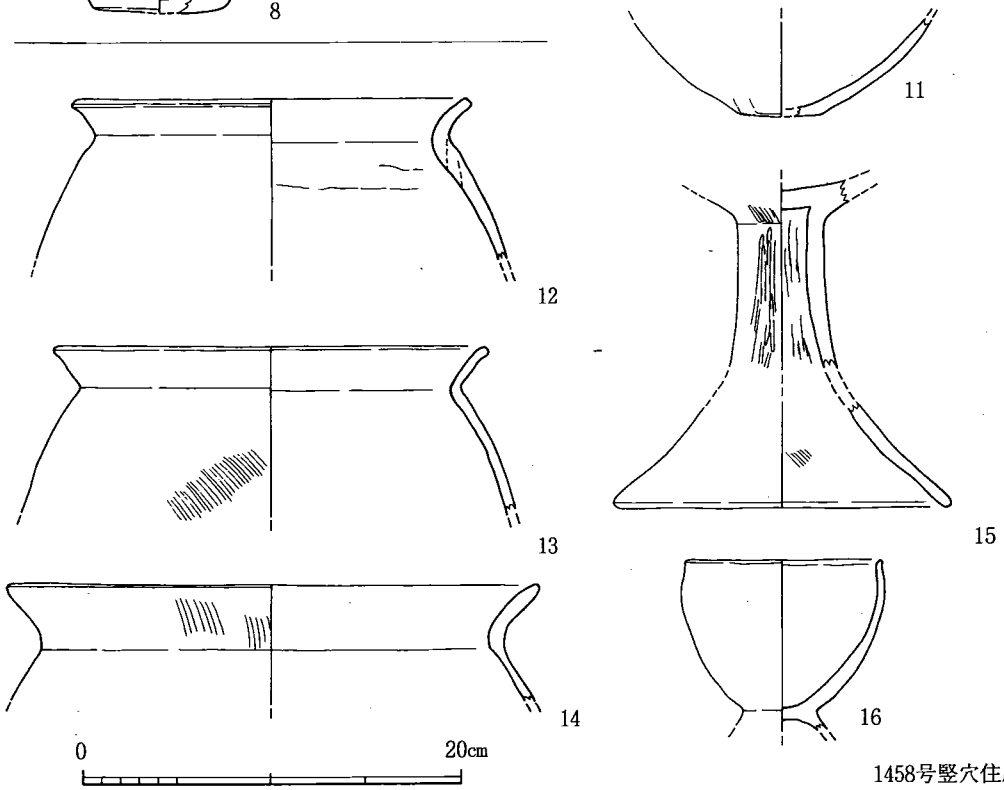
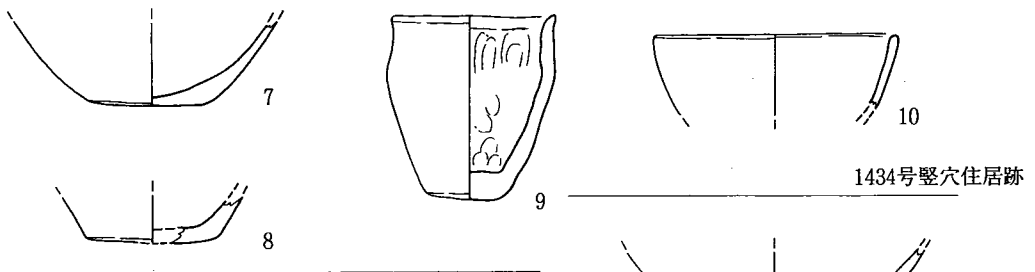
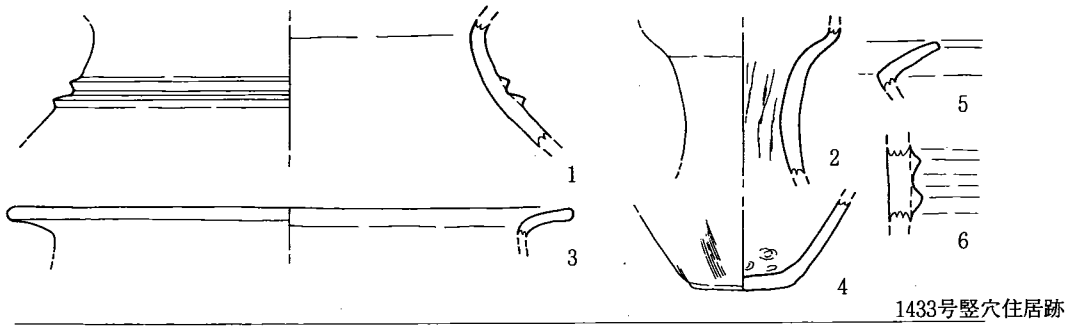
住1459号群 (住1458・1459号)・住1460号群 (住1460・1461号) の重複関係

住1459号は、住1460号の壁を切るのので、切り合いによる新・古関係を古→新で示すと、住1460号→住1459号の順となる。

また、両住居は、共にそれぞれ建て替えが3回行われており、切り合いによる新・旧関係を旧→新で示して加味すると、住1461号→住1460号C→住1460号B→住1460号A→住1458号→住1459号C→住1459号B→住1459号Aの順になる。

以上のことは、住1459・1460号それぞれに、張床の重複関係や、棟持柱の掘形・柱痕などの切り合い関係などで確認できた。

例えば、住1459号の棟持柱P22は住1458号Aの棟持柱P22をその掘形北半部再掘によって除去し、住1458号Aの棟持柱P22は住1458号Bの棟持柱P22をその掘形南半部再掘によって除去



第162图 1433·1434·1458号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)

し、住1458号Bの西壁沿高床面・中央部床面は住1458号Cの主柱P11・12を除去後に埋めもどしたことを確認したものである。

また、住1460号A～C・住1461号でも同様のことが確認できた。

遺構群間の新・旧関係と居住空間・生活空間の占有・容認関係

ところで、住1460号群は、後述するように、馬田報告分の以来尺遺跡住居群のなかにあつては、床面プランが通有の長方形プランではなく、台形プランを呈す。

また、4本主柱の住1461号から棟持柱2本のみの住1460号Cへと建物構造を大きく変化させて建て替えると共に、棟持柱は通有の床中央部で壁に略平行・直交配置ではなく、壁隅対峙という特異な配置をとる中規模のものである。

そして、後述する周辺の住1462号群も、同様に床面プランが長台形を呈し、棟持柱2本のみの住1462号Cから、小規模であるにもかかわらず、逆に4本主柱の住1462号Bへと建物構造を大きく変化させて建て替える。

また、周辺の建1001号も、既述のとおり、同様に超小規模で1間×2間・妻柱筋外近接棟持柱配置をとる。

以上の住居群に住1001号・住1046号群や建2011号群・建1027号を加えた遺構群は、付図1に示すように、以来尺遺跡全体での検出位置は、南一北間では中央部、東一西間では東端部で、住居・建物が密集しない部分であり、東眼下に平野部を望む。

もちろん、当時の旧地形が上記部で標高が周辺部より高く、後世の削平により消滅した遺構群が有るものかについての検討を要するが、削平に因る消滅は、換言すれば、上記部での居住空間・生活空間の占有・容認関係についての検討が必要になろう。

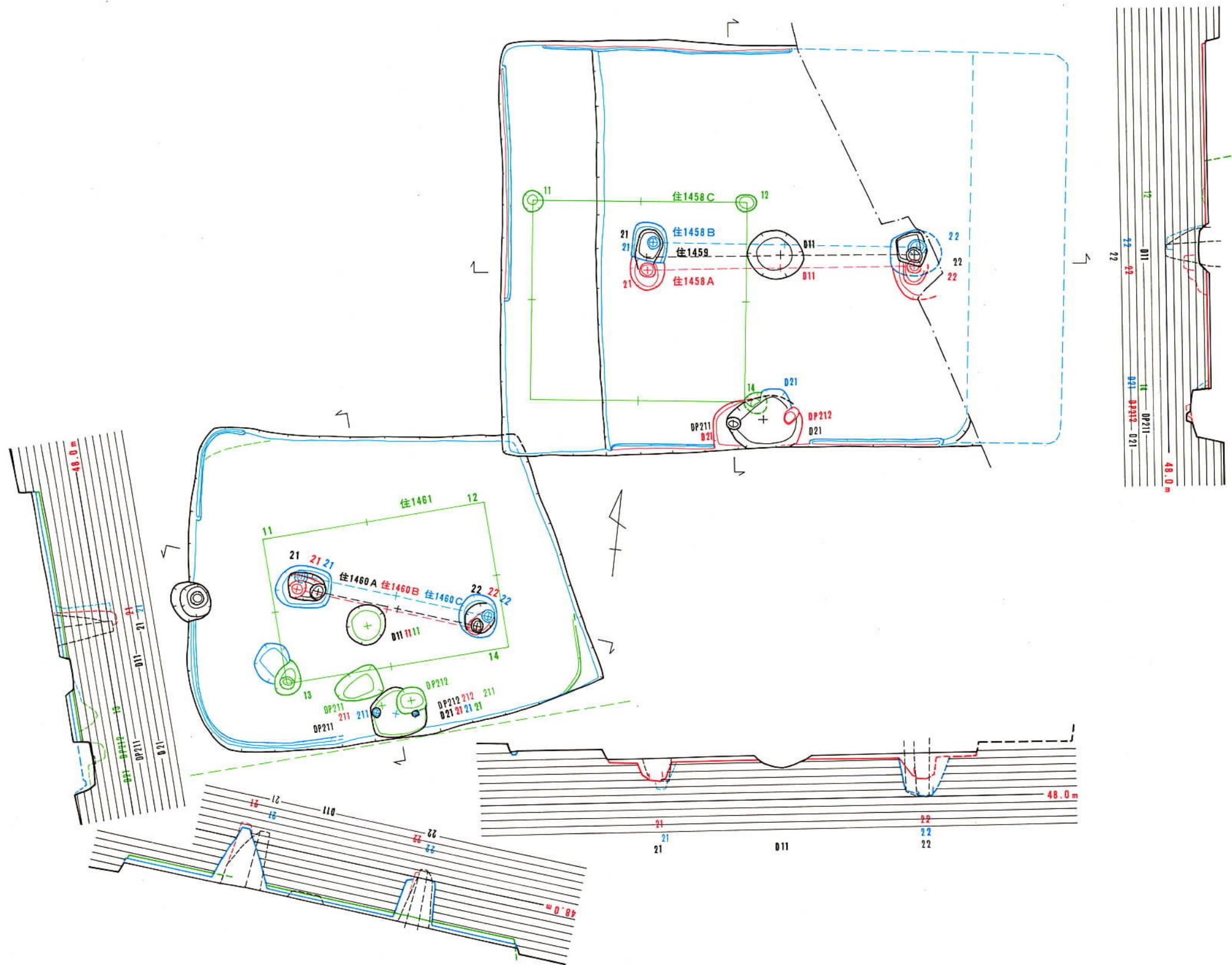
なお、以上のことについては、次年度報告事項の課題とし、大略、上記部遺構群については、集落内でも特別な属性を有するもので、非日常的な“建てもの”との指摘にとどめることとする。

遺構群間の柱間などの計測値について（表39～46参照）

両群は以来尺遺跡（馬田報告分）のなかにあつては、例えば付図2の住144号群や付図3A～Cの住1046号群などのように重複関係が複雑・多岐ではなく、住1459・1460号群の各住居計測表に示すように、各部位の計測値も復原値として得たものはほとんどない。

したがって、両群や住1062号群の計測値についての検討例（表中に・印で註記）のとおり、住居構築に際し、約30.9cm前後を基準とする単位を使用し、しかも、それは単に棟持柱間などを決めるために使用するだけでなく、壁中央土壇D21内の柱穴様ビットDP211—DP212間にも使用したことを予期させるものがある。

上記のことは、D21やDP211・212の住居内配置への特別な配慮を示すものと考えられ、換



第163图 住1459号群 (1458A~C・1459号竖穴住居跡)・住1460号群 (1460A~C・1461号竖穴住居跡) 实测图 (1/60)

言すれば、その機能を考える上での留意事項となるものでもあろうが、このことについては次年度報告での検討課題としたい。

住1459号住居

棟持柱2本を配すが、P21の柱痕を確認し得なかった。

なお、南壁中央土壙D21内の柱穴様小ピットD P212は、図示した位置で検出しなかったことから、住1458号AのD P212に重複するものか。(馬田)

1460号A～C 竪穴住居跡 (図版80 第163図 表43～45)

住1460号A～Cの各棟持柱P21・22の各掘形内での配置は、いずれも掘形壁に片寄せすると共に、各棟持柱主軸をいずれもN-85°-Wにとるなど、主軸に対しての特別な配慮が看取され、この住居?群の属性を検討する際の留意事項となろう。

また、南壁中央土壙D21内での柱穴様小ピットD P211-D P212方向も南壁方向と一致せず、むしろ、主軸方向に大略等しいことも、D21やD P211・212の属性を検討する際の留意事項となるもので、D P211・212が竪穴への出入りのための、単なる梯子痕などではないことへの一証左ともなろう。(馬田)

遺物(第165図1～5)1は壺の頸部から胴部片で貼付突帯を一条巡らしている。内外面の調整は不明。2の甕の復元口径は19.8cmを測る。胴部から口縁部にかけての器厚はほぼ同じで、口縁は緩やかに外反する。内外面の調整は磨滅により不明。3は甕の底部で復元底径8.4cmを測る。外面ハケ目、内面ナデ調整。外面は一部に二次加熱を受け赤色に変色している。4は甕の底部で復元底径7.0cmを測る。内外面共にナデ調整。5は器台の裾部片であろうか。(杉原)

1461号竪穴住居跡 (図版80 第163図 表46)

住1460号群(住1460号A～C・住1461号)については、張床面での柱掘形の検出数が少なく張床除去後も地山面での確認作業も実施したが、図示した掘形以外の出土はなかった。

なお、西壁中央部を切る柱穴様ピットは、住居に伴うものではなく、建1027号で説明したように、建1027号に伴う**立柱掘形**と思われる。

第163図は、主軸を破線で示した南壁接線に求め、南壁中央土壙D21内のD P211掘形がP13-P14間中軸(南北断面部)に東接するものとしてP14を求め、P14を通る東柱筋での北壁-P12間と南壁-P14間を等しく配したものとしてP12を求めて、主柱P11～14の4本配置を復原図示したものである。

そして、P11・12・14の掘形は、住1459号群で既述したように、住1460号群の集落内での特別の属性故に、当初から浅いか掘削されなかったために、検出できなかったものとした。

以上の支柱配置をとれば、表46で示すように、P11—12間とP13—P14間の中軸線上での北壁—南壁間の計測値は $393\text{cm} \div 30.0\text{cm} \times 13 = 390\text{cm}$ 、P11—P13間とP12—14間の中軸線上での西壁—東壁間の計測値は $498\text{cm} \div 30.0\text{cm} \times 16 = 480\text{cm}$ となる。

上記のように、一見、不整台形の床面プランの住1461号も、桁行 $300\text{cm} = 30.0\text{cm} \times 10$ 、梁間 $196\text{cm} \div 30.0\text{cm} \times 6 = 180\text{cm}$ （ 196cm は 180cm 梁間をとるための、意識的な掘形間の幅広げ）で構築され、中央土壇D11は主軸直交の南北中軸東接、南壁中央土壇D11は南北中軸下に整然と配されたものとして復原できよう。（馬田）

遺物（図版146 第165図6～11）6の甕は口縁部は横ナデ、胴部外面は縦方向のハケ目、内面ナデ調整。7の甕の口縁は折れるように大きく外反し、端部付近まで器厚は厚い。8の甕は復元口径 27.1cm を測る。口縁は大きく外反し端部は外に折れる。口縁部は横ナデ、胴部は外面縦方向のハケ目、内面ナデ調整。暗茶褐色に焼成されている。9の甕底部は内外面共にナデ調整。10の甕底部は底径 10.8cm を測る。外面に二次加熱を受けている。11は支脚で底径 11.2cm を測る。器厚はふ厚い。外面はナデ、内面はケズリのちナデ調整。燈褐色に焼成されている。

（杉原）

1462号住居（巻頭図版7 第164図 表47・48）

住1462号群（住1462号A・B、住1463号）の重複関係

住1462号は、建て替えが2回行われており、切り合いによる新・旧関係を旧→新で示すと、住1463号→住1462号B→住1462号Aの順になる。

また、上記のことは、各住居の中央土壇D11・東壁中央土壇D21などの切り合い関係や張床下での住1463号の検出などで看取できた。

住1462号A・B、住1463号に認められる住居構築単位

住1462号Aで図示した各支柱筋線は、西柱筋をP11柱痕中心—P12掘形接線、東柱列をP13・14掘形端から等しく離れ・西柱筋と平行な線、南柱列も同様にP11・13掘形端から等しく離れ・西柱筋と直交する線、北柱筋をP14柱痕中心を通り・西柱筋と直交する線として求めたものである。

上記各柱筋（線）と各柱穴・東壁中央土壇D21内柱穴様小ピットD P211・212などの配置関係では、以下のことが指摘できる（表47～49）。

- ①住1462号AのP63は、南・北側柱筋間の中心・ 138cm 等間での配置。
- ②住1462号BのP63—D11間は、D11—北側柱筋間と 124cm 等間での配置。
- ③住1463号のD11—P22間の 75cm と、D11—D P211（D P212）間の 73cm は、平均 74cm で近似値間での配置
- ④住1462号AのD P211—D P212間は 30cm 、住1462号BのD P211—D P212間は 32cm 、住1463

号のD P 211—D P 212間（平均31cm）は近似値間での配置。

また、上記①～③での各数値を④の平均31cmで割ると、 $138\text{cm} \div 31\text{cm} \approx 4.5$ 、 $124\text{cm} \div 31\text{cm} \approx 3$ 、 $74\text{cm} \div 31\text{cm} \approx 2.5$ となり、約31cmを住居構築基準の単位として新築・建て替えが行われた可能性が極めて高いことが指摘できると共に、このD 21内のD P 211—D P 212の配置（間隔）に、**特別の配慮**をはらっていたことをも指摘できよう（住1463号の説明参照）。
〔註1〕

1462号 A 住居

南壁～東壁部が削平されるが、**南壁沿高床**を有し、支柱穴P 11～14を中央部床隅に配すことや、南—北壁間が465cmと西—東壁間269cmに比べて196cmも長い壁平面プランを呈す。

また、床面積（高床部を含む）も12.5㎡と小さく、中央部床面積では9.5㎡と超小型であるなど、竪穴形ではあるが、地上部壁立ち構造の、集落内では**特別な属性**を有す建物と考えられ、先述の各D P 211—D P 212間がほとんど一致する配置なども含めて、集落内での出土位置など検討すべき点が多い。

南壁土壇D 21は、P 13に近接して南寄りに配するのは、**南壁沿高床**を意識しての片寄せであり、**出入口施設**も両者から離すことを意識しての西壁北半部への配置としたものと考えられよう。

また、出入口施設柱P 61～64のなかで、P 63は西柱筋間の補柱を兼ね、P 12はP 64を兼ねるものであろう。

なお、D 21の高床側への片寄せと共に、既述④のように、各D P 211～D P 212間が平均31cmと継承されていることは、壁土壇D 21とD 21内D P 211・212の機能を考える際の重要な留意事項となろう。

註)

1. 住居構築での使用単位については、本年度の馬田報告住居の大半で、約30.9cmが1単位として使用されていることを把握しつつあるが、詳細は次年度で報告したい。

また、福岡県甘木市所在『国指定史跡平塚川添遺跡』の大型掘立柱建物101～104号群・同201～203号群についても、同様に約31cmが構築単位として各平面プランを復原できたことから再発掘調査・追認し、概報での図示・説明をすることができたが、同遺跡住4010号からは径約3.1cmの貨泉も出土している〔「平塚川添遺跡発掘調査概報」（甘木市教育委員会、1993年）〕。

なお、以来尺遺跡の2～3年次調査中、同様に貨泉の出土には留意したが、残念ながらその出土はなかった。

1462号 B 住居

建て替えに際し、住1462号Cの中央部床を北壁沿高床レベルまで張床して住1462号Bの中央部床とし、新たに住1462号C南壁外に**南壁沿高床**を配している。

中央土壇D 11・壁中央土壇D 21は、**出入口施設柱**P 63と共に、住1463号の配置から若干北に

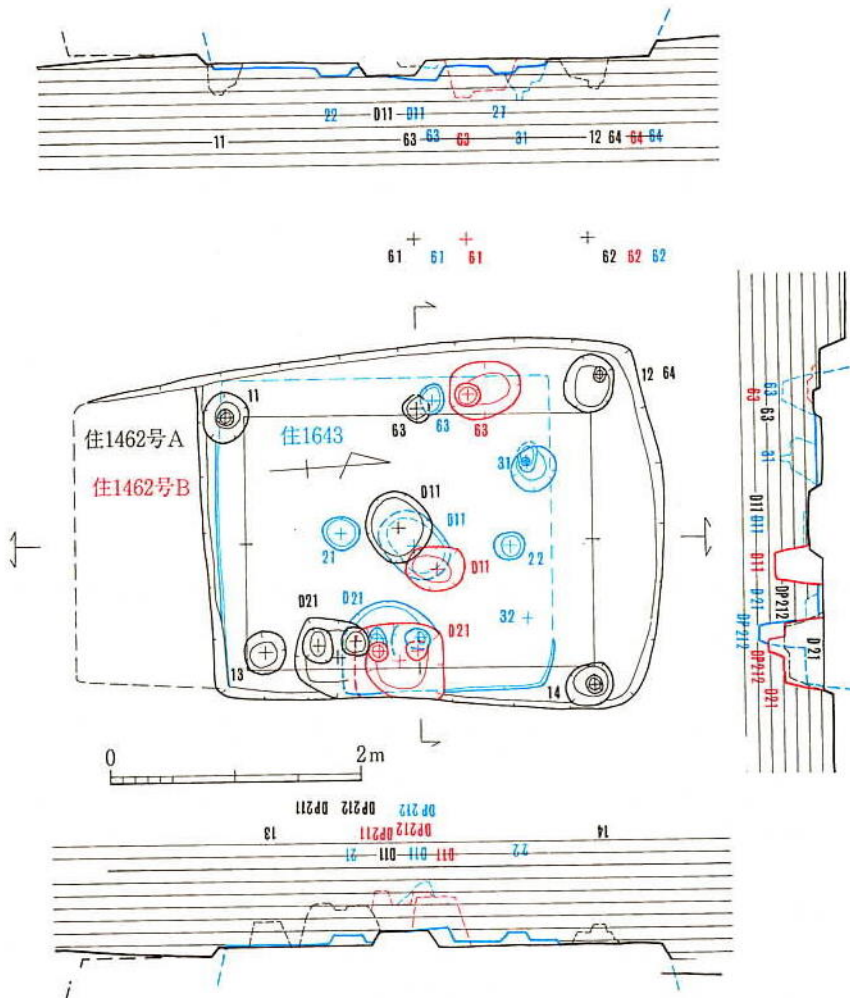
移設する。

なお、支柱穴P11～14は、住1462号Aのそれぞれに重複するものと考えられ、住1463号で配していた棟持柱P21・22と主軸間柱P31は抜去し、その掘形は張床で埋めもどされている。

(馬田)

1462号竪穴住居跡

遺物 (第165図12・13) 12は甕の口縁から胴部片で復元口径36.0cmを測る。口縁はくの字に外反し、端部は厚い。器面の磨滅は著しいが口縁部には横ナデ、胴部外面にはハケ目が観察される。13は甕の底部で調整不明。また、埋土中から硬質砂岩製の砥石 (第239図62・63) が出土し



第164図 住1462号群 (1458A・B・1463号竪穴住居跡) 実測図 (1/60)

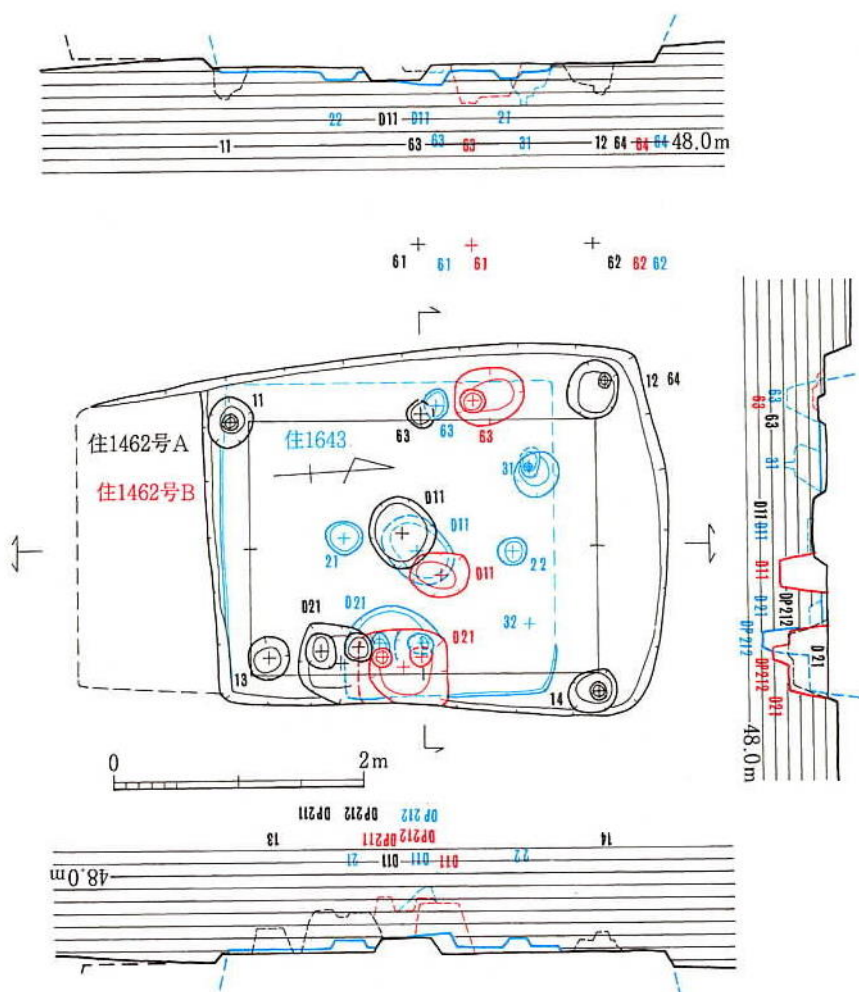
移設する。

なお、支柱穴P11～14は、住1462号Aのそれぞれに重複するものと考えられ、住1463号で配していた棟持柱P21・22と主軸間柱P31は抜きし、その掘形は張床で埋めもどされている。

(馬田)

1462号竪穴住居跡

遺物 (第165図12・13) 12は甕の口縁から胴部片で復元口径36.0cmを測る。口縁はくの字に外反し、端部は厚い。器面の磨滅は著しいが口縁部には横ナデ、胴部外面にはハケ目が観察される。13は甕の底部で調整不明。また、埋土中から硬質砂岩製の砥石 (第239図62・63) が出土し



第164図 住1462号群 (1458A・B・1463号竪穴住居跡) 実測図 (1/60)

ている。

(杉原)

1463号竪穴住居跡 (巻頭図版7 第164図 表49)

主柱P11~14を配さず、棟持柱P21・22を住居床全体ではほぼ中央部に、しかし、一段低い中央部床内では北寄りに配す。

上記の北寄り配置と共に、主軸間柱も南壁側には配さずに北壁側のみにP31・32を配し、高床も北壁沿いにのみの配置とする。

同様に、中央土壇D11・壁土壇D21も、若干ではあるが中央部床面内では北寄せされており、住1462号A同様に高床部側への意識的片寄せと考えられる。

なお、既述のように、住1462号は超小型の住居ではあるが、2回の建て替えに際し、D11、D21とDP211・212がそれぞれ旧出の施設の再使用をすることなく、旧出施設を埋めて別所に新たに構えられていることは、中央部床での「火床」としての中央土壇D11、壁中央部の区画(別区)での「祭処」としての壁中央土壇D21、そして、D21上のDP211・212を使用して構えられた「依代」としての壁中央土壇内DP211・212の属性を考える重要事項と考えられる。

(馬田)

註)

1. 第168図の東西断面図中に主軸間柱穴P31の見透しを破線で示したが、このように棟持柱P21—P22筋への内傾した状態での検出例は、1983年の福岡県浮羽郡吉井町所在の塚堂遺跡の報文以来、使用してきた柱穴呼称名「主軸間柱穴」の予期していた柱穴の用途を考える際の留意事項となるが、このことについては、次年度で言及したい。

馬田弘稔編「塚堂遺跡I」(『一般国道210号線 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第1集、福岡県教育委員会、1983)

1464号住居 (遺構に関しては来年度に報告)

遺物 (第165図14・15) 14は甕の底部で外面にわずかにハケ目が観察される。15は甕の底部で復元底径5.4cmを測る。

(杉原)

1465号住居 (遺構に関しては来年度に報告)

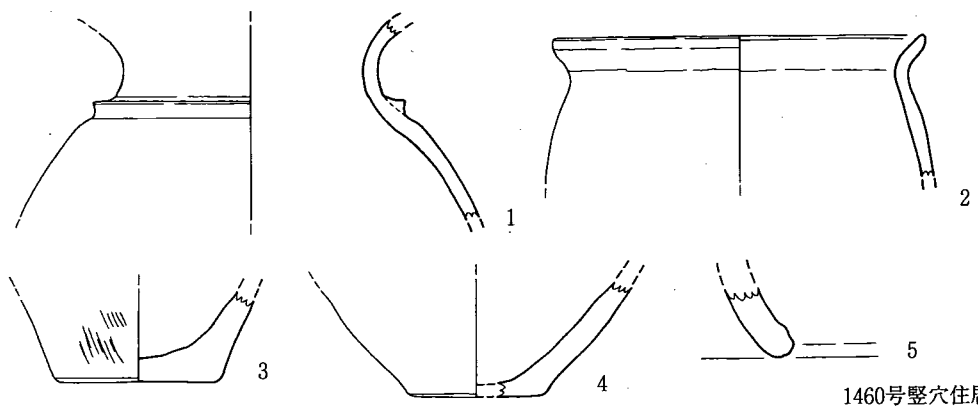
遺物 (第165図16・17) 16は甕の底部で復元底径8.4cmを測る。17は甕の底部で底径8.0cmを測る。外面縦方向のハケ目、内面はナデ調整。淡褐色に焼成されている。また、埋土中から鉄鉤が1点出土している (第243図14)。

(杉原)

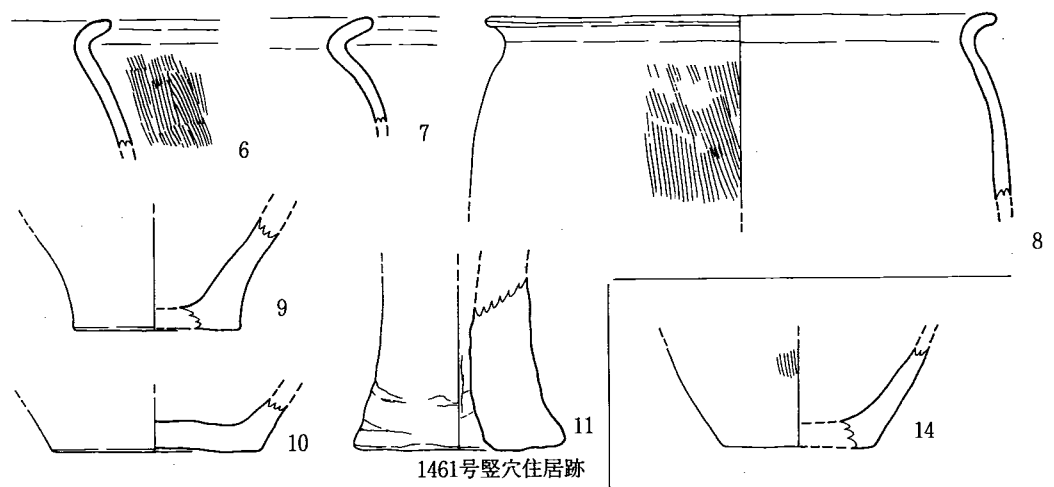
1466号住居 (遺構に関しては来年度に報告)

遺物 (第165図18) 18は壺の頸部片で貼付突帯を三条もつ。

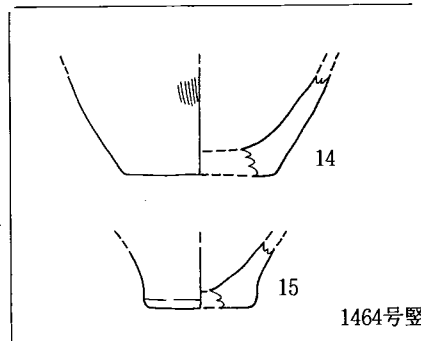
(杉原)



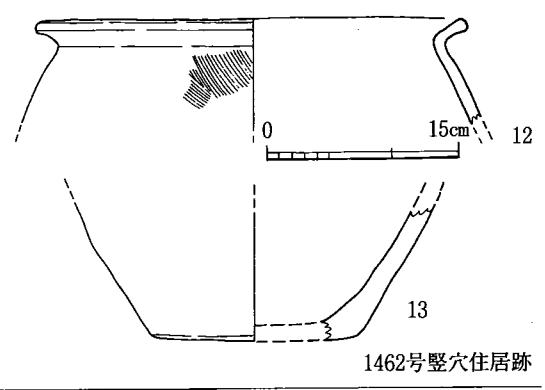
1460号竖穴住居跡



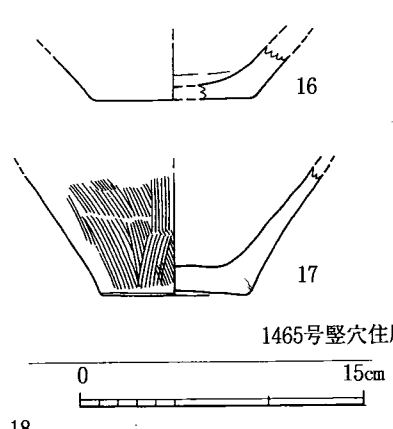
1461号竖穴住居跡



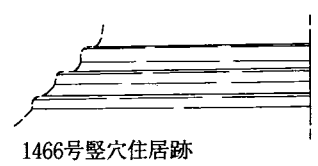
1464号竖穴住居跡



1462号竖穴住居跡



1465号竖穴住居跡



1466号竖穴住居跡

第165图 1460~1462·1464~1466号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)

報告書抄録

ふりがな	いらいじゃくいせき							
書名	以来尺遺跡							
副書名	福岡県筑紫野市大字筑紫所在遺跡の調査							
巻次	I							
シリーズ名	一般国道3号 筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第4集							
編著者名	[編集] 秦 憲二 [執筆] 馬田弘稔・水ノ江和同・齋部麻矢・秦 憲二・杉原敏之							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-77 福岡県福岡市博多区東公園7番7号 TEL (092) 651-1111							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃〃	東経 〃〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いらいじゃく 以来尺	福岡県筑紫野市 大字筑紫字以来 尺 927・929・932他	402176	170142	33°27'25"	130°32'55"	19930506) 19960120	12,250	道路（一般 国道3号筑 紫野バイパ ス）建設に 伴う 事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
以来尺	集落	旧石器			ナイフ形石器 台形石器 角錐状石器		大型掘立柱建物跡 通路状遺構 青銅製鋤先	
		縄紋			石器・晩期土器			
		弥生	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 溝	弥生土器 石器・鉄器 土製品 玉類				
		古墳	横穴式石室 竪穴住居跡	須恵器 土師器 石器・鉄器 玉類				
		中世	溝 掘立柱建物跡	陶磁器・土師器 石器・鉄器				
山城	近世	溝			陶磁器			

福岡県行政資料

分類番号	JH	所属コード	213305
登録年度	8	登録番号	14

一般国道
3号 筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第4集

いらいじゃく
以来尺遺跡 I

上巻

福岡県筑紫野市大字筑紫所在遺跡の調査

平成9年3月31日

発行 福岡県教育委員会
〒812 福岡市博多区東公園7番7号

印刷 株式会社昭和堂印刷
〒812 福岡市博多区榎田2-2-52 徳重ビル